

市道樽味溝辺線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

東野森ノ木遺跡 1・2・3・4次調査地

樽味立添遺跡 3次調査地

樽味高木遺跡 7・8・9・11次調査地

樽味四反地遺跡 7・8・9・11次調査地

枝松遺跡 6次調査地

— 本文編 —

2007

松山市教育委員会
財団法人松山市生涯学習振興財団
埋蔵文化財センター

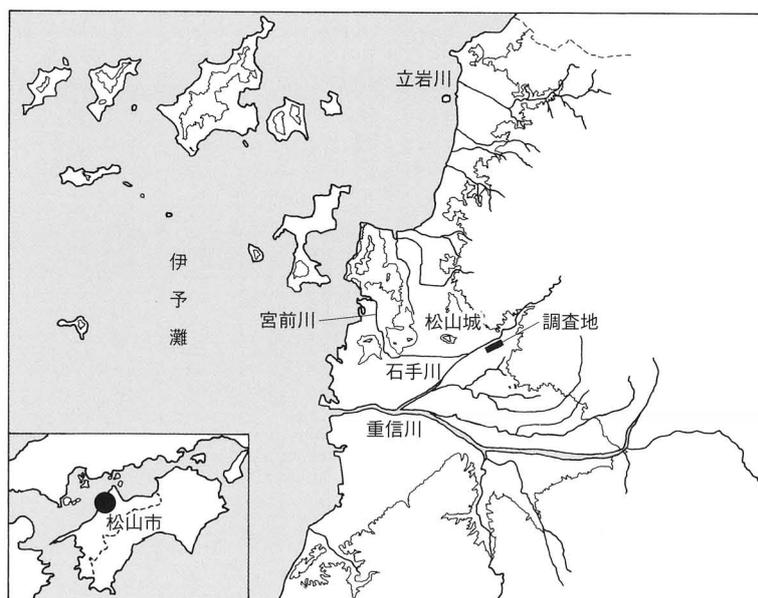
正誤表

ページ	誤	正
P23-10行目	SD103に切られ	現代溝に切られ
P27-11行目	SK206と類似して	SB203と類似して
P156-3行目	SB104を切り	SB204を切り
P221-5行目	SB202を切り	SB203を切り
P301-図・南西	SK101	SX101
P305-6行目	一部をSB103	一部をSK105
P311-2行目	・109を切り	・110を切り

市道樽味溝辺線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

東野森ノ木遺跡 1・2・3・4次調査地
樽味立添遺跡 3次調査地
樽味高木遺跡 7・8・9・11次調査地
樽味四反地遺跡 7・8・9・11次調査地
枝松遺跡 6次調査地

— 本 文 編 —



2007

松山市教育委員会
財団法人松山市生涯学習振興財団
埋蔵文化財センター



巻頭図版1. 調査地遠景（南東上空より）



巻頭図版2. 調査地遠景（南西上空より）



巻頭図版3. 樽味立添遺跡3次調査地 完掘状況（南西より）



巻頭図版4. 樽味立添遺跡3次調査地 SD101断面土層(南より)



巻頭図版5. 樽味四反地遺跡8次調査地 超大型建物跡（東より）



卷頭図版6. 樽味四反地遺跡9次調査地 SB102遺物出土状況(土師器)(東より)



巻頭図版7. 樽味高木遺跡11次調査地 完掘状況（南西より）

序

本書は、松山市東部の桑原・樽味地区で実施した14遺跡の文化財調査報告書です。これらの遺跡は松山市道『樽味溝辺線』道路改良工事に伴い事前に確認された埋蔵文化財で、平成14年度から平成17年度までの4年間にわたり発掘調査を実施したものです。

遺跡からは、主に弥生時代中期から中世までの遺構と遺物が発見され、既往の調査を追認するデータが多数得られました。さらに、松山平野内では希少な縄文時代晩期に遡る貯蔵穴群が樽味立添遺跡3次調査地で検出され、ここからは弥生時代前期末の大溝も見つかり、食糧生産段階に移行する過程の定住生活を知る大きな手がかりを得ることができました。また、樽味四反地遺跡8次調査地からは、古墳時代初頭の西日本屈指の規模と特異な構造をもつ首長級の超大型建物跡が発見され、弥生時代から古墳時代へ移行する過程で注目されている階級社会の出現とその発達過程を知る重要な知見を得ることができました。さらに、樽味四反地遺跡7～9次調査地、樽味高木遺跡7・8・11次調査地からは古墳時代中期の集落が見つかり、渡来文化の伝播と受容の実態を具体的に知る希少かつ良好な資料を得ることができました。

これらの調査結果は、松山平野東部の縄文時代晩期から古墳時代、さらに古代・中世にわたる先人たちの諸活動の具体的様相を明らかにするとともに、西部瀬戸内における地域史や当時の景観を復元する上で大変に貴重な事例となるものです。

本書を刊行するにあたり、ご指導・ご協力をいただきました関係各位ならびに関係機関に対し厚くお礼申し上げますとともに、本書が埋蔵文化財の調査・研究の一助となり、さらには文化財保護、生涯教育の向上につながることを願っております。

平成19年3月31日

財団法人 松山市生涯学習振興財団
理事長 中村時広

例 言

1. 本書は、松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センターが平成14年11月から平成17年11月に実施した市道樽味溝辺線道路改良工事に伴う事前の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 本書報告の遺構は呼称名を略号化して記述した。竪穴式住居址：SB、掘立柱建物址：掘立、溝：SD、井戸：SE、土坑：SK、柱穴：SP、柵列：SA、土器溜まり等：SXである。
3. 本書で表示した標高数値は海拔標高を示し、方位は全て国土座標を基準とした真北である。
4. 本書の色調は農林水産省農林水産技術会議事務局監修の『新版標準土色帖(1996)』に準拠した。
5. 本書に使用した遺構図は、高尾和長・河野史知・加島次郎・山邊進也らが中心となって作成し、中村紫・田崎真理・宮内真弓・猪野美喜子・金子育代・仙波千秋・仙波ミリ子・石丸由利子・高尾久子・松本育子・政本和人が製図を行った。縮尺は竪穴式住居址と掘立柱建物址が1/60、井戸と土坑が1/30を基本とし、縮分値をスケール下に記した。
6. 本書に使用した遺物図は、高尾・河野・加島・中村・田崎・宮内・猪野・金子・木下奈緒美・村上真由美・岩本美保・丹生谷道代・矢野久子・多知川富美子が作成し、中村・宮内・田崎・猪野・金子・木下・村上・岩本が製図を行った。縮尺は弥生土器が1/4、縄文土器と土師器と須恵器が1/3、鉄製品と小型石器が1/2、大型石器が1/4を基本とし、縮分値をスケール下に記した。
7. 遺物の接合及び石膏復元は、渡部英子・青野茂子・西川千秋・松本美代子が主に行った。
8. 本書で使用した写真図版は大西朋子と高尾・河野・加島が協議した。遺構写真の撮影は大西・高尾・河野・加島が行い、遺物写真の撮影及び図版作成は調査担当者と協議の上、大西が行った。
9. 本書の執筆は、調査報告を高尾・河野・加島が分担して行い、執筆の分担は目次に示した。
10. 自然科学分析では、株式会社古環境研究所に植物珪酸体や花粉分析及び樹種同定、鹿児島国際大学三辻利一先生に土師器と須恵器の胎土分析・鑑定を行っていただいた。
11. 発掘調査及び整理・報告書作成において、以下の諸先生よりご指導とご協力を賜った(順不同・敬称略)。以下に記して感謝申し上げます。

下條信行・松原弘宣・田崎博之・村上恭通・吉田広・三吉秀充(以上、愛媛大学)／岡村道雄(独立行政法人奈良文化財研究所)／宮本長二郎(東北芸術工科大学)／前園実知雄(奈良芸術短期大学)／石野博信・大久保徹也(以上、徳島文理大学)／武末純一(福岡大学)／広瀬和雄(奈良女子大学)／定森秀夫(徳島大学)／瀬川佳男・玉田芳英(以上、文化庁)／岡戸哲紀(財団法人大阪府文化財センター)／田中清美・寺井誠(以上、財団法人大阪市文化財協会)／名本二六雄(日本考古学協会会員)／長井数秋(愛媛考古学研究所)／清水眞一(西四国考古学研究所)／谷若倫郎(愛媛県教育委員会)／岡田敏彦・真鍋昭文・柴田昌兎・西川真美・山内英樹(以上、財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター)／富田尚夫(愛媛県歴史文化博物館)
12. 本書の編集は高尾が行い、加島と佐伯利枝の協力を得た。
13. 本書に関わる記録類・出土遺物は松山市立埋蔵文化財センターで保管している。

製版 写真図版-175線

印刷 オフセット印刷

用紙 カラー写真-マットコート135kg 本文-マットコート90kg

製本 アジロ綴じ

本文目次

第1章 はじめに	[加 島]	1		
1. 調査に至る経緯	2. 確認調査	3. 遺跡名称	4. 刊行組織	
第2章 遺跡の立地と歴史的環境	[加 島]	3		
1. 立地	2. 歴史的環境			
第3章 調査の概要	[加 島]	10		
1. 調査の経過	2. 基本層位			
第4章 東野森ノ木遺跡1次調査地	[河 野]	13		
1. 野外調査の経過と方法	2. 基本層位	3. 調査概要		
4. 弥生時代の遺構と遺物	5. 古代の遺構と遺物			
6. 中世の遺構と遺物	7. 小 結			
第5章 東野森ノ木遺跡2次調査地	[加 島]	49		
1. 野外調査の経過と方法	2. 基本層位	3. 調査概要		
4. 縄文時代の遺構と遺物	5. 弥生時代の遺構と遺物			
6. その他の遺構と遺物	7. 小 結			
第6章 東野森ノ木遺跡3次調査地	[加 島]	77		
1. 野外調査の経過と方法	2. 基本層位	3. 調査概要		
4. 古墳時代の遺構と遺物	5. 中～近世の遺構と遺物			
6. 小 結				
第7章 東野森ノ木遺跡4次調査地	[加 島]	87		
1. 野外調査の経過と方法	2. 基本層位	3. 調査概要		
4. 縄文時代の遺構と遺物	5. 弥生時代の遺構と遺物			
6. その他の遺構と遺物	7. 小 結			
第8章 樽味立添遺跡3次調査地	[高 尾]	115		
1. 野外調査の経過と方法	2. 基本層位	3. 調査概要		
4. 縄文時代の遺構と遺物	5. 弥生時代の遺構と遺物			
6. その他の遺構と遺物	7. 柱穴・包含層出土遺物			
8. 小 結				

第9章 樽味高木遺跡7次調査地	……………〔加 島〕……………	163
1. 野外調査の経過と方法	2. 基本層位	3. 調査概要
4. 弥生時代の遺構と遺物	5. 古墳時代の遺構と遺物	
6. 包含層出土の遺物	7. 小 結	
第10章 樽味高木遺跡8次調査地	……………〔高 尾〕……………	197
1. 野外調査の経過と方法	2. 基本層位	3. 調査概要
4. 弥生時代の遺構と遺物	5. 古墳時代の遺構と遺物	
6. 古代の遺構と遺物	7. その他の遺構と遺物	8. 包含層出土の遺物
9. 小 結		
第11章 樽味高木遺跡9次調査地	……………〔加 島〕……………	245
1. 野外調査の経過と方法	2. 基本層位	3. 調査概要
4. 弥生時代の遺構と遺物	5. 古墳時代の遺構と遺物	
6. 中世の遺構と遺物	7. 包含層出土の遺物	
8. 小 結		
第12章 樽味高木遺跡11次調査地	……………〔高 尾〕……………	293
1. 野外調査の経過と方法	2. 基本層位	3. 調査概要
4. 弥生時代の遺構と遺物	5. 古墳時代の遺構と遺物	
6. 古代から中世の遺構と遺物	7. 柱穴出土遺物	8. 第Ⅲ層出土遺物
9. 小 結		
第13章 樽味四反地遺跡7次調査地	……………〔加 島〕……………	357
1. 野外調査の経過と方法	2. 基本層位	3. 調査概要
4. 弥生時代の遺構と遺物	5. 古墳時代の遺構と遺物	
6. 小 結		
第14章 樽味四反地遺跡8次調査地	……………〔加 島〕……………	389
1. 野外調査の経過と方法	2. 基本層位	3. 調査概要
4. 弥生時代の遺構と遺物	5. 古墳時代の遺構と遺物	
6. 古代の遺構と遺物	7. 中世の遺構と遺物	
8. 小 結		
第15章 樽味四反地遺跡9次調査地	……………〔加 島〕……………	445
1. 野外調査の経過と方法	2. 基本層位	3. 調査概要
4. 弥生時代の遺構と遺物	5. 古墳時代の遺構と遺物	
6. 小 結		

第16章 樽味四反地遺跡11次調査地	〔加 島〕	479
1. 野外調査の経過と方法	2. 基本層位	3. 調査概要
4. 古墳時代後期以降の遺構と遺物	5. 包含層出土の遺物	6. 小 結
第17章 枝松遺跡6次調査地	〔加 島〕	487
1. 野外調査の経過と方法	2. 基本層位	3. 調査概要
4. 弥生時代の遺構と遺物	5. 中世の遺構と遺物	
6. 包含層出土の遺物	7. 小 結	
第18章 自然科学分析		507
I. 植物珪酸体分析	〔株古環境研究所〕	507
II. 花粉分析	〔株古環境研究所〕	514
III. 樹種同定	〔株古環境研究所〕	518
IV. 松山平野の初期須恵器と軟質土器の蛍光X線分析	〔三辻利一〕	522
第19章 調査の成果と課題	〔高尾・加島〕	541
I. 遺跡の展開について		541
II. 古墳時代初頭の超大型建物の立地と景観について		543
III. 竪穴式住居址における新知見について		545
IV. 古墳時代の土師器と須恵器の胎土分析からの予察		547

- 卷頭図版1. 調査地遠景（南東上空より）
 卷頭図版2. 調査地遠景（南西上空より）
 卷頭図版3. 樽味立添遺跡3次調査地 完掘状況（南西より）
 卷頭図版4. 樽味立添遺跡3次調査地 S D101断面土層（南より）
 卷頭図版5. 樽味四反地遺跡8次調査地 超大型建物跡（東より）
 卷頭図版6. 樽味四反地遺跡9次調査地 S B102遺物出土状況（土師器）（東より）
 卷頭図版7. 樽味高木遺跡11次調査地 完掘状況（南西より）

挿 図 目 次

第2章 遺跡の立地と歴史的環境

- 第1図 調査地位置図（縮尺 1/3,000）……………4・5
 第2図 石手川中流南岸域の主要遺跡分布図（縮尺 1/25,000）……………6

第4章 東野森ノ木遺跡1次調査地

- 第3図 区割図（縮尺 1/1,000）……………16
 第4図 調査区位置図及び土層柱状模式図（縮尺 1/800・1/80・1/40）……………17
 第5図 I区全測図及び南壁断面土層図（縮尺 1/100・1/50）……………19・20
 第6図 II区・III区全測図及び南壁断面土層図（縮尺 1/100・1/50）……………21・22
 第7図 S B101・102・103測量図（縮尺 1/60）……………23
 第8図 S B201測量図（縮尺 1/60）……………24
 第9図 S B201出土遺物実測図(1)（縮尺 1/4）……………25
 第10図 S B201出土遺物実測図(2)（縮尺 1/4・1/2・1/1）……………26
 第11図 S B202測量図（縮尺 1/60）……………27
 第12図 S B203測量図及び出土遺物実測図（縮尺 1/60・1/4）……………27
 第13図 S B301測量図（縮尺 1/60）……………28
 第14図 S B301内炉址測量図（縮尺 1/30）……………29
 第15図 S B301内炉址出土遺物実測図（縮尺 1/4）……………30
 第16図 S B301出土遺物実測図(1)（縮尺 1/4）……………30
 第17図 S B301出土遺物実測図(2)（縮尺 1/4）……………31
 第18図 S B301出土遺物実測図(3)（縮尺 1/4）……………32
 第19図 S B301出土遺物実測図(4)（縮尺 1/2・1/1）……………33
 第20図 S B302測量図（縮尺 1/60）……………34
 第21図 掘立303測量図（縮尺 1/60）……………34
 第22図 掘立304測量図（縮尺 1/60）……………35
 第23図 S K207測量図（縮尺 1/30）……………36
 第24図 S K207出土遺物実測図（縮尺 1/4）……………36

第25図	S K 201測量図 (縮尺 1/30・1/8)	38
第26図	S K 201出土遺物実測図 (縮尺 1/3)	38
第27図	掘立301測量図 (縮尺 1/60)	39
第28図	S D 301測量図 (縮尺 1/80)	41
第29図	S D 301出土遺物実測図 (縮尺 1/3・1/2)	42
第30図	S K 306測量図及び出土遺物実測図 (縮尺 1/10・1/3)	45
第31図	徳島県大柿遺跡Ⅲ S P 1207測量図及び出土遺物実測図 (縮尺 1/10・1/3)	47
第32図	香川県浜ノ町遺跡 S P 0200測量図及び出土遺物実測図 (縮尺 1/10・1/3)	48
第5章 東野森ノ木遺跡2次調査地		
第33図	台風通過後に水没した調査区	51
第34図	職場体験学習	51
第35図	調査地測量図 (縮尺 1/800)	52
第36図	区割図及び柱状土層模式図 (縮尺 1/1,000・1/80)	52
第37図	I・II区全測図及び北壁断面土層図 (縮尺 1/200・1/100)	54
第38図	Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ区全測図及び北壁断面土層図 (縮尺 1/200・1/100)	55
第39図	S K 506測量図及び出土遺物実測図 (縮尺 1/30・1/3)	56
第40図	S B 503測量図及び出土遺物実測図 (縮尺 1/60・1/8・1/4)	57
第41図	S B 501測量図及び出土遺物実測図(1) (縮尺 1/60・1/4)	59
第42図	S B 501出土遺物実測図(2) (縮尺 1/4・1/3・1/2)	60
第43図	S B 502測量図(1) (縮尺 1/60)	61
第44図	S B 502測量図(2) (縮尺 1/60)	62
第45図	S B 502遺物分布図(1) (縮尺 1/60・1/8・1/4・1/2)	63
第46図	S B 502遺物分布図(2) (縮尺 1/60・1/8・1/4)	64
第47図	S B 502出土遺物実測図(1) (縮尺 1/4・1/2)	65
第48図	S B 502出土遺物実測図(2) (縮尺 1/4・1/3・1/2・1/1)	66
第49図	S B 502出土遺物実測図(3) (縮尺 1/4・1/3・1/2)	67
第50図	S K 503・504・507測量図及び出土遺物実測図 (縮尺 1/30・1/4)	69
第51図	S K 502測量図及び出土遺物実測図 (縮尺 1/30・1/4・1/1)	69
第52図	S K 201測量図及び出土遺物実測図 (縮尺 1/30・1/8・1/4)	70
第53図	S X 301測量図及び遺物分布図 (縮尺 1/40・1/30・1/8)	71
第54図	S X 301出土遺物実測図 (縮尺 1/4)	72
第55図	S X 202測量図及び出土遺物実測図 (縮尺 1/30・1/4)	73
第56図	S K 301測量図及び出土遺物実測図 (縮尺 1/30・1/4・1/3)	74
第6章 東野森ノ木遺跡3次調査地		
第57図	区割図 (縮尺 1/1,000)	79
第58図	調査区全測図及び北壁・東壁断面土層図 (縮尺 1/200・1/100)	80
第59図	S K 108測量図及び出土遺物実測図 (縮尺 1/30・1/3)	82
第60図	S K 101測量図及び出土遺物実測図 (縮尺 1/30・1/3)	83

第61図	S K 103測量図及び出土遺物実測図 (縮尺 1/30・1/3)	84
第7章 東野森ノ木遺跡4次調査地		
第62図	調査地測量図 (縮尺 1/800)	89
第63図	Ⅲ区で検出した現代建物基礎	90
第64図	区割図 (縮尺 1/1,000)	91
第65図	柱状土層模式図 (縮尺 1/40)	92
第66図	東野森ノ木遺跡4次調査地と2次調査地の土層対応図 (縮尺 1/200・1/100)	92
第67図	I・II区全測図及び北壁断面土層図 (縮尺 1/200・1/100)	93
第68図	Ⅲ区全測図及び北壁断面土層図 (縮尺 1/200・1/100)	95・96
第69図	IV・VI区東拡張・V・VI区全測図及び北壁断面土層図 (縮尺 1/200・1/100)	97・98
第70図	S K 401測量図 (縮尺 1/30)	99
第71図	S X 501測量図 (縮尺 1/30)	99
第72図	S B 401測量図(1) (縮尺 1/60)	100
第73図	S B 401測量図(2) (縮尺 1/60)	101
第74図	S B 401遺物分布図(1) (縮尺 1/60)	102
第75図	S B 401遺物分布図(2) (縮尺 1/60)	103
第76図	S B 401出土遺物実測図(1) (縮尺 1/4・1/2)	104
第77図	S B 401出土遺物実測図(2) (縮尺 1/4・1/3・1/1)	105
第78図	S B 402測量図及び出土遺物実測図 (縮尺 1/60・1/4)	106
第79図	S B 403測量図及び出土遺物実測図 (縮尺 1/60・1/4・1/2)	107
第80図	S K 503測量図及び出土遺物実測図 (縮尺 1/30・1/4)	108
第81図	S K 502測量図及び出土遺物実測図 (縮尺 1/30・1/5)	109
第82図	Ⅵ区遺構出土遺物実測図 (縮尺 1/4・1/3)	110
第8章 樽味立添遺跡3次調査地		
第83図	調査区区割図 (縮尺 1/1,000)	118
第84図	遺構配置図 (縮尺 1/500)	119・120
第85図	I区遺構配置図・北壁土層測量図 (縮尺 1/200・1/100)	121
第86図	II区遺構配置図・北壁土層測量図 (縮尺 1/200・1/100)	122
第87図	Ⅲ区遺構配置図・北壁土層測量図 (縮尺 1/200・1/100)	123
第88図	S K 101測量図・出土遺物実測図 (縮尺 1/30・1/3)	124
第89図	S K 102測量図・出土遺物実測図 (縮尺 1/30・1/3)	125
第90図	S K 104測量図 (縮尺 1/30)	125
第91図	S D 101測量図 (縮尺 1/60)	127
第92図	S D 101下層 (④層) 出土遺物実測図 (縮尺 1/4・1/3・1/2)	128
第93図	S D 101中層 (③層) 出土遺物実測図 (縮尺 1/4・1/3・1/2)	129
第94図	S D 101中層 (②層) 出土遺物実測図 (縮尺 1/4・1/3・1/2)	130
第95図	S D 101中層 (③・②層) 出土遺物実測図 (縮尺 1/4・1/3)	130
第96図	S D 101上層 (①層) 出土遺物実測図 (縮尺 1/4・1/3・1/2)	131

第97図	S D 101層位不明出土遺物実測図 (縮尺 1/4・1/3)	131
第98図	S D 201・202測量図 (縮尺 1/100)	133
第99図	S D 201下層 (③層) 出土遺物実測図 (縮尺 1/3・1/2)	134
第100図	S D 201中層 (②層) 出土遺物実測図 (縮尺 1/4・1/3・1/2)	134
第101図	S D 201上層 (①層) 出土遺物実測図(1) (縮尺 1/4)	135
第102図	S D 201上層 (①層) 出土遺物実測図(2) (縮尺 1/4・1/3・1/2)	136
第103図	S D 201層位不明出土遺物実測図 (縮尺 1/4・1/3)	137
第104図	S D 202出土遺物実測図 (縮尺 1/4・1/3)	137
第105図	掘立201測量図・出土遺物実測図(1) (縮尺 1/60・1/4・1/3)	138
第106図	掘立201出土遺物実測図(2) (縮尺 1/4)	139
第107図	S B 101測量図・出土遺物実測図(1) (縮尺 1/60・1/4)	140
第108図	S B 101出土遺物実測図(2) (縮尺 1/2)	141
第109図	S B 101炉測量図・出土遺物実測図 (縮尺 1/20・1/4・1/2)	142
第110図	S B 102測量図・出土遺物実測図 (縮尺 1/60・1/4・1/2)	143
第111図	S B 103・104測量図・出土遺物実測図 (縮尺 1/60・1/4・1/2)	144
第112図	S B 201測量図・出土遺物実測図(1) (縮尺 1/60・1/4)	145
第113図	S B 201出土遺物実測図(2) (縮尺 1/4・1/3・1/2)	146
第114図	S B 202測量図・出土遺物実測図 (縮尺 1/60・1/4)	147
第115図	S B 203測量図・出土遺物実測図(1) (縮尺 1/60・1/4)	148
第116図	S B 203出土遺物実測図(2) (縮尺 1/4・1/3・1/2)	149
第117図	S B 204測量図・出土遺物実測図(1) (縮尺 1/60・1/4・1/3)	150
第118図	S B 204出土遺物実測図(2) (縮尺 1/2)	151
第119図	S B 301測量図(1) (縮尺 1/60)	151
第120図	S B 301測量図(2)・出土遺物実測図(1) (縮尺 1/60・1/4)	152
第121図	S B 301出土遺物実測図(2) (縮尺 1/4)	153
第122図	S B 301出土遺物実測図(3) (縮尺 1/4・1/3・1/2)	154
第123図	S B 301出土遺物実測図(4)・S B 301内S K 1測量図・出土遺物実測図 (縮尺 1/30・1/4・1/2)	155
第124図	S K 201出土遺物実測図 (縮尺 1/4・1/3・1/2)	156
第125図	S X 101出土遺物実測図 (縮尺 1/4・1/3・1/2)	157
第126図	S X 202出土遺物実測図 (縮尺 1/4・1/2)	157
第127図	S X 203出土遺物実測図 (縮尺 1/4)	158
第128図	S P 326測量図・出土遺物実測図 (縮尺 1/20・1/2)	158
第129図	S P 出土遺物実測図(1) (縮尺 1/4・1/3)	159
第130図	S P 出土遺物実測図(2) (縮尺 1/2)	160
第131図	第Ⅲ層出土遺物実測図 (縮尺 1/2・1/1)	161
第9章 樽味高木遺跡7次調査地		
第132図	調査地全景	165

第133図	古墳時代中期の竪穴式住居址	165
第134図	調査地測量図(縮尺 1/800)	166
第135図	区割図(縮尺 1/1,000)	166
第136図	I・II区全測図及び北壁断面土層図(縮尺 1/200・1/100)	169・170
第137図	S B 201測量図及び出土遺物実測図(縮尺 1/60・1/4・1/2)	172
第138図	S B 208測量図(縮尺 1/60)	173
第139図	S B 208遺物分布図(縮尺 1/60・1/10・1/6)	174
第140図	S B 208出土遺物実測図(1)(縮尺 1/4・1/3)	176
第141図	S B 208出土遺物実測図(2)(縮尺 1/5)	177
第142図	S B 204測量図(縮尺 1/60)	178
第143図	S B 204遺物分布図(縮尺 1/60・1/6)	179
第144図	S B 204出土遺物実測図(1)(縮尺 1/4・1/3)	180
第145図	S B 204出土遺物実測図(2)(縮尺 1/3)	181
第146図	S B 101測量図及び出土遺物実測図(縮尺 1/60・1/4・1/3)	182
第147図	S B 212測量図及び出土遺物実測図(縮尺 1/60・1/4・1/3)	184
第148図	S B 207測量図及び出土遺物実測図(縮尺 1/60・1/4・1/3)	186
第149図	S B 206測量図(縮尺 1/60)	187
第150図	S B 203測量図(縮尺 1/60)	188
第151図	S B 205測量図(縮尺 1/60)	189
第152図	S B 209測量図(縮尺 1/60)	190
第153図	S B 102測量図(縮尺 1/60)	191
第154図	S K 101測量図及び出土遺物実測図(縮尺 1/30・1/3)	192
第155図	遺物包含層(3層)出土遺物実測図(縮尺 1/4・1/3)	193
第10章 樽味高木遺跡8次調査地		
第156図	調査地位置図(縮尺 1/1,000)	199
第157図	調査区区割図(縮尺 1/1,000)	200
第158図	作業風景	200
第159図	遺構配置図(縮尺 1/200・1/100)	201・202
第160図	S B 203測量図・出土遺物実測図(縮尺 1/60・1/4・1/2・1/1)	204
第161図	S B 207測量図・出土遺物実測図(1)(縮尺 1/60・1/4・1/3)	205
第162図	S B 207出土遺物実測図(2)(縮尺 1/4)	206
第163図	S B 208測量図・出土遺物実測図(縮尺 1/60・1/4・1/2)	207
第164図	S B 301・炉①・②測量図(縮尺 1/60・1/20)	208
第165図	S B 301出土遺物実測図(縮尺 1/4・1/3・1/2)	209
第166図	S B 303測量図(縮尺 1/60)	210
第167図	S D 301測量図(縮尺 1/100)	211
第168図	S D 301③層出土遺物実測図(縮尺 1/4・1/3・1/2)	212
第169図	S D 301②層出土遺物実測図(1)(縮尺 1/4・1/3)	213

第170図	S D 301②層出土遺物実測図(2) (縮尺 1/4・1/3) ……………	214
第171図	S D 301②層 (黒色土) 出土遺物実測図 (縮尺 1/4・1/3) ……………	215
第172図	S D 301①・②層出土遺物実測図 (縮尺 1/3) ……………	216
第173図	S D 301①層出土遺物実測図(1) (縮尺 1/3) ……………	217
第174図	S D 301①層出土遺物実測図(2) (縮尺 1/3) ……………	218
第175図	S D 301①層出土遺物実測図(3) (縮尺 1/3) ……………	219
第176図	S D 301①層出土遺物実測図(4) (縮尺 1/4・1/3・1/2) ……………	220
第177図	S B 201測量図 (縮尺 1/60) ……………	221
第178図	S B 201出土遺物実測図(1) (縮尺 1/3) ……………	222
第179図	S B 201出土遺物実測図(2) (縮尺 1/2) ……………	223
第180図	S B 202測量図・出土遺物実測図 (縮尺 1/60・1/4・1/3) ……………	224
第181図	S B 204測量図・出土遺物実測図(1) (縮尺 1/60・1/3) ……………	225
第182図	S B 204出土遺物実測図(2) (縮尺 1/4・1/3) ……………	226
第183図	S B 205測量図 (縮尺 1/60) ……………	227
第184図	S B 205炉測量図・出土遺物実測図 (縮尺 1/20・1/4・1/3・1/2) ……………	228
第185図	S B 206測量図 (縮尺 1/60) ……………	229
第186図	S B 209測量図・出土遺物実測図 (縮尺 1/60・1/3) ……………	230
第187図	S B 210測量図・出土遺物実測図 (縮尺 1/60・1/3) ……………	231
第188図	S B 212測量図・出土遺物実測図 (縮尺 1/60・1/3) ……………	232
第189図	S B 214測量図・出土遺物実測図 (縮尺 1/60・1/4・1/3) ……………	233
第190図	S B 101測量図・出土遺物実測図 (縮尺 1/60・1/3) ……………	233
第191図	S B 302測量図 (縮尺 1/60) ……………	234
第192図	S B 302出土遺物実測図 (縮尺 1/4) ……………	235
第193図	S K 301測量図・出土遺物実測図 (縮尺 1/30・1/4・1/3) ……………	236
第194図	S K 302測量図・出土遺物実測図 (縮尺 1/30・1/3・1/2) ……………	237
第195図	S K 310測量図・出土遺物実測図 (縮尺 1/30・1/3・1/2) ……………	238
第196図	掘立301測量図 (縮尺 1/60) ……………	239
第197図	掘立301出土遺物実測図 (縮尺 1/3・1/2) ……………	240
第198図	S D・S P・包含層第Ⅲ層出土遺物実測図 (縮尺 1/3・1/2) ……………	242
第199図	包含層第Ⅲ・Ⅱ③層・出土地点不明出土遺物実測図 (縮尺 1/3・1/2) ……………	243
第11章 樽味高木遺跡9次調査地		
第200図	調査地測量図 (縮尺 1/800) ……………	247
第201図	区割図 (縮尺 1/1,000) ……………	248
第202図	調査地西半部 ……………	249
第203図	弥生時代の掘立柱建物址 ……………	249
第204図	Ⅱ区全測図 (縮尺 1/200) ……………	252
第205図	I・Ⅵ区全測図及び北壁断面土層図 (縮尺 1/200・1/100) ……………	253・254
第206図	Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ区全測図及び北壁断面土層図 (縮尺 1/200・1/100) ……………	255・256

第207図	I区全測図及び東壁・南壁断面土層図 (縮尺 1/200・1/100)……………	257
第208図	VI区全測図及び西壁・南壁断面土層図 (縮尺 1/200・1/100)……………	257
第209図	III区全測図及び北壁・西壁断面土層図 (縮尺 1/200・1/100)……………	258
第210図	IV・V区全測図及び北壁・西壁断面土層図 (縮尺 1/200・1/100)……………	258
第211図	S B 402測量図及び出土遺物実測図 (縮尺 1/60・1/4)……………	259
第212図	S B 602測量図 (縮尺 1/60)……………	260
第213図	S B 602遺物分布図 (縮尺 1/60・1/8・1/4)……………	261
第214図	S B 602出土遺物実測図(1) (縮尺 1/4)……………	262
第215図	S B 602出土遺物実測図(2) (縮尺 1/4・1/3・1/2)……………	263
第216図	掘立101測量図及び出土遺物実測図(1) (縮尺 1/60・1/4)……………	265
第217図	掘立101出土遺物実測図(2) (縮尺 1/4)……………	266
第218図	S K 101測量図及び出土遺物実測図(1) (縮尺 1/30・1/4)……………	267
第219図	S K 101出土遺物実測図(2) (縮尺 1/4・1/2)……………	268
第220図	S K 105測量図 (縮尺 1/30)……………	269
第221図	S K 106測量図及び出土遺物実測図 (縮尺 1/30・1/4・1/2)……………	270
第222図	S K 601測量図及び出土遺物実測図 (縮尺 1/30・1/4)……………	271
第223図	S P 621測量図及び出土遺物実測図 (縮尺 1/30・1/4)……………	272
第224図	S B 101測量図 (縮尺 1/60)……………	273
第225図	S B 101出土遺物実測図 (縮尺 1/4・1/3)……………	274
第226図	S B 301測量図 (縮尺 1/60)……………	276
第227図	S B 301出土遺物実測図 (縮尺 1/3)……………	277
第228図	S B 302測量図及び出土遺物実測図(1) (縮尺 1/60・1/3)……………	278
第229図	S B 302出土遺物実測図(2) (縮尺 1/3)……………	279
第230図	S B 302出土遺物実測図(3) (縮尺 1/4・1/3)……………	280
第231図	S B 303測量図及び出土遺物実測図 (縮尺 1/60・1/3)……………	281
第232図	S B 401測量図及び出土遺物実測図 (縮尺 1/60・1/4・1/3)……………	282
第233図	S B 501測量図及び出土遺物実測図 (縮尺 1/60・1/4・1/3)……………	283
第234図	S B 601測量図及び出土遺物実測図 (縮尺 1/60・1/3)……………	284
第235図	S B 603測量図及び出土遺物実測図 (縮尺 1/60・1/4・1/3)……………	285
第236図	掘立601測量図及び出土遺物実測図 (縮尺 1/60・1/3)……………	286
第237図	S K 602測量図及び出土遺物実測図 (縮尺 1/30・1/4・1/3)……………	287
第238図	S X 401測量図及び出土遺物実測図 (縮尺 1/60・1/3)……………	288
第239図	S P 603・607測量図及び出土遺物実測図 (縮尺 1/30・1/4・1/3)……………	289
第240図	S P 632測量図及び出土遺物実測図 (縮尺 1/30・1/3)……………	290
第241図	S K 501測量図及び出土遺物実測図 (縮尺 1/30・1/3)……………	290
第242図	VI区遺物包含層 (3層) 出土遺物実測図 (縮尺 1/4・1/3)……………	291
第12章 樽味高木遺跡11次調査地		
第243図	調査地位置図 (縮尺 1/500)……………	296

第244図	遺構配置図・割付図 (縮尺 1/250)	297・298
第245図	地形測量図 (縮尺 1/200)	299・300
第246図	I区遺構配置図・北壁土層測量図 (縮尺 1/200・1/100)	301
第247図	II区・III区遺構配置図・北壁土層測量図 (縮尺 1/200・1/100)	302
第248図	S B 102測量図 (縮尺 1/60)	303
第249図	S B 102出土遺物実測図 (縮尺 1/4)	304
第250図	S B 104測量図・出土遺物実測図 (縮尺 1/60・1/4・1/3)	305
第251図	S B 105測量図(1) (縮尺 1/60)	306
第252図	S B 105測量図(2) (縮尺 1/60)	307
第253図	S B 105出土遺物実測図(1) (縮尺 1/4)	308
第254図	S B 105出土遺物実測図(2) (縮尺 1/3・1/2)	309
第255図	S B 105出土遺物実測図(3) (縮尺 1/4)	310
第256図	S B 105出土遺物実測図(4) (縮尺 1/4)	311
第257図	S B 107測量図 (縮尺 1/60)	312
第258図	S B 107出土遺物実測図(1) (縮尺 1/4)	312
第259図	S B 107出土遺物実測図(2) (縮尺 1/4)	313
第260図	S B 107出土遺物実測図(3) (縮尺 1/3・1/2)	314
第261図	S B 107出土遺物実測図(4) (縮尺 1/4)	315
第262図	S B 108測量図・出土遺物実測図 (縮尺 1/60・1/4・1/3)	316
第263図	S B 110測量図・出土遺物実測図(1) (縮尺 1/60・1/4)	317
第264図	S B 110出土遺物実測図(2) (縮尺 1/4・1/3)	318
第265図	S B 111測量図・出土遺物実測図 (縮尺 1/60・1/4)	319
第266図	S B 117測量図・出土遺物実測図(1) (縮尺 1/60・1/4)	320
第267図	S B 117出土遺物実測図(2) (縮尺 1/4・1/3・1/2)	321
第268図	S B 201測量図・出土遺物実測図 (縮尺 1/60・1/4・1/3)	322
第269図	S K 104測量図・出土遺物実測図 (縮尺 1/30・1/2)	323
第270図	S B 101測量図(1) (縮尺 1/60)	324
第271図	S B 101測量図(2) (縮尺 1/60)	325
第272図	S B 101出土遺物実測図(1) (縮尺 1/3)	326
第273図	S B 101出土遺物実測図(2) (縮尺 1/3)	327
第274図	S B 101出土遺物実測図(3) (縮尺 1/4・1/3)	328
第275図	S B 101出土遺物実測図(4) (縮尺 1/2)	329
第276図	S B 106測量図 (縮尺1/60)	330
第277図	S B 106出土遺物実測図(1) (縮尺 1/3)	331
第278図	S B 106出土遺物実測図(2) (縮尺 1/4・1/3)	332
第279図	S B 106出土遺物実測図(3) (縮尺 1/4・1/2)	333
第280図	S B 109測量図・出土遺物実測図(1) (縮尺 1/60・1/3)	334
第281図	S B 109出土遺物実測図(2) (縮尺 1/4・1/3・1/2)	335

第282図	S B112測量図・出土遺物実測図 (縮尺 1/60・1/4・1/3) ……………	336
第283図	S B113測量図・出土遺物実測図(1) (縮尺 1/60・1/3)……………	337
第284図	S B113出土遺物実測図(2) (縮尺 1/4・1/3・1/2)……………	338
第285図	S B113出土遺物実測図(3) (縮尺 1/2) ……………	339
第286図	S B114測量図・出土遺物実測図(1) (縮尺 1/60・1/3・1/2) ……………	340
第287図	S B114出土遺物実測図(2) (縮尺 1/4)……………	341
第288図	S B115・116測量図 (縮尺 1/60)……………	341
第289図	S B115・116出土遺物実測図 (縮尺 1/4・1/3・1/2) ……………	342
第290図	S B202測量図・出土遺物実測図 (縮尺 1/60・1/4・1/3) ……………	343
第291図	掘立101測量図・出土遺物実測図 (縮尺 1/60・1/3)……………	345
第292図	S K201測量図・出土遺物実測図 (縮尺 1/30・1/4・1/3・1/2)……………	346
第293図	S X101測量図・出土遺物実測図 (縮尺 1/30・1/4)……………	347
第294図	S X102測量図・出土遺物実測図 (縮尺 1/30・1/4・1/3・1/2・1/1) ……………	348
第295図	S K101測量図 (縮尺 1/30) ……………	349
第296図	S K102測量図 (縮尺 1/30) ……………	349
第297図	S K103測量図 (縮尺 1/30) ……………	350
第298図	S K105測量図・出土遺物実測図(1) (縮尺 1/30・1/3)……………	351
第299図	S K105出土遺物実測図(2) (縮尺 1/4・1/2) ……………	352
第300図	S P 出土遺物実測図 (縮尺 1/4・1/3・1/2) ……………	353
第301図	第Ⅲ層出土遺物実測図(1) (縮尺 1/4・1/3)……………	354
第302図	第Ⅲ層出土遺物実測図(2) (縮尺 1/2) ……………	355
第13章 樽味四反地遺跡7次調査地		
第303図	調査地測量図 (縮尺 1/800) ……………	359
第304図	区割図及び土層柱状模式図 (縮尺 1/1,000・1/80) ……………	360
第305図	古墳時代中期前葉の竪穴式住居址 (S B304) ……………	360
第306図	測量風景 ……………	360
第307図	遺構全測図及び北壁断面土層図 (縮尺 1/200・1/100)……………	363・364
第308図	S D301測量図及び出土遺物実測図 (縮尺 1/100・1/50・1/4) ……………	366
第309図	S K311・312測量図及び出土遺物実測図 (縮尺 1/30・1/4) ……………	367
第310図	S X301～303・S B304測量図 (縮尺 1/60) ……………	369
第311図	S X301～303測量図 (縮尺 1/40)……………	370
第312図	S X301・302遺物出土状況測量図 (縮尺 1/40・1/6) ……………	371
第313図	S X301出土遺物実測図 (縮尺 1/3)……………	371
第314図	S X302出土遺物実測図 (縮尺 1/4・1/3) ……………	373
第315図	S B304測量図 (縮尺 1/60) ……………	375
第316図	S B304遺物出土状況測量図 (縮尺 1/40・1/6・1/4) ……………	376
第317図	S B304出土遺物実測図(1) (縮尺 1/3)……………	378
第318図	S B304出土遺物実測図(2) (縮尺 1/3・1/2) ……………	380

第319図	S B 304出土遺物実測図(3) (縮尺 1/4・1/2)	381
第320図	S B 301測量図 (縮尺 1/60)	382
第321図	S B 301出土遺物実測図(1) (縮尺 1/4・1/3)	383
第322図	S B 301出土遺物実測図(2) (縮尺 1/4・1/3)	384
第323図	S B 302測量図及び出土遺物実測図 (縮尺 1/60・1/3)	386
第324図	S K 310測量図及び出土遺物実測図 (縮尺 1/30・1/3)	387
第14章 樽味四反地遺跡 8次調査地		
第325図	超大型建物跡	391
第326図	調査指導	392
第327図	現地説明会(1)	392
第328図	現地説明会(2)	392
第329図	調査地測量図 (縮尺 1/800)	393
第330図	区割図 (縮尺 1/1,000)	393
第331図	I・II A区全測図及び北壁断面土層図 (縮尺 1/200・1/100)	395・396
第332図	II B区全測図及び北壁断面土層図 (縮尺 1/200・1/100)	397・398
第333図	S D 101測量図及び出土遺物実測図 (縮尺 1/100・1/4・1/3)	400
第334図	S B 204測量図及び出土遺物実測図(1) (縮尺 1/60・1/4)	401
第335図	S B 204出土遺物実測図(2) (縮尺 1/4)	402
第336図	S B 204出土遺物実測図(3) (縮尺 1/4)	403
第337図	S B 204出土遺物実測図(4) (縮尺 1/4)	404
第338図	S P 362測量図及び出土遺物実測図 (縮尺 1/30・1/4)	405
第339図	I区地形測量図 (縮尺 1/200)	407
第340図	I区遺構配置図 (縮尺 1/200)	408
第341図	超大型建物跡 測量図 (縮尺 1/150)	409・410
第342図	超大型建物跡 柱穴①・②測量図及び出土遺物実測図 (縮尺 1/40・1/4)	413
第343図	超大型建物跡 柱穴③・④測量図及び出土遺物実測図 (縮尺 1/40・1/4)	414
第344図	超大型建物跡 柱穴⑤・⑥測量図及び出土遺物実測図 (縮尺 1/40・1/4)	415
第345図	超大型建物跡 柱穴⑦・⑧測量図及び出土遺物実測図 (縮尺 1/40・1/4)	416
第346図	超大型建物跡 柱穴⑨・⑩測量図及び出土遺物実測図 (縮尺 1/40・1/4)	417
第347図	超大型建物跡 柱穴⑪測量図及び出土遺物実測図 (縮尺 1/40・1/4)	418
第348図	超大型建物跡 柱穴⑫測量図及び出土遺物実測図 (縮尺 1/40・1/4)	419
第349図	超大型建物跡 柱穴⑬・⑭測量図及び出土遺物実測図 (縮尺 1/40・1/4)	420
第350図	超大型建物跡 柱穴⑮・⑯測量図及び出土遺物実測図 (縮尺 1/40・1/4)	421
第351図	超大型建物跡 柱穴⑰・⑱測量図及び出土遺物実測図 (縮尺 1/40・1/4)	422
第352図	超大型建物跡 柱穴㉓・㉔・㉕・㉖測量図及び出土遺物実測図 (縮尺 1/40・1/4)	423
第353図	超大型建物跡 柱穴㉗・㉘・㉙・㉚測量図及び出土遺物実測図 (縮尺 1/40・1/4)	424
第354図	S B 105測量図及び出土遺物実測図(1) (縮尺 1/60・1/4・1/3)	426
第355図	S B 105出土遺物実測図(2) (縮尺 1/4)	427

第356図	S B 201・202・203測量図及びS B 201出土遺物実測図(1) (縮尺 1/60・1/4・1/3) ……	428
第357図	S B 201出土遺物実測図(2) (縮尺 1/3) ……	429
第358図	S B 201出土遺物実測図(3) (縮尺 1/3) ……	430
第359図	S B 202出土遺物実測図 (縮尺 1/4・1/3) ……	431
第360図	S B 203出土遺物実測図 (縮尺 1/3) ……	431
第361図	S B 205測量図及び出土遺物実測図(1) (縮尺 1/60・1/3) ……	432
第362図	S B 205出土遺物実測図(2) (縮尺 1/1) ……	433
第363図	掘立201測量図及び出土遺物実測図 (縮尺 1/60・1/3) ……	433
第364図	S A 201・203測量図及び出土遺物実測図 (縮尺 1/60・1/4) ……	434
第365図	S K 114測量図及び出土遺物実測図 (縮尺 1/30・1/5・1/3) ……	436
第366図	S K 204測量図及び出土遺物実測図 (縮尺 1/30・1/4・1/3) ……	437
第367図	S K 205測量図 (縮尺 1/30) ……	438
第368図	S K 205出土遺物実測図(1) (縮尺 1/3) ……	439
第369図	S K 205出土遺物実測図(2) (縮尺 1/4・1/3) ……	440
第370図	S K 205出土遺物実測図(3) (縮尺 1/3・1/2) ……	441
第15章 樽味四反地遺跡9次調査地		
第371図	調査地測量図 (縮尺 1/800) ……	447
第372図	住居廃絶に伴う土師器 ……	448
第373図	現地説明会 ……	448
第374図	住居廃絶に伴う初期須恵器 ……	448
第375図	区割図 (縮尺 1/1,000) ……	449
第376図	I・II区全測図及び北壁断面土層図 (縮尺 1/200・1/100) ……	451・452
第377図	II区遺構配置図及び南壁・西壁断面土層図 (縮尺 1/200・1/100) ……	453
第378図	S B 103測量図 (縮尺 1/60) ……	453
第379図	S B 103出土遺物実測図(1) (縮尺 1/4・1/3) ……	454
第380図	S B 201出土遺物実測図 (縮尺 1/4) ……	455
第381図	S X 102測量図及び出土遺物実測図(1) (縮尺 1/30・1/4) ……	456
第382図	S X 102出土遺物実測図(2) (縮尺 1/4) ……	457
第383図	S B 102調査区及び9次拡張前測量図(1) (縮尺 1/60) ……	458
第384図	S B 102拡張前測量図(2) (縮尺 1/60・1/20) ……	459
第385図	S B 102土師器分布図 (縮尺 1/60・1/6) ……	460
第386図	S B 102初期須恵器分布図 (縮尺 1/60・1/6) ……	461
第387図	S B 102出土遺物実測図(1) (縮尺 1/4・1/3) ……	462
第388図	S B 102出土遺物実測図(2) (縮尺 1/3) ……	463
第389図	S B 102出土遺物実測図(3) (縮尺 1/3) ……	464
第390図	S B 102出土遺物実測図(4) (縮尺 1/3) ……	465
第391図	S B 102出土遺物実測図(5) (縮尺 1/3) ……	466
第392図	S B 102出土遺物実測図(6) (縮尺 1/3) ……	467

第393図	S B 102出土遺物実測図(7) (縮尺 1/3・1/1) ……………	468
第394図	S B 101測量図 (縮尺 1/60) ……………	469
第395図	S B 101遺物分布図 (縮尺 1/80・1/60) ……………	470
第396図	S B 101出土遺物実測図(1) (縮尺 1/4・1/3・1/1)……………	471
第397図	S B 101出土遺物実測図(2) (縮尺 1/4・1/3・1/2・1/1) ……………	472
第398図	S B 104測量図及び出土遺物実測図 (縮尺 1/60・1/3)……………	473
第399図	S B 105測量図及び出土遺物実測図 (縮尺 1/60・1/3)……………	474
第400図	S B 106測量図及び出土遺物実測図(1) (縮尺 1/60・1/4・1/3) ……………	475
第401図	S B 106出土遺物実測図(2) (縮尺 1/3・1/2・1/1)……………	476
第402図	S X 104測量図及び出土遺物実測図 (縮尺 1/30・1/3)……………	477
第403図	S D 201・202・205・206出土遺物実測図 (縮尺 1/4・1/3)……………	478
第16章 樽味四反地遺跡11次調査地		
第404図	区割図、全測図及び北壁・西壁断面土層図 (縮尺 1/200・1/100・1/50)……………	482
第405図	S D 101・S P 101・102・103測量図 (縮尺 1/30)……………	483
第406図	出土遺物実測図 (縮尺 1/4・1/3)……………	485
第17章 枝松遺跡6次調査地		
第407図	調査地測量図 (縮尺 1/800) ……………	489
第408図	区割図及び柱状土層模式図 (縮尺 1/1,000・1/80) ……………	490
第409図	調査地全景 ……………	490
第410図	I・II区全測図及び北壁断面土層図 (縮尺 1/200・1/100)……………	491・492
第411図	S K 007測量図及び出土遺物実測図 (縮尺 1/30・1/4)……………	495
第412図	S K 009測量図及び出土遺物実測図 (縮尺 1/30・1/4)……………	496
第413図	S K 008測量図及び出土遺物実測図 (縮尺 1/30・1/4)……………	497
第414図	S K 006測量図及び出土遺物実測図 (縮尺 1/30・1/2)……………	497
第415図	S K 016測量図 (縮尺 1/30) ……………	498
第416図	S K 001・003・004・S P 004測量図及び出土遺物実測図 (縮尺 1/30・1/4) ……………	499
第417図	S D 001測量図及び調査区南壁土層図 (縮尺 1/100・1/80・1/40)……………	500
第418図	S D 001遺物出土状況測量図及び出土遺物実測図 (縮尺 1/30・1/6・1/4・1/3・1/2) ……	500
第419図	S K 012・013・018測量図及び出土遺物実測図 (縮尺 1/30・1/3)……………	502
第420図	S K 017測量図及び出土遺物実測図 (縮尺 1/30・1/4・1/3) ……………	503
第421図	S K 005・010測量図 (縮尺 1/30)……………	504
第422図	遺物包含層(2層)出土遺物実測図 (縮尺 1/4・1/3)……………	505
第18章 自然科学分析		
第423図	樽味四反地遺跡7次調査における植物珪酸体分析結果 ……………	512
第424図	植物珪酸体(プラント・オパール)の顕微鏡写真 ……………	513
第425図	樽味四反地遺跡の花粉・孢子 ……………	517
第426図	樽味四反地遺跡の炭化材 ……………	521
第427図	樽味高木遺跡出土韓式系土器・在地産土師器の両分布図 ……………	529

第428図	樽味四反地遺跡出土韓式系土器・在地産土師器の両分布図	530
第429図	樽味高木遺跡及び樽味四反地遺跡出土韓式系土器・在地産土師器の両分布図	531
第430図	樽味高木遺跡及び樽味四反地遺跡出土韓式系土器・在地産土師器（甕類）の 両分布図	532
第431図	樽味高木遺跡及び樽味四反地遺跡出土韓式系土器・在地産土師器（高坏・甑）の 両分布図	533
第432図	船ヶ谷遺跡出土韓式系土器・在地産土師器（甕類・甑）の両分布図	534
第433図	基準領域A韓式系遺物実測図(1)（縮尺 1/6）	535
第434図	基準領域A韓式系遺物実測図(2)（縮尺 1/6）	536
第435図	基準領域A土師器実測図(1)（縮尺 1/6）	537
第436図	基準領域A土師器実測図(2)（縮尺 1/6）	538
第437図	基準領域B韓式系・土師器・搬入品遺物実測図（縮尺 1/6）	539
第438図	胎土分析による産地別出土遺物実測図（縮尺 1/20・1/6）	540
第19章 調査の成果と課題		
第439図	超大型建物跡周辺遺構配置図（縮尺 1/1,000）	544

表 目 次

表1	本格調査一覧	2
表2	検出主要遺構一覧	53
表3	検出主要遺構一覧	56
表4	検出主要遺構一覧	94
表5	検出主要遺構一覧	168
表6	検出主要遺構一覧	250
表7	検出主要遺構一覧	362
表8	検出主要遺構一覧	493
表9	樽味四反地遺跡7次調査における植物珪酸体分析結果	511
表10	樽味四反地遺跡7次調査における花粉分析結果	516
表11	樽味四反地遺跡における樹種同定結果	520
表12	胎土分析一覧表 土師器・韓式土器	525
表13	胎土分析一覧表 須恵器	528

第1章 はじめに

1. 調査に至る経緯

2002（平成14）年8月、松山市都市整備部道路建設課（以下、道路建設課）より、松山市枝松1丁目433番地2外の道路改良工事にあたり埋蔵文化財の確認願いが、松山市教育委員会事務局文化財課（以下、文化財課）に提出された。確認願いの申請された道路工事予定地は松山平野でも有数の遺跡地帯にあり、その多くは松山市が指定する周知の埋蔵文化財包蔵地『No.81樽味遺物包含地』内に含まれている。このことから、文化財課は予定地内の埋蔵文化財調査について協議を行った。周辺における既往の調査成果から遺跡の存在する可能性があるため、財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター（以下、埋文センター）が埋蔵文化財の有無を確認する試掘調査を実施することとなった。

2. 確認調査

確認調査（試掘）は道路工事予定地内のうち買収や登記の移転手続きが完了したところから随時開始し、試掘樽味1は2002（平成14）年9月に実施した。試掘調査は最終的に2005（平成17）年1月の試掘樽味12まで実施することとなった。その結果、予定地内の各所において弥生時代～古代の遺構と遺物を検出し、埋蔵文化財が存在することを確認した。なお、道路工事予定地の東端一帯は段丘の落ちた所に該当し、試掘調査の結果、当地がかつての石手川の沖積作用により運ばれた河川堆積物で厚く覆われた不安定な土地環境であったことが判明するとともに、埋蔵文化財は存在しないことが確かめられた。この結果を受け、道路建設課・文化財課・埋文センターの三者は協議を重ね、埋蔵文化財が確認され、遺跡の存在が明らかとなった箇所を対象地として、埋蔵文化財の発掘調査（本格調査）に着手することとなった。本格調査は道路建設課の協力を受け、文化財課指導のもと、埋文センターが実施した。

3. 遺跡名称

今回の本格調査対象地は枝松・樽味・東野の3地区に及んでいる。試掘調査の結果、各地区にて埋蔵文化財が存在することが確かめられ、14遺跡が本格調査に移行することとなった。既往の本格調査の成果と考え合わせ、本道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査（本格調査）では遺跡名称の呼称については表1のように決定した。既往の遺跡名称が字名を考慮して付けられていることから、今回もこれに準拠した。なお、東野地区の4遺跡については今回が初めての本格調査ということで、あらたに「東野森ノ木」という遺跡名称とともに次数を付した。契約名と遺跡名称の対応関係等についても表1にまとめた。

表1 本格調査一覧

契約名	遺跡名称	調査期間	対象面積	遺物量	遺構総数	調査	報告
樽味1	枝松遺跡6次調査地	2002.1101~2003.0331	1,459㎡	16号×4箱	122	加島	加島
樽味1	樽味四反地遺跡7次調査地	2002.1101~2003.0331	781.31㎡	16号×10箱 32号×10箱	140	加島	加島
樽味2	樽味四反地遺跡8次調査地	2003.0410~2003.0915	1,177.9㎡	32号×31箱	420	加島	加島
樽味2	樽味高木遺跡7次調査地	2003.0410~2003.0915	671.63㎡	16号×7箱 32号×10箱	175	高尾	加島
樽味3	樽味高木遺跡8次調査地	2003.0801~2004.0130	1,217.03㎡	16号×1箱 32号×36箱	390	高尾	高尾
樽味4	樽味立添遺跡3次調査地	2003.1001~2004.0731	1,889.42㎡	16号×77箱 32号×4箱	478	高尾	高尾
樽味5	樽味高木遺跡9次調査地	2004.0202~2004.0731	1,041㎡	16号×12箱 32号×29箱	141	加島	加島
樽味6	東野森ノ木遺跡1次調査地	2004.0322~2004.0930	1,618.57㎡	32号×8箱	135	河野	河野
樽味7	樽味四反地遺跡9次調査地	2004.0802~2005.0228	543.37㎡	16号×2箱 32号×8箱	87	加島	加島
樽味7	東野森ノ木遺跡2次調査地	2004.0802~2005.0131	794.46㎡	16号×1箱 32号×9箱	124	加島	加島
樽味8	樽味高木遺跡11次調査地	2005.0201~2005.0729	1,278㎡	32号×43箱	563	高尾	高尾
樽味9	樽味四反地遺跡11次調査地	2005.0316~2005.0331	37.25㎡	16号×1箱	8	加島	加島
樽味9	東野森ノ木遺跡3次調査地	2005.0301~2005.0419	233.98㎡	16号×1箱	26	加島	加島
樽味9	東野森ノ木遺跡4次調査地	2005.0419~2005.1130	1,694㎡	32号×6箱	201	加島	加島

4. 刊行組織

本報告書刊行の組織は次のとおりである（平成19年3月31日現在）。

松山市教育委員会	教 育 長	土居 貴美
事務局	局 長	石丸 修
	企 画 官	江戸 通敏
	企 画 官	仙波 和典
	企 画 官	宮内 健二
文化財課	課 長	家久 則雄
	主 査	栗田 正芳
(財)松山市生涯学習振興財団	理 事 長	中村 時広
	事 務 局 長	吉岡 一雄
	事 務 局 次 長	丹生谷博一
	調 査 監	杉田 久憲
埋蔵文化財センター	所長兼考古館館長	丹生谷博一
	次長兼管理係長	重松 幹雄
	次長兼調査係長	田城 武志
	学 芸 係 長	大北 冬彦
	主任調査員	栗田 茂敏
	主任調査員	山之内志郎
	主任調査員	橋本 雄一
	担当調査員	高尾 和長
		河野 史知
		大西 朋子
		加島 次郎

第2章 遺跡の立地と歴史的環境

1. 立地

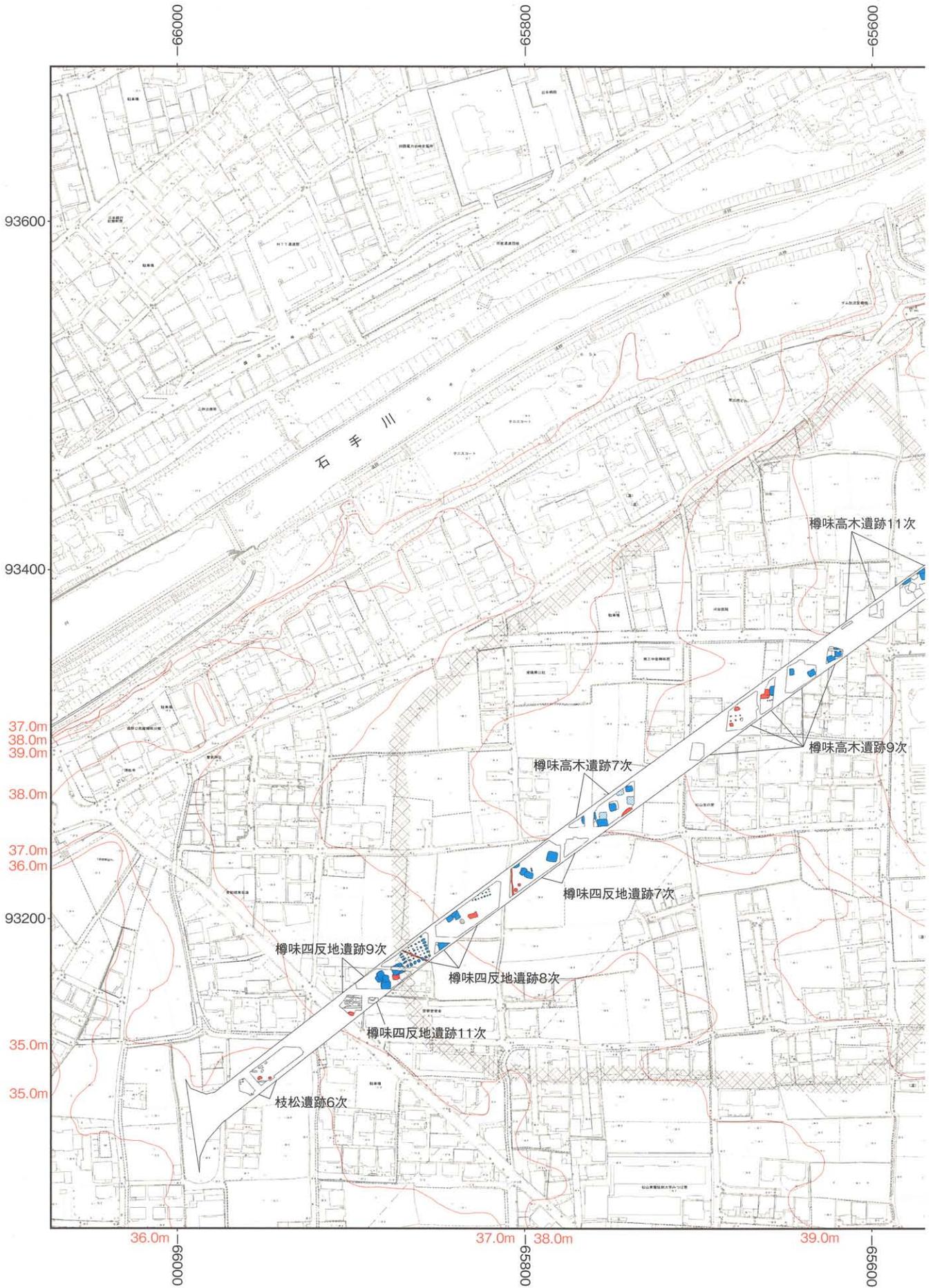
今回あらたに確認された14遺跡が所在する松山市枝松・樽味・東野は、四国北西部の愛媛県中央部の松山平野に位置する。この松山平野は東西約20km、南北約17kmの三角形ないし扇形状の形態を呈し、西部瀬戸内の中でも最大級の面積を有している。平野は、北から西にかけて瀬戸内海の斎灘と伊予灘に面し、北東部は高縄山塊という急峻な山々、南東部は四国山地に囲まれており、地理的完結性の強いことがうかがえる。松山平野はこれら山々から派生した大小の河川によって形成された複合扇状地性の平野である。平野の中央南寄りには高縄山南斜面に源を發しほぼ東から西へ貫流する重信川があり、幹線流路長は36kmを測る。この重信川には左岸側からは拝志川や砥部川が、右岸側からは石手川とその支流などが合流する。今回確認された遺跡は重信川右岸の石手川中流域南岸に展開する微高地上に立地している。遺跡から平野西方の伊予灘までは直線距離で約9km付近の地点である。

2. 歴史的環境

道路建設に伴い今回あらたに14の遺跡が確認された石手川中流域南岸では、近年、開発行為が急増している。これに伴い事前に埋蔵文化財の発掘調査を実施する機会も増え、調査地点も増加の一途を辿りつつある。以下では、時代を追って既往の調査成果を示しながら、今次調査のポイントに触れつつ、周辺の歴史的環境について概観する〔第1・2図〕。

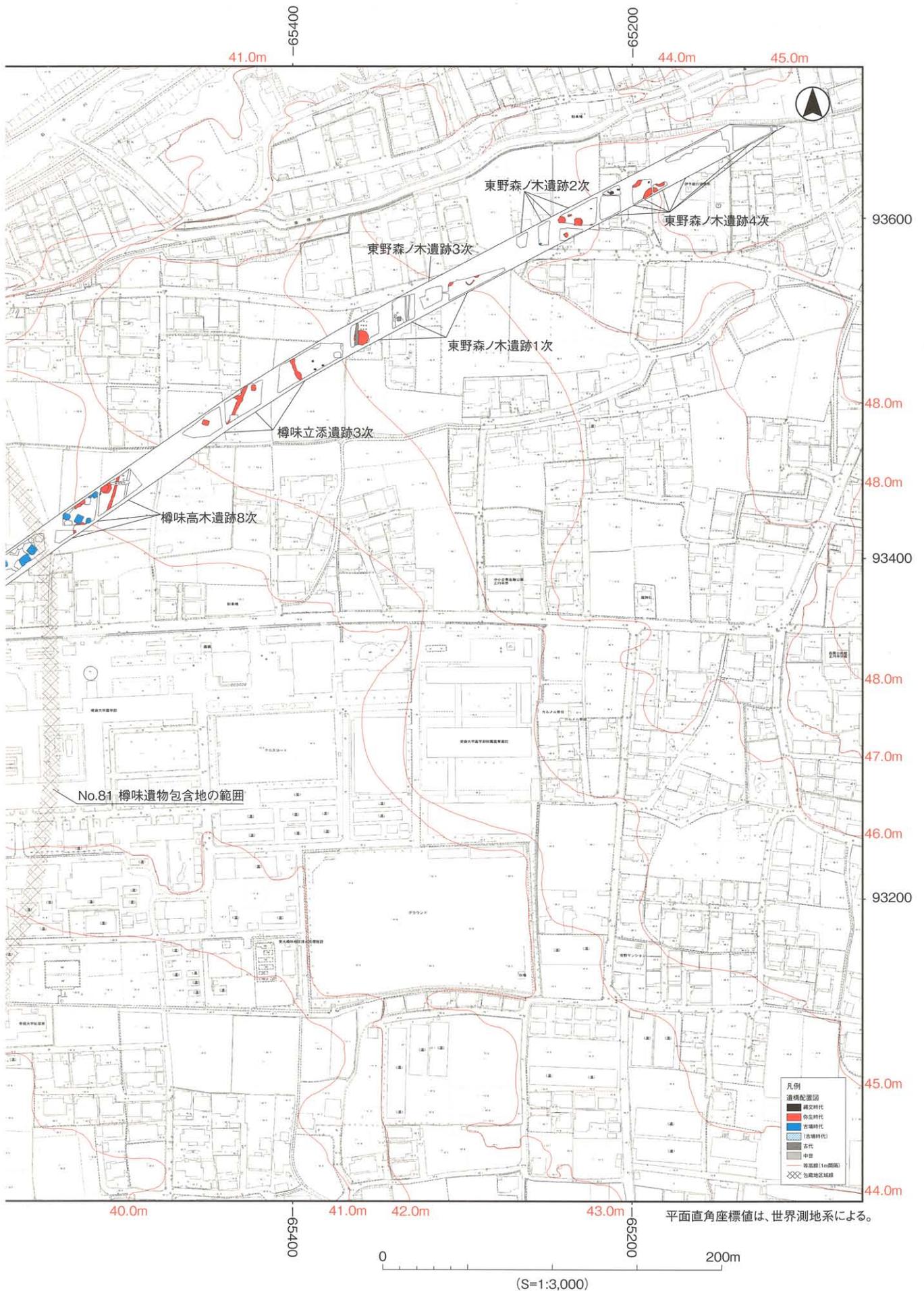
先土器時代～縄文時代 既往の調査では当該期の明確な遺構は確認されておらず、石器資料は表面採集品や後世の遺構精査時に確認されたものにとどまる。経石山古墳でのスクレイパーと楔形石器、桑原西稲葉遺跡2次調査地での角錐状石器、釜ノ口遺跡でのナイフ形石器と有舌尖頭器の出土は、当地域における希少な考古資料となる。ただし、これらの石器資料については層位学的知見を根拠とする帰属時期の確定が困難な状況にあり、基準となり得る遺跡の発見と、遺構と遺物の抽出が今後期待される場所である。そのなかで、広域テフラ（火山砕屑物、いわゆる火山灰）が確認される事例は確実に増えつつある。愛媛大学樽味団地内にある樽味遺跡1次調査地、樽味四反地遺跡1次調査地、桑原西稲葉遺跡1次調査地、枝松遺跡3次調査地、釜ノ口遺跡7次調査地、東本遺跡4次調査地では今から約25,000～22,000年前に降下したとされる始良T n火山灰（AT火山灰）の堆積が確認され、自然科学分析によりその存在が明らかとなり、これらは当該期の自然環境及び土地環境を理解する上で重要な調査知見である。

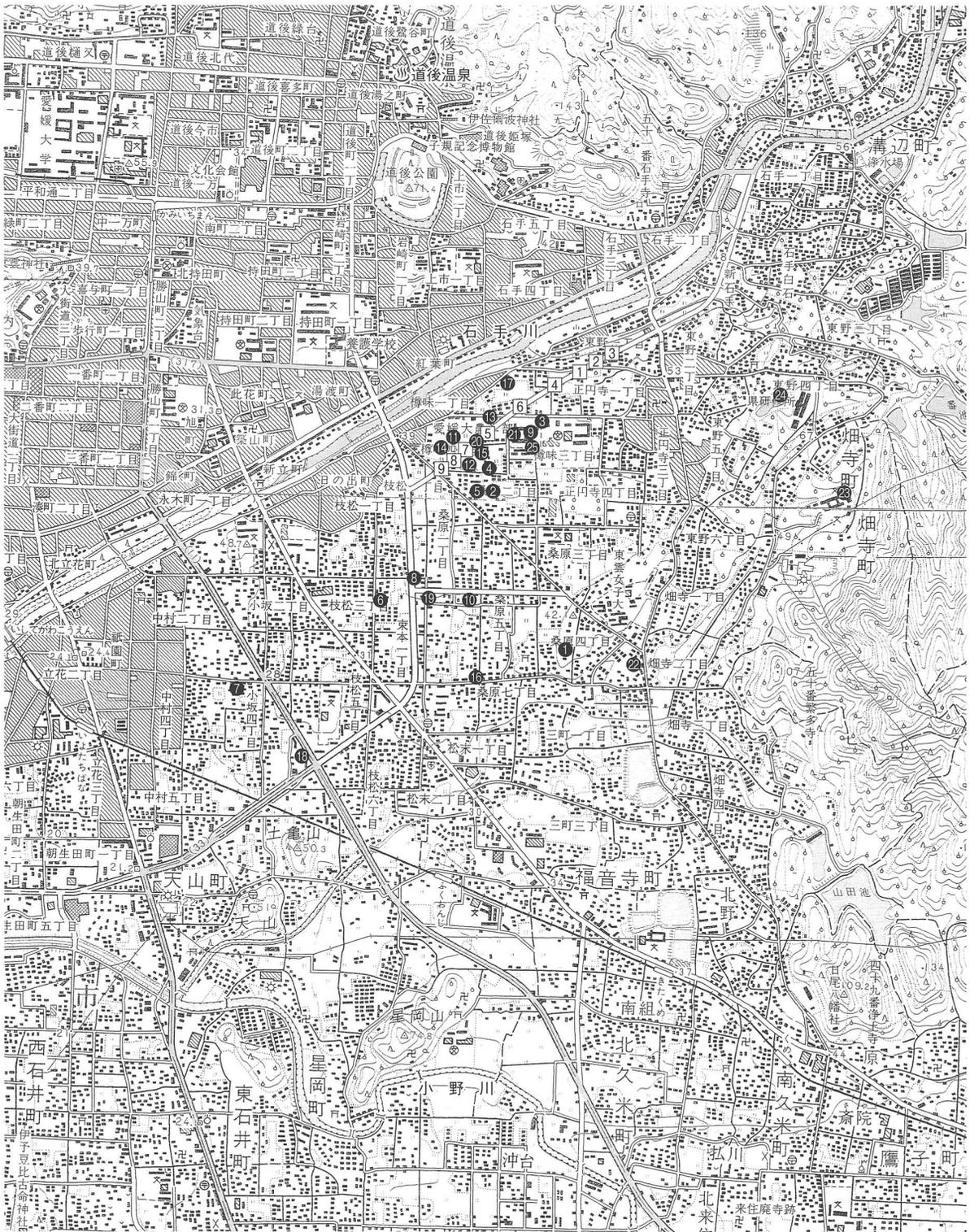
続く縄文時代では、草創期～晩期を通じても該当する遺跡は希少であり、当地区においても同様な傾向といえる。そのなかであって、東本遺跡4次調査地では今から約6,300年前に降下したとされる鬼界アカホヤ火山灰（K-Ah）の堆積が確認され、自然科学分析によりその存在が明らかとなった。火山灰下位からは打製石鏃、槍先形石器、スクレイパーが出土し、これらに近接して焼土塊や焼土面も検出されており、草創期～早期に時期比定される。今回調査した東野森ノ木遺跡2・4次調査地、樽味立添遺跡3次調査地からは晩期に時期比定される貯蔵穴数基が検出されており、これは食糧生産



第1図 調査地位置図

歴史的環境





- | | | | | |
|---------------|---------------|---------------|---------------|---------------|
| ① 経石山古墳 | ② 桑原西稲葉遺跡 2 次 | ③ 榊味遺跡 1 次 | ④ 榊味四反地遺跡 1 次 | ⑤ 桑原西稲葉遺跡 1 次 |
| ⑥ 枝松遺跡 3 次 | ⑦ 釜ノ口遺跡 7 次 | ⑧ 東本遺跡 4 次 | ⑨ 榊味遺跡 5 次 | ⑩ 桑原遺跡 4 次 |
| ⑪ 榊味高木遺跡 2 次 | ⑫ 榊味四反地遺跡 5 次 | ⑬ 榊味高木遺跡 3 次 | ⑭ 榊味四反地遺跡 6 次 | ⑮ 榊味四反地遺跡 4 次 |
| ⑯ 桑原田中遺跡 1 次 | ⑰ 榊味立添遺跡 1 次 | ⑱ 釜ノ口遺跡 8 次 | ⑲ 東本遺跡 6 次 | ⑳ 榊味高木遺跡 1 次 |
| ㉑ 榊味遺跡 3 次 | ㉒ 三島神社古墳 | ㉓ 畑寺竹ヶ谷古墳群 | ㉔ 東野お茶屋台古墳群 | ㉕ 榊味遺跡 2 次 |
| ① 東野森ノ木遺跡 1 次 | ② 東野森ノ木遺跡 2 次 | ③ 東野森ノ木遺跡 4 次 | ④ 榊味立添遺跡 3 次 | ⑤ 榊味高木遺跡 7 次 |
| ⑥ 榊味高木遺跡 11 次 | ⑦ 榊味四反地遺跡 7 次 | ⑧ 榊味四反地遺跡 8 次 | ⑨ 榊味四反地遺跡 9 次 | |

第 2 図 石手川中流南岸域の主要遺跡分布図 (S = 1 : 25,000)

段階へ移行する過渡期の生活関連遺構の具体的様相を知る上で希少な調査事例である。当地域における定住生活の初現期を知る上でも興味深く、遺跡の出現とその広がりを理解する上で重要な知見といえよう。

弥生時代 弥生時代に移行すると、遺跡数は急激に増加する。樽味遺跡1次調査地では前期の小規模な溝と土坑、樽味遺跡5次調査地では前期の竪穴式住居址と土坑が確認されており、当該期の集落が愛媛大学樽味団地西側に展開していた可能性が考えられよう。桑原遺跡4次調査地S R 401出土の弥生石器には前期～中期初頭頃における他地域との交流が示唆するものを含んでおり、先述した集落の存在を裏付ける資料に位置付けられる。今回調査した樽味立添遺跡3次調査地、樽味四反地遺跡7次調査地からは前期の大溝や小溝が検出されており、当該期の地表面をはじめ、生活関連遺構の様相と出土遺物の組成を考える上においても重要な知見を提供することができたといえよう。

中期後葉～後期初頭は竪穴式住居址の調査事例が増加することから、当該期から集落経営が本格的に軌道に乗り始めたことをうかがい知ることができる。樽味高木遺跡2次調査地と樽味四反地遺跡5次調査地で検出された大型円形住居址や小型方形住居址は集落を構成する住居の具体的様相を知る手がかりとなる。さらに樽味高木遺跡3次調査地S X 1や樽味四反地遺跡6次調査地S D 001出土の弥生土器は当該期の土器相を補足する良好な資料となる。

後期は後半～終末期の竪穴式住居址の事例がさらに増加することに加えて、威信財とともに他地域との文化交流を示す考古資料が確認される点が注目される。樽味四反地遺跡4次調査地S B 1の小型方形6本柱竪穴式住居址、枝松遺跡3次調査地S B 1の小型方形4～5本柱竪穴式住居址、桑原田中遺跡1次調査地S K 1の素掘りの井戸、樽味立添遺跡1次調査地S B 13の小型方形住居址、東本遺跡4次調査地のS B 203と302の直径7 mを超える大型円形10本柱竪穴式住居址、釜ノ口遺跡8次調査地S B 2の円形プランに2方向の長方形の張出部を付設した5本柱住居址は当該期の住居や井戸の形態と構造を理解する上で基準となるものであり、伴出した弥生土器は土器編年を知る上で興味深い。さらに遺物では東本遺跡4次調査地S B 302出土の方格規矩鏡の可能性のある舶載鏡片、鉄鏃、ガラス小玉、同S B 303出土の碧玉製管玉と鉄鏃、同S B 401出土の筒状土錘と鉄鏃、樽味立添遺跡1次調査地包含層出土の完形の貨泉、樽味高木遺跡3次調査地包含層出土の準構造船を描いた絵画土器片、樽味四反地遺跡4次調査地遺物包含層出土の完形碧玉製管玉、釜ノ口遺跡8次調査地S D 3出土の後漢鏡の可能性のある舶載鏡片、同S B 3出土の多量のガラス小玉や紅簾片岩製局部磨製方形石庖丁等は、他地域との交流を背景として獲得されたものと理解することが可能である。東本遺跡4次調査地のS B 302と同6次調査地S B 101に対しては鍛冶関連遺構との評価も与えられつつあり、当該期におけるこれらの調査事例は鉄器を含めた先進文化の受容と定着の様相を理解する上で看過できない。舶載鏡や貨泉といった威信財、さらに鉄器や管玉、ガラス小玉といった希少遺物の出土が当地域で顕著になる事象については今後議論を積み上げていく必要がある。

古墳時代 古墳時代初頭では樽味四反地遺跡6次調査地の建物A（掘立005）が特筆される。これは床面積130㎡前後の総柱構造をとる床束式の大型建物跡である。今回調査した樽味四反地遺跡8次調査地からはこれを上回る超大型建物跡（建物B）があらたに検出され、当該期に首長層に関わる特殊建造物群の存在したことが確定した。一方、集落の調査事例については、樽味立添遺跡1次調査地での2棟の竪穴式住居址、釜ノ口遺跡8次調査地S K 2の貯蔵穴がある。中期では、樽味高木遺跡1次調査地や樽味四反地遺跡5次調査地ほかで竪穴式住居址が調査されている。また遺構や遺物包含層

からも渡来系遺物が確認されるケースが増加し、特に当地域では顕著となる。今回調査した樽味高木遺跡7・8・11次調査地、樽味四反地遺跡7～9次調査地検出の多数の竪穴式住居址は当該期の良好な事例であり、共伴した遺物は編年を再考する上で興味深いものとなる。また、これらは新しい調理手法（蒸す）や器（甗）、さらに施設（竈）の導入時期とその様相を考える上で基準資料に位置付けられる可能性が高い。樽味四反地遺跡9次調査地S B 102については住居廃絶時に、器を伴う遺構の埋め戻しが実施された蓋然性の高いことが判明しており、当時の精神性を探る上でも興味深いものとなる。

中期末～後期は遺跡数が増加する。樽味立添遺跡や樽味高木遺跡1次調査地、さらに樽味四反地遺跡の多くの地点から竪穴式住居址の事例が報告され、集落経営が引き続いて軌道に乗っていたことが示唆される。樽味遺跡3次調査地や樽味四反地遺跡6次調査地からは多数の竪穴式住居址が調査され、当該期の生活様相を垣間見ることが可能となる。一方、集落の調査事例に比して墓の事例は限定される。そのなかで前方後円墳である経石山古墳や三島神社古墳の事例は当該期の首長墓の実態と首長系列の動向を知る上で必要不可欠である。また当微高地東側の丘陵上には、中～後期の畑寺古墳群と東野お茶屋台古墳群が展開しており、今後の継続的調査及び報告が期待されている。

古代 古代の遺跡は調査例が少ない。樽味四反地遺跡1次調査地で10世紀代の溝、樽味四反地遺跡5次調査地で自然流路が検出されている。遺物では、樽味四反地遺跡5次調査地出土の奈良三彩の小壺や緑釉の埴、さらに円面硯は注目され、遺跡の北や東の微高地上には当該期の官衙や寺院関係の遺構の存在が想定される。

中世 樽味遺跡2次調査地の14～16世紀の集落関連遺構の調査が主なものとなる。幹線水路の1号溝から出土した土器類の分析を通じて遺物組成とその編年観、さらに建物の構造とグルーピングについての言及がなされている。今回調査した東野森ノ木遺跡1次調査地からは当該期の建物と土坑、樽味四反地遺跡8次調査地からは素掘りの井戸の可能性が高い土坑が確認されており、これらは遺構の広がりと同様相を知る上で興味深い知見となる。

【参考文献】

1. 多田仁 1992 「松山平野の石器文化」『祝谷アイリ遺跡』松山市文化財調査報告書25
2. 田城武志・高尾和長 1992 「桑原西稲葉遺跡（2次）の調査」『桑原地区の遺跡』松山市文化財調査報告書26
3. 大山正風・長井数秋 1973 『釜ノ口遺跡調査報告書』松山市文化財調査報告書V
4. 宮本一夫編 1989 『鷹子・樽味遺跡』愛媛大学埋蔵文化財調査報告I
5. 梅木謙一・山之内志郎 1992 「樽味四反地遺跡の調査」『桑原地区の遺跡』松山市文化財調査報告書26
6. 梅木謙一・宮内慎一 1992 「桑原西稲葉遺跡（1次）の調査」『桑原地区の遺跡』松山市文化財調査報告書26
7. 宮内慎一 1992 「枝松遺跡（3次）の調査」『桑原地区の遺跡』松山市文化財調査報告書26
8. 高尾和長 1997 「釜ノ口遺跡7次調査地」『釜ノ口遺跡Ⅱ-6・7・8次調査地-』松山市文化財調査報告書60
9. 高尾和長編 1996 『東本遺跡4次調査 枝松遺跡4次調査』松山市文化財調査報告書54
10. 吉田広 2003 「樽味遺跡5次調査」『樽味遺跡Ⅳ』愛媛大学埋蔵文化財調査報告Ⅸ
11. 相原浩二・武正良浩 2005 「桑原遺跡4次調査地」『-松山市道中村桑原線関連遺跡-東本遺跡6次調査地・桑原遺跡2次調査地・桑原遺跡4次調査地』松山市文化財調査報告書105
12. 栗田正芳・河野史知 1994 「樽味高木遺跡2次調査地」『桑原地区の遺跡Ⅱ』松山市文化財調査報告書46
13. 高尾和長編 2002 『樽味四反地遺跡5次調査』松山市文化財調査報告書87
14. 梅木謙一・宮内慎一・武正良浩 1994 「樽味高木遺跡3次調査地」『桑原地区の遺跡Ⅱ』松山市文化財調査報告書46
15. 小玉亜紀子編 2003 『樽味四反地遺跡-6次調査-弥生時代～古墳時代初頭編』松山市文化財調査報告書94
16. 梅木謙一・宮内慎一・武正良浩・加島次郎 1994 「樽味四反地遺跡4次調査地」『桑原地区の遺跡Ⅱ』松山市文化財調査報告書46

17. 松村淳 1992 「桑原田中遺跡の調査」『桑原地区の遺跡』松山市文化財調査報告書26
18. 梅木謙一・宮内慎一 1992 「樽味立添遺跡の調査」『桑原地区の遺跡』松山市文化財調査報告書26
19. 相原秀仁・山本健一・宮内慎一 1997 「釜ノ口遺跡8次調査地」『釜ノ口遺跡Ⅱ-6・7・8次調査地-』松山市文化財調査報告書60
20. 相原浩二 2005 「東本遺跡6次調査地」『-松山市道中村桑原線関連遺跡-東本遺跡6次調査地・桑原遺跡2次調査地・桑原遺跡4次調査地』松山市文化財調査報告書105
21. 村田裕一 2006 「石器と鉄器からみた集落間交流」日本考古学協会2006年度愛媛大会研究発表資料集
22. 田崎博之編 1997 『樽味遺跡Ⅲ-樽味遺跡3次調査報告-』愛媛大学埋蔵文化財調査報告Ⅵ
23. 小玉亜紀子・梅木謙一編 2005 『樽味四反地遺跡Ⅱ-6次調査-古墳時代中期~中世編』松山市文化財調査報告書106
24. 梅木謙一・宮内慎一 1992 「樽味高木遺跡の調査」『桑原地区の遺跡』松山市文化財調査報告書26
25. 森光晴 1972 『三島神社古墳発掘調査報告書』松山市教育委員会
26. 愛媛県史編纂委員会 1980 『愛媛県史 古代Ⅱ・中世』愛媛県
27. 梅木謙一 2002 「東野お茶屋台遺跡1次調査地」『桑原地区の遺跡Ⅳ』松山市文化財調査報告書86
28. 梅木謙一・宮内慎一 2002 「東野お茶屋台遺跡2次調査地」『桑原地区の遺跡Ⅳ』松山市文化財調査報告書86
29. 梅木謙一・宮内慎一・山内英樹 2002 「東野お茶屋台遺跡3次調査地」『桑原地区の遺跡Ⅳ』松山市文化財調査報告書86
30. 吉岡和哉編 2006 『東野お茶屋台遺跡6次調査地』松山市文化財調査報告書113
31. 宮内慎一 2001 「桑原地区の古墳出土資料」『東野中畦遺跡』松山市文化財調査報告書82
32. 田崎博之編 1993 『樽味遺跡Ⅱ-樽味遺跡2次調査報告-』愛媛大学埋蔵文化財調査報告Ⅳ

第3章 調査の概要

1. 調査の経過

埋蔵文化財の調査は、通常、現地で行う野外調査（発掘調査）と、野外調査で得られた出土遺物をはじめ測量図・記録写真といった様々なデータの整理と分析を行う室内調査とがある。本調査ではこの両者を有機的かつ合理的に進めることを最大限考慮し、日々の業務を遂行した。

野外調査 野外調査は用地買収が完了し、既存建物とその基礎、さらに塀などの撤去が済み、諸条件の整った対象地から順次着手することとなった。まず、工事対象地西端の枝松遺跡6次調査と樽味四反地遺跡7次調査を2002（平成14）年11月から翌年3月末まで実施する運びとなった。調査に際しては調査員2名1組が担当で臨むこととし、担当調査員の選出に際しては、過去に道路改良工事に伴う埋蔵文化財調査を務めたことのある調査員の高尾を班長とした。そして、補佐として調査員の加島を充てた。しかしながら、当時、両名ともに既往調査の報告書作成業務に携わっていた関係上、2名が揃って野外調査に専従することが困難であったことから、まず、加島を樽味1契約調査の担当とした。なお、2004（平成16）年には、工期の関係上、複数地点の野外調査を同時に実施する必然が生じたことから、さらに調査員の河野を充当し対応した。

野外調査における調査区の設定は、試掘調査成果を参考に、対象地の状況に応じて既存の水路や農道、さらには生活道路に支障をきたさないようにした。表土については重機等により除去し、調査区の壁面にて土層の堆積状況を観察した。遺物包含層については慎重に掘削し、遺構検出と遺物出土に主眼を置いた。黒色系遺物包含層（後述する第Ⅳ層）を一部残す形で掘削を中断し、その後は人力により包含層精査ならびに遺構検出を行った。基本土層の確認と並行して検出遺構配置図の作成と記録写真撮影を行い、遺構の精査に着手した。重複する遺構については平面精査を繰り返し試み、前後関係の把握に努めた。遺構精査過程で確認された遺物については、観察と記録化（測量図と写真）を重点的に行い、現地での検討に主眼を置いた。これは、当地域における埋蔵文化財を用いた新たな歴史像の構築には、まずもって時間の物差しとなる遺物、とりわけ土器編年の確立が重要であると考えたからである。この編年に耐えうる基準資料の抽出を積み重ねることで、より安定した時間の物差しを設定することが今後可能となり、遺物が出土した遺構（主には生活関連遺構の竪穴式住居址、溝、土坑等）の時間的位置付けや構造論にまで議論を深化させることが期待できよう。また、土層の堆積状況を観察し、古地形や古環境を検討するための資料の抽出を目的として、可能な限り人力により、調査区の壁沿いを深掘りすることも行った。さらに、遺構最終確認面（検出面）となった黄色～褐色系の土層（後述する第Ⅴ層）上面の地形測量も行い、平板を用いてのコンター測量を実施した。

なお、特筆される所見が得られた野外調査については市民をはじめとする一般の方々に埋蔵文化財に関する理解をより深めていただくため、調査状況と成果を公開する「現地説明会」を開催し、計3回を数えた。開催時期は様々で、炎天下や梅雨時期、さらには雪の舞う厳冬期であったにもかかわらず、多数の方にご参加いただいた（3回の現地説明会で、計710名）。2003（平成15）年9月の説明会では、樽味四反地遺跡8次調査地において古墳時代前期初頭の西日本屈指の規模を誇る超大型建物跡、

樽味高木遺跡7次調査地において渡来文化の影響を受けた古墳時代中期前半に帰属する集落の調査を公開したところ、埋蔵文化財の調査研究上極めて学術的価値の高い調査成果を速やかに現地で公開したこともあって、市民の注目を大いに集めて好評を博したことを付記しておく。

室内調査 室内調査は、まず、仮設の現場事務所において野外調査と並行して出土遺物の洗浄と乾燥する作業から始めた。続いて注記、さらに記録した測量図と写真の整理を含めた基礎的な整理を一部実施した。野外調査が進むにつれて、当地域の歴史的事実が次第に明らかとなりはじめたことは、調査担当者としてこれに勝る喜びはない。しかしながら、日毎に増える出土遺物とともに、記録した測量図や写真も膨大な量となり、担当調査員を含む数名による懸命な室内調査を野外調査と同時並行で実施する日々が続いた。特に膨大な量の出土遺物については洗浄と乾燥は比較的順調に進んだものの、注記と接合作業が大幅に延滞し、野外調査期間中に出土遺物全てに対して注記と接合を実施するに至らず、野外調査完了後に引き続いて実施した。本格的な整理作業に移行することができたのは、野外調査最終年の2005（平成17）年からのことである。出土遺物の洗浄・注記を経て接合関係を確認した遺物に対しては実測図の作成可能なものを抽出する作業をおこない、主に竪穴式住居址と掘立柱建物址等の生活関連遺構から出土した遺物から実測図の作成に着手した。さらに2006（平成18）年1月からは本格的に報告書作成作業にとりかかり、測量図の縮分合成を経て浄写原図（遺構トレース原図）や出土遺物の版下組みに取りかかり、同年4月からは原稿執筆も並行して行った。さらに写真図版の作成にも着手し、入稿・校正等を含む報告書作成にかかわる全ての作業を終えたのは2007（平成19）年3月末である。

調査成果の公表 本報告書の刊行に至るまでには、さまざまな形で成果を公表する機会に恵まれた。以下、主なものを列記する（現地説明会は除く）。

- 松山市考古館展示会「発掘調査速報展2003」・「発掘調査速報展2004」・「発掘調査速報展2005」・「発掘調査速報展2006」。
- 松山市考古館速報展関連報告会「発掘調査報告会2004」。
- 松山市教育委員会・埋文センター刊行「松山市埋蔵文化財調査年報15 平成14年度」、「松山市埋蔵文化財調査年報16 平成15年度」、「松山市埋蔵文化財調査年報17 平成16年度」、「松山市埋蔵文化財調査年報18 平成17年度」。
- 第1～3回四国地区埋蔵文化財センター巡回展「発掘へんろ」。
- 松山市役所本館ロビーでの写真展。
- 文化庁ほか主催「発掘された日本列島2004－新発見考古速報展」。

2. 基本層位

野外調査では実に多くの土層を確認することができた。野外調査完了後の室内調査の段階において、各調査で記録した土層図と写真、さらに作成したメモを基にして、色調と硬度、さらに含まれる礫や砂粒の大きさや量、包含される考古遺物の帰属時期等を勘案し、確認された土層を整理した上で上位から第Ⅰ～Ⅶ層に大別した。この大別された土層を以下では市道樽溝線統一基本層位と呼称すること

としたい。各層位の特徴は次の通りである。

造成土－主には真砂土である。既存宅地の基礎撤去後に盛られたものである。

第Ⅰ層－現代の水田や畑にかかわる土層である。耕作土部分の①と、鉄分が沈着した床土部分の②とに細分することができる。調査以前や宅地化以前の土地利用を示す土層となる。

第Ⅱ層－灰黄褐色（10Y R5/2）や褐灰色（10Y R4/1）を呈する土である。調査対象地の各地点で確認される。東野森ノ木遺跡1次調査地、樽味立添遺跡3次調査地、樽味高木遺跡7・9次調査地、樽味四反地遺跡7・8次調査地、枝松遺跡6次調査地の調査区壁で観察されている。本層には土師器の皿や坏、東播系須恵器のこね鉢、陶磁器が包含されるものの、碎片で量的にはわずかである。中世段階の遺物包含層と考えられる。

第Ⅲ層－黄灰色（2.5Y R5/1）、灰色（10Y5/1）を呈する土や砂である。調査対象地の各地点で確認される。東野森ノ木遺跡1次調査地、樽味高木遺跡8次調査地、樽味四反地8次調査地の調査区壁で観察されている。本層には土師器の坏、須恵器、瓦器の細片がわずかに包含される。古代段階の遺物包含層と考えられる。

第Ⅳ層－黒色系の土である。地点により土層図の注記は異なり、黒褐色（2.5Y3/1）、黒色（2.5Y2/1）、褐色（7.5Y2/1）を呈するが、相対的に黒味を帯び、粘性が強い点は共通する。東野森ノ木遺跡3次調査地を除いた対象地の各地点の調査区壁で観察されている。本層には弥生土器、土師器、須恵器、瓦器、石器等が比較的多く包含される。地点により本層を細分することは可能である。調査時において統一基準による分層を厳密におこなうことが対象地全域で困難なことから、分層に基づいた遺物収納を実施するには至っていない。弥生～古墳時代を中心とした遺物包含層と考えられる。なお、本層上面が遺構確認面となり、本層途中から確認できた遺構も存在する。

第Ⅴ層－褐色（7.5Y R4/4）、暗褐色（7.5Y R3/4）、極暗褐色（7.5Y R2/3）、にぶい黄褐色（10Y R4/3、10Y R5/4）の土で、地点により色調は異なるものの、粘性が非常に強く、ガチガチと締まった質感のある点は共通する。対象地の各地点において確認された土層であり、本層上面において最終的に遺構の輪郭を確定した。地形を復元する上での基礎資料のひとつとなるコンター測量図は本層上面にて測量したものである。対象地の多くの地点では調査区沿いに深掘りトレンチを設け、本層以下の堆積状況を追求したところ、本層以下に人工遺物（考古遺物）を確認することはできなかった。

第Ⅵ層－黄褐色（2.5Y5/4）、褐灰色（10Y R4/1）の砂質土である。砂粒は2～3mm大とほぼ均一で、やや締まりがある。対象地のいくつかの地点にて本層を確認している。

第Ⅶ層－にぶい黄褐色（10Y R4/3）の砂礫で構成される。10cm大程度の円礫が密集しており、野外調査時において人力で掘り下げることが困難であった。

第4章

東野森ノ木遺跡

1次調査地

第4章 東野森ノ木遺跡1次調査地

1. 野外調査の経過と方法

本調査地は東野町の西端で、樽味立添遺跡3次調査地の西隣に位置する。調査以前は畑地や住宅地であり、調査地は東野1丁目甲38番1～甲44番4までの間の5筆、幅17m、長さ87m、対象面積は1,618.57㎡となり、国土座標ではX=93513～93571、Y=-65273～-65368の地域になる。調査区は東からⅠ区、Ⅱ区、Ⅲ区とし、Ⅰ区は排土置き場の都合上、東半分と西半分に分けた。また、調査区内を5m四方のグリッドに分け、調査地全体を西から東へ1・2・3…、南から北へA・B・C…とグリッド名を付けた。調査はⅠ区東側、Ⅰ区西側、Ⅱ区、Ⅲ区の順番で行う。なお、各調査区の調査では重複する期間があった。

Ⅰ区東側 平成16年3月22日～平成16年6月18日

3月22日、発掘調査に先立ち調査地保全のため、杭打ち・ロープ囲い・土嚢作り・下草刈りを開始する。

4月20日、重機による表土掘削と同時に、壁面・床面の精査を開始する。

4月21日、重機による表土掘削を終了する。

4月22日、第4層（遺物包含層）の掘り下げと測量を開始する。

4月30日、第4層の掘り下げを終了する。

5月6日、第5層（遺物包含層）の掘り下げを開始する。

5月7日、第5層の掘り下げを終了し、床面の精査を行う。

5月10日、遺構検出写真撮影を行い、遺構の掘り下げと測量を開始する。

6月16日、遺構完掘写真撮影を行う。

6月17日、南壁に重機にて深掘りトレンチを入れる。

6月18日、深掘りトレンチの埋め戻しを終了し、Ⅰ区東半分の調査を終了する。

Ⅰ区西側 平成16年6月21日～平成16年7月6日

6月21日、重機による表土掘削と同時に、壁面・床面の精査を開始する。

6月23日、表土掘削・精査を終了し、遺構検出写真撮影を行い、遺構の掘り下げと測量を開始する。

7月1日、遺構の掘り下げが終了し、遺構完掘写真撮影を行う。

7月2日、南壁を重機により深掘りトレンチを入れる。

7月5日、埋め戻しを開始する。

7月6日、埋め戻しを終了し、Ⅰ区西半分の調査を終了する。

Ⅱ区 平成16年5月14日～平成16年6月18日

5月14日、重機による表土掘削を開始する。

5月19日、表土掘削を終了し、壁面・床面の精査を開始する。

- 5月26日、床面精査が終了し、遺構検出写真撮影を行い、遺構の掘り下げを開始する。
- 6月16日、遺構完掘写真撮影を行う。
- 6月17日、重機による埋め戻しを開始する。
- 6月18日、埋め戻しを終了し、Ⅱ区の調査を終了する。

Ⅲ区 平成16年6月22日～平成16年9月30日

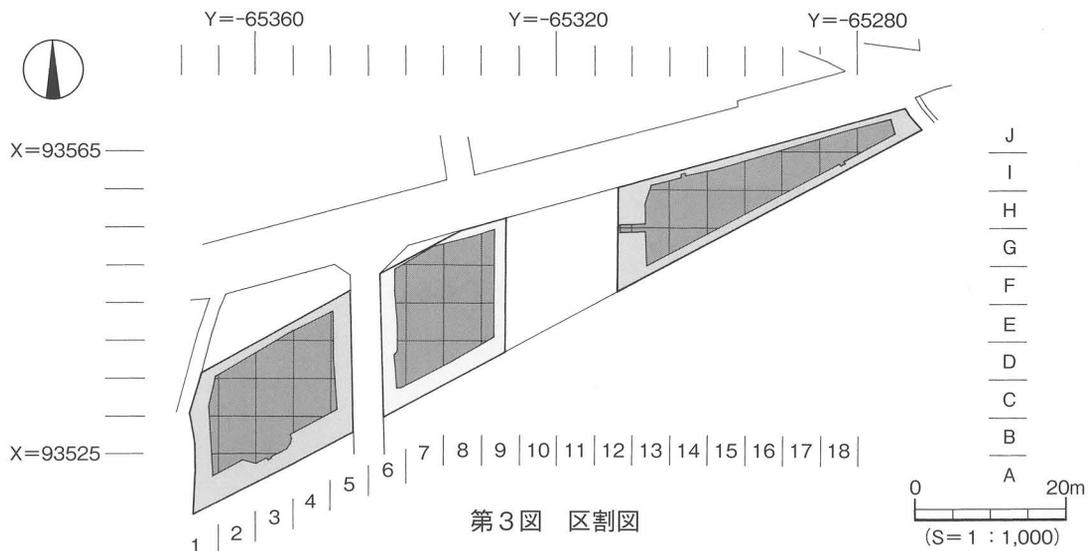
- 6月22日、重機による表土掘削を開始する。
- 6月25日、表土掘削を終了する。
- 7月6日、壁・床面の精査を開始する。
- 7月13日、遺構検出写真撮影を行い、中世遺構の掘り下げを開始する。
- 7月29日、中世遺構の完掘写真撮影を行い、中世以前の遺構掘り下げを開始する。
- 9月9日、1回目の遺構完掘写真撮影を行う。
- 9月10日、南壁の拡張を人力にて行う。
- 9月21日、重機にて南壁トレンチ掘りを行う。
- 9月22日、2回目（深掘りトレンチ・拡張部を含めた）の遺構完掘写真撮影を行う。
- 9月24日、重機による埋め戻しを開始する。
- 9月28日、埋め戻しを終了し、Ⅲ区の調査を終了する。
- 9月29日、仮設調査事務所と備品類を撤去する。
- 9月30日、発掘調査機材を搬出し、本日にて東野森ノ木遺跡の屋外調査を終了する。

発掘調査現場説明会

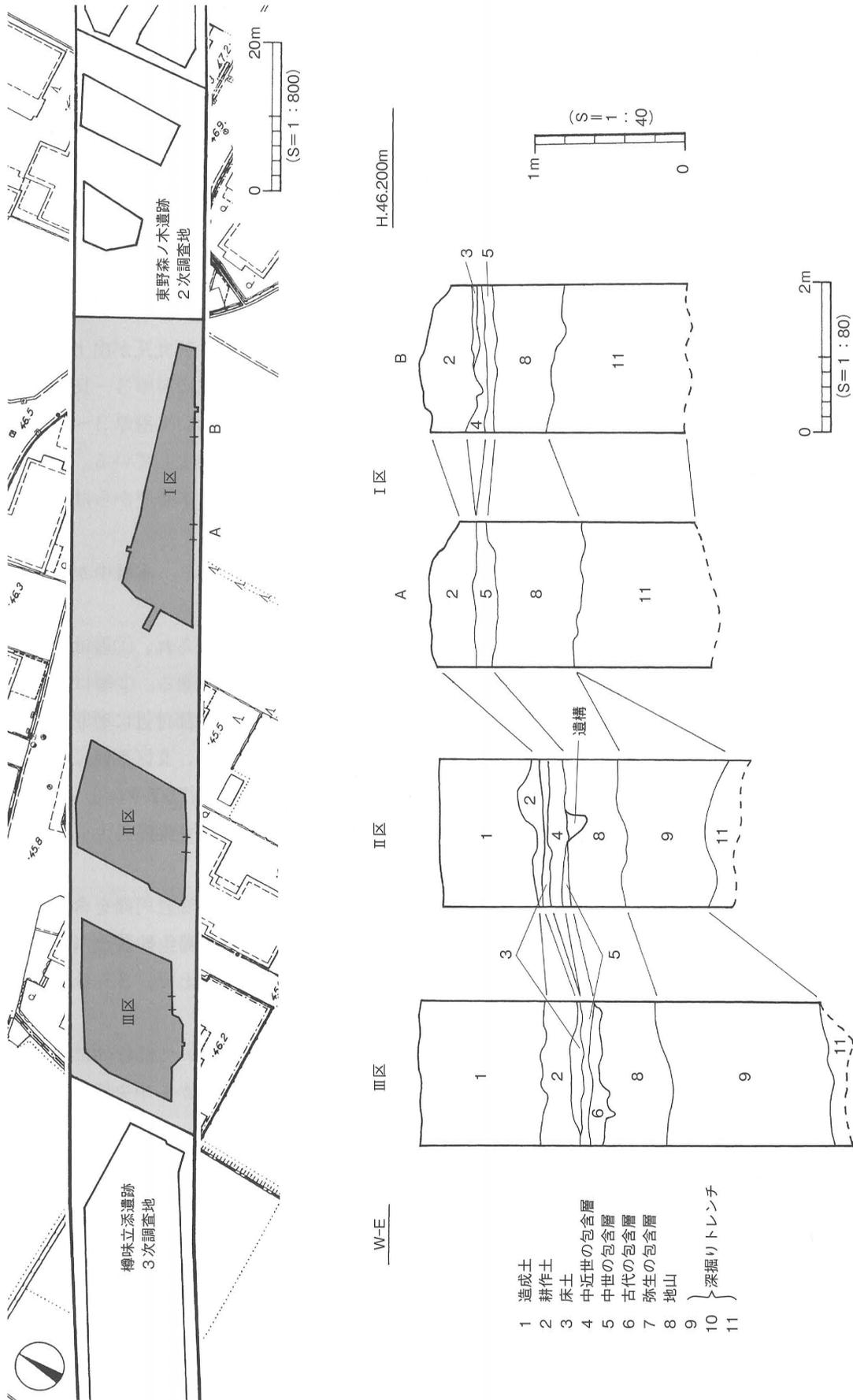
6月12日、樽味立添遺跡3次調査地（現地での説明）と樽味高木遺跡9次調査地・東野森ノ木遺跡1次調査地（調査途中にて、出土物や写真パネル展示）の発掘調査現場説明会を行う。

室内整理作業

10月1日から11月30日の間は、室内整理作業として、測量図の縮分合成や出土遺物の注記・接合・実測などを中心とした作業を行った。



第3図 区割図

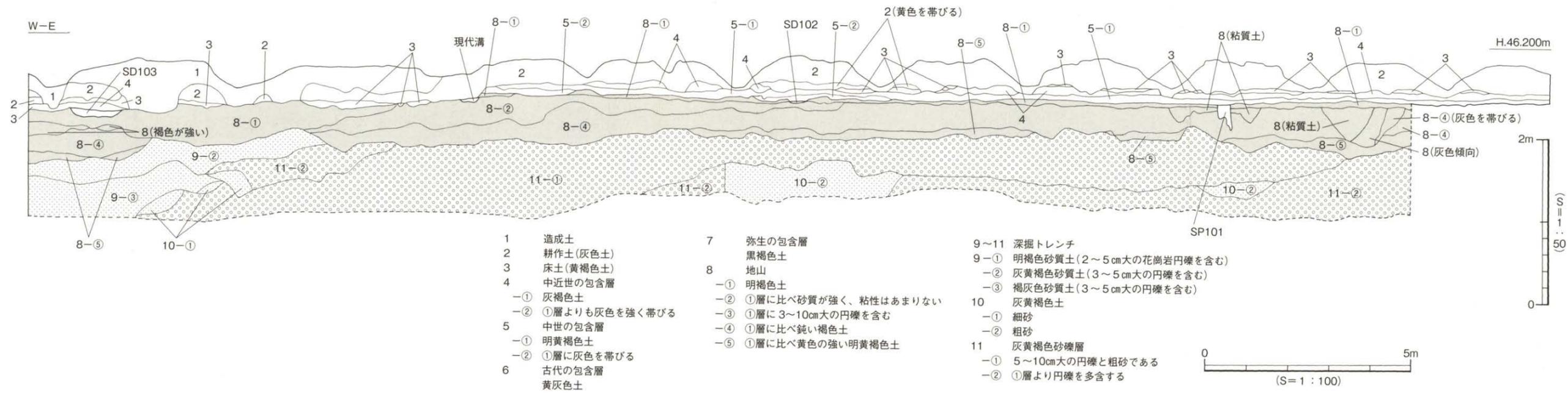
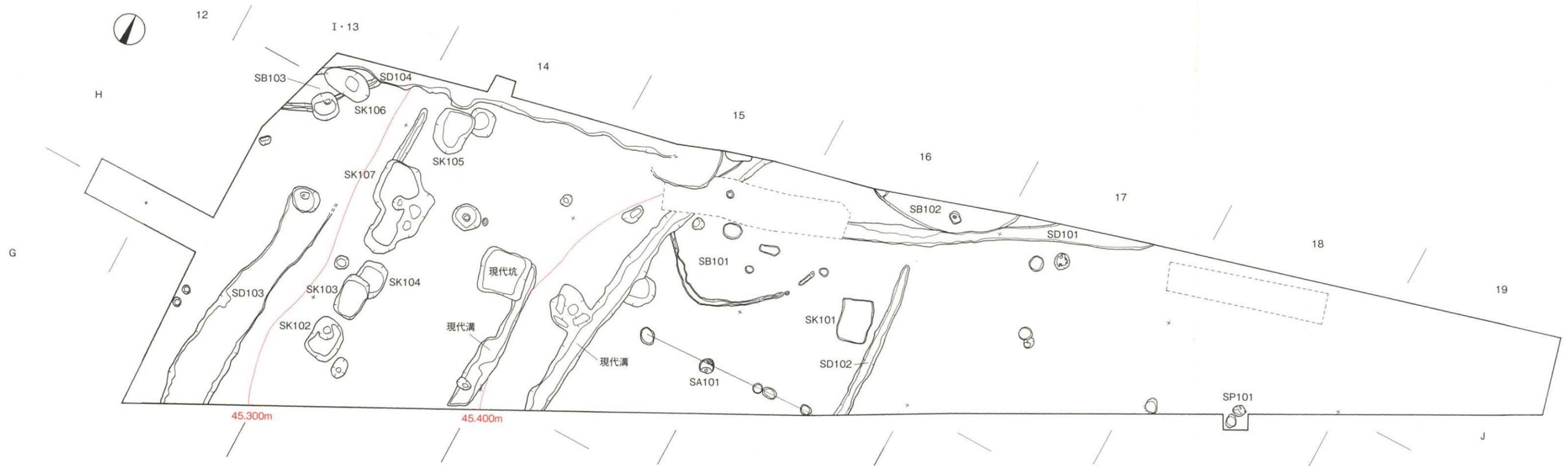


第4図 調査区位置図及び土層柱状模式図

2. 基本層位 (第5・6図)

本調査区の基本層位は、第1層から第11層に分けられ、第9層以下からの遺構や遺物は未確認である。

- 第1層 - 近現代の造成土で、Ⅱ～Ⅲ区において地表下42～110cmまでの開発が行われている。
- 第2層 - 近現代の耕作土で、灰色土 (5 Y 4/1) がⅠ～Ⅲ区全域に層厚12～34cmの堆積を測る。
- 第3層 - 近現代の水田床土で、黄褐色土 (2.5 Y 5/3) がⅠ～Ⅲ区全域に層厚2～11cmの堆積を測る。
- 第4層 - 2層に分けられ、①層は灰褐色土 (7.5 Y R 4/2) で、Ⅰ区西側からⅢ区にかけて層厚3～8cmの堆積を測る。②層は①層よりも灰色を強く帯び、Ⅰ区東側とⅡ区西側に層厚5～10cmの堆積を測る。本層中からは、中近世の土師器、東播系須恵器、陶磁器、軒丸瓦が出土する。
- 第5層 - 2層に分けられ、①層は明黄褐色土 (2.5 Y 7/6) で、Ⅰ区からⅢ区全域に層厚3～16cmの堆積を測る。②層は①層に灰色を帯びており、Ⅰ区中央部、Ⅲ区西端において層厚3～10cmの堆積を測る。本層中からは、中世の土師器・東播系須恵器・陶磁器が出土している。
- 第6層 - 黄灰色土 (2.5 Y R 5/1) で、Ⅲ区南東部に層厚5～20cmの堆積を測る。本層中からは、古代の須恵器が僅かに出土する。
- 第7層 - 黒褐色土 (7.5 Y R 3/1) で、Ⅲ区南西部だけに層厚10～30cmの堆積を測る。本層中からは、弥生時代後期の土器、石器が出土している。
- 第8層 - 地山とよばれるもので、この層の上面にて遺構を検出する。5層に分けられ、①層は明褐色土 (7.5 Y R 5/8) で、Ⅰ・Ⅲ区全域とⅡ区西側に層厚30～65cmの堆積を測る。②層は①層と同色であるが、①層に比べ砂質が強く、粘りがあまりない。Ⅰ区の中央部付近に層厚8～25cmの堆積を測る。③層は①層と同色であるが、3～10cm大の円礫を含み、Ⅱ区東側において層厚25～40cmの堆積を測る。④層は①層に比べ褐色の強い鈍い褐色土 (7.5 Y R 6/3) で、Ⅰ区とⅢ区に層厚15～40cmの堆積を測る。⑤層は①層に比べ黄色の強い明黄褐色土 (10 Y R 7/6) で、Ⅰ区に部分的に層厚15～25cmの堆積を測る。
- 第9層 - 3層に分けられ、①層は明褐色 (7.5 Y R 5/6) 砂質土に2～5cm大の花崗岩円礫を含み、Ⅲ区の東側から中央部にかけて層厚15～30cmの堆積を測る。②層は灰黄褐色砂質土 (10 Y R 4/2) に、3～5cm大の円礫を含む。③層は褐灰色 (10 Y R 4/1) 砂質土で、3～5cm大の円礫を含み、Ⅰ区西側からⅢ区全域に層厚20～100cm以上の堆積を測る。
- 第10層 - 2層に分けられ、①層は灰黄褐色細砂 (10 Y R 6/2) で、Ⅰ区西側において部分的に層厚7～25cmの堆積を測る。②層は①層と同色であるが粗砂であり、Ⅰ区東側から中央部にかけて部分的に層厚20～50cm以上の堆積を測る。
- 第11層 - 2層に分けられ、①層は灰黄褐色砂礫層 (10 Y R 4/2) で、5～10cm大の円礫と粗砂で構成され、Ⅰ区の②層上に一部と②層下に層厚40～80cm以上の堆積を測る。②層は①層に比べ、5～10cm大の円礫を多含し、Ⅰ区西側において第9層に切られる。Ⅱ区では起伏をもち、Ⅰ区～Ⅲ区に層厚10～50cm以上の堆積を測る。

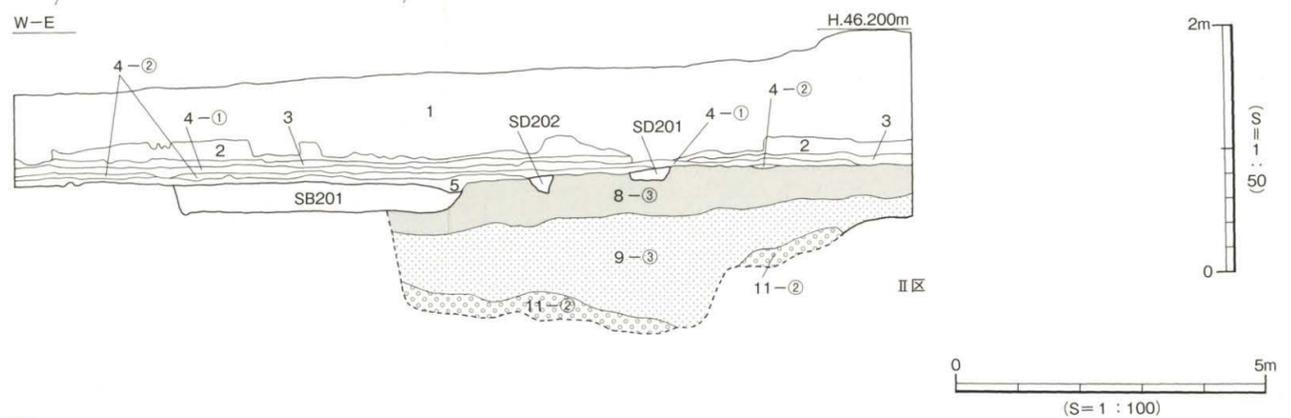
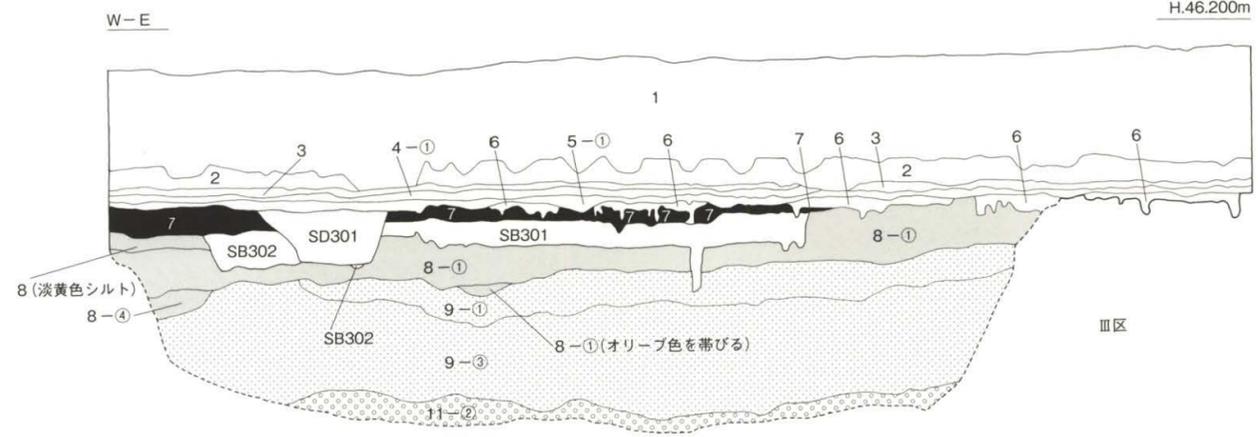


- | | | |
|--|---|---|
| <p>1 造成土</p> <p>2 耕作土(灰色土)</p> <p>3 床土(黄褐色土)</p> <p>4 中近世の包含層</p> <p>① 灰褐色土</p> <p>② ①層よりも灰色を強く帯びる</p> <p>5 中世の包含層</p> <p>① 明黄褐色土</p> <p>② ①層に灰色を帯びる</p> <p>6 古代の包含層</p> <p>黄灰色土</p> | <p>7 弥生の包含層</p> <p>黒褐色土</p> <p>8 地山</p> <p>① 明褐色土</p> <p>② ①層に比べ砂質が強く、粘性はあまりない</p> <p>③ ①層に3~10cm大の円礫を含む</p> <p>④ ①層に比べ鈍い褐色土</p> <p>⑤ ①層に比べ黄色の強い明黄褐色土</p> | <p>9~11 深掘トレンチ</p> <p>9-① 明褐色砂質土(2~5cm大の花崗岩円礫を含む)</p> <p>② 灰黄褐色砂質土(3~5cm大の円礫を含む)</p> <p>③ 褐灰色砂質土(3~5cm大の円礫を含む)</p> <p>10 灰黄褐色土</p> <p>① 細砂</p> <p>② 粗砂</p> <p>11 灰黄褐色砂礫層</p> <p>① 5~10cm大の円礫と粗砂である</p> <p>② ①層より円礫を多含する</p> |
|--|---|---|

第5図 I区全測図及び南壁断面土層図



- 1 造成土
- 2 耕作土(灰色土)
- 3 床土(黄褐色土)
- 4 中近世の包含層
- 4-① 灰褐色土
- 4-② ①層よりも灰色を強く帯びる
- 5 中世の包含層
- 5-① 明黄褐色土
- 5-② ①層に灰色を帯びる
- 6 古代の包含層
- 6 黄灰色土
- 7 弥生の包含層
- 7 黒褐色土
- 8 地山
- 8-① 明褐色土
- 8-② ①層に比べ砂質が強く、粘性はあまりない
- 8-③ ①層に3~10cm大の円礫を含む
- 8-④ ①層に比べ鈍い褐色土
- 8-⑤ ①層に比べ黄色の強い明黄褐色土
- 9~11 深掘りトレンチ
- 9-① 明褐色砂質土(2~5cm大の花崗岩円礫を含む)
- 9-② 灰黄褐色砂質土(3~5cm大の円礫を含む)
- 9-③ 褐灰色砂質土(3~5cm大の円礫を含む)
- 10 灰黄褐色土
- 10-① 細砂
- 10-② 粗砂
- 11 灰黄褐色砂礫層
- 11-① 5~10cm大の円礫と粗砂である
- 11-② ①層より円礫を多含する



第6図 II区・III区全測図及び南壁断面土層図

3. 調査概要

本調査では、弥生時代から中世までの遺構と遺物を検出した。遺構は、竪穴式住居址8棟、掘立柱建物址4棟、柵列1条、溝7条、土坑23基、柱穴78基、倒木痕1基、性格不明遺構5基である。これらの遺構は弥生時代後期と古代から中世のものである。

4. 弥生時代の遺構と遺物

第8層上面にて竪穴式住居址8棟、掘立柱建物址2棟、柵列1条、土坑9基、柱穴70基、性格不明遺構5基を検出した。

(1) 竪穴式住居址 (SB)

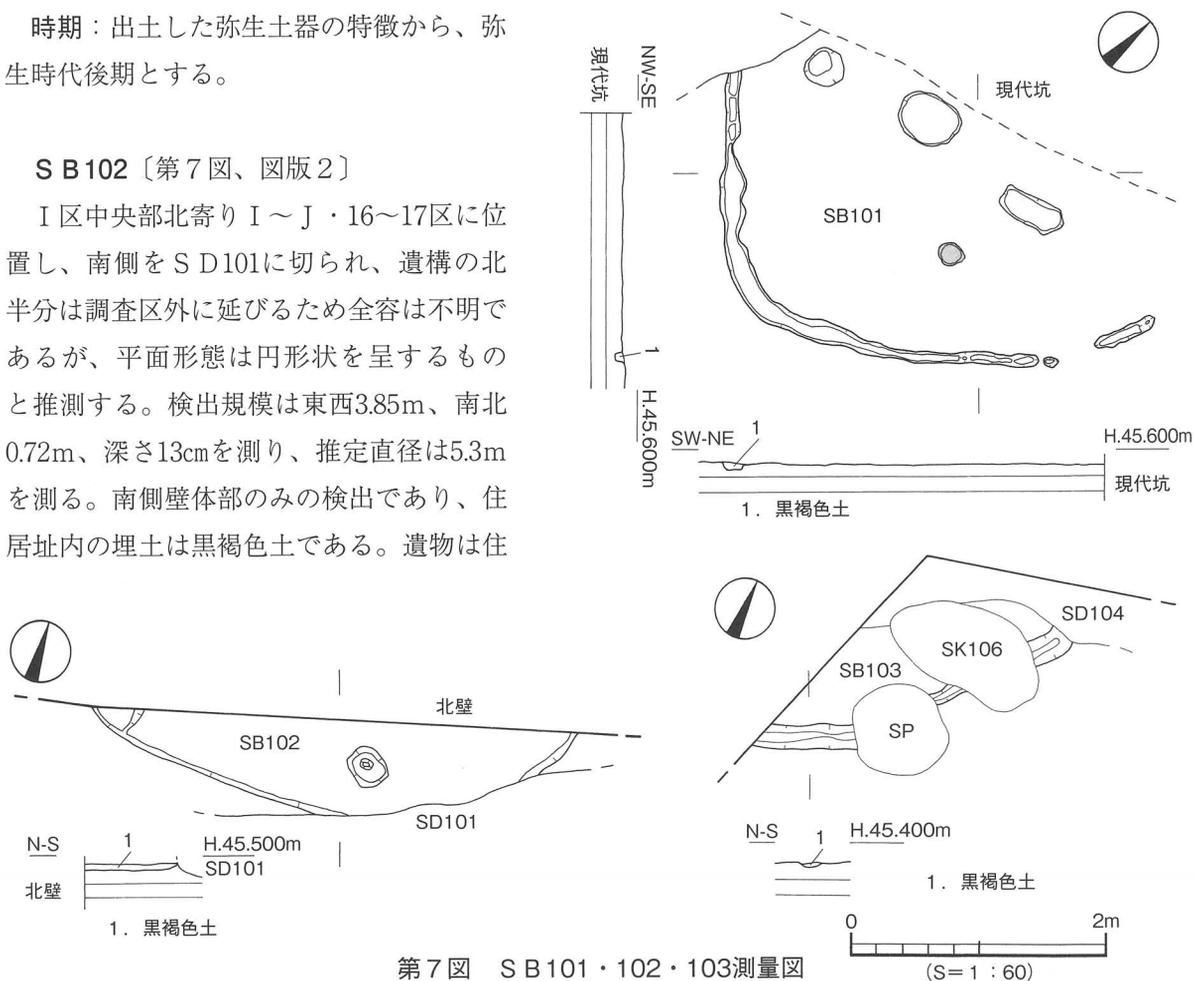
SB101 [第7図、図版2]

I区中央部北寄りH～I・15～16区に位置し、SD103に切られ、遺構の北半分は後世の削平を受け全容は不明である。住居址床面での検出であり、支柱穴1本分と周壁溝を検出した。平面形態は隅丸の方形状を呈するものと推測する。検出規模は東西3.9m、南北2.3m、周壁溝の幅8～19cm、深さ4～11cm、支柱穴(P1)は直径20cm、深さ38cmを測る。周壁溝と支柱穴の埋土は黒褐色土である。遺物は南西部の床面直上に弥生土器の甕片が僅かに出土するが図化には至らなかった。

時期：出土した弥生土器の特徴から、弥生時代後期とする。

SB102 [第7図、図版2]

I区中央部北寄りI～J・16～17区に位置し、南側をSD101に切られ、遺構の北半分は調査区外に延びるため全容は不明であるが、平面形態は円形状を呈するものと推測する。検出規模は東西3.85m、南北0.72m、深さ13cmを測り、推定直径は5.3mを測る。南側壁体部のみを検出であり、住居址内の埋土は黒褐色土である。遺物は住



第7図 SB101・102・103測量図

居址床面より浮いた状態で弥生土器片が僅かに出土するが図化には至らなかった。

時期：出土した弥生土器の特徴から、弥生時代後期とする。

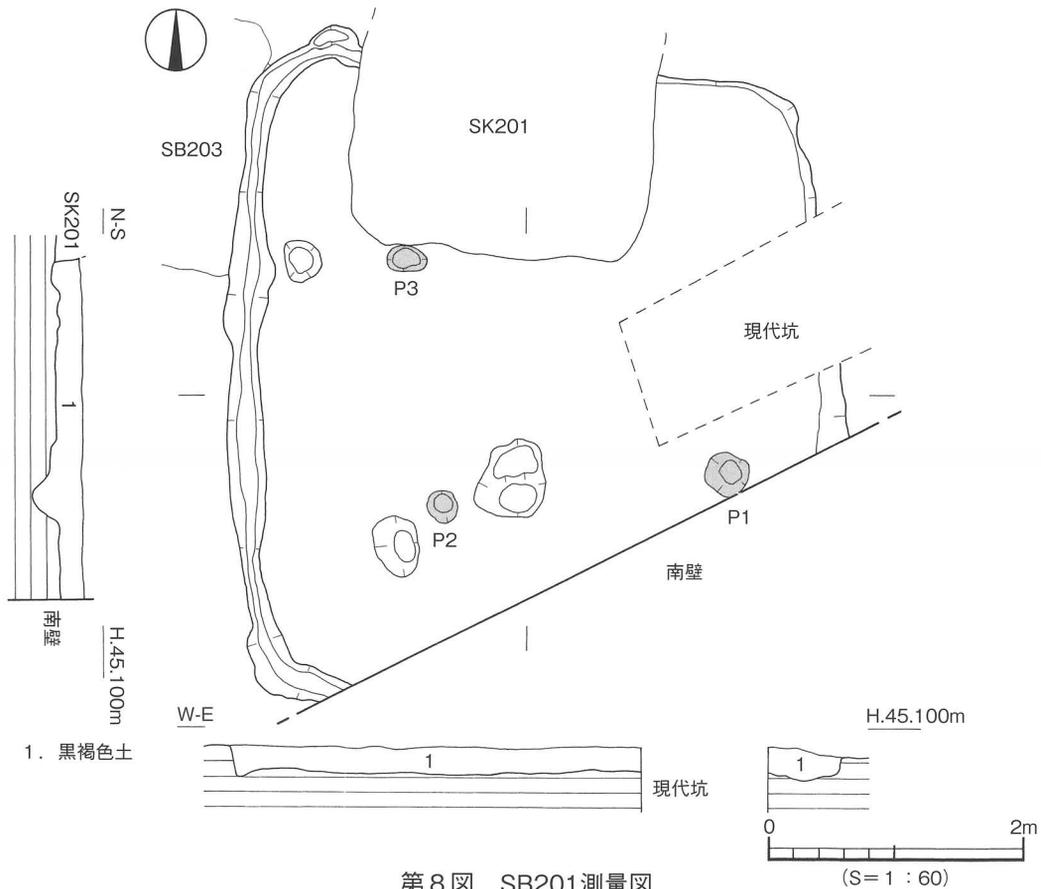
S B 103〔第7図〕

I区北西隅H～I・13区に位置し、北側をS D 104・S K 106・S Pに切られ、北・西側は調査区外に延びる。住居址床面での検出であり、周壁溝のみを検出した。平面形態は円形～多角形を呈するものと推測する。検出規模は東西0.7m、南北0.62m、周壁溝の幅10～18cm、深さ3～4cmを測る。周壁溝の埋土は黒褐色土である。遺物は南西部の床面直上に弥生土器の小片が僅かに出土する。

時期：出土した弥生土器の特徴から、本住居址の埋没時期は弥生時代後期末とする。

S B 201〔第8図、図版4〕

II区南西部のC～D・7区に位置し、S K 201に切られ、S B 203を切り、南側は調査区外に延びる。平面形態は方形を呈し、検出規模は東西4.8m、南北5.2m、深さ22cmを測る。内部施設は、支柱穴、周壁溝を検出した。支柱穴は3本分（P 1～3）を検出し、直径20～46cm、深さ2～48cmを測る。周壁溝は壁体に沿って、西側部だけ検出した。幅16～28cm、深さ2～7cmを測る。住居址内の埋土は黒褐色土の単一層である。遺物は住居址全体より散在して出土したが、ほとんどの土器が床面より浮いた状態で出土した。器種は弥生土器の甕・壺・鉢・高坏・ミニチュア土器に混じり石鏃や石庖丁などが出土する。住居址内の北東部・南西部・北西部の床面から炭化材が部分的にかたまって出土してお

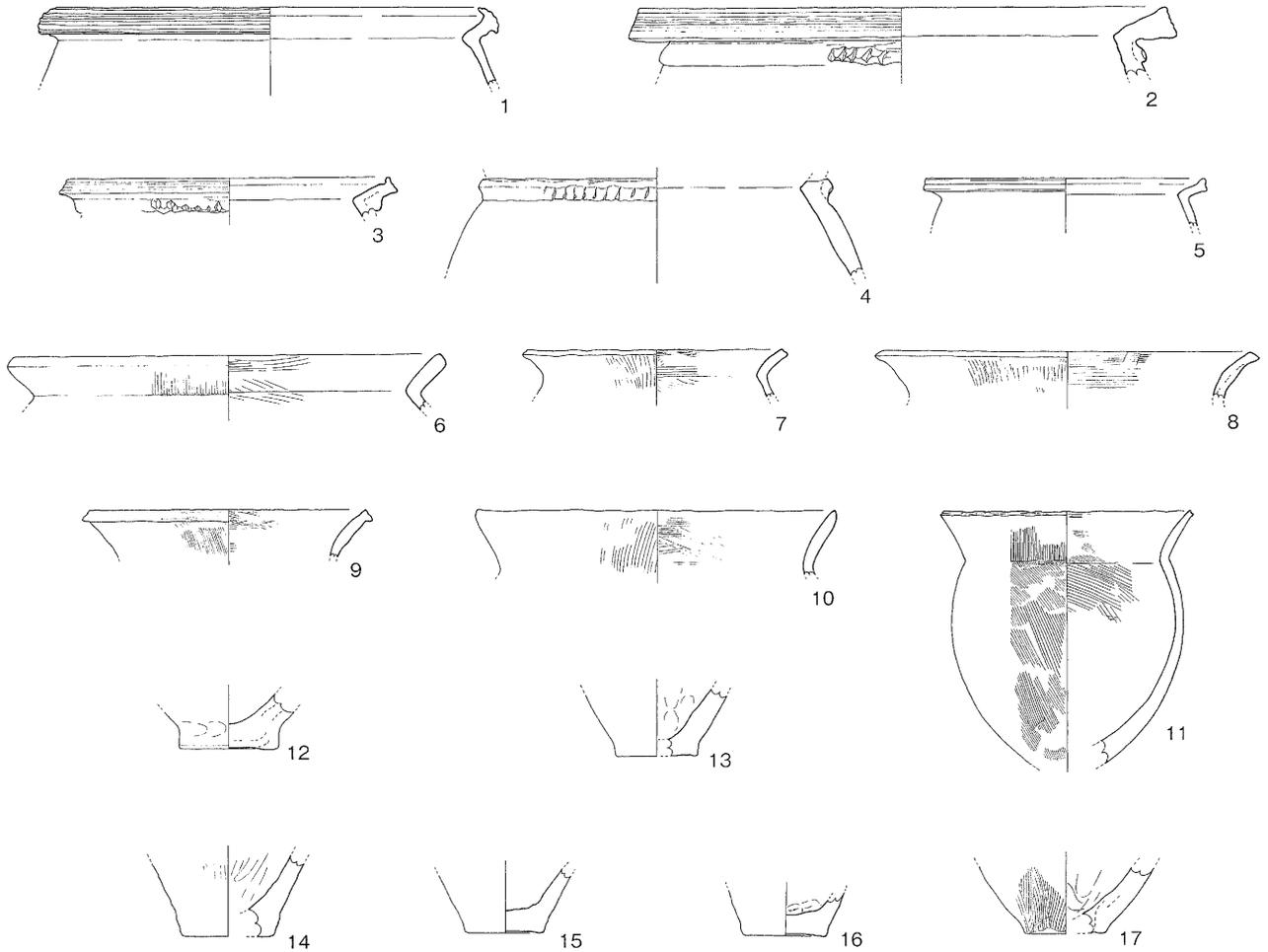


第8図 SB201測量図

り、それらは壁体の内側からやや離れた位置で、壁体に対してほぼ直角方向に検出した。

出土遺物〔第9・10図、図版13〕

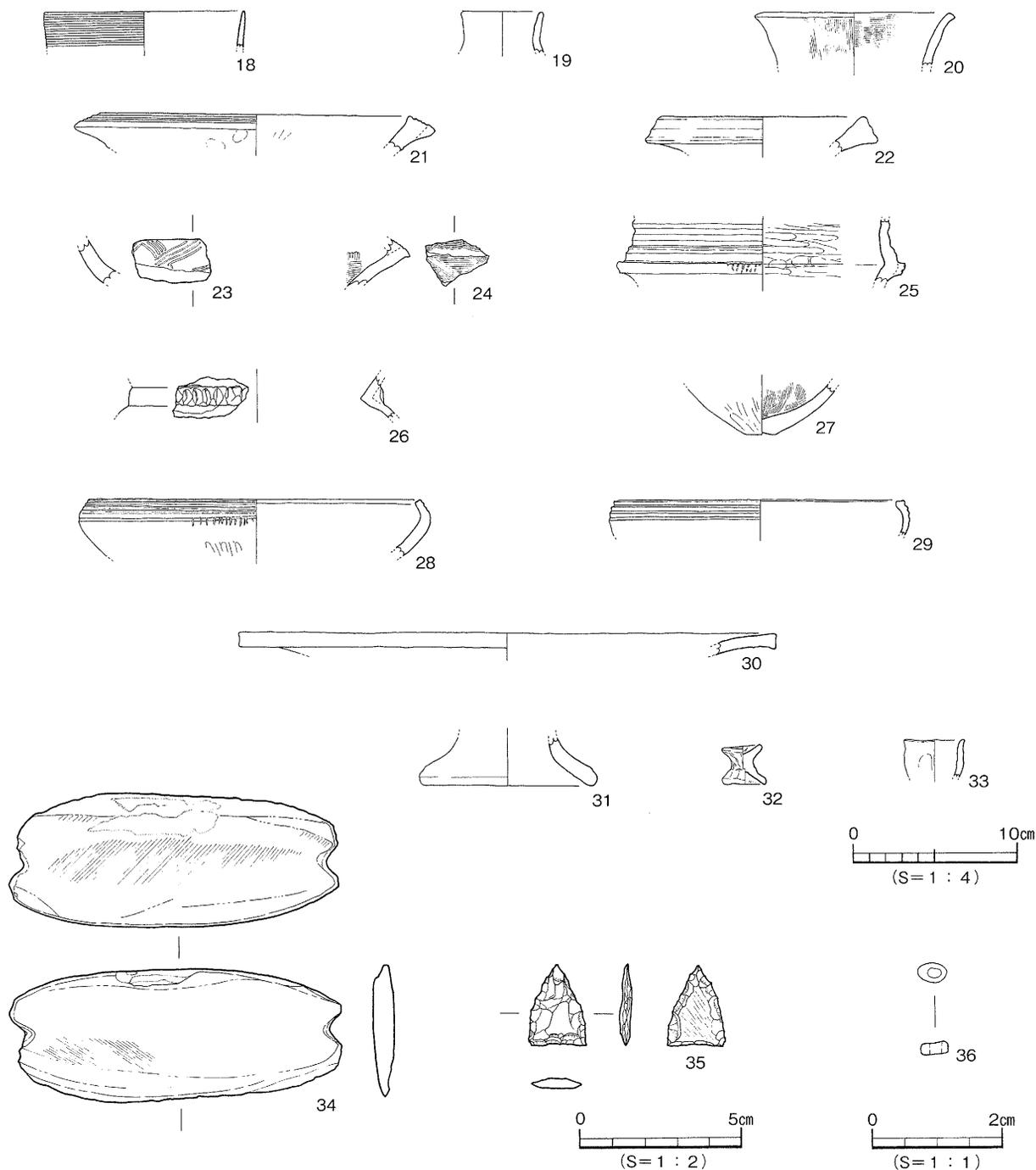
1～17は甕である。1～11は口縁部である。1は口縁端部が上下に拡張され端面に5条の擬凹線文が施される。2～4は頸部に刻目突帯が貼り付き、口縁端面に2は4条、3は2条の擬凹線文が施される。5は「く」字状の口縁部に、端部は凹みをもつ。6・7は「く」字状の口縁部に、端面は6が平らな面をなし、7は僅かに凹む。8は緩やかに外反する口縁部の端部は平らな面をなす。9・10は外反する口縁部に9は外方にやや肥厚され、10は尖り気味である。11は肩部の張りが弱く、口縁部は緩やかに外反し、端部はやや凹む。内外面共にハケ目調整が施される。12～17は底部である。12・13は小さく突出する平底の底部をもつ。14～16は平底の底部より外反気味に立ち上がり、14は内外面にミガキが施される。17は平底の底部より、内湾気味に立ち上がる。外面にハケ目調整、内面にナデ調整が施される。18～27は壺である。18は直口壺で、直立気味の口縁部外面には沈線文が施される。19は長頸壺で、やや外反する口縁部の内外面はナデ調整が施される。20は外反する口縁部の内外面はハケ目調整が施される。21・22はやや肥厚された口縁端部に21は4条、22は2条の擬凹線文が施される。23～25は複合口縁壺である。23は楡描き斜格子文、24は楡描き波状文、25は直立気味の拡張部に凹線文が施される。26は頸部に押圧による突帯文が貼り付く。27は平底の底部より内湾して立ち上がり、



第9図 S B201出土遺物実測図(1)

0 10cm
(S=1:4)

外面はミガキ調整、内面はハケ目調整が施される。28~30は高坏の坏部である。28は内湾する口縁部をもち端面が内傾し、口縁部から屈曲部外面に4条の凹線文が施される。29は内湾する口縁部に端面は水平な面をなす。口縁部外面に3条の凹線文が施される。30は大きく外反する口縁部で、端部はやや上下方に肥厚され、端面は平らな面をなす。31は台付き鉢の脚部である。外反気味の脚部に裾部は緩やかに屈曲し、端部は丸く収まる。32・33はミニチュア製品である。32は口縁部・脚部が外反する鼓形を呈する。33は緩やかに内湾する胴部に、口縁部は短く外反気味である。34は石庖丁である。刃部の研磨は両面にわたって丁寧に磨かれ、両端には研磨による挟りがつく。緑色片岩製。35はサヌカイト



第10図 SB201出土遺物実測図(2)

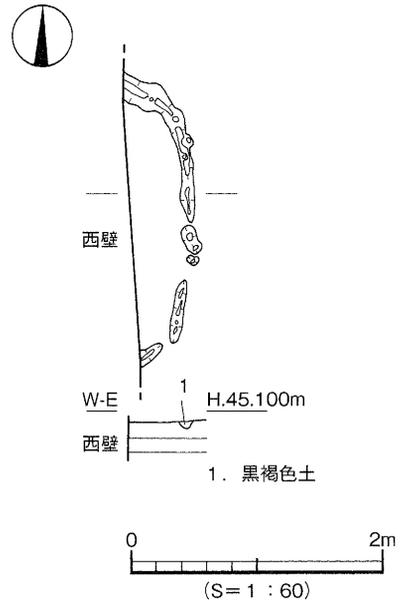
製の打製石鏃である。36はガラス小玉で、色調は青色である。

時期：出土した弥生土器の特徴から、弥生時代後期後葉とする。

S B 202〔第11図〕

Ⅱ区北西部のF・6区に位置し、床面での検出である。遺構の西半は調査区外に延びるため全容は不明であるが、平面形態は隅丸方形を呈するものと推測する。周壁溝のみを検出し、検出規模は東西0.53m、南北2.35m、周壁溝の幅9～20cm、深さ2～5cmを測る。周壁溝の埋土は黒褐色土。遺物は周壁溝内から弥生土器の胴部片が僅かに出土する。

時期：時期決定しうる遺物に乏しく、埋土や遺構形態・配置状況がS K 206と類似していることから、弥生時代後期中葉とする。



第11図 S B 202測量図

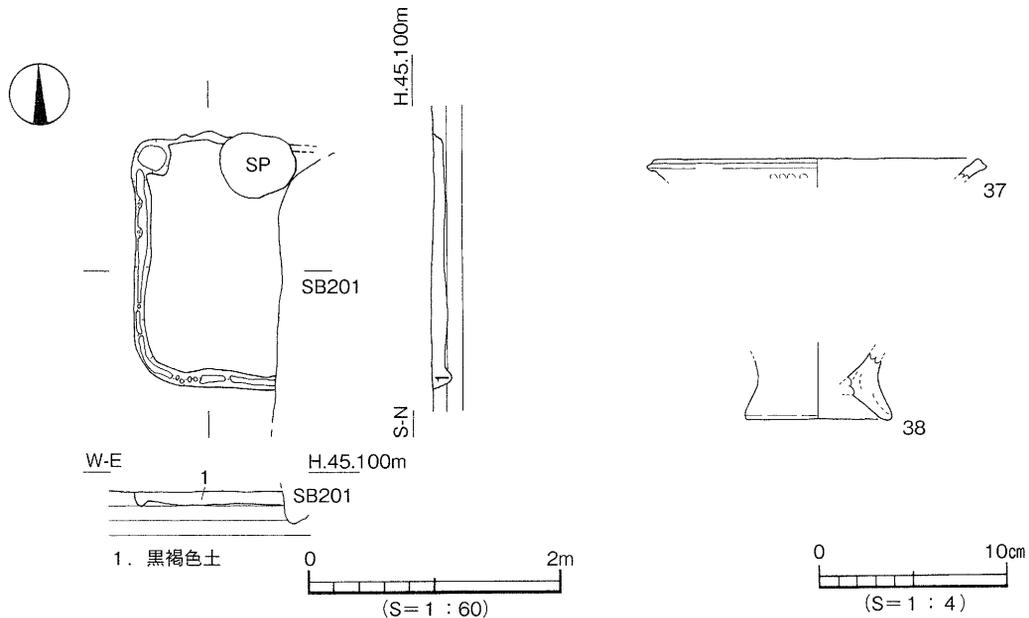
S B 203〔第12図〕

Ⅱ区南西部のD～E・6～7区に位置し、S B 201・S Pに切られる。遺構の東半はS B 201に切られているため全容は不明であるが、平面形態は方形を呈するものと推測する。断面形は皿状を呈し、基底面は平らな面をなす。規模は東西1.2m、南北2m、深さ12cmを測る。南側と西側の壁体において周壁溝を検出する。周壁溝の幅7～13cm、深さ4cmを測る。埋土は黒褐色土の単一層である。遺物は上位から中位にかけ弥生土器の甕・壺片が出土する。

出土遺物〔第12図〕

37・38は甕である。37は口縁端部が外方にやや肥厚され、端面は凹む。38は上げ底でくびれを持つ底部。

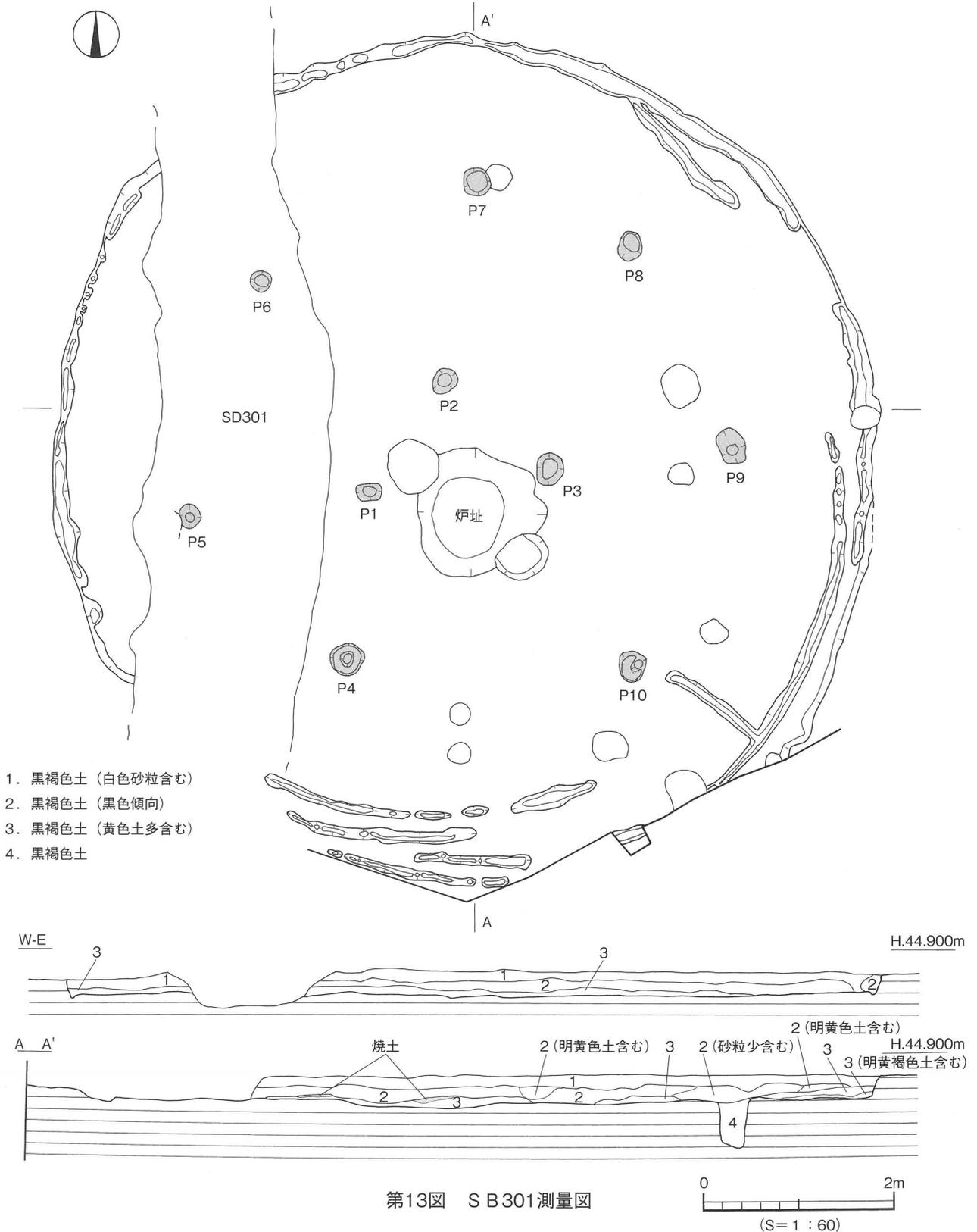
時期：出土した弥生土器の特徴から、弥生時代後期中葉とする。



第12図 S B 203測量図及び出土遺物実測図

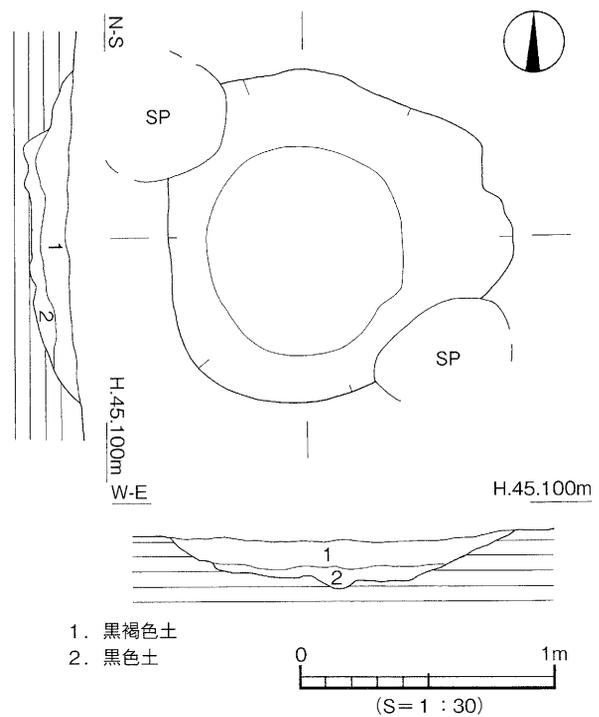
S B301 [第13図、図版11・12]

Ⅲ区南西部のA～C・2～3区に位置し、SD301に切られる。平面形態は円形を呈する。検出規模は東西8.6m、南北8.9mの床面積49.12㎡、深さ35cmを測る。内部施設は、支柱穴、周壁溝、炉址、



第13図 S B301測量図

貼り床を検出した。主柱穴は2重構造であり、中央部に3本分（P 1～3）と壁体部の7本分（P 4～10）を検出した。直径22～45cm、深さ11～60cmを測る。貼り床は、住居址内の浅い凹みで検出する。周壁溝は壁体に沿ってほぼ全周しており、幅8～26cm、深さ1～6cmを測り、周壁溝内から直径5～10cmで断面形が窄まる杭状の小穴も検出した。炉址は住居址内の中央部よりやや南寄りに位置しており、平面形態は不整楕円形、断面形態はレンズ状を呈する。規模は長軸1.37m、短軸1.32m、深さ19cmを測る。埋土は黒褐色土の単一層で、遺物は基底面より浮いた状態で、弥生土器の破片が少量出土する。埋土は黒褐色土で基底面付近には黒色土に僅かに炭を含んでいる。また、炉の北横には焼土も一部検出した。周壁溝は南側において30～40cm内側を巡るものを3条検出した。住居址内の埋土は黒褐色土



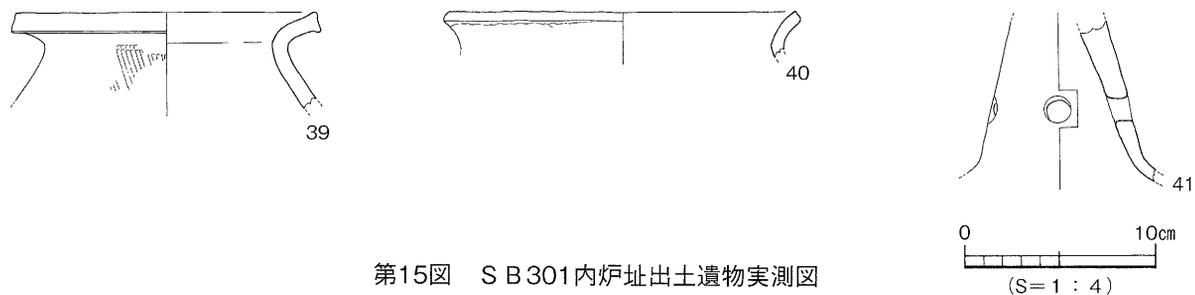
第14図 S B 301内炉址測量図

で2層に分層でき、下層は上層より黒色傾向にある。貼り床部では黒褐色土に黄色土を多含する土が凹みに薄く貼られている。遺物は弥生土器の甕・壺・鉢・高坏・支脚・ミニチュア土器・大型の土錘・石庖丁・石鏃・鉄鏃・ガラス製小玉などがあり、住居址全体より散在して出土するが、完形に近い土器や、土製品、石製品、鉄製品、ガラス製品などは床面付近で出土した。

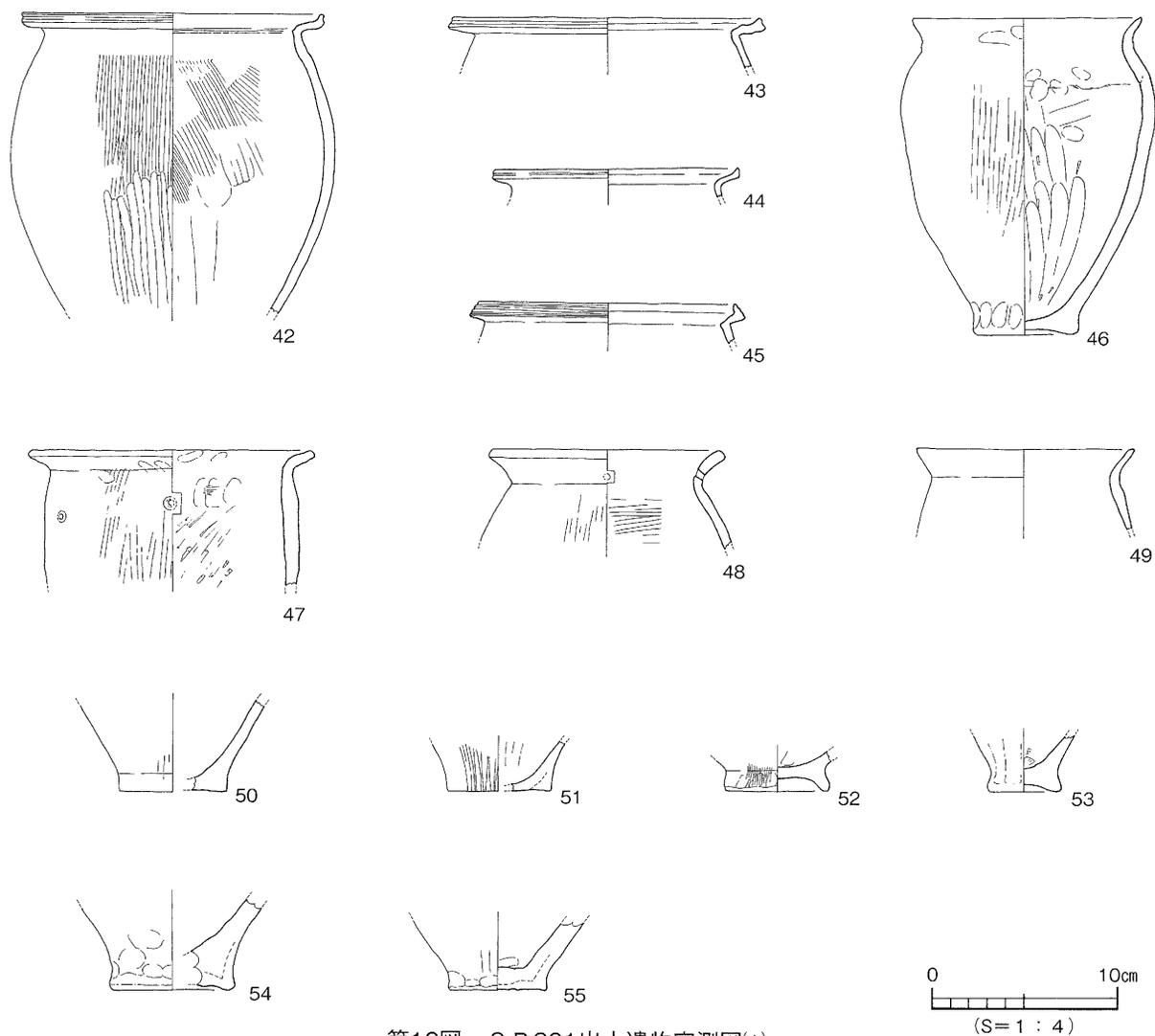
出土遺物〔第16～19図、図版14・15〕

42～55は甕である。42は口縁部は上方に肥厚され、端面に凹みをもつ。内外面上半は横ナデ、ハケ目調整、下半の外表面はミガキ、内表面はナデ調整が施される。43～45は口縁端部は上方に肥厚され、43・44は端面が凹み、45は端面に沈線文が3条施される。46はやや上げ底の底部に肩部に弱い張りをもつ。外表面にハケ目、内表面にナデ調整が施される。47は頸部のやや下方に竹管文が施される。48は口縁部に円孔、口縁内外面に横ナデ、胴部内外面にミガキ調整が施される。49は緩やかに「く」字状を呈した口縁部をもつ。50・51は平底の底部外表面、51は内外面にミガキ調整が施される。52・53は上げ底の底部にくびれをもつ。54・55は平底の底部外表面にナデ調整が施される。56～67は壺である。56～59は口縁端部が肥厚され、56・57は端面に3条の擬凹線文、58は斜格子文、59は楡描波状文が巡る。60は上げ底の底部外表面、内表面の胴部下位にナデ調整が施される。61は拡張部に波状文が巡り、内外表面にハケ目、横ナデ調整が施される。62は垂下する口縁端部の端面に波状文が巡る。63・64は頸部に斜格子の刻目突帯が巡る。65は球状の胴部外表面はミガキ、内表面はナデ調整が施される。66は平底の底部より、内湾気味に立ち上がる。67は平底でボタン状の底部。68～71は鉢である。68は上げ底の底部はくびれをもち、内外表面にハケ目、ナデ調整が施される。69は外表面にハケ目調整が施される。70はやや上げ底、71は平底の底部に、くびれをもつ。72～83は高坏である。72・73は口縁部が短く外反し、74は坏部内外面にミガキ調整が施される。75は大きく外反する口縁部の内外面に、横ナデ調整が施され

る。77は脚柱上部に6条の沈線文、その下に矢羽根透かしが施される。78・80~82は、脚裾部に3~5条の沈線文が巡り、80は脚柱下部に山形文、82は矢羽根透かしが施される。79は脚端面に凹線文が巡る。83は脚柱下部の4方向に円孔が施される。84~86は支脚である。外反する脚部の内外面にナデ調整が施される。87・88は器台である。87は柱部に円孔が施される。88は受端部に3条の沈線文と円形浮文が施される。89はミニチュア土器である。鼓形の器形はナデ・ミガキ調整が施される。90は土製の紡錘車で、直径5.43cm、厚み0.68cm、重さ25gを測る。円孔は両面からの焼成前穿孔で径8~10

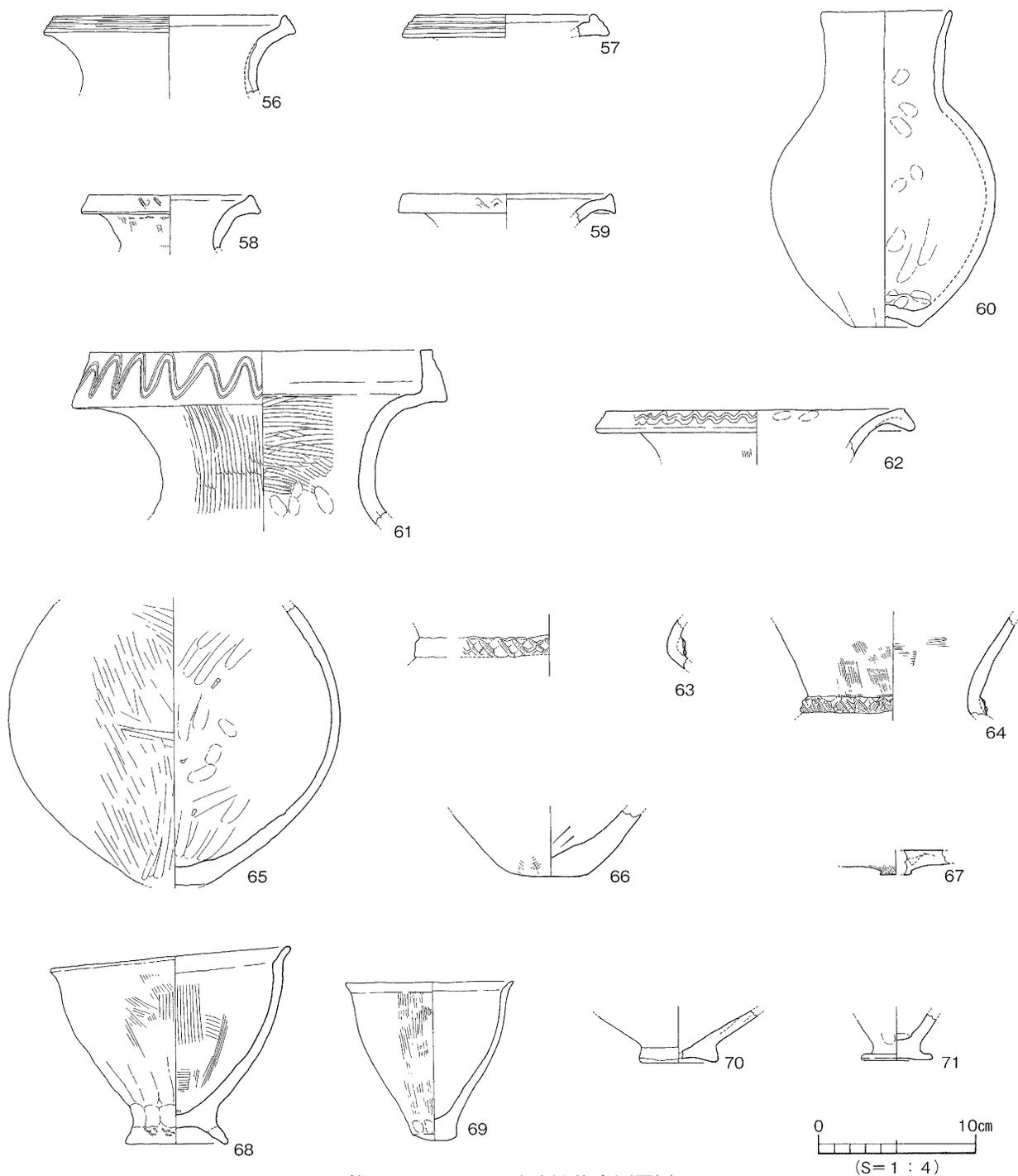


第15図 SB301内炉址出土遺物実測図



第16図 SB301出土遺物実測図(1)

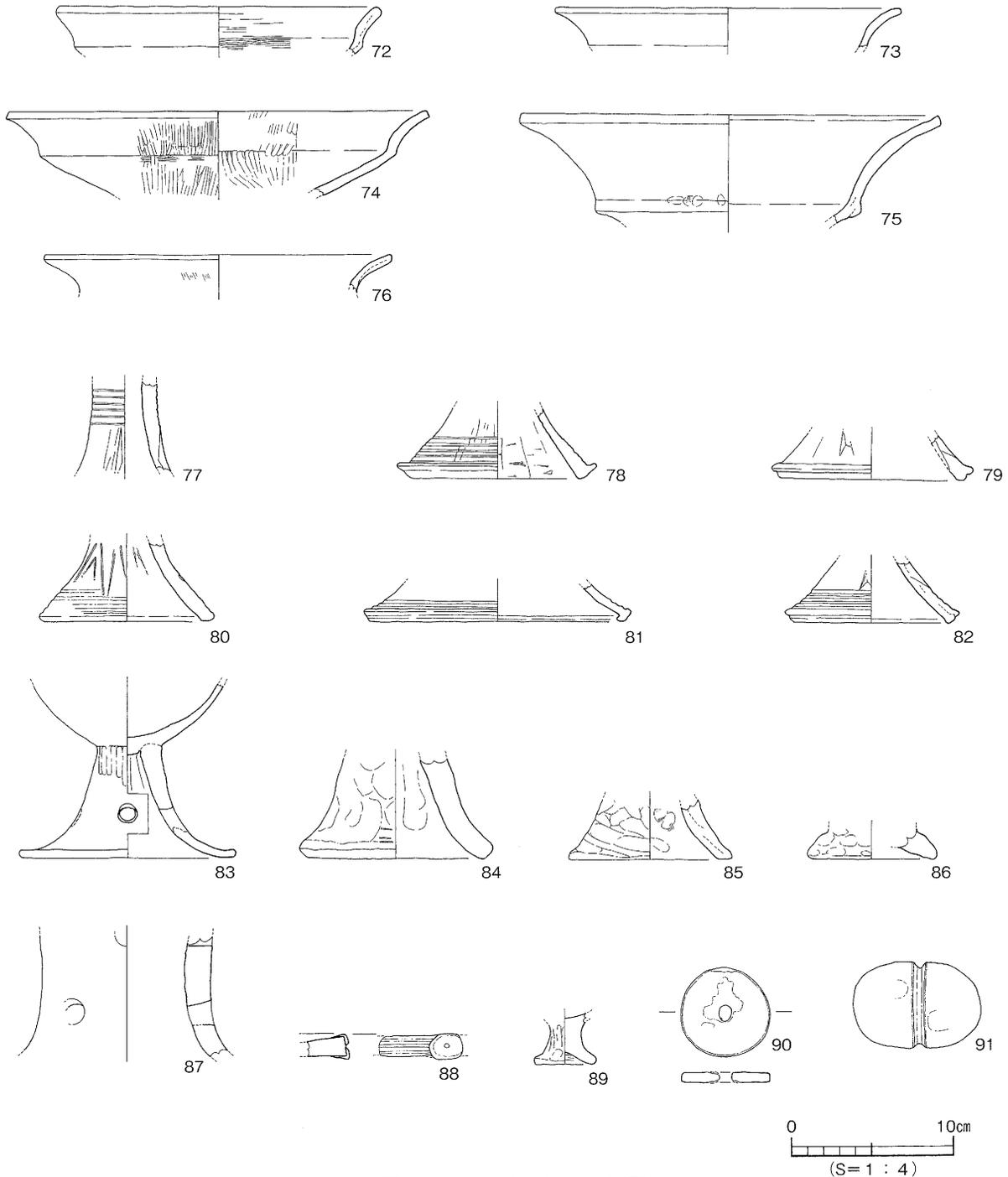
mmを測る。91は土錘である。長球形で長軸の中央部に凹みが巡り、ナデ調整が施される。長さ7.84cm、厚み5.35~5.43cm、重さ229.2gを測る。92~95は石庖丁である。92は欠失品で、a面に刃部をもつ。結晶片岩の磨製である。93~95は緑色片岩製であり、93は未成品で、片側の側部に弱い抉りをもつ打製である。94・95は磨製の完存品であり、刃部は扁両刃で、両面二孔の穿孔となる。96・97はスクレイパー状石器の完存品であり、96は両面と側面は磨かれ、側面は面をなし、先端部に刃部をもつ。緑色片岩製である。97は打製品で、両面に刃をもつ。黒曜石（姫島産）である。98はサヌカイト製の



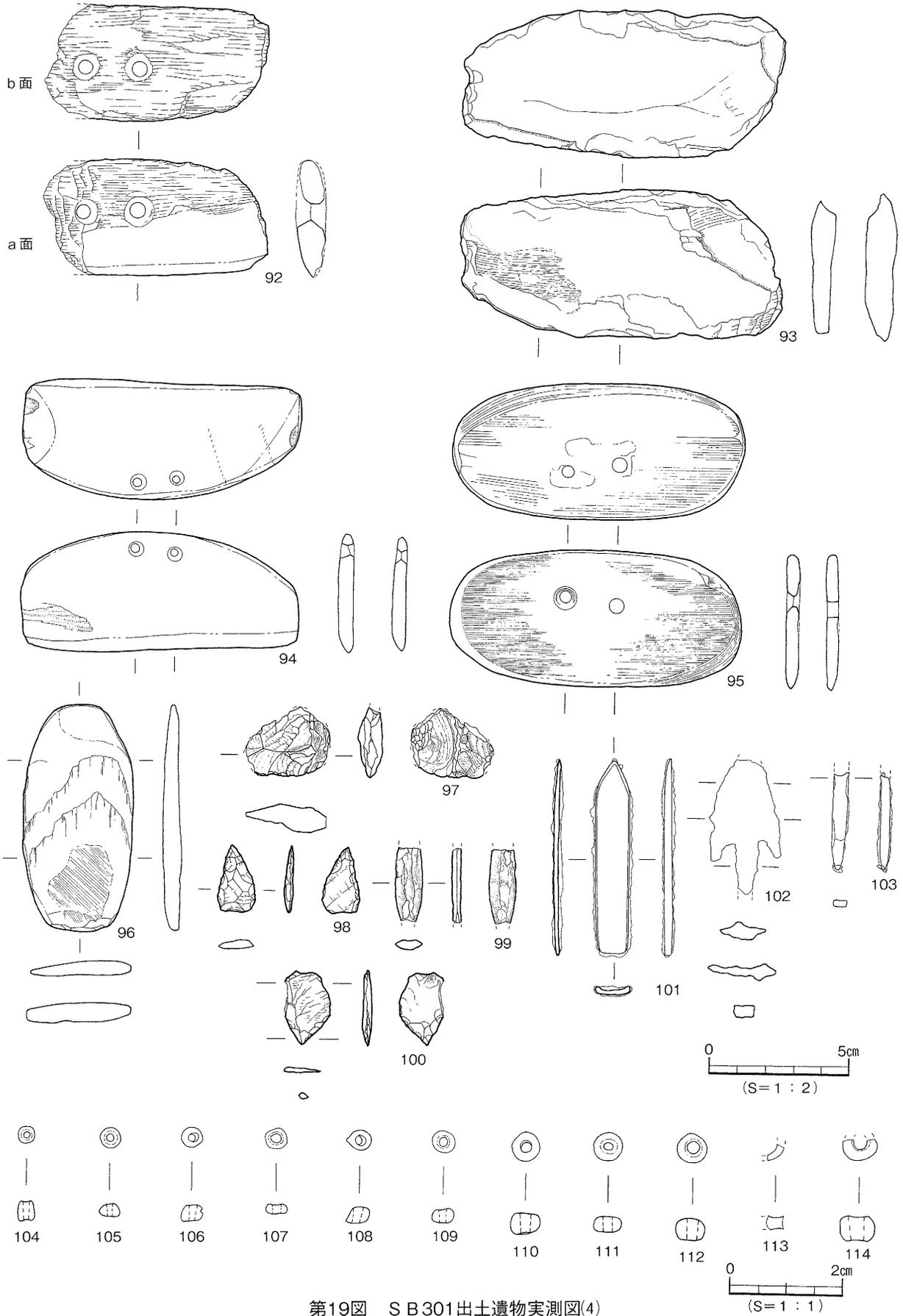
第17図 S B 301出土遺物実測図(2)

打製石鏃である。99は綠色片岩製の磨製石鏃であり、両端が欠失する。100は打製の石錐であり、撮み部から先端部にかけて両面に刃が付き、先端部がやや突出して、端部が尖る。サヌカイト製である。101は鉄製の鉞の完存品であり、横断面は緩やかな裏すきをもち、刃部は先端がやや薄くなる。102・103は鉄鏃であり、102は有茎鏃で、両端は欠失する。103は横断面が四角形の茎部である。104～114はガラス製小玉で、直径が3～6.3mm、厚み1.7～4.5mm、孔径1～3mm、色調は青色である。

時期：出土した弥生土器の特徴から、弥生時代後期後葉とする。



第18図 S B301出土遺物実測図(3)

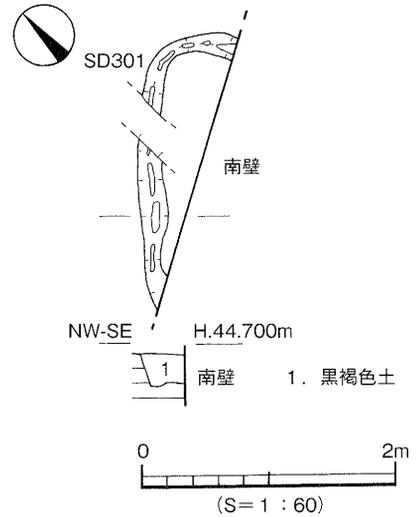


第19图 SB301出土遺物実測图(4)

S B 302〔第20図〕

Ⅲ区南西部A・2区に位置し、S D 301に切られ、南側は調査区外に延びる。壁体と周壁溝を検出した。残存状況から平面形態は隅丸方形を呈するものと推測する。検出規模は東西2.22m、南北0.61m、深さ27cm、周壁溝の幅12~21cm、深さ2~5cmを測る。埋土は黒褐色土である。遺物は弥生土器片が僅かに出土するが図化には至らなかった。

時期：出土した弥生土器の特徴から、本住居址の埋没時期は弥生時代後期後葉とする。



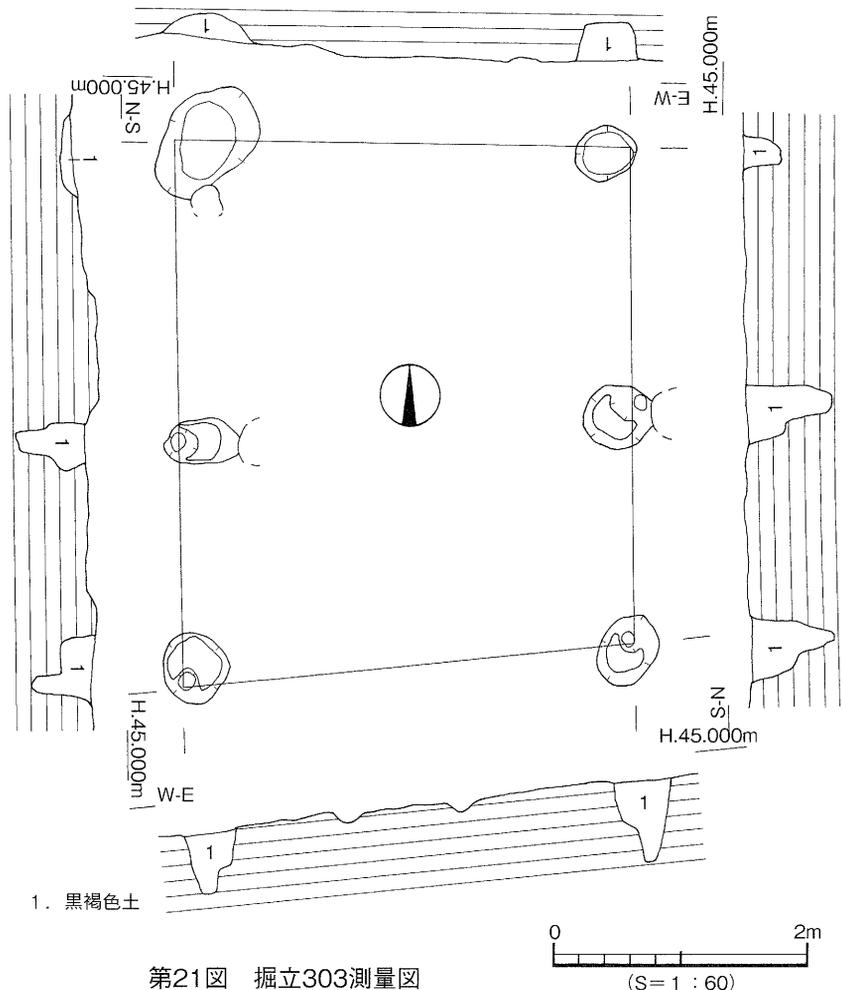
第20図 S B 302測量図

(2) 掘立柱建物址 (掘立)

掘立303〔第21図〕

Ⅲ区北側のC~D・3区に位置し、S K 301・S X 304に切られる。2間×1間の南北棟で、主軸はN-1°-Wとほぼ真北を指向する。規模は桁行3.9~4.2m、柱間1.9~2.2m、梁行3.4~3.5m、柱穴の平面形態は円形を呈し、直径35~58cm、深さ28~65cmを測る。埋土は黒褐色土である。遺物は弥生土器の小片が僅かに出土する。

時期：時期決定しうる遺物に乏しく、埋土がS B 301と同一なことから弥生時代後期後葉とする。



第21図 掘立303測量図

掘立304〔第22図〕

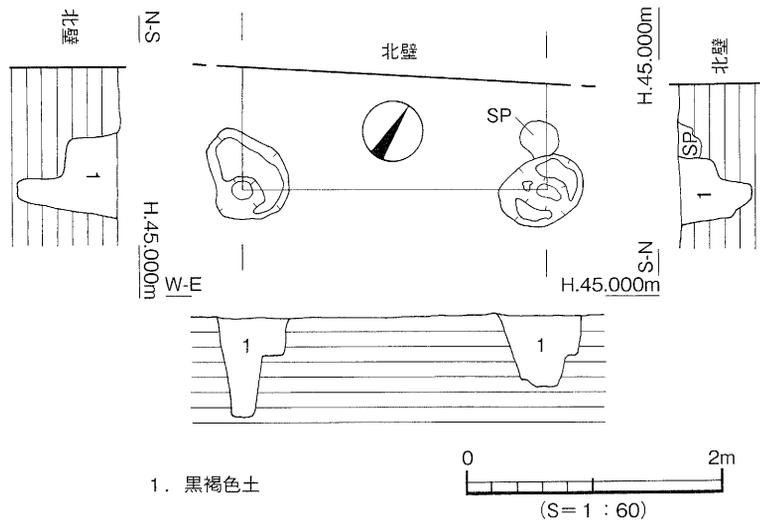
Ⅲ区北東部のE・4区に位置する。東西に1間分だけの検出である。主軸はN-121°-Wと東西方向を指向する。規模は、柱間2.4m、柱穴の平面形態は円形を呈し、直径53~76cm、深さ56~78cmを測る。埋土は黒褐色土である。遺物は弥生土器の小片が僅かに出土する。

時期：時期決定しうる遺物に乏しく、埋土がS B 301と同一なことから弥生時代後期後葉とする。

(3) 柵列 (SA)

SA 101

I区中央部南側のH・15～16区に位置し、東側は調査区外へ延びる。東西方向に3間分を検出し、主軸はN-96°-Eとほぼ真北に対し直角方向を指向する。規模は検出長4.6m、柱間1.4～1.7m、柱穴の平面形態は円形～楕円形を呈し、直径24～46cm、深さ8～16cmを測る。埋土は黒褐色土である。遺物は弥生土器の小片が僅かに出土する。



第22図 掘立304測量図

時期：時期決定しうる遺物に乏しく、埋土から弥生時代としか判らない。

(4) 土坑 (SK)

SK 202

II区中央部のE～F・8区に位置し、SD 202・SPに切られる。平面形態は隅丸長方形、断面形態は皿状を呈し、基底面は平らな面をなす。規模は長軸2.66m、短軸1.96m、深さ4cmを測る。埋土は黒褐色土の単一層で、遺物は弥生土器片が少量出土する。

時期：時期決定しうる遺物に乏しく、埋土から弥生時代としか判らない。

SK 203

II区中央部東側のF・8区に位置し、SD 201に切られる。平面形態は楕円形、断面形態は逆台形状を呈し、基底面はやや凹む。規模は長軸0.9m、短軸0.56m、深さ18cmを測る。埋土は極暗褐色土の単一層で、遺物は基底面より浮いた状態で、弥生土器片が少量出土する。

時期：時期決定しうる遺物に乏しく、埋土から弥生時代としか判らない。

SK 205

II区中央部北側のF～G・7区に位置し、SK 204に切られる。平面形態は楕円形、断面形態は皿状を呈し、基底面は平らな面をなす。規模は長軸2.03m、短軸1.55m、深さ6cmを測る。埋土は黒褐色土の単一層で、遺物は弥生土器が僅かに出土する。

時期：時期決定しうる遺物に乏しく、埋土から弥生時代としか判らない。

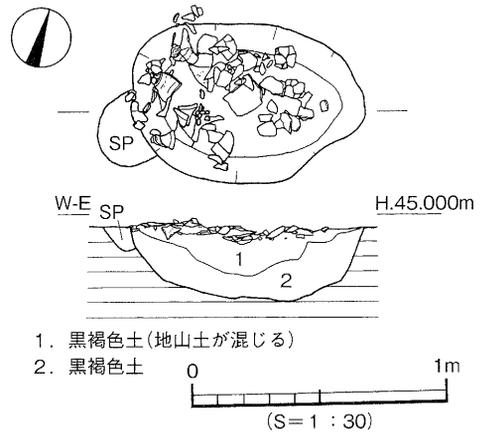
SK 207 [第23図、図版6]

II区南西部のE・7区に位置し、柱穴を切る。平面形態は楕円形、断面形態は舟底形を呈す。規模は長軸0.92m、短軸0.62m、深さ24cmを測る。埋土は黒褐色土で、上層には明褐色土の地山土が混じる。遺物は上層から密集した状態で出土しており、弥生土器の甕・壺・支脚が出土する。

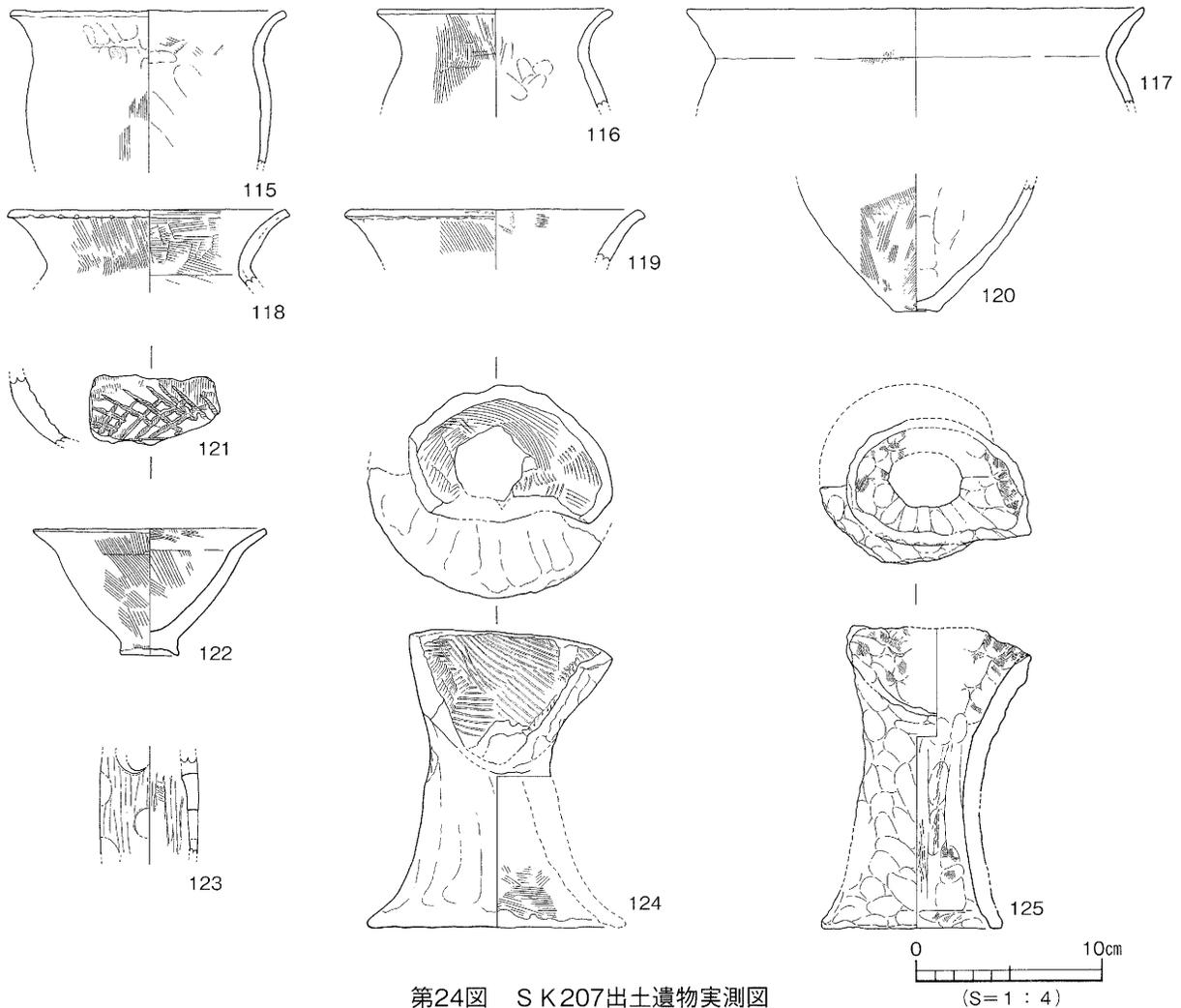
出土遺物〔第24図、図版13〕

115～120は甕である。115・116は肩部の張りが弱い。115は内外面共にハケ目調整、116は外面はハケ目調整、内面はナデによる調整が施される。117～119の口縁部は外反する。118・119の端部は平らな面をなし、外方が僅かに肥厚される。内外面共にハケ目調整が施される。120はやや上げ底の底部で、胴部外面はハケ目調整、内面はナデによる調整が施される。121は複合口縁壺の拡張部で斜格子文を施す。122は鉢で、上げ底の底部に口縁部は外上方にのびる。内外面はハケ目調整が施される。123は器台で、直立した胴部に円孔が施される。124・125は支脚で、受部が傾斜し、中空である。124は外面はナデ調整、内面はハケ目調整、125は内外面共にナデ調整が施される。

時期：出土した弥生土器の特徴から、弥生時代後期後葉とする。



第23図 SK 207測量図



第24図 SK 207出土遺物実測図

S K 208

Ⅱ区南西部のE・6～7区に位置する。平面形態は長方形、断面形態は皿状を呈し、基底面は平らな面をなす。規模は長軸1.6m、短軸1.3m、深さ15cmを測る。埋土は黒褐色土の単一層で遺物は弥生土器の甕・壺に混じり、土製の紡錘車が出土するが図化に至らなかった。

時期：出土した弥生土器の特徴から、弥生時代後期後葉とする。

S K 209

Ⅱ区南西部のE・7区に位置し、S K 201に切られる。平面形態は方形、断面形態は台形状を呈し、基底面は平らな面をなす。規模は長軸0.77m、短軸0.33m、深さ26cmを測る。埋土は黒褐色土の単一層で、遺物は上層から中層にかけ、弥生土器の小片が僅かに出土する。

時期：時期決定しうる遺物に乏しく、埋土から弥生時代としか判らない。

S K 303〔図版10〕

Ⅲ区南東部のC・4区に位置し、掘立302に切られる。平面形態は長方形、断面形態は逆台形状を呈し、基底面はほぼ平らな面をなす。規模は長軸1.62m、短軸0.62m、深さ26cmを測る。埋土は上層が黒褐色土で、下層は上層に灰色を帯びる。遺物は弥生土器の小片が僅かに出土する。

時期：時期決定しうる遺物に乏しく、埋土から弥生時代としか判らない。

S K 304

Ⅲ区中央部のC～D・3区に位置する。平面形態は長方形、断面形態は皿状を呈し、基底面はほぼ平らな面をなす。規模は長軸1.22m、短軸0.84m、深さ13cmを測る。埋土は黒褐色土で一部灰色や浅黄橙色を帯びる。遺物は基底面より浮いた状態で、弥生土器の破片が少量出土する。

時期：時期決定しうる遺物に乏しく、埋土から弥生時代としか判らない。

S K 305

Ⅲ区北東部のD・4区に位置し、柱穴に切られる。平面形態は不整形、断面形態は皿状を呈し、基底面はほぼ平らな面をなす。規模は長軸1.57m、短軸1.27m、深さ9cmを測る。埋土は黒褐色土の単一層で、遺物は基底面より浮いた状態で、弥生土器の破片が少量出土する。

時期：時期決定しうる遺物に乏しく、埋土から弥生時代としか判らない。

(5) 性格不明遺構 (S X)

S X 301

Ⅲ区西側のB・1～2区に位置し、S B 301に切られる。平面形態は不整楕円形、断面形態はレンズ状を呈し、規模は長軸1.4m、短軸0.9m、深さ12cmを測る。上面から基底面にかけて2～13cm大の礫を密集した状態で検出した。埋土は黒褐色土の単一層で、遺物は基底面より浮いた状態で、弥生土器の小片が僅かに出土する。

時期：時期決定しうる遺物に乏しく遺構の切り合いから弥生時代後期後葉以前とする。

5. 古代の遺構と遺物

第8層上面にて土坑を1基検出した。

(1) 土坑 (SK)

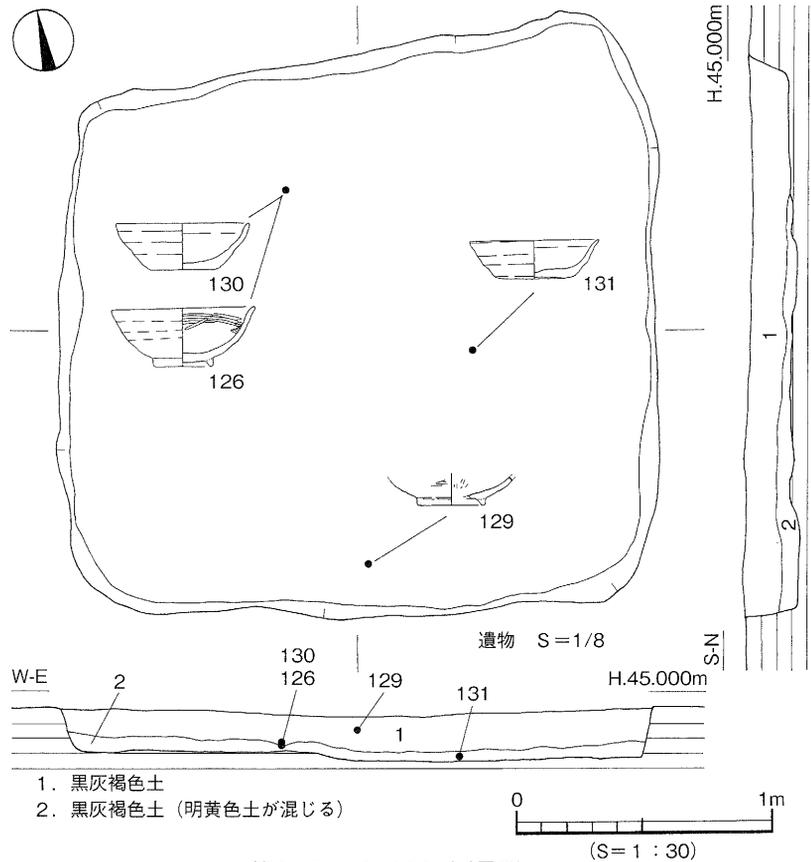
SK201〔第25図、図版5〕

Ⅱ区南西部のD～E・7区に位置し、SB201・SK209を切る。平面形態は方形、断面形態は皿状を呈し、基底面は平らな面をなす。規模は東西・南北ともに2.35m、深さ18cmを測る。埋土は黒灰褐色土で下層は明黄色土が混じる。遺物は土師器の坏・皿に混じり、基底面から土師器壺が据えられた状態で出土する。

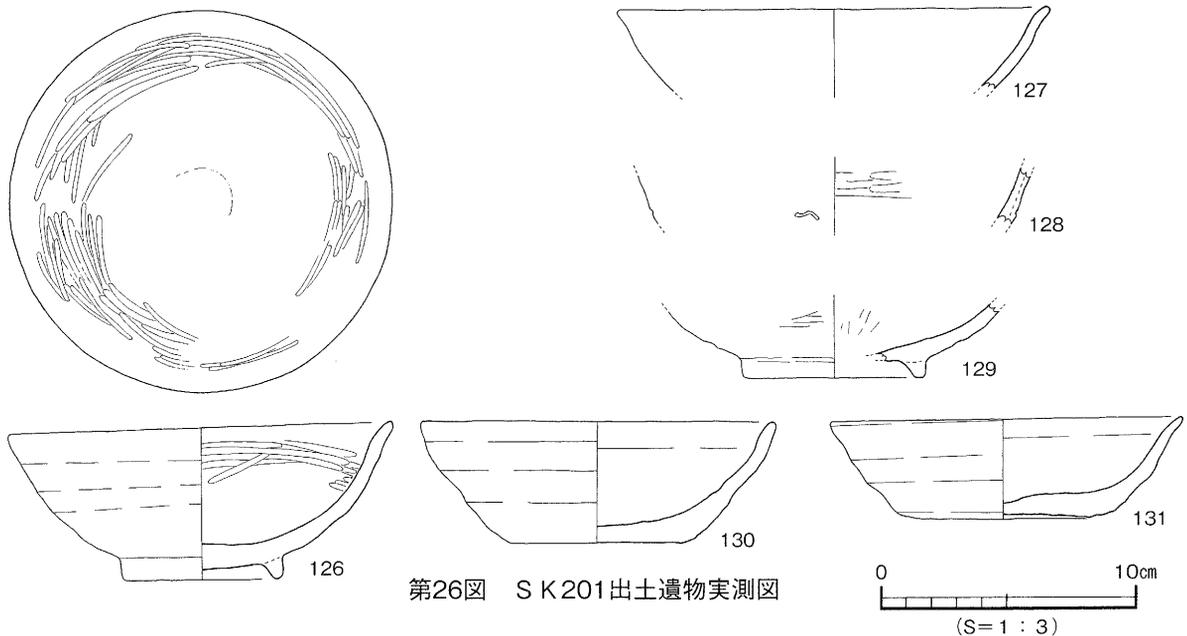
出土遺物〔第26図、図版16〕

126～129は内黒の壺である。126は底部に断面U字状の貼り付け高台をもつ。胴部内面中位から口縁部にかけて、横方向にヘラミガキ調整が施される。130・131は土師器の坏である。底部は回転糸切り痕がみられる。

時期：出土した土師器壺の特徴から、11世紀後半とする。



第25図 SK201測量図



第26図 SK201出土遺物実測図

6. 中世の遺構と遺物

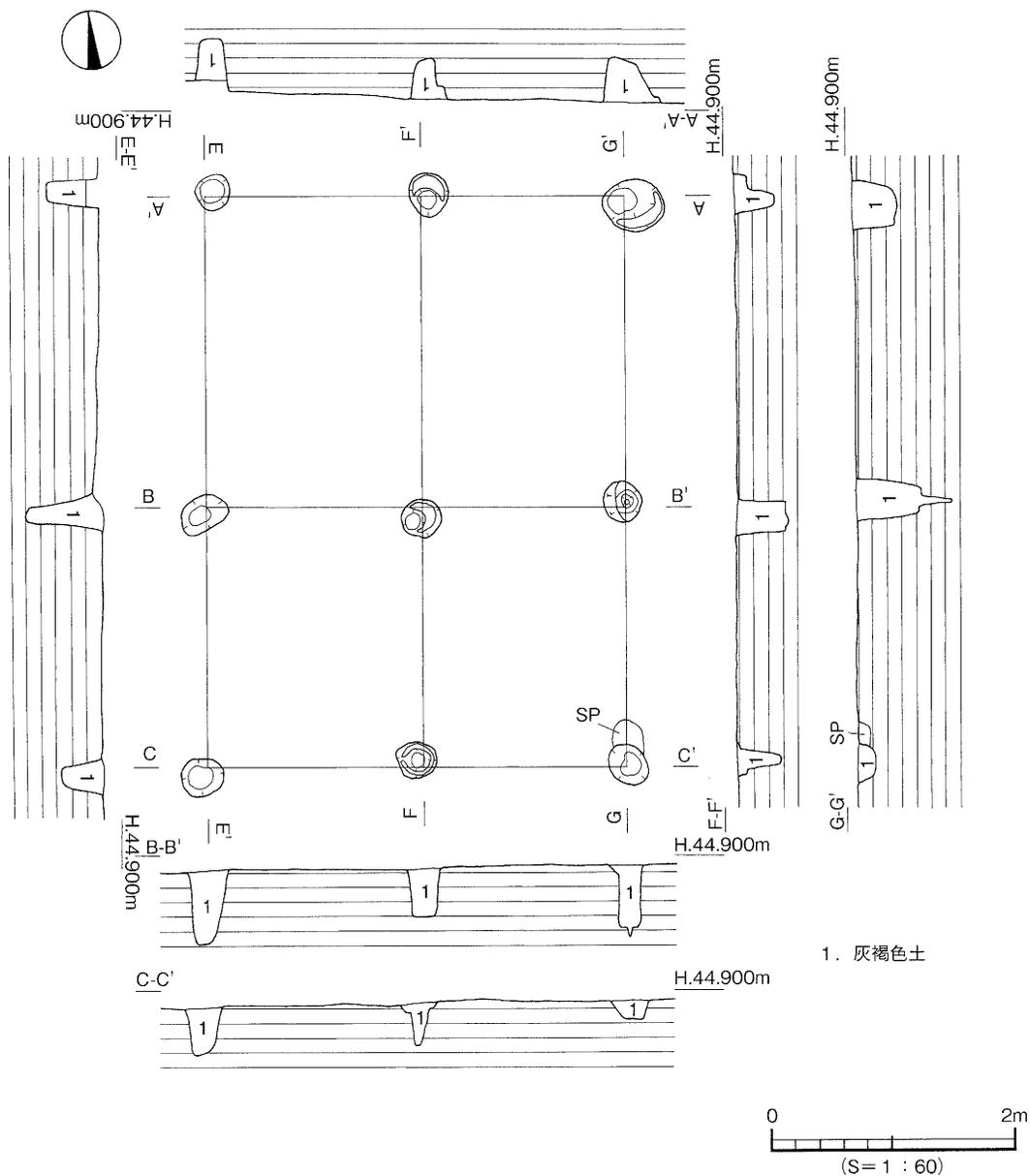
第8層上面にて掘立柱建物址2棟、溝7条、土坑13基、柱穴8基を検出した。

(1) 掘立柱建物址 (掘立)

掘立301 [第27図]

Ⅲ区北側のC～D・2～3区に位置し、SK304・SX304を切る。2間×2間の南北棟で、総柱の掘立柱建物址である。主軸はN-3°-Wとほぼ真北を指向する。規模は桁行4.65m、柱間2.1～2.5m、梁行3.4m、柱間1.65～1.75m、柱穴の平面形態は円形を呈し、直径28～50cm、深さ14～78cmを測る。埋土は灰褐色土である。遺物は土師器の小片が僅かに出土する。

時期：時期決定しうる遺物に乏しく、埋土がSD301と同一なことから14世紀前半とする。



第27図 掘立301測量図

掘立302

Ⅲ区南東部のB～C・4区に位置し、SK303を切る。2間以上×1間以上の建物と推測し、主軸はN-16°-Eを指向。規模は東西3.5m、柱間1.5～2m、南北柱間1.6m、柱穴の平面形態は円形を呈し、直径22～42cm、深さ6～24cmを測る。埋土は灰褐色土。遺物は土師器の小片が僅かに出土する。

時期：時期決定しうる遺物に乏しく、埋土がSD301と同一なことから14世紀前半とする。

(2) 溝(SD)

SD101

I区中央部北側I～J・16～17区に位置し、東端は調査区外に延びる。主軸はN-65°-Eを指向する。規模は検出長8m、上場幅0.23～0.48m、深さ3～9cmを測る。断面形態はレンズ状を呈し、比高差は殆どない。埋土は明黄褐色土である。遺物は基底面より浮いた状態で、土師器の坏、皿、土釜の脚部片が少量出土するが図化には至らなかった。

時期：出土した遺物から12世紀後半以降としか判らない。

SD102

I区中央部H～I・15区に位置し、南端は調査区外に延びる。主軸はN-10°-Wを指向する。規模は検出長4.16m、上場幅18～32cm、深さ5～8cmを測る。断面形態はレンズ状を呈し、北から南へ3cmの比高差を測る。埋土は明黄褐色粘質土である。遺物は基底面より浮いた状態で、土師器の小片が僅かに出土する。

時期：時期決定しうる遺物に乏しく、埋土がSD104と同一なことから12世紀末～13世紀初頭とする。

SD104

I区西側G～H・13区に位置し、南端は調査区外に延び、北端は消滅する。主軸はN-5°-Eとほぼ真北を指向する。規模は検出長6.4m、上場幅0.75～1.2m、深さ3～6cmを測る。断面形態は皿状を呈し、基底面は平坦であり、比高差は北から南へ4cmを測る。埋土は明褐色粘質土である。遺物は基底面より浮いた状態で、土師器片や須恵器のこね鉢の小片が僅かに出土するが図化には至らなかった。

時期：出土した遺物から12世紀末～13世紀初頭とする。

SD106

I区北西部I・13～15区に位置し、北側は調査区外に延びる。主軸はN-76°-Eを指向する。規模は検出長9.45m、上場幅28～58m、深さ11～18cmを測る。断面形態はレンズ状を呈し、比高差は殆どない。埋土は明黄褐色粘質土である。遺物は基底面より浮いた状態で、土師器の小片や須恵器のこね鉢片が僅かに出土する。

時期：時期決定しうる遺物に乏しく、埋土がSD104と同一なことから12世紀末～13世紀初頭とする。

S D201

Ⅱ区東側のD～G・8区に位置し、南北端は調査区外に延びる。主軸はN - 4° - Eとほぼ真北を指向する。規模は検出長15.3m、上場幅0.24～0.52m、深さ2～7cmを測る。断面形態は皿状～逆台形状を呈する。比高差はない。埋土は黄灰色土の単一層である。遺物は土師器壺・坏片が僅かに出土する。

時期：出土した土師器の特徴から、中世としか判らない。

S D202

Ⅱ区東側のD～G・8区に位置し、南北端は調査区外に延びる。主軸はN - 3° - Eとほぼ真北を指向する。規模は検出長15.6m、上場幅0.24～0.46m、深さ4～9cmを測る。断面形態は逆台形状を呈する。比高差は殆どない。埋土は黄灰色土の単一層である。遺物はない。

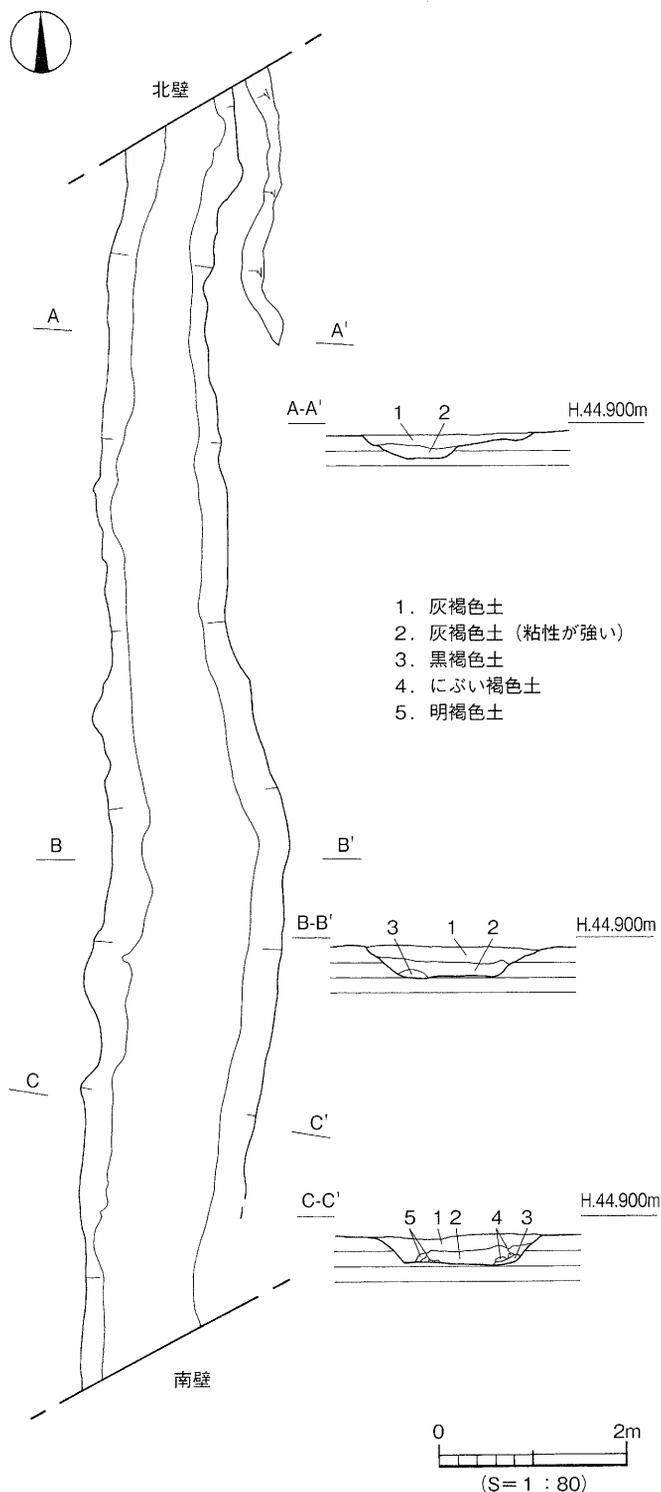
時期：出土遺物がなく、S D201と埋土や遺構形態が同一なことから、中世としか判らない。

S D301〔第28図、図版9〕

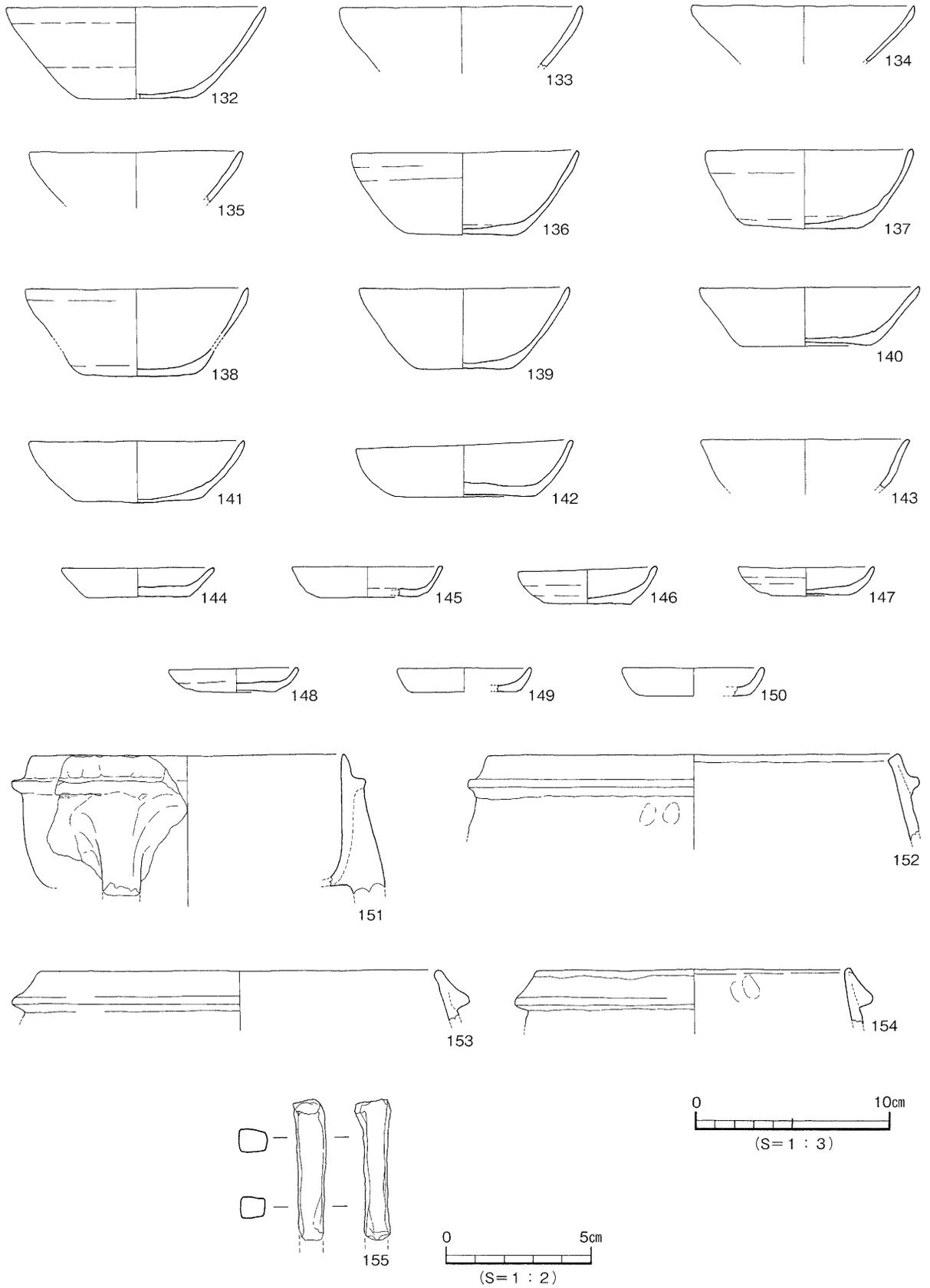
Ⅲ区西側A～D・2区に位置し、S B301・302、S X301を切り、南北端は調査区外に延びる。主軸はN - 2° - Eとほぼ真北を指向する。規模は検出長13.4m、上場幅1.0～1.8m、深さ26～34cmを測る。断面形態は逆台形状を呈し、基底面はほぼ平坦であり、比高差は北から南へ14cmを測る。埋土は灰褐色土であり、下層は粘性が上層に比べ強くなる。遺物は下層より多く出土しており、土師器の坏や皿、土鍋片が出土する。

出土遺物〔第29図、図版16〕

132～143は土師器の坏である。132～135は胴部から口縁部にかけて直線的に立ち上がる。136～140は胴部下半が僅かに内湾し窄まる。141・142は内湾する胴部である。143は口縁端部がやや外反する。



第28図 S D301測量図



第29図 SD301出土遺物実測図

136・137・142には底部に回転糸切り痕が残る。144～150は土師器の皿である。表面摩滅の150以外は底部に回転糸切り痕があり、その内の146～148は板状圧痕がみられる。胴部形状は、144・145は直線的、146～148は内湾、149・150は器壁がやや厚手である。151～154は土釜である。151は直立気味の口縁部よりやや下方に断面台形状の鏝が巡り、外面にナデ調整が施される。152は内傾する口縁部よりやや下方に断面台形状の鏝が巡り、内外面にナデや横ナデ調整が施される。153・154は内傾する口縁部に断面が下膨れ三角形の鏝が巡る。155は鉄釘である。断面形状は四角形で、頭部がL字状を呈する。

時期：出土した遺物の特徴から14世紀前半とする。

(3) 土坑 (SK)

SK101

I区中央部のI・16区に位置する。平面形態は長方形、断面形態は皿状を呈し、基底面は平らな面をなす。規模は長軸1.11m、短軸0.83m、深さ9cmを測る。埋土は灰褐色土の単一層で、出土遺物はない。

時期：SD301と埋土が同一なことから、14世紀前半とする。

SK102

I区南西部のG・14区に位置する。平面形態は長方形、断面形態は逆台形状を呈し、基底面は平らな面をなし、北西部に浅い円形状の凹みをもつ。規模は長軸1.1m、短軸0.83m、深さ34cmを測る。埋土は灰褐色土の単一層で、遺物は基底面より浮いた状態にて、土師器の坏や備前焼の播り鉢片が少量出土する。

時期：出土した備前焼の播り鉢の特徴から、16世紀代とする。

SK103

I区西側のG～H・14区に位置し、SK104を切る。平面形態は長方形、断面形態は逆台形状を呈し、基底面は平らな面をなし、中央部付近に楕円形の浅い凹みをもつ。規模は長軸1.11m、短軸0.69m、深さ19cmを測る。埋土は灰褐色土の単一層で、遺物は中層より青磁碗の小片が1点出土する。

時期：時期決定しうる遺物に乏しく、埋土がSD301と同一なことから14世紀前半とする。

SK104

I区南西部のH・14区に位置しSK103に切られる。平面形態は長方形、断面形態は逆台形状を呈し、基底面は平らな面をなす。規模は長軸0.95m、短軸7.3m、深さ13cmを測る。埋土は灰褐色土の単一層で、遺物は基底面より浮いた状態で、土師器片が僅かに出土する。

時期：時期決定しうる遺物に乏しく、埋土がSD301と同一なことから14世紀前半で、切り合いからSK103より古い時期としか判らない。

SK105

I区北西部のH～I・14区に位置し、SPを切る。平面形態は隅丸長方形、断面形態は逆台形状を呈し、基底面はやや凹む。規模は長軸1.15m、短軸0.9m、深さ19cmを測る。埋土は灰褐色土の単一層で、遺物は基底面より浮いた状態で、土師器や磁器の小片が僅かに出土する。

時期：時期決定しうる遺物に乏しく、埋土がS D301と同一なことから14世紀前半とする。

S K106

I区北西部のH～I・13区に位置し、S B103を切る。平面形態は楕円形、断面形態はレンズ状を呈し、基底面はやや凹む。規模は長軸1.3m、短軸0.67m、深さ16cmを測る。埋土は明黄褐色粘質土単一層で、遺物は上層から中層にかけ、土師器の小片や須恵器のこね鉢片が僅かに出土する。

時期：出土した遺物が小片であるため中世としか判らない。

S K107

I区西側のH・14区に位置し、南北に延びる小溝を切る。平面形態は不整形、断面形態は皿状を呈し、基底面の東側に凹みをもつ。規模は長軸2.35m、短軸0.8～1.5m、深さ31cmを測る。埋土は灰褐色土の単一層で、遺物は基底面より浮いた状態で、土師器の小片が僅かに出土する。

時期：時期決定しうる遺物に乏しく、埋土がS D301と同一なことから14世紀前半とする。

S K204

II区中央部北側のF～G・7～8区に位置し、S K205を切る。平面形態は隅丸長方形、断面形態は逆台形状を呈し、基底面は平らな面をなす。規模は長軸1.48m、短軸0.77m、深さ24cmを測る。埋土は黄灰色土の単一層で、遺物は基底面より浮いた状態で、土師器の小片に混じり、陶器碗が1点出土する。

時期：出土した遺物が小片であるため中世としか判らない。

S K210

II区南西部のC・6区に位置する。平面形態は楕円形、断面形態は逆台形状を呈する。規模は長軸0.82m、短軸0.52m、深さ13cmを測る。埋土は灰褐色土の単一層で、遺物は上層から下層にかけ、土師器の坏・皿片が少量出土する。

時期：時期決定しうる遺物に乏しく、埋土がS D301と同一なことから14世紀前半とする。

S K301

III区北西部のC～D・2～3区に位置し、掘立301に切られ、掘立303を切る。平面形態は楕円形、断面形態は皿状を呈し、基底面はやや凹む。規模は長軸2.09m、短軸1.83m、深さ11cmを測る。埋土は灰褐色土の単一層で、遺物は土師器の小片が僅かに出土する。

時期：時期決定しうる遺物に乏しく、埋土がS D301と同一なことから14世紀前半とする。

S K302

III区南東部のB・3～4区に位置し、柱穴に切られる。平面形態は楕円形、断面形態は皿状を呈し、基底面は平らな面をなす。規模は長軸0.83m、短軸0.7m、深さ12cmを測る。埋土は灰褐色土で一部赤褐色を帯びる。遺物は基底面より浮いた状態で、土師器の坏・皿の破片が出土する。

時期：時期決定しうる遺物に乏しく、埋土がS D301と同一なことから14世紀前半とする。

S K 306〔第30図、図版8〕

Ⅲ区中央部のC・3区に位置する。平面形態は円形、断面形態は丸みをもつ逆台形状を呈し、基底面に据えられた状態で白磁四耳壺が出土した。柱穴の規模は東西29cm、南北26.5cm、深さ25cmを測り、埋土は灰褐色土の単一層である。四耳壺の底部は基底面中央部、肩部付近はやや西側に傾いた状態で据えられており、壺の内部には口縁部片と土が僅かに底部付近にみられるだけで、殆どが空洞である。壺内部の土を精査したが、有機物の存在は確認できず、痕跡も認められなかった。

出土遺物〔第30図、図版16〕

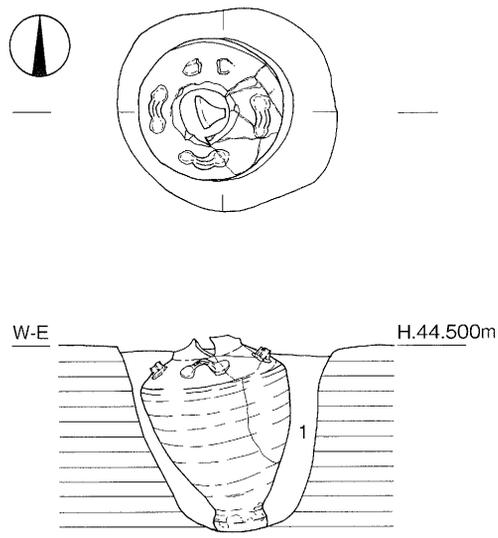
156は白磁の四耳壺である。口縁端部を外下方に折り返し、肩部の屈曲は強く、横耳が貼り付けられる。長胴の肩部から下方にかけて直線的で、高台部外面の面取りの幅は広く、オリーブ灰色の釉が外面は口縁部から底部のくびれ部まで、内面は口縁部に施され、高台部や底面は無釉である。高台畳付のすり減りは顕著で丸みをもつ。外面底部に回転ナデ・ヘラケズリ調整、内面には回転ナデ調整が施される。復元口径9.1cm、器高31.7cm、胴部最大径18.6cm、底径8.1cmを測る。

時期：出土した四耳壺の特徴から13世紀後半～14世紀前半とする。

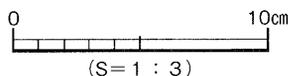
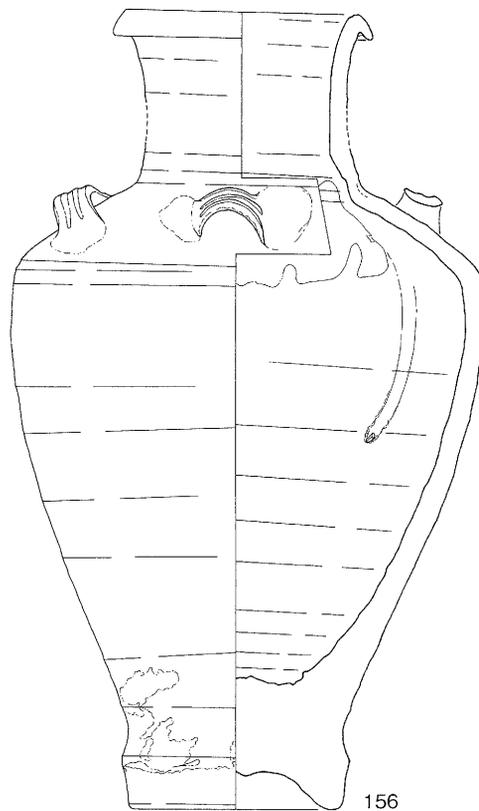
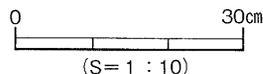
S K 307

Ⅲ区北東部のD・4区に位置する。平面形態は楕円形、断面形態は逆台形状を呈し、基底面には陶器の甕の底部が据えられた状態で出土した。規模は東西0.69m、南北0.7m、深さ62cmを測る。埋土は褐灰色土の単一層で中層から下層にかけて黄橙色土塊が混じる。遺物は上層から下層にかけて土師器の坏・皿の小片が出土する。

時期：出土した遺物の特徴から13世紀後半とする。



1. 灰褐色土



第30図 S K 306測量図及び出土遺物実測図

7. 小 結

今回の調査では、弥生時代と古代・中世の遺構や遺物を検出した。遺構は、主に弥生時代後期の竪穴式住居址や掘立柱建物址、土坑、古代の土坑と中世の掘立柱建物址や溝、土坑などである。

層 位

今回の調査では基本層位の第1層から第11層までの土層を検出した。第4層から第7層は遺物包含層である。第4層と第5層は第8層の地山面が平坦な場所に薄く堆積していることや、第6層と第7層は、第8層が緩やかに傾斜するⅢ区南西部の一部だけで検出されており、Ⅲ区南西部以外では、中世頃の整地により削平を受けたと考えられる。第11層は石手川の氾濫によって堆積した砂礫層と考えられ、起伏を伴い、大きく抉れた部分に第10層の堆積がみられる。

弥生時代

全域において後期頃の竪穴式住居址を検出しており、安定して調査地周辺に該期における集落の展開がうかがわれる。S B 201床面からは、部分的に炭化材が放射線状に並んだ状態で検出しており、火災を受けた住居の可能性をもつ。S B 202とS B 203は一辺が約2 mと規模が小さく、住居址とは別の小型の竪穴遺構と考えられる。S B 301は大型の円形竪穴式住居址であるが、東側から南西部にかけ内側を巡る周壁溝や主柱穴を検出し、住居を拡張する前の痕跡が確認できた。特に南西部の一部には周壁溝が4重にも巡っており、その部分だけが拡張を繰り返し行われた様相を示している。住居址内からは土器や石器・鉄器などに混じり、ミニチュア土器や大型の土錘、ガラス製の小玉なども出土しており、住居の規模や出土品などから集落内でも比較的権力の強い者の住居と考える。

古 代

検出遺構はS K 201だけである。この遺構は一辺が2 m程の平面形態が方形に掘られ、平らな基底面を呈した土坑で、該期の平野内にはこの形状の遺構は殆ど検出例がなく、基底面に重ねて置かれた土師器碗や坏の出土状況などから、墓の可能性も含めて検討を要する遺構である。

中 世

全域で溝や土坑・柱穴等の集落遺構を検出しており、該期の貴重な資料が得られた。南北方向に延びる溝の殆どは、ほぼ真北を指向した平行な位置関係であり、西隣する樽味立添遺跡3次調査地では該期の遺構が確認されていないことから、区画溝或いは地割りのための溝の可能性の高いS D 301から東側に展開する集落跡が考えられる。掘立301はやや北側の柱間が延びる総柱の建物であるが、その東隣にあるS K 306からは埋納された状態で中国製白磁の四耳壺を検出した。この壺は中が空洞である状況から、蓋を伴っていたと思われ、重機による表土掘削時に蓋を欠失した可能性が強いが、掘削時に蓋となるものは確認出来なかった。壺内には崩落した僅かな土と口縁部片しか出土しなかったが、何らかの内容物を入れて埋納したことも考えられる。S K 307の基底面から陶器の甕の底部が据えられた状態で出土したが、この状況から埋め甕として貯蔵用に使用していたことが窺える。S D 201とS D 202は、幅が1間前後の平行な間隔をもち南北方向に延びているが、これらは検出状況より道路状遺構の側溝の可能性をもち、Ⅲ区で検出したS D 301や掘立301とも平行な位置関係である。

今回の調査では、弥生時代後期頃の竪穴式住居址を主とした集落を形成する遺構や遺物と、中世頃の溝で区画された集落跡を検出し、当時の集落構造を解明する資料が得られた。今後の整理課題として、当地における弥生時代後半頃の詳細な集落構造や、中世集落の広がりを周辺の調査成果をふまえて検討する必要がある。

四国内における白磁四耳壺の出土例

1) 大柿遺跡Ⅲ S P 1207

〔徳島県〕〔第31図〕

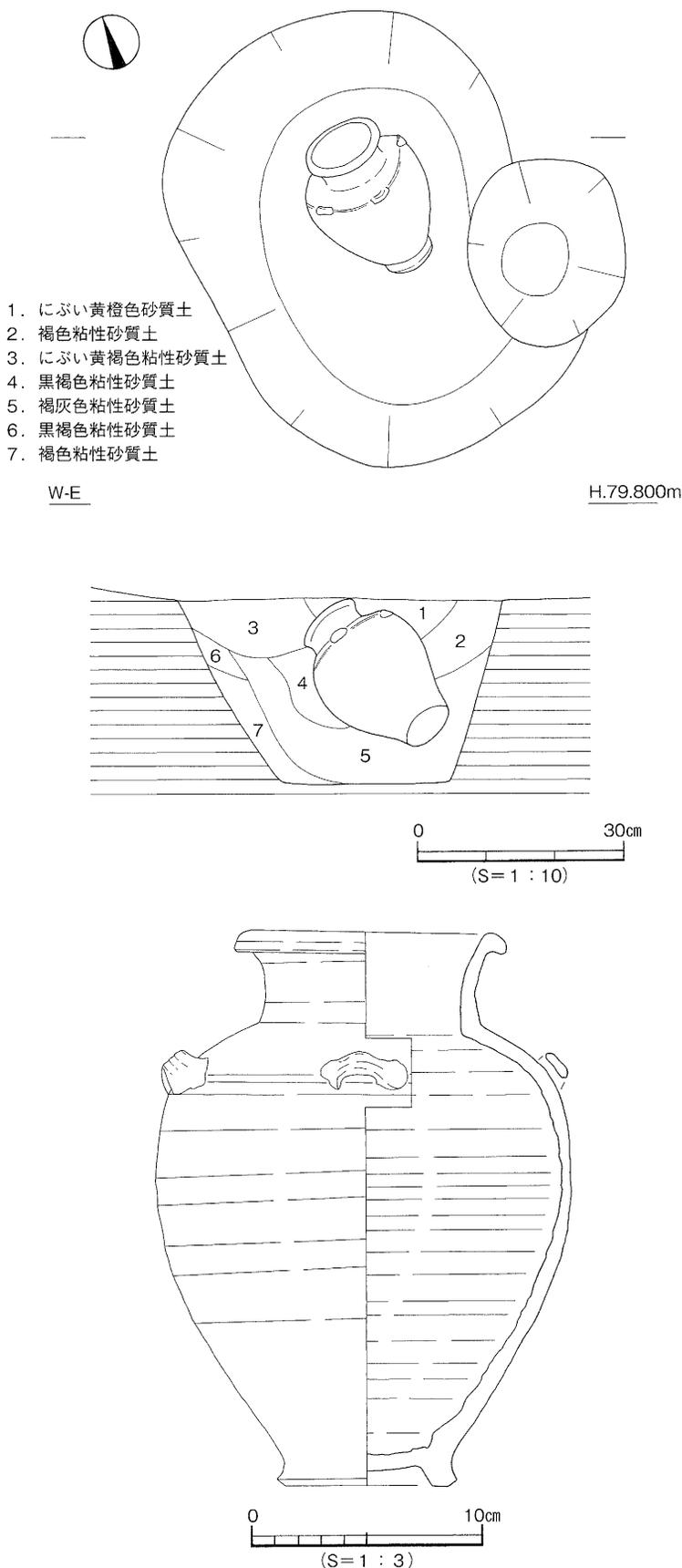
吉野川とその北岸から流れ込む支流によって形成された中州性の微高地上の標高79.5mに位置している。梁行3間、桁行4間の東西棟である総柱建物の南北主軸上の南側の柱を抜いた穴に、白磁の四耳壺が埋納されていた。また、北側の柱穴内にも瓦質の四耳壺が埋納された状態で出土している。この柱穴の規模は長さ0.67m、幅0.5m、深さ0.26mを測り、四耳壺は中央部基底面に底部があり、長軸方向に斜めに傾いた状態で出土している。建物の撤去に際して何らかの祭祀行為が行われていたと考えられている。

時期：11世紀後半から12世紀代。

2) 石手寺経塚〔愛媛県〕

石手寺は松山平野北東部を西流する石手川中流域の東野森ノ木遺跡1次調査地とは石手川を挟んで北東方向に直線距離約700mに位置する。経塚は一辺約2mを測り、平面形態が方形を呈し、石室の4隅に白磁四耳壺を配し、白磁合子や1156（保元元）年銘の経筒を伴う。四耳壺の一つに、紙本墨書法華経1巻を納め、口縁部には松喰鶴鏡をはめ込んで蓋にしていた。

時期：12世紀中頃。



第31図 徳島県大柿遺跡Ⅲ S P 1207測量図及び出土遺物実測図

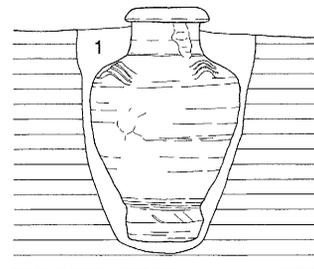
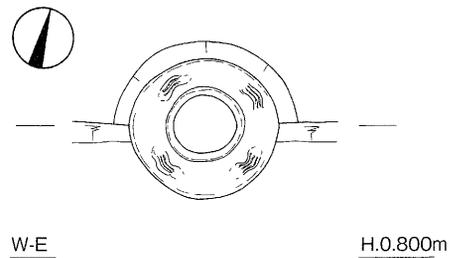
3) 浜ノ町遺跡SP0200〔香川県〕〔第32図〕

浜ノ町遺跡は、高松市街地の海浜部の砂堆上の標高約1mに位置しており、13世紀後半～14世紀前半を中心とした集落跡である。この集落内の柱穴内から白磁四耳壺が出土した。この柱穴は区画溝内側の下層で掘り込まれており、柱穴内から、完形の白磁四耳壺が直立状態で埋納されている。四耳壺の内外から土圧で割れた土師器坏が出土しており、蓋として置かれていたことが考えられている。四耳壺の内部は土が堆積していたが、坏以外は未確認である。柱穴の掘り方は直径約25cmで四耳壺より一回り大きく、平面形態は円形、底面はほぼ平らな面を呈する。出土状況から蔵骨器が考えられ、区画溝の北岸際の埋葬である。高台畳付はかなり擦り減っており、埋納する以前は別の目的で使用していたことが判っている。

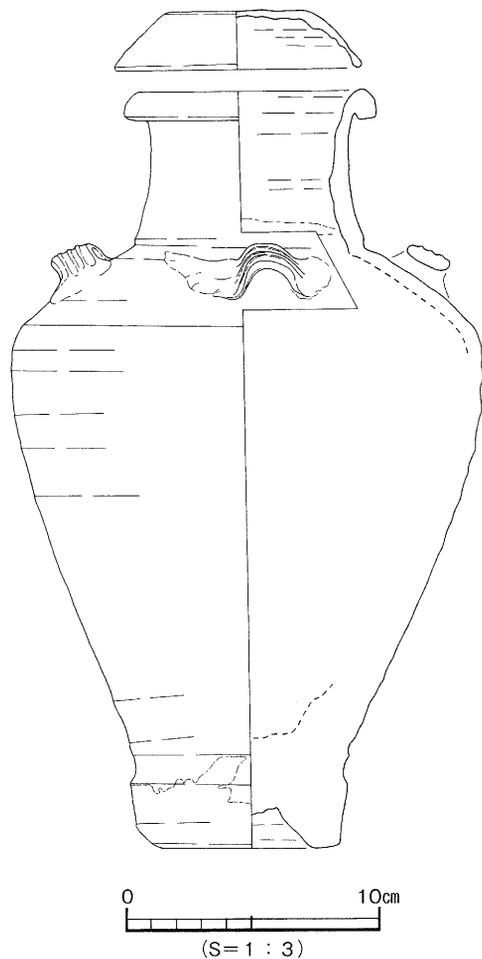
時期：14世紀第2四半期。

【参考文献】

- 佐藤昭嗣・三枝健二・志田原重人 1991 瀬戸内の中国陶磁
「平成3年度企画展」広島県立歴史博物館
- 乗松真也編 2001 浜ノ町遺跡「平成12年度サンポート高松
総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告」香川
県教育委員会・財香川県埋蔵文化財調査センター
- 乗松真也編 2004 浜ノ町遺跡「サンポート高松総合整備事
業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告」香川県教育委員会・
財香川県埋蔵文化財調査センター
- 財徳島県埋蔵文化財センター 2005 大柿遺跡Ⅲ「四国縦貫
自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告」徳島県教
育委員会・財徳島県埋蔵文化財センター・日本道路公団



1. 褐灰色細砂質土
0 30cm
(S=1:10)



第32図 香川県浜ノ町遺跡SP0200測量図及び出土遺物実測図

第5章

ひがし の もり の き
東野森ノ木遺跡

2次調査地

第5章 東野森ノ木遺跡2次調査地

1. 野外調査の経過と方法

対象地の安全対策と調査区の設定を行った後、2004（平成16）年8月5日から重機を用いて表土除去に着手する。生活道路と農業用水路の保全及び表土掘削で生じた排土置き場の都合上、調査区をⅠ～Ⅴ区に区分し〔第35図〕、順次調査に着手した。試掘調査のデータを鑑み、掘削は地表下0.6mにとどめ、4層上面にて黒色系の遺物包含層の広がりや遺構検出作業を試みる。

Ⅰ区とⅡ区では遺構密度の低いことが判明し、順調に調査が進む。これに対してⅢ・Ⅳ区、Ⅴ区では遺構密度が高いこと、Ⅴ区では西半部に遺物包含層が厚く堆積していたことが判明し、調査が難航する。8月下旬～10月下旬には相次いで愛媛県下を大型台風が通過し、県下に大雨洪水波浪の各警報が発令されたことで調査がたびたび中止となり、調査工程に遅れが生じることとなる。台風の接近時には、調査現場と事務所の安全対策を含む養生に努め、台風通過後は調査区内に溜まった大量の雨水を排水するとともに、遺構面の乾燥を作業の最優先とした〔第33図〕。

Ⅴ区で確認された厚い遺物包含層に対する調査方法として、セクションベルトを設定した後に徐々に面的に掘り下げを行い、平・断面にて土層の観察と検討を随時行った。10月下旬まで遺物包含層の掘り下げを行う。その後、4層上面における遺構検出状況の記録写真を撮影する。11月4日、職場体験学習の一環で桑原中学校生徒2名が現場来訪する〔第34図〕。11月以降は、検出遺構のうち竪穴式住居址S B 501～503と、性格不明遺構S X 301の精査を中心に行い、測量図作成及び記録写真撮影を繰り返し行う。S B 502については住居構造に加えて、遺構の埋没要因や、埋土と出土遺物との関係について現地でも検討しながら観察と記録を重ねる。2005年1月からは調査区壁の土層図作成に着手。同月下旬には完掘状況の記録写真を撮影。その後調査区の埋め戻しを実施し、1月31日には測量図、記録写真、出土遺物、発掘及び測量機材等の移動を行い野外調査の全ての作業を完了する。

なお、測量に際しては、国土座標第Ⅳ座標系基準点から調査地内に座標点を移動し、これを基準とした5m方眼のグリッド割りを設定した。グリッドはX = 93615、Y = -65220を起点として東から西へA・B・C…J、北から南へ1・2・3…7としA 1～J 7といった呼称名を付けている〔第36図〕。主要な遺構の精査に際しては、セクションベルトを任意で設定し、土層の対応関係を検討しながら、調査を進めた。

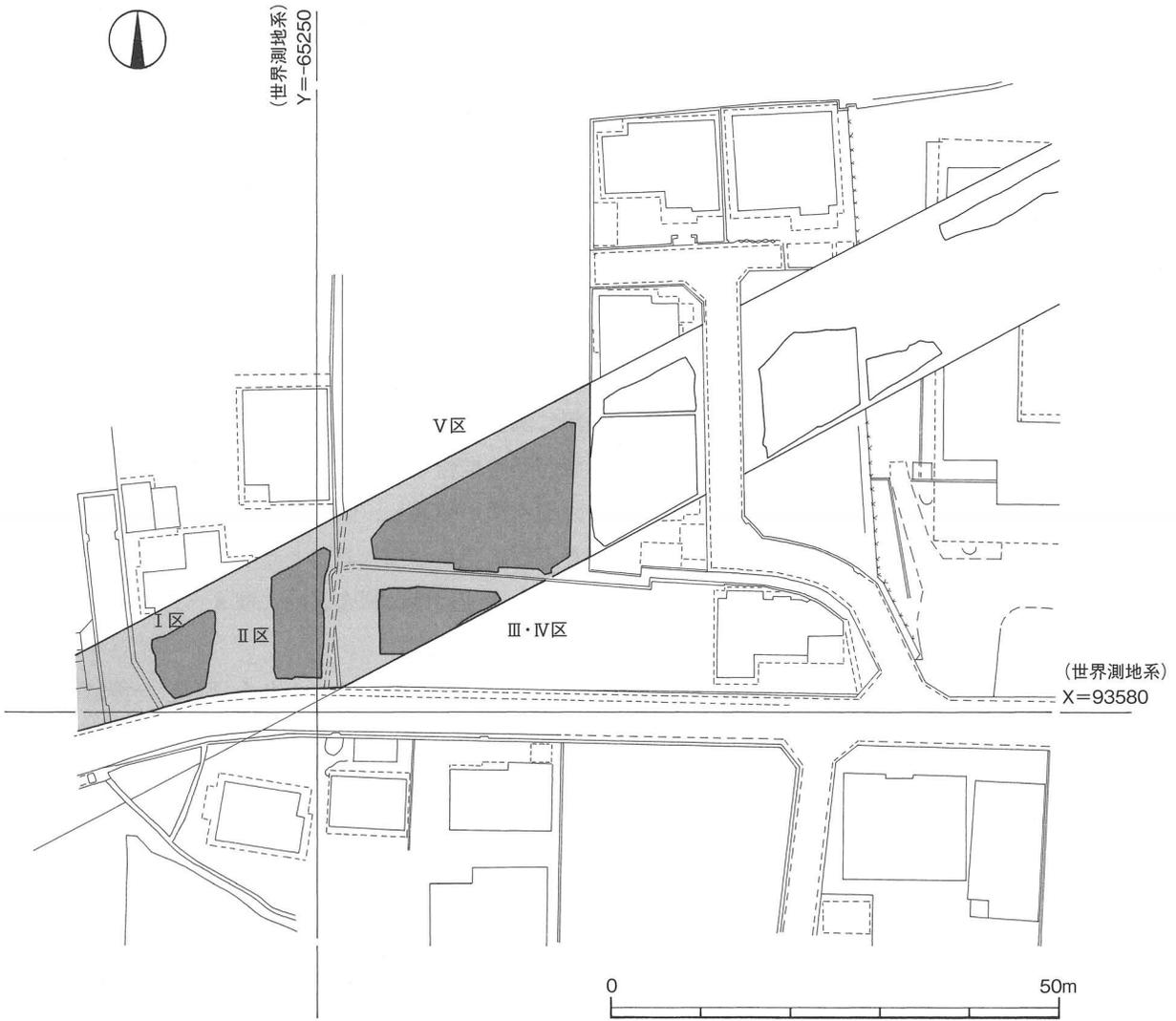
なお、工程上、野外調査は樽味四反地遺跡9次調査と併行して実施した。



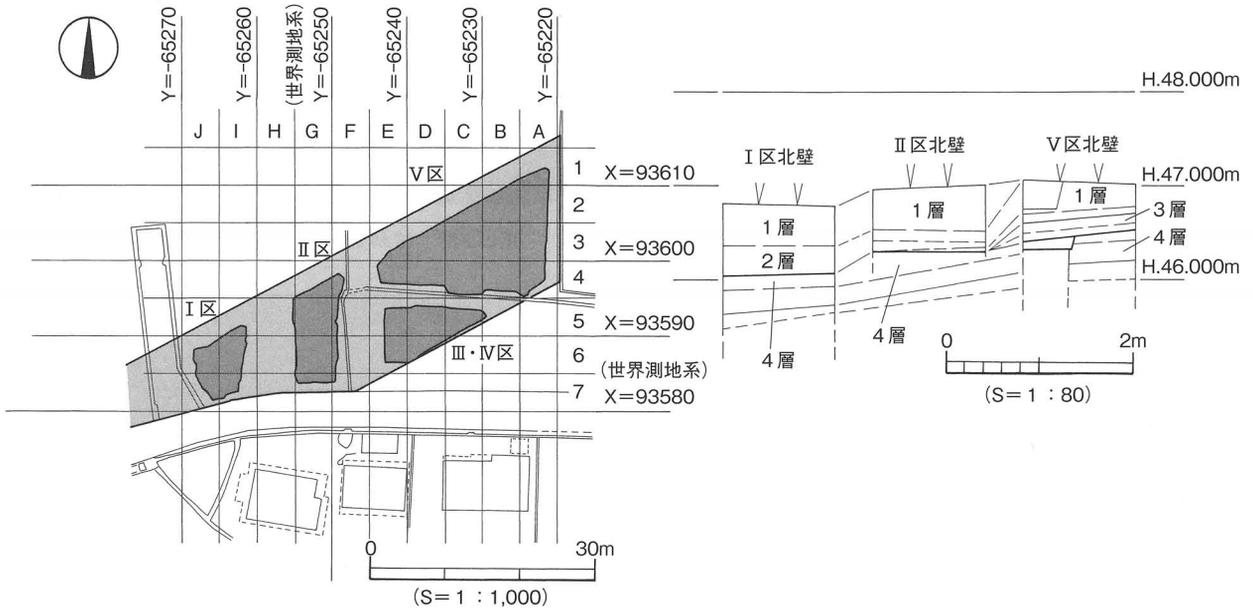
第33図 台風通過後に水没した調査区



第34図 職場体験学習



第35図 調査地測量図 (S=1:800)



第36図 区割図及び柱状土層模式図 (S=1:1,000)

2. 基本層位

調査対象地の長さはおおよそ80m分で、調査以前は水田であった。現況は地表面がほぼ水平で、標高47mを測る。基本層位は、1～4層を検出した〔第37・38図〕。

- 1層－真砂土で、層厚50cmを測る。調査区西半部にのみ分布する。現代の造成土である。
- 2層－現代の水田や畑にかかわる土層で、耕作土部分に相当する2－①層、床土部分の2－②層、旧耕作土部分の2－③層に細分可能である。これらは統一基本土層の第I①層、第I②層、第I③層に相当する。
 - 2－①層：灰色土（N5/0）で層厚20cmを測り、調査区全域で検出した。
 - 2－②層：明赤褐色土（2.5Y R5/6）で層厚5cmを測り、調査区全域で検出した。
 - 2－③層：褐灰色土（10Y R4/1）で層厚10cmを測り、I区北壁で確認できた。
- 3層－黒色土（2.5Y 2/1）で層厚5～20cmを測り、粘性の強い土である。調査区東半部に認められ、特にV区西半部の旧地形の下がる箇所には厚く堆積していた。弥生時代中～後期土器を主体として、わずかに縄文時代晚期土器、土師器、須恵器の細片を含む遺物包含層である。わずかに含む縄文時代晚期土器、土師器、須恵器はいずれも細片であり、これらを除いた大半が弥生時代中～後期土器であることから、本層の堆積時期をこの時期と理解しておきたい。なお統一基本土層の第IV層に相当する。
- 4層－黄橙色土（2.5Y 5/4）で層厚10～50cmを測り、調査区全域で検出した。粘性が強く、ガチガチと締まった質感がある。調査区北壁における本層上面は、東端で標高46.75m、西端で標高46mを測る。本層上面は遺構面（調査で確認された遺構構築面）となり、主要な遺構にはS B501～503、S X301などがある。統一基本土層の第V層に相当する。

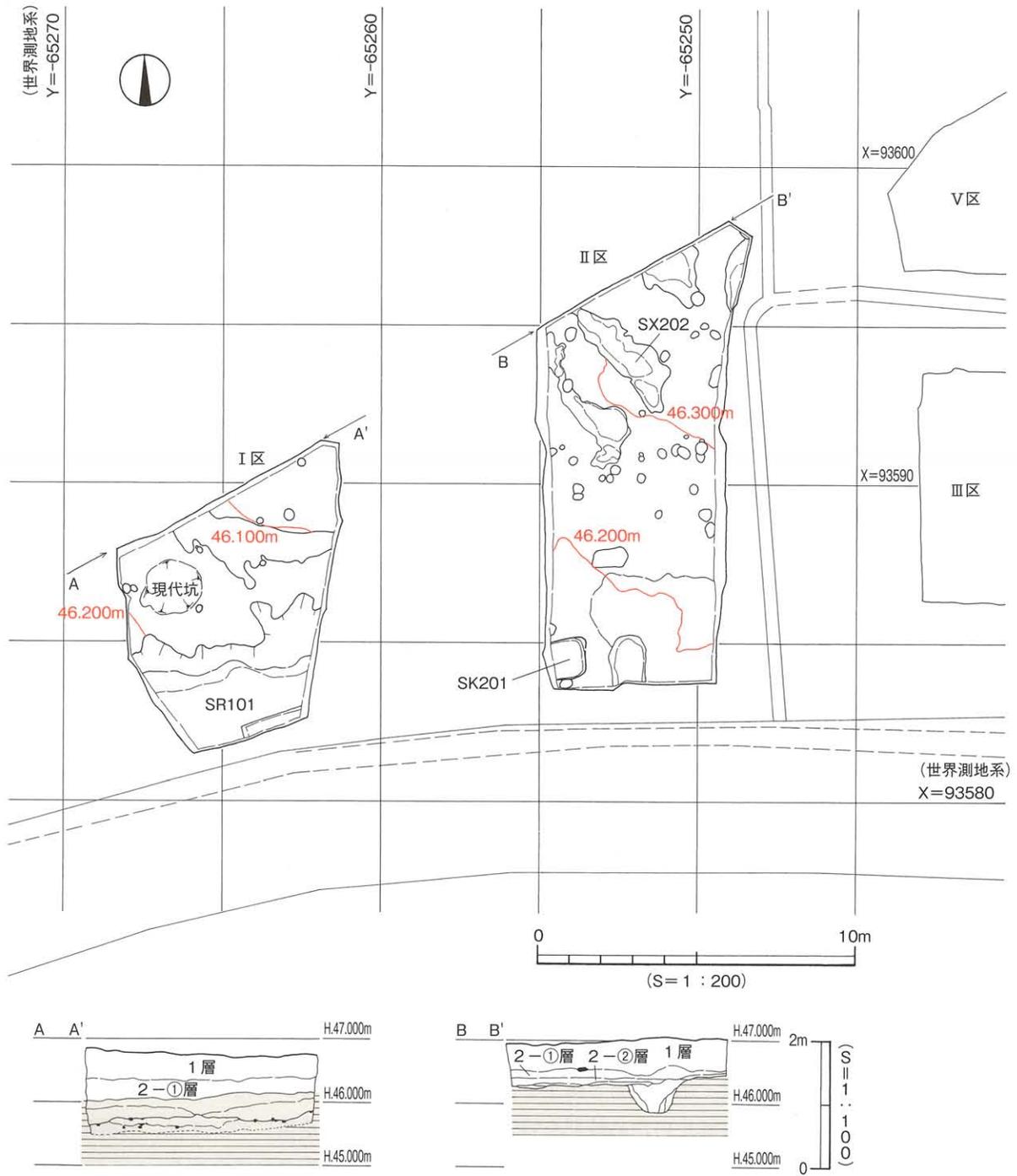
3. 調査概要

検出した遺構は堅穴式住居址3棟、土坑20基、性格不明遺構1基、柱穴100基である。これらの遺構は4層（統一基本土層の第V層）上面にて輪郭を確定することができたものである。出土遺物を伴うもので古墳時代以降に帰属する遺構は認められなかった。したがって、本報告では4層上面を「遺構面」と呼称する。

遺構の帰属時期については、出土遺物と埋土を総合して判断している。したがって、出土遺物が伴わない遺構と、伴っていても碎片のため時期を特定することが困難な遺構については、帰属時期を特定することは差し控えている。検出した主要な遺構は種類別に表2と表3にまとめた。

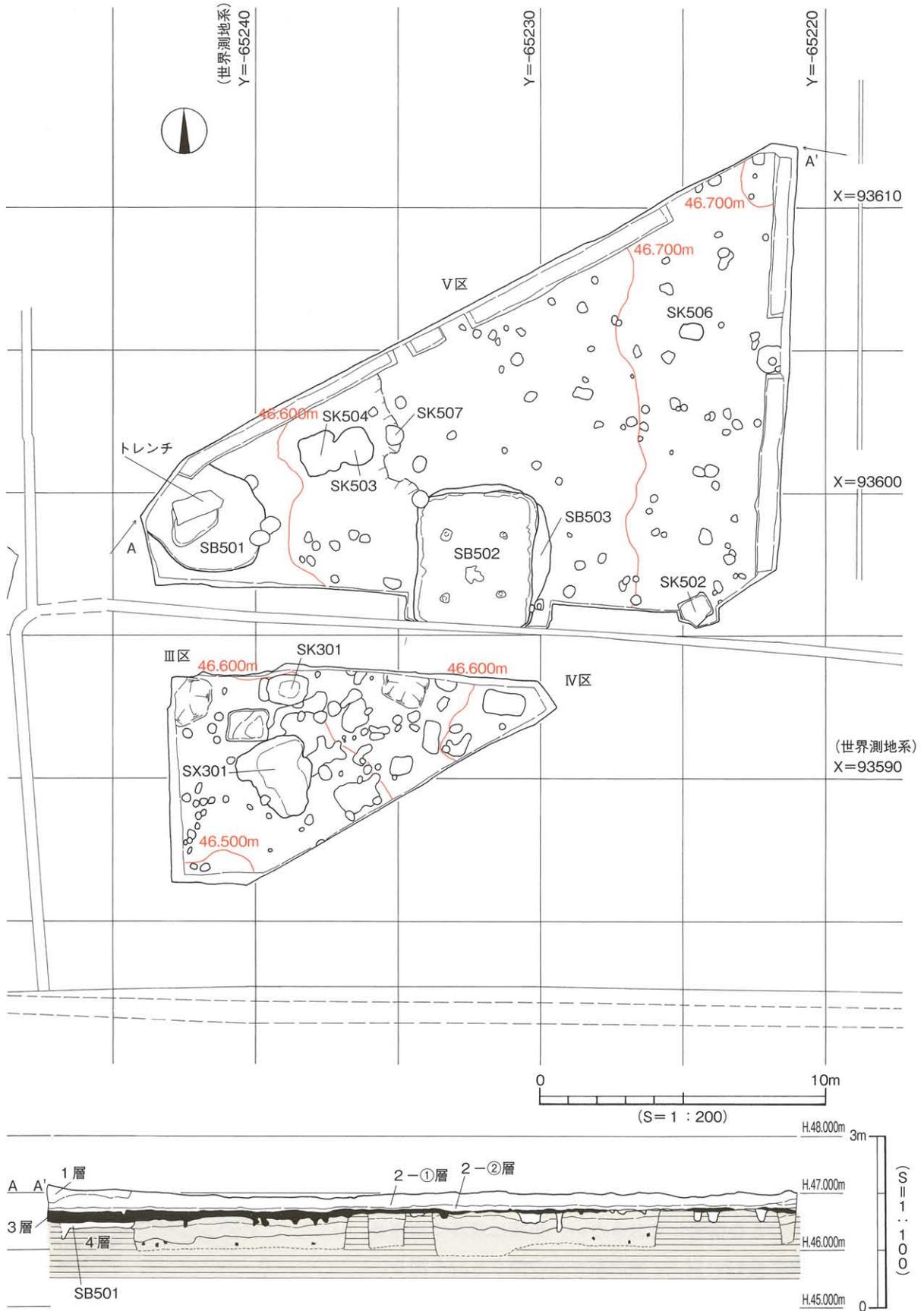
表2 検出主要遺構一覧

遺構名称	位置	平面形態	規模 (m)	主な出土遺物
S K506	A 2・B 2	隅丸長方形	0.86×0.54×0.18～0.22	縄文晚期土器
S K502	A 4	方形	1.1×0.9×0.1	弥生後期土器、ガラス小玉



第37図 I・II区全測図及び北壁断面土層図

調査概要



第38図 III・IV・V区全測図及び北壁断面土層図

表3 検出主要遺構一覧

遺跡名称	位置	平面形態	規模 (m)	主な出土遺物
S B 503	B 4、C 3	円形か	(4.8+) × (4.2+) × 0.06	弥生中期土器
S B 501	D 4、E 3・4	不整多角形状	4 × 3.8 × 0.4	弥生後期土器
S B 502	C 4	隅丸長方形	4 × 5 × 0.28~0.54	弥生後期土器、石庖丁、勾玉、鉄器
S K 201	G 7	隅丸方形か長方形	1.0 × 1.2 × 0.2	弥生後期土器
S K 301	D 5	隅丸方形	1.4 × 1.0 × 0.2	
S X 301	D 5、E 5 他	瓢箪形		弥生中期土器
S X 202	G 4・5	不整形	4.2 × 0.9~1.3	弥生中期土器

4. 縄文時代の遺構と遺物

(1) 土坑 (S K)

S K 506 [第39図、図版20-1・2・24]

調査地北東部のV区、A 2・B 2区に位置する。平面形態は隅丸長方形を呈し、規模は長軸0.86m、短軸0.54m、遺構面からの深さ0.18~0.22mを測り、床面は平坦をなす。立ち上がりは明確な壁となる。埋土は①~③層に大別され、このうち①層と③層は水平基調の堆積で、②層のみがブロック状の堆積である。遺物は②層から縄文土器の小破片が1点出土した。

出土遺物 157は浅鉢屈曲部の小破片である。屈曲部は明確で、遺存する胴部下半は外面が二枚貝条痕、内面は横方向の磨きである。色調は外面が黒褐色 (10Y R 3/1)、内面が灰黄褐色 (10Y R 5/2) を呈し、胎土は石英の微細粒を少量含む精良なものである。

時期：遺構埋土と出土遺物から縄文時代晩期に時期比定される。

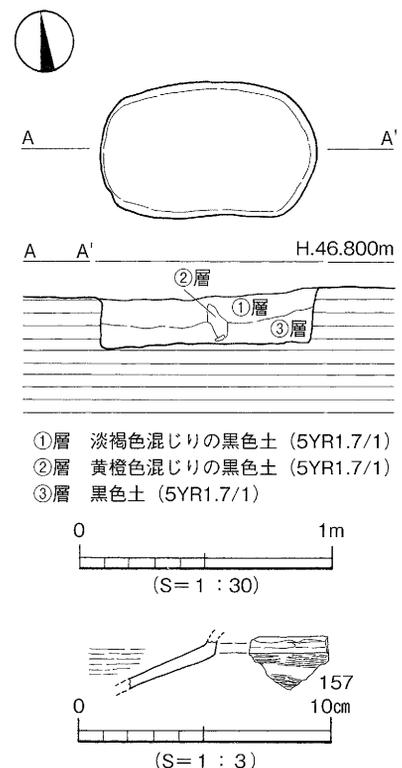
5. 弥生時代の遺構と遺物

弥生時代の遺構には竪穴式住居址3棟 (S B 501~503)、土坑3基 (S K 502、504、201)、性格不明遺構2基 (S X 301、202) がある。遺構の大半は調査地東半部に位置しており、地形的に高いところに構築された傾向を読み取ることが可能である。

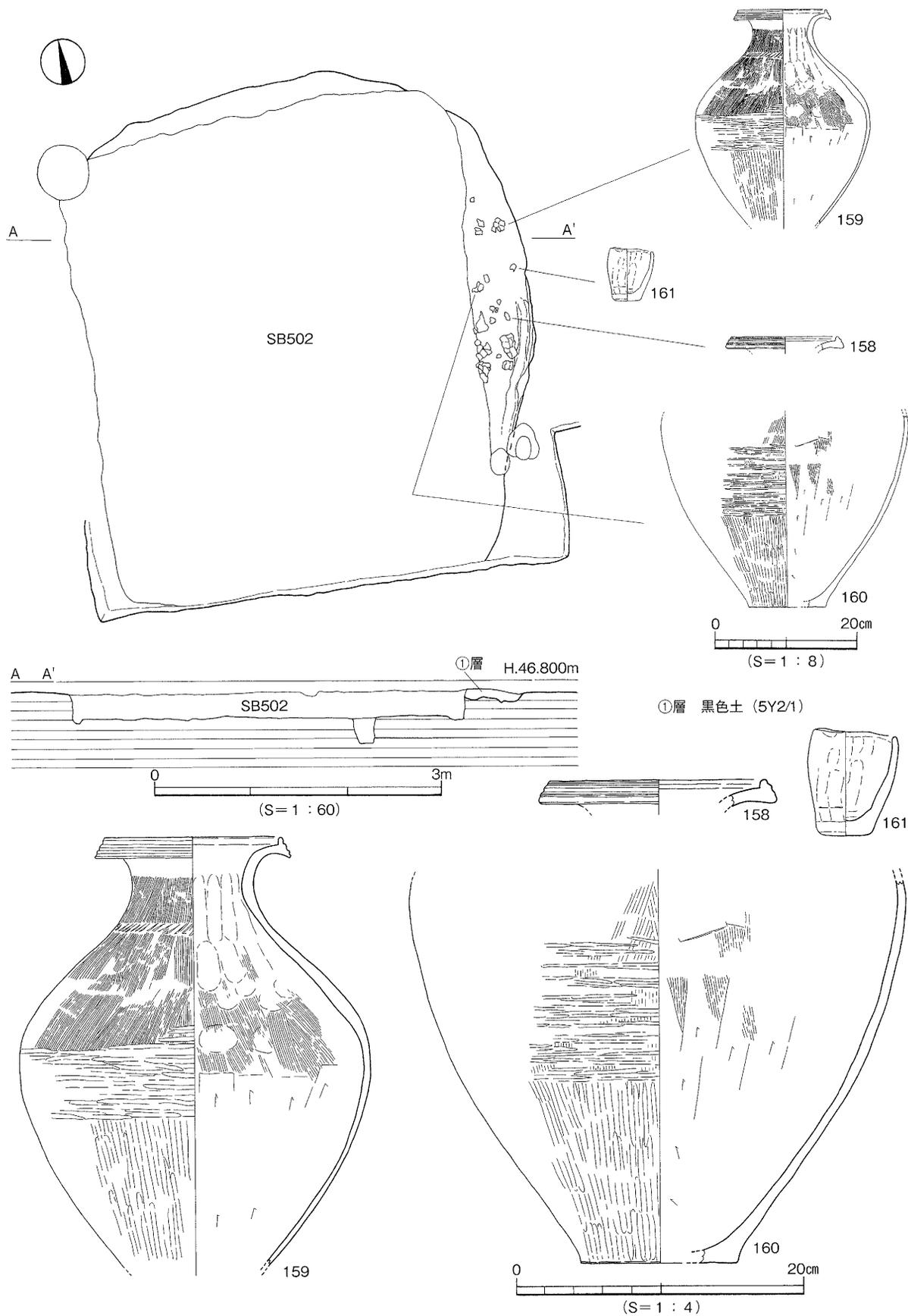
(1) 竪穴式住居址 (S B)

S B 503 [第40図、図版24-1]

調査地東端部のV区中央南端のB 4区、C 3区に位置し、S B 502に切られる (先行する)。遺構の大半が別住居址に切られるため、平面形態が判然としないものの、円形を呈する可能性があることを指摘しておきたい。規模は現存で東西長4.8m以上、南北長4.2m以上、検出面からの深さ6cmを測る。埋土は黒色土 (5 Y 2/1) の単一層である。検出時では重複していることが判然としていなかった。セクションベルトを



第39図 S K 506測量図及び出土遺物実測図



第40図 SB503測量図及び出土遺物実測図

設定し埋土精査に着手したところ、住居東壁でわずかに周壁溝が円弧状を呈することが確認され、さらに床面直上からは弥生土器の壺とミニチュアの鉢を確認することができた。さらに床面は後続するS B 502に比して明らかに浅く、その比高差は10cmを測ることも確認できた。これらのことから、円形に想定されるプランはS B 502に先行する別の堅穴式住居址と理解するに至ったのである。なお、本住居の付帯施設はわずかに周壁溝の一部を検出したにとどまり、支柱穴及び炉址、貯蔵穴を確認するには至らなかった。

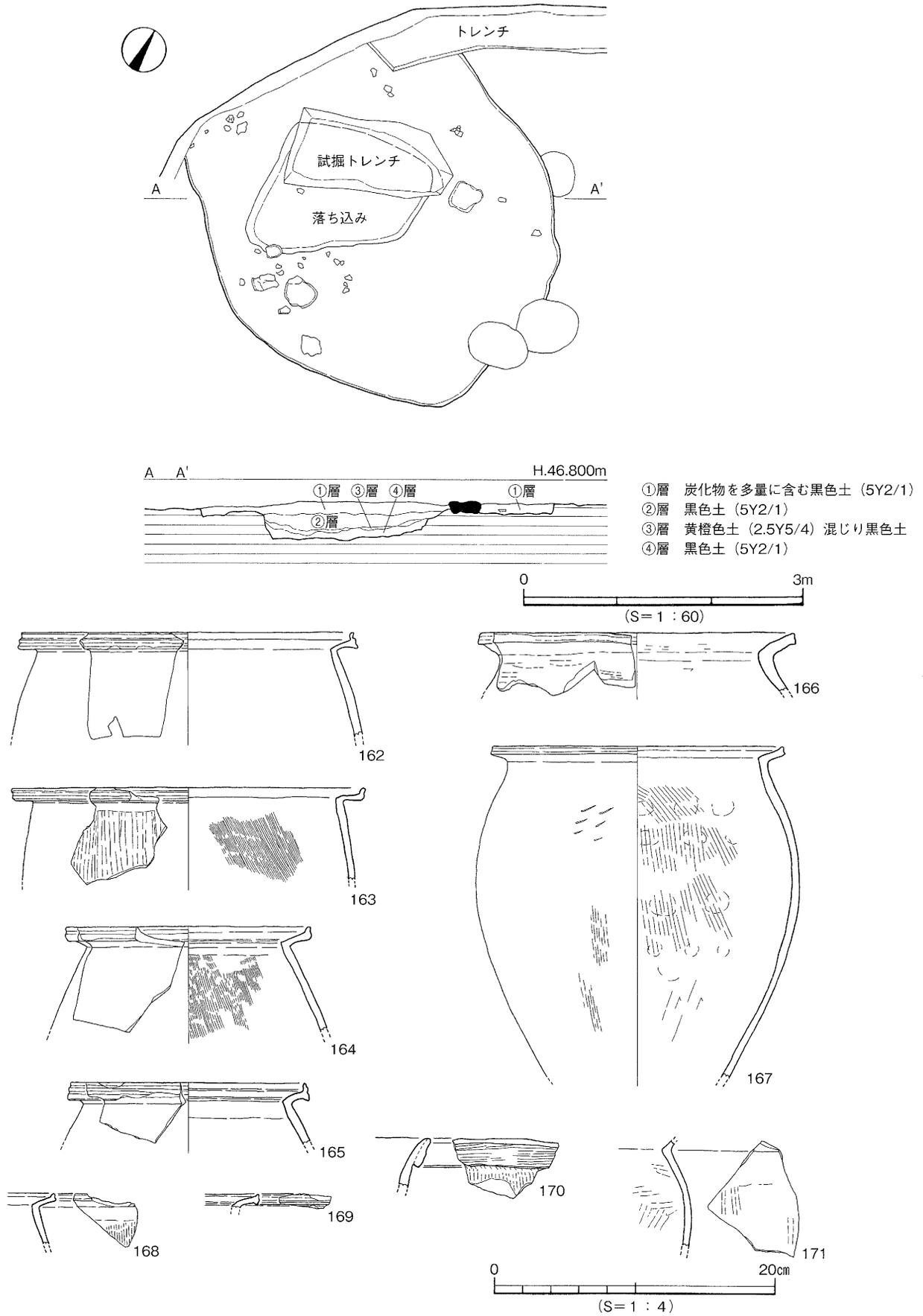
出土遺物（158～161） 158～160は壺、161はミニチュアの鉢である。158は口縁部の小破片2点が接合したものである。上方に大きく拡張され、3条の明瞭な凹線文が施される。159は中型品。口縁部はほぼ完存するものの、胴部の1/2を大きく欠く。口縁部は大きく開き、上下に拡張された端部には3条の明瞭な凹線文を施す。頸部直下にはハケの小口を押し付けた「ノ」字状の刻みがみられ、胴部外面は上半部が縦方向の細かいハケ調整、最大径付近が横方向のミガキ、下半部が縦方向のミガキ調整である。内面は上半部にハケ、下半部にハケ後縦方向のケズリ調整を施す。口径は12.2cmに復元され、残高30.2cmを測る。胴部は中位でやや張る器形となる。160は大型品で、ちょうど159を二回りほど大型化したものである。内外面の調整は159に類似しており、底部は平底を呈し、一部に黒斑が認められる。161は完形品。口縁部の破損は取り上げ時に生じたものであり、割れ口は新鮮な面を呈する。手捏ねで、指による整形後にナデで仕上げている。口径5.8cm、器高7.5cmを呈し、平底を呈し、口端は丸く収めている。

時期：後続するS B 502の帰属時期、遺構埋土、さらに出土遺物を総合して、S B 503は弥生時代中期後葉、梅木編年の伊予中部Ⅳ様式に時期比定される。

S B 501〔第41・42図、図版20-3・24〕

調査地東端部のV区西のD 4区、E 3・4区に位置し、一部は調査区外へ続く。V区北壁の観察に抛れば、3層の遺物包含層堆積以前に構築された可能性が高いものと判断される。平面形態は不整多角形状を呈し、規模は東西長4m、南北長3.8m、検出面からの深さ40cmを測り、中央やや西寄りには不整形の土坑状の落ち込みが伴う。確認調査（試掘）時にこの土坑状の落ち込みにトレンチが設定されていた。遺構検出時の埋土は炭化物を多量に含む黒色土（5 Y 2/1）の単一層であった。土坑状の落ち込みはこの黒色土を除去し、4層の黄橙色土上面でそのプランを確認した。埋土は②～④層に細分可能である。住居床面は土坑状の落ち込みを除いてほぼ平坦を呈する。付帯施設には先述した土坑状の落ち込みを除いては確認できていない。したがって支柱穴は未検出であることから、上屋構造は判然としない。遺構名称は暫定的に「S B」を付したに過ぎず、今後類例の増加によっては、名称を変更する必要性が生じる可能性もある。遺物は弥生土器と石器数点が散在して出土したが、いずれもほぼ住居床面で確認できたものである。

出土遺物（162～188） 162～181は弥生土器、182～185は縄文土器、186～188は石器である。このうち182～185は本住居埋没過程に流入した可能性が考えられる。旧地形の様相と、縄文時代晩期に帰属する遺構が本遺構の東側に位置することから、埋没過程における土の流入が北東方向からの可能性が高いものと判断される。この過程に立脚すれば本遺構は自然埋没であった可能性が示唆される。162～171は口縁部が遺存する甕、172～177は底部である。甕は中・小型品では「く」の字状口縁で肩部の張りは強い傾向にあるものが多く、口縁部は上方あるいは上下に端部を拡張させ、凹線文や擬凹



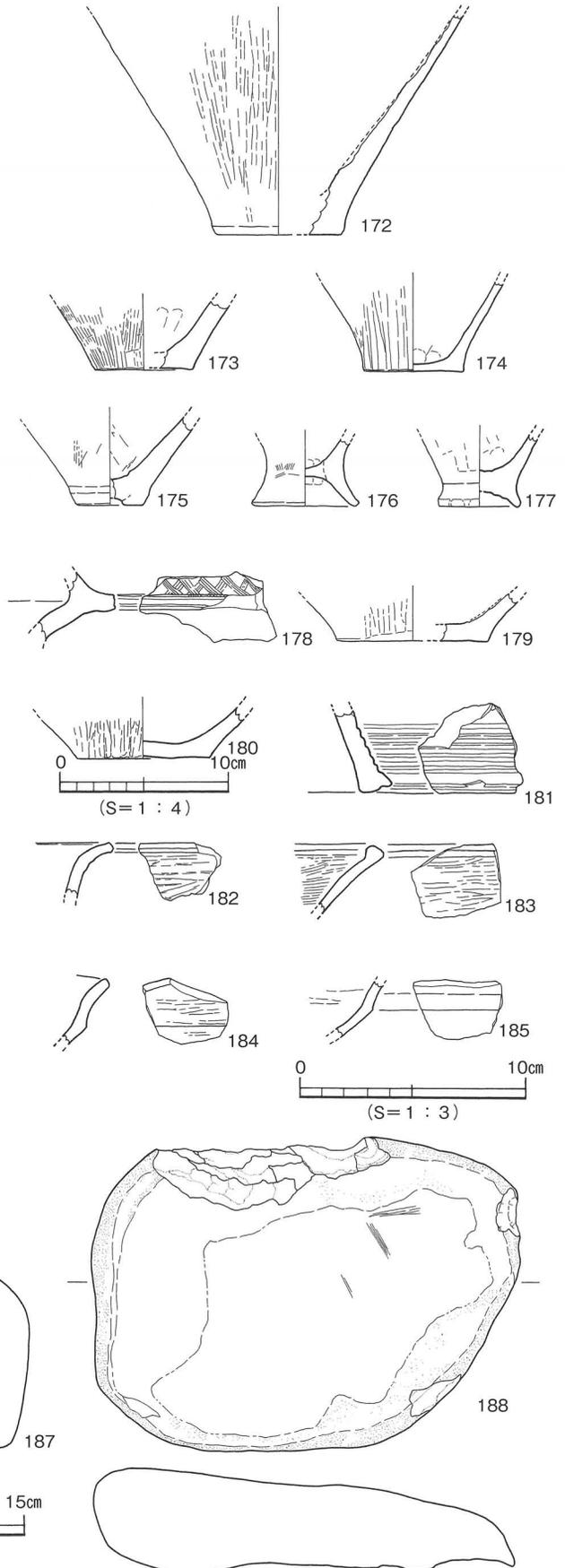
第41図 S B 501測量図及び出土遺物実測図(1)

線文を数条施す。170は特異な口縁部の形状を呈するものである。頸部の形状は判然としないが、緩やかに長く外反する口縁部をもち、口縁外面にみられる粘土帯は口縁部の上半に付く。調整は、外面が縦方向の荒いハケ、粘土帯上は横方向の荒いハケ後に横ナデを施す。内面は横方向の荒いミガキが看取される。色調は他の弥生土器とは大きく異なる。灰黄褐色(10Y R 6/2)を呈し、これに呼応して胎土には長石と石英粒が比較的多く、微細な金雲母片も認められる。178~180は壺、181は高坏の脚裾部片の可能性ある。186はサヌカイト製の打製石鏃で完存品。法量は長さ35.5mm、幅18mm、最大厚3.4mm、重量2.1gで、両面に広く素材面(初剝離面)が残置する。187と188は硬質砂岩製の粗砥で、188は台石としても利用している。

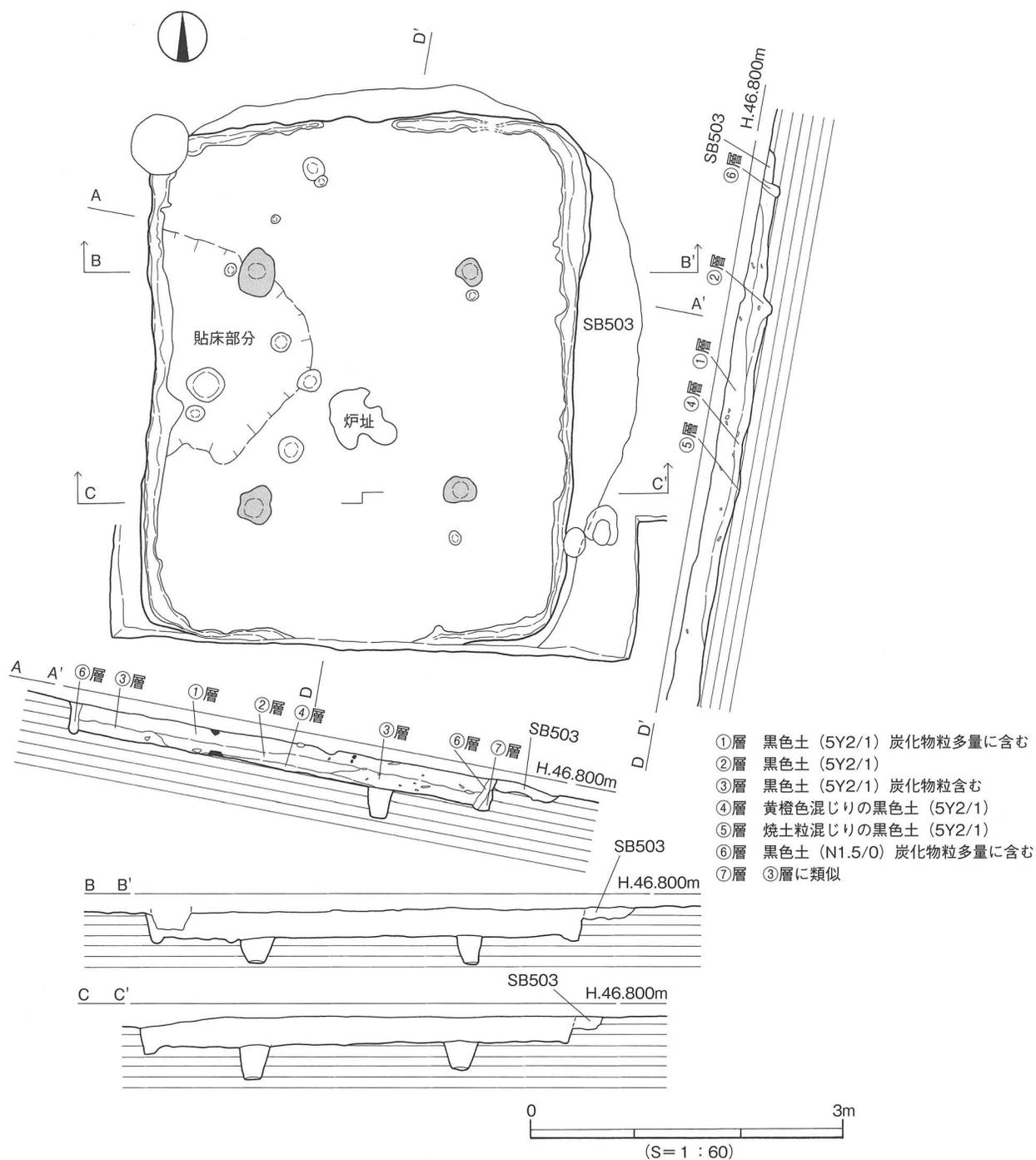
時期：遺構埋土と出土遺物、さらには遺構面から弥生時代後期前葉、梅木編年の伊予中部V-1様式に時期比定される。

S B 502 [第43~49図、図版21・25・26]

調査地東端部のV区中央南端のC4区に位置し、S B 503を切る(後続する)。平面形態は隅丸長方形を呈し、規模は東西長4.0m、南北長5.0m、検出面からの深さ28~54cmを測る。検出時の埋土は黒色土(5 Y 2/1)に多量の炭化物粒が混じるものであった。検出時に住居址の南壁が未検出であったことから、調査区(C4区)



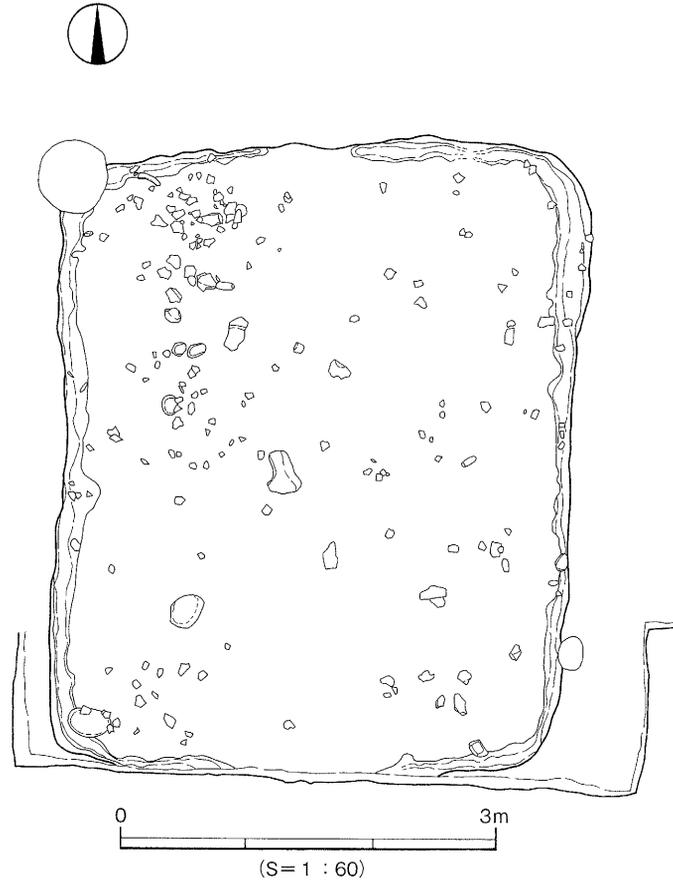
第42図 S B 501出土遺物実測図(2)



第43図 SB502測量図(1)

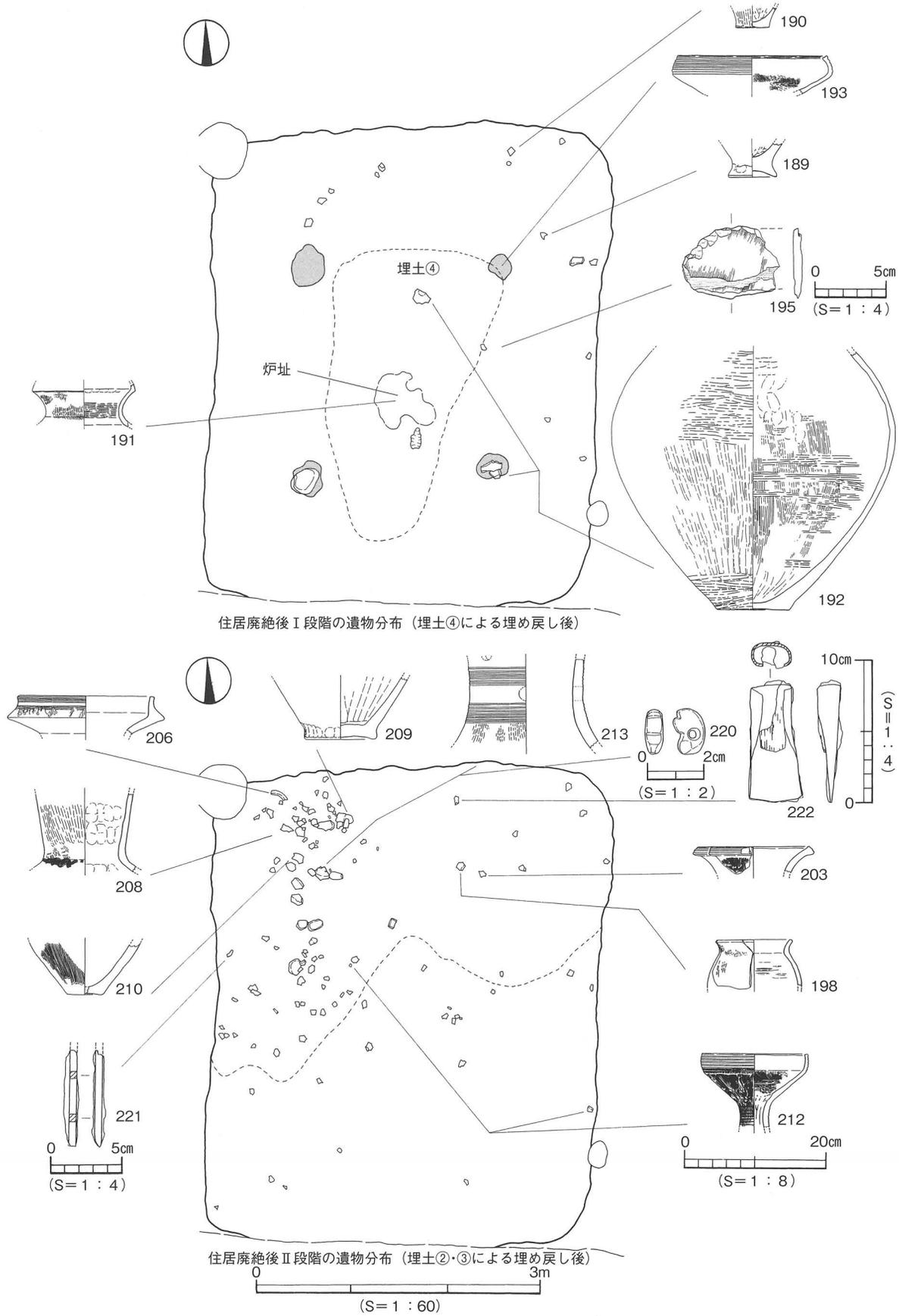
を南に拡張したところ、コーナー部を確認するに至り、平面形態と規模を理解することができた。埋土は①～⑦層に細分可能で、⑥は壁板痕跡と理解できる。注目すべきは埋土に顕著な斜面堆積が認め難い点である。すなわち、東西セクションベルト (A～A') の観察では、①と②③層の境界が水平を呈し、しかも壁板痕跡が確認できたことである。

精査時は6区画に分けて埋土の掘り下げを実施し、出土遺物の取り上げに際しては出土地点に加え、層位とレベル値を記録した。遺物の分布は、一見すると散漫であるかの印象を受ける〔第44図〕。出土地点、埋土、レベル値に基づいて作図したのが第45・46図である。以下ではこの図を用いて遺物

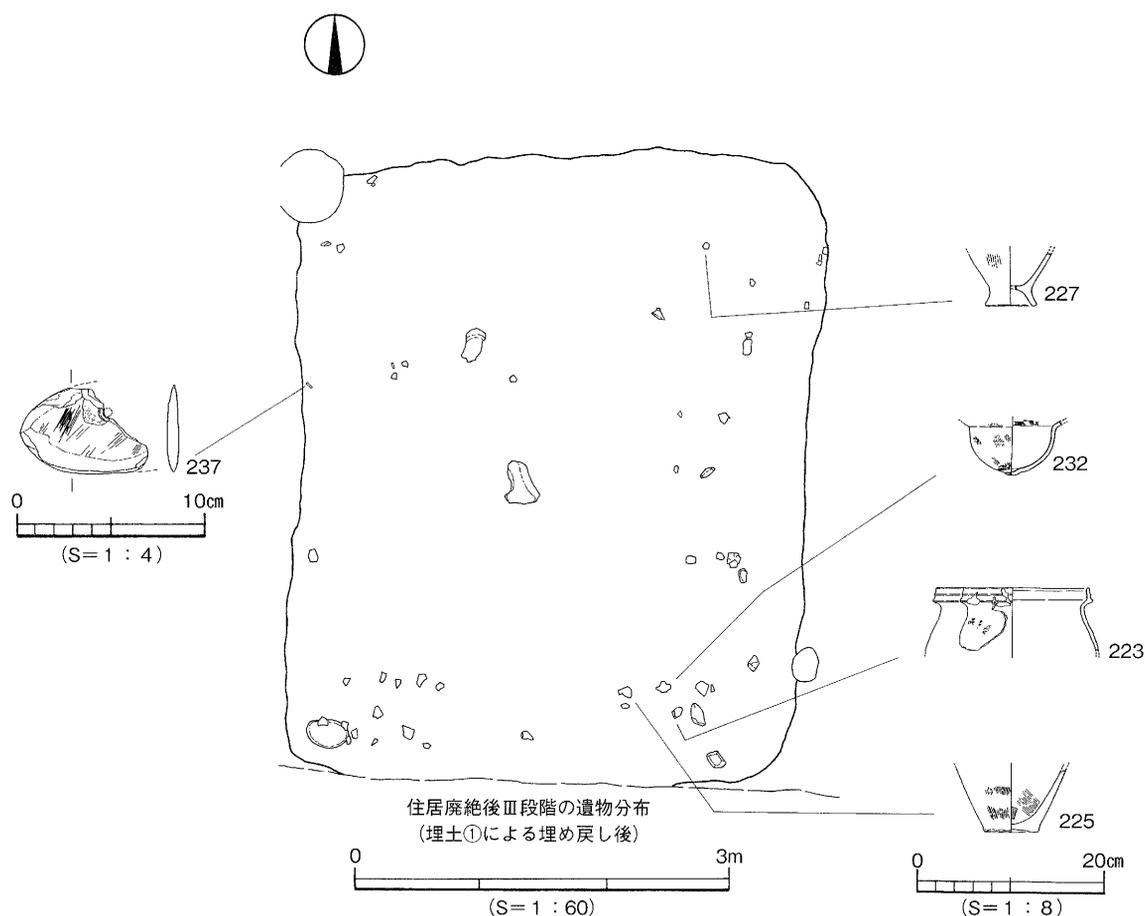


第44図 SB502測量図(2)

と埋土の事実関係について詳述する。本住居が廃絶された直後（住居廃絶後Ⅰ段階）は第45図の上
 に示したように、初期埋土の④層が住居中央に分布し、主要な遺物は、炉の複合口縁壺の口縁～頸部片
 (191)、S P③上面の口縁～頸部を欠く大型壺片 (192)、S P④上面の大型礫のほか、住居中央東寄
 りの石庖丁未製品 (195) である。なお、大型壺片は④層内出土の破片と接合する。次段階（住居廃
 絶後Ⅱ段階）は第45図の下に示したように、埋土③層が主に住居南半、②層が住居北半に分布する。
 遺物は主に②層内に多く認められる。なかでも複合口縁壺口縁部 (206)、長く伸びる頸部をもつ壺片
 (208)、器台片 (213)、袋状鉄斧 (222) がその主要なものとなる。注目すべきは、器台片の上から
 出土した翡翠製勾玉の完形品 (220) と、住居北寄り中央で出土した袋状鉄斧の完形品である〔図版
 25〕。この2点の遺物の遺存や出土状況が土器と大きく異なる点は興味深い事象となり、埋土に認め
 られた水平堆積と考え合わせ、住居廃絶過程に多様な遺物を用いての人為的埋め戻しが執行された可
 能性が高いものと理解しておきたい。調査で確認できた最終段階（住居廃絶後Ⅲ段階）は第46図に示
 したように、最終埋土の①層は住居全域に分布する。遺物は相対的に少なく、東壁と南壁近くで認め
 られる。主要な遺物には折り曲げ口縁の鉢 (232) と杏仁形磨製石庖丁の製品 (237) がある。なお、
 本層から縄文土器片 (236) が確認されており、これは埋め戻しの土（埋土①）に包含されていた可
 能性を考慮しておきたい。付帯施設には4基の支柱穴（S P①～④）、炉（S K①）、周壁溝がある。
 このうち周壁溝は北壁中央が途切れることが確認できた。4基の支柱穴からはいずれも柱痕は確認す
 るには至らず、輪郭が不整形であることから、抜き取られた可能性を指摘しておきたい。支柱穴以外



第45図 S B 502遺物分布図(1)

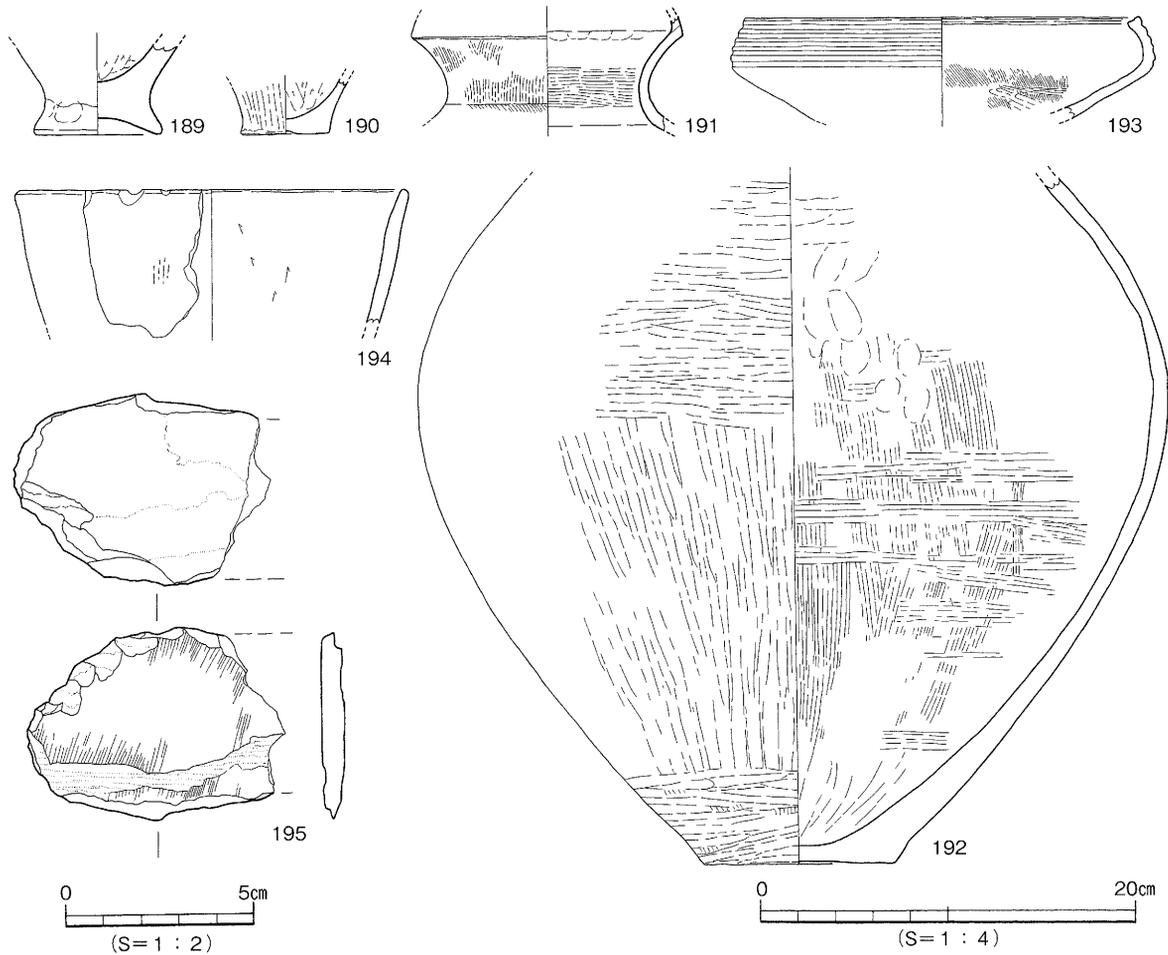


第46図 S B 502遺物分布図(2)

にも10基の小穴を検出したが、その機能と性格は明らかにできなかった。炉は住居址中央やや南寄り
で検出した。平面形態は不整形を呈するものの明確な掘り方は確認できず、焼土粒が混じる黒色土の
広がりを検出したにとどまる。

出土遺物(189~238) 189~194は住居床面と埋土④から出土した。189と190は甕底部、191は複合
口縁壺片で、口縁の接合部が「く」の字状を呈する。192は複合口縁壺の可能性が高い大型品である。
193は伊予中部Ⅳ様式の高坏で、埋め戻しの過程で④層に包含されていた遺物の可能性が高く、本住
居には直接伴うものではない。195は石庖丁未成品。緑色片岩製で右半部を大きく欠く。表面は自然
面(礫面)を直接研磨するのに対し、裏面は粗割段階の剝離面を研磨していることから、粗割段階で
板状に分割した剝片を素材としている。最大厚は6.9mmを測る。

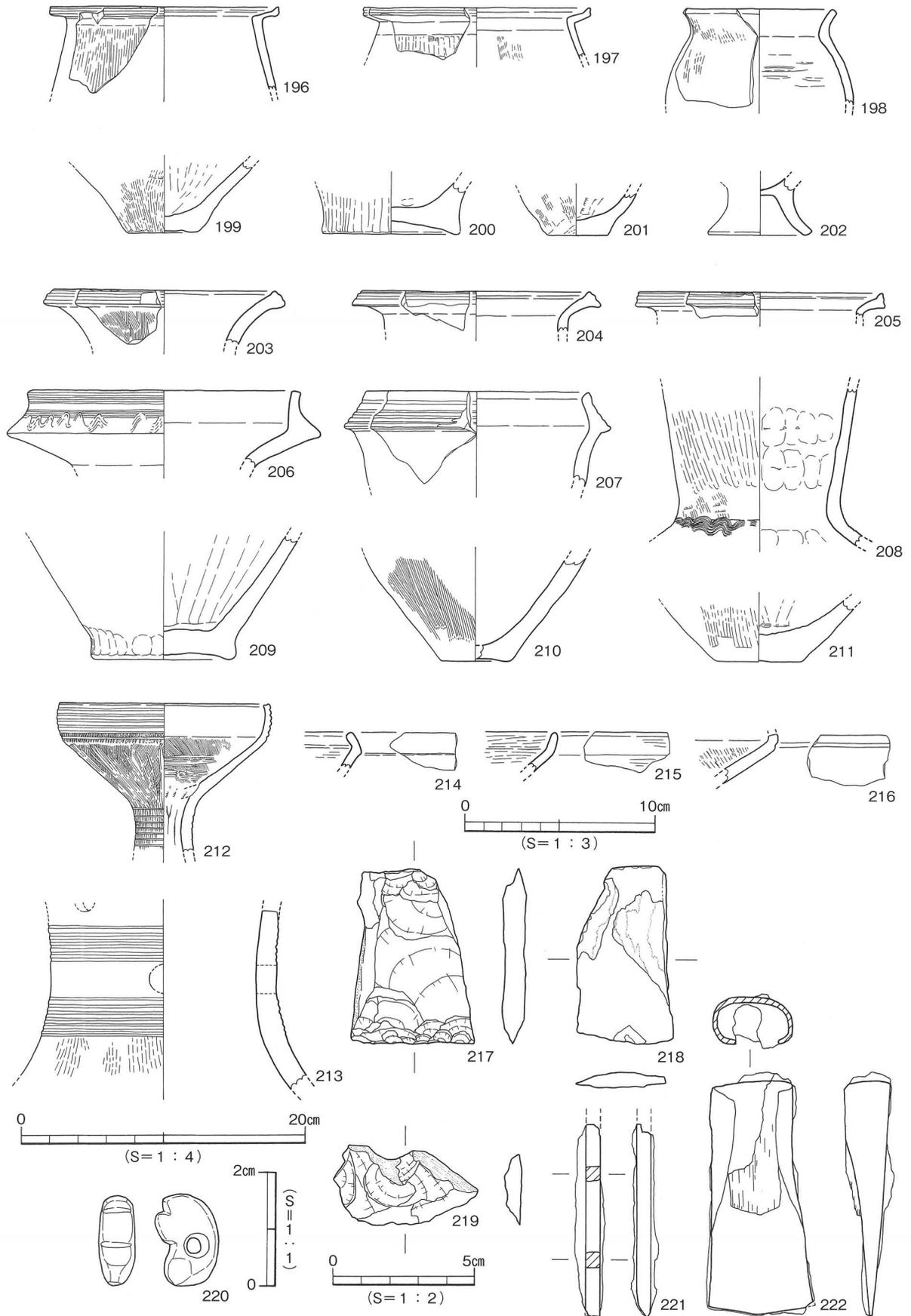
196~220は埋土③②から出土した。196~202は甕、203~211は壺、212は高坏、213は器台である。
甕は「く」の字状口縁で肩部の張りが弱いものがみられ、口端の拡張は顕著ではなく、わずかに上方
に拡張されるにとどまる。203~205は単口縁壺、206~208は複合口縁壺である。206は復元口径18.0
cmを測る「く」の字接合の中型品。複合口縁部外面には4条単位の櫛描沈線を2組巡らした後に、波
状文を施す。207は長く伸びる頸部をもち、やや袋状に近い口縁を呈する。復元口径15.8cmを測り、
色調と胎土は在地品と同じである。212は坏部の深い長脚タイプで、外面はハケ後に縦方向のミガキ
が顕著に認められる。213は上下がスカート状に開く在地品。復元径2cmの円形透かしが千鳥に配さ



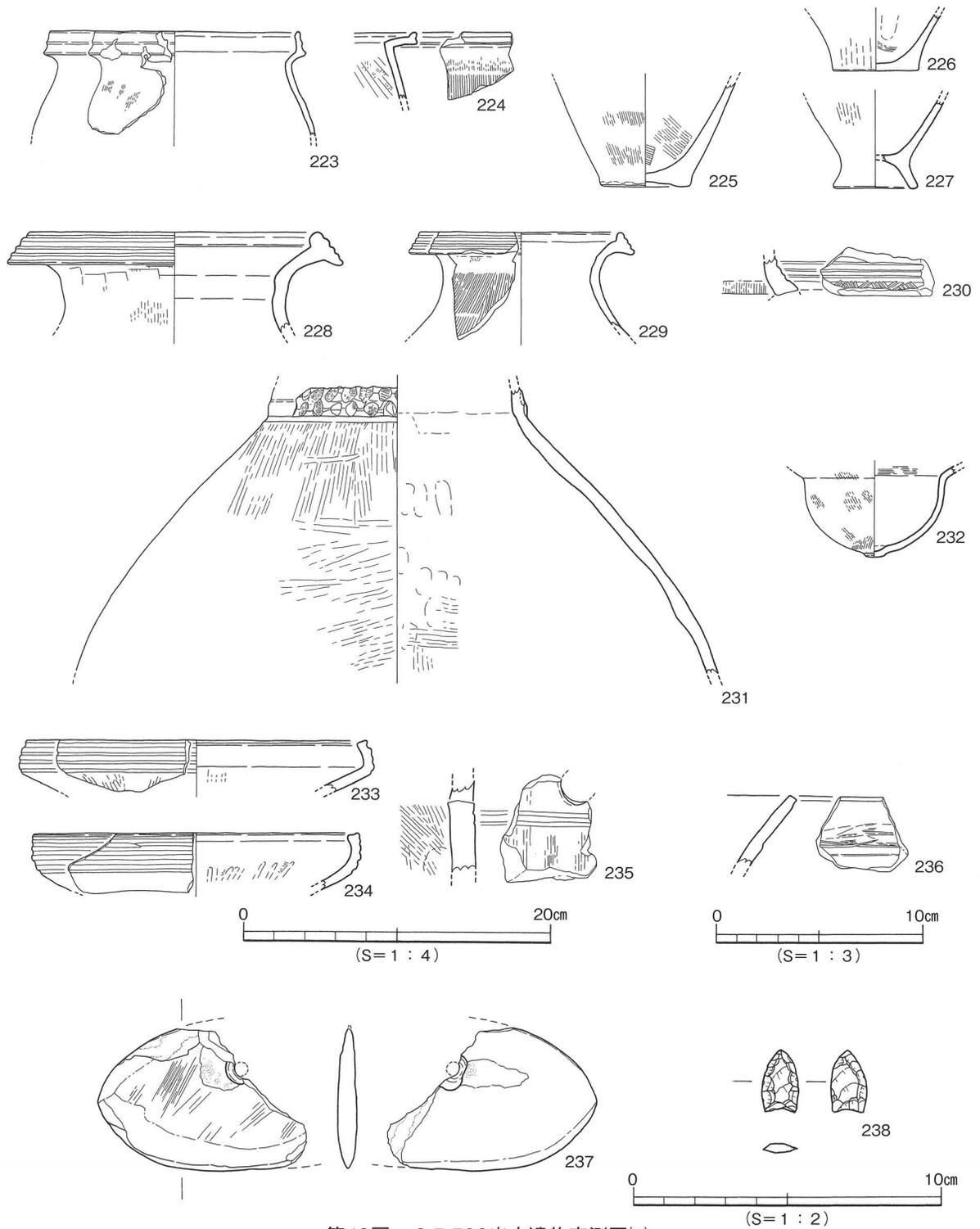
第47図 S B 502出土遺物実測図(1)

れる。217はサヌカイト製スクレイパー完形品。右側面は折れ面、左側面は自然面が残置する。218は緑色片岩製の伐採斧破損品の再加工途中品で、扁平片刃石斧研磨段階の未成品である。裏面の破損面には研磨は及んでいない。最大厚5.9mmを測る。219はサヌカイト製横長剝片。220は勾玉完形品。頭部の孔は両面穿孔による。長さ16mmを測る。221と222は鉄製品。221は鑿で、基部を欠く。横断面形態は方形を呈する。222は袋状鉄斧の完形品。袋部には木質が遺存する。

223～238は埋土①層から出土した。223～227は甕。223は口縁部を上方に拡張する。228と229は長頸で筒状の頸部をもち、口端は上下に拡張し、4条の凹線文を施す壺。230は複合口縁壺大型品の複合口縁部片で、外面には楡描山形文がみられる。231は複合口縁壺の胴上半部片である。大型品に比して遺存不良であることから、反転復元をおこない実測図を作成したものである。頸部には幅広の刻み目突帯を巡らす。232は折り曲げ口縁の鉢で、口縁部は欠き、胴部は1/2は欠損する。底部が小さく突出することから、口縁部は長く、強く外反する形状の可能性が高い。233と234は高坏の小片で、坏部が浅いタイプとなる。坏部の口縁外面には4～5条の凹線文を施す。235は器台の胴部片で径2.2cmの円形の透かしがみられる。236は外面に条痕調整を残す縄文土器小片である。237は緑色片岩製磨製石庖丁の成品で、右半部を大きく欠く。比較的丁寧な研磨がなされ、表面の刃縁には光沢が看取され、イネ科植物の切断（穂摘み）に用いられたことが想起される。最大厚6.2mmを測る。238はサヌカイト



第48図 S B 502出土遺物実測図(2)



第49図 S B 502出土遺物実測図(3)

製打製石鎌の完形品。二等辺三角形を呈し、基部にはわずかな抉りをいれた凹基無茎式である。法量は長さ20mm、幅12mm、最大厚3.3mmを測る小型品である。

時期：遺構埋土と出土遺物、さらにS B 503を切ることから、S B 502は弥生時代後期後葉、梅木編年の伊予中部V-3様式に時期比定される。遺物と埋土との関係を追及した結果、本住居からは廃絶後に多様な遺物を用いて人為的な埋め戻しが執行された可能性の高いことが明らかとなった。

(2) 土坑 (SK)

SK504 [第50図]

調査地中央のやや東寄り、V区西部のD3区に位置し、SK503を切る(後続する)。平面形態は方形を呈し、規模は東西長1.3m、南北長1.4m、検出面からの深さ35cmを測る。検出時はSK503との重複関係が判然としなかったことから、南北に半裁してから埋土の精査を行い、平・断面の双方から埋土の違いを検討したところ、SK503を切ることを確認した。埋土は三層に細分可能で、遺物は埋土中位から弥生土器小片が出土した。

出土遺物 239は甕の小片で、「く」の字状口縁で肩部の張りは弱い。口端の拡張はわずかで、ナデにより上下に拡張される。

時期：埋土と出土遺物から弥生時代後期前葉、梅木編年の伊予中部V-1様式に時期比定される。

SK502 [第51図、図版26]

調査地東端部のV区南東隅のA4区に位置する。調査当初の検出時は一部が調査区外へ続くことから、拡張して遺構輪郭を確定させた。平面形態は方形を呈し、規模は東西長1.1m、南北長0.9m、検出面からの深さは14cmを測り、埋土は黒色土(5Y2/1)の単一層である。遺物は埋土中から弥生土器とガラス小玉が出土した。

出土遺物 (240~243) 240は小型の甕で、小さな平底となる。外面は縦方向のハケ目調整後にミガキを施す。241は壺頸部片で、頸部の1/4の遺存。頸部の形状から直立する短い頸部に外反する口縁部をもつ長頸壺の可能性がある。242は大型の鉢で、全体の1/2の遺存。口縁はやや内湾気味で、口端は尖る。体部は直線的にすぼまり、底部は小さな平底である。調整は外面が細かいハケ目、内面がハケ後に下半に指ナデを施す。口径16.8cm、器高9.5cmを測る。243は水色を呈する完形品のガラス小玉である。

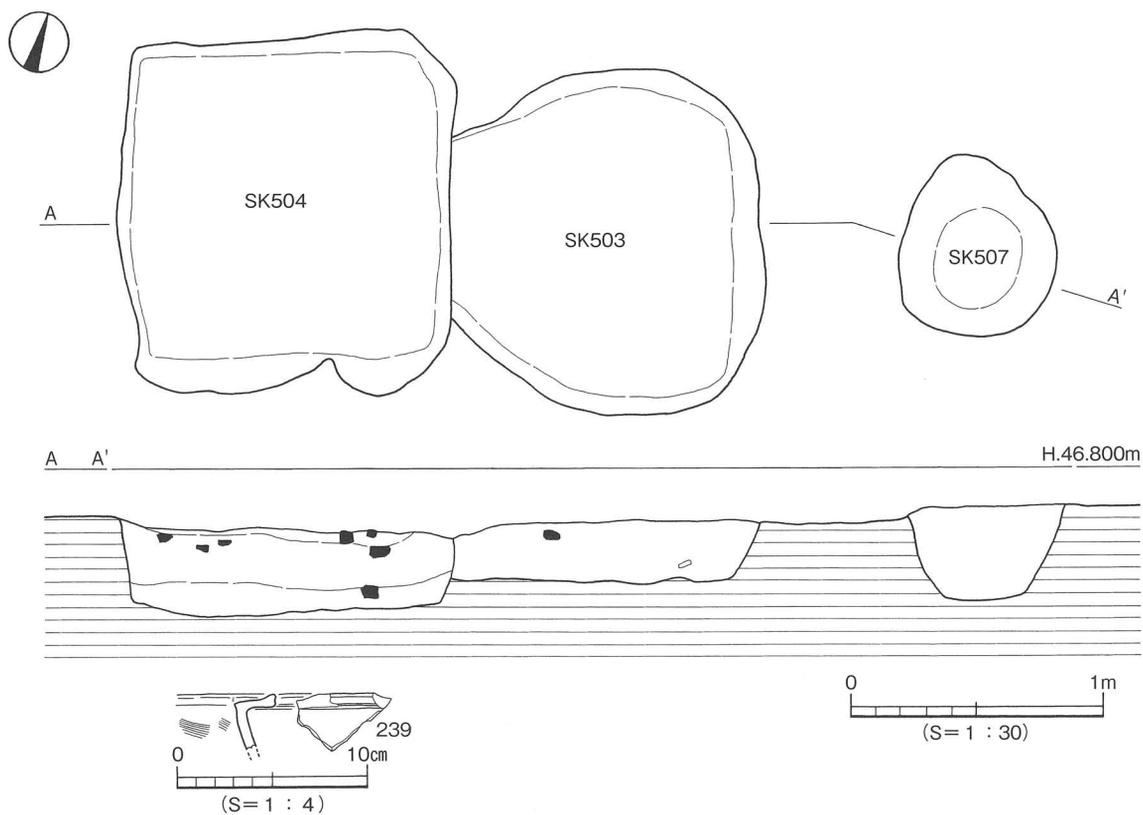
時期：埋土と出土遺物から弥生時代後期後葉、梅木編年の伊予中部V-4様式(梅木Ⅲ-1：終末期古相)に時期比定される。埋土中から完形のガラス小玉が出土したことから、遺構廃絶時に特別な行為を執行した可能性があることを指摘しておきたい。

SK201 [第52図、図版23-1~3・26]

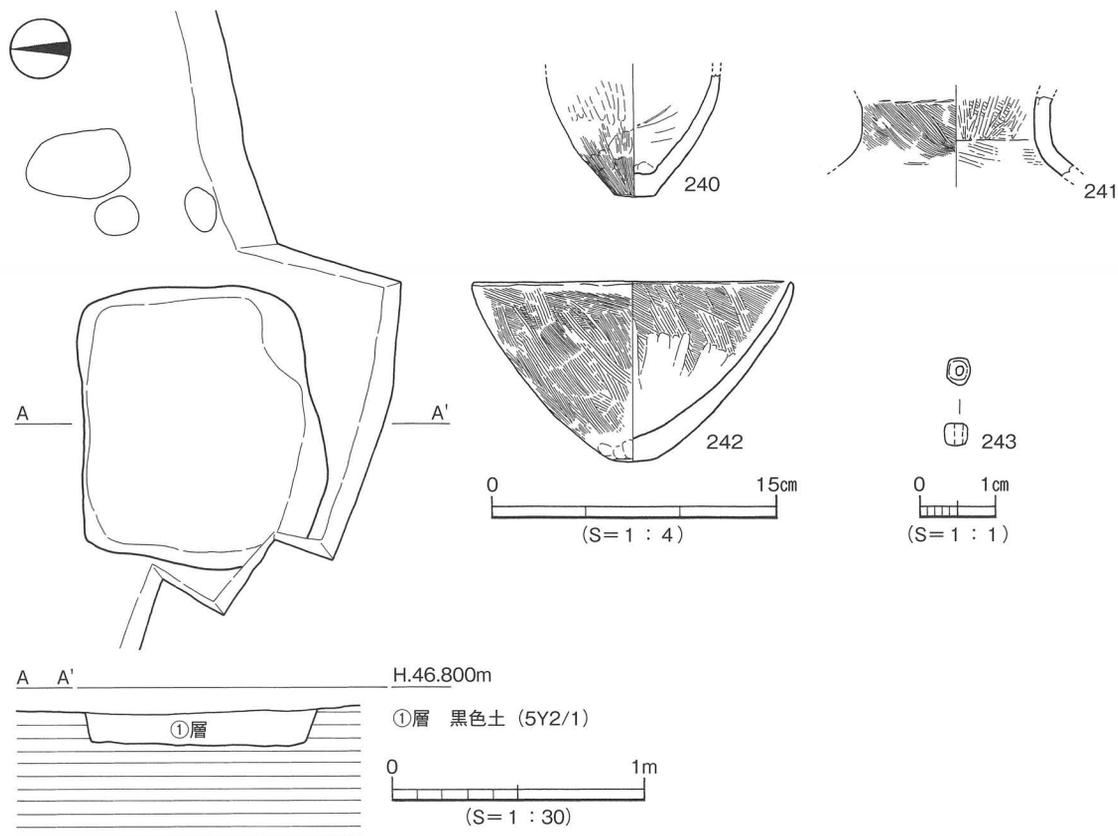
調査地西部のⅡ区南西隅のG7区に位置し、一部は調査区外へ続き、遺構の南西端はSP234を切る(後続する)。Ⅱ区西壁の観察に拠れば、4層上面にて構築された可能性が高いものと判断される。平面形態は隅丸方形あるいは隅丸長方形を呈するものと考えられ、規模は東西検出長1.0m、南北長1.2m、検出面からの深さ20cmを測る。遺構検出時の埋土は黒色土(5Y2/1)で、焼土や遺物は認められなかった。精査過程で埋土が3層に細分され、それぞれが5~7cmの斜面堆積であることを確認した。また、少なくとも3個体以上の甕が伴うことも判明した。遺物のうち、244は比較的遺存が良いものの、いずれも口縁~胴部上半にかけての破片で、胴部下半~底部を欠く。

出土遺物 (244~246) いずれの甕も口縁部がやや長く、胴中位の張りが弱く、外面にはハケ目調整後にタタキを施す。内面の口縁と胴部の境界には明瞭な稜をもち、口端を面取りする。復元口径15.8~17cmを測る中型甕である。

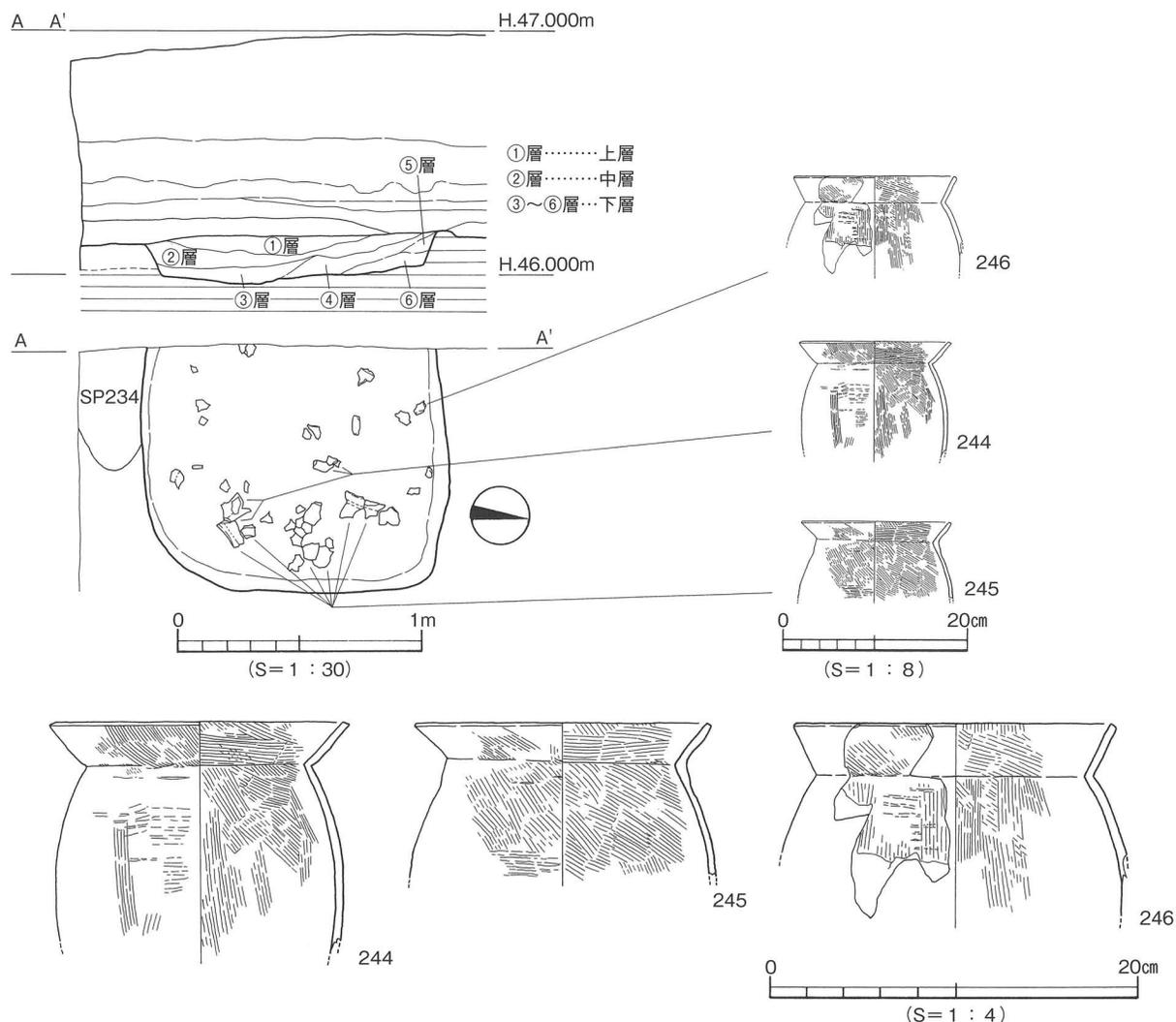
時期：出土遺物からは器種構成が判然としないものの、甕の形状から弥生時代後期終末、梅木編年



第50図 SK503・504・507測量図及び出土遺物実測図



第51図 SK502測量図及び出土遺物実測図



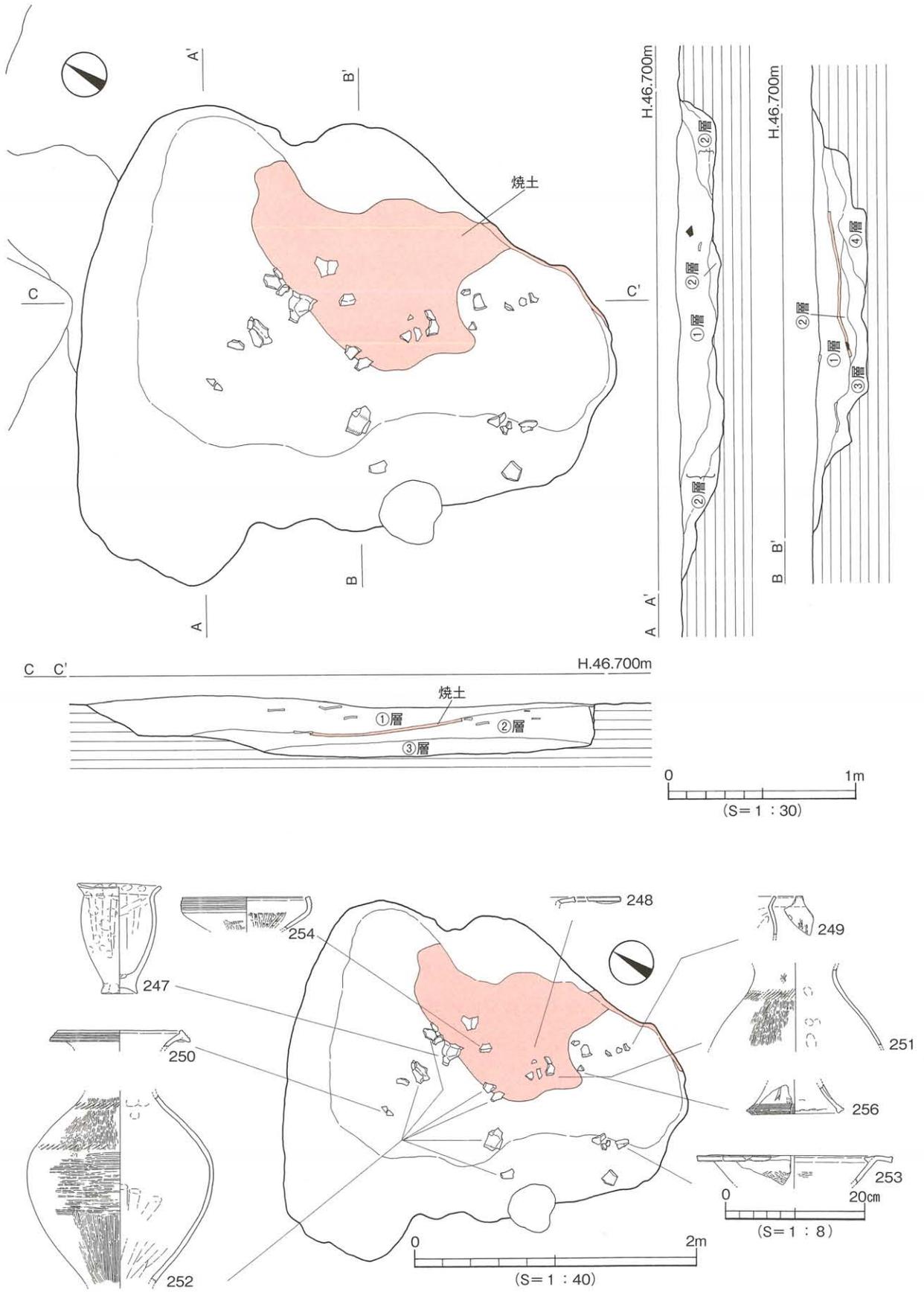
第52図 SK201測量図及び出土遺物実測図

の伊予中部V-4様式（梅木Ⅲ-2：終末期新相）に時期比定される。

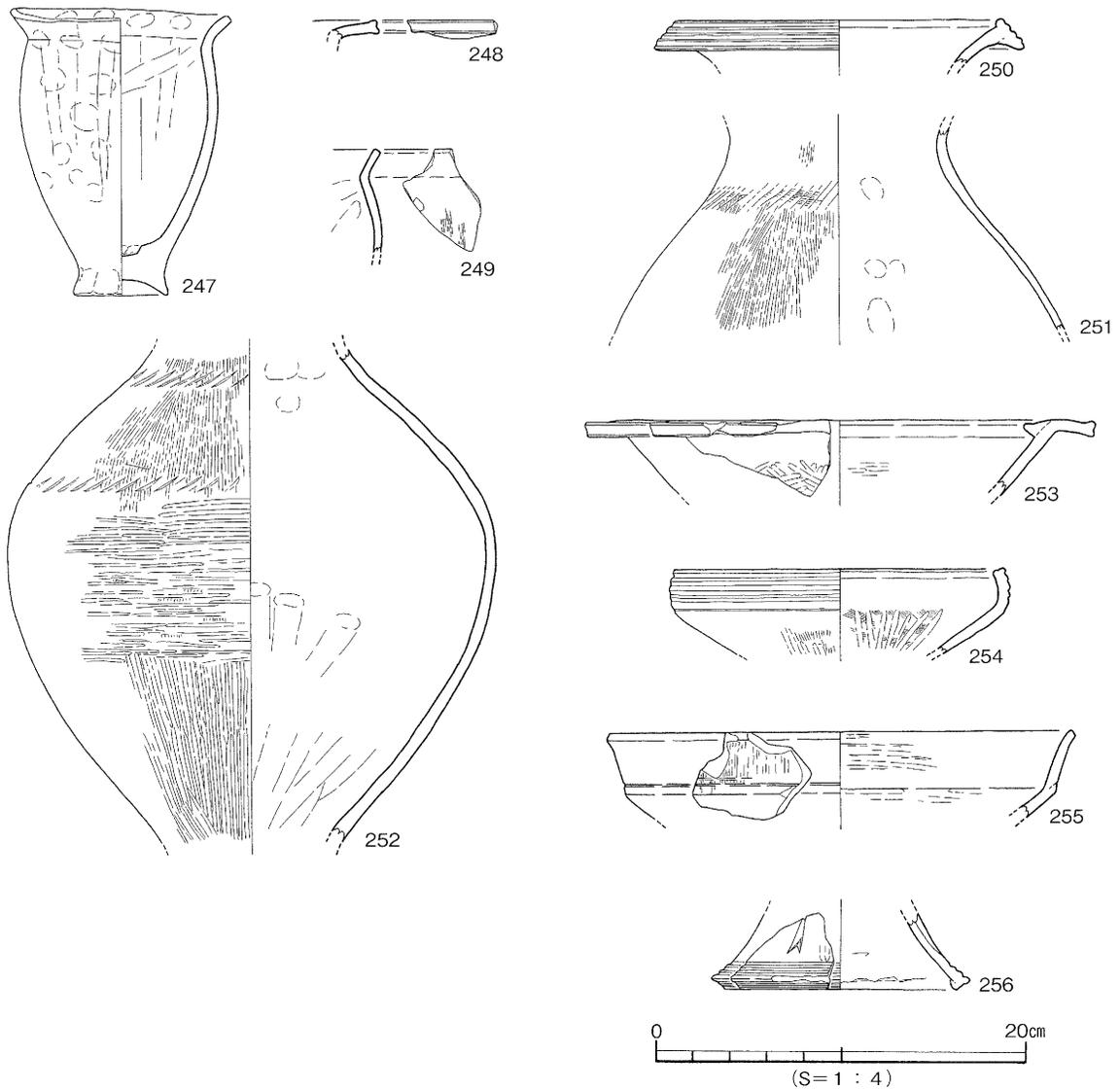
(3) 性格不明遺構 (SX)

SX301 [第53・54図、図版22・26]

調査地東部のIV区西、D5・6区、E5・6区に位置する。平面形態は瓢箪形を呈するが括れ度は小さい。規模は長軸2.8m、短軸2.56m、検出面からの深さ30cmを測り、検出時の埋土は暗褐色（10Y R3/3）土で、炭化物や焼土、遺物は確認できなかった。精査時は短軸方向に2本のセクションベルトを設け、このベルト沿いにサブトレンチを入れ、埋土の堆積状況を確認・検討した。埋土は①~④層に細分可能であるが、遺物の包含と焼土層を基準として、上層（①層）と下層（②~④層）に括るのが妥当と判断した。②~④層は色調が酷似しており、包含する炭化物の大きさや量といったわずかな違いを根拠として分層したものである。①層が暗褐色土で遺物の大半を包含していた。②層は黒色土（5Y2/1）で、上部には層厚2cmの焼土が認められた。この焼土は遺構の東側に分布しており、一部は遺構の輪郭に沿って分布していた。なお、床面に焼土や炭化物は確認できなかった。遺物は弥生土器に限られ、甕、壺、高坏がある。壺には大型の破片を含む。これらの遺物には二次焼成は認め



第53図 S X 301測量図及び遺物分布図



第54図 S X 301出土遺物実測図

られない。

出土遺物（247～256） 247～249は甕、250～252は壺、253～256は高坏である。247は「く」の字状口縁で肩部の張りが弱く、底部は小さく括れる上げ底となる。出土時は破片であったが、接合作業によりほぼ完形に復元できた。251は長頸で筒状の頸部をもつ。頸部には板状工具小口の押圧による施文を施す。252は7破片が接合できたもので、胴部形態の判る良品である。肩部はやや張り、頸部下端と胴中位のやや上には「ノ」字状の刻みを連続して施す。253は内面隆起帯を有する水平口縁の坏部である。口端は強いヨコナデにより凹み、坏部内外面には丁寧なヘラミガキを施す。なお、内外面の一部に赤色顔料が認められる。254は直口口縁の坏部。256は脚裾部片で3破片あり、接合できないものの同一個体の可能性が高い。外面に凹線文3条、脚端面に太い凹線文を施す。なお外面には未貫通の矢羽根状の透かしがあり、脚裾の内外面に黒斑がみられる。

時期：埋土と出土遺物から、S X 301は弥生時代中期後葉、梅木編年の伊予中部IV様式に時期比定される。

S X 202 [第55図]

調査地西部のⅡ区北端、G 4・5区に位置し、わずかに遺構の一部が調査区外へ続く。平面形態は不整形で、深さは一定しない。規模は検出長4.2m、短軸0.9~1.3m、検出面からの深さ5~24cmを測り、埋土は暗褐色土(10Y R3/3)の単一層で、埋土中からは弥生土器片が少量出土した。

出土遺物(257) 257は「く」の字状口縁で肩部の張りが弱い甕である。口端の拡張は顕著ではなく、上下にわずかな拡張にとどまる。

時期：わずかな遺物ではあるが、埋土と考えて合わせて、弥生時代中期後葉、梅木編年の伊予中部Ⅳ様式に時期比定しておきたい。

6. その他の遺構と遺物

(1) 土坑(SK)

S K 301 [第56図]

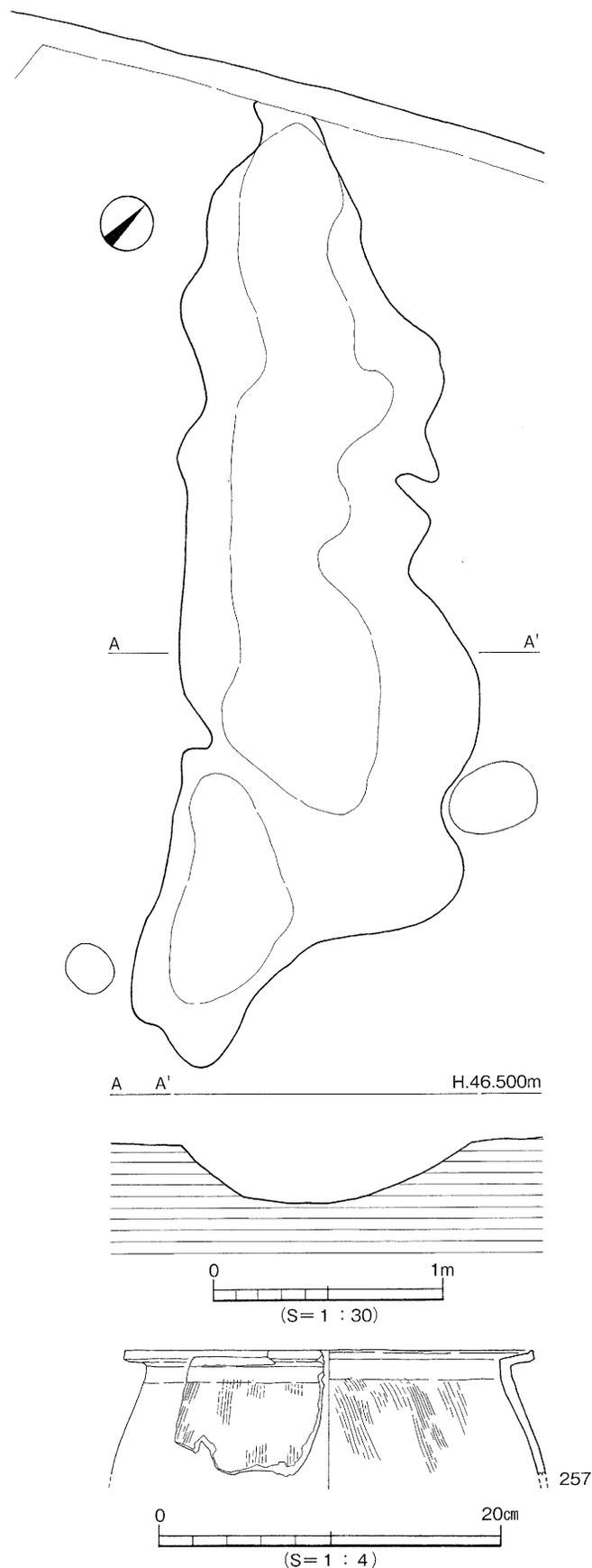
調査地東部のⅣ区西、D 5区に位置する。平面形態は隅丸形状を呈し、規模は東西長1.4m、南北長1.0m、検出面からの深さ22cmを測る。埋土は黄橙色土(2.5Y 5/4)の粒混じり灰色土(N5/0)の単一層で、土は軟質である。遺物は埋土中から縄文土器片1点と弥生土器数点が出土した。

出土遺物(258~262) 258~261は弥生土器の甕、262は縄文土器の深鉢である。

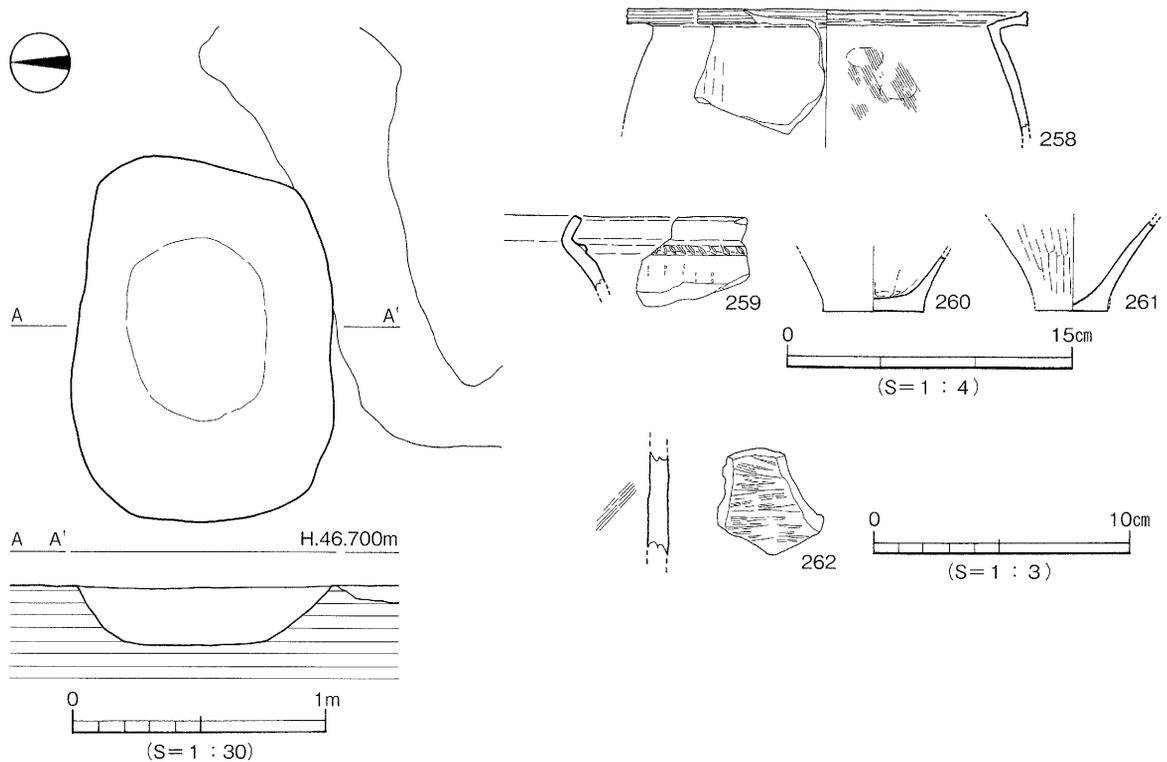
時期：遺物の主体は弥生時代中期後葉であるが、遺構埋土が灰色系であることから、中世以降に掘削された土坑と理解する。遺物は土坑の埋没過程で流入した可能性が高く、直接伴うものではなく混入品と考えられる。

7. 小 結

今次調査では、縄文時代晩期、弥生時代中期後葉~後期前葉、同後期後葉~終末の生活



第55図 S X 202測量図及び出土遺物実測図



第56図 S K 301測量図及び出土遺物実測図

関連遺構を確認したことが最大の成果である。今次の対象地を含む一帯は松山市の指定する周知の埋蔵文化財包蔵地に該当していないこともあり、これまで埋蔵文化財調査が皆無に近い状況であった。このことから、今次調査で得られたいくつかの成果は当地周辺における埋蔵文化財調査の重要な知見のひとつに位置付けられる。以下、いくつかの注目される項目を取り上げて整理しておきたい。

(1) 土層について

今次調査で検出した土層は1～4層で、このうち4層は石手川中流南岸域では従来「地山」と呼称され、既往の調査では遺構確認面として認知されてきた。注目されるのは3層の遺物包含層であり、堆積時期が弥生時代中～後期と考えられる。この遺物包含層は周辺にも分布することが考えられ、当該期の埋蔵文化財の広がりや遺跡の遺存状況を理解する上でひとつの指標になり得る可能性が高い。同1次調査地からも本層が確認されていることから、少なくとも今次対象地の西側にはこの黒色系遺物包含層（統一基本土層の第IV層）が分布していることは確かといえよう。

(2) 遺構の変遷について

事実報告では時代毎に調査成果を詳述してきたので、ここでは遺構の変遷を整理しておく。

[縄文時代]

縄文時代に遡る明確な生活関連遺構はV区東端部に構築された土坑である。地形的にやや高所に位置するが、後世の土地開発に伴い対象地一帯が大きく削られたことに起因し、土坑の遺存はわずかであった。精査により土坑の形態、規模、埋土が明らかとなり、わずかではあるが共伴遺物も確認でき

た。土坑は平面形態と規模、さらに断面形状から穴倉（貯蔵穴）の可能性が高いと判断される。

[弥生時代]

弥生時代は中期後葉～後期前葉と後期後葉～後期終末の遺構が確認されている。遺構は主に調査地の北東部に多い。中期後葉～後期前葉は竪穴式住居址 S B 501・503、土坑 S K 504、性格不明遺構 S X 301が該当する主要遺構で、居住施設と貯蔵施設とを確認したことになる。S B 503は直径5 m前後の円形に復元可能な竪穴式住居址であることが確認されたものの、重複関係から主柱穴を始めとする付帯施設については判明するには至らず、課題となった。S K 504は一辺1.3m前後の方形の穴倉であることが確認された。S X 301は遺構名に S X（性格不明）を付したように、形態、規模、埋土から遺構の性格や機能を復元することは現時点で困難である。今後の類例の増加を待って再検討すべき遺構といえる。

後期後葉～終末は竪穴式住居址 S B 502と土坑 S K 201・502が該当する主要遺構で、居住施設と貯蔵施設とが確認できた点は前段階と同様である。興味深いのは S B 502が4×5 mの隅丸長方形竪穴式住居址であった点である。同1次調査地において既に当該期に直径9 m弱の大型円形竪穴式住居と、一辺5 m前後の小型方形竪穴式住居と組み合うことが確認されており、S B 502はこの組み合わせを追認する資料と位置付けることができるのではないだろうか。

[まとめ]

このように、今次調査では縄文時代晩期に遡って土地利用が始まったことが確認できた。穴倉という貯蔵施設の検出により、定住生活を含む本格的土地利用の開始時期を当該期に遡って理解することが可能となってきた。弥生時代に移行すると、中期後葉～後期前葉には当地が生活領域の一角を担っていたことを確認した。後期後葉～終末も同様であり、少なくとも弥生時代後半期には集落経営が本格化し、一定の広がりをもって展開していた可能性が高いと評価できよう。

（3）弥生時代後期後葉の竪穴式住居址 S B 502について

先述したように S B 502は、4×5 mの隅丸長方形の小型竪穴式住居址である。埋土の堆積状況、埋土と遺物の分布状況、さらに完形の勾玉と袋状鉄斧の出土状況から、竪穴式住居の廃絶後に人為的埋め戻しの執行された可能性が高いことを明らかにした。主柱穴からは柱痕が確認されず、いくつかの主柱穴ではその上面を覆う形で弥生土器や大型礫が出土していることから、住居は廃絶時に主柱が抜かれていた可能性が考えられよう。このことを積極的に評価して、廃絶時には屋根を含む構造体が撤去され、竪穴式住居はオープンで開放され、勾玉と鉄製品を含む遺物の供献と人為的埋め戻しの両行為が連動して執行された可能性が高いものと考えておきたい。主要な建築部材は新たな竪穴式住居に転用（再利用）されたことが予想される。

このように、竪穴式住居址の精査では埋土の堆積、埋土と遺物の分布、考古遺物の出土状況、さらに主柱穴における柱痕の有無を追求することで、廃絶住居に対して執行された行為の実像を具体的に復元することが可能となる。その要因については多様であったことは想像に難くないが、現時点では住居を構築して生活を行うことができた感謝とその土地への畏敬の念をその候補のひとつに挙げておきたい。すなわち、威信財である翡翠製勾玉や袋状鉄斧の完形品とともに弥生後期土器の破片を住居に供献する過程で、住居構築で生じた窪地を埋め戻したものと考えておきたい。この場合、集落自体は当地を含む周辺一帯で継続して経営されたと理解し、当地一帯を居住区として引き続き活用するこ

とを目的として埋め戻し行為が執行された可能性があるのではないだろうか。今後も同様な視点で野外調査を継続的に実施することにより、更なる議論の積み重ねが可能になるものと考ええる。

(4) 石庖丁について

今次調査では2点の石庖丁を確認した。該当資料はS B 502出土の195と237である。ともに緑色片岩で、在地石材を採用している点は共通する。異なっている点は前者が未成品、後者が成品である点である。共伴した弥生土器の下限が後期後葉であることから、S B 502をこの時期に帰属するものと理解した。ではこの2点の石庖丁はS B 502に伴うものとして理解できるのであろうか。成品と認定した237について検討を加えておきたい。これは、平面形態が杏仁形（弧背弧刃形）を呈し、最大厚6.2mmを測り、両面の研磨が刃部にとどまらず体部全面に及ぶ。右半部を欠くが、二孔を伴うものと考えれば長さ12cm以上に復元可能となる。既往の石庖丁に関する研究成果〔加島2004〕を参照すると、平面形態、仕上げの研磨が及ぶ範囲、さらに法量（長さ）と紐がかりが孔であることから、本資料が後期後葉に帰属する可能性は低く、この前段階（中期後葉～後期中葉）に帰属する可能性が高いものと考えられる。237が出土した埋土①には中期後葉の弥生土器（甕、壺、高坏）も多く含まれており、S B 503にはこの時期の弥生土器を伴う。また、S B 503はS B 502に先行して構築された竪穴式住居で、S B 502とは重複関係にある点を考慮すると、石庖丁237は本来S B 503に伴う可能性が高く、S B 502廃絶後の埋め戻しの際に混入した可能性が考えられる。したがって、237はS B 502に伴うものではなく、先行して構築されていたS B 503に伴う石器と評価できるのではないだろうか。

このように、遺構から出土した遺物には、確実に遺構に伴うものに加えて、遺構構築以前の遺物や遺構埋没後の遺物が混入するケースも考えられる。S B 502がこの事例に該当する一例となり、調査のポイントは野外調査での観察と記録、室内調査での検証にあるものと考ええる。これらを有機的に結合させることにより、遺物の帰属時期をはじめ遺構の埋没要因について言及できる可能性もある。出土遺物に対しては埋土との関係や出土状況を踏まえた上で報告すべきである点を今一度確認しておきたい。

【参考文献】

- 梅木謙一 2000 「四国地域の様式編年 3. 伊予中部地域」『弥生土器の様式と編年 四国編』菅原康夫・梅木謙一編 木耳社
- 梅木謙一 2001 「伊予中部の土器」『庄内式土器研究24』庄内式土器研究会
- 加島次郎 2004 「伊予における石庖丁の展開」『西南四国－九州間の交流に関する考古学的研究』研究代表者 下條信行 平成14～15年度科学研究費補助金基盤研究(C)(1)

第6章

東野森ノ木遺跡

3次調査地

第6章 東野森ノ木遺跡3次調査地

1. 野外調査の経過と方法

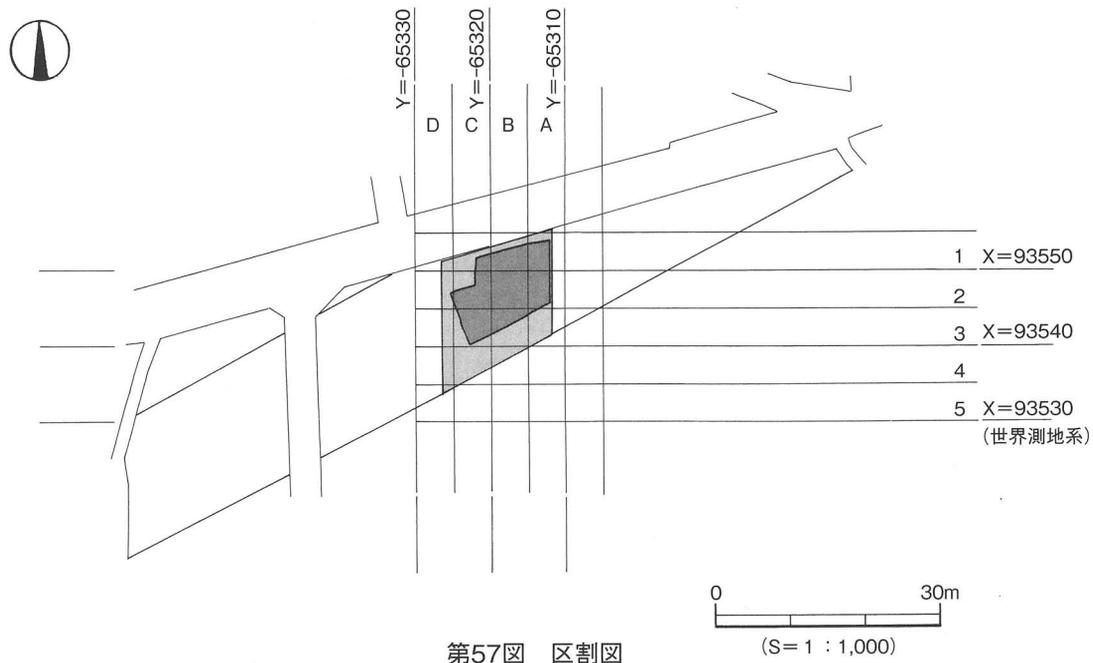
対象地の安全対策と調査区の設定を行った後、2005（平成17）年3月7日から重機等を用いて表土除去に着手する。近接する既往の調査データを鑑み、地表下0.4～1mまで掘削する。黒色系の遺物包含層は確認できず、後世の土地開発に伴い消失したと考えられる。重機による表土掘削後は、人力にて遺構面の精査を試み、土坑や柱穴などの遺構の輪郭を確定する。平板測量にて遺構配置図を作成し、遺構埋土を確認した後に遺構精査に着手する。10～14日には地形測量を行い、その後、遺構精査と併行して平板測量とレベル測量を随時行う。31日、精査途中の遺構の保護と、調査対象地の安全対策措置を講じて平成16年度の調査を終える。平成17年度の調査は4月18日から着手し、遺構のレベル測量の補足と土層図の注記を行う。その後、調査区の埋め戻しに着手し、19日には野外調査にかかわる全ての作業を完了する。

測量に際しては、国土座標第IV座標系基準点から調査地内に座標点を移動し、これを基準とした5m包含のグリッド割りを設定した。グリッドはX=93555、Y=-65310を起点として東から西へA・B・C・D、北から南へ1・2・3とし、A1～D3区といった呼称名を付けている〔第57図〕。

土坑の精査に際しては、セクションベルトを設定し、埋土の対応関係を確認・検討しながら調査を進めた。

2. 基本層位

調査対象地の長さはおおよそ16m分で、調査以前は宅地であった。現況は多少の凹凸があるものの



概ね平坦状を呈し、標高は46mを測り、北西には浄化槽が残されていた。基本層位は1～3層を確認した〔第58図、図版27-2〕。

1層-現代の造成に関わる土層と、水田や畑に関わる土層とがある。

1-①層：真砂土で、調査区全域に厚く分布する。層厚14～60cmを測り、コンクリートブロックを含む。

1-②層：灰色系の耕作土で、緑灰色土（5G6/1）・（10GY6/1）、青灰色土（10BG5/1）の順で水平に堆積している。

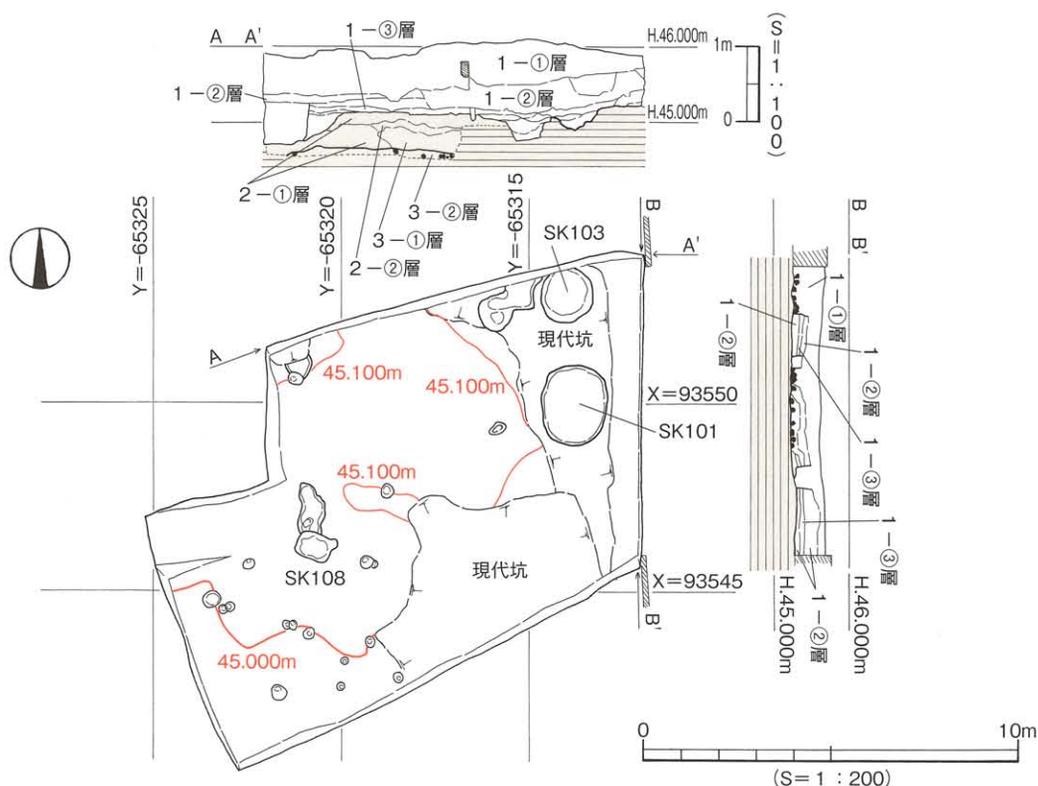
1-③層：浅黄色土（5Y7/4）の水田床土で、層厚4～8cmを測り、鉄分とマンガンの沈着がみられる。市道樽味溝辺線関連調査の統一基本土層では、1-①は造成土、1-②は第I①層、1-③は第I②層に相当する。

2層-褐灰色粘質土（10YR4/1）と、褐色粘質土（7.5YR4/6）とがある。深掘りした箇所では両層の堆積がみられた。

2-①層：褐灰色粘質土（10YR4/1）で、5～10mmの円礫をわずかに含む。粘性は非常に強く、固い質感がある。調査区全域に堆積し、層厚8～20cmを測る。本層上面は遺構面となり、調査区北壁における本層上面は45.15mを測り、ほぼ平坦となる。本層上面が遺構面となる。

2-②層：褐色粘質土（7.5YR4/6）で、層厚3～12cmを測り、堆積はやや東下がりとなる。統一基本土層では、2-①は第V層、2-②は第V層に相当する。

3層-褐灰色砂礫（10YR4/1）と、にぶい黄褐色砂礫（10YR5/3）とがある。



第58図 調査区全測図及び北壁・東壁断面土層図

3-①層：褐灰色砂礫（10Y R4/1）はガサガサした質感をもち、20mmの均一した円礫を多数含む。層厚23～32cmを測り、安定した堆積が認められる。

3-②層：にぶい黄褐色砂礫（10Y R5/3）は40～50mmを超える円礫を多数含み、黄色の砂岩礫も多くみられる。堆積は本層上面がやや東下がりとなる。統一基本土層では、第Ⅶ層に相当する。

3. 調査概要

検出した遺構は、土坑8基、柱穴17基、性格不明遺構1基である。調査区北壁断面の観察に拠れば、検出した遺構の確認面（構築面）は1-③層上面か2-①層上面のいずれかである。以下では、1-③層上面を第一遺構面、2-①層上面を第二遺構面と呼称することとする。

遺構の帰属時期については、出土遺物と埋土、さらには遺構構築面を総合して判断した。したがって、出土遺物を伴わない土坑や柱穴、遺物が伴っていても小破片のため時期を特定することが困難な遺構については、帰属時期を限定することは差し控えた。このほか、現代坑がいくつかみられ、掘り方が1-②層上面や1-②層中、さらに2-①層上面のものがあり、なかには3-①層上面にまで掘り方の及ぶものもみられる。

さて、時期を特定できる遺構は限られており、わずかに土坑2基である。以下では、調査で得られた所見を詳述する。

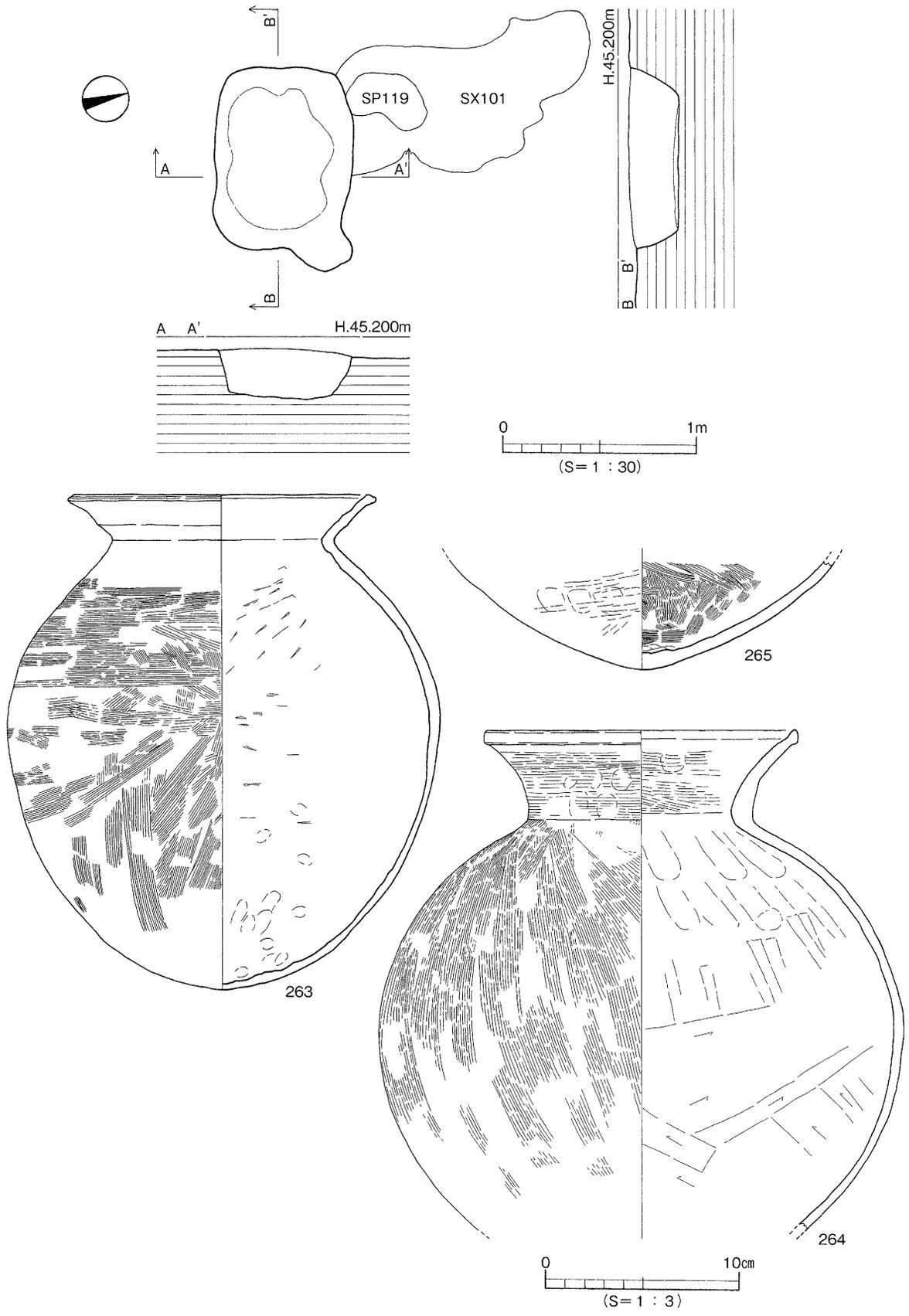
4. 古墳時代の遺構と遺物

(1) 土坑（SK）

SK108〔第59図、図版28〕

調査区の中央西寄りC2区に位置し、第二遺構面にて検出した。平面形態は長方形を呈し、規模は長軸0.9m、短軸0.66m、検出面からの深さ30cmを測り、床面はほぼ平坦となる。埋土は鉄分の沈着がみられる黒色土（N1.5/0）の単一層である。遺物は甕と壺があり、埋土中からいずれも大型の破片が折り重なって出土した。

出土遺物（263～265） 263は口縁部が「く」字形に屈曲し、口端は上下にわずかに肥厚する甕。頸胴部の境界は明瞭で、内外面には稜線が認識され、胴部は倒卵形を呈し、底部は丸底をなす。調整は、外面が胴肩部で横方向のハケ、肩部より下が縦～斜め方向のハケとなり、内面が胴上半部で斜め方向のケズリ、下半部は指押さえ（指頭痕）を顕著に残す。色調は、外面がにぶい赤橙色（10R6/4）、灰黄褐色（10Y R6/2）、内面が橙色（2.5Y R6/6）、にぶい赤褐色（5Y R5/3）である。室内調査の接合により全体の4/5が遺存していることが判明している。264は広口の壺で、口縁部が緩やかに外反し、口端は上方に拡張され、外面を面取りする。頸部は短く外傾し、胴部との境界は明瞭である。胴部は球形を呈し、胴部中位が最大幅となる。胴部の調整は、外面が縦方向のハケ、内面が上半部は縦方向の指ナデ、下半部はケズリである。接合を確認したところ、底部はなく、ちょうど縦方向に半裁した形のみが遺存であることが判明した。265は壺底部の完形品である。丸底気味で、胴部の器形がかなり張るものとみられる。調整は、外面が横方向のミガキ痕が看取でき、内面が縦方向のハケである。



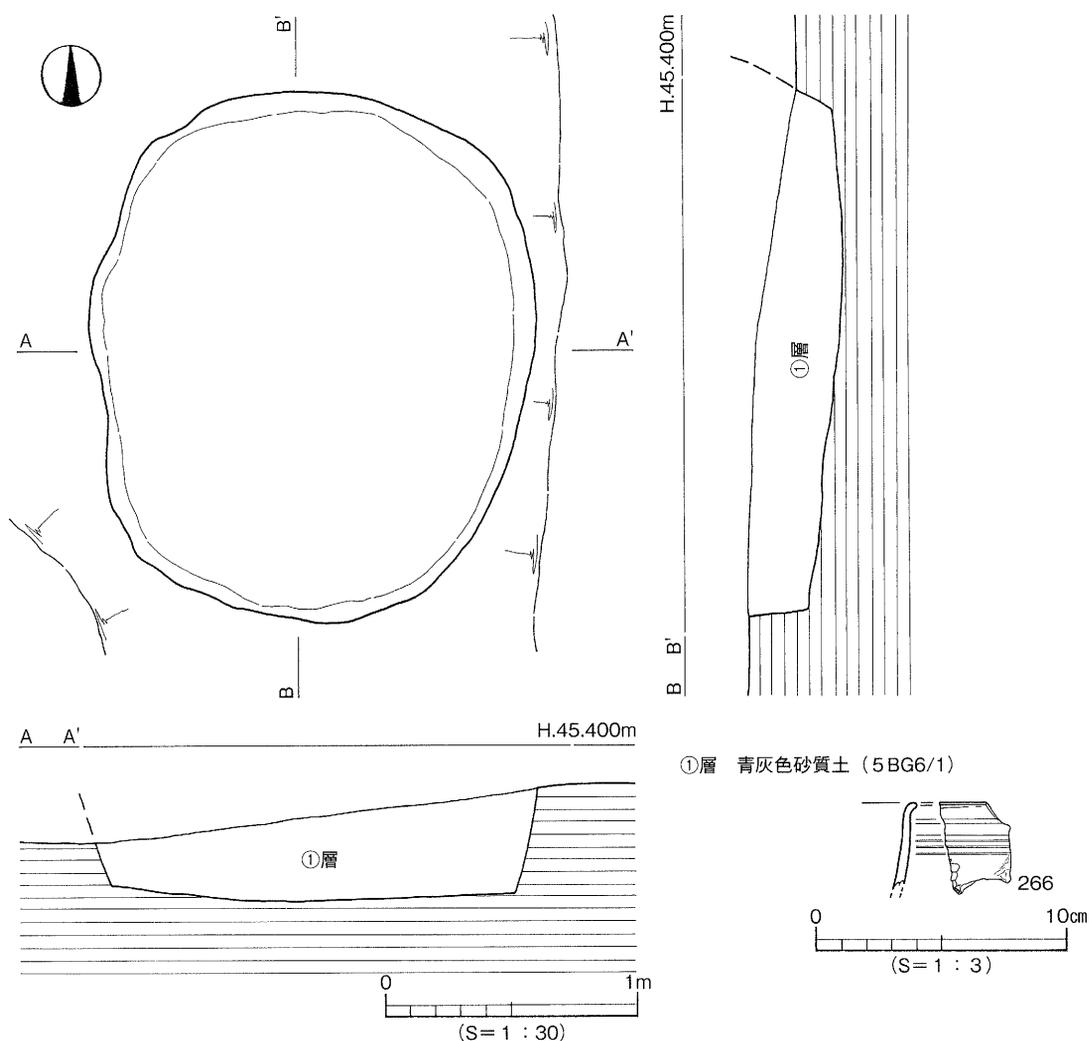
第59図 S K 108測量図及び出土遺物実測図

調整からは、264とは別個体の底部と判断できる。

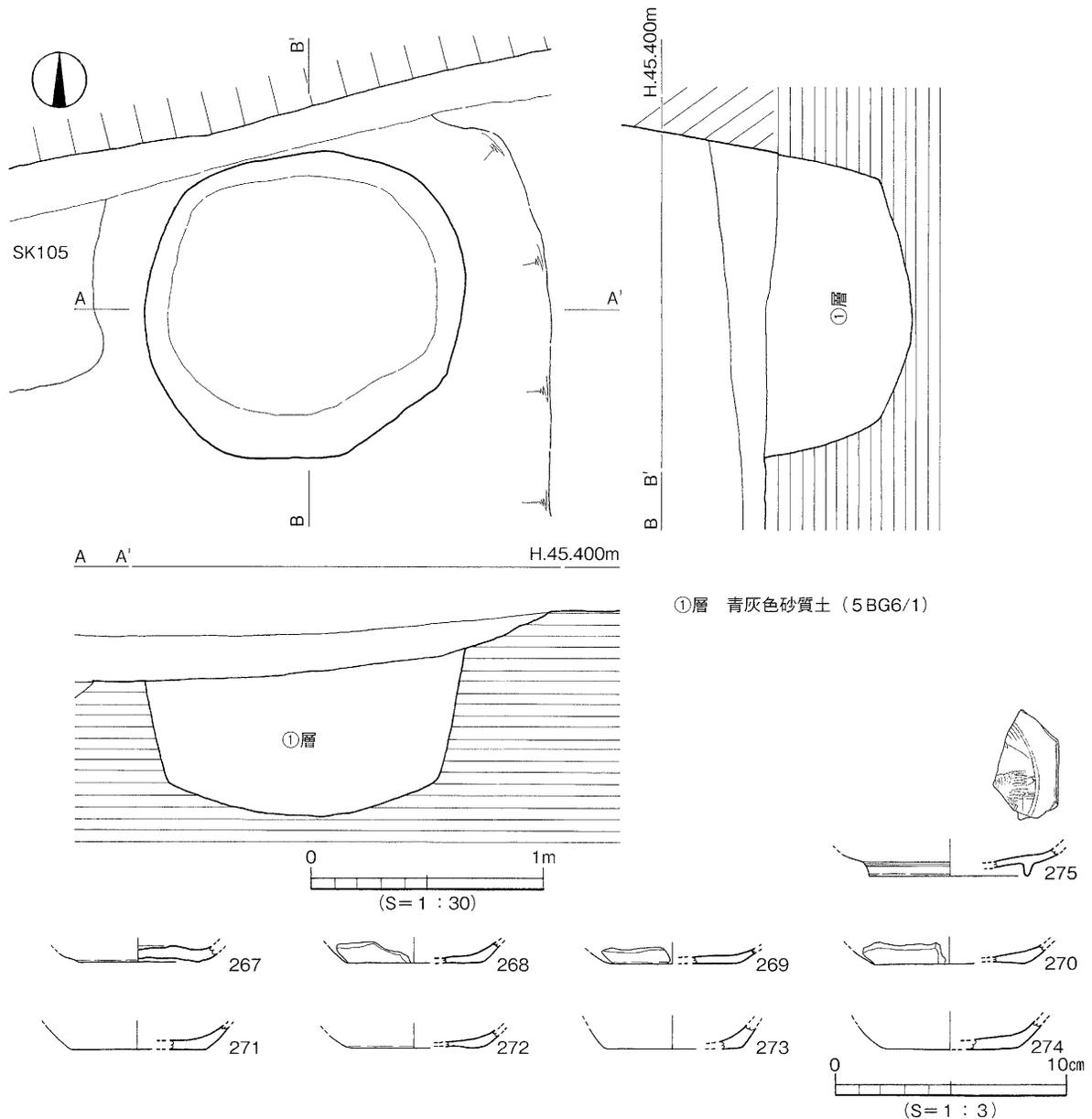
時期：遺構確認面と遺物、さらに埋土からS K 108は古墳時代前期に機能を停止したと考える。3個体ともに遺存状態が異なる点からは、出土に至る当時の状況を反映している可能性が考えられよう。すなわち、263はほぼ完形品を破砕した状態で散布、264は底部を欠いたものを斜位方向に据え置き、265は底部のみを散布したものと復元でき、後世の削平により、264の縦半部が消失したことが想定できる。さらに、263は264に先行して土坑内に散布された可能性が高いものとする。この復元に立脚すれば、S K 108では、遺構の廃絶過程において器を用いた埋め戻し行為（儀礼）が執行された可能性がある。

5. 中～近世の遺構と遺物

中～近世の遺構には土坑2基（S K 101と103）があり、これらは調査区の北東隅に近接して構築されている。



第60図 S K 101測量図及び出土遺物実測図



第61図 SK103測量図及び出土遺物実測図

(1) 土坑 (SK)

SK101 [第60図]

調査区北東隅のA1・2区に位置し、第二遺構面にて検出した。現代坑を除去した後に検出できたことから、土坑の上部は現代坑により削平される。平面形態は不整隅丸長形状を呈し、ほぼ真北方向を指向する。規模は、長軸2.12m、短軸1.76m、検出面からの深さ18~42cmを測り、床面は北半部がやや深いものの平坦を指向する。埋土は青灰色砂質土(5BG6/1)の単一層である。遺物は埋土中からの磁器片数点に限られる。

出土遺物 266は壺の口縁部小破片で、口端付近はわずかに外反する。外面には呉須による文様の一部が認められる。

時期：遺構構築面と遺物、さらに埋土からSK101は中~近世に機能を停止したと考える。

S K 103〔第61図〕

調査区北東隅のA 1区に位置し、S K 101の北1.2m地点にある。第二遺構面にて検出した。S K 101と同様、現代坑を除去した後に検出できたことから、土坑の上部は現代坑により削平されたと考える。平面形態は不整隅丸方形状を呈し、規模は、東西1.40m、南北1.32m、検出面からの深さ64cmを測り、横断面形は浅い「U」字形を呈する。埋土は青灰色砂質土（5 B G 6/1）の単一層である。遺物は埋土中から土師器皿片と磁器片が散在して出土した。

出土遺物（267～275） 267～274は土師器皿の底部で、いずれも焼成不良のためか、内外面の摩滅が著しい。275は磁器高台付きの皿片である。

時期：遺構構築面と遺物、さらに埋土からS K 103は中～近世に機能を停止したと考える。

6. 小 結

今次調査により、対象地からは古墳時代前期の土坑と中～近世の土坑が構築されていたことが確認された。対象地が狭小にもかかわらず遺跡の存在が確認され、遺跡の内容が明らかになったことは、石手川中流南岸域の土地利用と遺跡の広がりや展開を明らかにする上で興味深いデータを提供できたと評価できる。

（1）土層について

今次調査で検出した土層は1～3層で、このうち3層はかつての小河川の氾濫によって堆積した砂礫層であり、礫の大きさと形状からは比較的水量のある河川堆積物であったことが知れる。2層は今次調査の主要遺構S K 108の構築面であり、土坑が古墳時代前期に時期比定されることから、本層上面（第二遺構面）が少なくとも古墳時代前期の地表面を形成していたものとする。本層が周辺における既往の調査で常見される「地山（にぶい黄褐色土）」とは異なる土層である点を留意すべきであるが、広義の「地山」の範疇で捉えておく必要はあるだろう。

（2）地形について

第二遺構面の地形測量成果に拠れば、地形は標高45.2～45.1mのほぼ平坦に近い地形と読み取ることが可能である。ただし、調査区北壁の土層からは現代の土地開発の影響によって、かつての地形が改変され現況に至った可能性を考慮する必要がある。この点を考慮し、さらに現地表面のコンターラインを参考にするならば、対象地が北東から延びる微高地の一角に該当する可能性が高いものと理解しておきたい。

（3）古墳時代前期の土坑S K 108について

調査区の中央西寄りに位置するS K 108の精査（野外調査）では、遺物の出土状況から特異な事象を認定するには至らなかった。しかし、室内調査の遺物接合と石膏復元作業の過程において、3個体の土師器の遺存状態はそれぞれ異なっていることが判明した。壺264の遺存を積極的に評価して、土坑の廃絶過程において土師器を用いた埋め戻しを含む儀礼行為が執行された可能性を見出した。この知見は、野外調査終了後の室内調査（報告書作成過程における遺物整理など）の重要な成果のひとつとなり、遺物の遺存状況から当該期に執行された行為の一端を復元した好例となろう。

第7章

東野森ノ木遺跡

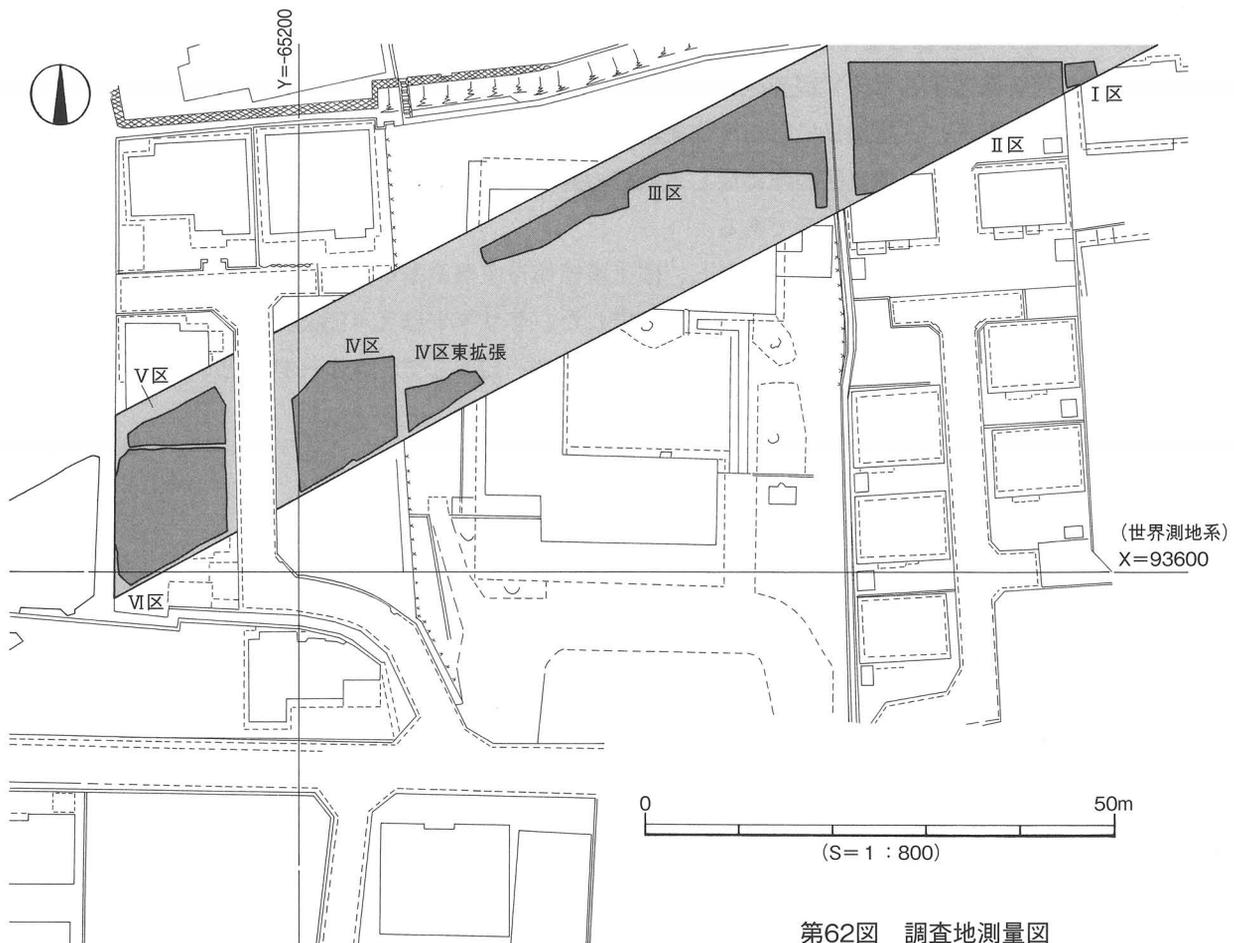
4次調査地

第7章 東野森ノ木遺跡4次調査地

1. 野外調査の経過と方法

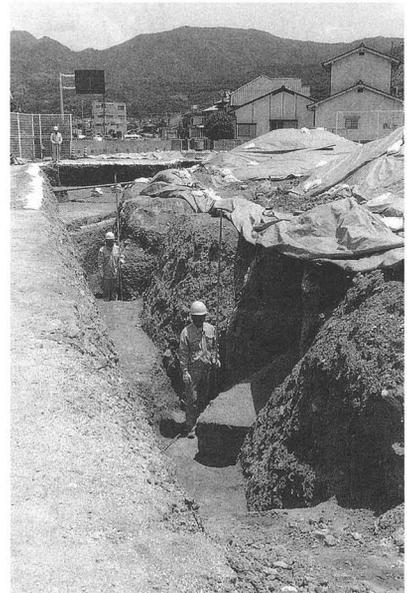
対象地の安全対策と調査区の設定を行った後、2005（平成17）年4月21日から重機を用いて表土除去に着手する。生活道路と農業用水路の保全及び地境にコンクリート擁壁があること、さらに表土掘削で生じた排土置き場を確保する都合上、調査区をⅠ～Ⅵ区に区分し、順次調査に着手した〔第62図〕。試掘調査のデータを鑑み、地表下0.6～1.3mで掘削をとどめた。4層上面にて黒色系の遺物包含層の広がりや遺構検出作業を試みた。

Ⅰ区とⅡ区では遺構密度の低いことが判明し、後世の土地開発に伴い遺物包含層は遺存しないことを確認した。Ⅲ区は後世の土地開発による削平が著しく、現代建物のコンクリート基礎を設置する際に、遺存していた4層上面が大きく削られていたことが判明した。対象地（Ⅲ区）南には、この現代建物のコンクリート基礎の多くが残されていたことから、この時点でⅢ区の大半は、削平によって4層の上部が消失している可能性を考えた。従って、市教委文化財課の担当者に連絡を入れ現地を指導を仰いだところ、現代の削平により遺構確認面及び遺構は失われている可能性が高いとの指摘を受けたため、Ⅲ区はトレンチ状の調査区とし、Ⅲ区の南側を掘削で生じた排土置き場とした〔第63図〕。



第62図 調査地測量図

IV区では4層上面にて弥生時代の竪穴式住居址3棟のほか、土坑を確認した。住居址を切る溝状の耕作痕を多数検出したため、住居址と土坑の精査に先立って、まずはこの溝状の耕作痕の精査から着手した。その結果、現代の耕作痕であることが判明したため、耕作痕を全て掘り上げた後、遺構検出作業を行い検出状況の記録写真を撮影した。竪穴式住居址の精査に際しては、土層観察用のセクションベルトを設定し、埋土の堆積状況や、埋土と遺物との関係に対し積極的に検討を加えた。SB401の精査過程で遺構がさらに東側に続いていることが判明したことから、調査区を新たに東へ拡張し（IV区東拡張）、記録写真撮影と測量図作成を進めた。7月からはV区の表土除去に着手する。多数の現代坑とともに、黒色系埋土の遺構を検出する。SX501に大型礫群が伴うことから、この礫群と埋土との関係に着目し精査を進める。



第63図 III区で検出した現代建物基礎

8月後半からは調査区の埋め戻しに着手し、30日にV区までの調査を終え、31日には測量機材や出土遺物、さらに測量図面を埋文センターへ移動する。VI区の調査は、既存建物とその基礎の除去が完了した10月17日から着手した。安全対策と調査区の設定を行った後に重機を用いて表土の除去を実施したところ、現代建物に伴う土地開発行為が地表下深くにまで及んでおり、黒色系遺物包含層が遺存しないことを確認する。土坑や柱穴を含む小穴を多数検出する。土層の堆積状況を確認する目的で調査区西壁沿いを深掘りし、観察と記録化を実施する。遺構の精査と記録化が順調に進み、11月10日には高所作業車を用いて記録写真撮影を実施し、その後測量図の補足とレベル測量等を行う。調査区の埋め戻しと仮設の調査事務所撤去等、今次の野外調査にかかわる全ての作業が完了したのは11月30日である。

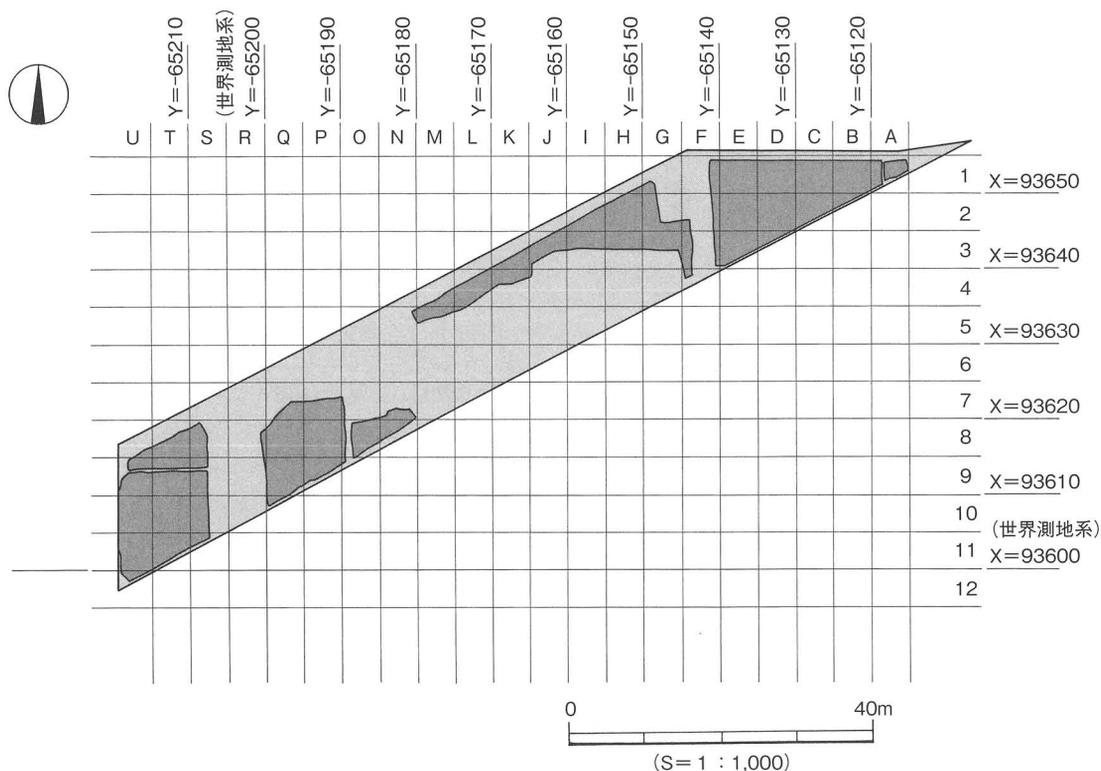
なお、測量に際しては、専門業者に委託し、国土座標第IV座標系基準点から調査地内に座標点を移動した基準杭を基に5m方眼のグリッド割りを設定した。グリッドはX=93655、Y=-65115を起点として東から西へA・B・C…U、北から南へ1・2・3…12として、A1～U12といった呼称名を付けた〔第64図〕。

2. 基本層位

調査対象地の長さはおおよそ110m分で、調査以前は水田であった。現況は地表面がわずかに北東から南西へ下がる地形を呈し〔第65図〕、I区北東部における地表面は48.6m、VI区南西部では48.0mを測る。なお、今次調査地と同2次調査地との土層対応関係は第66図に示した。北壁の観察に拠れば、両調査地間のコンクリート擁壁を挟んで東側は造成土により地上げされているものの、基本層位はほぼ対応する。ただ、コンクリート擁壁を設置する際の掘り方が南北方向に認められ、これが後述する遺構検出面（4層）にまで達していた。

1層-真砂土、真砂ガラ、碎石で、層厚0.7～2.0mを測り、調査地東半部を中心に検出した。調査地中央部のIII区では現代建物の撤去後に厚く真砂土が造成されていた。市道樽味溝辺線統一

基本層位



第64図 区割図

基本土層の造成土に相当する。

2層-現代の水田や畑にかかわる土層で、耕作土部分に相当する2-①層、床土部分の2-②層に細分可能である。

2-①層：灰色土 (N5/0) で、層厚10~50cmを測る。調査地全域で検出した。

2-②層：明赤褐色土 (2.5Y R5/6) で、層厚5~10cmを測り、調査地中央のⅢ区で検出した。

統一基本土層の第Ⅰ①層、第Ⅰ②層に相当する。

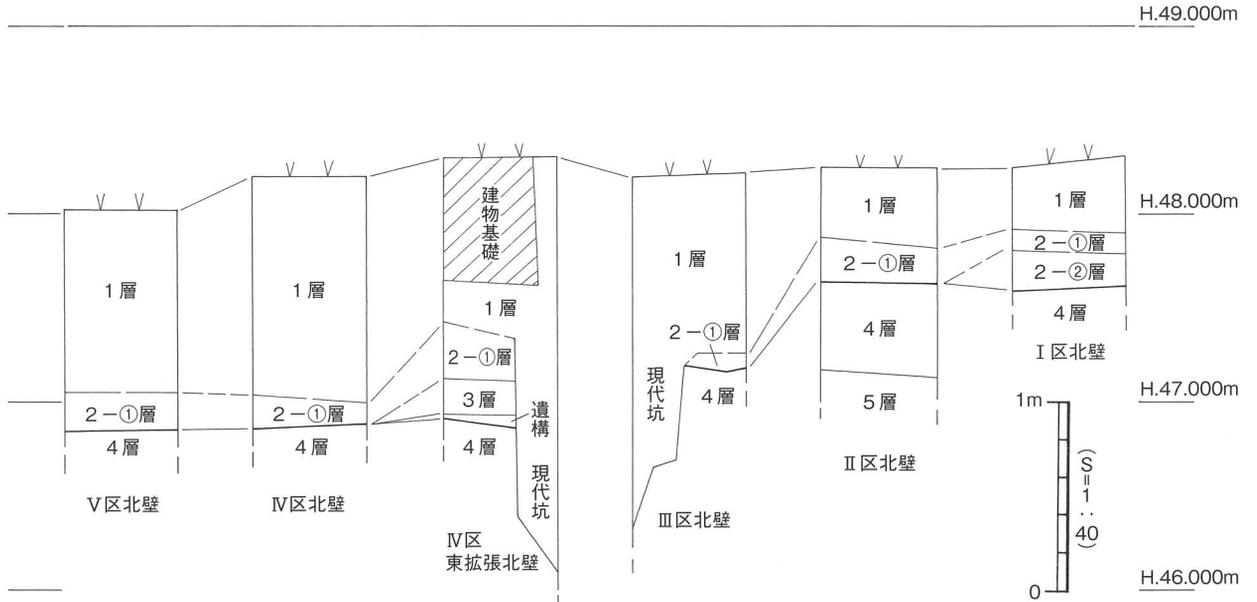
3層-黒色土 (2.5Y 2/1) で、層厚8~20cmを測り、粘性の強い土である。調査地中央のⅢ区に局部的に遺存していた遺物包含層で、弥生土器の碎片をわずかに含む。統一基本土層の第Ⅳ層に相当する。

4層-褐色土 (7.5Y R4/6) で、調査地の全域で検出し、層厚10~30cmを測る。粘性が強く、ガチガチと締まった質感がある。調査区北壁における本層上面は、東端で標高47.57m、西端で標高46.50mを測る。西端 (Ⅴ区北西端) は擁壁を設置するための現代坑により削平されている。現代坑が及ばない隣接地では標高46.85mを測る。本層上面は遺構面となり、主要な遺構にはS B 401~403などがある。統一基本土層の第Ⅴ層に相当する。本層以下を人力にて掘り下げたが、人工遺物は出土しなかった。

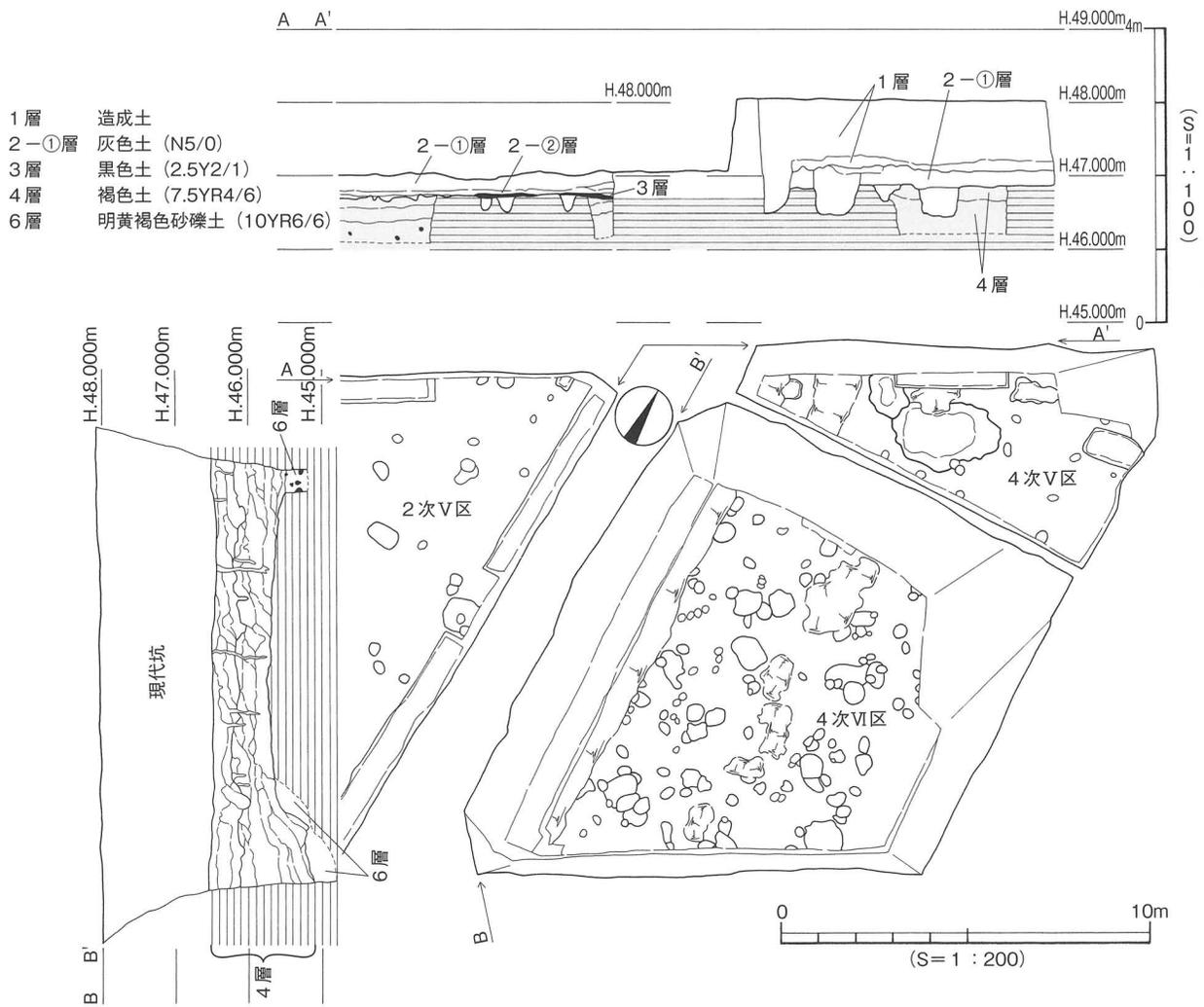
褐色土の下には局部的に明黄褐色土 (10Y R6/8) の堆積が確認されている。

5層-明黄褐色砂質土 (10Y R6/6) で、Ⅱ区北壁では西端にて確認した。砂粒は2~3mm大とほぼ均一で、やや締りがある。統一基本土層の第Ⅵ層に相当する。

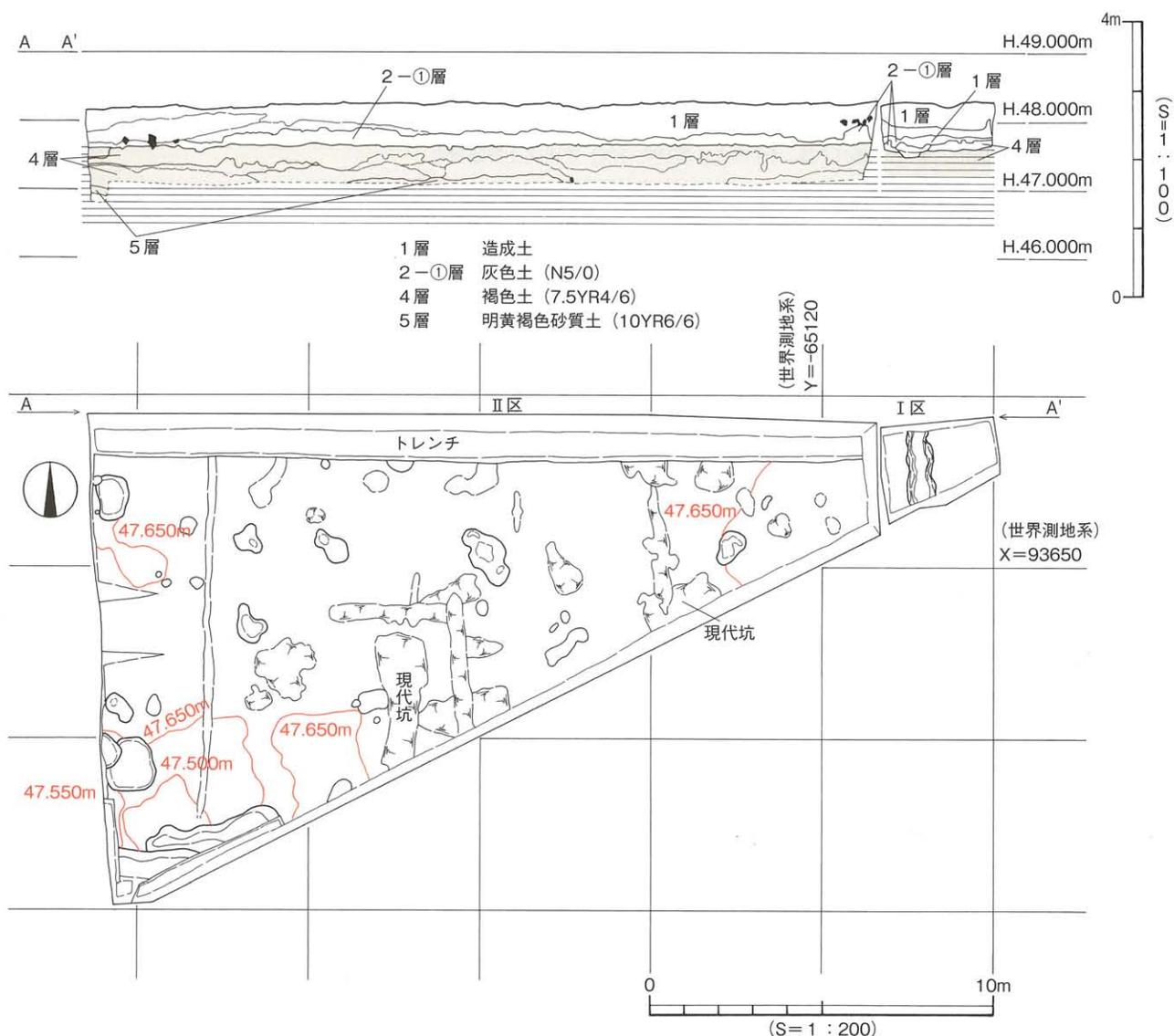
6層-明黄褐色砂礫土 (10Y R6/6) で、上部には5~6cm大の円礫が密集する。Ⅱ区北壁では西



第65図 柱状土層模式図



第66図 東野森ノ木遺跡4次調査地と2次調査地の土層対応図



第67図 I・II区全測図及び北壁断面土層図

※遺構配置図・北壁断面土層図の縮尺は平面が1/200、断面の深さは1/100である。

端付近、VI区西壁では最下層及び南落ちで確認した。なお本層下部にはにぶい褐色を呈する砂礫の堆積が認められた。統一基本土層の第VII層に相当する。

3. 調査概要

検出した遺構は竪穴式住居址3棟、土坑16基、性格不明遺構9基、柱穴170基である。これらの遺構は4層（統一基本土層の第V層）上面にて輪郭を確定できたものが大半を占める。遺構からは古墳時代と古代に帰属する遺物は認められなかった。

遺構の帰属時期については出土遺物と埋土を総合して判断し、梅木謙一の土器編年〔梅木2000・梅木2001〕に準拠することとした。出土遺物を伴わない遺構と、伴うものの碎片のため時期特定が困難な遺構については、帰属時期を特定することは差し控え、埋土の色調を根拠とした遺構の時期推定は行っていない。なお、報告する主要遺構については種類毎に表4にまとめた。

【参考文献】

- 梅木謙一 2000 「四国地域の様式編年 3. 伊予中部地域」『弥生土器の様式と編年 四国編』菅原康夫・梅木謙一編 木耳社
 梅木謙一 2001 「伊予中部の土器」『庄内式土器研究の24』庄内式土器研究会

表4 検出主要遺構一覧

遺構名称	位置	平面形態	規模 (m)	主な出土遺物
S B 401	P 8・9、O 8	円形	復元直径10×0.48	弥生後期土器、管玉など
S B 402	P 7、Q 7	円形か	不確定×0.20~0.26	弥生後期土器
S B 403	O 8、N 8ほか	多角形か	不確定×0.15~0.22	弥生後期土器、石庖丁など
S K 401	P 7	不整隅丸長方形	1.54×1.11×0.17	縄文晩期土器 (掲載不可)、礫
S K 503	T 8・9	長楕円形か	1.2×0.9~1.0×0.2	弥生中期土器
S K 502	U 9	不整楕円形か	(0.42+)×0.54×0.15	弥生中期土器
S X 501	T 8・9	不整楕円形	3.0×1.8×0.48	縄文晩期土器破片、大型礫

4. 縄文時代の遺構と遺物

縄文時代の遺構には調査地西半部で検出した土坑と性格不明遺構とがある。

(1) 土坑 (S K)

S K 401 [第70図・写真図版33-3]

調査地西半部のIV区、P 7区に位置する。平面形態は不整隅丸長方形を指向し、規模は長軸1.54m、短軸1.11m、検出面からの深さ17cmを測る。埋土は粘性に欠ける黒色土 (N2/0) でパサパサした質感で、色調のわずかな違いを根拠として①~④層に細分可能である。短軸方向に設定したセクションベルトの観察から、土の流入によって土坑が徐々に埋没していった状況を復元することができる。床面はほぼ平坦、横断面形態は箱形を呈し、明確な掘り方となる。遺物は床面近くから縄文土器と礫が出土した。縄文土器は浅鉢であったが、遺物洗浄時に破碎したため図化することはできなかった。

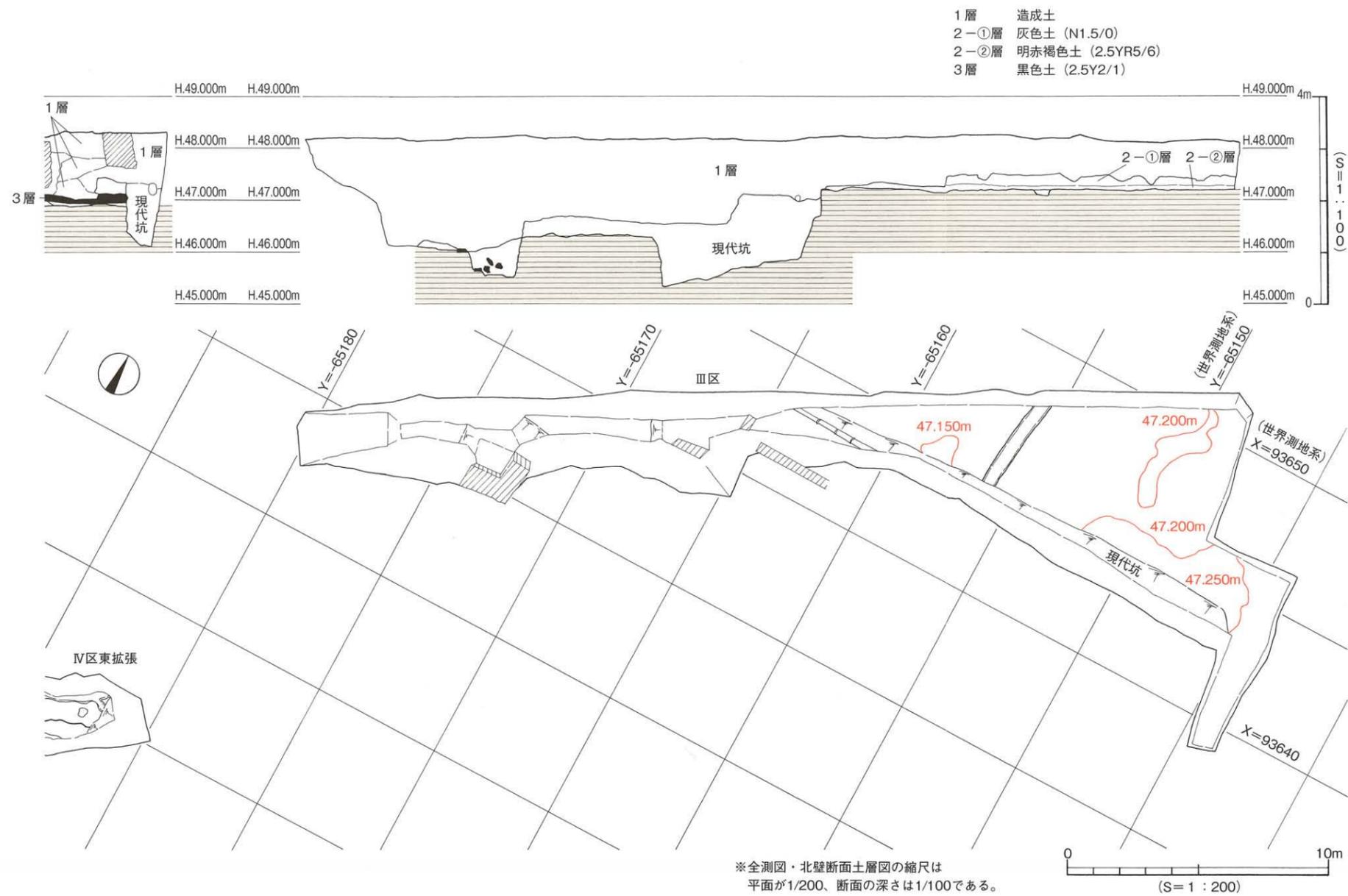
時期：出土遺物と埋土からS K 401は縄文時代晩期に時期比定される。

(2) 性格不明遺構 (S X)

S X 501 [第71図・写真図版34-1~3]

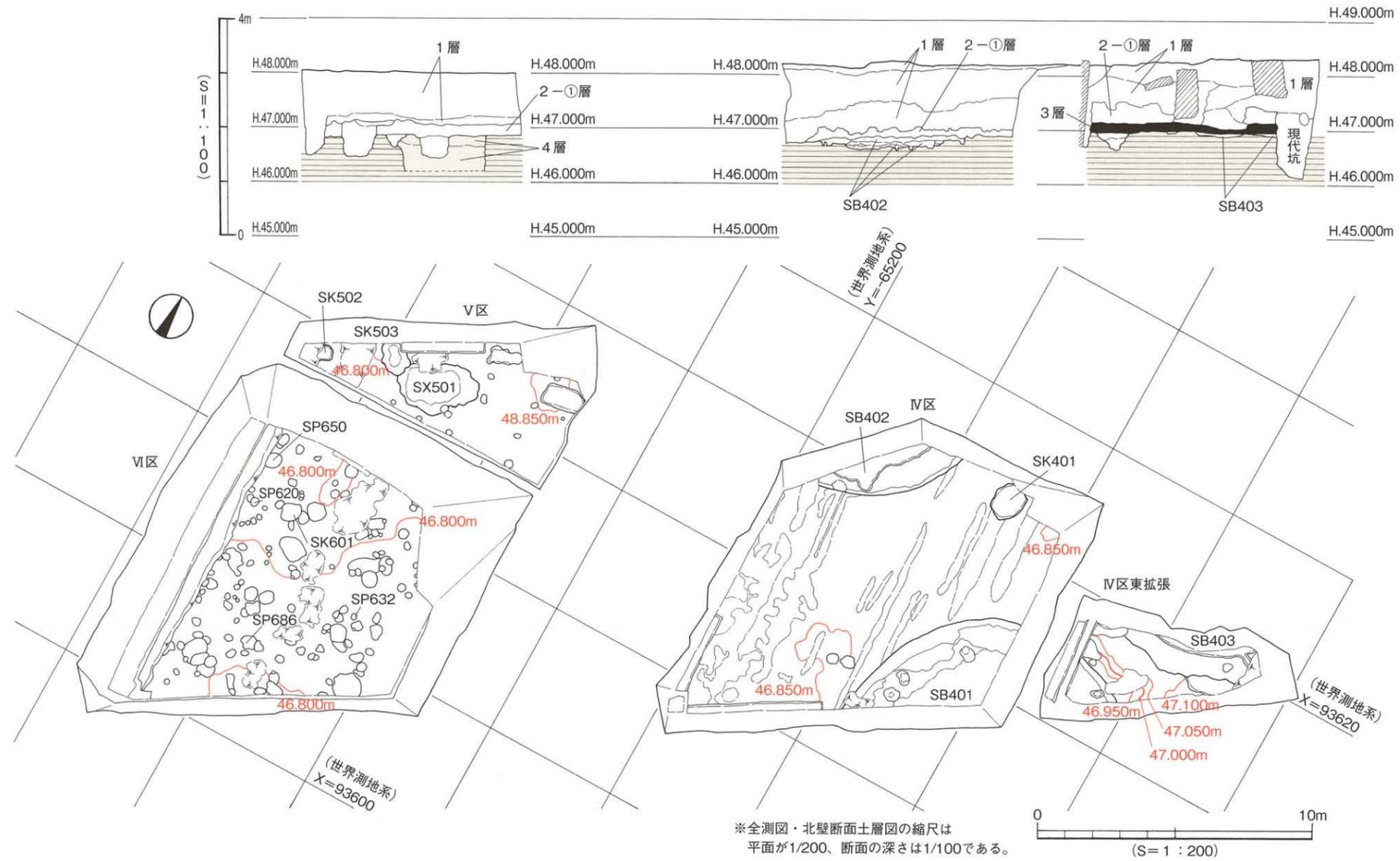
調査地西端部のV区、T 8・9区に位置し、遺構の北西部はS K 503に切られる。このことからS XがS K 503に先行して構築されたことが知られる。平面形態は不整楕円形状を呈し、規模は長軸3.0m、短軸1.8m、検出面からの深さ48cmを測る。遺構検出時は大型礫の一部が露出していることを確認したものの、焼土や炭化材さらに土器などは確認できなかった。埋土は黒色系の土を基本とし、セクションベルトの観察により①~⑤層に大別に可能で、上~下層に括れる。すなわち上層は①②、中層は③、下層は④⑤である。精査の過程では中層上面と下層上面にて大型の礫を確認することができた。礫の表面には使用痕は認められず、受熱による赤化や黒化もみられなかった。遺物は外面に条痕調整を施した縄文土器片が上層からわずかに出土したが、図化可能なものは抽出できなかった。

時期：出土遺物と埋土から縄文時代晩期に時期比定される。

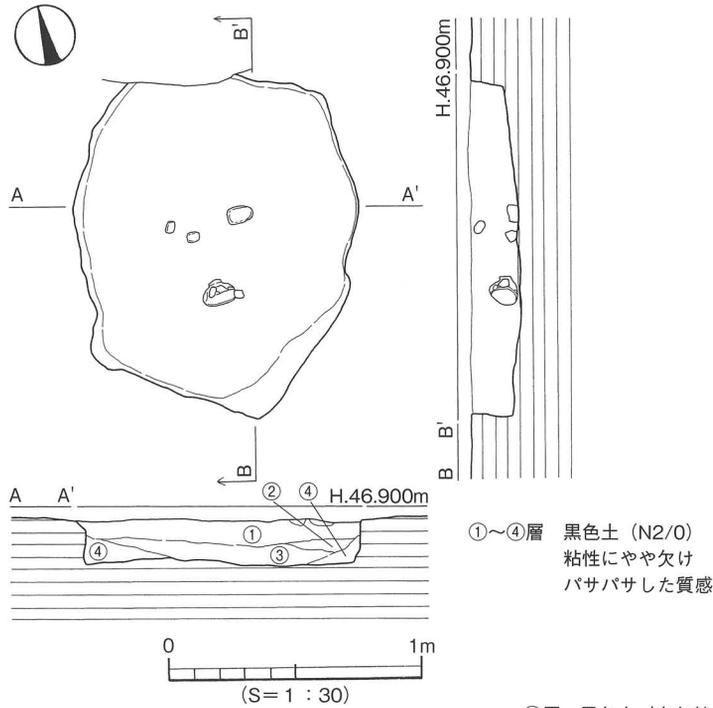


第68図 Ⅲ区全測図及び北壁断面土層図

- 1 層 造成土
- 2-①層 灰色土 (N5/0)
- 3 層 黒色土 (2.5Y2/1)
- 4 層 褐色土 (7.5YR4/6)

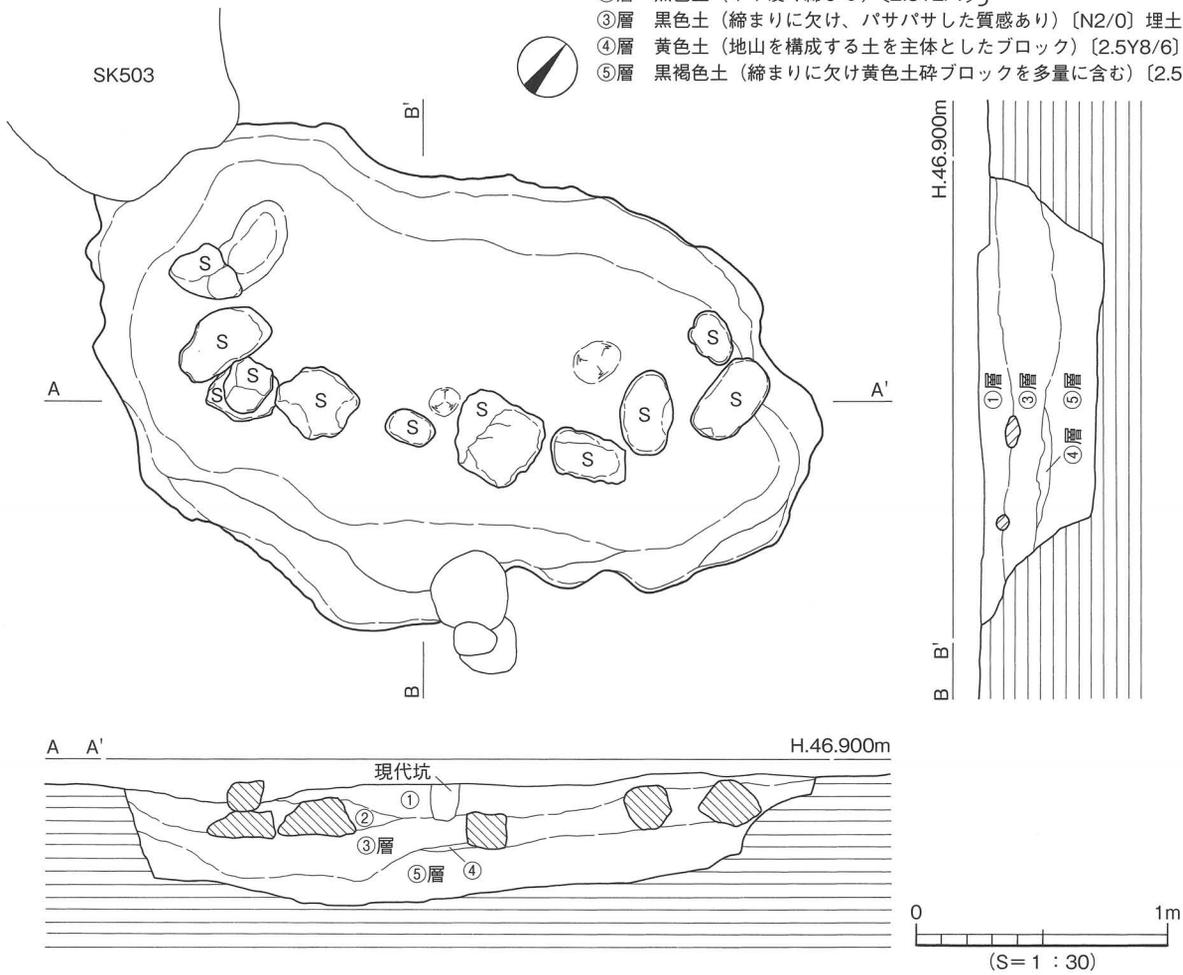


第69図 IV・VI区東拡張・V・VI区全測図及び北壁断面土層図



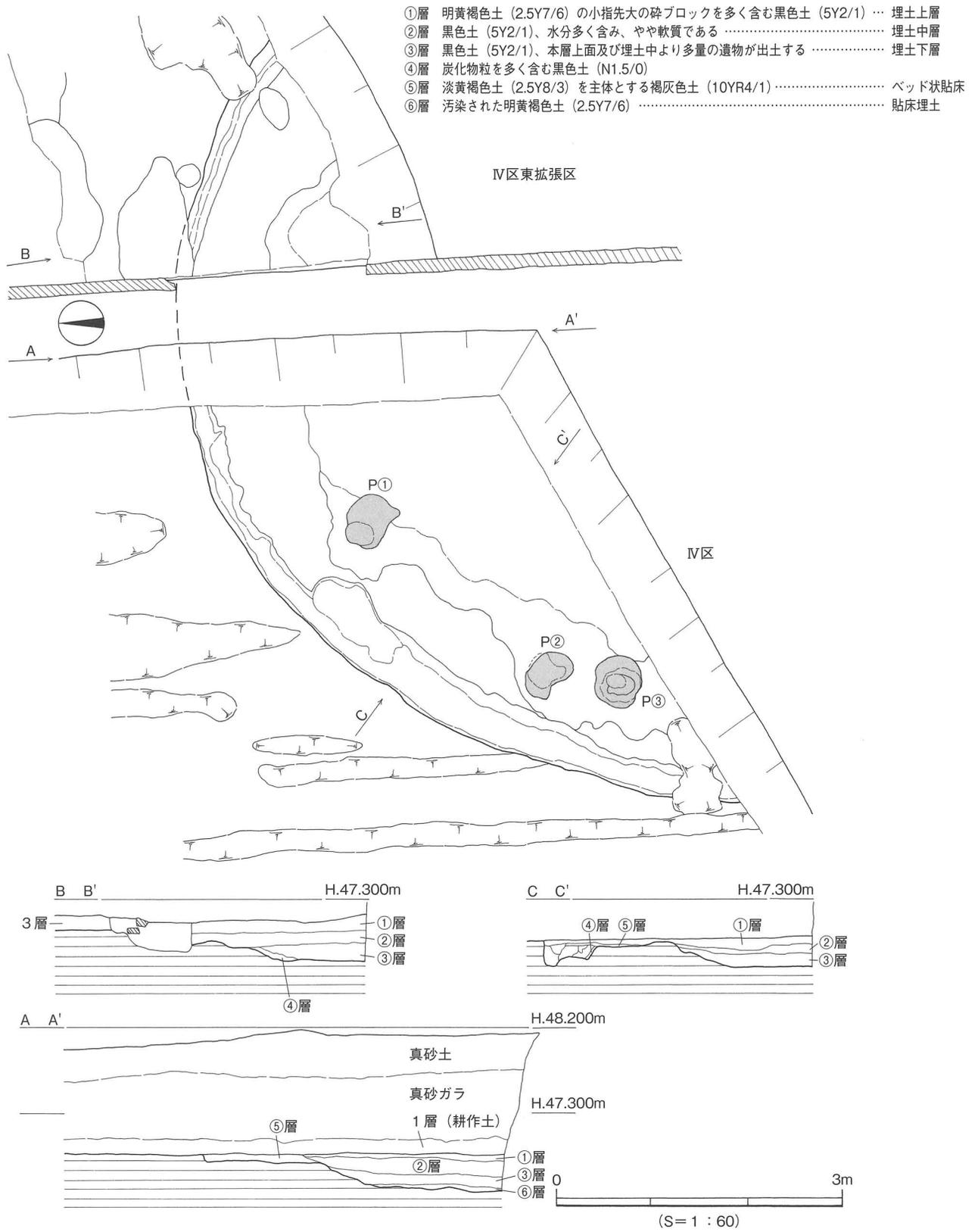
第70図 SK 401測量図

- ①層 黒色土 (赤色粒多く含む) [2.5Y2/1] } 埋土上層
- ②層 黒色土 (やや硬く締まる) [2.5Y2/1] }
- ③層 黒色土 (締まりに欠け、バサバサした質感あり) [N2/0] 埋土中層
- ④層 黄色土 (地山を構成する土を主体としたブロック) [2.5Y8/6] }
- ⑤層 黒褐色土 (締まりに欠け黄色土砕ブロックを多量に含む) [2.5Y3/2] } 埋土下層

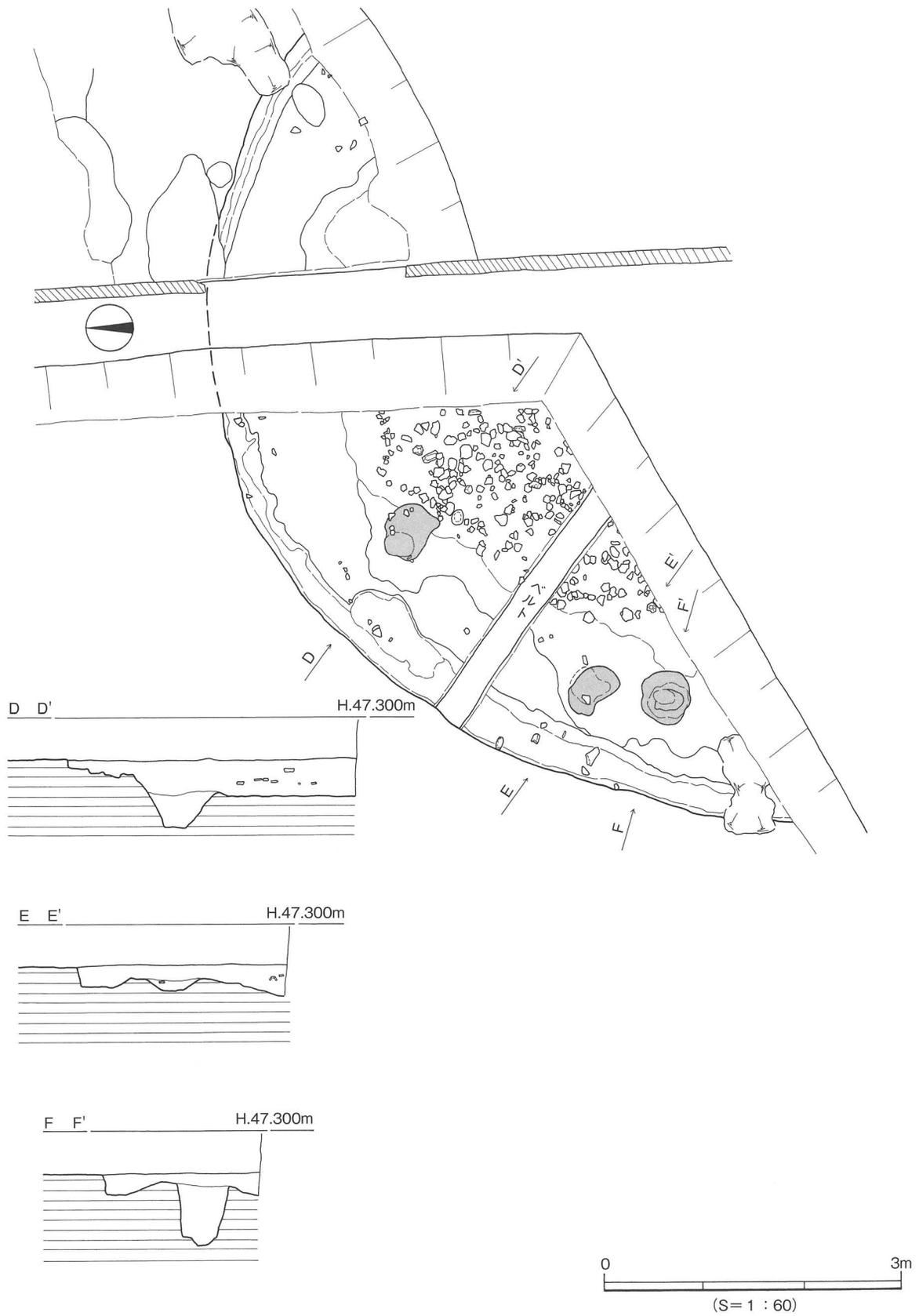


第71図 S X 501測量図

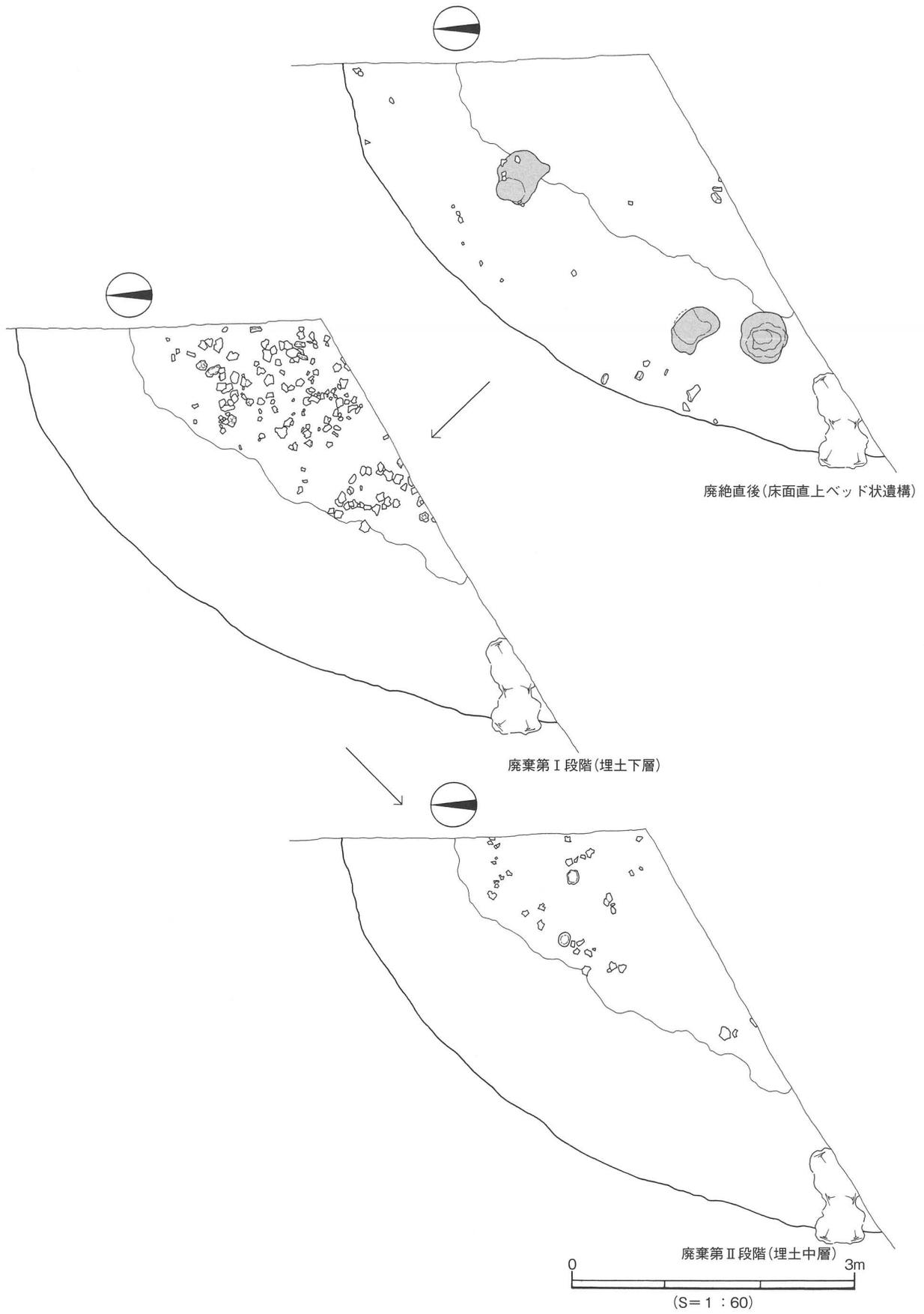
東野森ノ木遺跡4次調査地



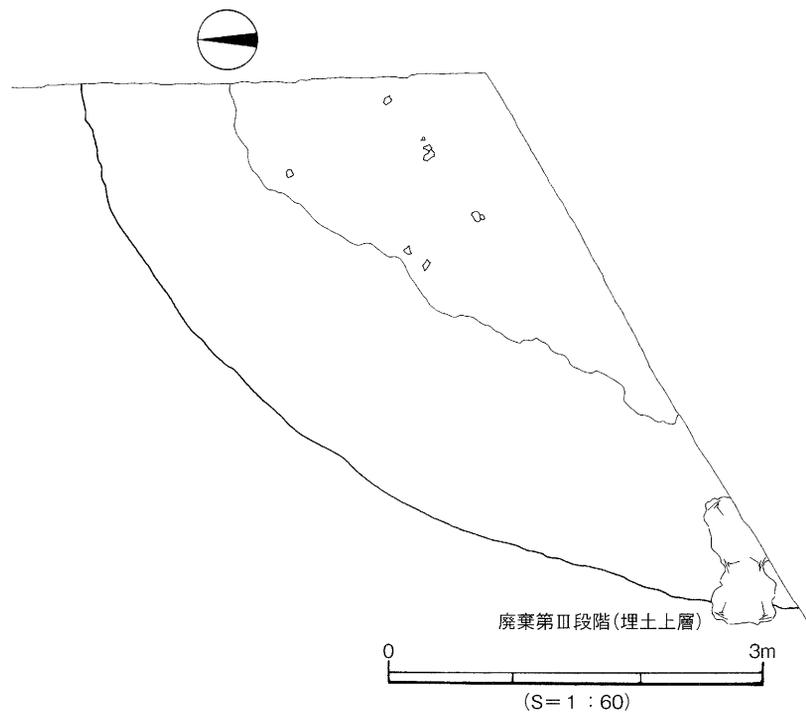
第72図 SB401測量図(1)



第73図 SB 401測量図(2)



第74図 S B 401遺物分布図(1)



第75図 SB401遺物分布図(2)

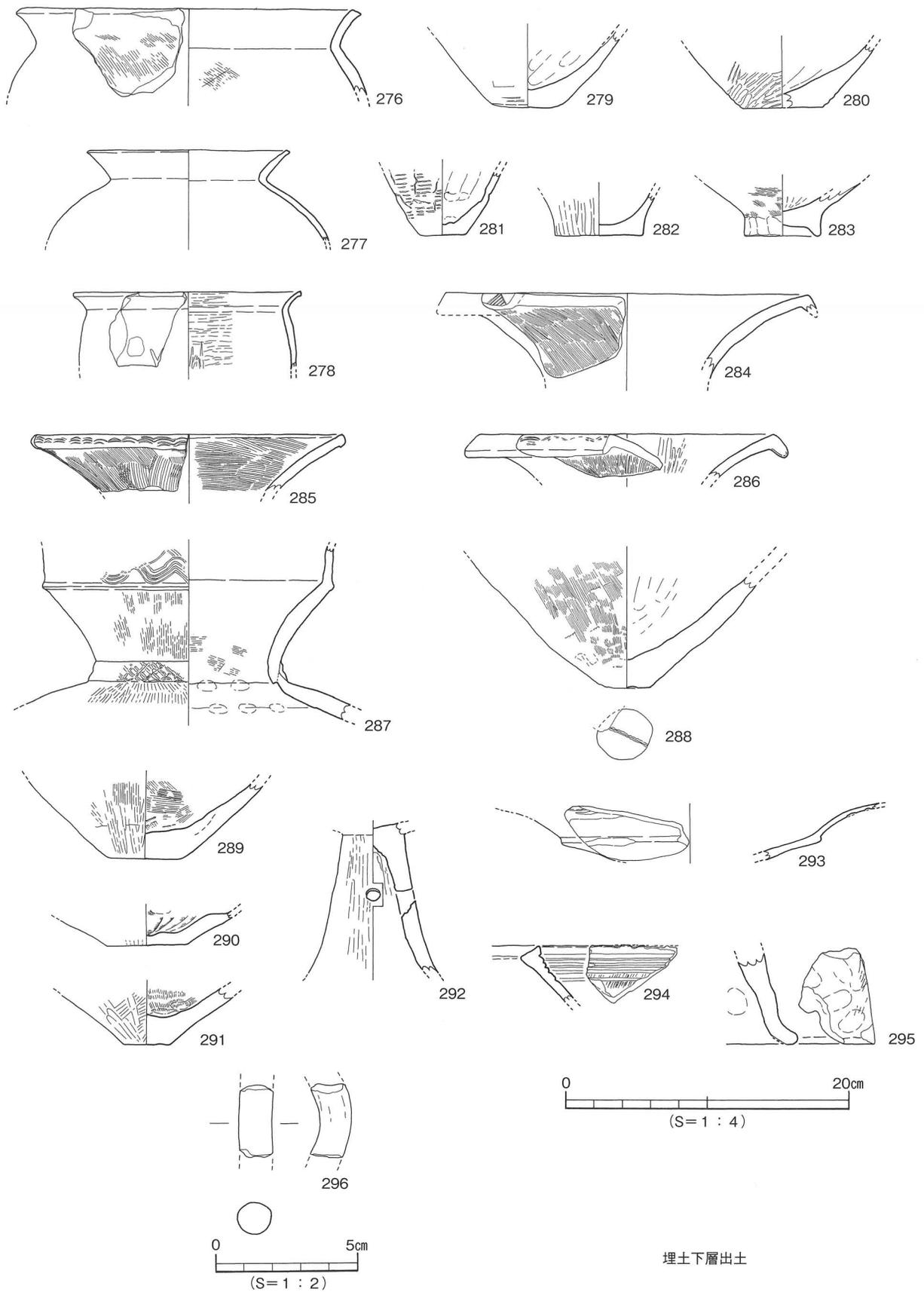
5. 弥生時代の遺構と遺物

弥生時代の遺構はⅣ区及びⅣ区東拡張で検出した3棟の竪穴式住居址が主要な遺構となり、このほか、Ⅴ区で確認できた2基の土坑を挙げるができる。これらは調査地の西半部に設定した調査区に分布が限られる。

(1) 竪穴式住居址 (SB)

SB401 [第72～77図、図版31・32・36]

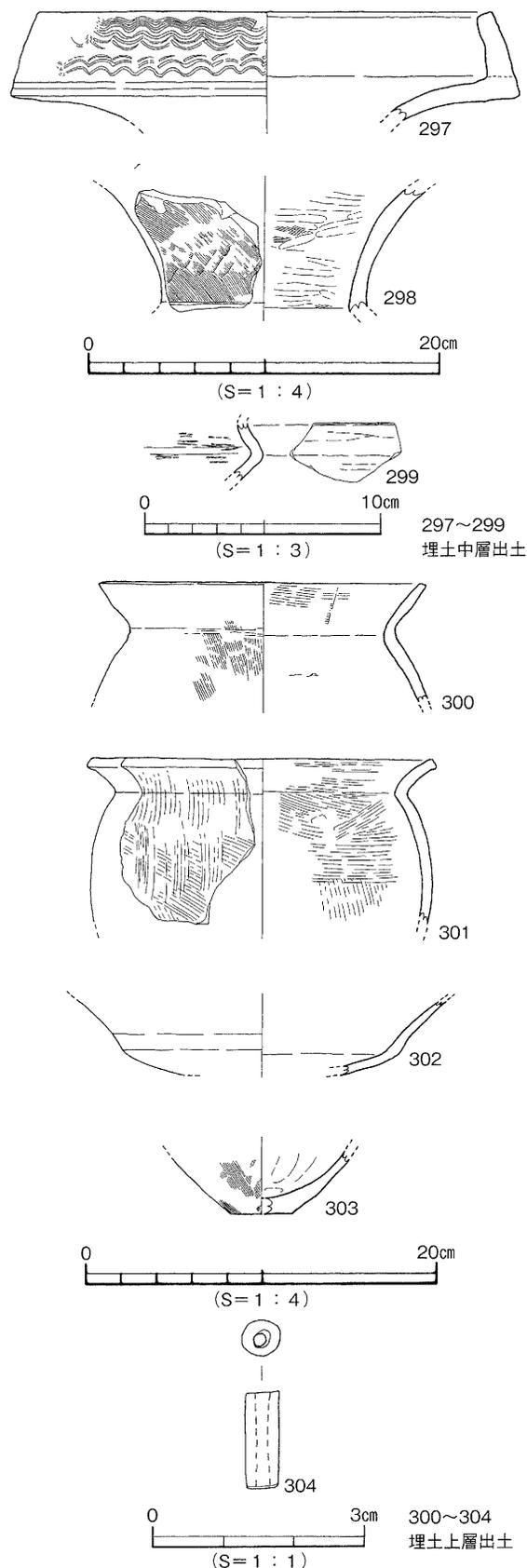
調査地西半部のⅣ区とⅣ区東拡張で検出した。P8・9区、O8区に位置し、住居の南側は調査地外へ続くため、検出したのは全体の1/3程度と推定される。平面形態は円形、規模は直径10mに還元され、検出面からの深さは48cmを測る。検出時の埋土は明黄褐色土の碎ブロックを含む黒色土(5Y2/1)を中心として、この周りには淡黄褐色土を主体とした褐灰色土(10YR4/1)が分布していた。このことから、ベッド状遺構を敷設した大型の円形竪穴式住居址の可能性が高いと判断した。精査ではいくつかのセクションベルトを設定して埋土と遺物との関係を検討した上で、測量図作成と写真撮影を実施した。埋土は①～⑥層に分層可能で、このうち⑤層はベッド状遺構の貼床となる。このことからベッド状遺構は4層を削り出して下部を整形した後に⑤層を貼り付けることにより形成されたものと理解できる。埋土は上層が①、中層が②、下層が③で、⑥は貼床埋土と判断した。付帯施設には先述したベッド状遺構のほか、周壁溝と3基(柱穴①～③)の柱穴がある。柱穴から柱痕は未検出で、掘り方は不整形であった。なお、調査対象地外に住居の中心が位置することから、屋内炉を検出するには至らなかった。遺物は弥生土器片が圧倒的多数を占め、わずかに土製品と管玉が伴う。



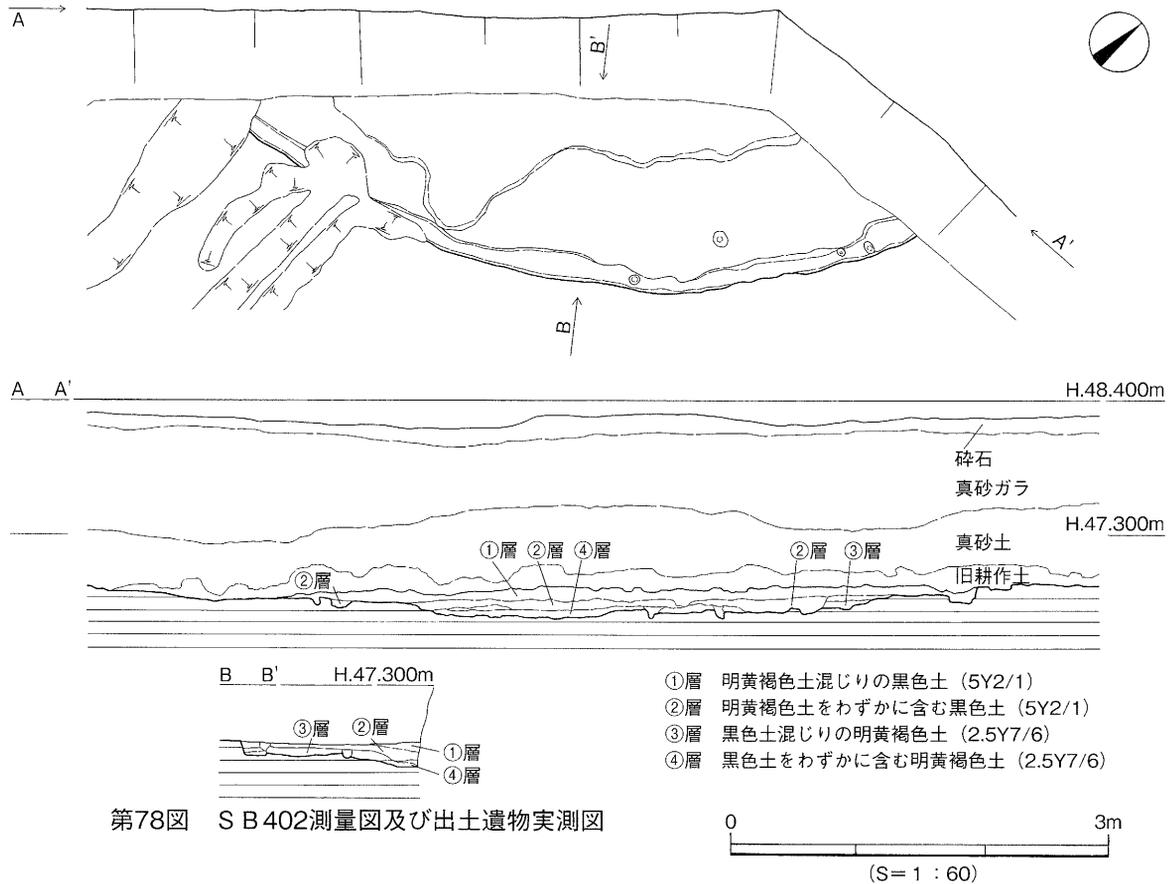
第76図 S B 401出土遺物実測図(1)

出土遺物の取り上げに際しては、地点に加え、層位とレベル値を記録した。遺物の分布は概観すると〔第73図〕、IV区に集中する傾向にある。出土地点、埋土、レベル値に基づいて作図したのが第74・75図である。以下では、この図を用いて埋土と遺物との関係について詳述する。本住居が廃絶された直後〔直後段階：第74図上〕は、わずかな弥生土器片と小礫が住居床面とベッド状遺構上面に分布するものの図化できる遺物はない。この次の廃棄第I段階〔第74図中〕は埋土下層相当の⑥層上面と③層から多量の遺物が出土した。ベッド状遺構を除くIV区内に広く分布する傾向にある。遺物には弥生土器（甕、壺、高坏、支脚）のほか、勾玉状の土製品片と礫があり〔第76図276～296〕、最も遺物を伴う段階である。続く廃棄第II段階〔第74図下〕は埋土中層相当の②層から弥生土器と縄文土器碎片とが出土したが、量的には極めて少なく、下層に比して極端に減少する〔第77図297～299〕。そして廃棄第III段階〔第75図〕は埋土上層相当の①層からの遺物がさらに数少なくなる〔第77図300～304〕。注目されるのは碧玉製管玉が出土したことである。精査の過程で二分割してしまっただが、出土時は完形であった。これはIV区東拡張で確認した。出土した遺物のうち土器については、そのほとんどが接合できないことが室内調査により判明している。また埋土①～③層が水平に近い堆積をなすこと、完形の碧玉製管玉や破碎された勾玉状土製品が出土したこと等を総合すると、S B 401では住居廃絶過程に多様な遺物を伴っての人為的な埋め戻しが執行された可能性が高い。その際、遺物の大半の弥生土器は完形や大きな破片状態ではなく、細片化した破片状態であったと考えられる。3基の主柱穴からは柱痕を確認するに至らず、輪郭が不整形であることから、廃絶時に柱は抜き取られた可能性が高いものとする。

出土遺物（276～304） 第76図の276～296は埋土下層相当の⑥層上面と③層から出土したもので

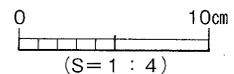
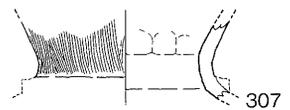
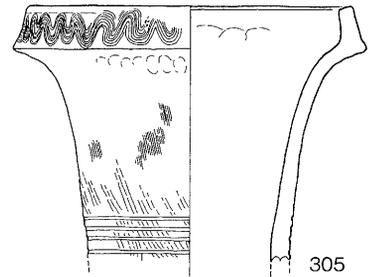


第77図 S B 401出土遺物実測図(2)



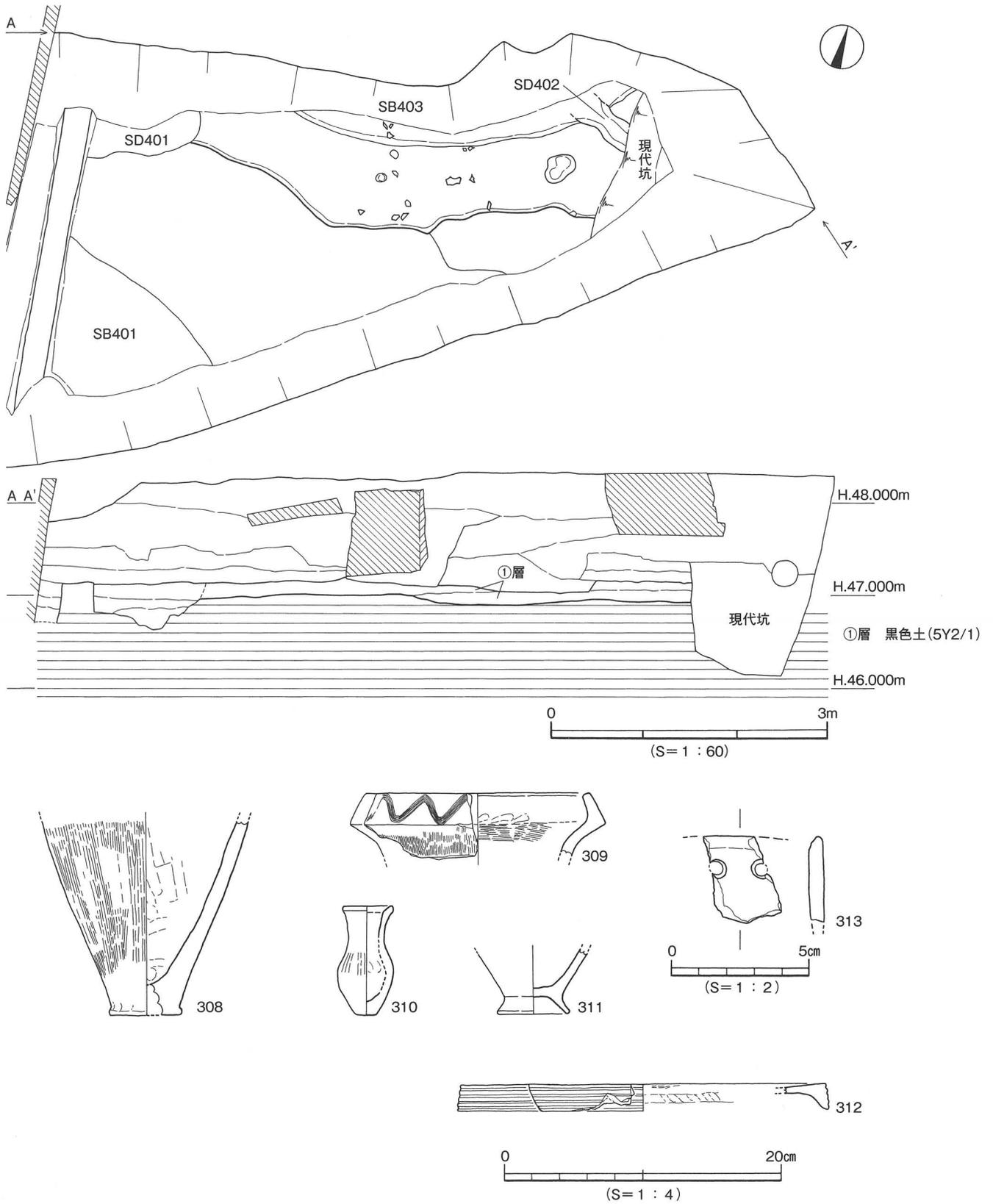
ある。276～283は甕、284～291は壺、292と293は高坏、295は支脚。甕は「く」の字状口縁で、底部は平底を呈する。壺は単口縁と複合口縁とがあり、後者は複合口縁部が直立するものである。高坏には坏部の口縁部が長く大きく開き、脚部は長脚化するものがみられる。296は勾玉状土製品で、体部のみが遺存する。第77図の297～299は埋土中層相当の②層出土。297は複合口縁壺の口縁部片。299は縄文晩期土器小片。300～304は埋土上層相当の①層出土。甕と高坏がみられる。304は完形の碧玉製の管玉で、長さ14mmを測り、孔は両面穿孔による。色調は明オリーブ灰色 (2.5GY 7/1)。

時期：埋土と出土遺物から弥生時代後期終末、梅木編年の伊予中部V-4様式 (梅木Ⅲ-1：終末期古相) に時期比定される。埋土と遺物との関係を検討したところ、本住居では廃絶後に多様な遺物を伴う人為的埋め戻しの執行された可能性が高いと判断される。

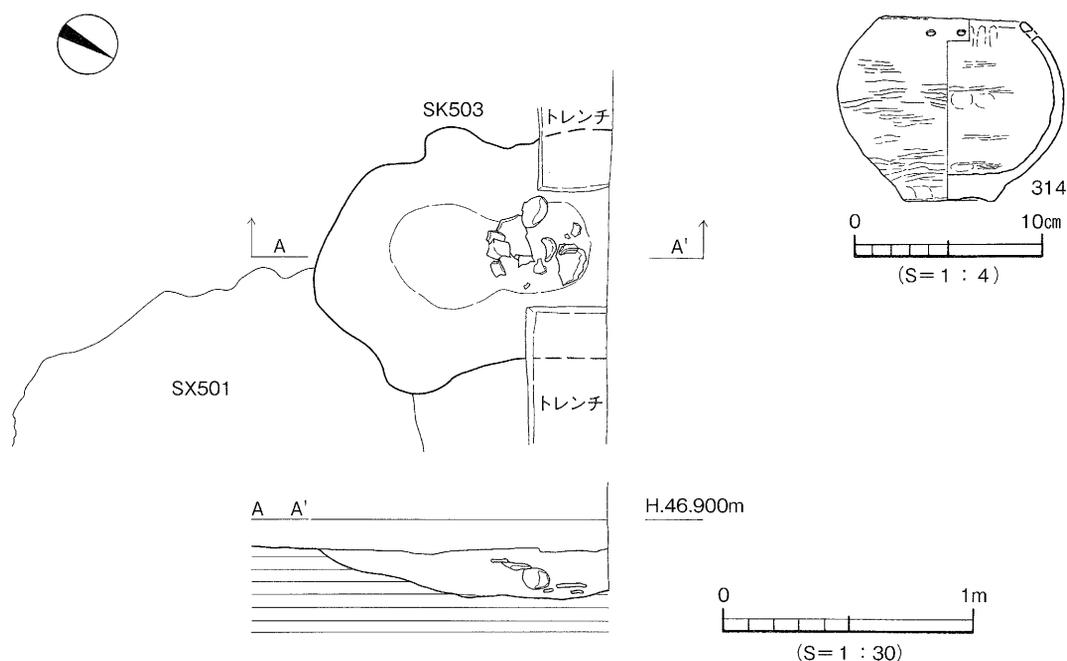


S B 402 [第78図、図版32・36]

調査地西半部のIV区北、P7・Q7区に位置し、先述したS B 401の北西5mの地点である。住居の大半が調査地外へ続いたため、検出したのは住居南端のごく一部に限られる。平面形態は円形を呈す



第79図 SB403測量図及び出土遺物実測図



第80図 SK503測量図及び出土遺物実測図

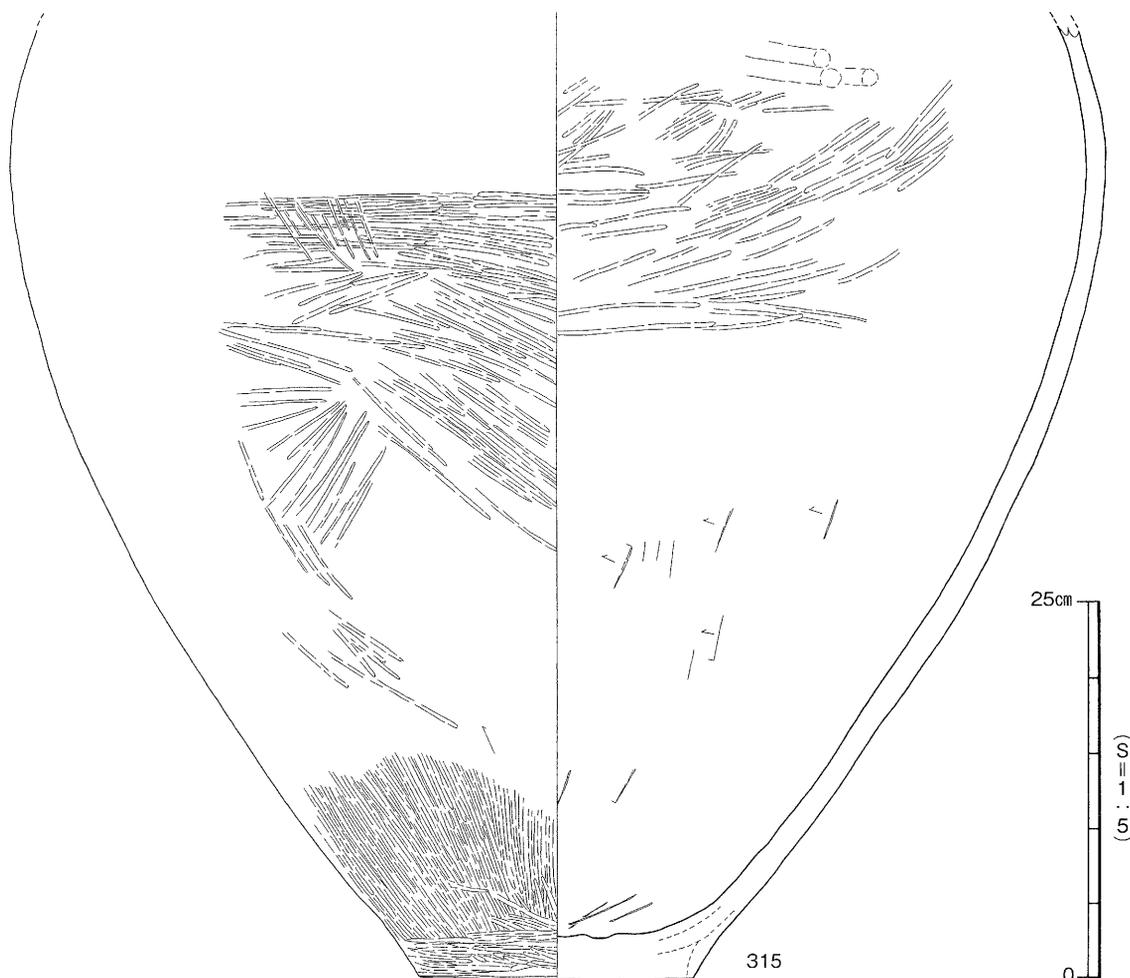
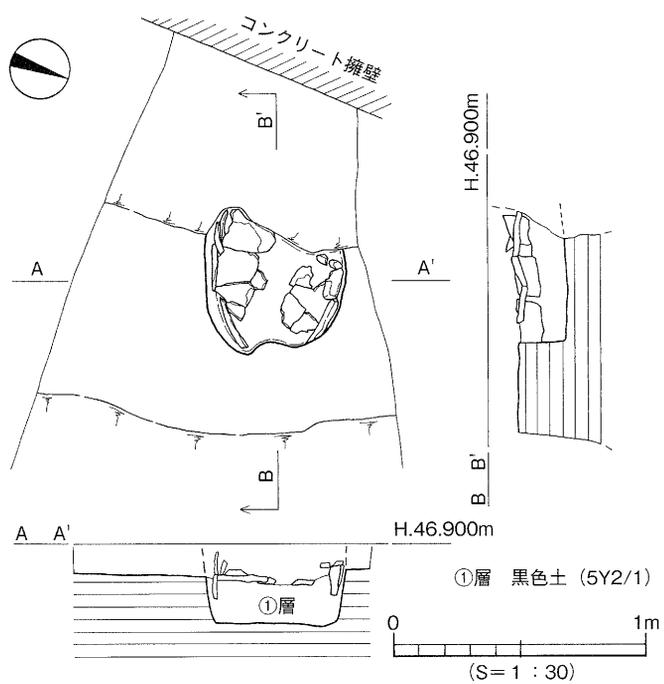
る可能性があるものの不確定である。検出面からの深さは20~26cmを測る。検出時の埋土は明黄褐色土の碎ブロックを含む黒色土(5Y2/1)を中心として、この周りには淡黄褐色土を主体とした褐灰色土(10YR4/1)が分布していた。このことから、SB401と同様に、本住居はベッド状遺構を敷設した竪穴式住居址の可能性が高いものと考えた。精査では東西方向にセクションベルトを設定して埋土と遺物との関係を検討した上で、測量図作成と写真撮影を実施した。埋土は①~④層に分層可能で、このうち③層はベッド状遺構の貼土、④層は住居床の貼床埋土である。付帯施設にはベッド状遺構と周壁溝とがあり、周壁溝内からは小ピット3基を検出した。なお、調査が住居のごく限られた箇所であったことに起因して、支柱穴と屋内炉は検出するには至らなかった。遺物はセクションベルトの埋土②層から複合口縁壺305が出土したほか、数点の弥生土器に限られる。

出土遺物(305~307) 305は長頸の複合口縁壺である。複合口縁部は「く」の字接合で、内傾して短く立ち上がり、外面には4条の櫛描波状文を施す。復元口径17cmを測る。なお、頸部には4条のヘラ描沈線文がみられる。306は複合口縁部がタガ状に外に突出するタイプである。307は広口壺の頸部か。

時期: 埋土と出土遺物、さらにベッド状遺構が敷設されることを勘案して、SB402は後期後葉~終末、梅木編年の伊予中部V-3様式~V-4様式に時期比定される。遺物の器種が壺に限られており、器種構成や壺以外の器形について判然としないことから多少の時間幅を考慮しておきたい。

SB403 [第79図、図版33・36]

調査地西半部のIV区東拡張、O8・N8区に位置し、SB401の北東1.8mの地点である。SB402同様、住居の大半が設定した調査区外へ続き、住居の東は現代坑で消失しているため、検出できたのは住居南端のごく一部に限られる。平面形態は多角形状を呈する可能性がある。検出面からの深さは



第81図 S K 502測量図及び出土遺物実測図

15~22cmを測る。埋土は黒色土（5 Y2/1）で、わずかな色調の違いを基準として二層に大別可能である。なお、IV区東拡張の北壁の観察に拠れば本住居を一部覆う形で3層の遺物包含層が確認されている。付帯施設には削り出しにより形成された幅広のベッド状遺構がある。周壁溝、屋内炉、支柱穴、貯蔵穴等は検出するには至らなかった。遺物は埋土の下層からわずかな弥生土器と石器とがある。

出土遺物（308~313） 308は甕、309と310は壺である。309は「く」の字接合の複合口縁壺の中型品、310はミニチュアの

完形品である。311は鉢底部の可能性がある。312は端部が垂下する器台の受部で、復元口径は26.4cmを測る。313は緑色片岩製の磨製石庖丁の製品。

時期：埋土と出土遺物、さらにベッド状遺構が敷設されていることから、後期中葉~後葉、梅木編年の伊予中部V-2様式~V-3様式に時期比定される。出土遺物が数量的に限られ、器種構成が判然としないことから多少の時期幅を考慮しておきたい。

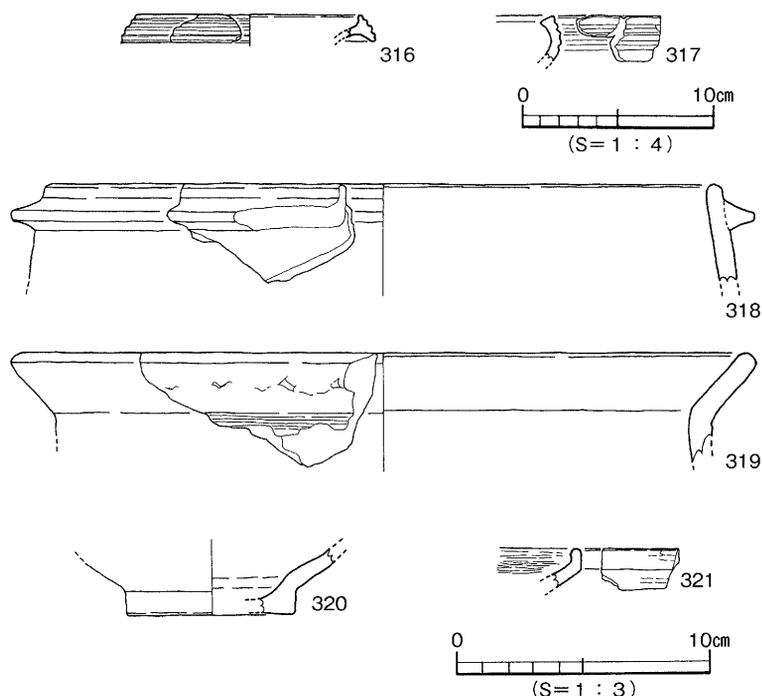
（2）土坑（SK）

SK503〔第80図、図版34-4・36〕

調査地西端のV区北西部、T8・9区に位置する。土坑の北半部は調査区外へ続き、南端部はSX501を切る。平面形態は長楕円形状の可能性が考えられ、規模は検出長1.2m、検出幅0.9~1.0m、検出面からの深さ20cmを測り、埋土は黒色土（5 Y2/1）の単一層である。床面は浅いU字状を呈する。遺物は埋土中位~下部で弥生土器と礫が出土した。弥生土器には口縁の一部を除きほぼ完存する無頸壺や大型壺の底部片があり、後者は別遺構（SK502）に伴う弥生土器と接合することが確認されている。

出土遺物 314は無頸壺で、口縁は内湾し、口縁直下に2孔一対の円孔を2組施す。肩部は張り、胴部上半が最大径の位置となる。底部はやや厚みのある上げ底である。調整は内外面に横方向のヘラミガキが残り、色調は外面が灰褐色（7.5 Y R5/2）と、にぶい橙色（7.5 Y R7/4）とがあり、内面ににぶい赤褐色（5 Y R5/4）を呈し、底部を中心に黒斑が認められる。

時期：埋土と出土遺物とから、中期中葉、梅木編年の伊予中部Ⅲ様式に時期比定される。



第82図 VI区遺構出土遺物実測図

S K 502〔第81図、図版34-5・36〕

調査地西端のV区北西端、U9区に位置する。土坑の西半部は調査区外へ続くものと考えられるが、現代のコンクリート擁壁を設置する際に既に削平されており消失していた。平面形態は不整楕円形状を呈するものとみられ、規模は推定長軸の検出長0.42m、短軸長0.54m、検出面からの深さ15cmを測る。掘り方の立ち上がりは明確で、床面はほぼ水平となる。後世の土地開発により土坑の上半部は削平され、遺物の一部も消失している。埋土は黒色土（5 Y2/1）の単一層で、遺物には大型壺があり、その出土状況から倒置に据えられていた可能性を読み取ることが可能である。なお、遺物内の埋土を水洗選別したが、遺物を認めることはできなかった。

出土遺物 315は大型壺の胴部下半で、1/4程度の遺存である。肩部がやや張形となり、底部は厚みがある平底である。調整は外面が細かいヘラ状工具を用いたミガキ、内面が上半にミガキ、下半にナデを施す。残高63.2cmを測る。

時期：埋土と出土遺物とから中期前葉、梅木編年の伊予中部Ⅲ様式に時期比定しておきたい。遺物が単品の大型壺であること、出土状況が倒置に据えられていた様相がうかがえること、掘り方の形状が遺物に合致すること等から、本遺構を土器棺墓と認定して大過ないであろう。

6. その他の遺構と遺物

Ⅵ区検出の遺構はその大半が遺物を伴わないもので、時期を特定することが困難であった。ここでは図化可能な遺物が出土した遺構を抽出して報告しておきたい。

(1) 土坑 (S K)

S K 601〔第69・82図〕

Ⅵ区北西部のU10区で検出した土坑で、埋土は褐灰色土（10 Y R4/1）の単一層である。平面形態は隅丸方形形状を呈し、規模は0.7m、検出面からの深さは20cmを測る。図化可能な遺物はわずか1点に限られ、埋土の中位から出土した。

出土遺物 318は土師器三足付き羽釜の口縁部片で、口端からわずかに下がった位置に断面がコ字形の箍を貼付する。復元口径は26cmを測る。

時期：埋土と出土遺物とから、S K 601は中世（14世紀）に時期比定される。

(2) 柱穴 (S P)

S P 686〔第69・82図〕

Ⅵ区南部のT11区で検出した柱穴で、埋土は灰褐色混じりの黒色土（5 Y R1.7/1）の単一層である。平面形態は円形を呈し、規模は長軸0.6m、短軸0.5m、検出面からの深さは22cmを測る。図化可能な遺物は2点あり、埋土中からの出土である。

出土遺物 (316・317) 316と317は凹線文を施した壺と高坏の小片である。

時期：遺構埋土の色調からは古代の特徴がうかがえるものの、小破片の出土遺物には弥生時代中期後葉の特徴がうかがえ、埋土と遺物との時期が合致しない。このことから遺物は遺構の帰属時期を示しているとはいえず、遺構の埋没過程で流入した可能性が高いと判断される。また、遺物は図化可能

なものが少なくかつ小破片であることから、これらの遺物が時期を特定する材料には不適當といえよう。したがって、S P 686の時期については特定することは差し控えておきたい。

S P 620〔第69・82図〕

VI区北西部のU10区で検出した柱穴で、埋土は褐灰色土（10Y R5/1）の単一層である。平面形態は楕円形を呈し、規模は0.35m、検出面からの深さは41cmを測る。図化可能な遺物はわずか1点に限られる。

出土遺物 319は復元口径28cmを測る土師器土鍋の口縁部片である。口縁の屈曲は明確で、内面には稜線が認められる。

時期：埋土と出土遺物とから、S P 620は中世（14世紀）に時期比定される。

S P 632〔第69・82図〕

VI区東部のT10区で検出した柱穴で、埋土は褐灰色土（10Y R4/1）の単一層である。平面形態は不整形を呈し、規模は径0.2m、検出面からの深さは32cmを測る。図化可能な遺物はわずか1点に限られる。

出土遺物 320は土師器の高台付坏で、高台の立ち上がりは明瞭である。

時期：埋土と出土遺物とから、S P 632は中世（14世紀）に時期比定される。

S P 650〔第69・82図〕

VI区北西部のU10区で検出した柱穴で、埋土は黒色混じりの褐灰色土（10Y R4/1）の単一層である。平面形態は楕円形を呈し、規模は長軸0.65m、短軸0.5m、検出面からの深さ21cmを測る。図化可能な遺物はわずか1点に限られる。

出土遺物 321は縄文土器の浅鉢小片である。

時期：遺構埋土の色調からは中世期の特徴がうかがえるものの、小破片の出土遺物からは縄文時代晩期に比定され、埋土と遺物との時期が合致しない。このことから遺物は遺構の帰属時期を示しているとはいえず、遺構の埋没過程で流入した可能性が高いと判断される。また、遺物は図化可能なものが少なくかつ小破片であることから、積極的に時期を特定する材料には不適當といえよう。したがって、S P 650の時期については特定することは差し控えておきたい。ただし、遺構の埋没過程で321が流入している事実は、縄文時代晩期の遺構が周辺に分布していた可能性を示唆するものであり、留意する必要がある。

7. 小 結

今次調査では、縄文時代晩期、弥生時代中期、同後期中葉～終末、中世の生活関連遺構を確認したことが成果である。今次の対象地を含む一帯は松山市の指定する周知の埋蔵文化財包蔵地に該当していないことから、同包蔵地の見直しを含めた検討が早急に必要になる。以下では、二つの項目を取り上げて整理することとし、必要に応じて同遺跡1～3次調査地の成果にも言及したい。

(1) 遺構の変遷について

事実報告では時代毎に遺構を詳述してきたので、ここでは遺構の変遷を整理する。

[縄文時代]

縄文時代に遡る生活関連遺構はS K 401とS X 501である。地形的には北東から南西方向に続く微高地上に構築された遺構で、前者は貯蔵施設（穴倉）の可能性が高い。同2次調査地の成果と考え合わせると、当該期の遺構がIV区以西の周辺に広く分布するものとみられる。貯蔵施設が確認されたことにより、当地を含む周辺で定住生活が営まれていたことは確実で、今後の周辺の調査により、居住施設（竪穴式住居址）の検出される可能性は高いといえよう。

[弥生時代]

弥生時代は中期前葉、中期中葉、後期中葉～後葉、同後期後葉～終末の遺構が確認されている。遺構は調査地の西半部に分布に限られる。中期前葉には土器棺墓S K 502があり、調査地の北西端を墓域として利用していたことがわかる。

後期中葉以降は竪穴式住居址S B 401～403が該当する遺構で、直径10m程度の大型円形竪穴式住居を含む。当地からは小型方形竪穴式住居は未検出であったが、同1・2次調査地の成果より当地周辺にも小型方形住居は分布する可能性はある。少なくともIV区及びIV区東拡張周辺は当該期に居住域として利用されていたことは疑いない。また、同3次調査地からは古墳時代初頭の土坑を単独ではあるが検出しており、周辺に古墳時代初頭の遺構が存在することは確かである。ただし、遺構密度や遺構配置については未知であり、今後の周辺での本格調査に期待するところである。

[中世]

わずかに土坑1基（S K 601）の検出にとどまったが、これにより当地に生活関連遺構は存在したことが確認された。遺構の面的な広がりや構成については今後の周辺調査の結果を待たねばならない。同1次調査地の遺物に貿易陶磁器（中国製白磁の四耳壺）が含まれることから、今後は集落を構成する人々の階層にも留意すべきであることを指摘しておきたい。

[まとめ]

このように、今次調査では縄文時代晩期に遡って土地利用の始まったことが確認され、これは同2次調査地の成果を追認するものとなる。弥生時代に移行すると、前半期は墓域や貯蔵域として土地利用されていたが、後半期には居住域として利用されていることから、少なくとも弥生時代後半期には当地が集落の一角を担っていたことは確かといえる。同2次調査地の成果と考え合わせ、当該期の集落は一定の広がりをもって展開していたものと理解できる。南北の広がりについては不明であるものの、東西については2次調査地V区から4次IV区東拡張間の60m程度の広がりが見込まれる。古墳時代以降について同3次調査地から祭祀性の窺える土坑を単独で検出し、古代と中世の遺構は同1次調査地で検出している。さらに中世においても建物や溝、中国製の貿易陶磁器の白磁を埋納した土坑を検出しており、これらは東野森ノ木遺跡における土地利用の実態を知る上で興味深い知見といえる。

(2) 弥生時代後期終末の竪穴式住居址S B 401について

S B 401は直径10m程度に復元可能な円形を呈した大型竪穴式住居址であった。埋土の堆積状況、遺物の出土量、完形の管玉と破碎された勾玉状土製品の出土等から、竪穴式住居の廃絶後に各種遺物

を伴う人為的埋め戻しの執行された可能性が高いことを指摘した。調査区の制約上、全ての支柱穴を検出するには至らなかったものの、検出した柱穴からは柱痕は確認できなかった。このことから、廃絶時点では屋根を含む主柱は撤去されていた可能性が考えられる。同2次調査地検出のS B 502も廃絶後に各種遺物を伴う人為的埋め戻しが執行された事例に該当しており、廃絶時の状況も類似する。帰属時期も弥生時代後半期と共通しており、当該期における住まいの廃絶を考える上でS B 401の調査データは興味深いものといえよう。確認された完形の碧玉製管玉は単なる装飾品にとどまらず、希少価値に裏打ちされた威信財的な意味合いも多分にあったと考えられる。この理解に従えば、S B 401の廃絶後に執行された人為的埋め戻しでは、竪穴式住居の構築で形成された穴を造成することに加え、埋め戻しの過程で碧玉製管玉の完形品を住居に封じ込めることに重要な意味合いが込められていた可能性があるのではないだろうか。このことはS B 401同様に、同2次調査地検出のS B 502にも完形の翡翠製勾玉が伴うことから、強ち飛躍した解釈や想定とも言い切れない。これらの調査所見は当該期の人々の精神性を復元・考察する上において興味深い事例のひとつに位置付けられる。

従来の調査において竪穴式住居址の精査過程で勾玉や管玉・ガラス小玉、さらに破鏡や鉄製品が出土する事例がいくつか報告されている。報告書を概観すると、出土した事実関係については記述されているものの、これら遺物と住居埋土との関連性や住居自体の埋没要因について積極的に言及された例は多くはない。また、これらの遺物を伴うことや住居の規模が突出して大きいことを根拠とし、さらに住居の帰属時期から、住居が有力者層の住まいであったと報告されるケースがしばしば認められる。しかしながら、これらの遺物が当時地表下1 m程度にまで掘り窪められた竪穴式住居の下部に供献されたとの認識は管見にして少ないように思われる。威信財や装飾品を単なる廃棄資料として一括りにできるのであろうか。さらに、これらの遺物の保有を可能とした集落の基盤が何であったのかについても今後認識を新たにして議論を重ねる必要があるのではないだろうか。

S B 401の調査と分析によって、この住居址には従来あまり積極的に言及される機会の少なかった住居廃絶時や廃絶以降に執行された人間の行為に関する情報がいくつか含まれていることを指摘した。本報告では、これを検討する上で必要となる項目を整理して詳述した。すなわち、住居埋土の堆積状況に加えて、埋土と遺物の関係、遺物の出土状況（残存状況）、さらに支柱穴における柱痕の有無等についてである。これらの確認と検討を現地（野外調査）で実施し、室内調査でこれらを総合することが肝要であることを今一度指摘しておきたい。また、野外調査時で作成する測量図や撮影する記録写真についても、後の室内調査における検証や議論に耐えられるものが求められていることについては異論を挟む余地はないであろう。このような些細なことではあるが、明確な問題意識に立脚した野外調査の実践は今後も大いに必要となる。今次調査において竪穴式住居址の精査と分析で試みた視点は一過性に帰すべきものではなく、今後の調査においても継続して実践すべきである。

第8章

たる樽 み味 たち立 ぞえ添 遺 跡

3 次 調 査 地

第8章 樽味立添遺跡3次調査地

1. 野外調査の経過と方法

(1) 調査の経緯

発掘調査に先立ち調査事務所と仮設トイレを設置し、発掘機材等の搬入を行う。対象地の周囲には丸杭とトラロープを用いて安全対策を行う。調査区は東側よりⅠ区・Ⅱ区・Ⅲ区と3区画に分けることとした。10月15日からは、試掘調査の結果を基にして、重機を用いてⅠ区の表土剥ぎを行い、Ⅲ層まで掘削した。重機での掘削後、作業員を本格的に投入し、Ⅳ層上面の精査を行い、人力で遺構検出を行った。Ⅰ区では、竪穴式住居址、大溝、土坑、柱穴の生活関連遺構を多数検出することができた。10月上旬、委託業者により、国土座標に沿って基準点を設置した。遺構検出状況の写真撮影には、高所作業車を用いて行い、続いて平板にて遺構配置図の測量を縮尺100分の1で行った。遺構埋土と遺構番号を記録した後に、Ⅰ区の竪穴式住居址から精査を開始した。記録は主に測量図と写真を用いることとして、測量図は、必要に応じて縮尺10分の1による遺物出土状況の平面図と土層断面図、さらに縮分40分の1による遺構・地形測量図を作成した。写真は35mm判の白黒・カラーリバーサル・ネガカラーの各フィルムを用いて撮影し、主要なものについては4×5判や6×7判の白黒ネガフィルム・カラーリバーサルフィルムを用いた。12月10日からは、大溝（S D101）の精査に着手した。大溝の精査に際しては、南北の調査壁沿いに先行トレンチを設定し、土層堆積状況の確認を試みた。つづいて、大溝内に3本の土層観察用の畦（セクションベルト）と、各々にトレンチを設定し、各層ごとに精査を行った。大溝の南半部からは、縄文土器と弥生土器の小片と多量の礫が出土したことから、縮分20分の1で測量と写真撮影を行った。2月3日からは、Ⅱ区とⅢ区の調査に着手し重機を使用して表土剥ぎを行う。重機での掘削後、作業員を本格的に投入し、Ⅳ層上面の精査を行い、人力で遺構確認を行った。Ⅱ区からは、竪穴式住居址、大溝、土坑、柱穴を、Ⅲ区からは、竪穴式住居址、柱穴等の生活関連遺構を多数検出することができた。3月23日には、愛媛大学教授田崎博之先生に調査指導の招へいを行った。調査指導では、特に大溝、土坑、竪穴式住居址の調査方法と、その進め方、調査の整理方法について指導を受けた。具体的には以下の通りである。大溝では、埋土と遺物の関係、各層ごとの水洗いを行い、遺物の検出につとめること、土坑では、出土遺物と遺構の掘方、遺物の出土状況の観察を行うこと、竪穴式住居址では、遺物の出土状況の確認につとめることなどである。4月以降は、これらの指導を踏まえた上で遺構の精査を進めた。土坑3基は縄文時代晩期の遺物が出土し、掘方が長方形であり、壁がほぼ垂直であることから、松山平野では希少な縄文時代晩期の貯蔵穴群の可能性が高いと認定された。大溝からは、弥生時代前期末から中期初頭の遺物が出土し、検出長と横断面形態、さらに周辺の様相から、集落を区画する溝の可能性があると指導を頂いた。

これらの調査成果を速やかに公開するため、6月10日には、報道発表、12日には、現地説明会を現地にて開催した。現地説明会当日は天候にも恵まれ、地元住民を中心に200人にも及ぶ一般市民の参加があり、樽味地区における埋蔵文化財の関心の高さが明らかになった。現地説明会後は、遺構に対する測量の補足を実施し合わせて写真撮影を行う。

7月23日より重機による調査区の埋め戻しをⅢ区から開始し、順次他の調査区に移り、30日にはす

すべての調査区を埋め戻し、あわせて、調査事務所と仮設トイレを撤去し、野外調査を終了した。

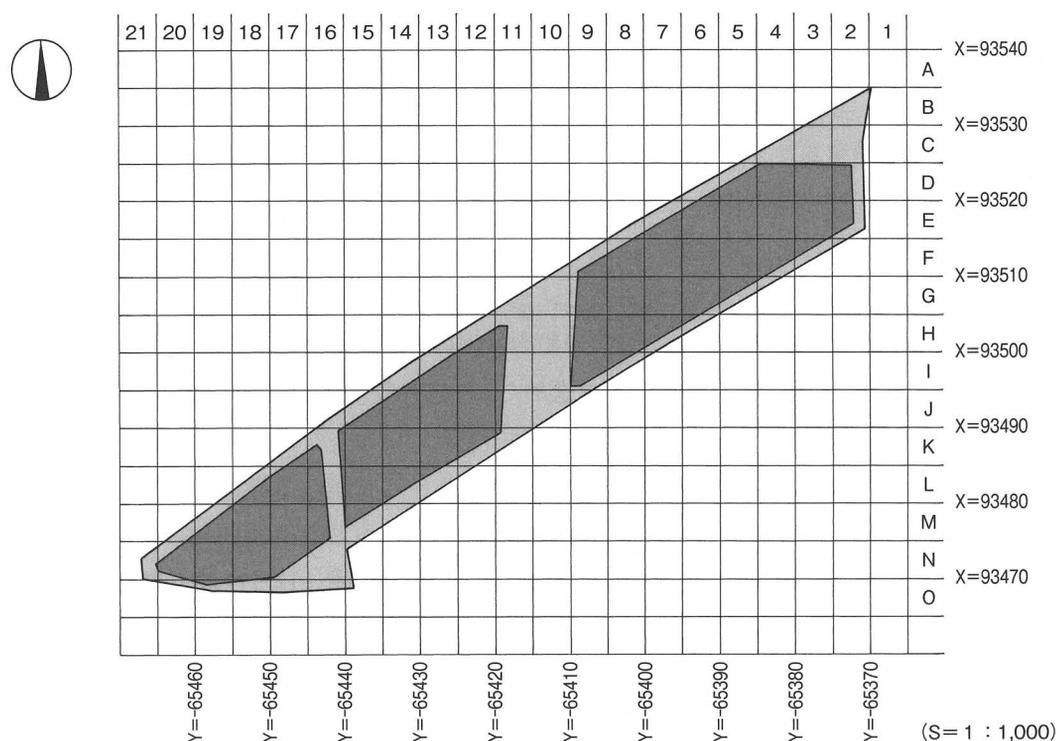
2. 基本層位〔第84～87図〕

調査地は、石手川中流域南岸の扇状地上に立地し、標高44.70mを測る。調査前は水田（Ⅰ・Ⅲ区）と一部宅地（Ⅱ区）として利用されていた。

調査では、4層の土層を確認した。Ⅰ層は灰黄褐色土（水田耕作土）であり、調査区全域で検出し層厚15～30cmを測る。Ⅱ層はにぶい黄褐色土（水田床土）であり調査区全域で検出した。Ⅲ層は2層に分層できる。Ⅲ①層は黒褐色土（10Y R5/4）で、層厚8～12cmを測る。Ⅰ区北西部とⅡ区北部で検出し、弥生土器・土師器・須恵器が出土した。Ⅲ②層は黒褐色土（10Y R3/2）で層厚8～10cmを測る。Ⅰ区北西部とⅡ区北部で検出し、弥生後期の土器が出土した。Ⅳ層は明褐色土（7.5Y R5/8）及び極暗褐色土（7.5Y R2/3）であり調査区全域で検出した。層厚10～25cmを測り、Ⅳ層上面が遺構検出面となる。Ⅳ層以下については、幅120cmのトレンチを設定し、人力で掘削を行い、堆積土層の確認を試みた。その結果、本層以下がかつての石手川の氾濫に起因する堆積層であることを確認したが、人工遺物を確認することはできなかった。

3. 調査概要

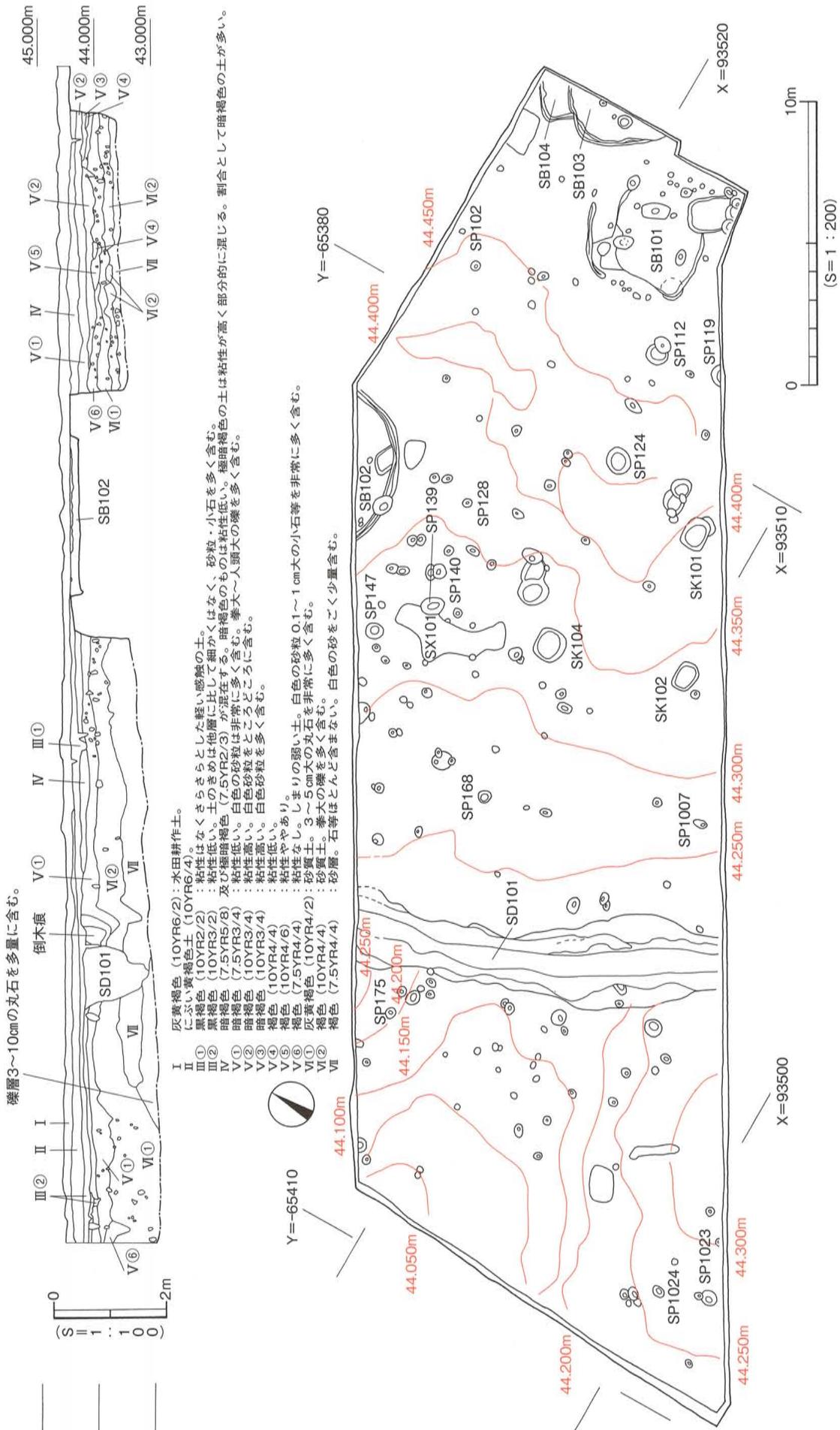
検出した主な遺構としては、竪穴式住居址9棟、掘立柱建物跡1棟、土坑5基、溝3条、性格不明遺構3基、柱穴460基である。遺物は遺構と包含層から確認されている。その遺物には、縄文土器（鉢



第83図 調査区区割図

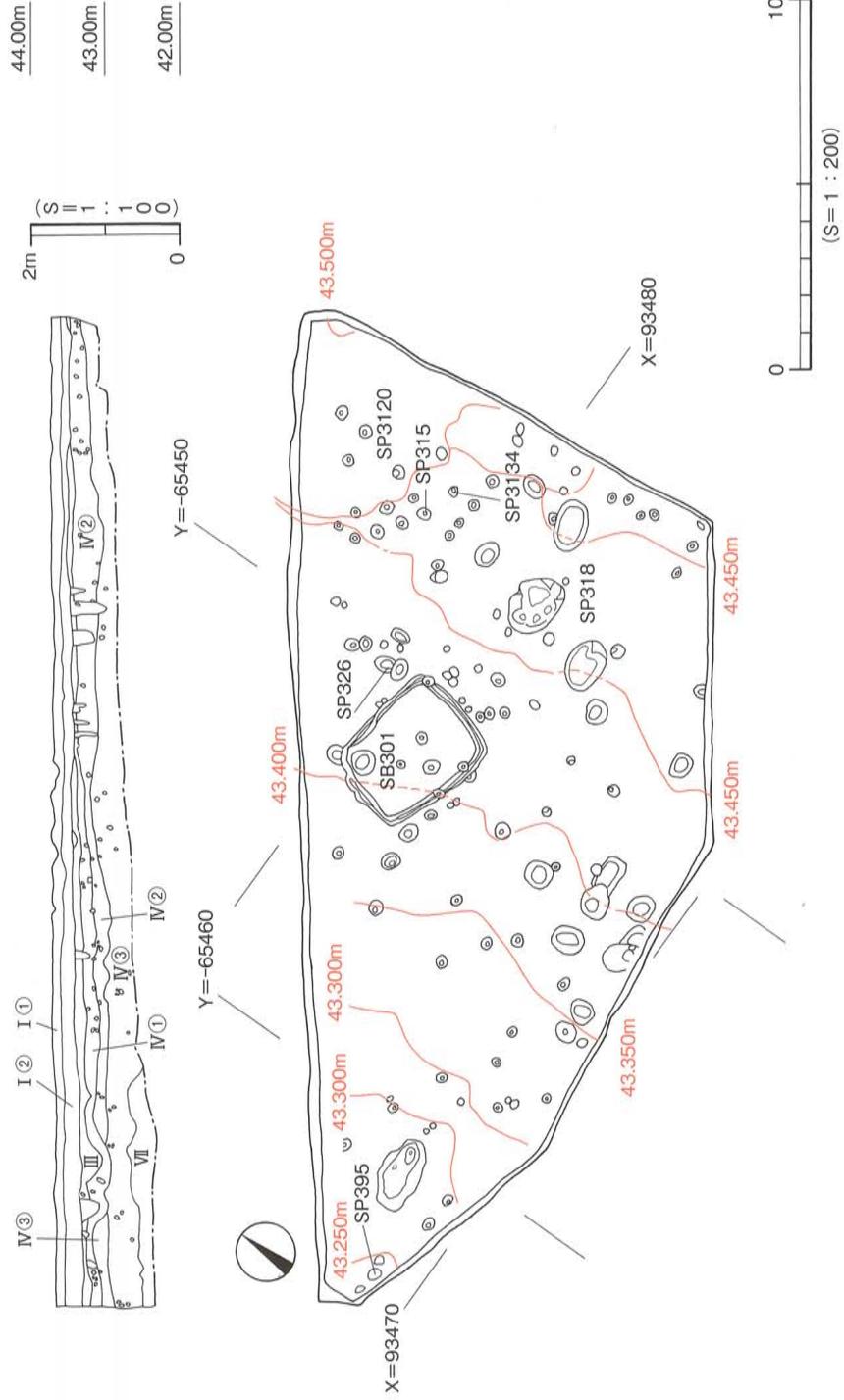


第84図 遺構配置図



第85図 I区遺構配置図・北壁土層測量図

- I ① 造成土
- I ② 灰黄褐色 (10YR6/2) 水田耕作土。
- III 暗褐色土 (10YR3/3) しまり弱い。バサバサの感じ。粘性弱い・黄褐色の2~5mm粒混じり。
- IV ① 明黄褐色 (10YR6/6) 粘性なし。3~10mmの石粒を含む。
- IV ② 赤褐色 (5YR4/6) 粘性あり。3~10cmの礫を含む。
- IV ③ 暗赤褐色 (5YR5/6) 粘性あり。3~10mmの石粒と3~10cmの礫を含む。
- VII 褐色 (7.5YR4/4) 砂層、石等ほとんど含まない。白色の砂をごく少量含む。



第87図 III区遺構配置図・北壁土層測量図

形土器)、弥生土器(甕形土器、壺形土器、鉢形土器、高坏形土器、器台形土器)、土師器、須恵器(甕形土器)、石製品(鏃、鎌、石庖丁、台石、敲石)、鉄製品(鏃)があり、その数量は、テンバコ(600×440×75mm)81箱分に及ぶ。遺構の帰属時期は、出土遺物を基準として6期に大別される。I期は縄文時代晩期、II期は弥生時代前期～中期初頭、III期は弥生中期～後期、IV期は弥生時代後期、V期は古代、VI期は中世に大別でき、弥生時代後期に帰属する遺構が多い。

以下、主な遺構と遺物を取り上げて報告を行う。

4. 縄文時代の遺構と遺物

土坑3基を検出した。

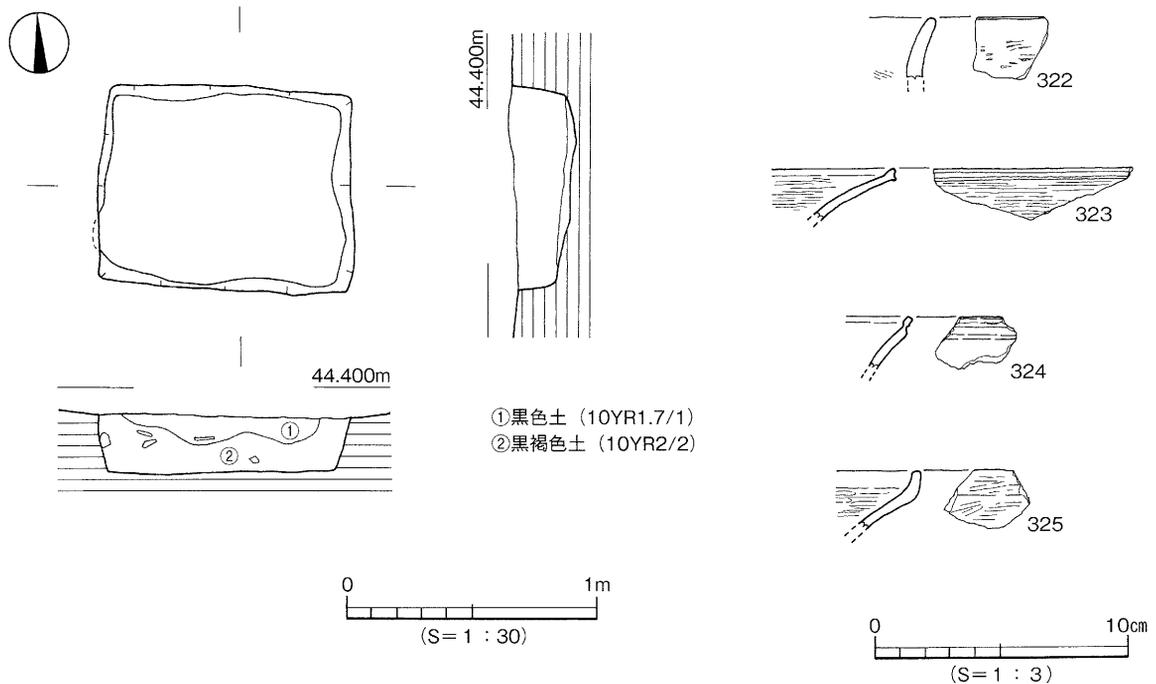
(1) 土坑(SK)

SK101〔第88図、図版40・45〕

SK101はI区のG5区に位置する。平面形態は長方形である。規模は1.26×0.95m、深さ0.25mを測る。土坑の壁は垂直で部分的にフラスコ状になるところがある。断面形態は箱形を呈し、床面はほぼ平坦となる。埋土は2層に大別でき、上層が黒色土(10YR1.7/1)、下層が黒褐色土(10YR2/2)で、上層はレンズ状に堆積し上下層ともに礫を含む。遺物には縄文土器があり、埋土下層から出土する傾向にある。出土遺物は縄文土器(浅鉢・深鉢)がある。

出土遺物(322～325) 322～325は縄文土器。322は深鉢。323～325は浅鉢の口縁部片である。

時期：出土遺物の形態より縄文時代晩期前半とする。



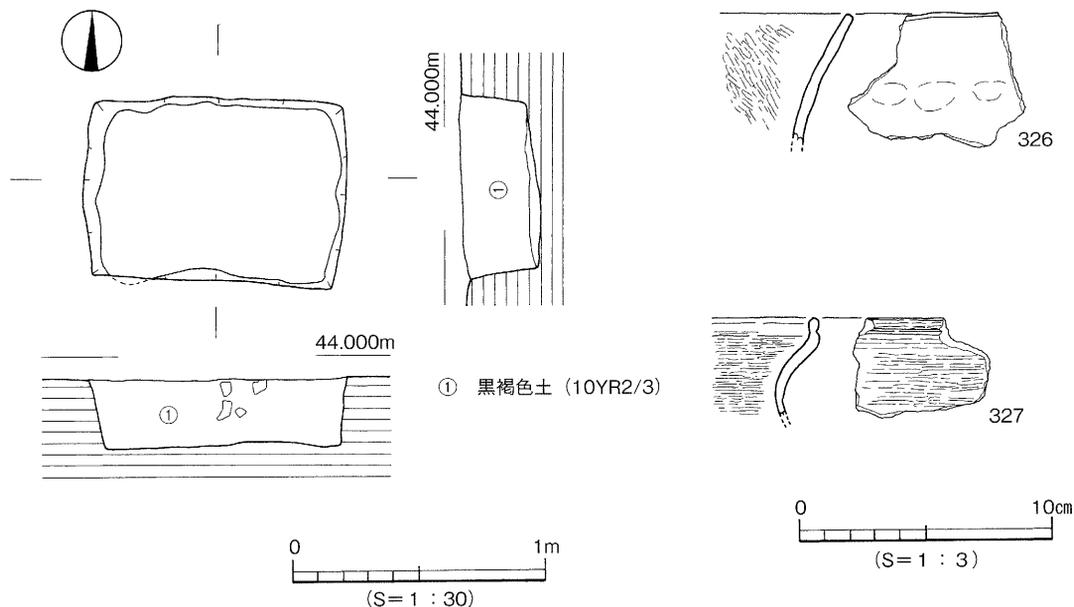
第88図 SK101測量図・出土遺物実測図

S K 102 [第89図、図版40・45]

S K 102はI区のF 4区に位置する。平面形態は長方形である。規模は1.08×0.76m、深さ0.27mを測る。土坑の壁は垂直で部分的にフラスコ状になるところがある。断面形態は箱形を呈し、床面はほぼ平坦となる。埋土は黒褐色土（10Y R2/3）で礫を含む。遺物には縄文土器があり、埋土下層から出土する傾向にある。出土遺物は縄文土器（浅鉢・深鉢）がある。

出土遺物（326・327）326は深鉢。327は浅鉢の口縁部片。

時期：出土遺物の形態より縄文時代晩期前半とする。

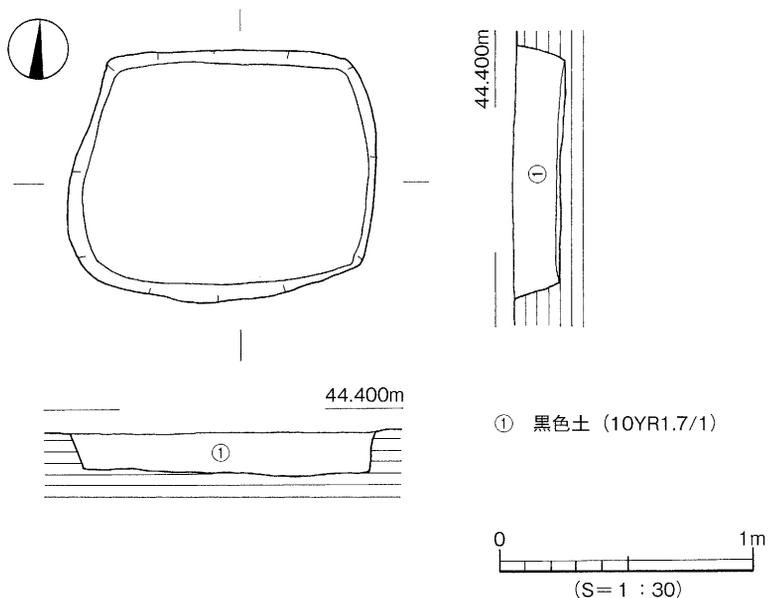


第89図 S K 102測量図・出土遺物実測図

S K 104 [第90図、図版40]

S K 104はI区のE・F 5区に位置する。平面形態は隅丸長方形である。規模は1.20×1.02m、深さ0.19mを測る。土坑の壁は垂直である。断面形態は箱形を呈し、床面はほぼ平坦となる。埋土は黒色土（10Y R1.7/1）である。遺物には縄文土器があり、埋土下層から出土する傾向にある。出土遺物は縄文土器（浅鉢・深鉢）がある。小片で図化出来ていない。

時期：出土した遺物より縄文時代晩期前半とする。



第90図 S K 104測量図

5. 弥生時代の遺構と遺物

溝3条、掘立柱建物址1棟、竪穴式住居址9棟、土坑1基を検出した。

(1) 溝 (SD)

SD101〔第91図、図版38・39・45・46〕

SD101はI区のE7～H7区に位置し、北側と南側は調査区外に続く。平面形態は東側に湾曲する様相を示す。規模は検出長15.0m、上場幅3.6～1.6m、下場幅1.0～0.8m、深さ1.2mを測る。断面形態は逆台形状である。埋土は、大きく4層に分層できる。上層は黒褐色土(10Y R2/2)、中層は黒褐色土(10Y R2/3)と黒色土(10Y R2/1)、下層は黒褐色土(7.5Y R3/2)と黒褐色土(10Y R2/3)、最下層はA、B2層に細分できる。最下層Aは黒褐色土(7.5Y R3/1)、最下層Bは黒褐色砂質土(7.5Y R2/3)である。堆積状況はレンズ状で中・下層の中央部に礫・砂が集中する。出土遺物は弥生土器の甕形土器、壺形土器、円盤型土製品、縄文土器の浅鉢、深鉢、石製品の伐採斧、石核、ナイフ形石器がある。各層ごとに遺物を掲載する。

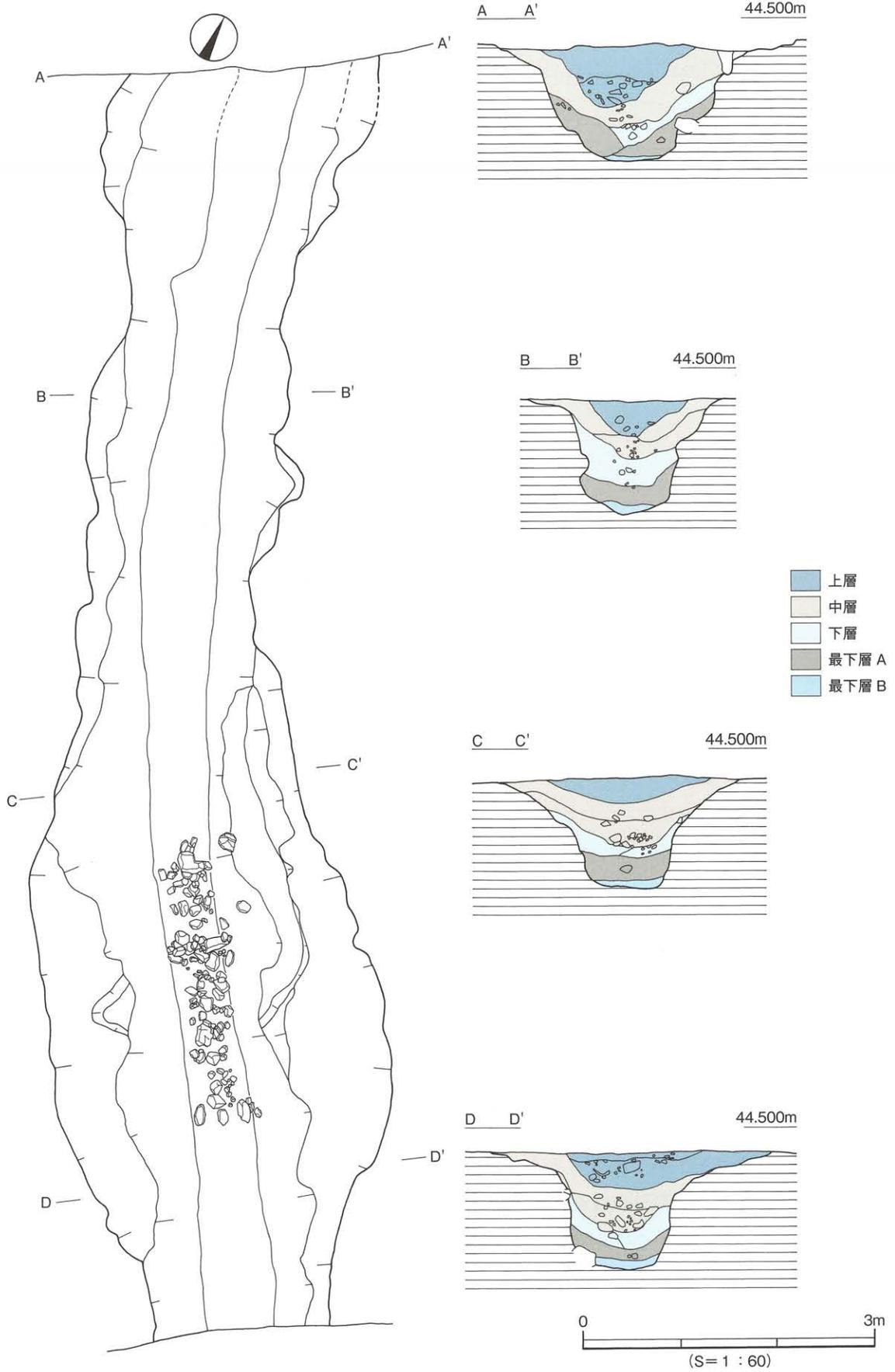
出土遺物(328～406)〔第92～97図、図版45・46〕

下層(328～345) 328・329は弥生土器。328は壺形土器の胴部片。外面に沈線文を施す。329は平底の底部。330～342は縄文土器。330～333は深鉢。330・331は外傾する口縁部。332・333は外面に条痕が残る。334～342は浅鉢。334～336は口縁端部を上方に拡張し口縁端部外面に沈線を1条施す。336の端部は丸い。内外面ともに磨きを施す。337・338は口縁端部を上方に拡張するが顕著ではない。内外面ともに丁寧な磨きを施す。339は口縁端部内面に沈線を持つ。340は口縁端部を上方に拡張し内外面は丁寧な磨きを施す。341・342は胴部が張る形態である。内外面は磨きを施す。343～345は石製品。343は石庖丁の未製品。344はサヌカイトの残核。345は素材剥片。

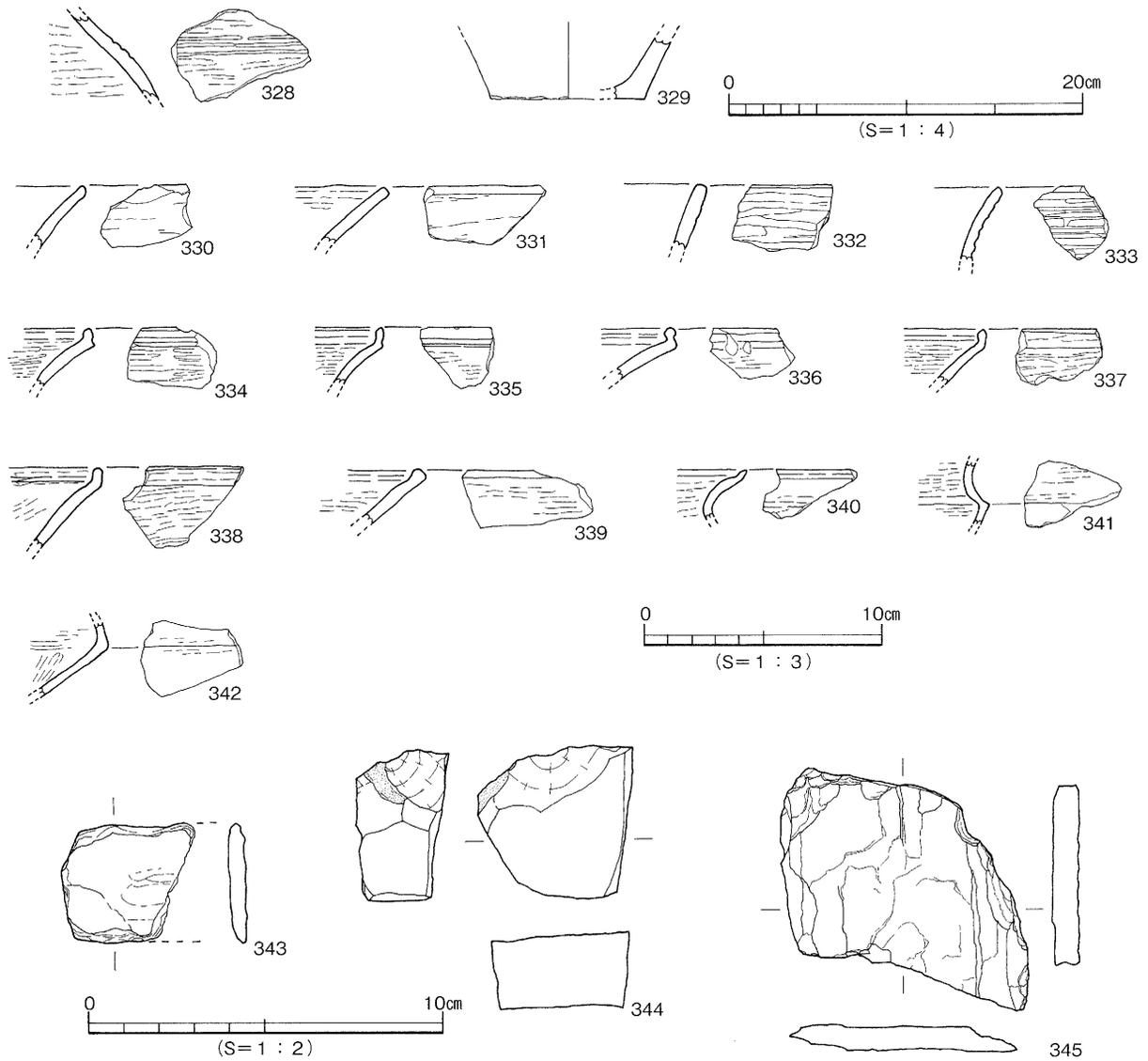
中層(③層)(346～361) 346～348は弥生土器。346・347は壺形土器の口縁部。346は頸部に1条の刻み目凸帯、口縁部内面に刻み目を持つ凸帯を巡らす。347は口縁部内面に凸帯を巡らす。348は平底の底部。349～358は縄文土器。349～352は深鉢。349・350は外傾する口縁部の外面に条痕を施す。351・352は外傾する口縁部。352の口縁端部に細い刻み目を施す。353～355は浅鉢。353は口縁端部を拡張し外面に1条の沈線を施す。内外面に磨きを施す。354は口縁端部内面に沈線を施す。355は口縁端部に大きな刻みを施す。356～358は底部。356の外面に条痕が見られる。359は円盤状土製品、弥生土器の壺胴部を円盤状に打ち欠いて転用している。360・361は石製品。360は伐採斧。361は残核である。

中層(②層)(362～378) 362～365は弥生土器。362・363は甕形土器。362は口縁部を水平に折り曲げる。363は口縁下部に沈線文と刺突文を施す。口縁部は貼り付けである。364は壺形土器の胴部片、外面に円形浮文が2個残る。365は底部片。366は弥生前期の甕形土器の頸部片。367～377は縄文土器。367～371は深鉢。367～369は外傾する口縁部外面に条痕を施す。370・371は外傾する口縁部。372～377は浅鉢。372～374は口縁端部を上方に拡張し端部外面に1条の沈線を施す。372の内外面は丁寧な磨きを施す。375は口縁端部を上方に拡張し端部は短く角張る。376・377は外傾する口縁部。378はナイフ形石器。

中層(②・③層)(379～386) 379は弥生土器、高坏形土器の脚裾部。380～386は縄文土器。380・381は深鉢。口縁端部は外傾する。382～386は浅鉢。382は肩の張る胴部、口縁端部は上方に拡張される。内外面に丁寧な磨きを施す。383～385は肩の張る胴部片。386は底部片。



第91図 SD101測量図

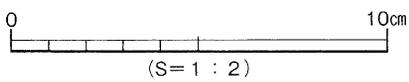
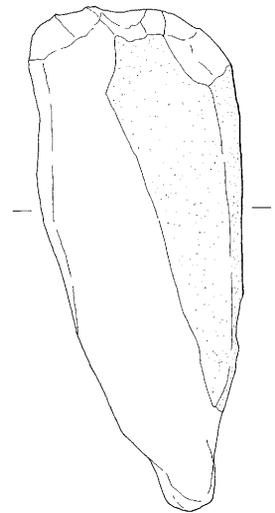
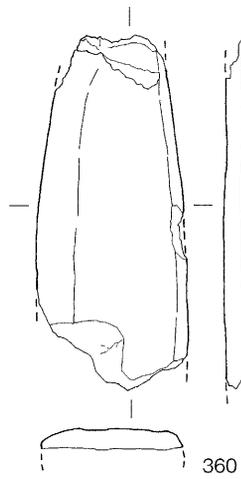
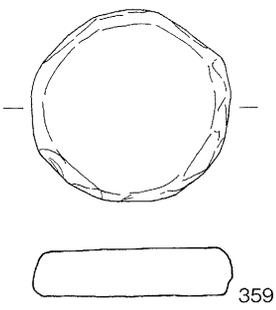
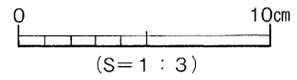
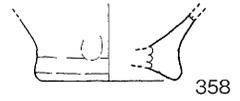
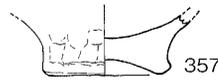
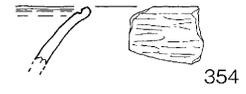
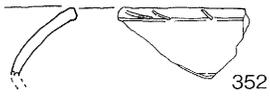
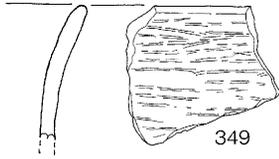
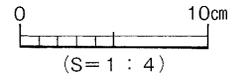
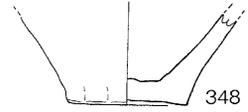
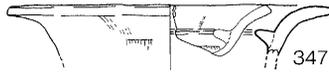
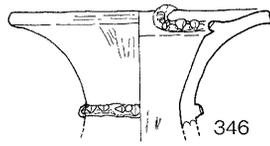


第92図 SD101下層(④層)出土遺物実測図

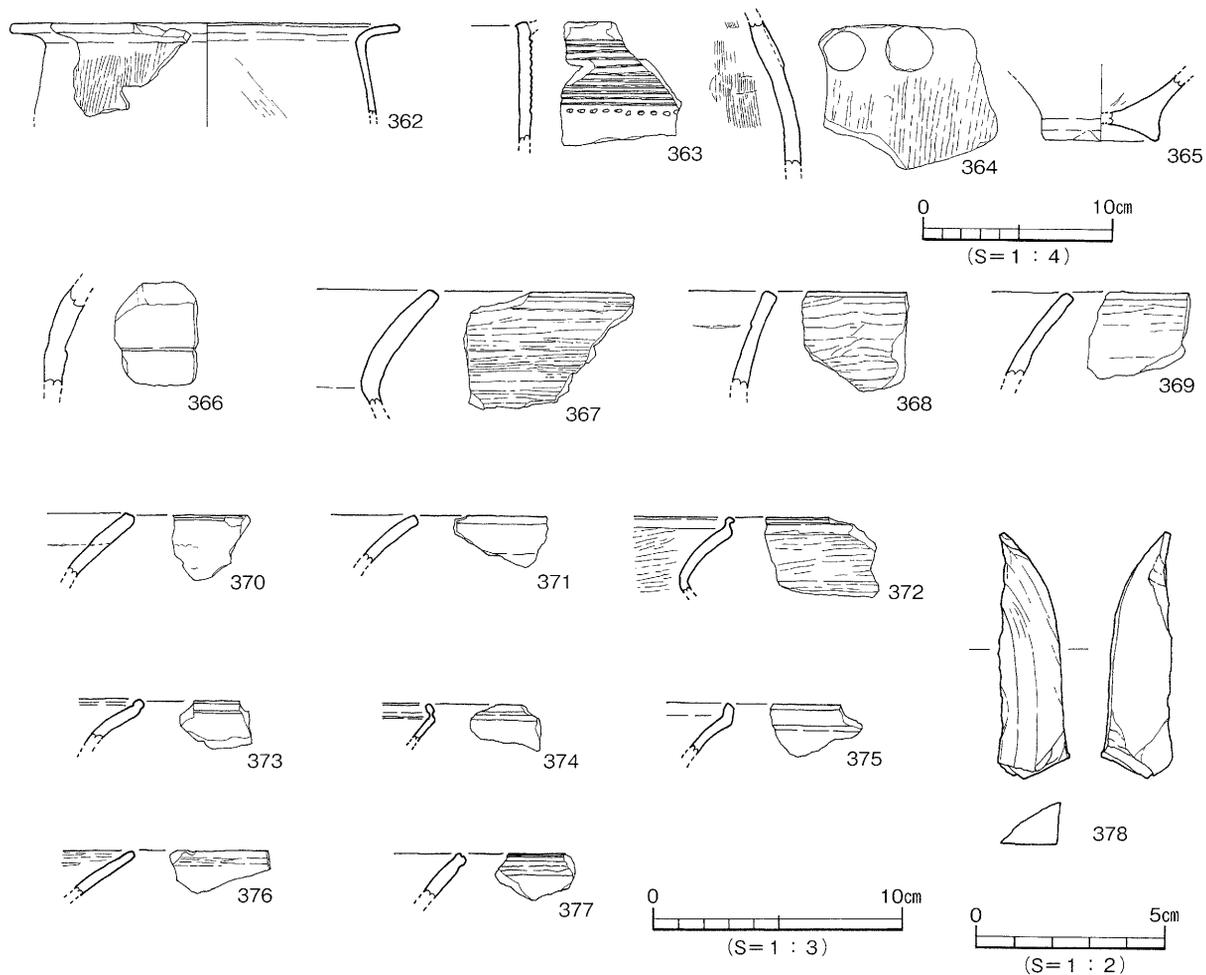
上層(①層)(387~402) 387~394は弥生土器。387~391は甕形土器。387は短く外傾する口縁部。388は「L」字状に折れ曲がる口縁部。389は頸部から胴部にかけての小片。390・391は底部片。392~394は壺形土器。392は口縁端部を拡張し端部外面に凹線文を施す。393は頸部に押圧された凸帯を1条巡らす。394は胴部に刺突文を巡らす。395~400は縄文土器。395・396は深鉢。外傾する口縁部。397・398は浅鉢。397は口縁端部を上方に拡張し端部外面に1条の沈線を施す。内外面に丁寧な磨きを施す。398は口縁端部を上方に拡張する。内外面に丁寧な磨きを施す。399・400は底部片。401・402は石鎌。401の側面は研磨痕が見られる。402の背には敲打痕が見られる。

層位不明(403~406) 403~405は弥生土器。403は外傾する口縁部片。口端部は「コ」の字状である。404は胴部外面に櫛状工具による線刻を施す。405は底部片。外面に磨きを施す。406は縄文土器。内外面に丁寧な磨きを施す。

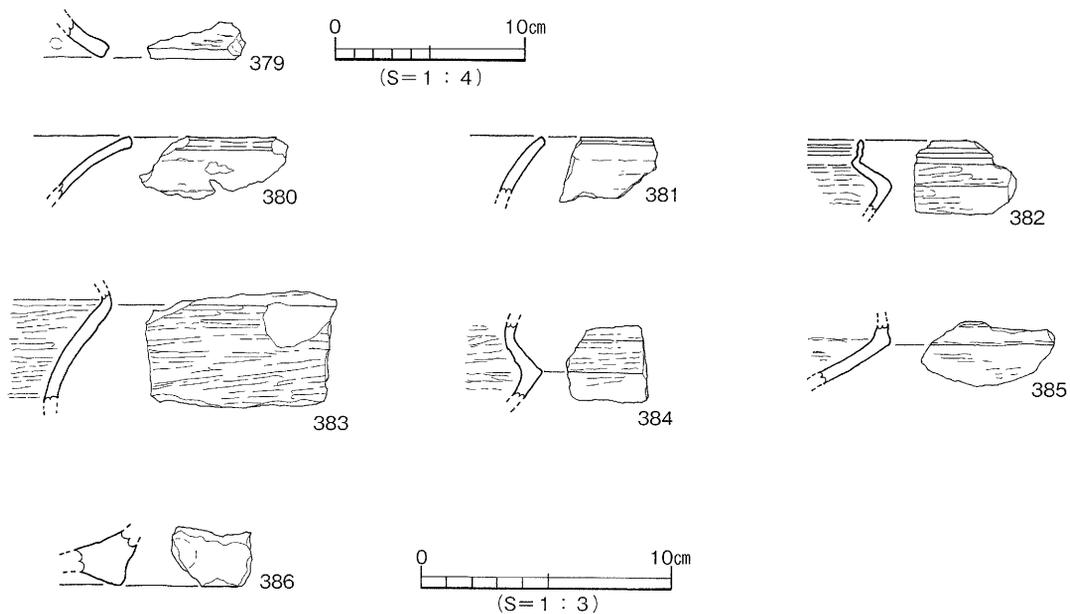
時期：下層から出土した弥生土器の形態より弥生時代前期末~中期初頭とする。



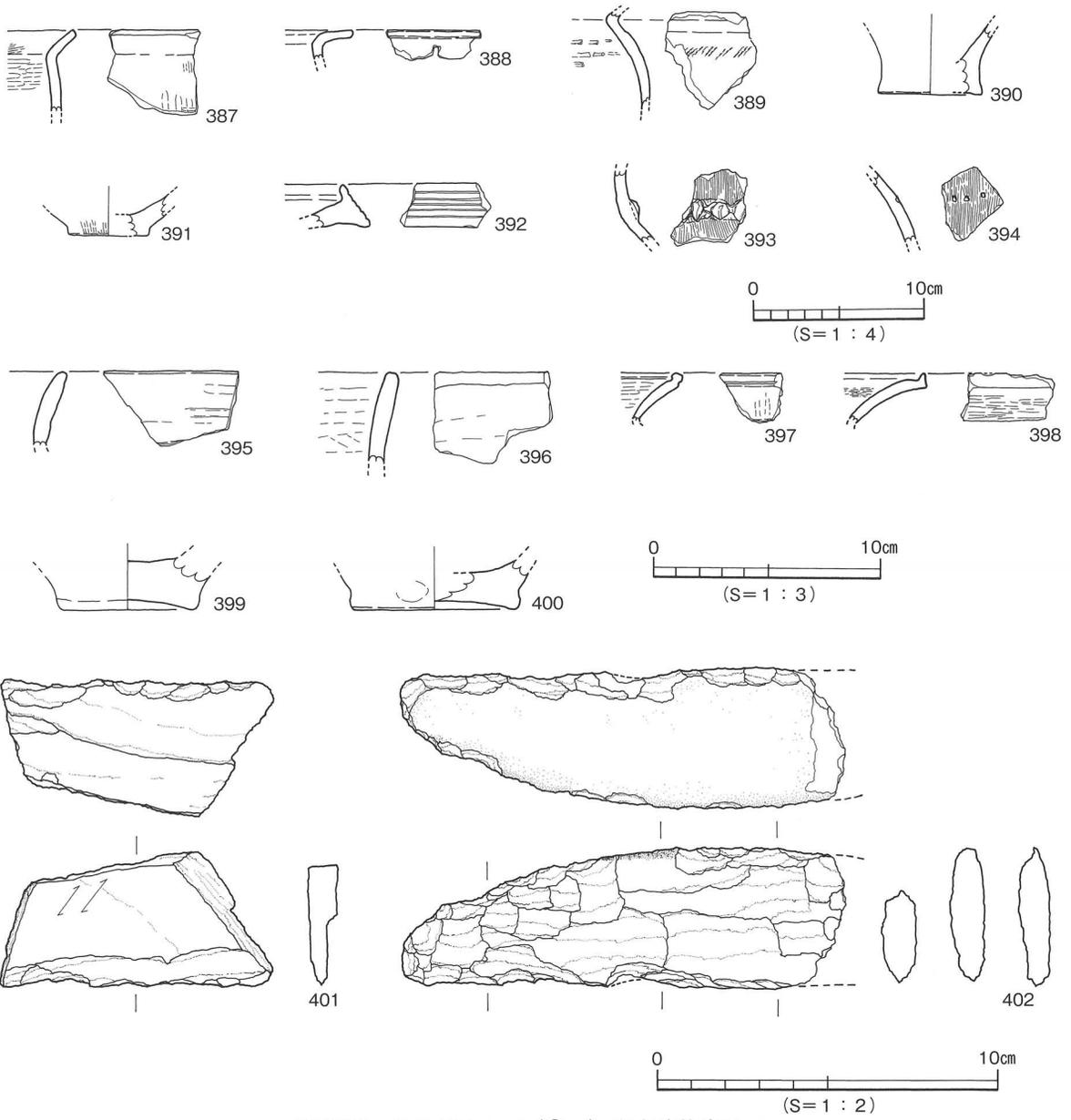
第93図 SD101中層(③層)出土遺物実測図



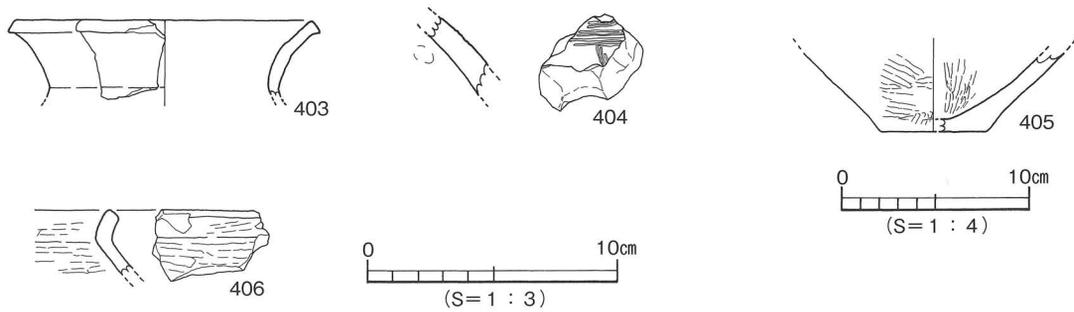
第94図 SD101中層(②層)出土遺物実測図



第95図 SD101中層(③・②層)出土遺物実測図



第96図 SD101上層 (①層) 出土遺物実測図



第97図 SD101層位不明出土遺物実測図

S D201〔第98図、図版41・46〕

S D201はⅡ区のI13～M15区に位置しS B203と掘立201の柱穴に切られる。平面形態は直線上に延びる。規模は検出長22.0m、上場幅2.2m、下場幅1.0～0.6m、深さ0.8mを測る。断面形態は逆台形状である。埋土は3層に分層でき①層黒褐色土(7.5Y R2/2)、②層暗褐色土(7.5Y R3/3)、③層灰黄褐色土(10Y R4/2)である。①層中央部に1～3cmの石、②層中央部に2～8cmの石、その下部に1～4cmの石を含む。③層上部には、2～4mmの砂を多量に含む。出土遺物は弥生土器の甕形土器、壺形土器、鉢形土器、高坏形土器、器台形土器、ミニチュア土器、縄文土器の浅鉢、深鉢がある。

各層ごとに遺物を掲載する。

出土遺物(407～518)〔第99～103図、図版46〕

下層(③層)(407～414) 407～410は弥生土器。407・408は甕形土器の口縁部片。409・410は平底の底部。411～413は縄文土器。411～413は浅鉢。411・412は口縁端部を上方に拡張し端部外面に沈線を施す。413は浅鉢の口縁部。414は石製品。

中層(②層)(415～440) 415～422は弥生土器。415～418は甕形土器。415・416は口縁部。415の口縁端部には刻み目を施す。417は僅かに上げ底でくびれる底部。418は僅かに上げ底で直線的に胴部に続く。419～422は壺形土器。419は頸部外面に沈線文と刺突文を施す。420は平底の底部。421は上げ底の底部。422は平底の底部。

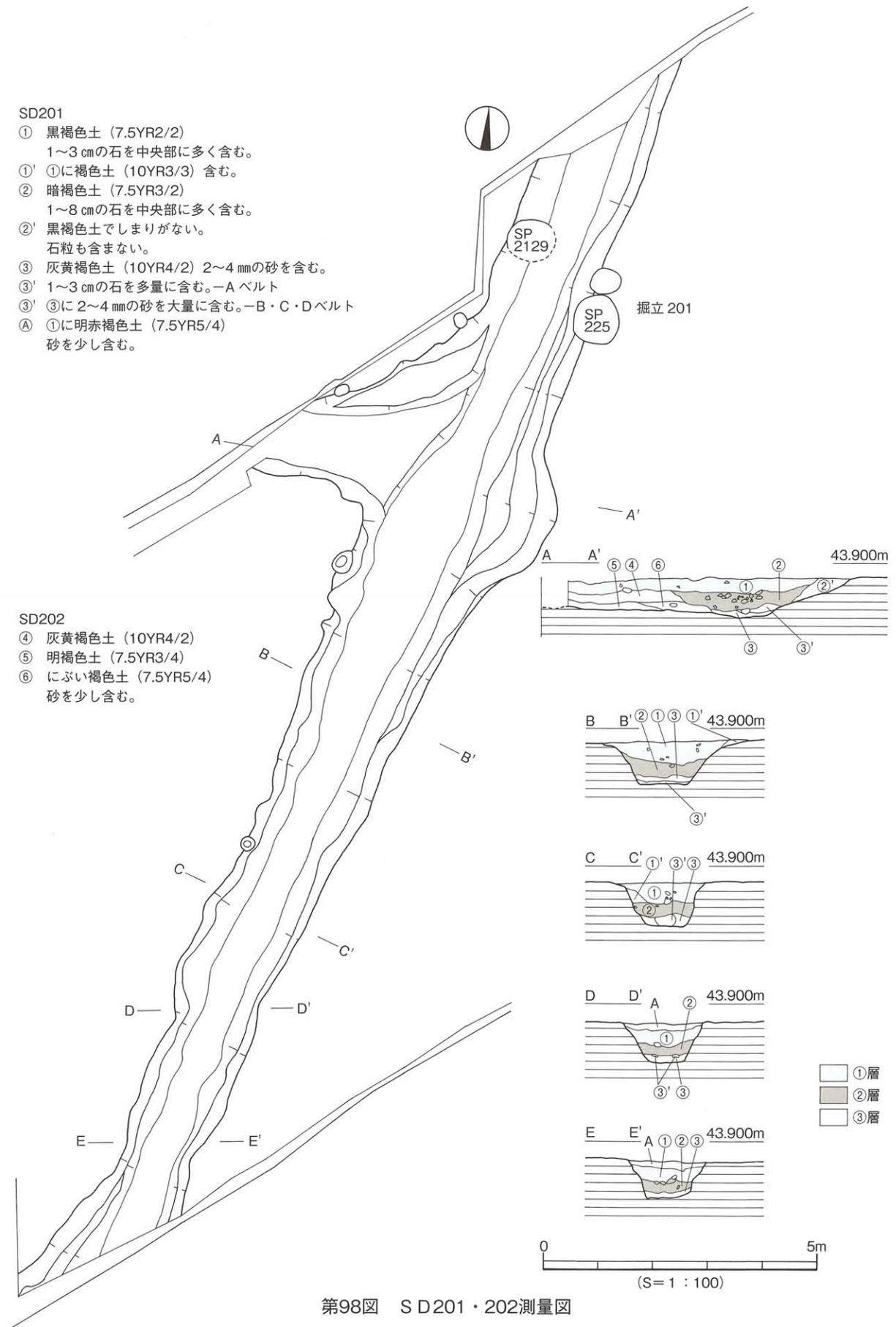
423～437は縄文土器。423～427は深鉢。外傾する口縁部。外面に条痕を施す。428～437は浅鉢。428は外傾する口縁端面は上部に拡張され端部外面に沈線を施す。429は外傾する口縁端部は上部に拡張し端部外面に沈線を施す。430は外傾する口縁端部は上方に拡張し端部外面に沈線を施す。431は外傾する口縁端部は上方に拡張され端部外面に沈線を施す。432は外傾する口縁部。433は外傾する口縁端部は上方に拡張し口縁部に刻み目を施す。437は胴部に刻み目凸帯文を施す。

438～440は石製品。438・439はスクレイパー。440は砥石。表面に擦痕が見られる。

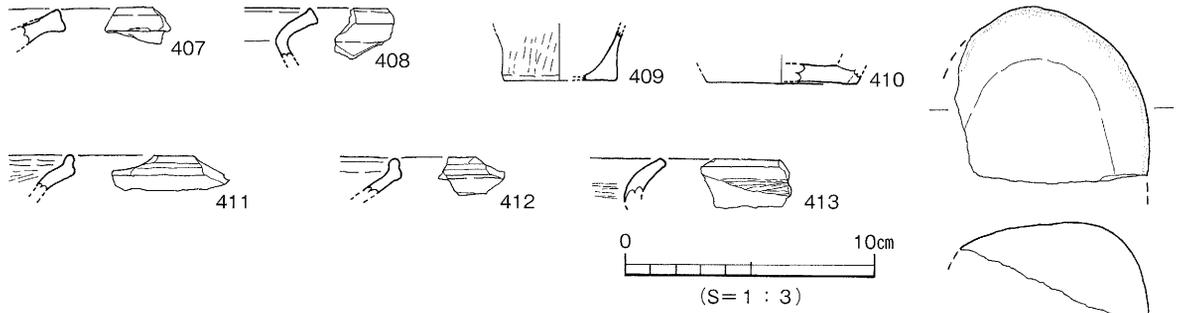
上層(①層)(441～512) 441～489は弥生土器。441～465は甕形土器。441は口縁下部に沈線文が2条残る。442～444は口縁端部に刻み目、口縁下部に沈線文を施す。445・446は口縁下部に沈線文を施す。447・448は胴部に沈線文と刺突文が残る。449は口縁端部に刻み目を施す。455～457は口縁端部に凹線文。460～465は底部片。466～482は壺形土器。466は口縁端部を拡張し波状文と凹線文を施す。468は複合口縁。470～472は胴部に刻み目凸帯文を施す。474は胴部に貝殻による刺突文を施す。476～482は底部。483～485は高坏形土器。483は坏口縁部。484は口縁部内面に凸帯が巡り口端部には刻み目を施す。内外面には丁寧な磨きを施す。485は高坏形土器の脚部。裾部に凹線文、柱部に矢羽根透かしがある。486・487は器台形土器。488は甑形土器。489はミニチュア土器。490～510は縄文土器。490～498は深鉢。外傾する口縁部。498の口縁端部は刻みを施す。499～510は浅鉢。499～503は口縁端部を上方に拡張し端部外面に沈線を施す。504は口縁部端部に刻みがある。505は口縁部端部を上方に拡張する。506は口縁端部に把手が付く。507は胴部。508・509は大きく外反する口縁部。511・512は石製品。512は石庖丁の未製品。

層位不明(513～518) 513～515は弥生土器。513は甕形土器の口縁部、端部に刻み目を施す。516・517は縄文土器。外傾する口縁部の外面は条痕が残る。518は石製品。

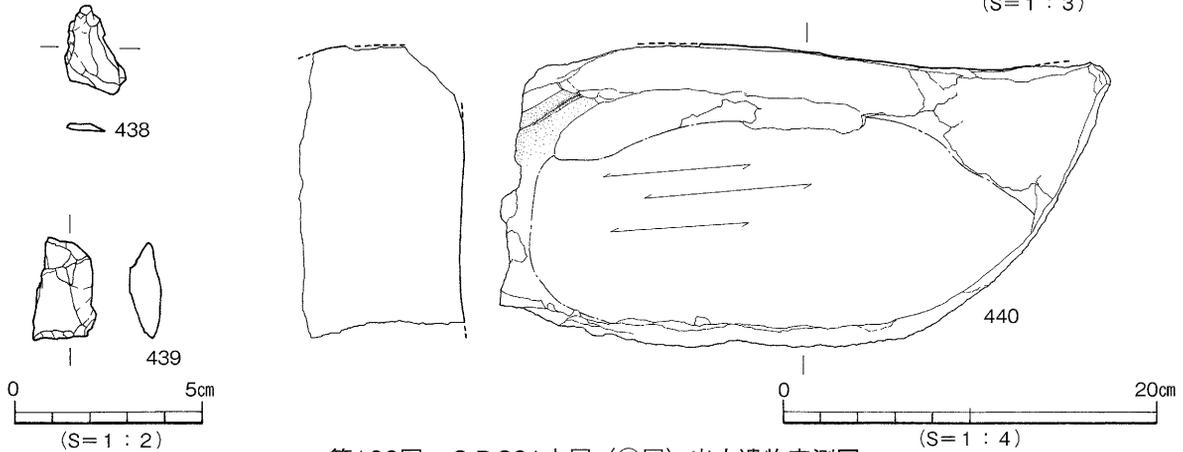
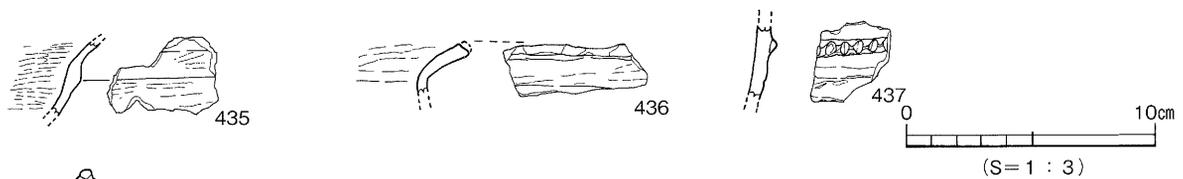
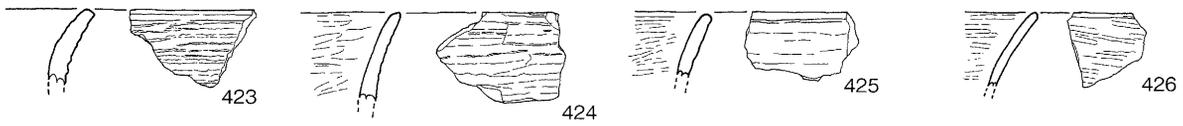
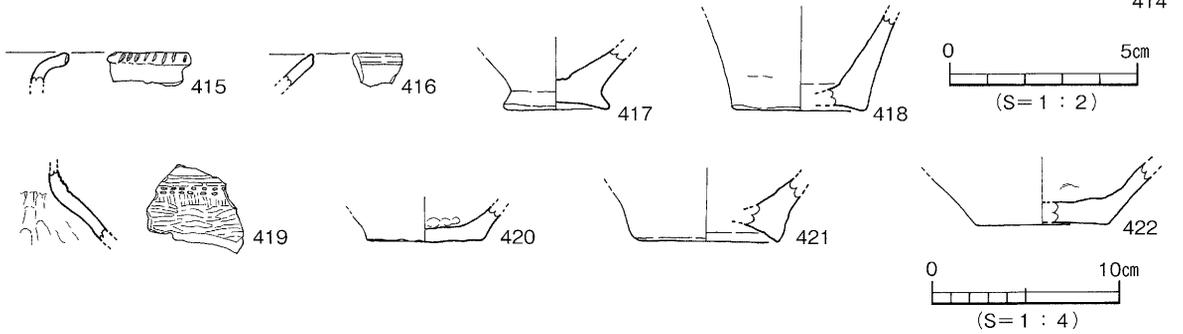
時期：下層から出土した弥生土器の形態より弥生時代前期末～中期初頭とする。



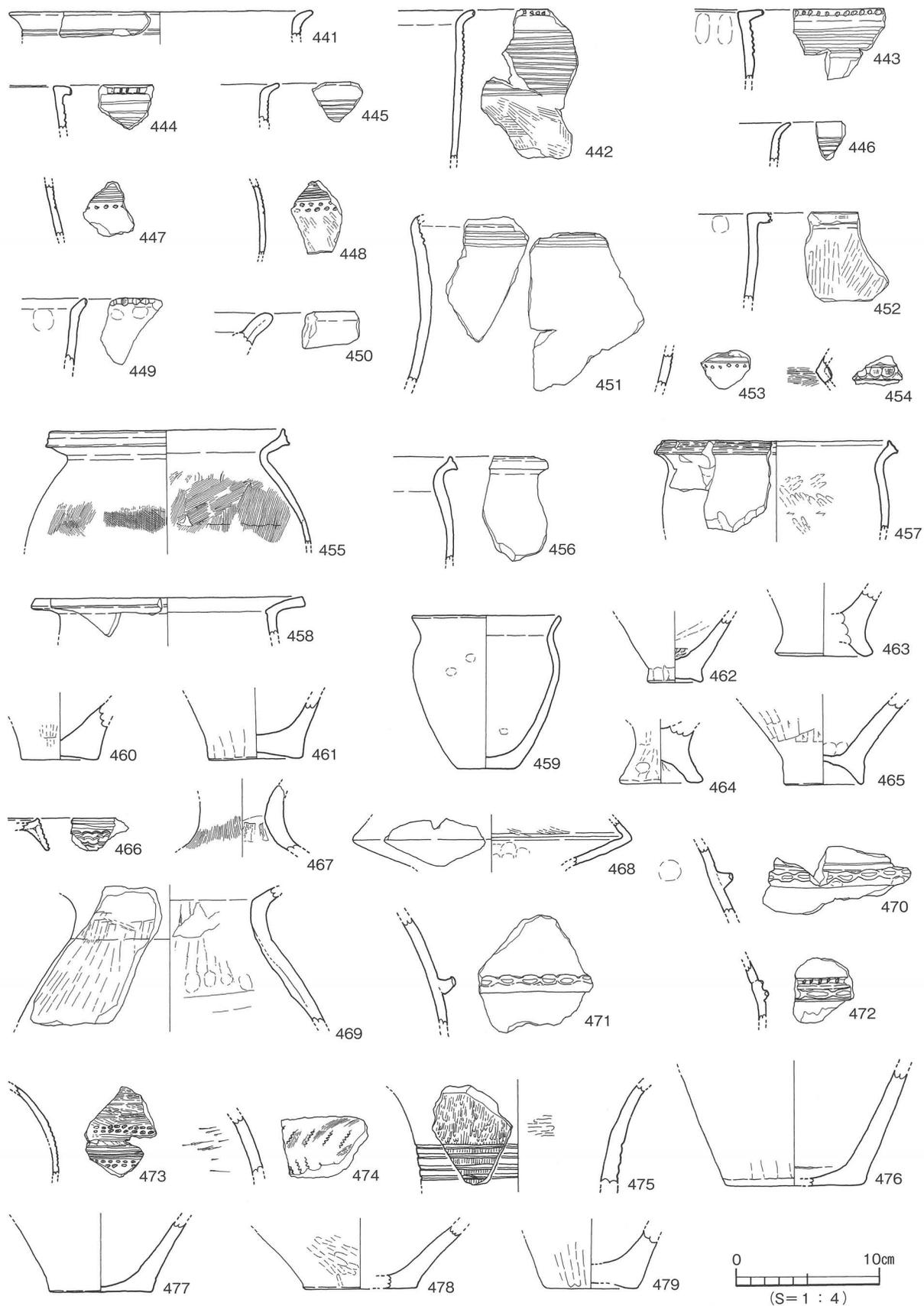
第98図 S D 201・202測量図



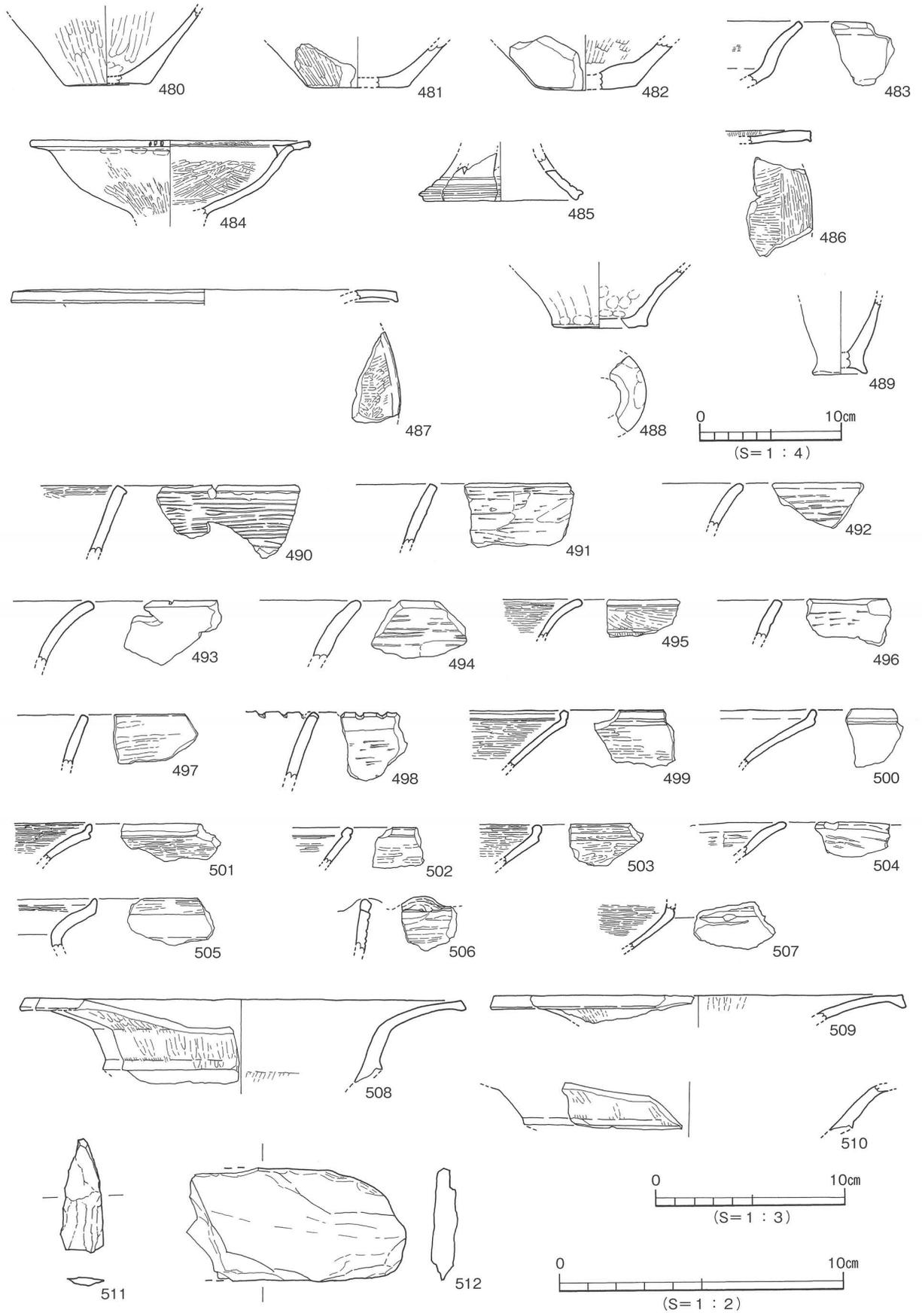
第99図 S D201下層 (③層) 出土遺物実測図



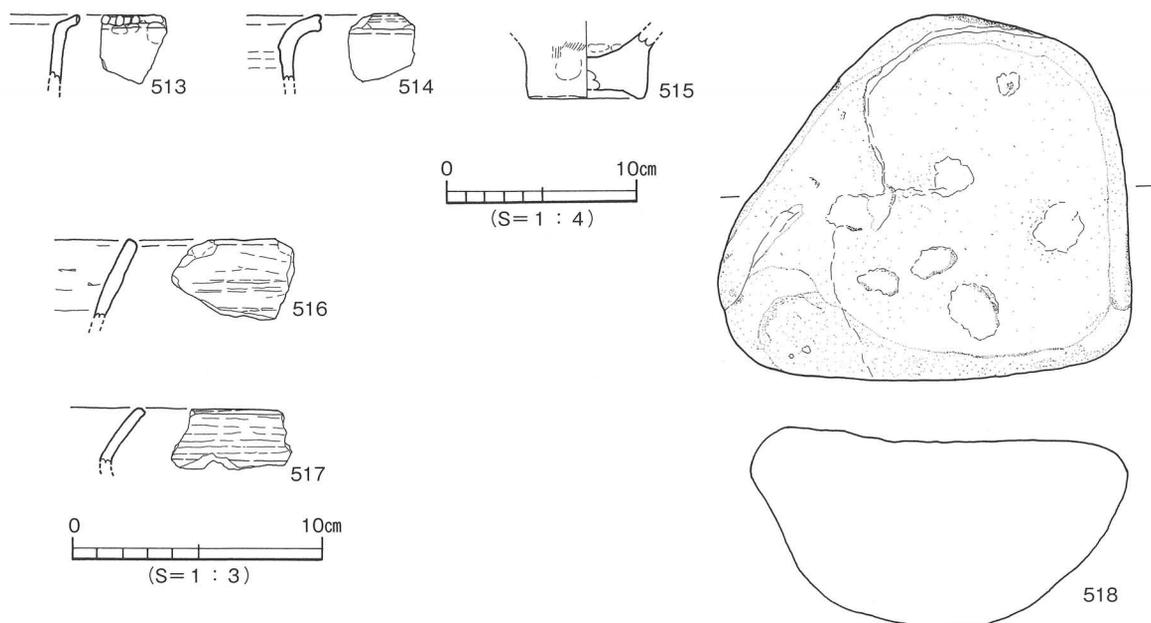
第100図 S D201中層 (②層) 出土遺物実測図



第101図 S D201上層 (①層) 出土遺物実測図(1)



第102図 SD201上層 (①層) 出土遺物実測図(2)



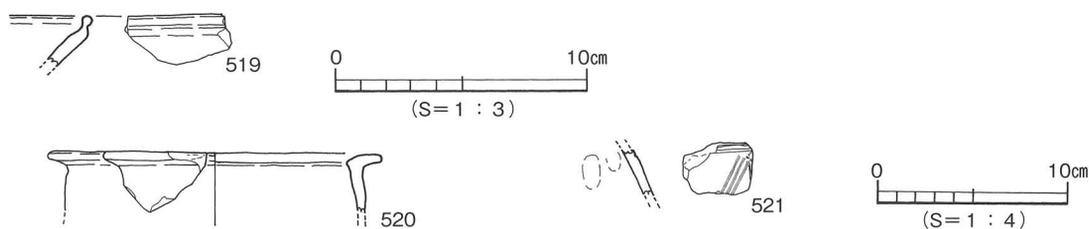
第103図 S D 201層位不明出土遺物実測図

S D 202〔第98・104図、図版41〕

S D 202はⅡ区の J 14区に位置し S D 201の北西部に取り付く。規模は検出長3.0m、上場幅3.0~1.4m、下場幅2.5~1.0m、深さ0.5mを測る。断面形態は逆台形状である。埋土は4層に分層でき①層黒褐色土(7.5Y R 2/2)、④層灰黄褐色土(10Y R 4/2)、⑤層暗褐色土(7.5Y R 3/4)、⑥層にぶい褐色土(7.5Y R 5/4)である。出土遺物は弥生土器の甕形土器、壺形土器、縄文土器の浅鉢、深鉢があり小片である。

出土遺物(519~521)②層519は縄文土器。①層520・521は弥生土器。

時期：出土した弥生土器の形態より弥生時代前期末~中期初頭とする。



第104図 S D 202出土遺物実測図

(2) 掘立柱建物址(掘立)

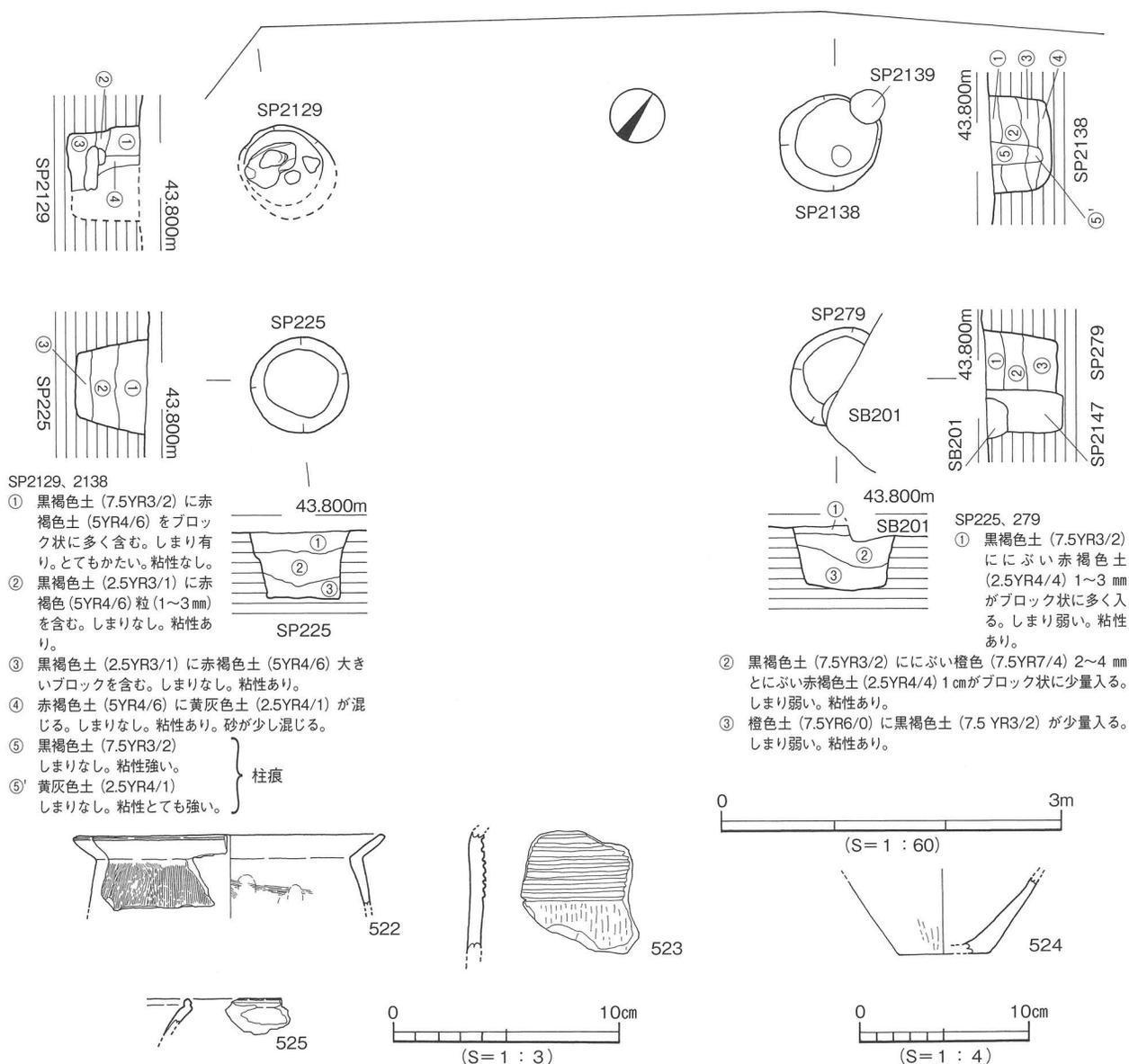
掘立201〔第105・106図、図版41・42〕

掘立201はⅡ区の I 14・15区に位置し S D 201を切り、S B 201、S P 2139、2147に切られる。検出時には2基の柱穴を確認し、1基が調査区の北壁に柱穴断面をわずかに検出したため、全容を確認するために2×8m拡張を行い2基の柱穴を検出し計4基となった。掘立の規模は1間×1間分である。柱穴の規模は径1.0m、深さ53~66cmを測り、S P 2129と S P 2138からは径20cmを測る柱痕を検出した。

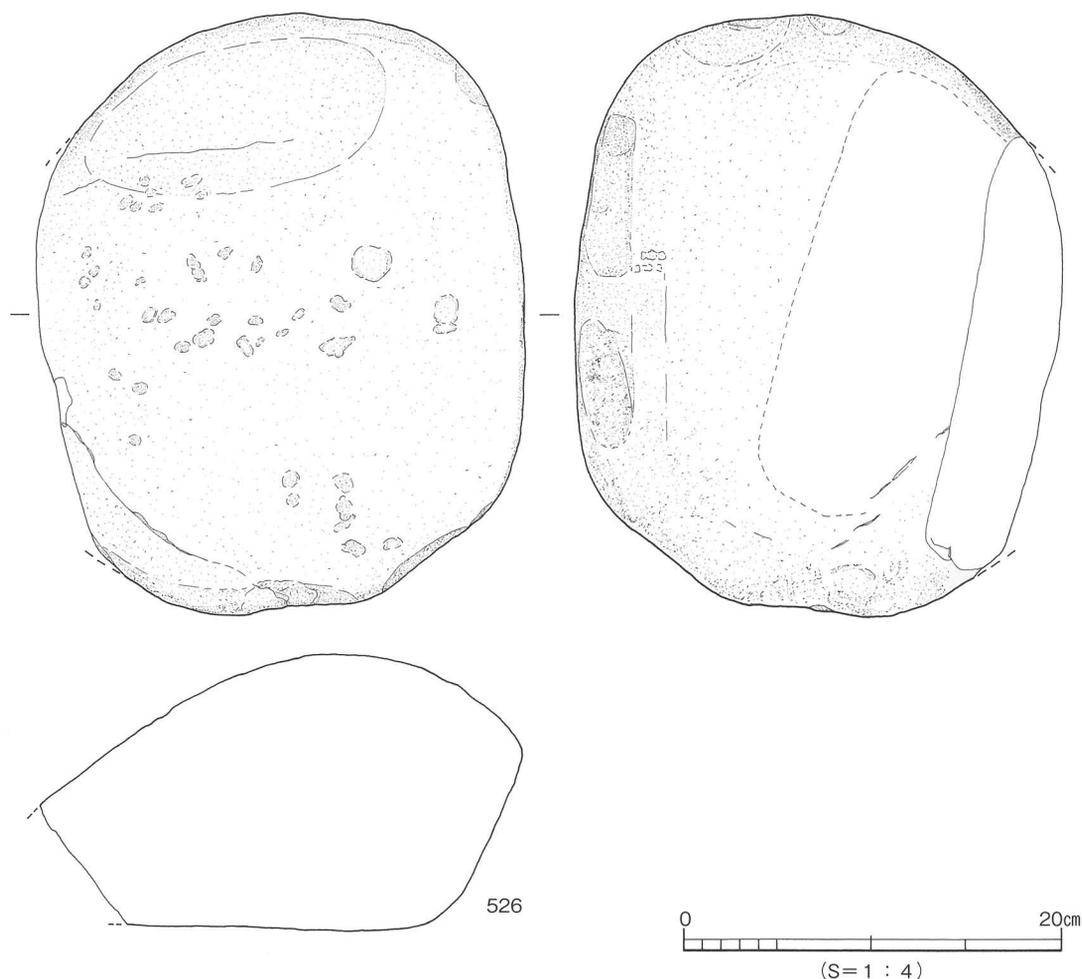
S P 2129と2138の埋土は黒褐色土 (7.5Y R3/2) に赤褐色土 (5 Y R4/6) 混じりで、混じりの大きさにより3～4層に分層した。柱痕埋土は黒褐色土 (7.5Y R3/2) で粘性強い。S P 2138は柱痕の下部は黄灰色土 (2.5Y R4/1) で粘性がとても強い。S P 225、279の埋土は黒褐色土 (7.5Y R3/2) ににぶい赤褐色土 (2.5Y R4/4)、にぶい橙色土 (7.5Y R7/4) 混じりである。出土遺物は弥生土器、縄文土器の小片、石製品がある。石製品はS P 2129から6点出土し、基盤になる石は50×30cm、厚さ10cmを測り、その上に2個が並んで出土した。整地土の上に石を据えて柱を支える礎石として使用されたものか。また、1点は砥石として使用され転用されたものがある。

出土遺物 (522～526) 522はS P 225出土弥生土器の甕形土器。523はS P 2129出土弥生土器の甕形土器。524はS P 225出土甕形土器。525はS P 2138④層出土縄文土器の浅鉢。526はS P 2129出土、砥石の転用品。

時期：S D 201を切り、S B 201に切られることより、弥生時代中期～後期後半以前とする。



第105図 掘立201測量図・出土遺物実測図(1)



第106図 掘立201出土遺物実測図(2)

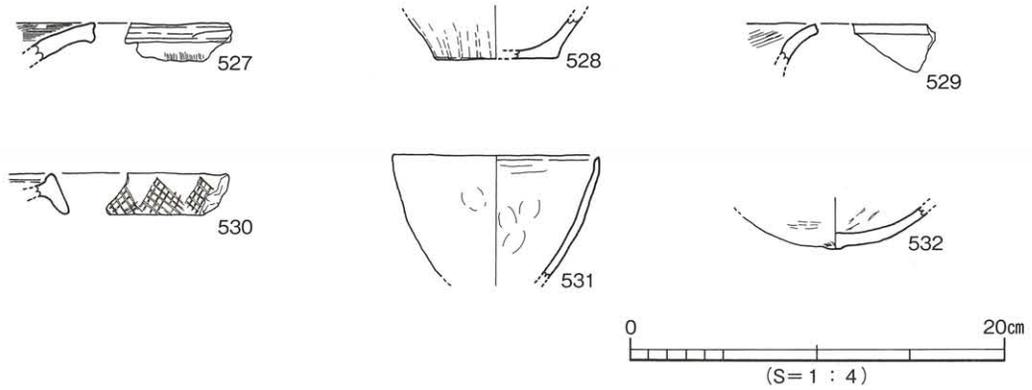
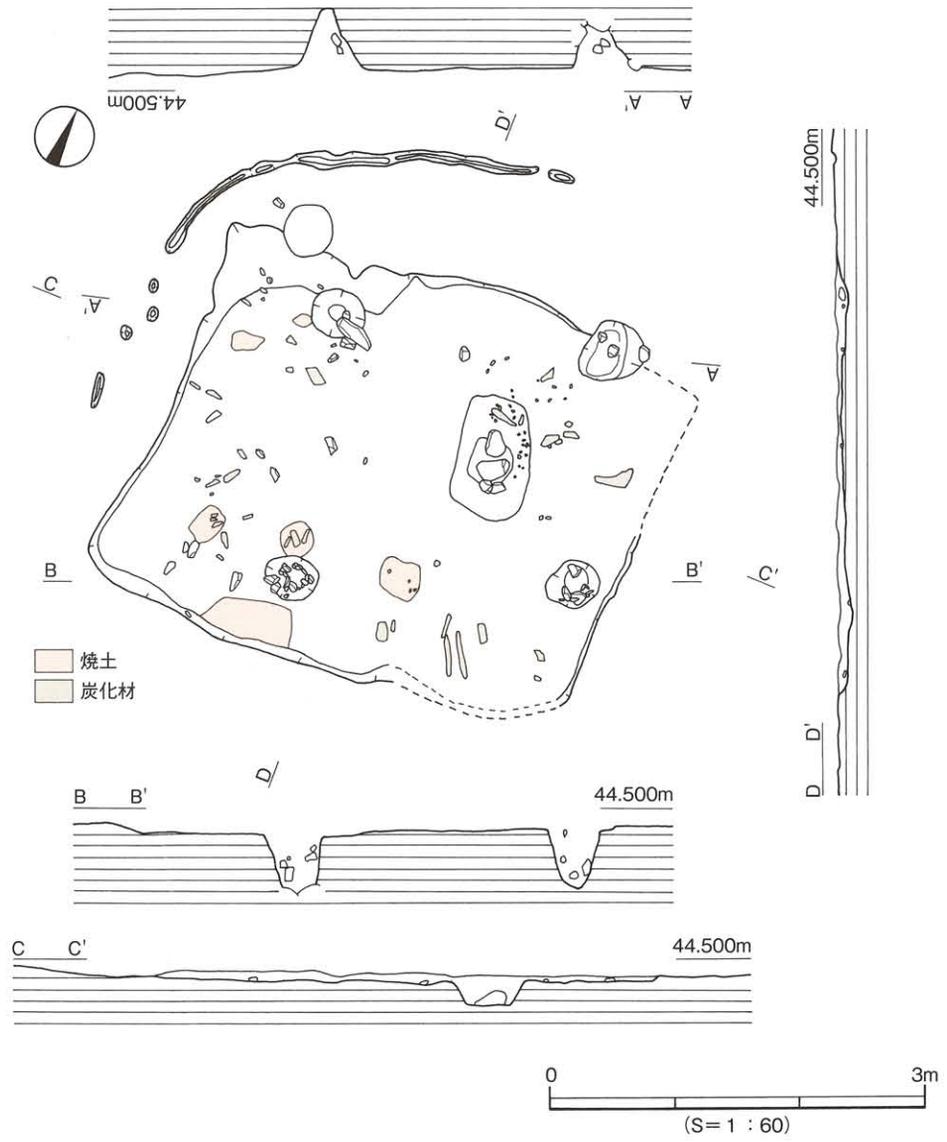
(3) 竪穴式住居址 (SB)

SB101 [第107~109図、図版38・47]

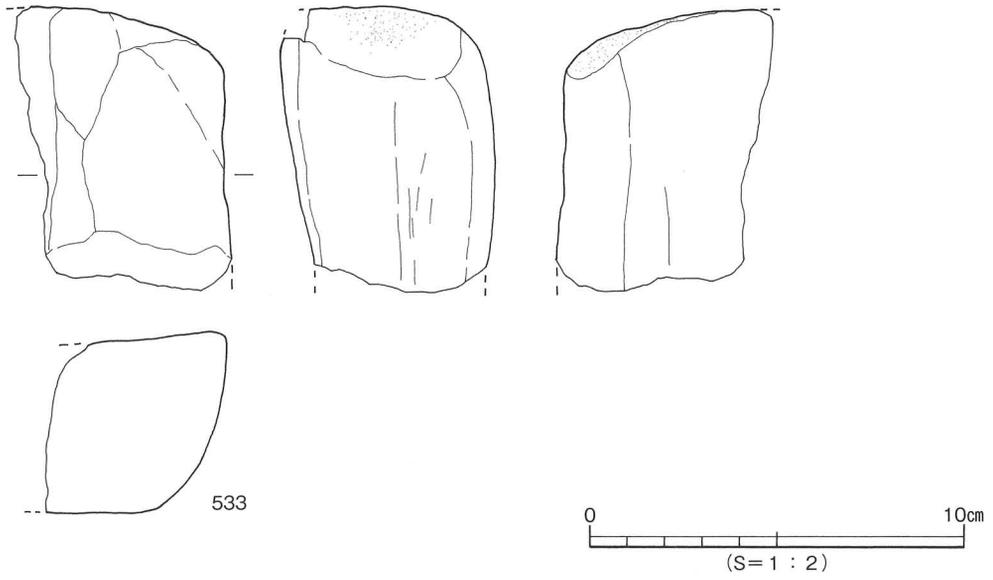
SB101はI区のD2~E3区に位置し、南側と東側は調査区外に続く。遺構遺存状況は非常に悪く、平面形態はわずかに残る周壁溝から想定すると隅丸方形である。規模は支柱穴と周壁溝との位置関係から、(4.8)×(5.0)mと考えられ、深さは2~6cmを測る。内部施設は支柱穴、周壁溝、炉、高床部を検出した。支柱穴は4基検出した。平面形態は円形で規模は、径40~46cm、深さ35~45cmを測る。柱穴内からは礫が出土した。周壁溝は北側と西側の一部を検出した。炉は住居中央東に検出した。平面形態は隅丸長方形で規模は、長軸94cm、短軸60cm、深さ17cmを測る。埋土は黒褐色土(10YR 2/2)である。高床部は北側から西側で検出した。出土遺物は、住居内から弥生土器の甕形土器、壺形土器、石製品の台石、砥石、剥片、炭化材が出土した。台石は火を受けて破損した様相が見られ、住居内に散在して出土し復元可能なものがある。炭化材は住居全体から出土し南側に多く出土した。炉内からは弥生土器、石製品の台石と炭化材が出土した。

出土遺物 (527~539) 527~532は弥生土器。533は石製品。写真は台石の破砕品。534~539は炉内出土。534~536は弥生土器。537~539は石製品。

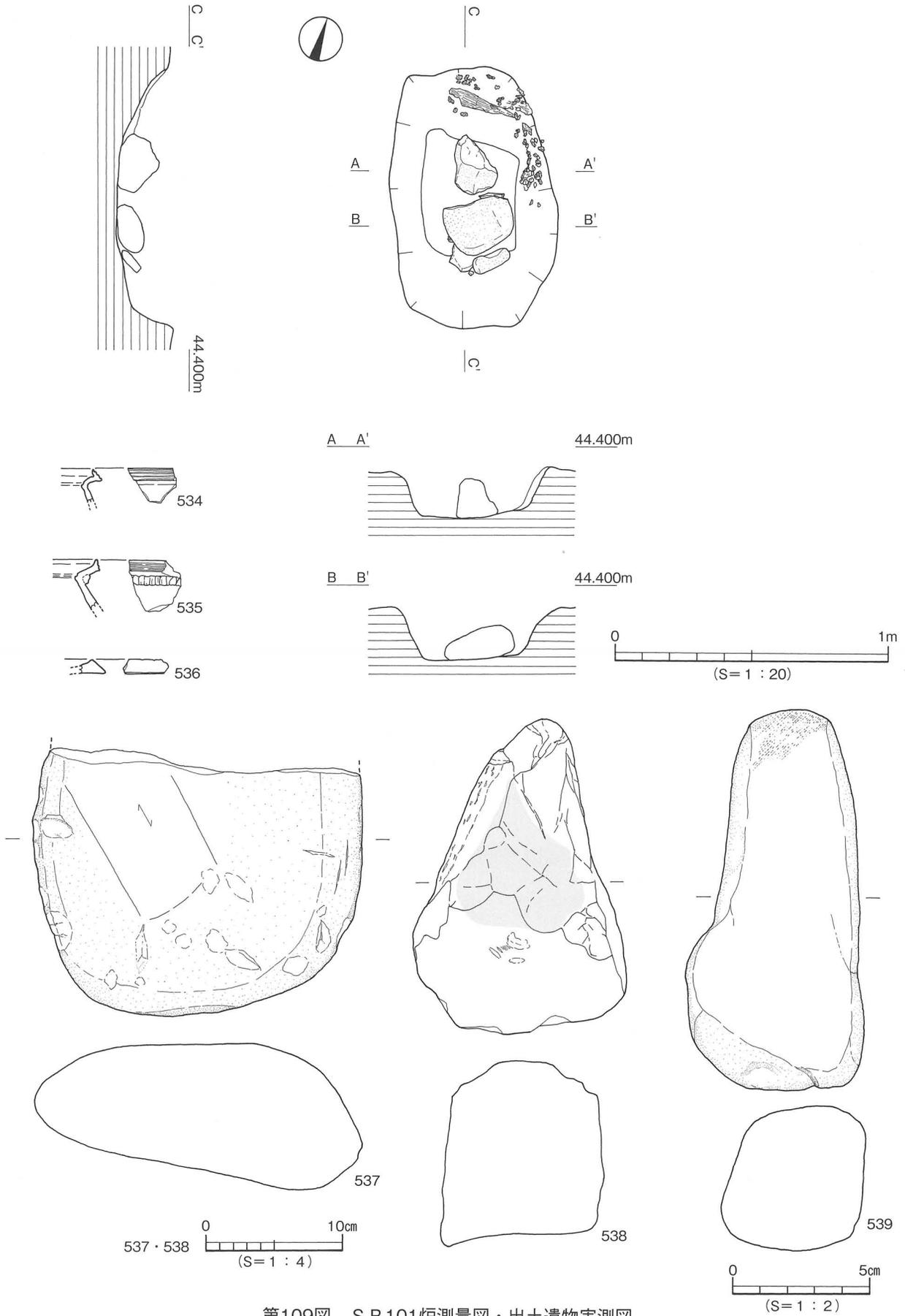
時期：弥生時代後期後半とするが、高床部の平面形態、炉内と住居内出土遺物との時期差を考えると弥生時代後期前半と後期後半の重複住居の可能性が考えられる。



第107図 SB101測量図・出土遺物実測図(1)



第108図 S B101出土遺物実測図(2)



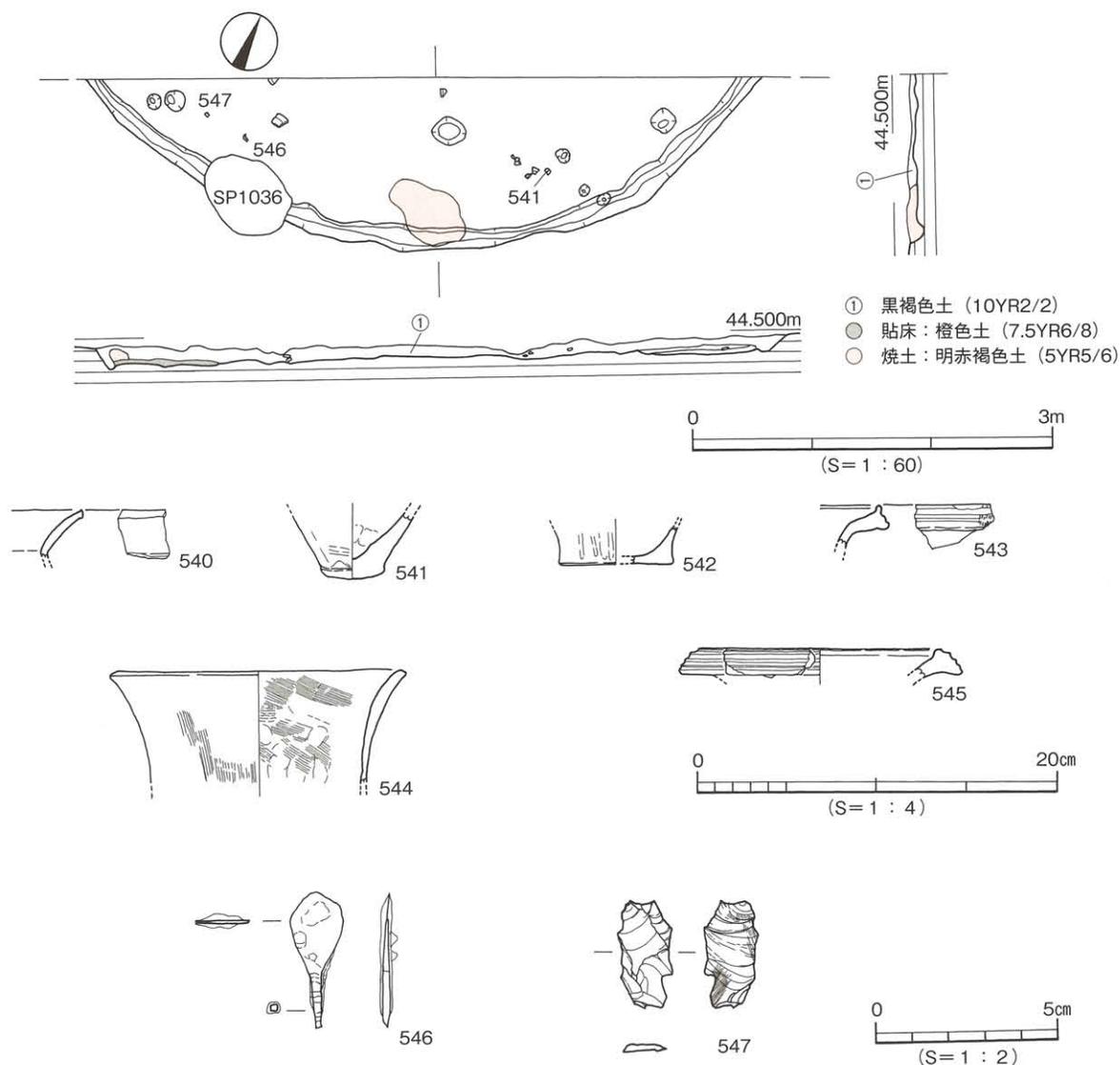
第109図 SB101炉測量図・出土遺物実測図

S B 102 [第110図、図版38・47]

S B 102はI区のD5区に位置し、S P 1036に切られ北側は調査区外に続く。平面形態は弧状に検出したため円形と考えられる。規模は検出長(5.7)m、深さ15cmを測る。深さは北壁での検出であり平面での検出は5~8cmを測り非常に遺存状態が悪い。住居址の復元径は7.0mと推定される。内部施設には周壁溝と貼り床がある。周壁溝は壁下に沿って検出した。規模は幅12cm、深さ5cmを測る。貼り床は住居址床面の西側と東側に部分的に厚さ3~5cmを検出した。住居埋土は①層黒褐色土(10YR2/2)、貼り床は橙色土(7.5YR6/8)である。出土遺物は弥生土器の甕形土器、壺形土器の小片、鉄製品、石製品がある。住居南側と西側には焼土(明赤褐色土5YR5/6)を検出した。

出土遺物(540~547) 540~545は弥生土器。540~542は甕形土器。540は口縁部。541は底部。542は平底の底部。543~545は壺形土器。543・545は口縁端部に凹線文。544は外傾して開く口縁部。546は鉄鏟。柳葉形の完形品。547は剥片。

時期：出土遺物540・541・544の甕形土器と壺形土器から弥生時代後期後半とする。



第110図 S B 102測量図・出土遺物実測図

S B 103〔第111図、図版38〕

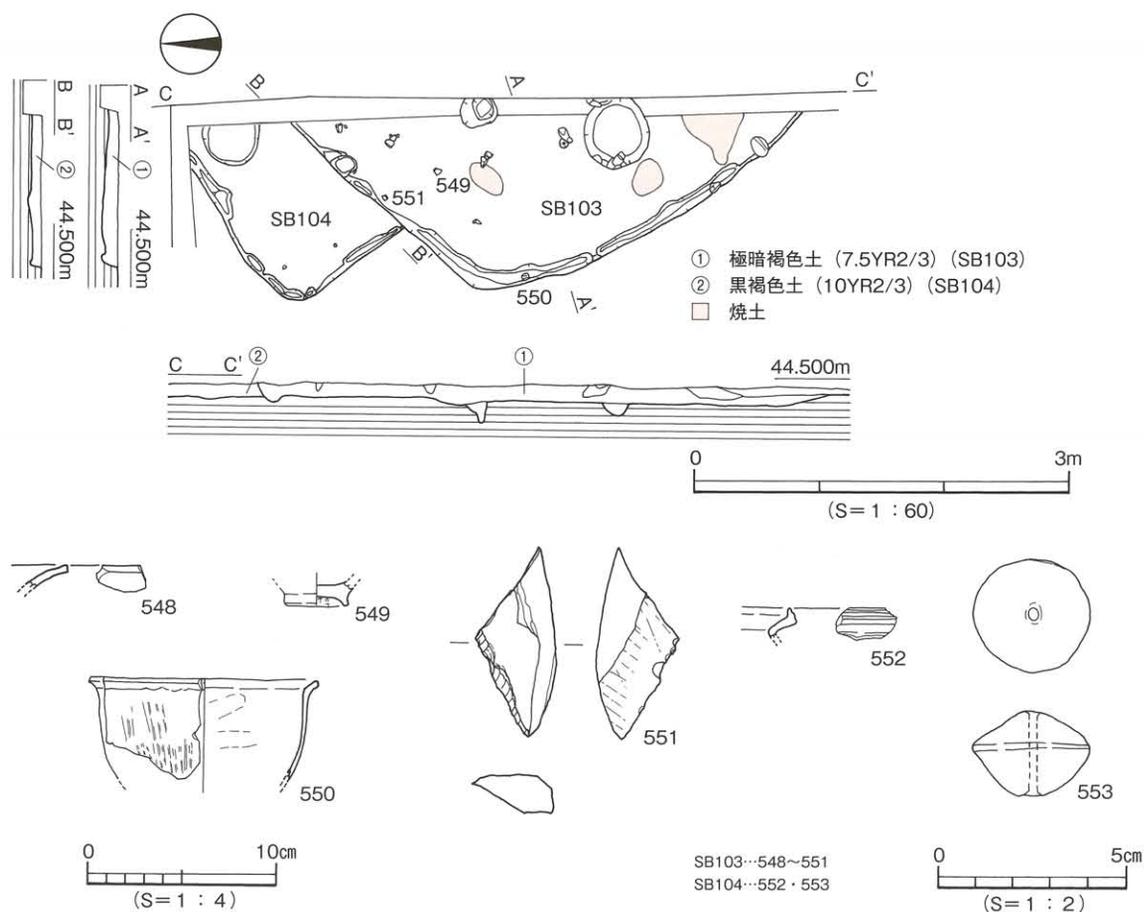
S B 103はI区のD2区に位置しS B 104を切り、東側は調査区外に続く。平面形態は1カ所のコーナー部を検出したことより隅丸方形と考えられる。規模は、(3.3)×(2.2) m、深さ10cmを測る。内部施設には周壁溝と柱穴がある。周壁溝は壁下に位置する。埋土は極暗褐色土(7.5Y R2/3)である。埋土内にはブロック状の焼土を検出した。出土遺物は弥生土器の甕形土器、壺形土器、鉢形土器とサヌカイトの剥片がある。

出土遺物(548~551) 548~550は弥生土器。548・549は甕形土器。550は鉢形土器。551は剥片。
 時期：出土遺物から弥生時代後期とする。

S B 104〔第111図、図版38・47〕

S B 104はI区のD2区に位置しS B 103に切られ、東側は調査区外に続く。平面形態は1カ所のコーナー部を検出したことより隅丸方形と考えられる。規模は、(1.7)×(1.1) m、深さ10cmを測る。内部施設には周壁溝と柱穴がある。周壁溝は壁下に位置する。埋土は黒褐色土(10Y R2/3)である。出土遺物は弥生土器の甕形土器の小片と土玉の完形品がある。

出土遺物(552・553) 552は弥生土器の甕形土器。553は算盤玉状の土玉。
 時期：出土遺物から弥生時代後期とする。



第111図 S B 103・104測量図・出土遺物実測図

S B 201〔第112・113図、図版42・47〕

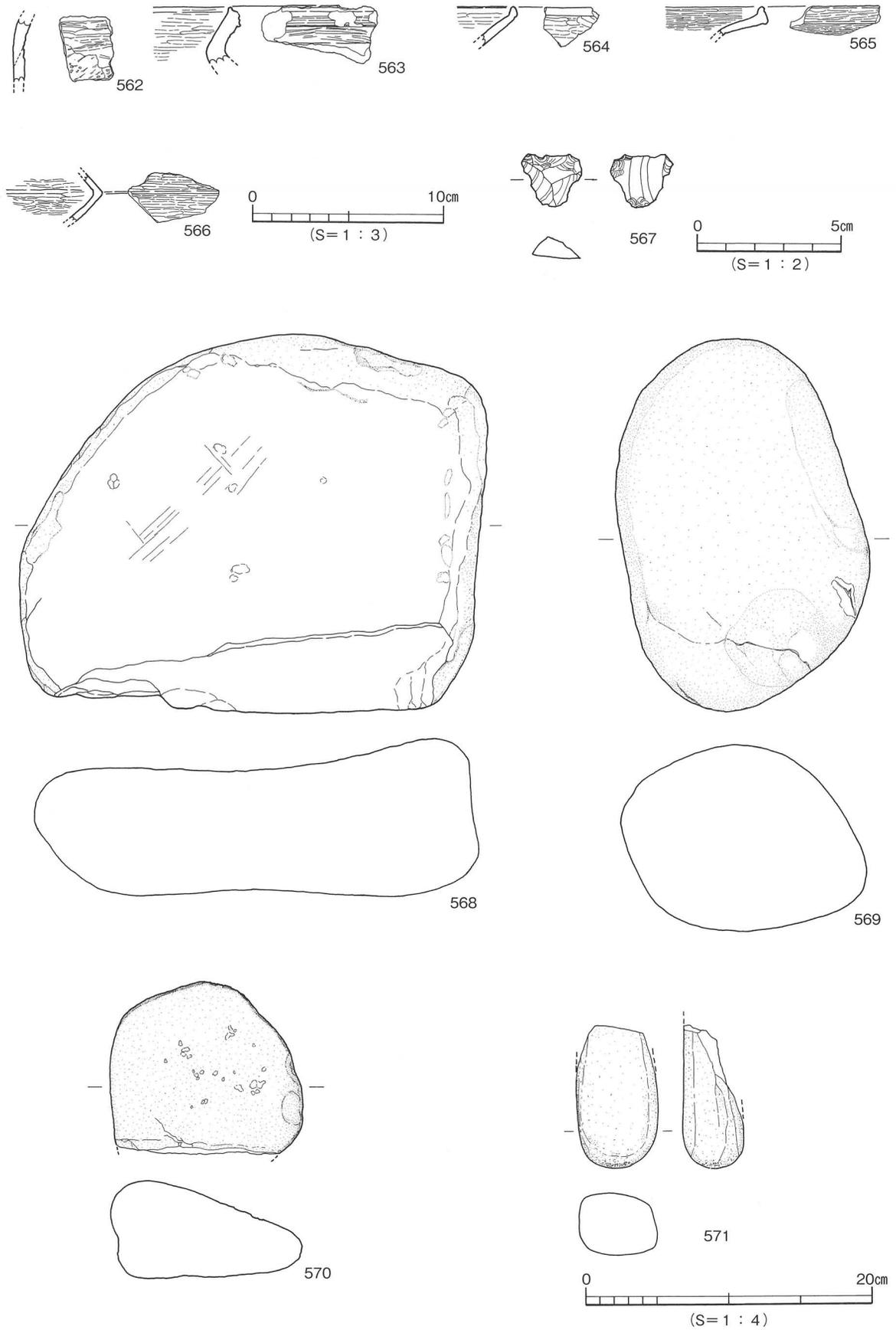
S B 201はⅡ区のⅠ12区に位置し掘立201の柱穴 S P 279を切り、S P 208に切られる。平面形態は方形である。規模は2.7×3.0m、深さ18cmを測る。内部施設は周壁溝と貼り床がある。周壁溝は壁下に入り南西部が途切れる。規模は幅15~30cm、深さ6cmを測る。貼り床は住居全体で検出し、貼り床埋土は黒褐色土(7.5Y R2/2)に明褐色土(7.5Y R5/6)混じりで厚さ6cmを測る。住居埋土は黒褐色土(7.5Y R2/2)である。出土遺物には弥生土器の甕形土器、壺形土器、縄文土器の浅鉢、深鉢、石製品の敲石と黒曜石、多数の礫がある。出土状況は多数の礫と土器片が住居址の全体で出土し、南東部には焼土を検出した。

出土遺物(554~571) 554~561は弥生土器。562~566は縄文土器。567~571は石製品。

時期：出土遺物から弥生時代後期後半から後期末とする。



第112図 S B 201測量図・出土遺物実測図(1)



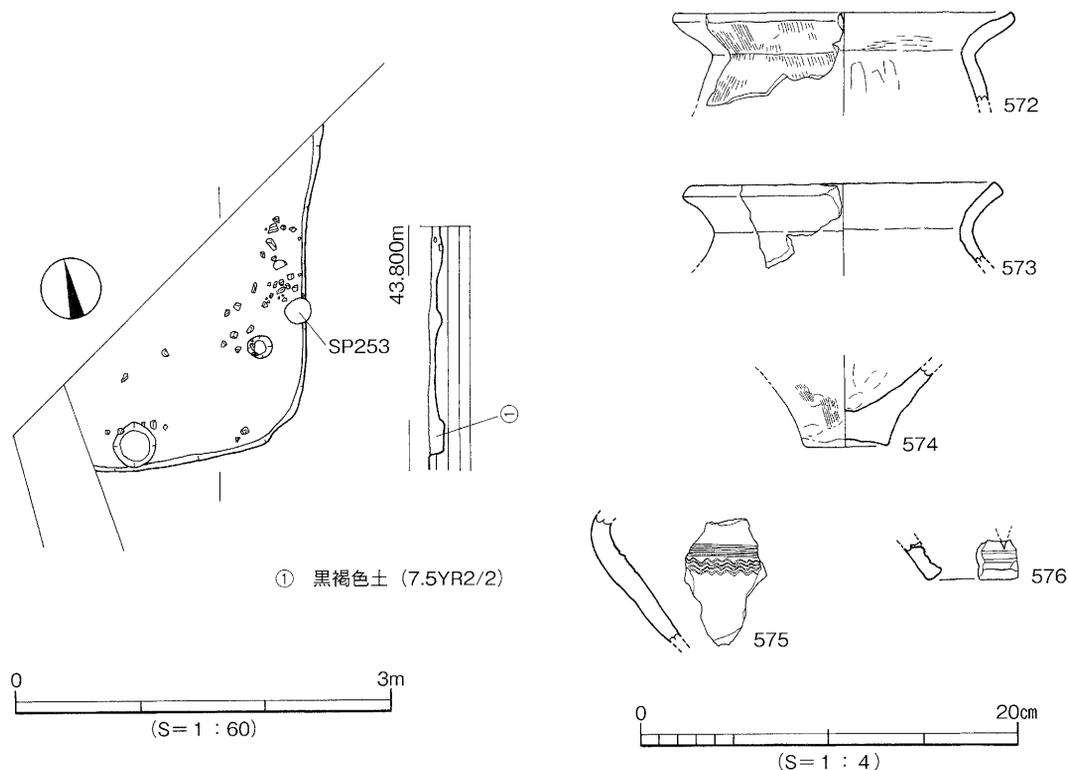
第113図 S B 201出土遺物実測図(2)

S B 202〔第114図、図版41〕

S B 202はⅡ区のK15区に位置し、S P 253に切られ北側は調査区外に続く。平面形態は1カ所のコーナー部を検出したことより隅丸方形と考えられる。規模は(1.5)×(1.5)m、深さ4cmを測る。埋土は黒褐色土(7.5Y R 2/2)である。出土遺物は弥生土器の甕形土器、壺形土器、高坏形土器がある。

出土遺物(572~576) 572~574は甕形土器。575は壺形土器。576は高坏形土器。

時期：出土遺物から弥生時代後期末とする。



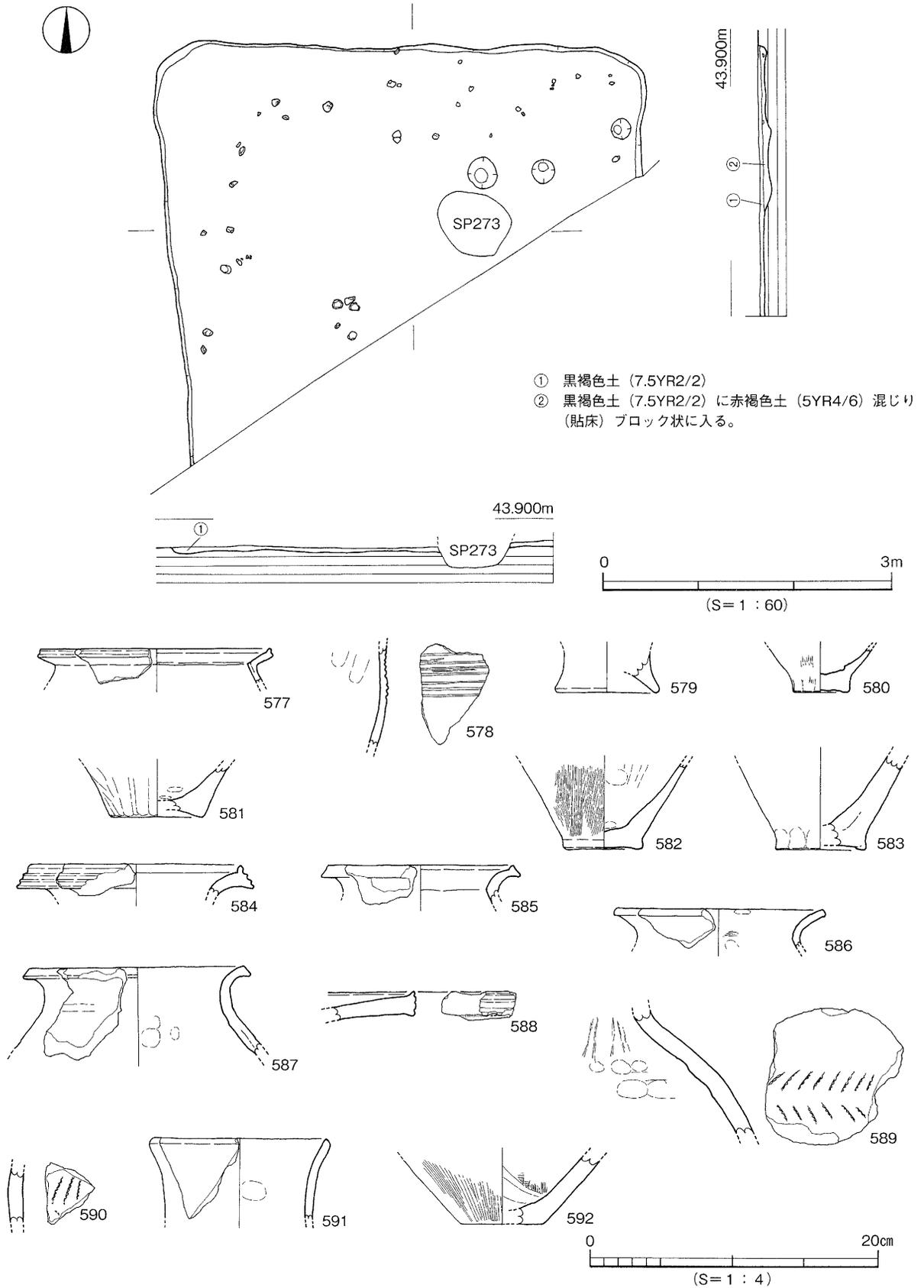
第114図 S B 202測量図・出土遺物実測図

S B 203〔第115・116図、図版41・47〕

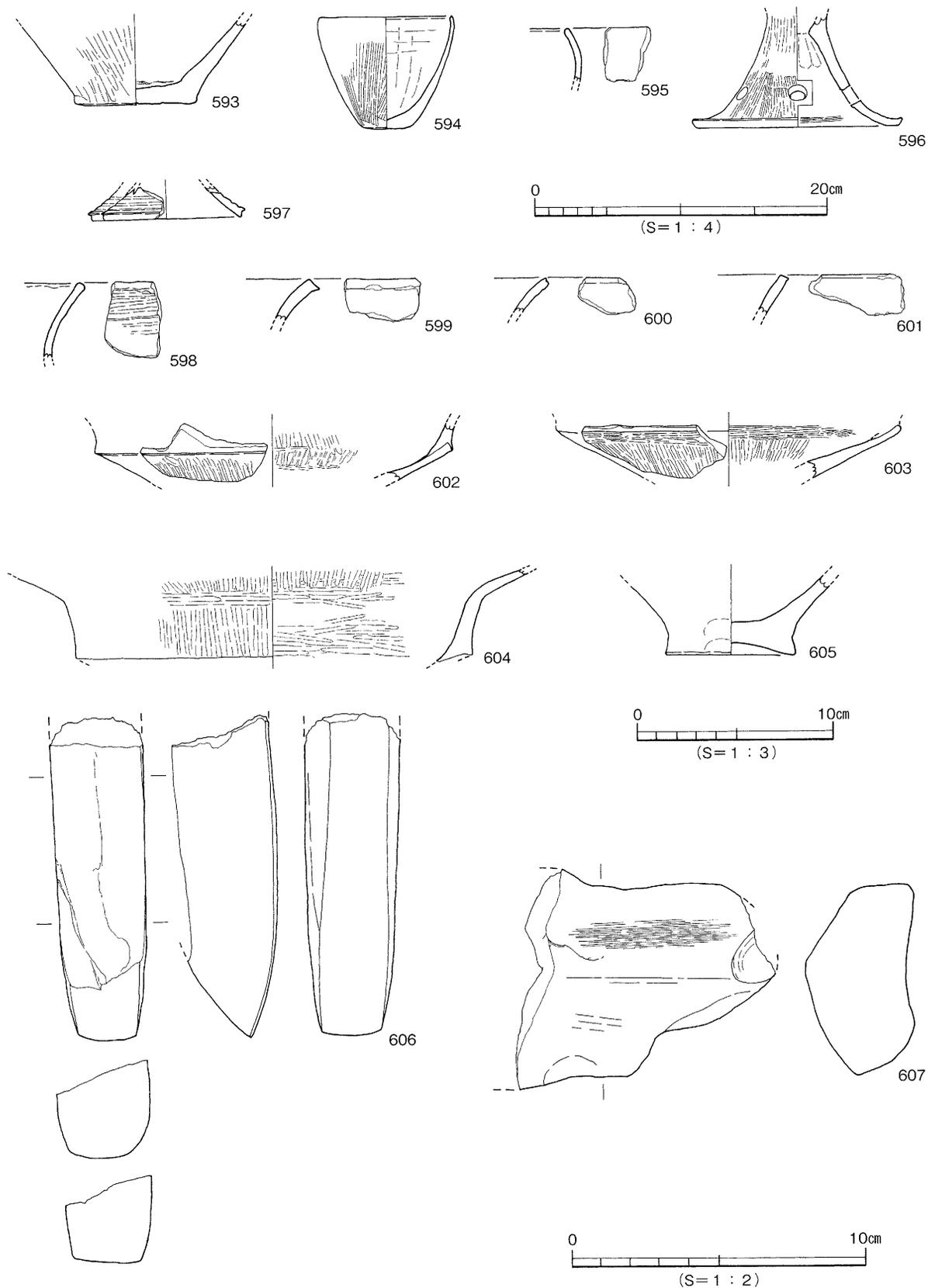
S B 203はⅡ区のL13・14区に位置しS D 201を切り、S P 273に切られ南側は調査区外に続く。平面形態は2カ所のコーナー部を検出したことより方形と考えられる。規模は5.0×(4.2)m、深さ10cmを測る。埋土は黒褐色土(7.5Y R 2/2)である。出土遺物は弥生土器の甕形土器、壺形土器、鉢形土器、高坏形土器、縄文土器の浅鉢、深鉢、石製品の石斧・砥石がある。

出土遺物(577~607) 577~597は弥生土器。577~583は甕形土器。577は口縁部。578は外面に8本の沈線文が残る。579は上げ底の底部。580~583はわずかに上げ底の底部。584~593は壺形土器。584は口縁端部を拡張し端面に凹線文を施す。588の口縁部端面に凹線文。589・590は胴部外面に貝殻による刻み目文を施す。591は直口口縁壺。592・593は平底の底部。594・595は鉢形土器。596・597は高坏形土器。596は脚部に円孔を持つ。597は脚裾部に凹線文と矢羽根透かしを施す。598~605は縄文土器。606は石斧、607は砥石。

時期：出土遺物から弥生時代後期後半とする。



第115図 S B 203測量図・出土遺物実測図(1)



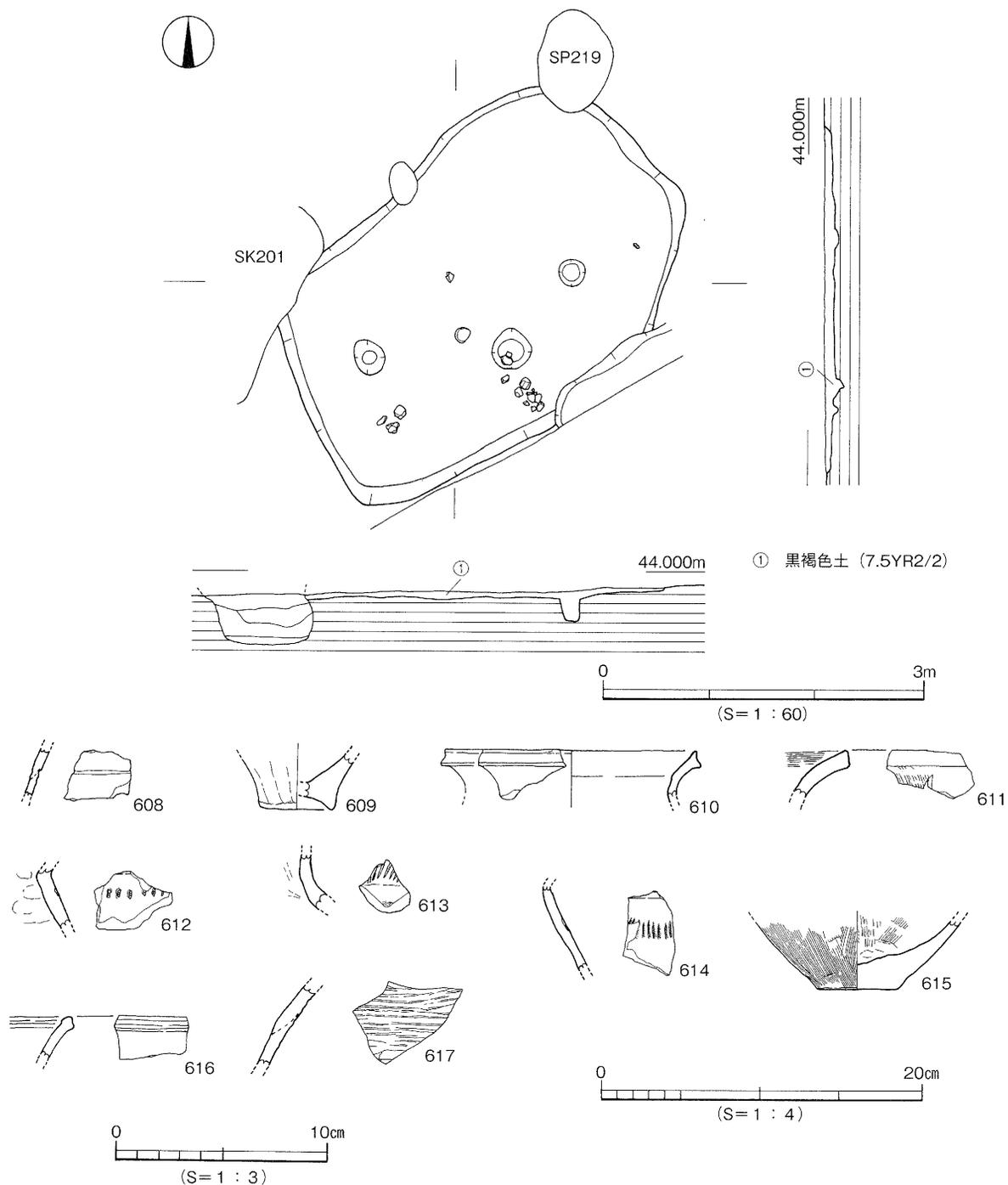
第116図 S B203出土遺物実測図(2)

S B 204〔第117・118図、図版41・48〕

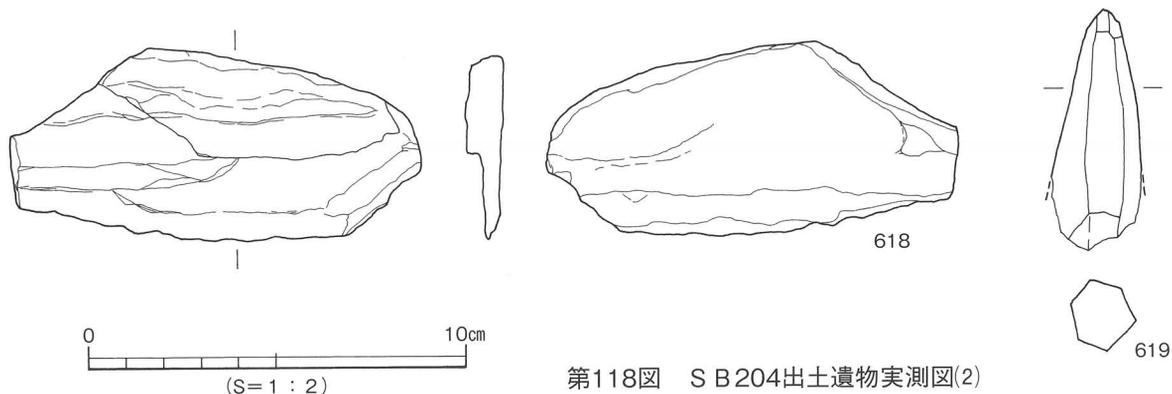
S B 204はⅡ区のK12・13区に位置し、S K 201、S P 219、2133に切られる。平面形態は不整形な長方形である。規模は3.6×2.5m、深さ5cmを測る。埋土は黒褐色土(7.5Y R2/2)である。内部施設は柱穴を2基検出した。出土した遺物は弥生土器の甕形土器、壺形土器、石製品の水晶と石器素材がある。

出土遺物(608~619) 608~615は弥生土器。616・617は縄文土器。618は石器素材。619は水晶。

時期：出土遺物から弥生時代後期前半とする。



第117図 S B 204測量図・出土遺物実測図(1)

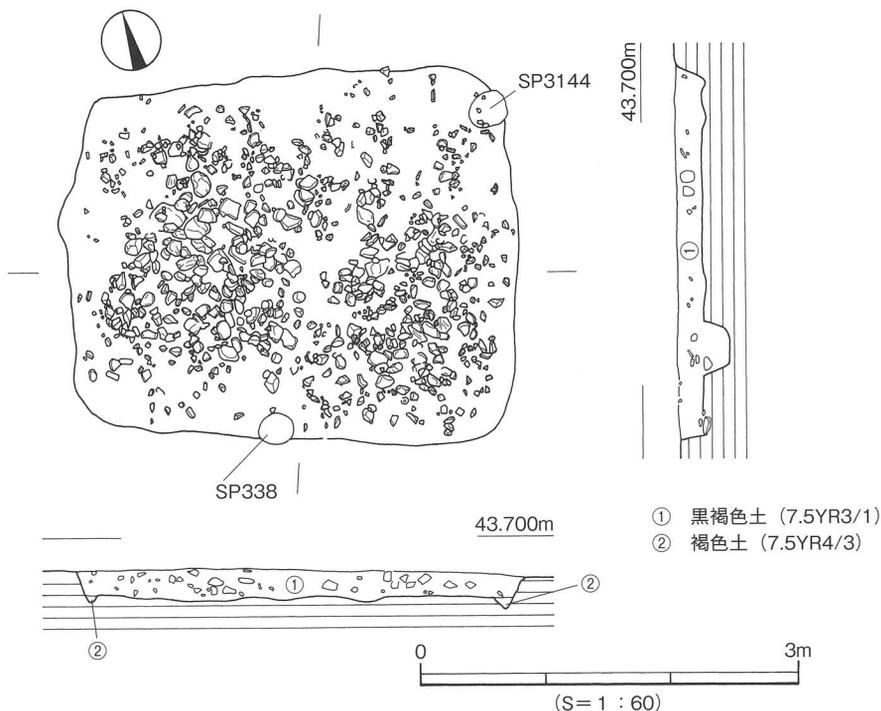


S B 301〔第119～123図、図版43・48〕

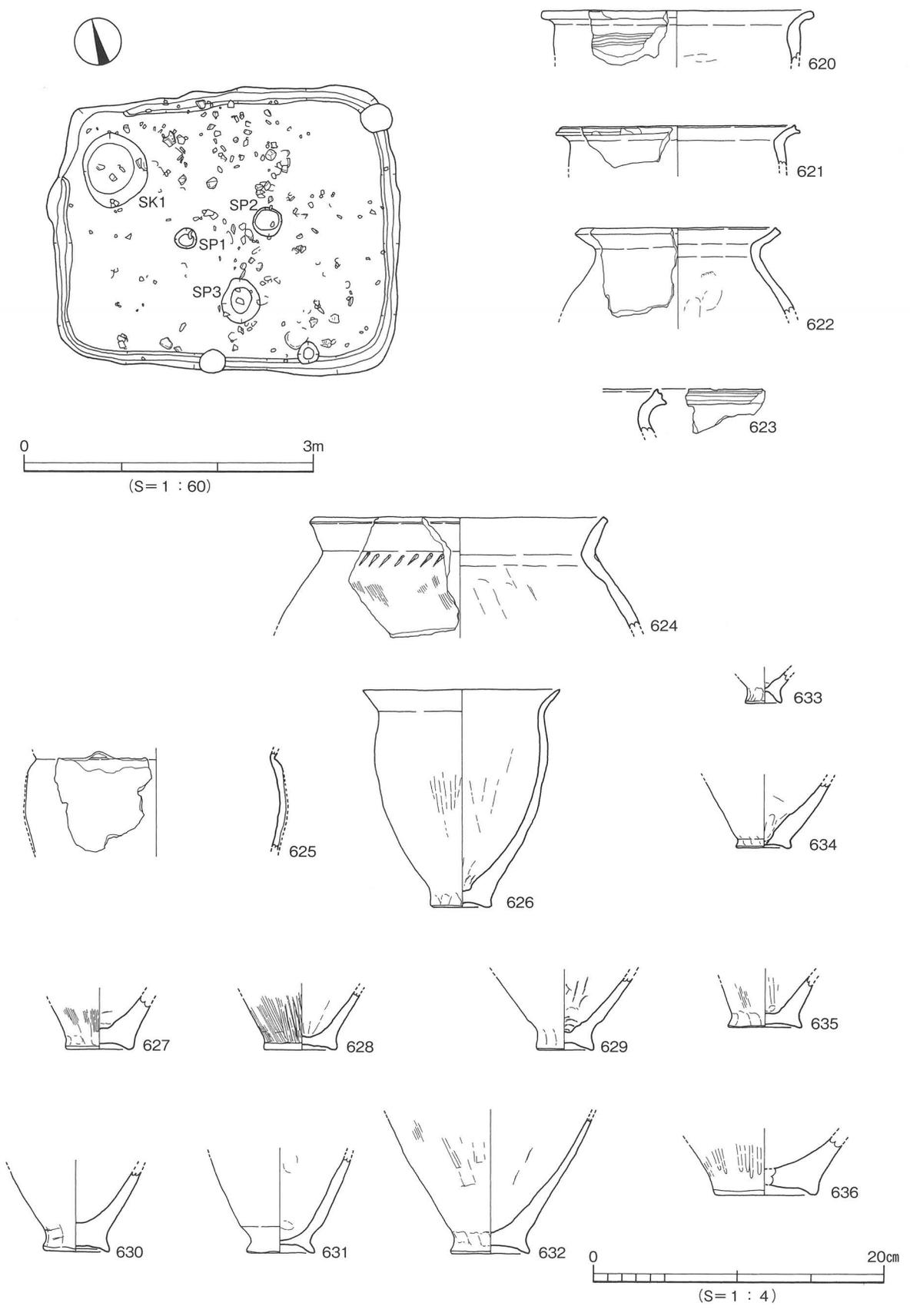
S B 301はⅢ区のM18区に位置し、S P 338、3144に切られる。平面形態は長方形である。規模は3.6×2.8m、深さ24cmを測る。内部施設は土坑、周壁溝、柱穴がある。土坑は住居内の北西部に位置する。平面形態は円形である。規模は80×67cm、深さ63cmを測る。埋土は①層黒褐色土（7.5Y R 3/1）、②層褐色土（7.5YR4/3）である。周壁溝は壁下に位置し北西コーナー部が途切れる。出土状況は住居内全体から3～30cmの礫が土器と混在して出土した。礫小片は中央部に多く出土し壁周辺は少なく小さい。住居内出土遺物は、弥生土器の甕形土器、壺形土器、器台形土器、鉢形土器、高坏形土器、支脚形土器、ミニチュア土器、縄文土器の浅鉢、深鉢、石製品の石斧、台石、石器素材がある。土坑内からは下層に土玉の完形品と上層から鉄製品の出土がある。

出土遺物（620～690）620～681は弥生土器。682は縄文土器。683～688は石器。689・690はS K 1出土。689は土玉。690は鉄製品。

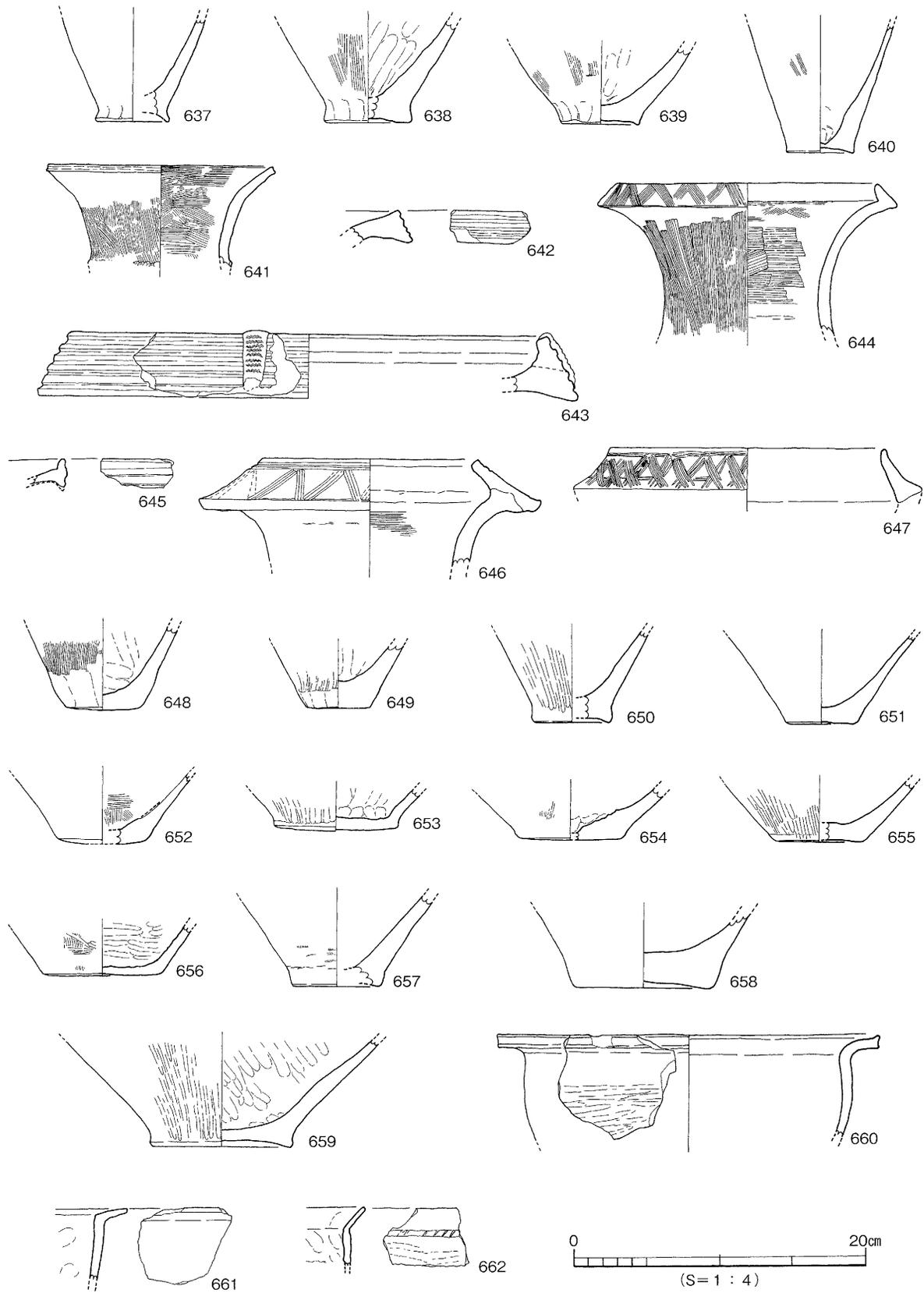
時期：出土遺物から弥生時代後期後半の埋没とする。



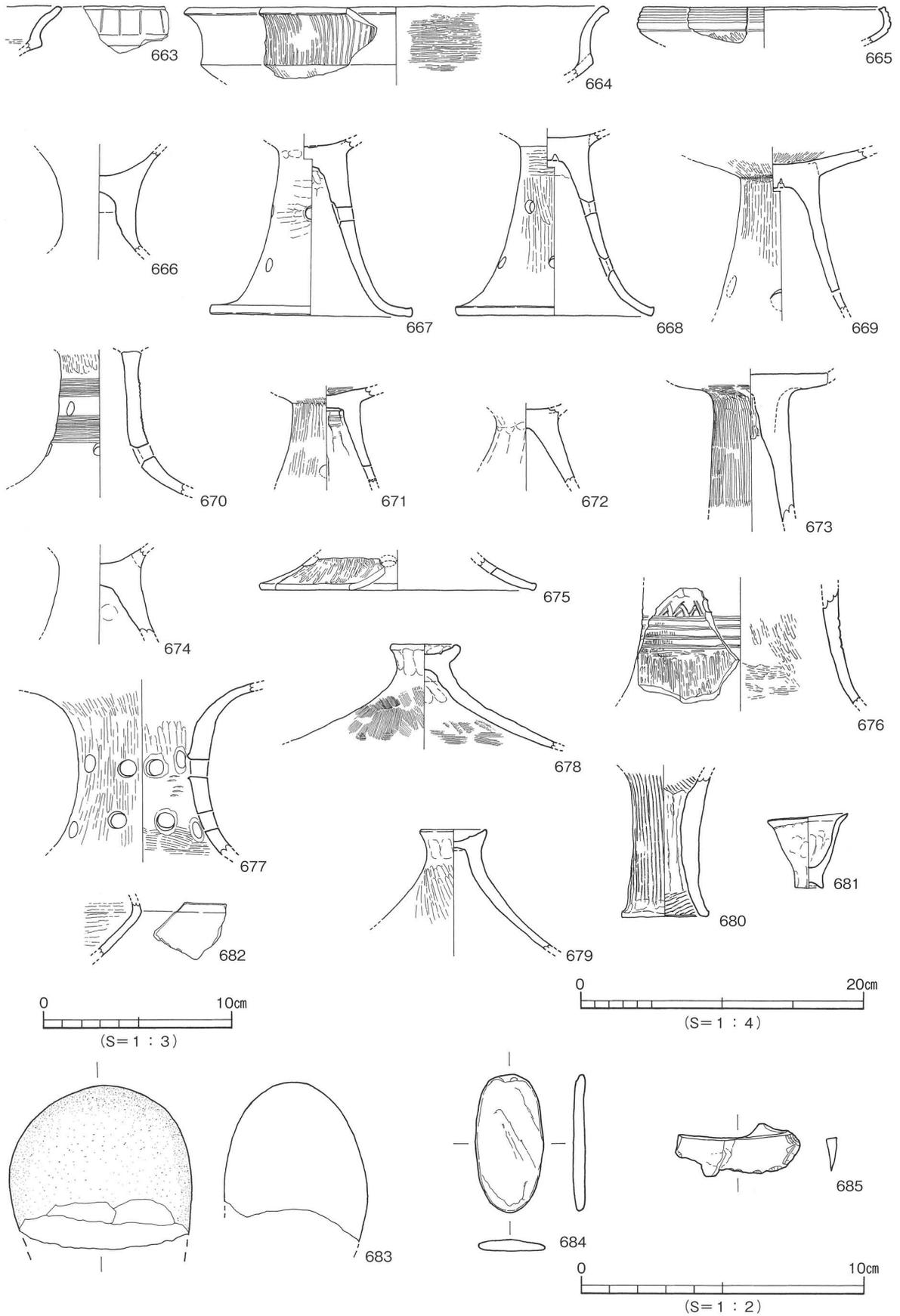
第119図 S B 301測量図(1)



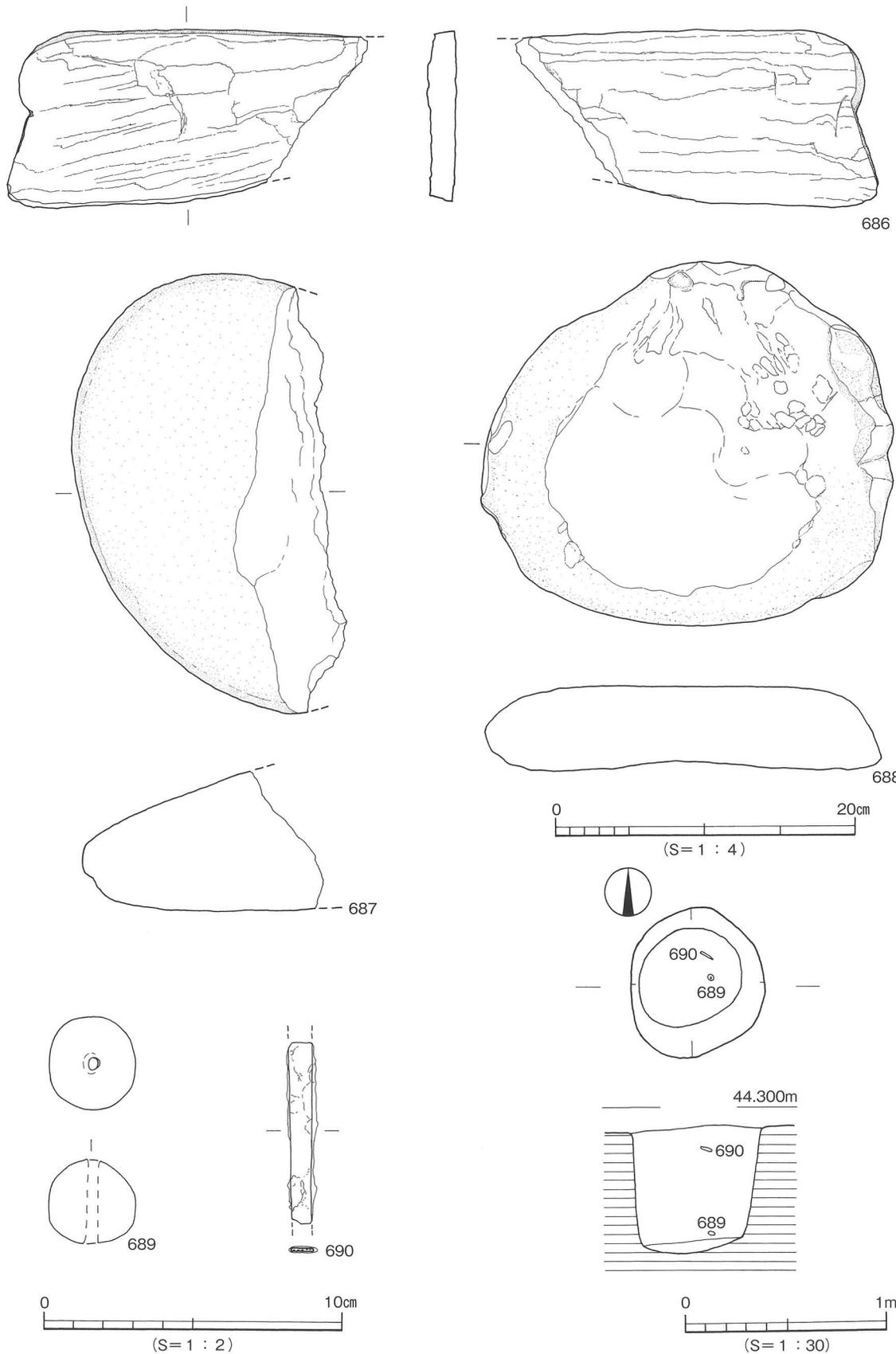
第120図 S B 301測量図(2)・出土遺物実測図(1)



第121図 SB301出土遺物実測図(2)



第122図 S B301出土遺物実測図(3)



第123図 S B 301出土遺物実測図(4)・S B 301内S K 1 測量図・出土遺物実測図

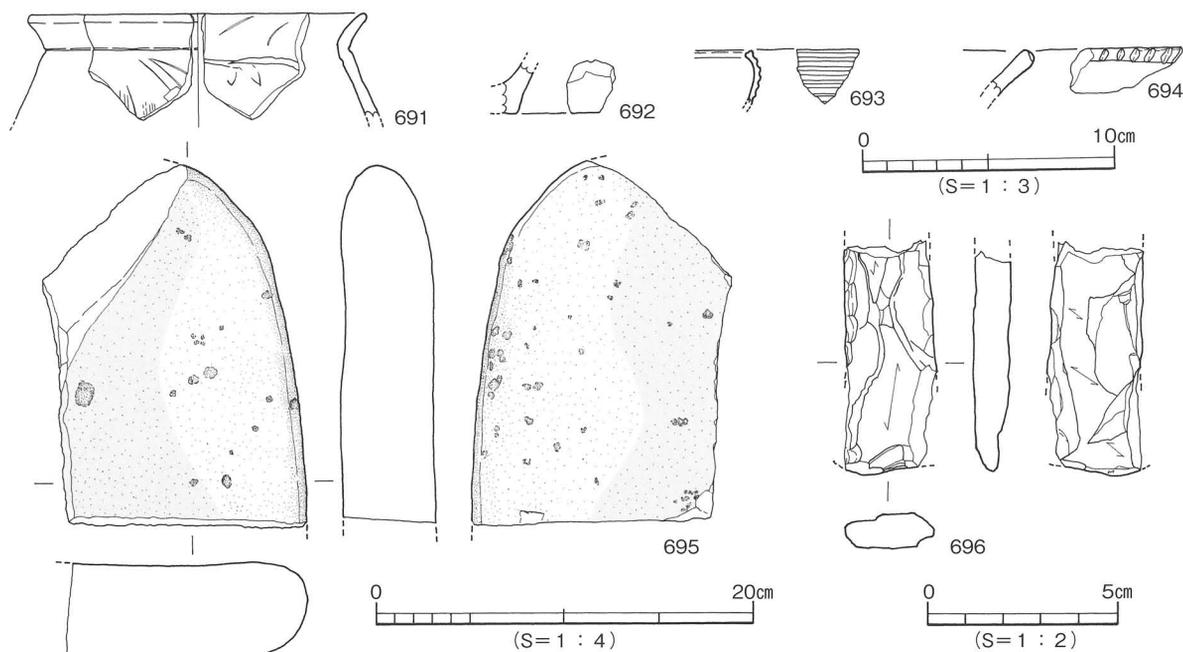
(4) 土坑 (SK)

SK201〔第86・124図、図版41〕

SK201はⅡ区のK13区に位置し、SB104を切りSP231に切られる。平面形態は長方形である。規模は2.16×0.94m、深さ46cmを測る断面形態はフラスコ状である。埋土は4層に分かれる。①層黒褐色土(7.5Y R2/2)、②層黒色土(10Y R2/1)、③層黒色土(10Y R2/1)に暗褐色土(7.5Y R3/3)混じり、④層黒褐色土(10Y R2/2)である。埋土は全体にきめ細かく粘質を持つ。出土遺物は弥生土器、縄文土器、石製品の台石、石斧がある。

出土遺物(691~696) 691~693は弥生土器。694は縄文土器。695・696は石器。

時期：SB204を切ることより弥生時代後期前半以降とする。



第124図 SK201出土遺物実測図

6. その他の遺構と遺物

性格不明遺構と柱穴がある。

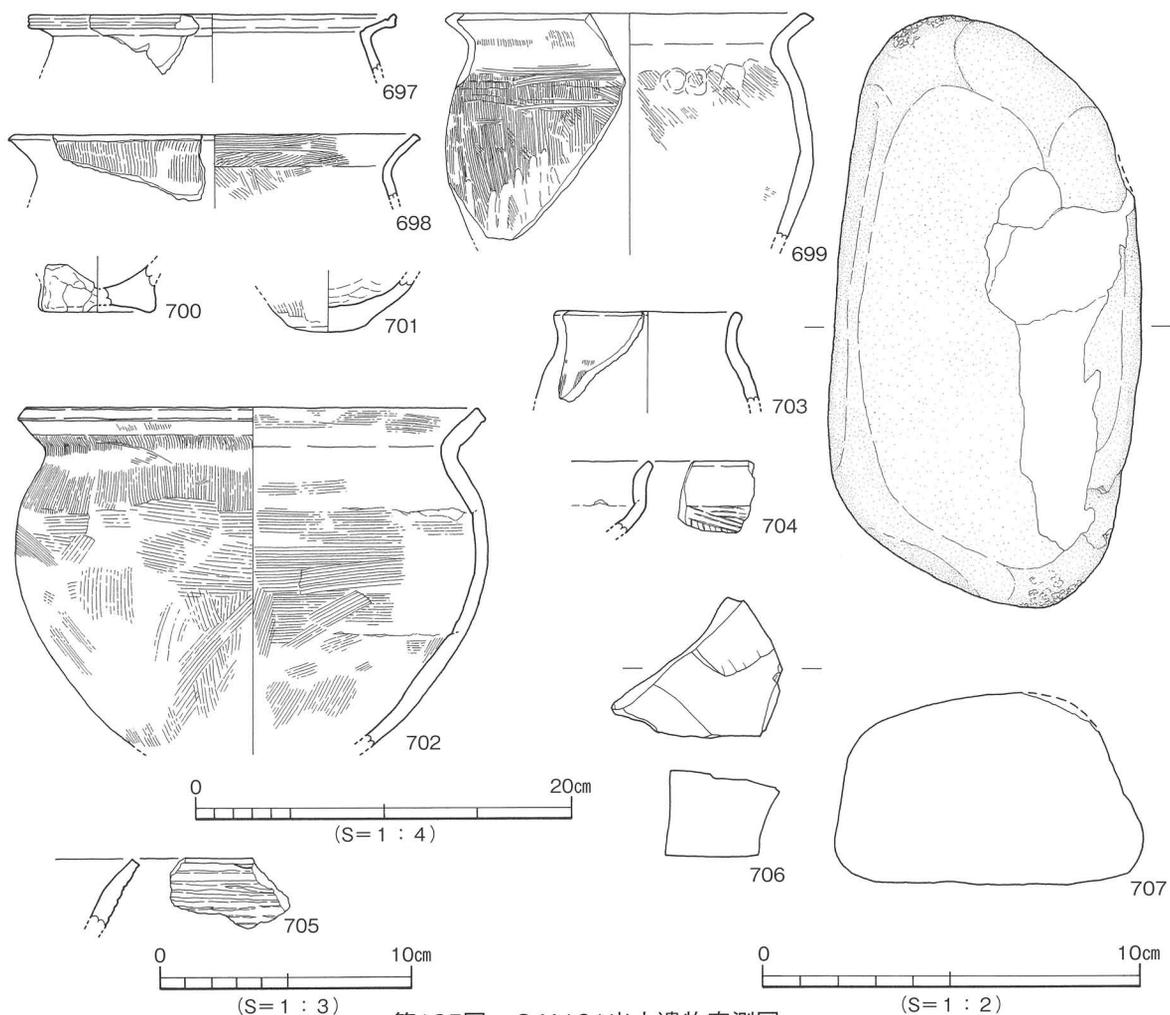
(1) 性格不明遺構 (SX)

SX101〔第85・125図、図版38〕

SX101はⅠ区のE6区に位置する。平面形態は三日月状の不整形である。規模は長さ4.10×幅1.44m、深さ14cmを測る。断面形態はレンズ状である。埋土は①黒色土(10Y R1.7/1)②黒褐色土(10Y R2/2)③黒褐色土(7.5Y R3/1)である。埋土は全体にしまりがなく軟らかい。出土状況は床面より浮いた状態で遺物が出土した。出土遺物は弥生土器の甕型土器、鉢形土器、高坏形土器、縄文土器、敲石、石核がある。弥生土器は破片が大きいものである。SX101は、形態と埋土から人為的な遺構ではなく倒木痕と考えられる。

出土遺物(697~707) 697~704は弥生土器。705は縄文土器。706・707は石器。

時期：出土遺物から弥生時代後期前半から後半とする。



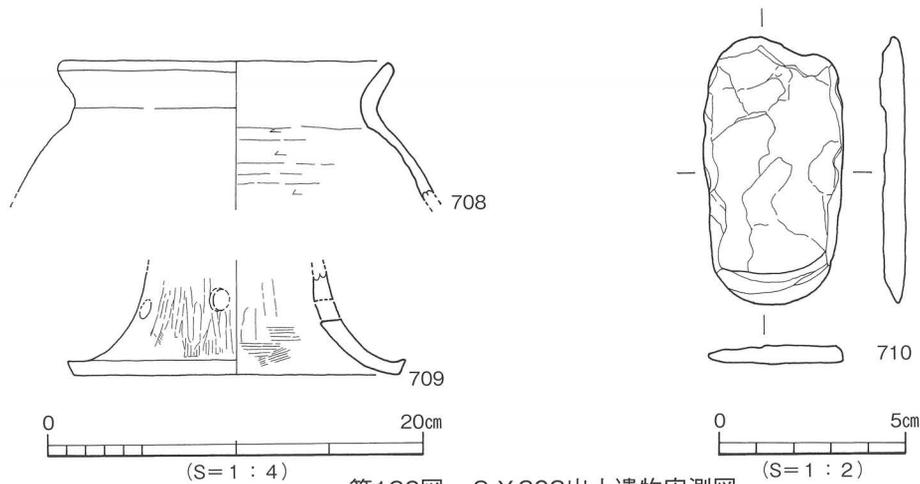
第125図 S X 101出土遺物実測図

S X 202〔第86・126図、図版41〕

S X 202はⅡ区のL15区、S B 203の北側に位置しS D 201の上面に遺物が集中して出土した地点である。範囲は南北1.0m、東西0.7mを測る。出土遺物は弥生土器の甕形土器、高坏形土器、石斧が出土した。

出土遺物（708～710）708・709は弥生土器。710は石斧。

時期：出土遺物から弥生時代後期末とする。



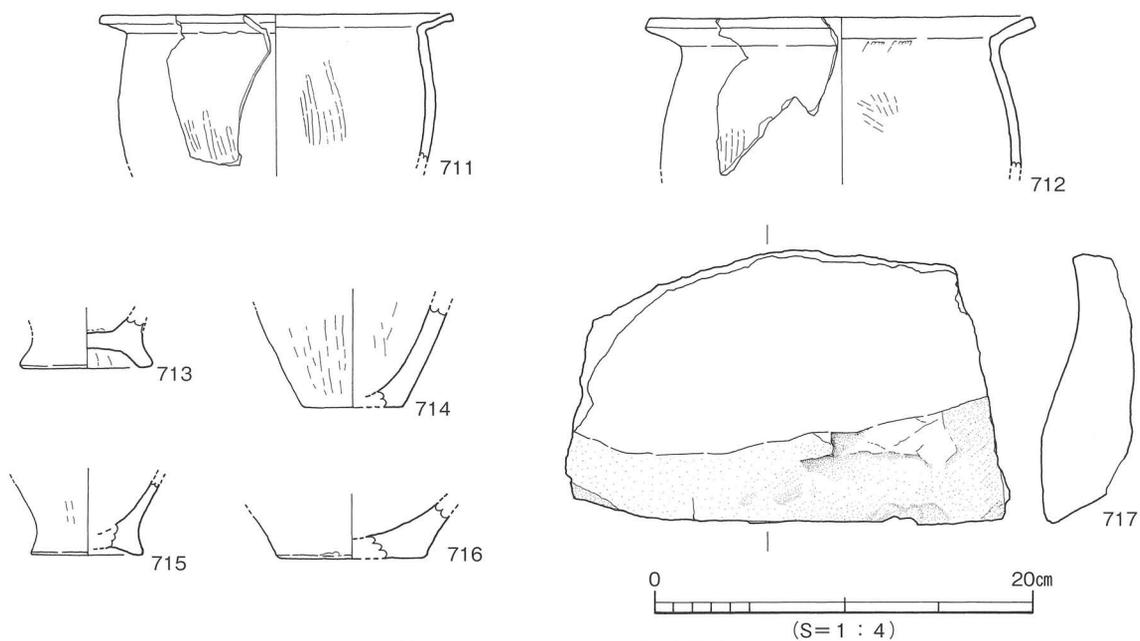
第126図 S X 202出土遺物実測図

S X 203 [第86・127図、図版41]

S X 203はⅡ区のJ 14区に位置し、S D 201の上面に石が集中して出土した地点である。範囲は南北0.75m、東西7.0m、高さ20cmを測る。出土状況は5～25cmの石が集まり、その中には石器と土器が含まれる。

出土遺物 (711～717) 711～716は弥生土器。717は石器。

時期：出土遺物から弥生時代後期前半とする。

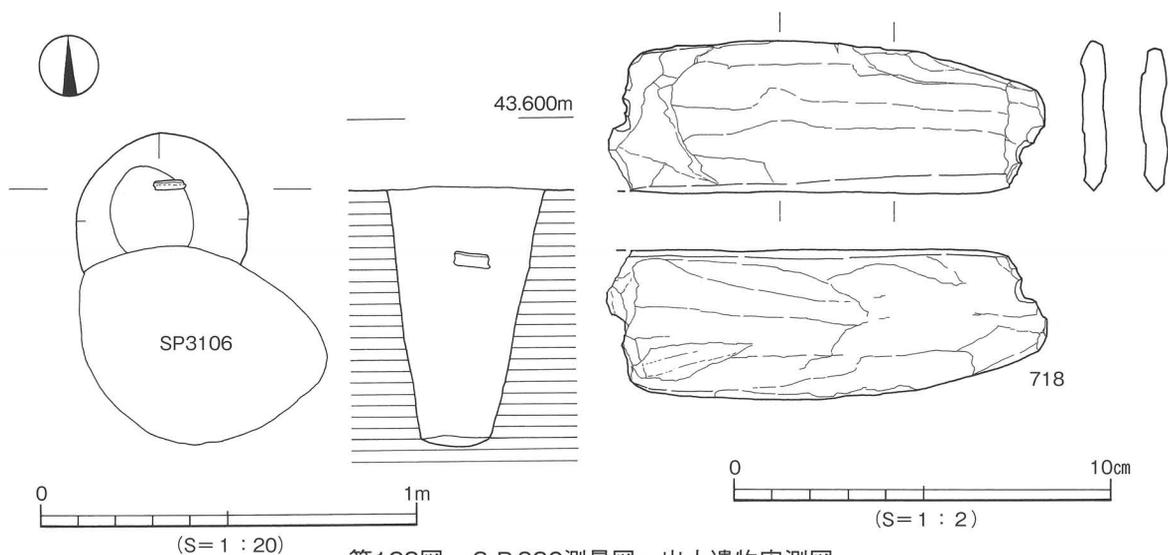


第127図 S X 203出土遺物実測図

(2) 柱穴 (S P)

S P 326 [第87・128図、図版43・44・48]

S P 326はⅢ区のL 18区に位置し、S P 3106に切られる。平面形態は円形である。規模は径45cm、深さ70cmを測る。埋土は黒褐色土 (7.5Y R 3/2) である。出土遺物は石庖丁の完形品が出土した。出



第128図 S P 326測量図・出土遺物実測図

土状況は上部から20cm掘り下げ時に、北側の壁面近くで刃部を上に向けた状態で出土した。

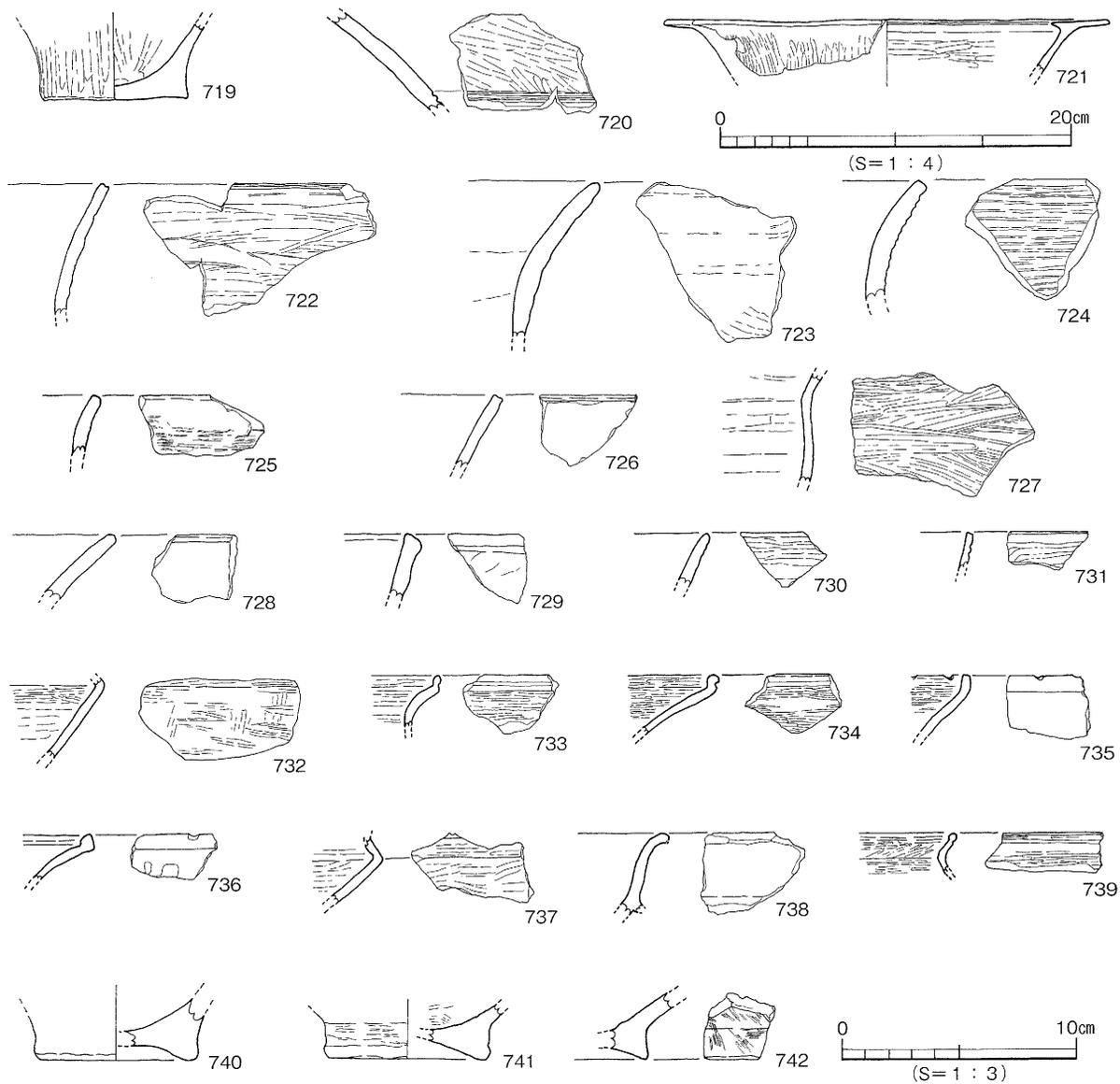
出土遺物(718) 718は石庖丁。長方形で両端抉り。

時期：弥生時代後期後半と思われる。

7. 柱穴・包含層出土遺物〔第129～131図、図版48〕

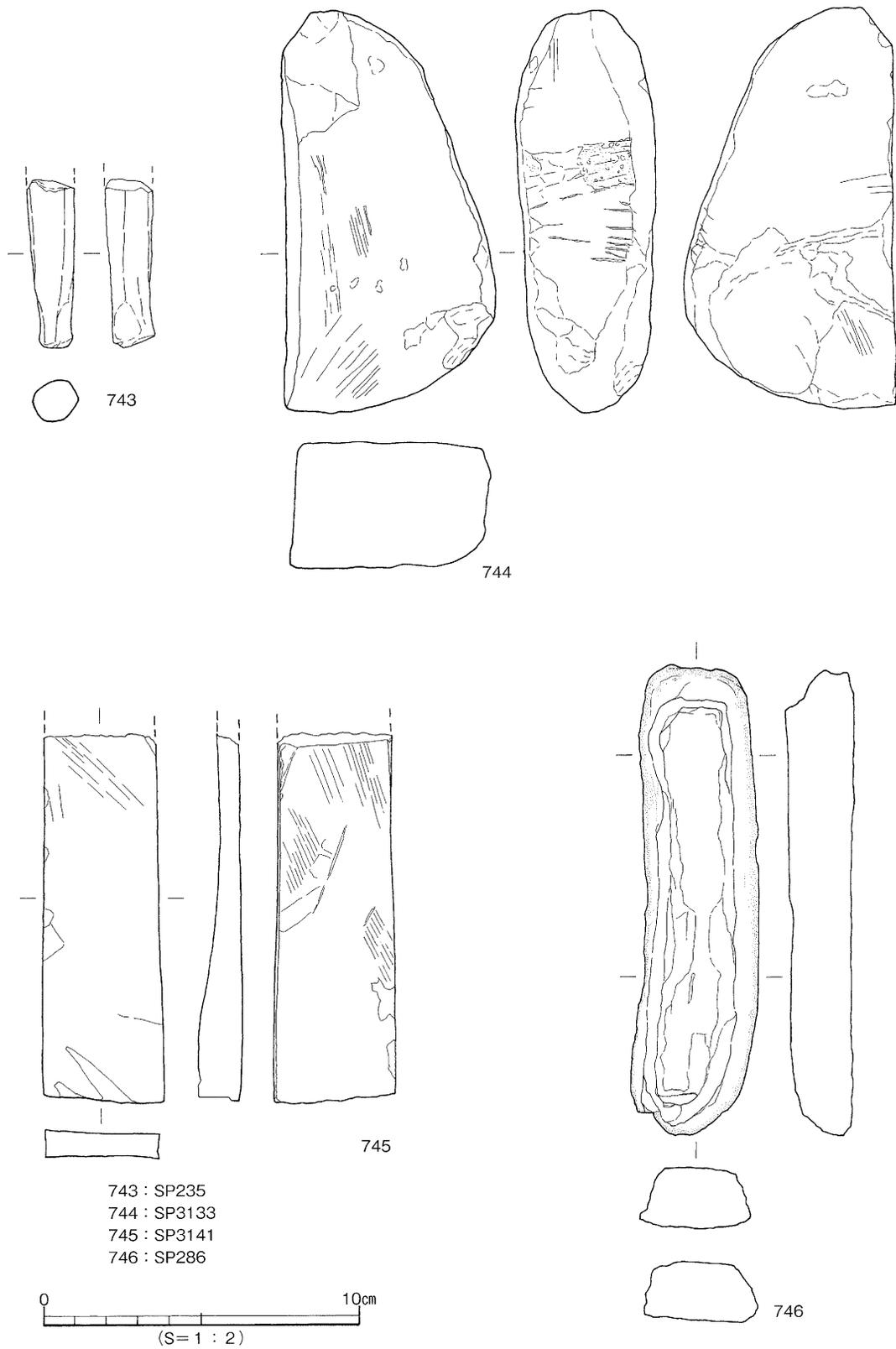
(1) 柱穴(S P)

719はS P 3106。720は壺形土器(S P 394)。721は高坏形土器(S P 220)。722～742は縄文土器。

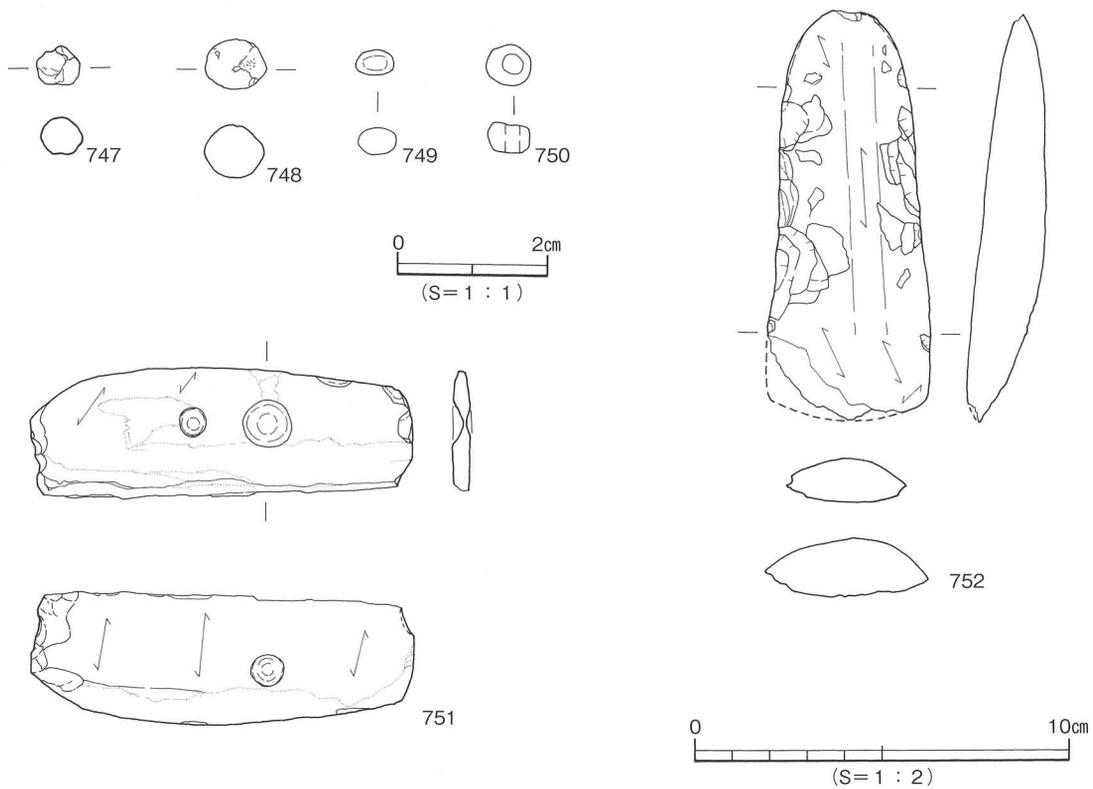


719 : SP3106	723 : SP318	728 : SP119	733 : SP318	738 : SP1024
720 : SP394	724 : SP291	729 : SP3134	734 : SP235	739 : SP1007
721 : SP220	725 : SP239	730 : SP102	735 : SP229	740 : SP235
722 : SP174	726 : SP139	731 : SP147	736 : SP269	741 : SP315
	727 : SP395	732 : SP229	737 : SP3120	742 : SP1050

第129図 S P 出土遺物実測図(1)



第130図 SP出土遺物実測図(2)



第131図 第Ⅲ層出土遺物実測図

縄文土器が出土した柱穴はⅠ区では18基、Ⅱ区では5基、Ⅲ区では5基の計28基がある。埋土は褐灰色土、黒褐色土、褐色土、黒色土から出土している。743は器種不明土製品。744・745は砥石。746は石器素材。

(2) 包含層 (747~752)

747・748は土玉、749・750はガラス玉。749は穿孔なし。751・752は石製品。751は石庖丁完形品。752は石斧。

8. 小 結

本調査では、縄文時代晩期から中世までの遺構と遺物を確認した。検出した遺構は、縄文時代晩期の土坑群と、弥生時代前期末~中期初頭の複数の大溝、弥生時代後期の住居址が注目される。

土坑群は、Ⅰ区中央部から南部に分布し、3基を検出した。平面形態は長方形を呈し、その規模は長軸1.2m、短軸1.0~0.7m、深さ0.19~0.27mを測る。断面形態は箱形を呈し、一部フラスコ状になるところがある。これら土坑群は、平面・断面形態には規格性が認められ、貯蔵穴として機能していた可能性が高いものと判断される。なお、土坑の遺存が悪いことから、遺構検出面としたⅣ層上面は、削平された可能性が高く、土坑は本来、より深さがあったものと推測される。

弥生時代前期末~中期初頭の溝は、Ⅰ区中央部に位置する溝 (S D101) と、Ⅱ区南西部から北部中央部に位置する溝 (S D201・202) である。これらの溝には、平面形態と規模に違いが見られるも

の、出土遺物から同時性の高いものと判断される。S D101は規模が幅3.6～1.6m、深さ1.2mを測り、S D201・202は規模が幅2.2m、深さ0.8mを測る。このうち、S D101は東に向けて円弧状を呈するものであり、これは、いわゆる「環壕」と呼称されるものである。大溝は規模と堆積状況から判断すると集落を分ける環壕（区画溝）と考えられる。環壕の事例としては、松山平野では6遺跡が確認されており、具体的には、久米高畑遺跡、来住廃寺、来住V遺跡、岩崎遺跡、斎院烏山遺跡、祝谷畑中遺跡である。樽味地区においては、該期の大溝の検出は初例となる。既往の調査及び研究からは、該期の大溝（環壕）は中核的集落に伴う例が多く、本遺跡の性格を考える上で大変興味深く参考になるものである。

竪穴式住居址では、S B301、201の遺物出土状況が注目される。S B301は住居址全体に礫と遺物が出土した。S B201の出土状況も礫と土器が住居全体から出土している。出土した礫は調査地の地山層に含まれる礫であり、新たに住居、土坑、溝などを構築するために掘削を行った際に出土した礫を、住居廃絶の為に利用して捨てたか、住居廃絶時の祭祀行為として使用されたと考えられる。調査区内には、住居址以外にS D101・201の溝からも礫が検出されている。

このように礫と遺物が混在して出土する例では、樽味立添遺跡1次調査地の住居址がある。礫廃棄行為が桑原地区の独自性のものか、平野全体のものか今後の周辺調査に注目していきたい。

遺物では、S P326出土石庖丁の出土状況がある。石庖丁は完形品で柱穴中位より刃部を上に向けて出土した。刃部を上にして出土した状況から、自然に流れ込んだのではなく、意図的に据え置いたと考えられ、石庖丁の埋納行為が行われた痕跡と考えられる。

本調査では、縄文土器が多量に出土した。松山平野の中で多量の縄文時代晩期の土器が出土した遺跡は6遺跡あり、松山北部の大淵遺跡、船ヶ谷遺跡、来住久米地区の久米高畑遺跡36次調査地、南久米片廻り遺跡、道後城北の道後今市遺跡10次調査地、南海放送遺跡である。本調査地が位置する桑原地区では初例であり、縄文時代晩期の土坑の検出と合わせて周辺に生活拠点（住居）が存在すると考えられ今後の調査に期待したい。

【参考文献】

- 栗田茂敏 2000 『大淵遺跡』松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター 松山市文化財調査報告書 第77集
- 平井泰男 1995 『南溝手遺跡1』岡山県教育委員会
- 平井泰男 1996 『南溝手遺跡II』岡山県教育委員会
- 平井泰男 2000 「突帯文と遠賀川」『中部瀬戸内地方における縄文時代末葉から晩期の土器編年試案』土器持ち寄り会論文集刊行会
- 宮崎哲治 1993 『林・坊城遺跡』香川県教育委員会

第9章

たる樽 み味 たか高 ぎ木 遺跡

7 次 調 査 地

第9章 樽味高木遺跡7次調査地

1. 野外調査の経過と方法

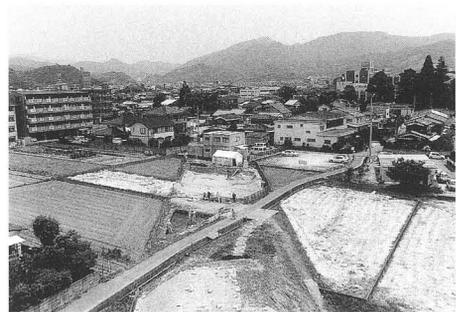
対象地の安全対策と調査区の設定を行った後、2003（平成15）年5月1日から重機等を用いて表土除去に着手する。試掘調査のデータを鑑み、まず地表下0.3～0.4mまで掘削する。調査区は便宜上、西からⅠ区・Ⅱ区と呼称することとした。対象地の東半側、すなわちⅡ区は黒色系の遺物包含層が厚く遺存していたことから、一部では人力と重機等を併用しつつ遺物包含層の精査を試みた。遺構の輪郭は基本土層の4層上面で確定させ、竪穴式住居址、溝、土坑等の生活関連遺構を検出した。

9日からは測量の基準となる杭の打設が着手され、座標系に沿う方眼の調査区割りを設定する。その後、平板測量にて遺構配置図を作成し遺構埋土を確認した後に遺構精査に着手。一括性の高い遺物が確認された竪穴式住居址に対しては、縮尺1/10の遺物出土状況平面測量図と遺構断面土層図を作成する。6月からは愛媛県下の梅雨入りに伴い、野外調査がしばしば中断することがあった。この時は、発掘調査事務所にて、主に記録後に取り上げて収納していた出土遺物の洗浄・乾燥、さらに注記作業を行うとともに、作成した測量図の縮分合成や撮影した記録写真の整理を実施した。これらの作業を通じて、調査中の遺構に対する帰属時期、埋没要因とその過程を検証するとともに、現在採用している調査手法を検討する作業を継続した。

梅雨の合間に訪れたわずかな晴れ間には、調査区内に溜まった雨水を汲み出した上で、遺構保護のために覆っていたシートを外し、遺構面の乾燥に努めた。この作業のおかげで、晴天時は野外調査をスムーズに進めることが可能となった。7月下旬からは竪穴式住居址や土坑などの主要遺構の精査、ならびに測量図作成と記録写真撮影が順調に進む。

その過程で、本調査地内に5世紀前半に帰属する竪穴式住居址が展開するとともに、当該期の集落調査が当平野では希少な事例であることを確認した。これらのことから、発掘調査中の現場を公開するとともに調査成果を紹介し、広く市民に調査情報を公開する目的で、9月6日午後に現地説明会を開催した〔写真図版49-3〕。説明会終了後は、調査区を埋め戻すとともに、測量図、記録写真、出土遺物、発掘・測量機材等の移動を行い、15日に野外調査の全ての作業が完了した。

測量に際しては、国土座標第Ⅳ座標系基準点から調査地内に座標点を移動し、これを基準とした5m方眼のグリッド割りを設定した。グリッドはX=93305、Y=-65705を起点として東から西へA・B・C…O、北から南へ1・2・3…11とし、A1～O11区といった呼称名を付けている。主要な遺構の精査に際しては、セクションベルトを任意で設定し、土層の対応関係を検討しながら、調査を進めた。



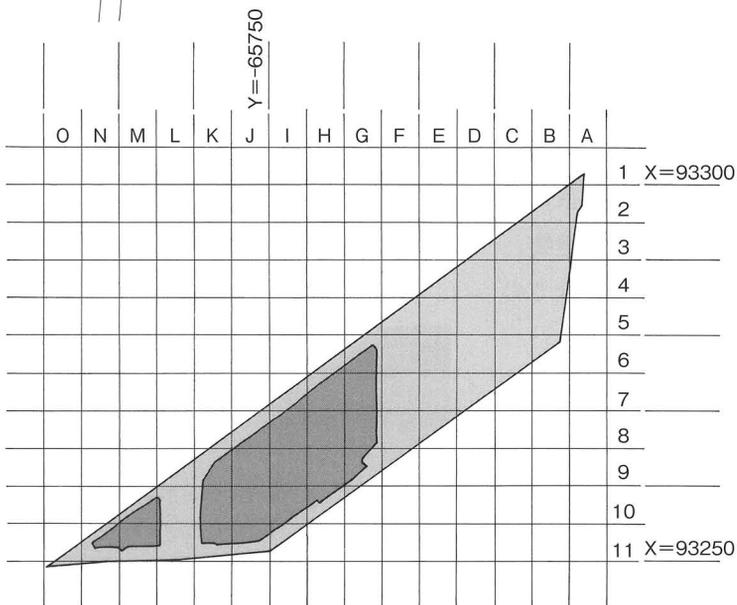
第132図 調査地全景



第133図 古墳時代中期の竪穴式住居址



第134図 調査地測量図



第135図 区割図

2. 基本層位

調査対象地の長さはおおよそ65m分で、調査以前は水田であった。現況では地表面がわずかに北東から南西へ向けて緩傾斜しており、標高40.7～40.3mを測る。基本層位は、1～6層を検出した〔第136図〕。

1層－現代の水田や畑に関わる土層で、耕作土部分に相当する1-①層と、床土部分の1-②層に細分可能である。

1-①層：灰色土（N5/0）で層厚10～26cmを測り、調査区全域で検出した。

1-②層：明赤褐色土（2.5Y R5/6）で層厚6～18cmを測り、鉄分とマンガンの沈着が認められ、ほぼ全域に分布する。市道樽味溝辺線関連調査の統一基本土層では、1-①は第Ⅰ①層、1-②は第Ⅰ②層に相当する。

2層－褐灰色土（10Y R4/1）で調査区西端部のⅠ区に分布する。層厚4～14cmを測り、弥生土器片、古墳時代～中世の土師器や須恵器の小片などの遺物をわずかに含む遺物包含層である。M10区では局部的に遺存しないところが認められた。統一基本土層の第Ⅱ層に相当する。

3層－黒色土（7.5Y R2/1）で調査区全域に分布し、北東部に薄く、南西部には厚く堆積する傾向にある。層厚8～48cmを測り、粘性の強い土である。弥生時代中～後期の土器、古墳時代の土師器と須恵器を含む遺物包含層で、遺物の包含量は極めて多い。本層上面は遺構面（調査で確認された遺構構築面）となり、調査区北壁断面では、灰色土が埋土の土坑と柱穴を数基確認している。統一基本土層では、第Ⅳ層に相当する。なお、野外調査では局部的に遺物の集中する地点が確認されており、室内調査の過程でこれらのなかには本層を切り込んで構築された遺構（主には竪穴式住居址）に伴うものが含まれている可能性が高いことが判明している。

4層－粘性の強い褐色土（7.5Y R4/4）で、1～2mm大の礫粒を多量に含み、ガチガチした質感がある。調査区全域に分布し、層厚14～24cmを測る。調査区北壁における本層上面は、東端で標高39.5m、西端で標高39.0mを測る。本層上面は遺構面（遺構構築面）となり、主要な遺構にはS B201がある。統一基本土層では、第Ⅴ層に相当し、人工遺物は包含しない。

5層－にぶい黄褐色土（10Y R4/3）で、調査区のJ 8以南に分布する。層厚6～34cmを測り、地形的に低くなる傾斜変換付近に堆積が認められ、人工遺物は包含しない。統一基本土層の第Ⅴ層に相当する。本層の下部には褐色土（10Y R4/4）や黒褐色土（2.5Y 3/1）が堆積するものとみられ、N11区で両層を確認している。

6層－褐色砂質土（10Y R4/4）で、K 9区で確認している。人工遺物は包含しない。

4層以下は人工遺物を包含しないため、堆積時期は定かではない。ただし、本調査において4層上面から弥生時代中期後葉に比定できる竪穴式住居址（報告するS B201）が確認されていることから、4層が堆積した時期の下限を弥生時代中期後葉とすることができよう。さらに本調査地の南西に隣接する樽味四反地遺跡7次調査地からは弥生時代前期後半を下限とする溝が検出されていることを考え合わせると、4層の堆積時期は少なくとも弥生時代前期後半以前と理解することができる。本層上面を地形測量したところ、標高40.2～39.4mを測り、北東から南西へ向けて緩傾斜することが明らかとなっている。

3. 調査概要

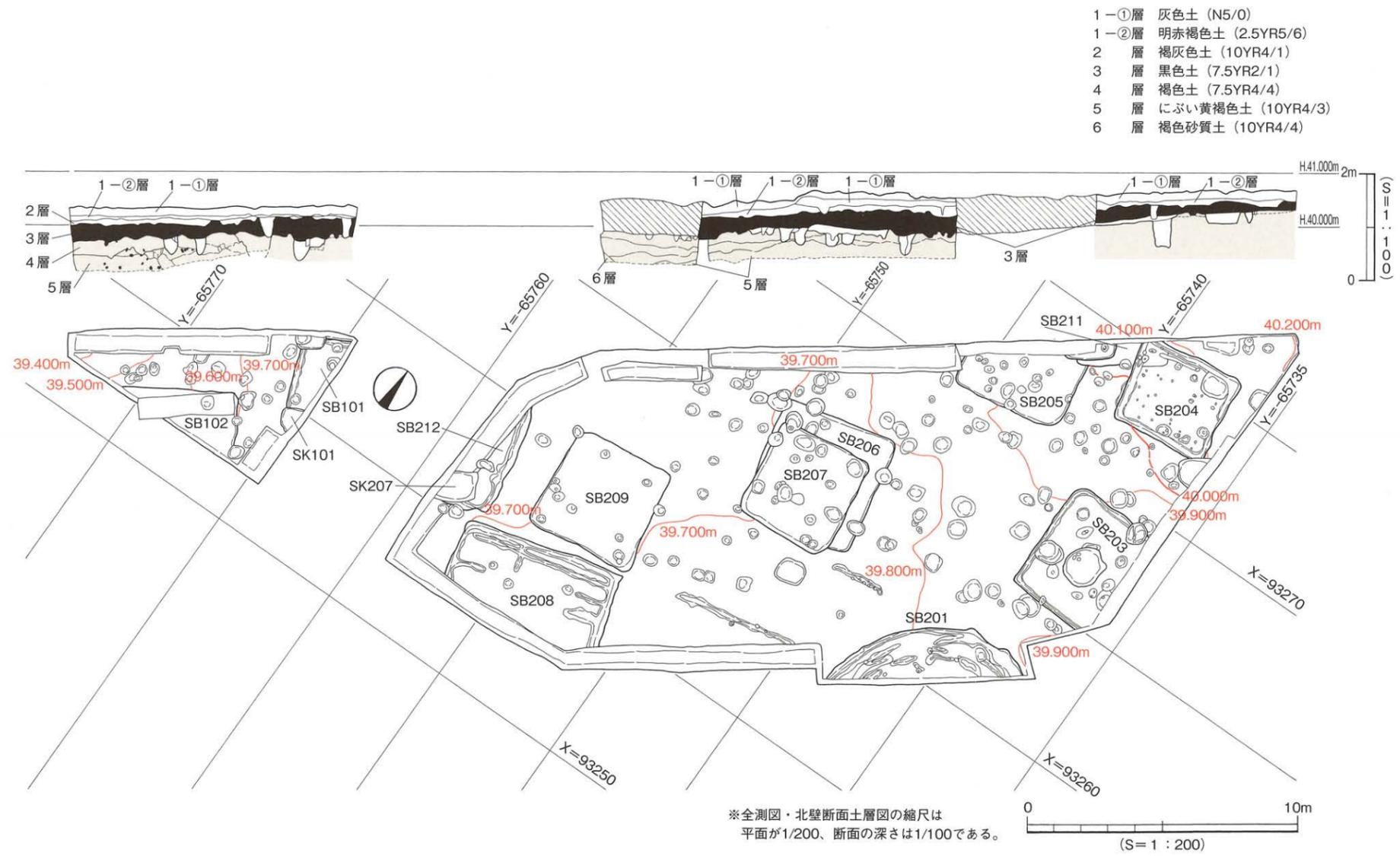
検出した遺構は竪穴式住居址13棟、土坑9基、柱穴153基である。これらの確認面（構築面）は、3層上面と4層上面のいずれかである。野外調査では遺構埋土と3層との識別が平面的に困難であったことから、遺構の大半は人工的に4層上面まで掘り下げた上で検出を行い、遺構の輪郭を確定させている。ただし、室内調査の過程において周辺の調査成果を加味して検討した結果、古墳時代以降に帰属する遺構は3層上面ないしは3層堆積の過程、弥生時代に帰属する遺構は4層上面が構築面である蓋然性が高いと考えられることから、以下では暫定的ではあるが3層上面を第一遺構面、4層上面を第二遺構面と呼称して報告することとする。

遺構の帰属時期については、出土遺物と埋土、さらに遺構検出面を総合して判断した。したがって、出土遺物が伴わない遺構と、伴っていても小破片のため時期を特定することが困難な遺構については、帰属時期を特定することは差し控えることとした。検出遺構は種類別にまとめ、表5にまとめた。

以下では、時期別に抽出して調査所見を詳述する。なお、一部の遺構については埋没要因についても言及している。これは、遺構に伴うと判断される遺物の出土状況を現地を確認・検討した上で、測量図の作成や記録写真の撮影を行い、さらに取り上げ後の遺物に対して室内調査で接合関係を試み、また記録写真による検証を重ねた結果、遺構埋没要因に対して非常に興味深い見通しが得られたからである。本報告では積極的に言及し、集落遺跡及び竪穴式住居址の精査における新たな調査視点も提示することとした。

表5 検出主要遺構一覧

遺構名称	位置	平面形態	規模 長さ×幅×深さ (m)	主な出土遺物
S B 201	G 9・H 9～10	円形	直径9m程度か	弥生中期土器、石器など
S B 208	J 10・K 10ほか	方形か長方形	6.3×(4.1+)×0.25～0.4	古墳中期土師器・須恵器
S B 204	G 6・H 6ほか	方形	4.0×3.4×0.4～0.6	古墳中期土師器
S B 101	L 10・M 10ほか	方形か	(1.6+)×(2.6+)×0.2～0.6	古墳中期土師器
S B 212	K 10	方形か長方形	(2+)×6×0.26	古墳中期土師器
S B 207	I 8・9	方形	3.7×4.0×0.04～0.12	古墳中～後期須恵器
S B 206	I 8・9	方形	4.5×4.5×0.04～0.18	認められず
S B 203	G 8	方形か	4.5×(3.3+)×0.06～0.20	認められず
S B 205	H 7・I 7	方形か	4.3×(2.9+)×0.02～0.12	認められず
S B 209	J 9・K 9ほか	方形	4.0×3.9×0.02～0.06	認められず
S B 102	M 11・N 11	方形か長方形	(4.5+)×(2.5+)×0.05～0.15	認められず
S K 101	L 11・M 11	円形か楕円形	(0.96+)×(0.8+)×0.45	古墳中期土師器



第136図 I・II区全測図及び北壁断面土層図

4. 弥生時代の遺構と遺物

弥生時代の遺構は竪穴式住居址（S B 201）1棟に限られ、Ⅱ区南東部に位置する。

（1）竪穴式住居址（S B）

S B 201〔第137図、写真図版51-1〕

調査地南東部のⅡ区、G 9、H 9～10区に位置し、第二遺構面にて検出した。調査区南壁の観察により、遺物包含層と報告した3層が本住居址を覆っていることを確認している。調査区外へ続き、平面形態は円形を呈する可能性がある。規模は、長軸7.4m、短軸1.86m、検出面からの深さ14～20cmを測る。復元すると、直径9m程度の円形の可能性が考えられる。構築時の床面は3～4重の周壁状を呈する小溝が断続的に巡り、本遺構検出時の埋土は黒色土（7.5Y R2/1）で硬く締まっており、住居の北東部に遺物のまとまりが認められた。なお、小溝は、外側が褐色土の砕ブロックを含まない黒褐色土（10Y R2/2）で埋積し、この内に位置する小溝は褐色土の砕ブロック混じりの黒褐色土（10Y R2/2）で埋積する。出土遺物が①層とした黒色土の上面付近で面を形成して認められたことから、①層上面が使用時の床面であった可能性も考えられよう。なお、支柱穴や炉、さらに貯蔵用の土坑といった付帯施設を確認するには至らず、内部構造にかかわる情報を野外調査で明らかにすることはできなかった。

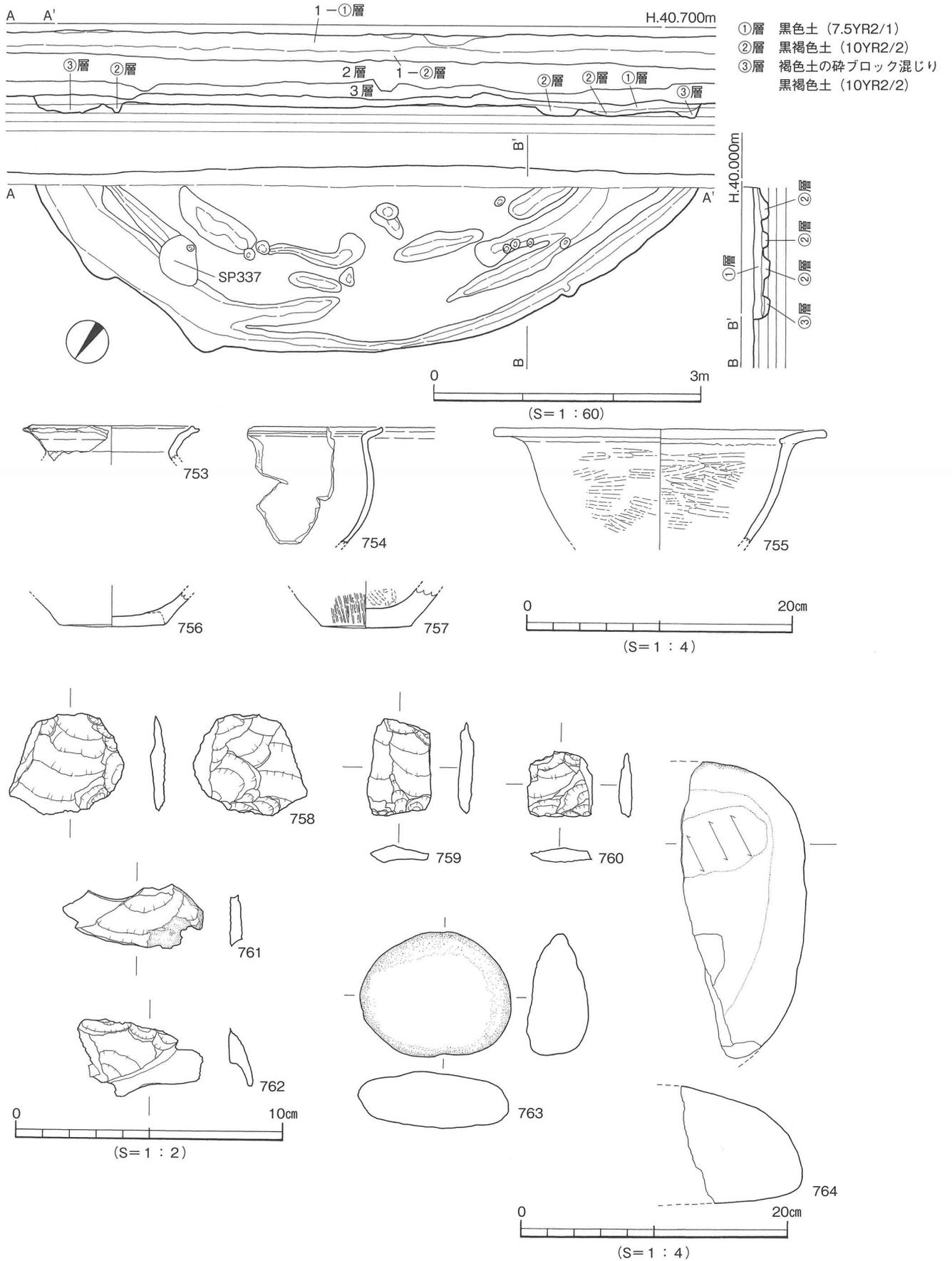
出土遺物には弥生土器と石器とがあり、甕・鉢・高坏、スクレーパー・楔形石器・剥片・敲石・砥石がみられる。先述したように、これらの遺物は埋土上面付近、すなわち遺構検出時あるいは①層上部で出土していることから、埋土①～③は構築時に貼られた床を構成する可能性が高く、これは住居の構築を考える上で興味深い所見になり得る。

出土遺物（753～764） 753は甕である。復元口径は12cmを測り、口端には凹線文が施される。754は鉢の口縁部小片で、口縁は折り曲げにより強く外反する。755は口縁部の約1/2が遺存する高坏である。復元口径は24.4cmを測り、口縁部は長く外反し、内面がわずかに突出する。坏体部の内外面には横方向のミガキを施す。758は赤色珪質岩製のスクレーパーである。縦長剥片を素材とし、片面からの細部調整により右側縁に刃部を作出し機能面とする。完存品で法量は長さ3.8cm、幅4.3cm、最大厚0.66cm、重さ11.21gである。759と760は楔形石器で、前者は赤色珪質岩製、後者はサヌカイト製である。いずれも上下の両端には特徴的な階段状剥離が認められる。761と762はサヌカイト製の横長剥片で、前者には自然面（礫面）が残置する。763は花崗岩製の敲石で、側縁を機能面として使用した可能性が高い。完存品で法量は長さ11.3cm、幅9.4cm、最大厚4.4cmを測る。764は細粒砂岩製の砥石である。

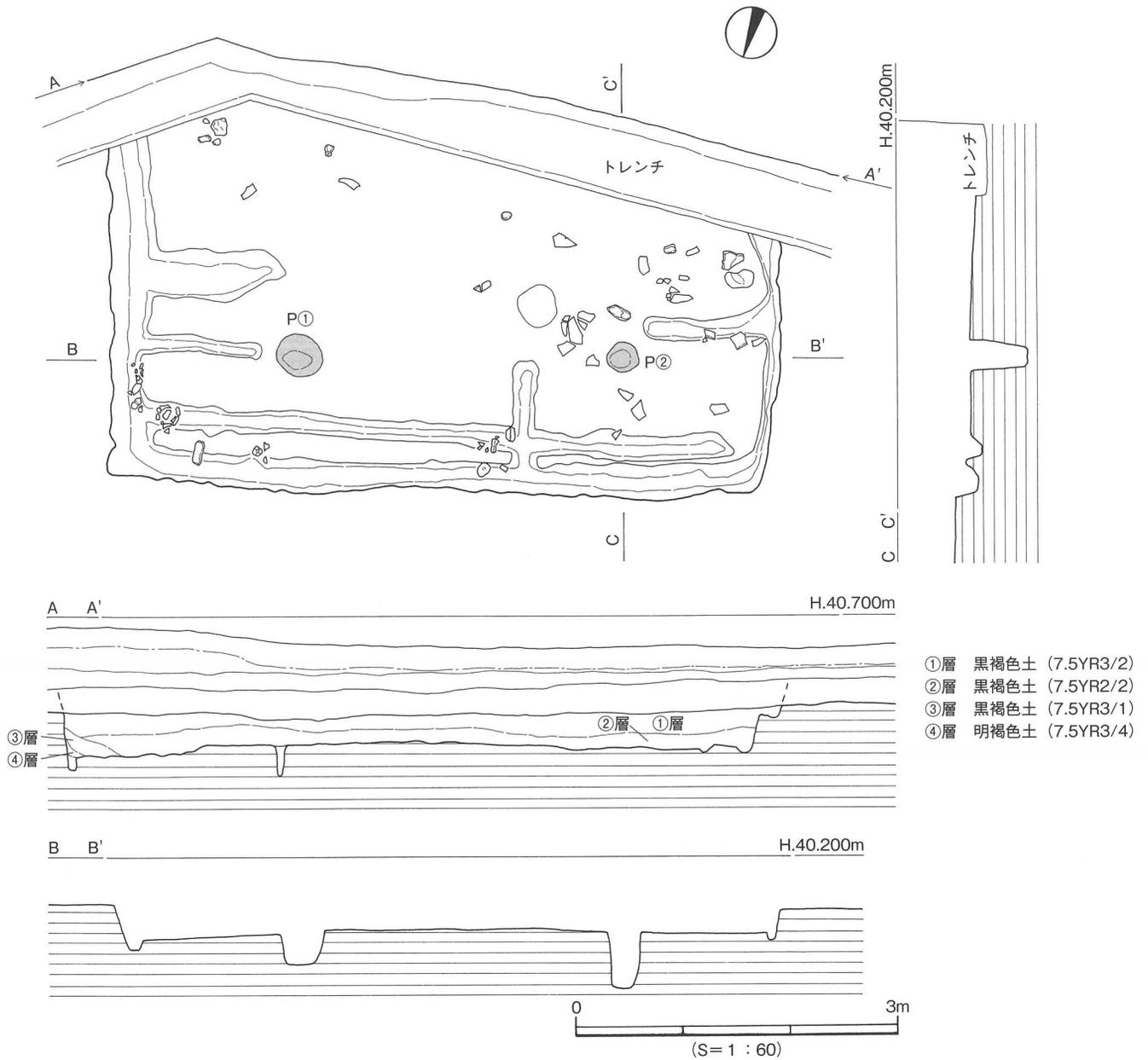
時期：遺構構築面と出土遺物から、S B 201は弥生時代中期後葉、梅木編年の伊予中部Ⅳ様式に機能を停止したと考える。

本遺構出土の遺物は量的には限られるものの、石器資料には器種と使用石材に興味深いものが認められる。すなわち、759と760の楔形石器、763の敲石、758と760の赤色珪質岩である。これらの石器資料は当該期の器種構成ならびに剥片石器石材の入手の実態を理解する上で基準資料に位置付けることができよう。761と762のサヌカイト製横長剥片の出土は、少なくとも当該期にサヌカイトと赤色珪質岩の二種の搬入石材が剥片石器に採用されていることを追認するものとなる。さらに、763の敲石、764の砥石の出土からは、打製剥片石器や大陸系磨製石器の製作された可能性が示唆される。

樽味高木遺跡7次調査地



第137図 SB201測量図及び出土遺物実測図



第138図 S B 208測量図

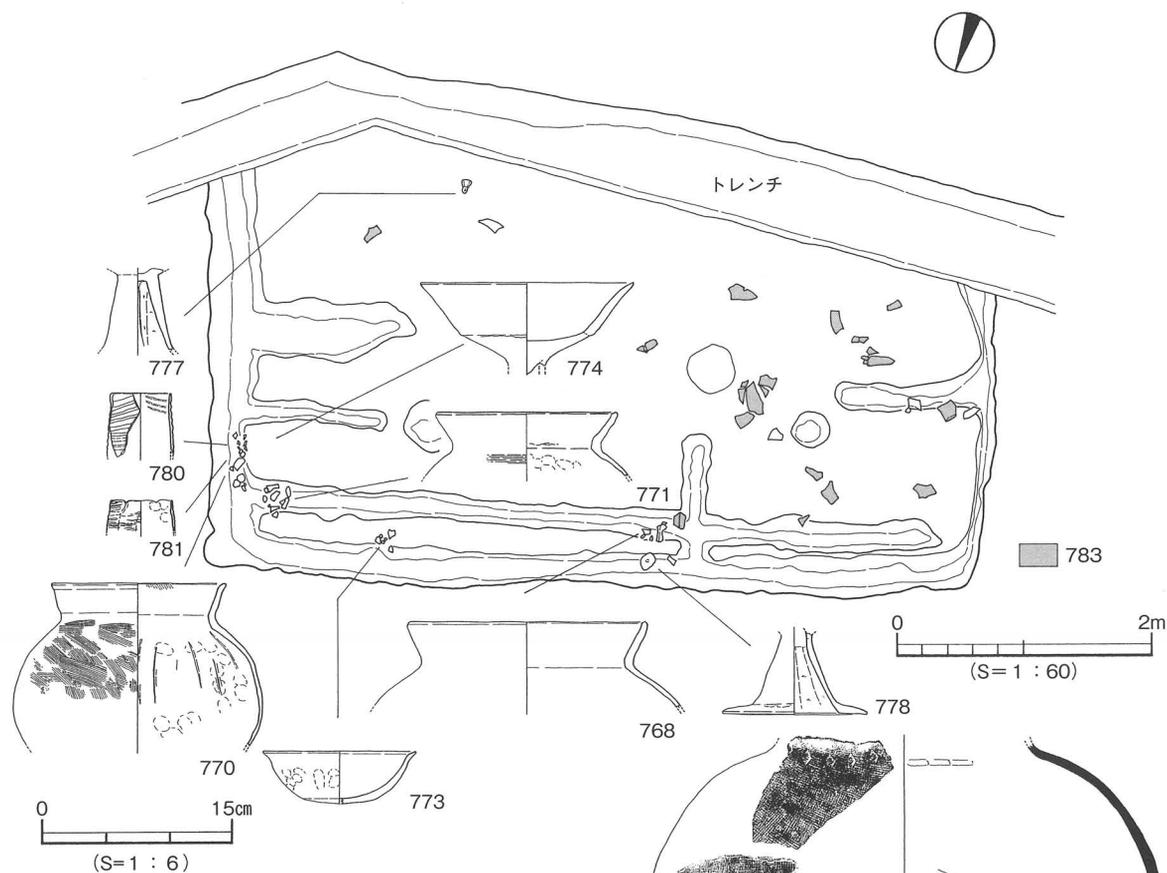
5. 古墳時代の遺構と遺物

古墳時代の遺構は竪穴式住居址12棟 (S B 101・102、202~211) と土坑1基 (S K 101) とがある。これらの遺構は、一部で重複あるいは近接することから全てが同時期に存在したと理解することはできず、時間差や時期差を有していた可能性が高いものと判断される。

(1) 竪穴式住居址 (S B)

S B 208 [第138~141図、図版51-2~52・57・58]

Ⅱ区西部のJ 10・11、K 10・11区に位置し、調査区外へ続く。調査区南壁を観察する限り、3層と遺構埋土との前後関係は判然としなかったものの、先述したように隣接する地点の調査成果からは本

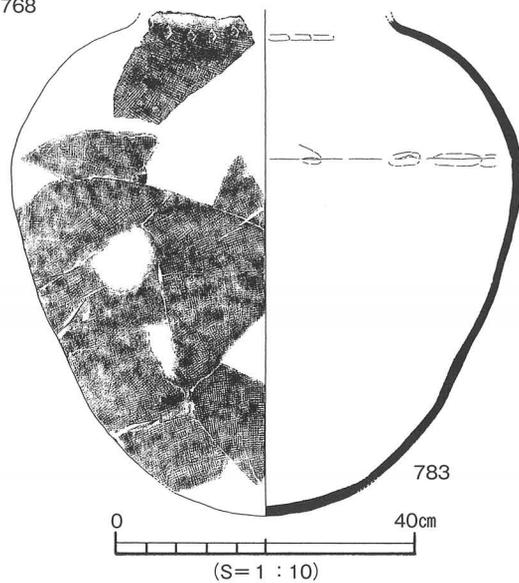


第139図 S B 208遺物分布図

遺構は3層の堆積過程で構築された可能性が考えられる。平面形態は方形あるいは長方形を呈するものと考えられる。規模は東西6.3m、南北検出長4.1m、検出面からの深さ25~40cmを測り、検出時の埋土は黒褐色土(7.5Y R3/2)で2~10mm大の白色碎礫粒を含むもので、遺物をはじめ焼土や炭化材等は認められなかった。調査の工程上、調査区の南壁沿いには既にトレンチが設定されていたことから、本遺構の精査に際してはまずこの南壁沿いに既設したトレンチの土層観察から着手した。住居の埋土は二層に大別でき、①層が先述した黒褐色土(7.5Y R3/2)、②層が黒褐色土(7.5Y R2/2)である。わずかな色調の違いを基準として壁面にてかろうじて分層・識別することができたにすぎず、平面的に両層を分層・識別することは困難と言わざるを得ない。このほか、住居の東壁付近において③層とした黒褐色土(7.5Y R3/1)混じりの褐色土(2.5Y R4/4)、同周壁溝埋土の④層暗褐色土(7.5Y R3/4)を確認している。便宜上、本遺構の西半部を①区、東半部を②区とすると、遺物は主に①区の①層から破碎した須恵器大甕の破片23点が、②区北壁周壁溝検出前の②層下位から土師器の甕・鉢・壺・高坏・製塩土器が出土している。

①~③層除去後に周壁溝・支柱穴・間仕切りの小溝の付帯施設を検出した。周壁溝は住居の南壁を除いた東西北の各壁に沿って、幅10~30cm、検出面からの深さ6~12cmを測る。支柱穴はP①とP

①~③層除去後に周壁溝・支柱穴・間仕切りの小溝の付帯施設を検出した。周壁溝は住居の南壁を除いた東西北の各壁に沿って、幅10~30cm、検出面からの深さ6~12cmを測る。支柱穴はP①とP



②の2基を確認した。P①は平面形態が円形を呈し、規模は直径40cm、深さ30cmを測る。P②は平面形態が円形を呈し、規模は直径30cm、深さ52cmを測る。主柱穴は住居の輪郭が延びる調査区外にも存在する可能性があることから、現況では主柱穴の配置を確定することはできない。間仕切りの小溝は住居北壁の周壁溝沿いに1条、東・西・北壁付近では周壁溝に直交して短い溝を検出した。

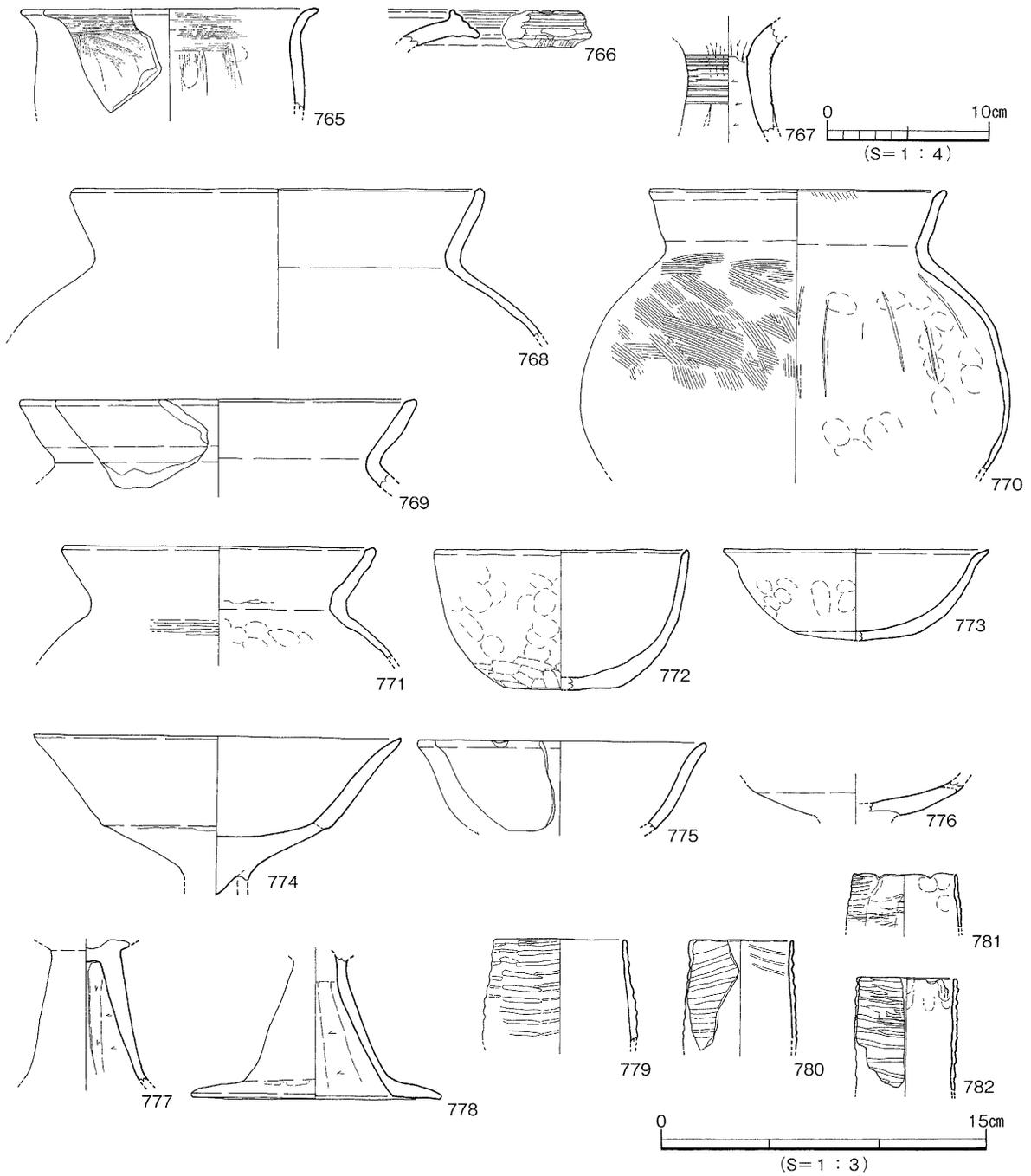
出土遺物 (765~783) 765は時期不詳遺物。766と767は弥生土器小片で、本住居に直接伴うものではないと考える。768~782は土師器、783は須恵器である。土師器は完存品がみられず、いずれも破片資料となる。768~771は甕である。768は②区の北壁に並行する間仕切り溝検出前の②層から出土した。約1/2の遺存で、器面の摩滅が著しく調整等を観察するには至らない。復元口径18.4cmを測り、焼成は良好で、色調は外面がにぶい黄褐色(10Y R5/3)、内面が橙色(5 Y R6/6)、黄灰色(2.5Y 4/1)を呈している。769は②区の②層出土の小片で、復元口径は18cmを測る。770は①区の北東隅の②層から出土した。上半部の約2/3が遺存し、口縁部はほぼ完存し、口径13.5cmを測る。胴部はやや扁平で、口縁部は直立気味に立ち上がり、口端がわずかに外に摘み出される。色調は内外面ともににぶい黄橙色(10Y R6/4)を呈する。771は770に近接して出土した。口縁部の大半を留める。772は②区の②層出土で、全体の1/2が遺存する。口縁部は直口し、底部は平底となる。調整は外面が指押さえとナデで、底部付近のみが板状工具を用いた強いナデ、内面はナデ仕上げとなる。外面の一部に黒斑が観察でき、色調は明赤褐色(2.5Y R5/6)を基調とする。773は①区の北東隅付近の②層出土の塊で、口縁部がわずかに外反する。復元口径12cm、器高4.2cmを測る。774~778は高坏である。774は770と近接して出土した坏部の1/2の破片資料である。口縁部は長くわずかながら外反し、口端が尖る。復元口径16.6cmを測り、坏部の外底には粘土を充填する。778は768と接して出土した高坏の脚部である。坏部を欠いた脚部であるが、ほぼ残存している。脚部は大きく「ハ」字形に開き、裾は屈曲する。調整は外面が摩滅のため観察できないものの、内面は横方向のケズリを施す。779~782は製塩土器。いずれも破片資料で、完存品はない。779は胴部上半で1/4の遺存である。口縁部はやや内湾し、復元口径6cmを測り、外面の調整は平行タタキを施す。色調は外面がにぶい黄橙色(10Y R7/4)、内面がにぶい橙色(7.5Y R6/4)を呈する。783は須恵器の大甕で、23点の破片となって確認されている。多くは住居西部の一角に分布し〔第139図〕、室内調査で接合復元を試みたが、完形に復元するには至らなかった。肩部が強く張り、胴部最大径の位置は胴上部にあり、丸味をもちつつ丸底の底部へ至る。調整は外面に細かい正格子のタタキ、内面はナデが施され、頸部の外面には菱形のスタンプ文が3cm間隔で施文される。

時期：構築面と遺物とから、S B 208は古墳時代中期前葉に機能を停止したと考える。埋土が水平基調の堆積であること、遺物に破碎・散布(783の須恵器大甕)や坏部切り離し(778の高坏脚部)が認められること、さらに768~783には顕著な時期差を認め難いことから、本住居が人為的に短期間で埋め戻された可能性は高いものと判断できる。

S B 204〔第142~145図、図版53・58-2・59〕

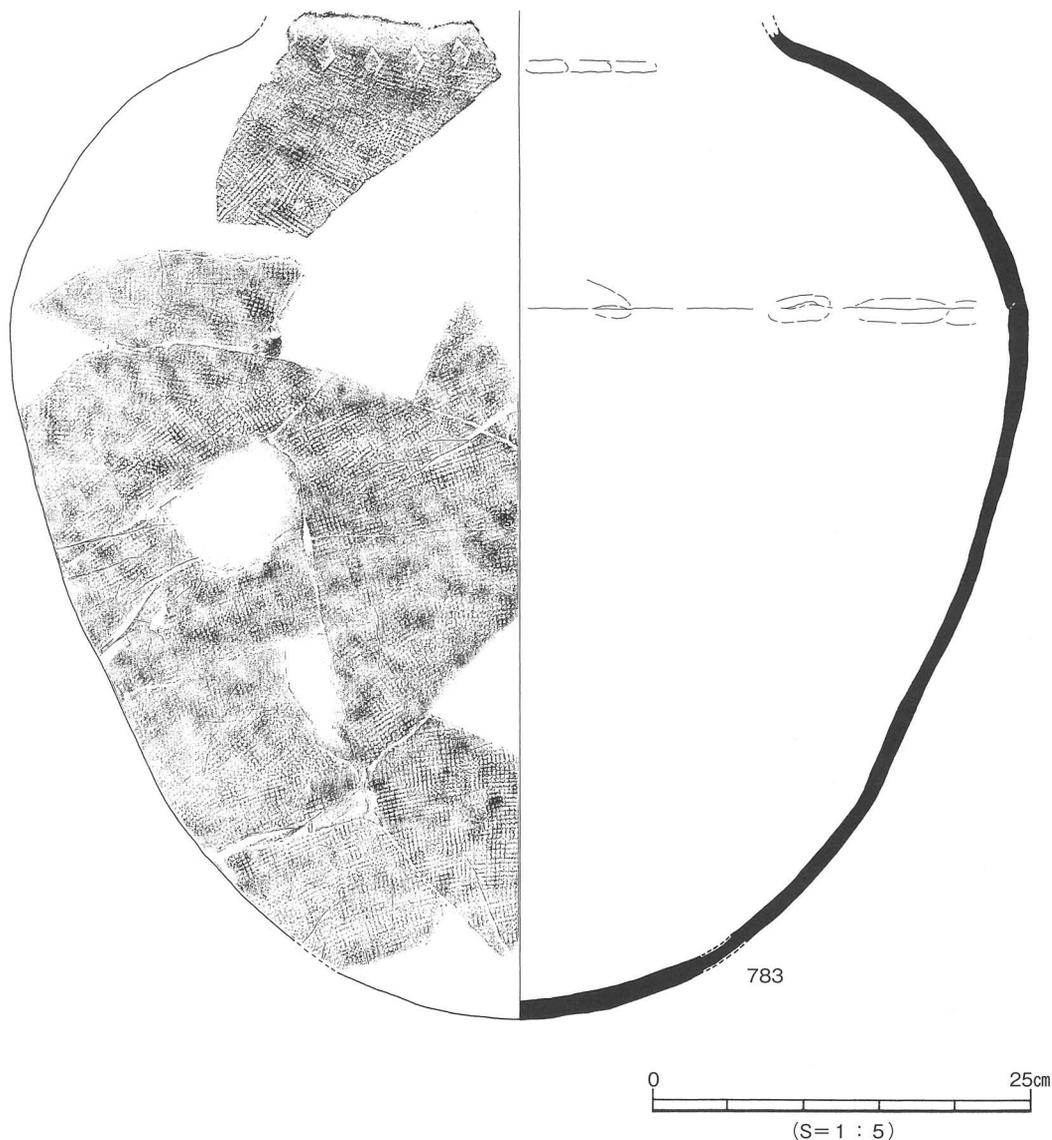
Ⅱ区北東隅のG6・7、H6・7区に位置し、S B 211を切る。調査区北壁を観察する限り、3層と遺構埋土との前後関係は判然としなかったものの、先述したように隣接する地点の調査成果から本遺構は3層の堆積過程で構築された可能性が高いものと考えられる。

平面形態は方形を呈し、長軸方向は東西からやや南に振れる。規模は長軸4.0m、短軸3.4m、検出



第140図 S B 208出土遺物実測図(1)

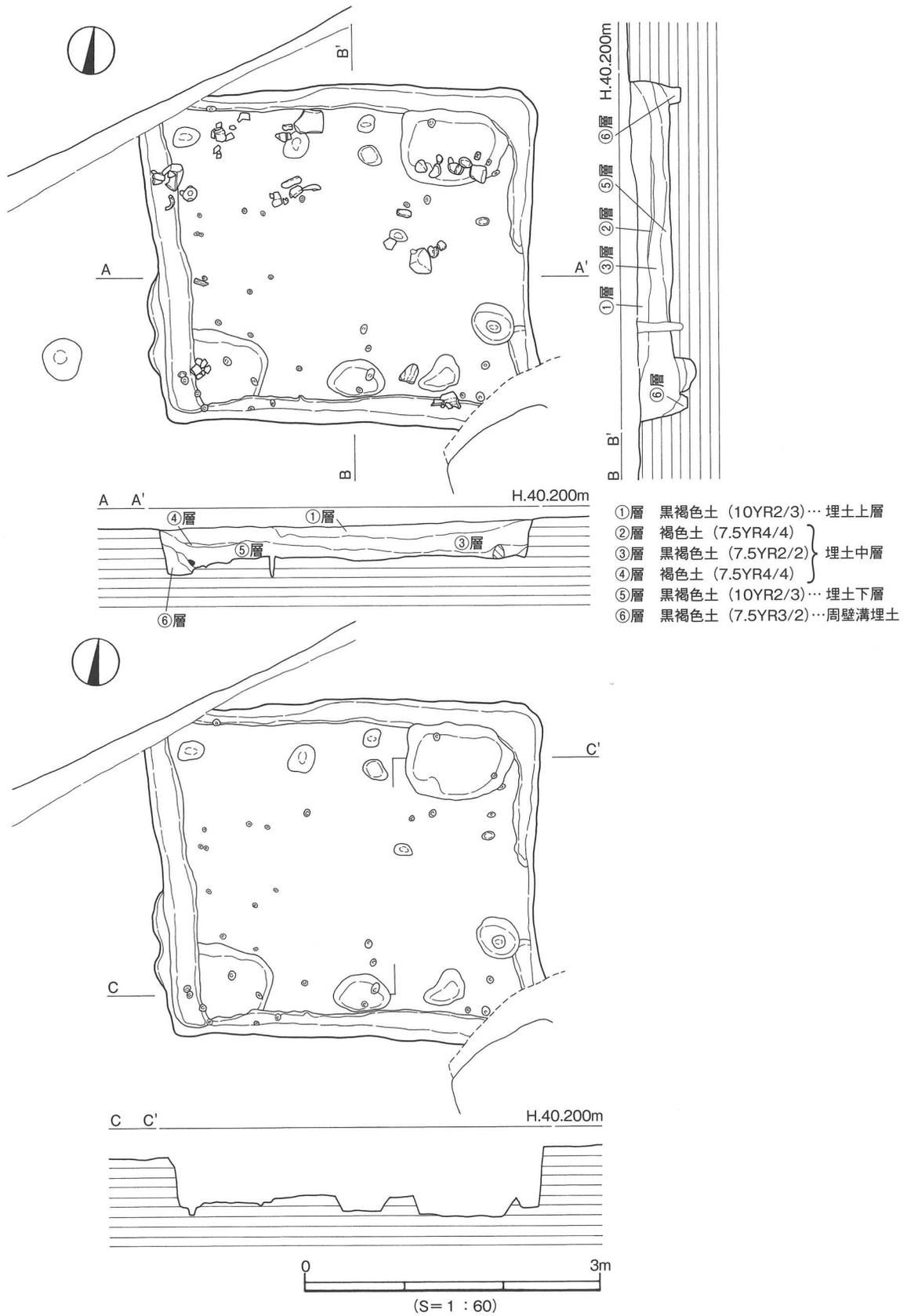
面からの深さ40~60cmを測り、相対的に遺構の遺存は良い。検出時の埋土は黒褐色土 (10Y R2/3) と (7.5Y R2/2) の二層で、焼土ブロックや炭化物粒は認められず、遺物も全くみられなかった。埋土は六層に大別可能で、①層は黒褐色土 (10Y R2/3)、②層は褐色土 (7.5Y R4/4)、③層は粘性がある黒褐色土 (7.5Y R2/2)、④層は褐色土 (7.5Y R4/4)、⑤層は黒褐色土 (10Y R2/3) で、ブロック状ににぶい黄褐色土 (10Y R4/3) が混じる。⑥層は黒褐色土 (7.5Y R3/2) である。⑥層の周壁溝埋土を除き、①~⑤層は住居中央では水平に堆積する傾向が見て取れる。住居埋土は便宜的に①層を上層、②~④層を中層、⑤層を下層と呼称する。



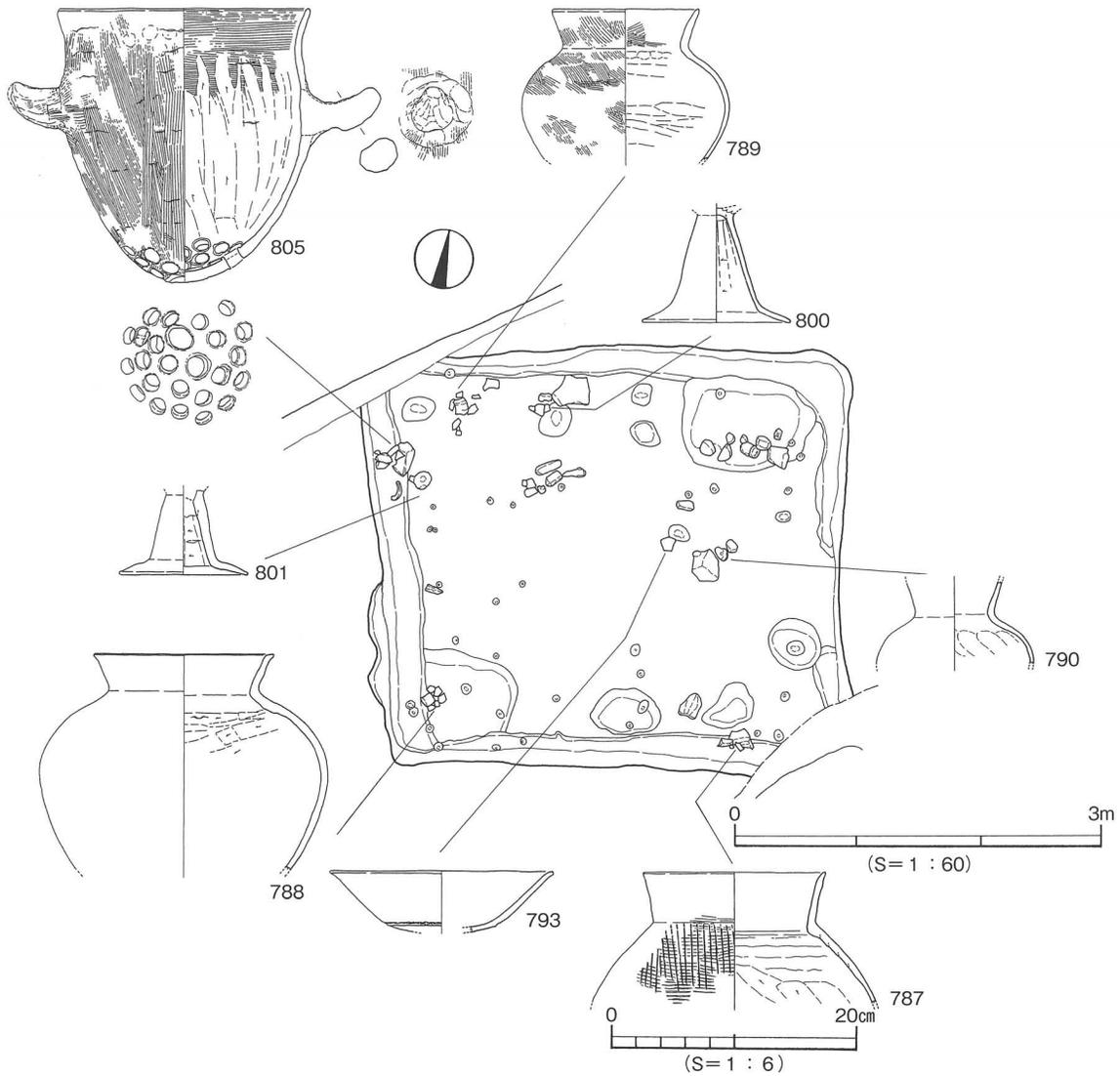
第141図 SB208出土遺物実測図(2)

調査では十文字にセクションベルトを設定し、北西部を①区、北東部を②区、南東部を③区、南西部を④区として精査を始めた。出土遺物は須恵器片を除いて埋土上層には認められず、中層以下からまとまって確認された。すなわち、②区と③区の③層下位から土師器の甕787と弥生土器底部片785が出土し、①区の⑤層からは土師器がまとまって確認された。なお、完存に近い土師器の甕805は①区の⑤層下位において傾きながらも据え置かれた状態で出土し、その傍らからは土師器の高坏801がほぼ同一レベルで確認されている。なお、この高坏は坏部が切り離されており、倒立した状態で出土している。これは、先述した甕とは対照的な遺存と出土状況である。なお、土師器とともに出土した多数の拳大の礫は、出土レベルが土師器とほぼ同一であることから、意図的に据え置かれた可能性がある。②区で検出された付帯施設の土坑はその検出時に拳大の礫が列をなしていたことから、これらも意図的に据え置かれた蓋然性が高いものと理解しておきたい。

住居内には周壁溝と土坑の付帯施設が伴い、これらは⑤層除去後に検出したものである。周壁溝は幅20~30cm、深さ6~10cmを測る。住居東壁の中央では掘り方が途切れることを確認している。なお、



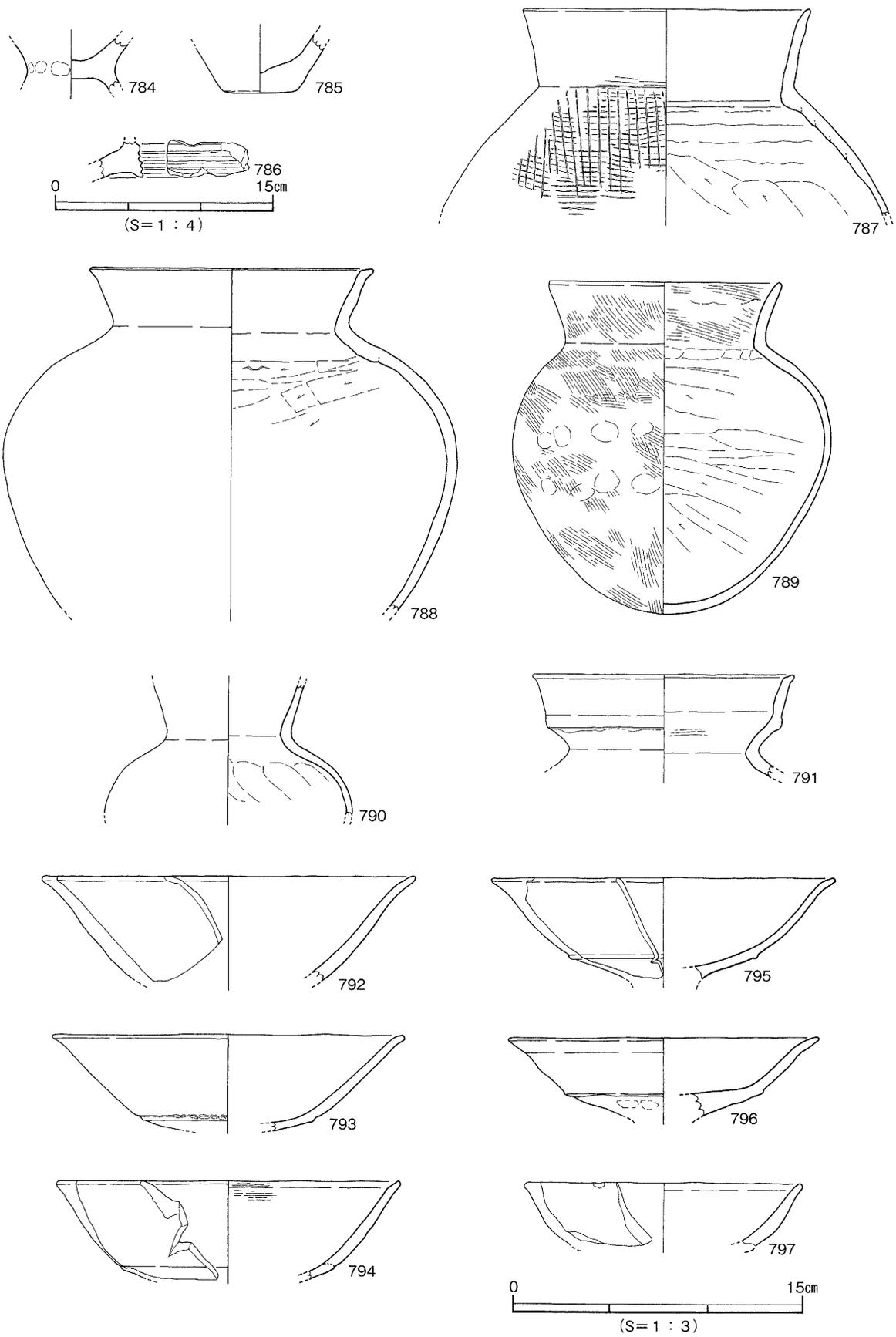
第142図 S B204測量図



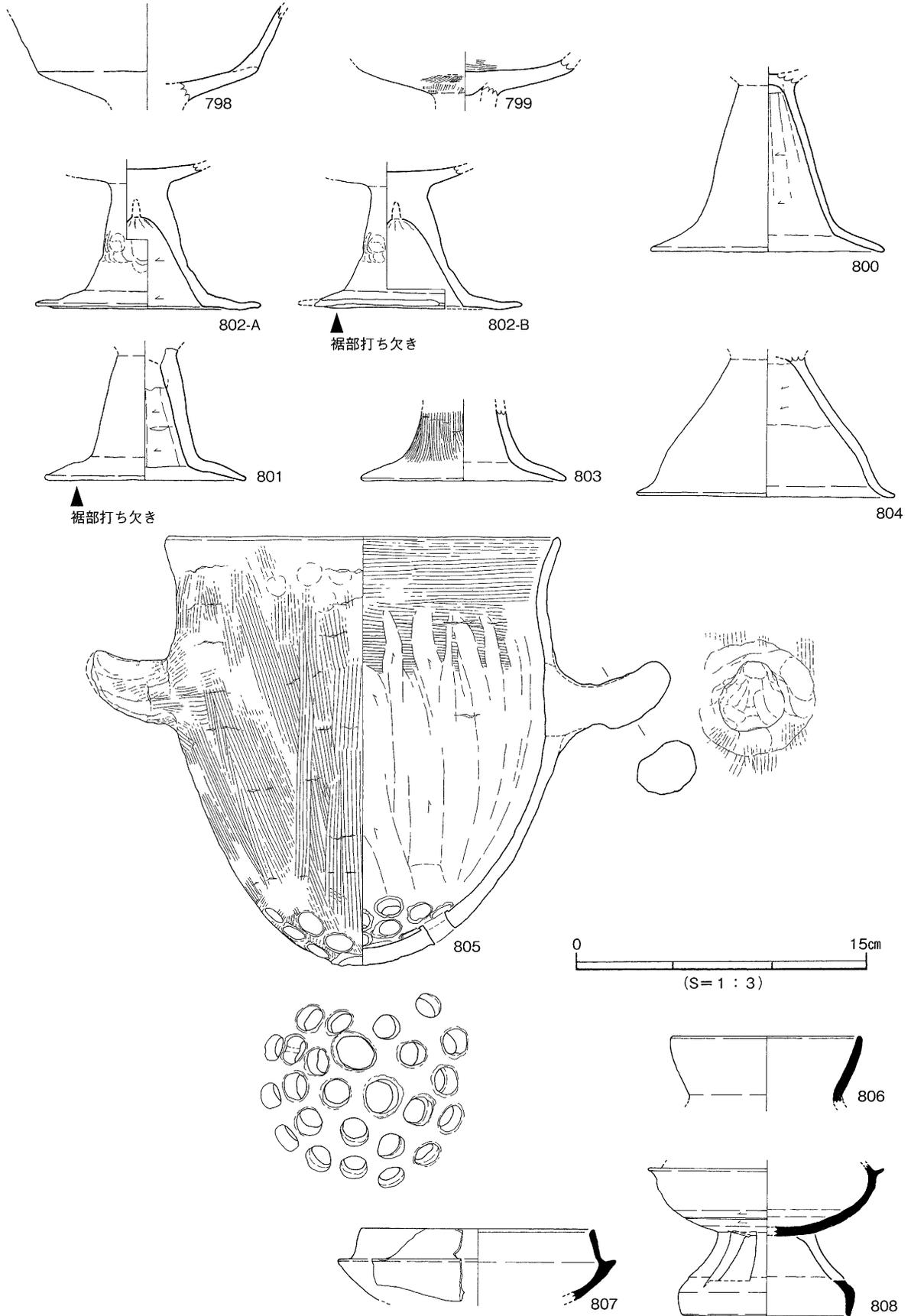
第143図 S B 204遺物分布図

柱穴は多数検出したものの、主柱穴の配置を確定するには至っていない。さらに、直径4～8cm程度で10cmに満たない小振りの柱穴が床面中央を除いて多数分布することを確認しており、これらも上屋を支える構造物と関係するものと考えられ、注意を要する。なお竈の存在や痕跡を示唆する粘土や粘質土、さらに焼土や炭のブロックは未検出であることから、本遺構には竈が造り付けられていなかったものと理解できる。

出土遺物（784～808） 784～786は弥生土器である。本住居に直接伴うものではない。787～805は土師器で、これらが本住居に直接伴う遺物である。787は③区南壁付近の③層下部出土の広口壺である。口縁～頸部の2/3が遺存し、口径14.5cmを測る。体部には1.2cm前後の粘土紐の輪積みが看取でき、調整は外面に横方向の平行タタキが観察される。788は④区の⑤層出土。口縁～頸部の1/5が遺存し、復元口径14.6cmを測る。口縁部は鋭く外反し、口端は短く外に屈曲する。789は①区の⑤層中位出土。体部は扁球形状を呈し、外面は縦～斜位方向のハケ目調整、内面は指おさえを施す。口径11.8cm、残高17.0cmを測る。790は②区中央寄りの床面直上からの出土で、上半部の大半を留めるものの、口端

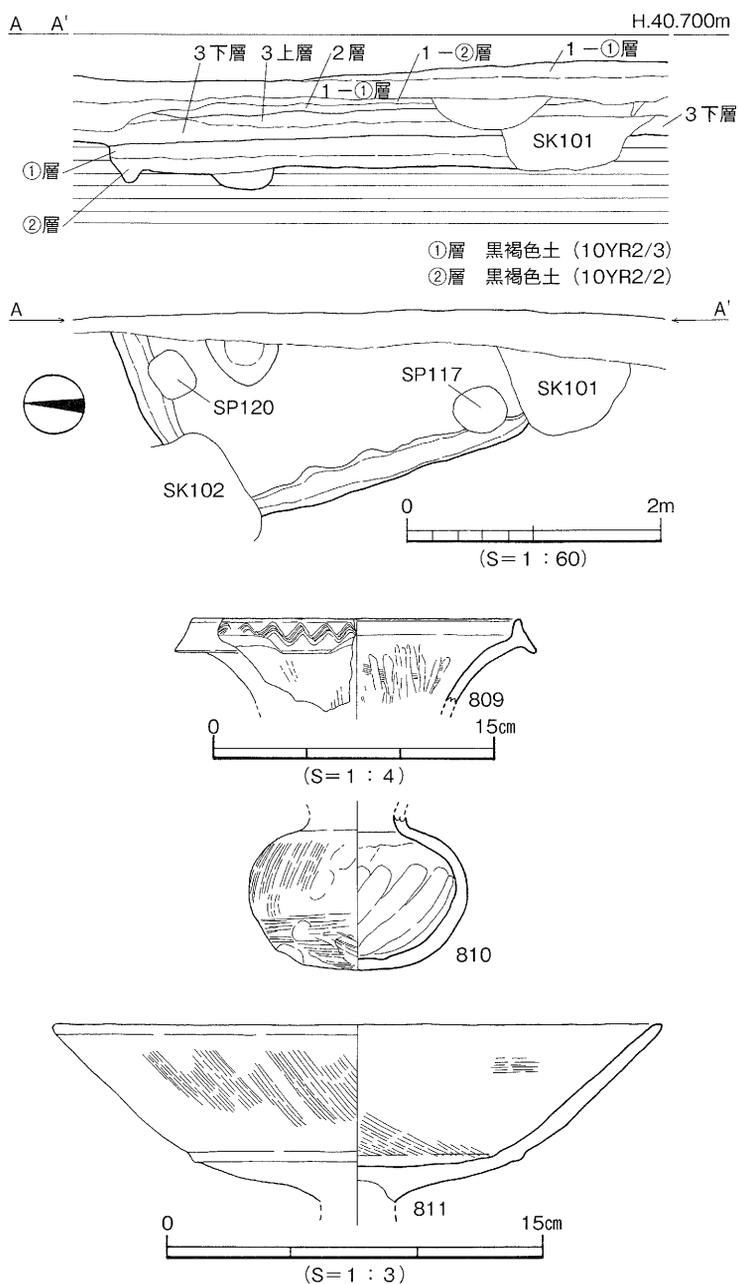


第144図 S B204出土遺物実測図(1)



第145図 S B204出土遺物実測図(2)

部を欠く。先述した789の小型品で、器面の剥落が著しい。791は②区中層出土の二重口縁壺の口縁部小片で、1/4の遺存である。頸部は短く外反し、その上にやや直立気味に立ち上がる口縁が取り付く。792~799は高坏の坏部、800~804は高坏の脚部である。793は②区床面直上出土の口縁部片で、1/4の遺存。口縁部はほぼ直線的で立ち上がり、口端がわずかに外反し、復元口径は18cmを測る。800は①区床面直上出土で裾の一部を欠く。脚部は直線的に「ハ」字形に開き、裾部は外方の斜位に屈曲して開き、その内面には稜線が認められる。801は後述する甑に接して①区の⑤層下位から出土した。裾端の一部が打ち欠かれている。脚部は短く「ハ」字形に開く。802は②区中層出土で、裾端の大半が打ち欠かれている。坏部はごく一部がみられるにすぎない。804は③区中層出土で、約1/3の遺存である。脚部は大きく開き、裾は極端に短くわずかに外反する。遺存の良い内面は上部がケズリ、下部は丁寧な横ナデが観察される。805は801の高坏脚部に接するように①区の⑤層下位から出土した甑。口縁部と胴部上半の一部をわずかに欠く。口縁はわずかに外反



第146図 S B 101測量図及び出土遺物実測図

し、胴部はあまり張らずに丸底へ至る。底には蒸気孔25孔が焼成前に穿たれている。2個のやや大振りの孔を取り囲むように、小振りの孔が2~3列で巡る。2個一對の把手は胴部のやや上位に差し込むように取り付けられ、調整は外面が縦方向のハケ目、内面は横方向のハケ目を施した後に下半をケズっている。外面の1/6には黒斑が認められ、法量は口径20cm、器高22.2cmを測る。

806~808は須恵器である。これらは②区と③区の上層から出土しており、本住居には直接伴わない遺物の可能性が高いと判断した。

時期：構築面と遺物とから、S B 204は古墳時代中期前葉に機能を停止したと考える。注目されるのは、埋土の堆積と遺物の出土状況及び遺存である。埋土は水平基調の堆積が認められ、遺物には完

形据え置き（805の甑）や一部打ち欠き（801と802の高坏）がみられる。これらを総合すると、本住居は、廃絶後に自然埋没によって遺物と土とが流入した可能性は低いと判断せざるを得ない。遺構埋土のうち、少なくとも下～中層までは人為的に短期間で埋め戻された可能性が高く、その過程で土師器の一群を様々な形（完形据え置きや一部打ち欠き等）で供献したと推測される。このような理解に立脚すれば、787～805の土師器に対しては、一定の一括性が保障されることとなる。このことから、良好な当該期の土師器資料に恵まれない当平野においては、本調査事例が基準資料のひとつに位置付けられる可能性は高い。

S B 101〔第146図〕

I区東端部のL10、M10・11区に位置し、S K 101・102に切られる。I区東壁のさらに東へ続くことを確認しているが、I・II区間には現在用水路が南北方向に通っていた。野外調査期間中、周辺の水田に必要な農業用水を供給するため、この用水路を寸断することができなかった。したがって、I・II区間を調査するには至らず、本住居の規模を確定することはできなかった。調査区東壁を観察する限り、3層と遺構埋土との前後関係は判然としなかったものの、先述したように隣接する地点の調査成果から本遺構は3層の堆積過程で構築された可能性が高いものと考えられる。平面形態は方形を呈する可能性があり、規模は東西1.6m以上、南北2.6m以上、検出面からの深さ20～26cmを測る。検出時の埋土は黒褐色土（10Y R 2/3）で、遺物はみられなかった。埋土は二層に大別でき、①層は黒褐色土（10Y R 2/3）、②層は黒褐色土（10Y R 2/2）である。

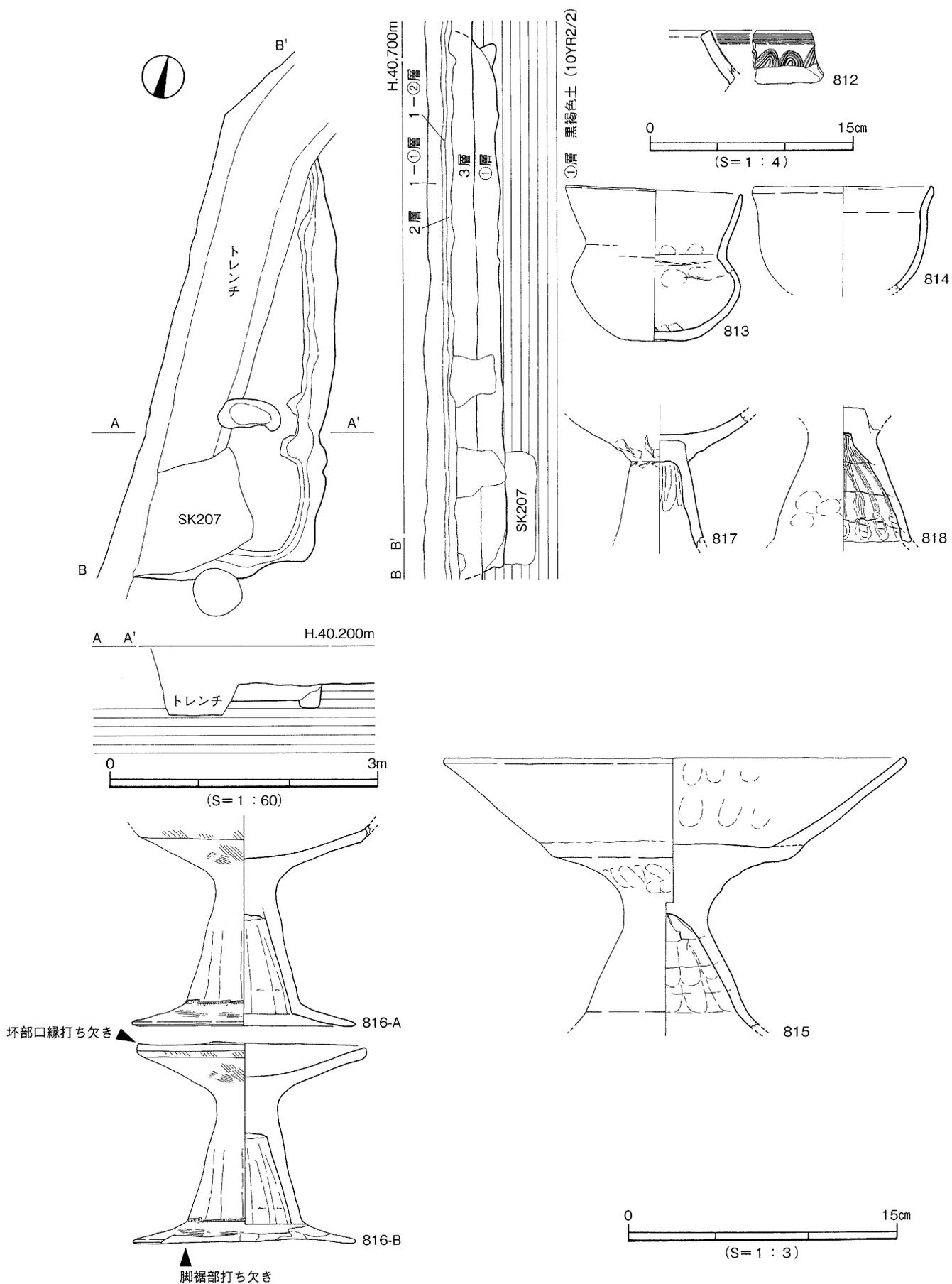
遺構内に周壁溝と土坑はみられるものの、主柱穴は確認できない。周壁溝は幅20～30cm、検出面からの深さ8cmを測り、住居床面にて確認している。土坑①は平面形態が隅丸形状とみられ、検出長40cm、深さ16cmを測る。遺物は住居南半からわずかに出土した。

出土遺物（809～811） 809は弥生土器で、口縁部が外反し広口となり、口端は垂下するタイプの長頸壺である。810と811は土師器である。810は小型丸底壺で、全体の1/2が遺存し口縁部は欠く。肩部は張り、体部が扁球形を呈する。811は高坏の坏部で、1/3の遺存である。口縁部は外傾し直線的に長く、口端は丸く収まる。復元口径24cmを測り、大形品に近いサイズである。焼成は良好で、色調は内外面ともに橙色（2.5Y R 6/6）で、外面にはにぶい橙色（7.5Y R 7/4）が一部に認められる。

時期：構築面と遺物とから、S B 101は古墳時代中期前葉には機能を停止したと考える。本住居の遺存が不良で、出土遺物も数少ないことから、住居廃絶時に伴う人為的埋め戻しや土師器等を用いた特徴的な供献行為が執行されたか否かについては差し控えておきたい。なお、出土遺物809の弥生土器は直接本住居に伴うものではない。ただし、この遺物は弥生時代後期終末に時期比定されることから、本住居周辺には当該期の生活関連遺構が展開する可能性を認めることができる。

S B 212〔第147図、図版54・60〕

II区北西部のK10区に位置し、S K 207を切る。住居の大半は調査区外へ続き、平面形態は方形あるいは長方形を呈するものとみられる。調査区東壁を観察する限り、3層と遺構埋土との前後関係は判然としなかったものの、周辺の調査成果から本遺構は3層の堆積過程で構築された可能性が高いものと考えられる。規模は東西2m以上、南北6m、検出面からの深さ26cmを測る。埋土は黒褐色土（10Y R 2/2）で、1～2mm大の白色砕礫を含み、土の締りに欠ける。遺構内に周壁溝と土坑はみられる



第147図 S B212測量図及び出土遺物実測図

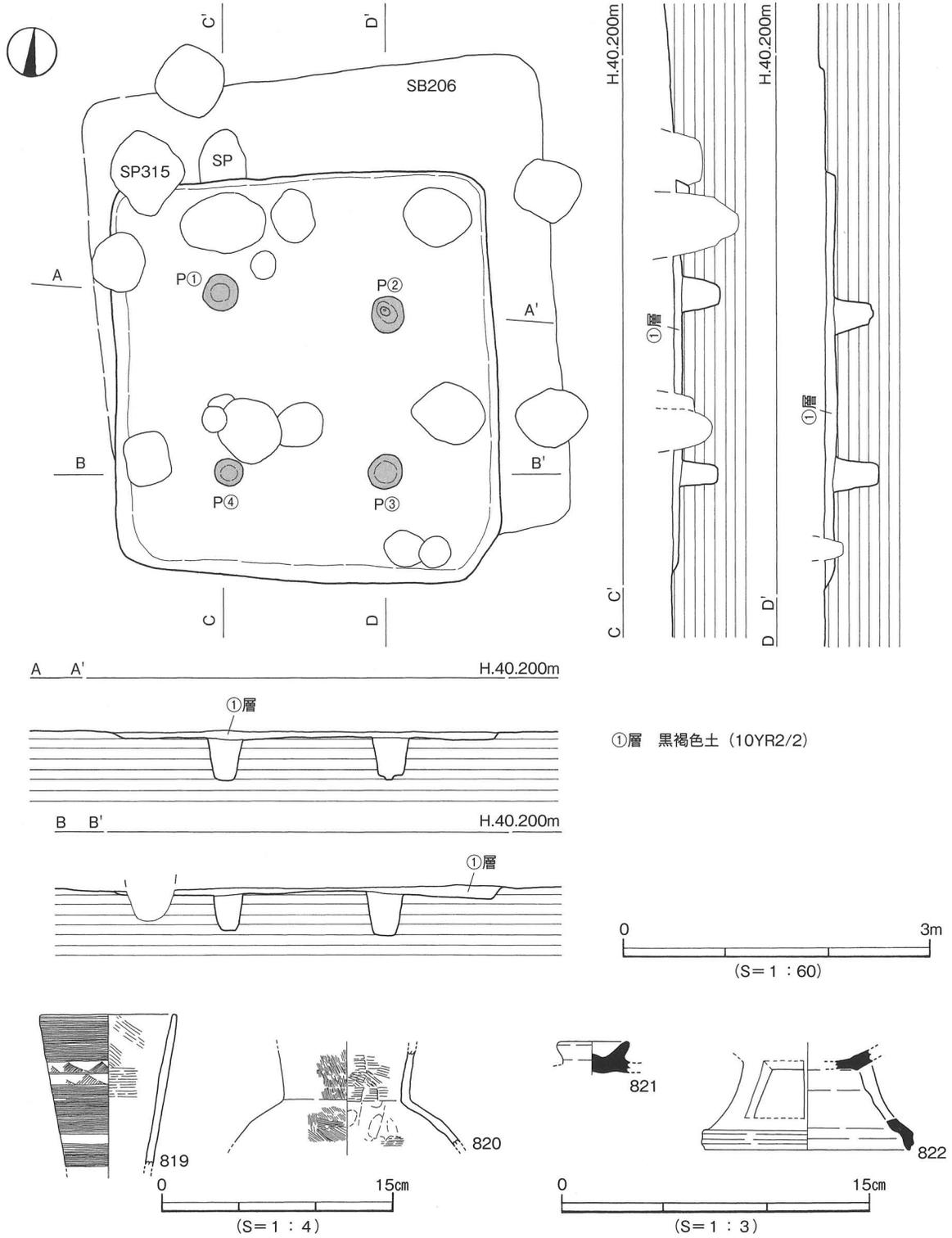
ものの、支柱穴は確認できない。周壁溝は幅16~40cm、検出面からの深さ6cmを測り、住居床面にて確認した。土坑は平面形態が不整楕円形状を呈する。遺物は埋土下位から土師器の埴と高坏、床面直上から高坏の大形品、土坑の埋土中位からは小型丸底壺の完存品が横倒しの状態で出土した。

出土遺物 (812~818) 812は弥生土器で、複合口縁壺の口縁部小片。813は完存品の小型丸底壺で、口縁部に認められる欠損は野外調査の遺物取り上げ時に生じたものである。外反度が弱くやや内湾気味の口縁部は長く、胴部高に対して口縁部高の占める比率は64%となる。胴部は扁球形で、底部は丸みのある小さな平底である。口径9.7cm、器高8.4cmを測り、焼成は良好で、外面の一部に黒斑が認められる。814は埴で、全体の1/4の遺存である。口縁部はわずかながら外反し、復元口径9.8cmを測り、外面の一部に黒斑が残る。815~818は高坏。815は坏部を下にして出土した。坏部は打ち欠きにより一部破砕される。一方、脚部は大きく破損するものの、住居検出時には既に脚の一部が露出していたことから、少なくとも裾部は後世の削平によって失われた可能性がある。したがって、本例は完形品に対して口縁の一部に破砕行為を加えた後に逆さに据え置いた事例と評価できる。口縁部は外傾しながら直線的に長く、口端を丸く収める。口径25.5cm、器高14cmを越す大形品で、脚部は大きく「ハ」字形に開き、裾部はわずかに外反するものとみられる。816は坏部の口縁部全てと、脚裾部の1/3を欠く高坏である。調査では据え置かれた状態で出土したことを確認しており、遺物の遺存と出土状況から、本例は完形品に対して一部破砕行為を加えた後に据え置いた可能性が高い事例と評価できよう。坏部を詳細に観察すると、坏部の上位にみられる稜線のやや上位を意図的に破砕することにより口縁部を打ち欠いたことが知れる。同様に脚裾部を観察すると、連続的な剝離を加えることにより裾が打ち欠かれたものと判断される。脚部の形状は「ハ」字形に開き、鋭く屈曲してやや長い裾部が取り付く。屈曲部内面には明確な稜がみられる。817は坏部外底に別造りの脚部を差し込み、坏部内底から薄く粘土を貼り付けることにより接合して仕上げている。818は住居埋土下位から出土した脚部で、裾は打ち欠きにより遺存しない。幅1.7cm程度の粘土紐を巻き上げて、絞りと指おさえにより整形し、さらに外面をナデにより仕上げている。大きく「ハ」字形に開き、脚部の低い器形は815に類似しており、本資料が大形品に伴う可能性が考えられる。

時期：構築面と遺物とから、S B 212は古墳時代中期前葉には機能を停止したと考える。注目されるのは遺物の出土状況である。遺物にみられる完形品の横倒し（小型丸底壺813）、一部打ち欠き後の据え置き（高坏816）や倒置（高坏815）は本住居廃絶後に執行された土師器の供献行為の存在を示唆している。床面検出の土坑内からは埋土中位にて横倒しの状態で小型丸底壺813を確認したが、割れずに完形品であったことを積極的に評価し、供献された土師器を強く意識した上で本住居が人為的に埋め戻された可能性を認めておきたい。このような理解に立脚すれば、813~818の土師器は一定程度の一括性が保障されることとなり、良好な当該期の土師器資料に恵まれない当平野においては、本調査事例が基準資料のひとつに位置付けられる可能性がある。なお、出土遺物にみられる812の弥生土器は直接本住居に伴うものではなく、先述した人為的埋め戻しの過程で混入した遺物と判断される。

S B 207 [第148図、図版56-1]

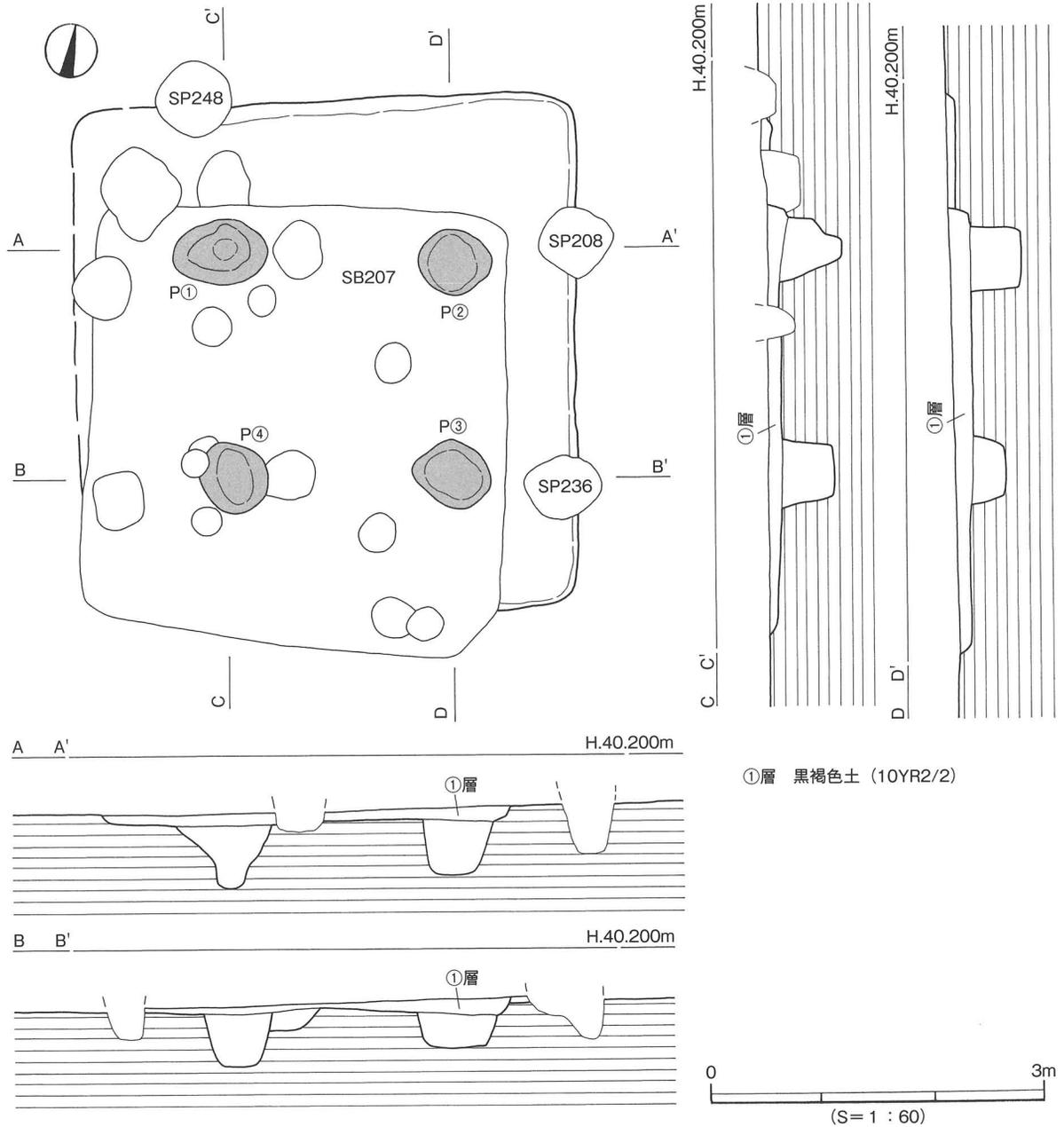
II区中央部のI 8・9区に位置し、S B 206を切る。平面形態は方形を呈し、長軸が真北からやや西に振れる。規模は東西3.7m、南北4m、検出面からの深さ4~12cmを測り、遺存が悪い。埋土は黒褐色土(10Y R 2/2)で、粘性に富む。支柱穴P①~④の4基を確認し、平面形態が円形を呈し、



第148図 SB207測量図及び出土遺物実測図

規模は直径28~36cm、深さ30~40cmを測る。主柱穴以外の付帯施設は未検出である。遺物は埋土中から弥生土器の細長頸壺と広口壺片、須恵器の坏蓋と高坏脚片が出土した。

出土遺物(819~822) 819と820は弥生土器、821と822は須恵器である。822は低脚に長方形の透かしがみられる。

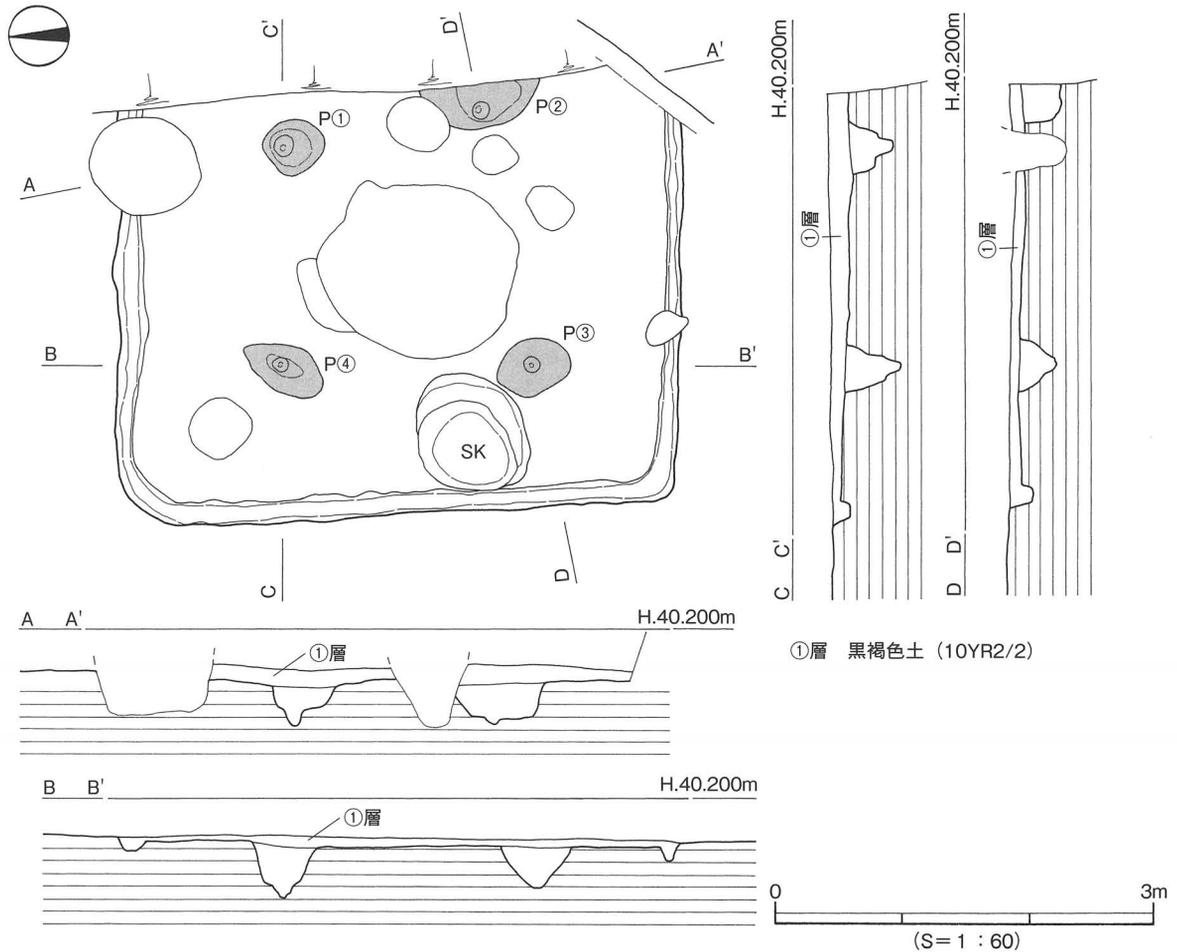


第149図 S B 206測量図

時期：構築面と遺物とから、S B 207は古墳時代中期末～後期初頭には機能を停止したと考える。本住居の遺存が不良で、出土遺物も数少ないことから、住居廃絶時に伴う人為的埋め戻しや須恵器等を用いた特徴的な供献行為が執行されたか否かについては不詳といわざるを得ない。なお、出土遺物の弥生土器は直接本住居に伴うものではないと判断される。ただし、この遺物は弥生時代後期後葉に時期比定されることから、本住居周辺には当該期の生活関連遺構が存在する可能性が考えられよう。

S B 206〔第149図、図版56〕

Ⅱ区中央部のⅠ8・9区に位置し、S B 207に切られる。検出時の時点で住居西壁の輪郭は不明確で判然としなかった。平面形態は方形を呈し、長軸が真北からやや西に振れる。規模は一辺4.5m、



第150図 S B 203測量図

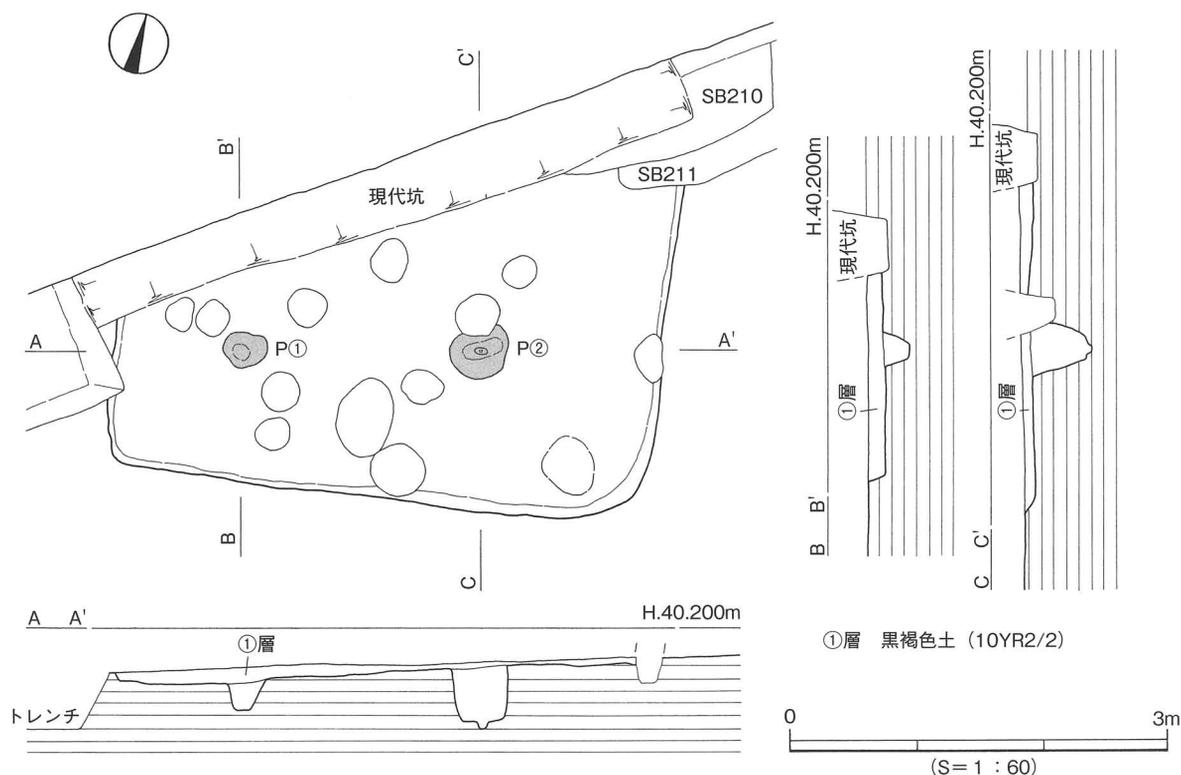
検出面からの深さ4～18cmを測り、遺存は悪い。埋土は黒褐色土（10Y R 2/2）の単一層で、焼土や粘質土、さらに炭化材等は未検出である。主柱穴はP①～④の4基を確認した。主柱穴の平面形態は長楕円形を呈し、規模は長軸65～84cm、深さ30～54cmを測り、柱は抜き取られている。主柱穴以外の付帯施設は未検出である。時期決定に有効な遺物は認められなかった。

時期：遺構の重複関係からS B 207に後続すること、S B 207の上限が古墳時代中期末～後期初頭以降と判断される。なお、主柱穴の全ての柱が抜き取られていることから、住居廃絶時には上屋が撤去された状況が復元できよう。

S B 203〔第150図、図版55-2〕

Ⅱ区東端のG 8区に位置し、調査区外へ続く。平面形態は方形を呈する可能性があり、規模は東西4.5m、南北3.3m以上、検出面からの深さ6～20cmを測る。埋土は黒褐色土（10Y R 2/2）の単一層で、主柱穴はP①～④の4基を確認した。主柱穴の平面形態は長楕円形を呈し、柱は抜き取られている。主柱穴以外の付帯施設として、幅16～24cmの周壁溝と、西壁沿いに土坑を検出している。帰属時期を決定するのに有効な遺物は出土しなかった。

時期：時期決定に有効な遺物がみられず、また、遺構に重複関係も認められないことから、ここでは古墳時代の竪穴式住居址として報告することに留めておきたい。



第151図 S B 205測量図

S B 205〔第151図、図版55-1〕

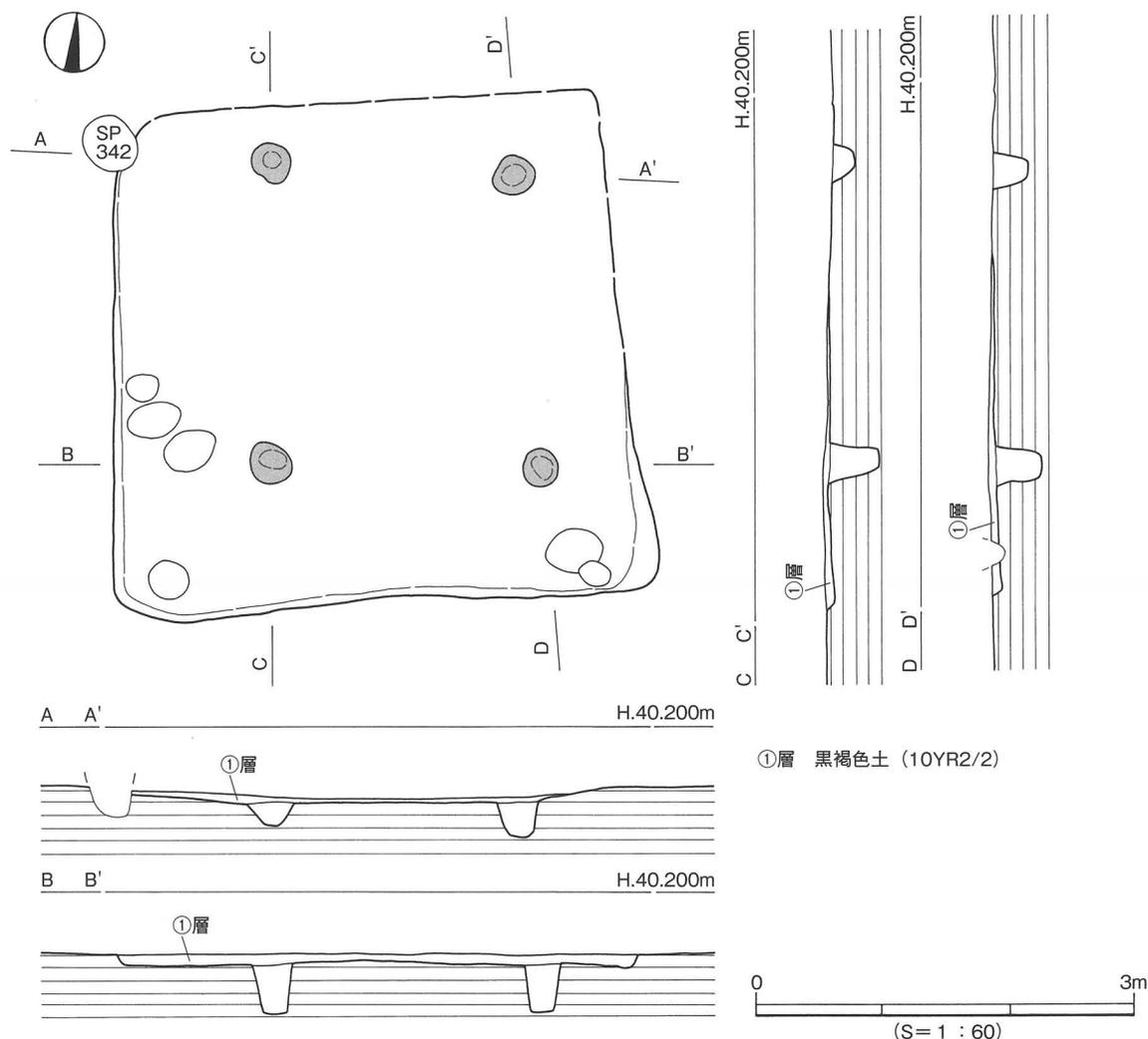
Ⅱ区北部の東寄り、H 7・I 7区に位置し、調査区外へ続く。S B 210・211に切られる。平面形態は方形を呈する可能性があり、規模は東西4.3m、南北2.9m以上、検出面からの深さ2~12cmを測り、遺存は悪い。埋土は黒褐色土(10Y R2/2)の単一層で、支柱穴は住居の南寄りでP ①②の2基を確認した。調査区外へ続くことが予想される住居北半部にも支柱穴が配置するものとみられる。確認した2基の支柱穴の平面形態は不整円形を呈し、規模は直径34~47cm、深さ20~50cmを測る。支柱穴以外の付帯施設は未検出である。帰属時期を決定するのに有効な遺物は出土しなかった。

時期：時期決定に有効な遺物がみられないが、S B 210・211に切られることを根拠として、これら住居より先行することは明らかである。ただし、その時期については保留しておきたい。

S B 209〔第152図、図版51-2〕

Ⅱ区西端近くのJ 9・10、K 9・10区、S B 208の北40cmに位置する。住居の北東半部は遺存が悪く、痕跡的に確認されたに過ぎない。平面形態は方形を呈する可能性が高く、規模は東西4.08m、南北3.94m、検出面からの深さ2~6cmを測る。埋土は黒褐色土(10Y R2/2)の単一層で、支柱穴はP ①~④の4基を確認した。このうち、P ①②はやや北に寄りすぎている感がある。支柱穴の平面形態は概ね円形を呈し、規模は直径30~36cm、深さは20~40cmを測る。支柱穴以外の付帯施設は未検出である。帰属時期を決定するのに有効な遺物は出土しなかった。

時期：時期決定に有効な遺物がみられず、また、遺構に重複関係も認められないことから、ここでは古墳時代の竪穴式住居址として報告することに留めておきたい。

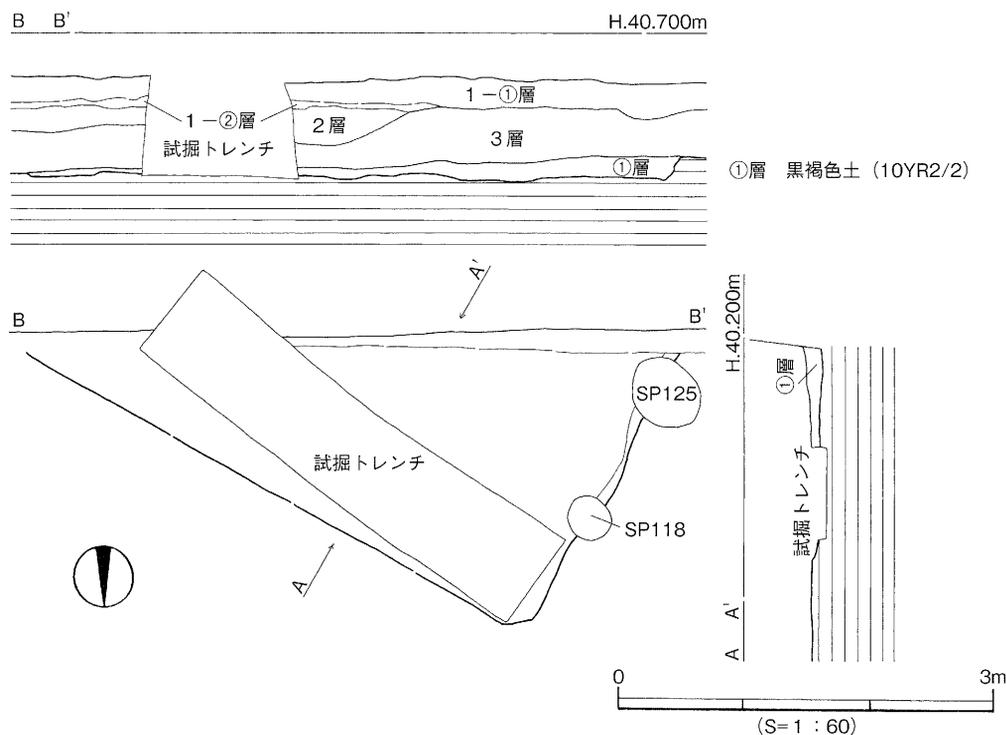


第152図 S B 209測量図

S B 102〔第153図〕

I区南壁中央のM11、N11区に位置し、調査区外へ続く。住居の遺存が悪く、わずかに痕跡的に確認された部分があり、SP 118・125に切られる。平面形態は方形あるいは長方形を呈する可能性があり、規模は、検出長が東西4.5m、南北2.5m、検出面からの深さ5～15cmを測る。埋土は黒褐色土（10YR2/2）で、粘性があり、1mm大の白色細礫群を少量含む単一層である。野外調査では、基本土層の3層を除去して、4層上面で遺構の輪郭を確認することはできた。ただし、住居の遺存が極めて不良であることと、周辺における既往の調査成果とを合わせて検討したところ、本住居の構築面が4層上面であった可能性は低いと判断した。調査区南壁で判然としていないものの、3層の堆積過程で本住居が構築された可能性はある。なお、住居内においては支柱穴を含め付帯施設は未検出である。埋土精査においては帰属時期を決定するのに有効な遺物は出土しなかった。なお、試掘時のトレンチが住居内に位置していたが、住居の帰属時期を特定できる遺物は出土していない。

時期：時期決定に有効な遺物がみられないことから、ここでは古墳時代の竪穴式住居址として報告することに留めておきたい。



第153図 S B102測量図

(2) 土坑 (SK)

SK101 [第154図、図版56-2・60]

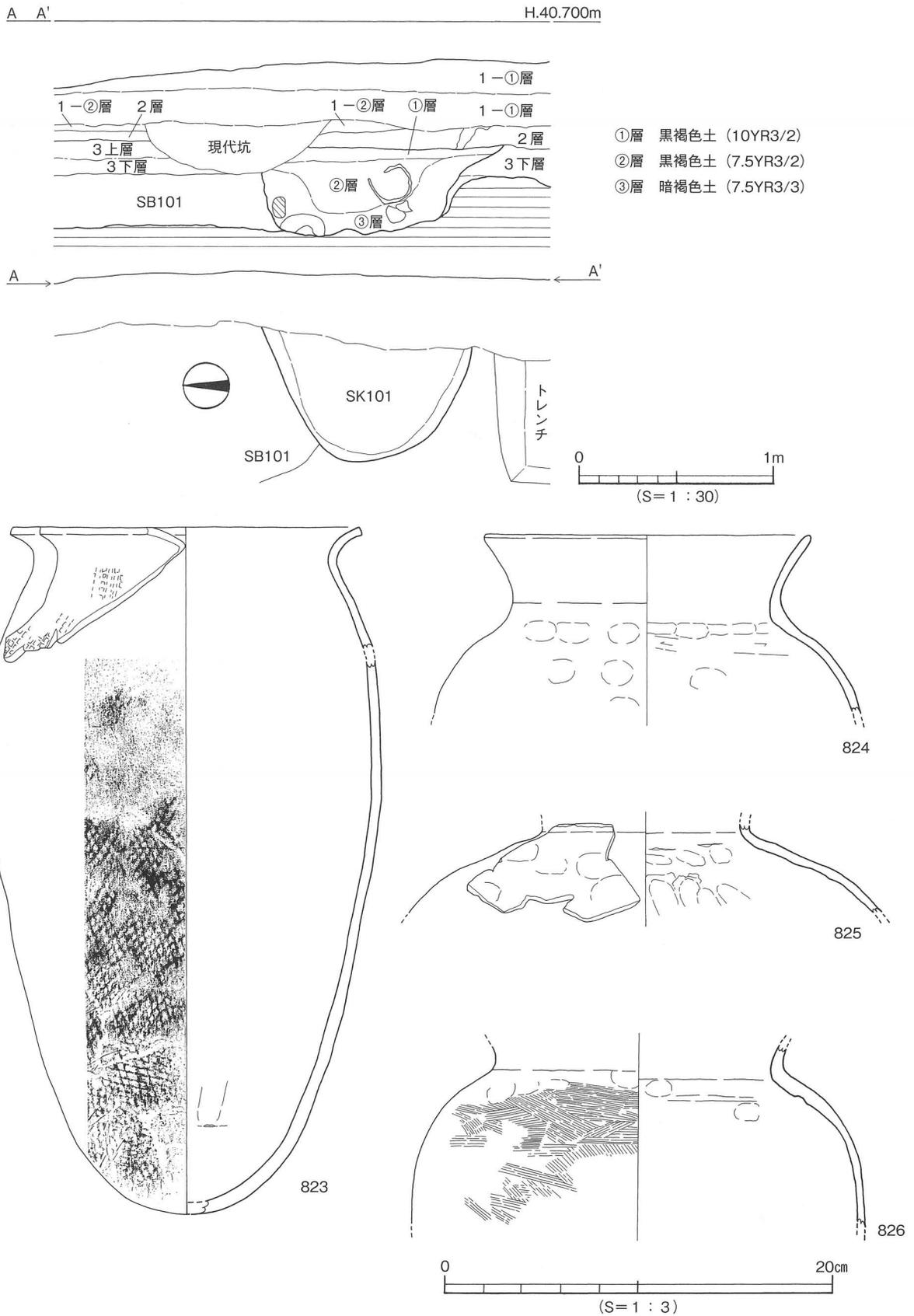
I区東壁中央のL11、M11 5区に位置し、SB101の南西部を切り、遺構は調査区外へ続く。調査区東壁を観察する限り、本遺構の構築面は3下層上面で、SB101の機能停止後に堆積した3下層を切り込んで構築されたものと判断できる。平面形態は判然としないが、円形あるいは長楕円形を呈する可能性がある。規模は、検出長が長軸0.96m、短軸0.8m、検出面からの深さは最深で45cmを測る。埋土は三層に大別でき、①層黒褐色土(10Y R3/2)、②層黒褐色土(7.5Y R3/2)、③層暗褐色土(7.5Y R3/3)である。このうち、②層の堆積には注目すべきものがあり、③層が窪む箇所に厚く堆積する状況が読み取れる。遺物は②③層から土師器の一群が出土しており、とくに②層からは完形に復元される土師器の甕がみられる。野外調査では断面での観察に終始しているが、これらの観察所見からは、③層が形成された後に人為的に掘削して土坑状の窪みを構築し、そこに土師器の長胴甕の完形品を据え置き、②層で埋め戻した状況を復元することも可能である。

出土遺物 (823~826) 823は長胴甕で、口縁部は緩やかに外反し、口端は面取りされる。復元口径18cm、器高35cmを測り、底部は丸底となる。調整は外面に斜格子のタタキ痕、内面は丁寧なナデを施す。824~826の甕は、口縁部が外反し、胴部は球形を呈するものもみられる。

時期：埋土と遺構構築面、さらに遺物からSK101は古墳時代中期前葉に時期比定される。

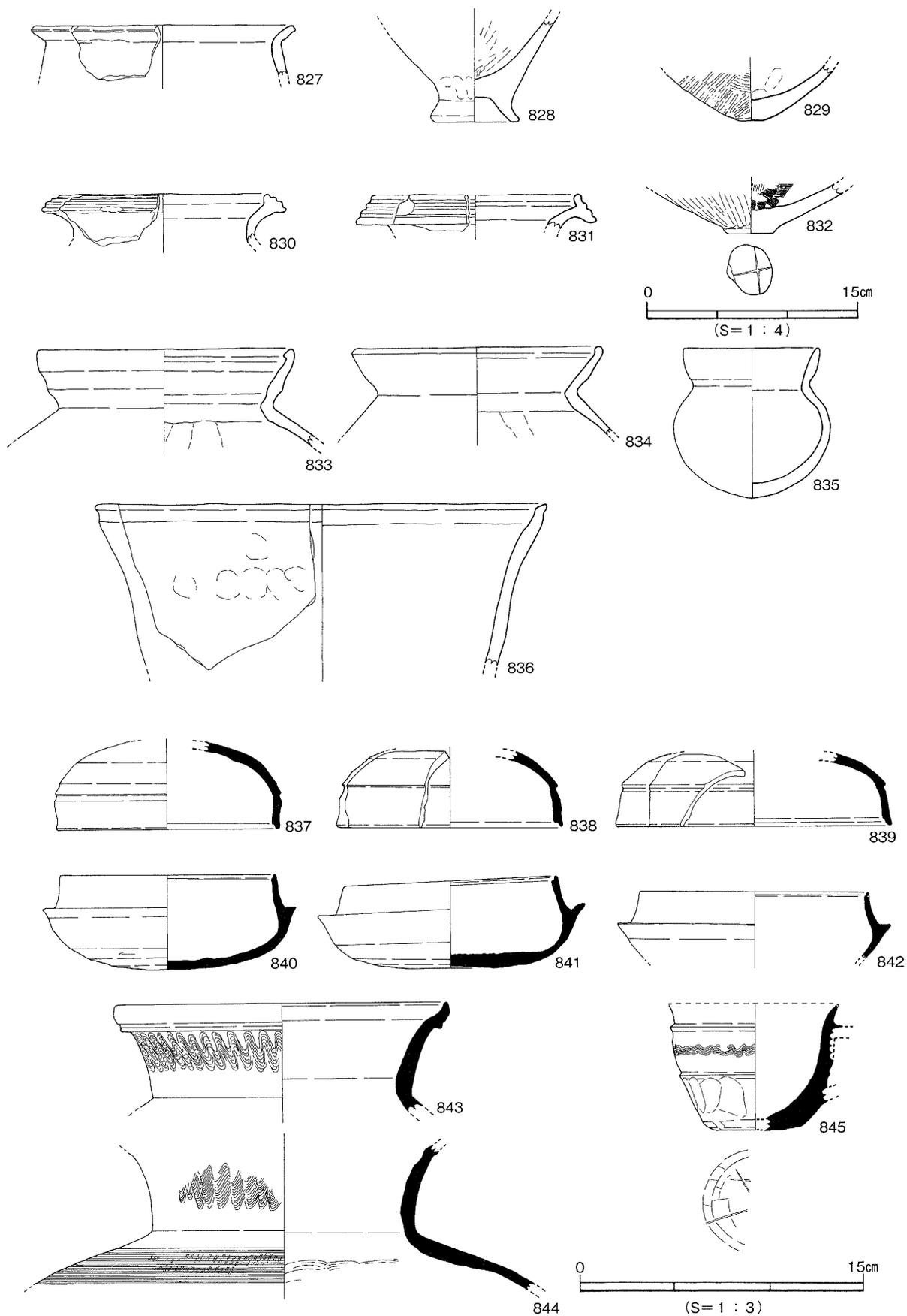
6. 包含層出土の遺物

3層の精査及び遺構検出段階で確認された遺物〔第155図〕を報告する。



第154図 SK101測量図及び出土遺物実測図

包含層出土の遺物



第155図 遺物包含層（3層）出土遺物実測図

弥生土器（827～832） 827～829は甕で、827と828は弥生時代中期後葉に帰属する。830～832は壺である。

土師器（833～836） 833と834は甕で、口端は内面に突出あるいは屈曲する。835は小型丸底壺で、口縁部が短く、外反度も弱い。836は甕とみられる口縁部片である。

須恵器（837～845） 837～839は坏蓋、840～842は坏身である。843は甕で、口縁部が鋭く外傾し、口端は強い横ナデにより内湾し、外面は肥厚する。845は把手付碗で、口縁はわずかに外反し、体部外面にはシャープさに欠ける突線が巡り、その間には稚拙な波状文を施す。下段の突線下には回転ヘラケズリやヘラ押さえがみられるものの、器壁は厚い。なお外底面には直線のヘラ記号が認められる。

7. 小 結

今次調査では、対象地に弥生時代中期後葉と古墳時代中期の竪穴式住居址が構築され、当該期の集落を確認したことが成果の一つに挙げられる。とりわけ、古墳時代中期の住居には相対的に古い段階に遡るものが含まれており、これは当平野における希少事例である。さらに出土した遺物は当該期の土師器編年を考える上で、興味深い遺物群となる。以下、いくつかの注目される項目を取り上げて整理しておきたい。

（1）土層について

今次調査で検出した土層は1～6層で、構成される堆積物から、最下層の6層がかつての河川の氾濫によって堆積した砂質土であると判断される。5層は石手川中流南岸域では「地山」と呼称され、既往の調査では遺構確認面として認知される土層である。今次調査で注目されるのは4層である。4層は粘性の強い褐色土で、本層上面が第二遺構面を形成することが判明したことから、本層を広義の「地山」と認定しておく必要がある。今次調査では本層を対象地全域で検出したことから、今後周辺一帯で確認される可能性は高く、遺構構築面を考える上において鍵となる土層といえる。

（2）弥生時代中期後葉の竪穴式住居址 S B 201について

S B 201では住居規模と出土遺物に対し興味深い知見を得た。すなわち、住居規模が復元直径9 m前後を誇る大型の円形である点である。当該期の住居事例では突出した規模を誇り、大型住居の出現とその契機を考える上で興味深い事例となろう。出土遺物に目を転ずれば、石器資料にサヌカイトと赤色珪質岩がみられ、いずれも打製剥片石器の素材として利用されていることが分かる。器種のなかには楔形石器も含まれている。これら二種の石器素材は当平野で産出せず、サヌカイトは香川県坂出市の金山、赤色珪質岩は愛媛県喜多郡五十崎町（現内子町）の神南山が主要な原石産地である。いずれの素材も剥片石器として利用する目的で搬入されたことは明白であることから、本資料は打製石器素材の流通とその実態を知る上で興味深い事例といえる。また楔形石器が複数点確認されたことから、当該期には本器種が主要器種のひとつに組み込まれていたことは確実である。

（3）古墳時代中期前葉の竪穴式住居址群について

検出した古墳時代と考えられる竪穴式住居址のうち、少なくとも4棟は中期前葉に帰属することが

確認された。これらは一括性の高い遺物を基準として帰属時期を絞り込むことが可能な資料となり、当該期の調査事例に乏しい当平野においては基準資料のひとつになり得る。これらの住居は、形態と規模を基準として二分することが可能である。すなわち、一辺6mを超える大型長方形住居（S B 208・212）と、一辺3～4m程度の小型方形住居（S B 101・204）である。このうち、小型住居はその遺存が比較的良好で、その精査結果からは造りつけの竈が付設されていない可能性の高いことが指摘できた。また、この小型住居からは主柱穴も未検出であることから、上屋の構造を含め、大型住居とは機能の異なる可能性も示唆される。このことから、当該期の住居は形態と規模、さらには構造（機能）の異なる大小2群により構成されていた可能性がある。

（4） 竪穴式住居の廃絶に伴う器を用いた祭祀と埋め戻し行為の執行について

古墳時代中期前葉の遺構、S B 204・208・212では埋土の堆積と遺物の出土状況や遺存とを総合し検討した結果、当該期の精神性を知る上で興味深い知見を得た。すなわち、器を用いての祭祀と人為的な埋め戻し行為が執行された可能性の高いことである。

3棟の竪穴式住居址からは、埋土の水平堆積と、器にみられる各種行為とが確認されている。器にみられる各種行為は、S B 204では土師器甑の完形品据え置き、土師器高坏の坏部切り離しと脚裾部の打ち欠き、S B 208では土師器高坏の坏部切り離し、須恵器大甕の破碎散布、S B 212では土師器小型丸底壺の完形品横倒し、土師器高坏の坏一部打ち欠きと倒置、土師器高坏の坏部切り離しと脚裾の一部打ち欠きなどが該当する。これらはいずれも人為的且つ意図的な行為の所産であり、自然現象や偶然の産物としては認め難い。805や813は完形品で、後者はその出土状況から、完形品が横倒しに置かれた可能性のきわめて高いことが指摘できる。さらにこの遺物が割れずに出土していること、埋土が水平基調の堆積であることから、横倒し後に、遺物（小型丸底壺）を強く意識した上で人為的な埋め戻し行為の執行された可能性が高い。

今次調査では、各種行為の及ぶ器に土師器高坏が共通して用いられることを確認できた点は興味深く、更なる類例の増加が予想される。ただし、用いられる器が土師器の高坏に限定されるのではなく、土師器の甑や小型丸底壺、さらに須恵器の大甕にまで及ぶこと、さらに一部打ち欠きや破碎散布もみられることから、類例の増加とともに、器種の増加や出土状況が多様化する可能性の高いことも考慮しておく必要がある。また、住居の廃絶に伴い器を用いる行為と埋め戻し行為とが密接に関連することが確認された点については、今後も野外調査の過程で検証を繰り返し実施する必要があることを指摘しておきたい。

第10章

樽^{たる} 味^み 高^{たか} 木^ぎ 遺 跡

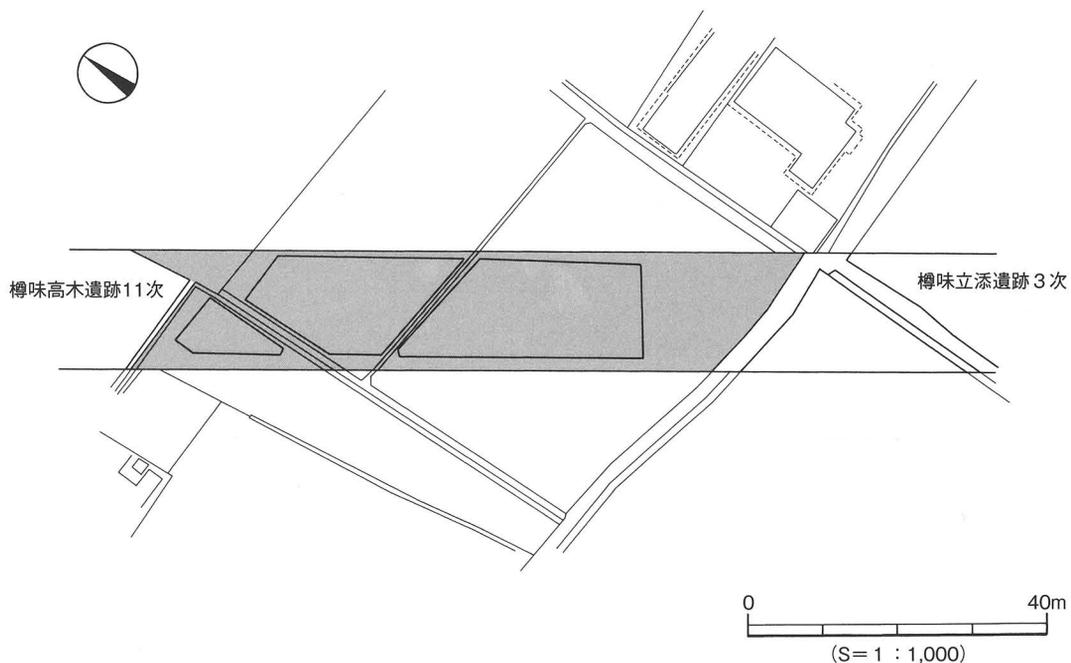
8 次 調 査 地

第10章 樽味高木遺跡 8次調査地

1. 野外調査の経過と方法

発掘調査に先立ち調査事務所と仮設トイレを設置し、発掘機材等の搬入を行う。対象地の周囲には丸杭とトラロープを用いて安全対策を行う。調査区を設定し西側よりⅠ区・Ⅱ区・Ⅲ区と3区画に分けⅢ区は追って返しをすることとした。平成15年8月1日、試掘調査の結果から、重機を使用して表土剥ぎを行う、土層は4層に分層できⅣ層上面にて遺構を確認した。重機での掘削後、作業員を本格的に投入しⅣ層上面の精査を行い、人力で遺構検出を行った。各区で竪穴式住居址、土坑、柱穴の生活関連遺構を多数検出することができた。Ⅱ区北部で確認した竪穴式住居址は多数の切り合い関係(重複する)がある。10月上旬、委託業者により、国土座標に沿って基準点を設置した。遺構検出状況の写真撮影を行い、平板にて遺構配置図の測量を行った。つづいて、竪穴式住居址から掘り下げ作業を開始した。竪穴式住居址からは、土器、石製品、鉄製品が出土し、住居床面からは支柱穴、周壁溝、炉を検出し、測量・写真撮影を行った。すべての遺構の掘り下げ、遺物の測量、取り上げを行い、調査区内の精査後、完掘状況の写真撮影を行った。12月にⅢ区の追って返しを重機により行った。

掘削はⅣ層上面まで行い、続いて人力により遺構検出作業を行う。遺構は溝、土坑、掘立柱建物址を検出した。掘削は、先後関係から掘立柱建物址から掘り下げを行った。測量及び写真撮影を行い、各遺構の掘り下げを終了する。1月下旬調査区の精査を行い、写真撮影と遺構測量を行い平成16年1月30日屋外調査を終了する。

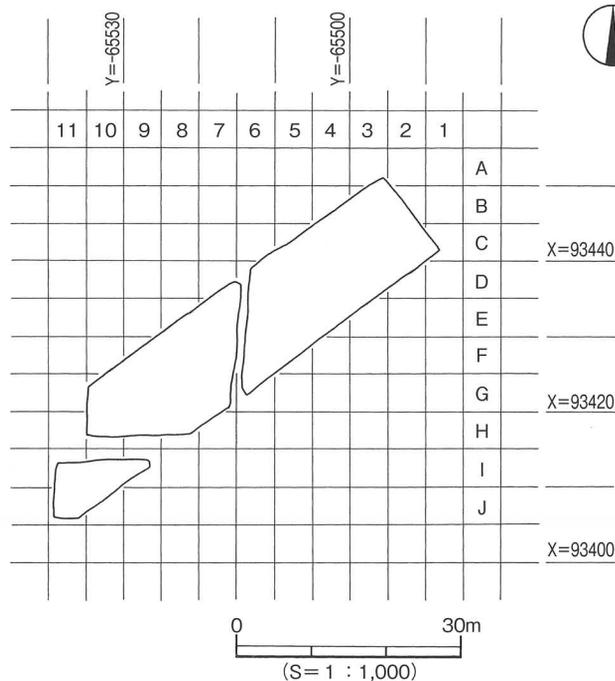


第156図 調査地位置図

2. 基本層位〔第159図〕

対象地の長さはおおよそ90mで調査以前は、水田であった。現状はほぼ平坦で標高42.60mを測る。

基本層位はⅠ～Ⅳ層を検出した。Ⅰ層耕作土調査区全域で検出した。Ⅱ層は3層に分層でき、Ⅱ①層床土調査区全域で検出した。Ⅱ②層耕作土調査区全域で検出した。Ⅱ③層灰色砂質土調査区の南西部と北部中央で検出し土師器、須恵器が出土した。Ⅲ層黒色土Ⅰ区・Ⅱ区全域とⅢ区北西部で検出し、弥生土器、土師器、須恵器が出土した。Ⅳ層黄橙色土調査区全域で検出した。Ⅳ層上面で遺構を検出した。



第157図 調査区区割図

3. 調査概要

検出した遺構は竪穴式住居址18棟、土坑4基、溝3条、性格不明遺構5基、柱穴365基である。これら遺構の確認面は4層上面であり出土した遺物により、弥生時代後期、弥生時代後期末～古墳時代前期初頭、古墳時代中期～後期、古代、中世の5期に大別でき遺構は、古墳時代中期～後期に帰属するものが多い。遺物は弥生土器（甕形土器、壺形土器、鉢形土器、高坏形土器、支脚形土器）、土師器（甕形土器、壺形土器、高坏形土器、甑形土器）、須恵器（坏、高坏、甕、壺、甗）、石器（鏃、台石、磨石、敲石）、鉄器（鉄鏃、刀子、鋤・鋤先、鉄滓）がある。

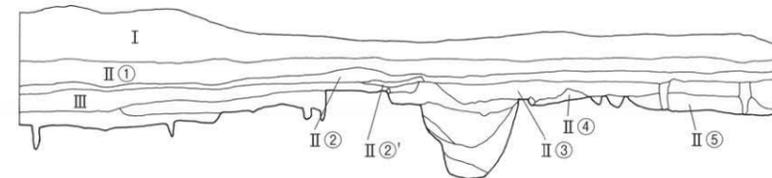
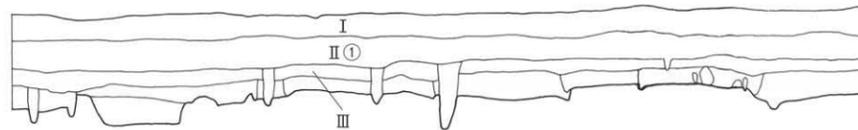
以下、時代ごとに主な遺構と遺物を取り上げて報告する。



第158図 作業風景

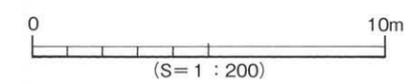
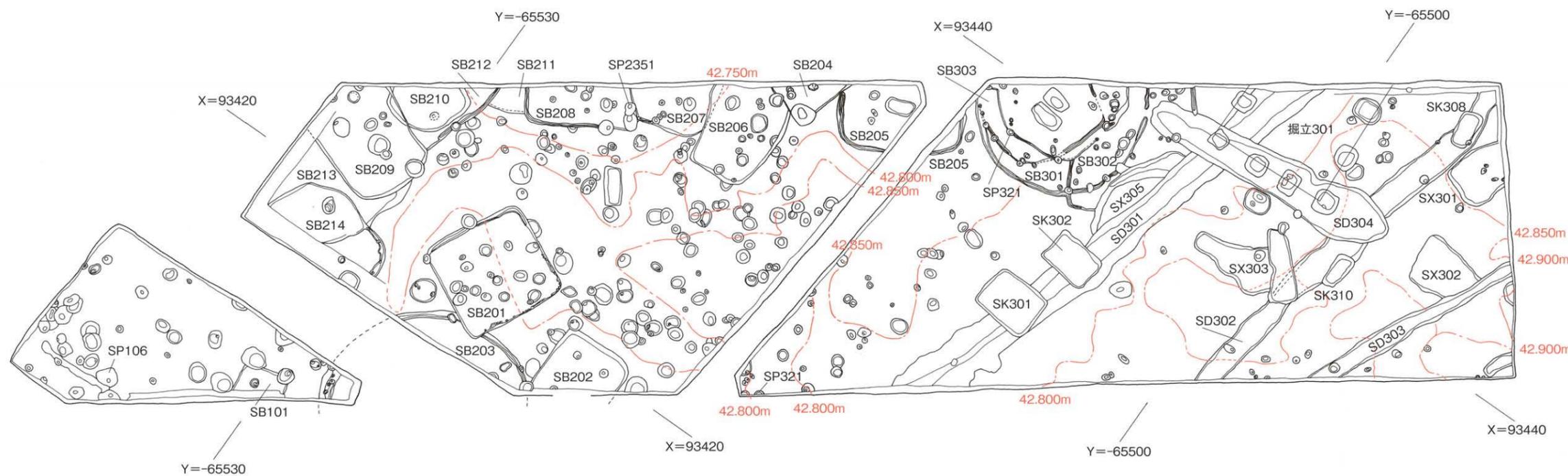
44.000m
43.000m
42.000m

- I 黄灰色土 (2.5Y6/1)
- II① 灰黄色土 (2.5Y7/2)
- II② 明黄褐色土 (10YR7/6)
- II②' 明赤褐色土 (2.5YR5/0)
- II③ 灰褐色土 (5YR5/2)
- II④ 灰黄褐色土 (10YR4/2)
- II⑤ 黑褐色砂质土 (10YR3/1)
- III 灰褐色土 (7.5YR5/2)



44.000m
43.000m
42.000m

2m
100



第159图 遺構配置図

4. 弥生時代の遺構と遺物

竪穴式住居址5棟、溝1条を検出した。

(1) 竪穴式住居址 (S B)

S B 203 [第160図、図版61]

S B 203はⅡ区のH 8区からⅠ区のⅠ 9区に位置し北側はS B 201に切られ、南東部は調査区外に続く。平面形態は円形である。規模はⅡ区検出部(5.75)×(1.40)m、深さ0.23mを測る(Ⅰ区とⅡ区間での想定径は直径8.4mと考えられる)。内部施設は周壁溝を検出した。規模は、幅28cm、深さ6cmを測る。埋土は黒褐色土(7.5Y R 2/2)である。出土遺物は、弥生土器の甕形土器、壺形土器、石製品の勾玉、小玉、刃器、台石が出土した。

遺物出土状況は、弥生土器の小片が掘削時に出土した。石製品は刃器と台石が住居址床面より出土し、勾玉は住居址床面より20cmほど上面で出土した。勾玉が出土したため住居址内の埋土を採取し洗浄を行った結果、洗浄を行った埋土内からは小玉1点が出土した。

出土遺物(846~854)

甕形土器(846) 口縁下部に刻み目凸帯を貼り付ける。

壺形土器(847~850) 847は口縁部片。口縁部端面に刻み目と沈線文を施す。848・849は胴部片肩部に刻み目。849の刻み目は貝殻か。850は底部片。

石製品(851・852) 851はサヌカイト製の刃器。852は台石。

装身具(853・854) 853・854は石製。853は勾玉。854は小玉。

時期：出土した弥生土器の甕形土器と壺形土器の形態から弥生時代後期前葉に時期比定する。

S B 207 [第161・162図、図版61]

S B 207はⅡ区のE 8区に位置しS B 208を切り、S B 206に切られ北側は調査区外に続く。平面形態は2ヶ所のコーナー部を検出したことより方形か長方形と考えられる。規模は(3.40)×(2.12)m、深さ15cmを測る。内部施設は周壁溝と柱穴を検出した。周壁溝は南西部に一部検出した。埋土は褐色土(7.5Y R 4/3)である。出土遺物は土師器、須恵器、弥生土器、石製品が出土した。出土状況は住居址の中央部から出土した大型の台石(865)の周辺から弥生土器が出土した。台石は火を受け剥離している。砥石(863)は台石の下部より出土した。須恵器と土師器は住居址の埋土上面で出土した。

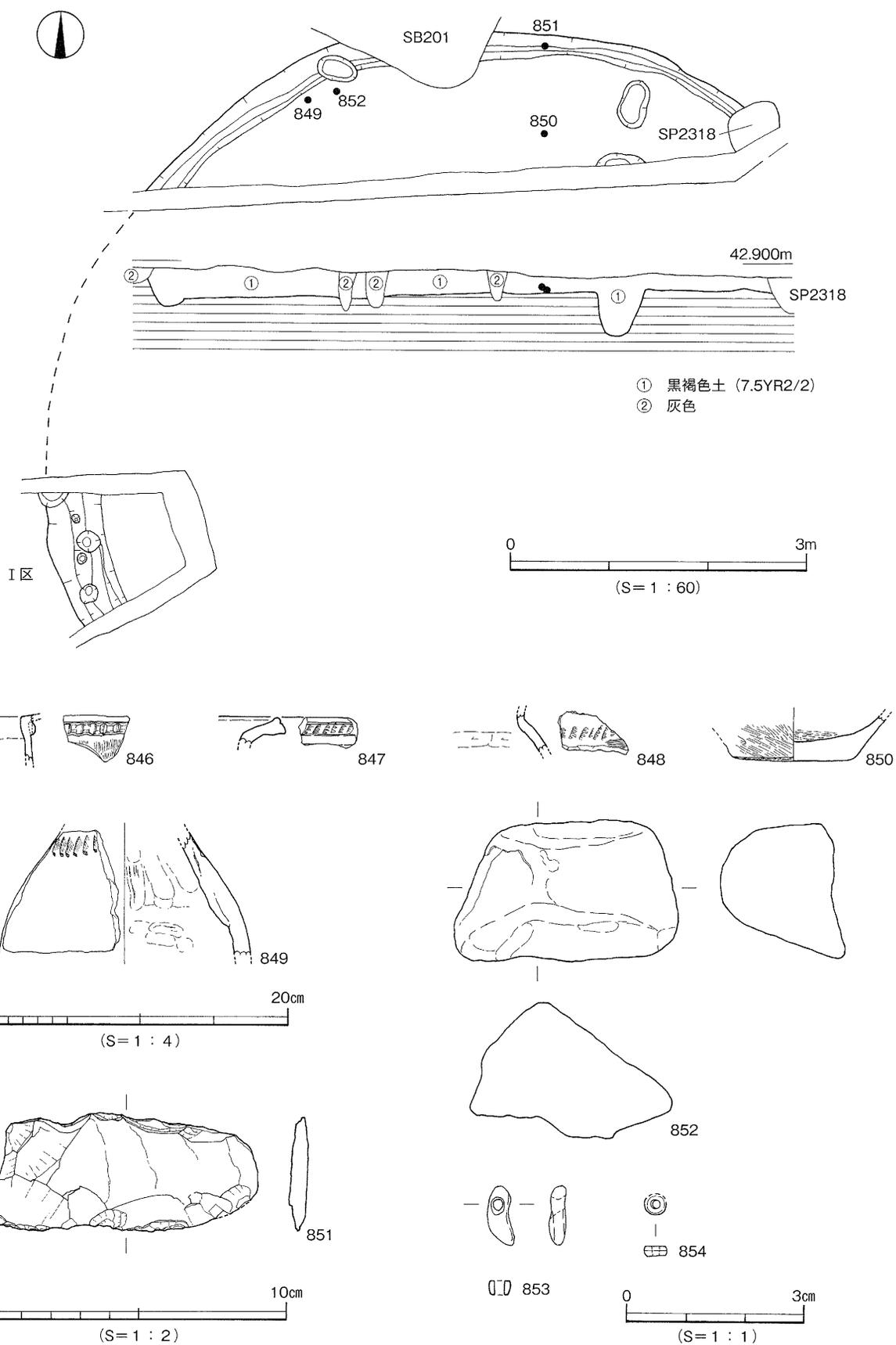
出土遺物(855~865)

弥生土器(855~858) 855は甕形土器、上げ底の底部。856は鉢形土器。平底で直口口縁。857・858は壺形土器。857は複合口縁壺の口縁部。4条の凹線文と山形文を施す。858は僅かに丸味をもつ分厚い底部。

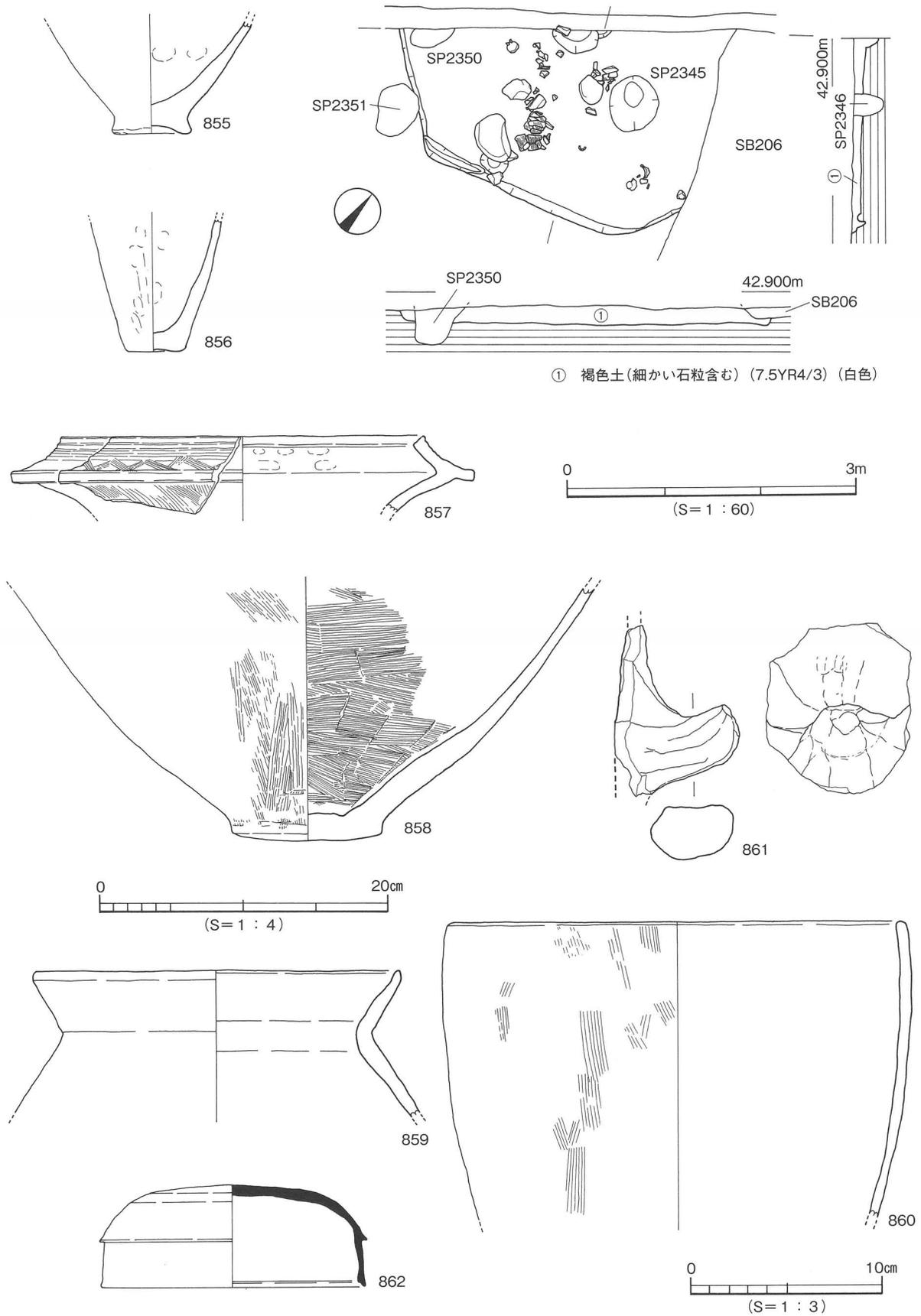
土師器(859~861) 859は甕形土器の口縁部。860・861は甗形土器。860は直立する口縁部。861は断面楕円形の把手部。862は須恵器の坏蓋。

石製品(863~865) 863は砥石。全面がよく使い込まれている。864・865は台石。864は上面に使用痕による凹みがある。865は火を受けて赤味を帯び剥離している。

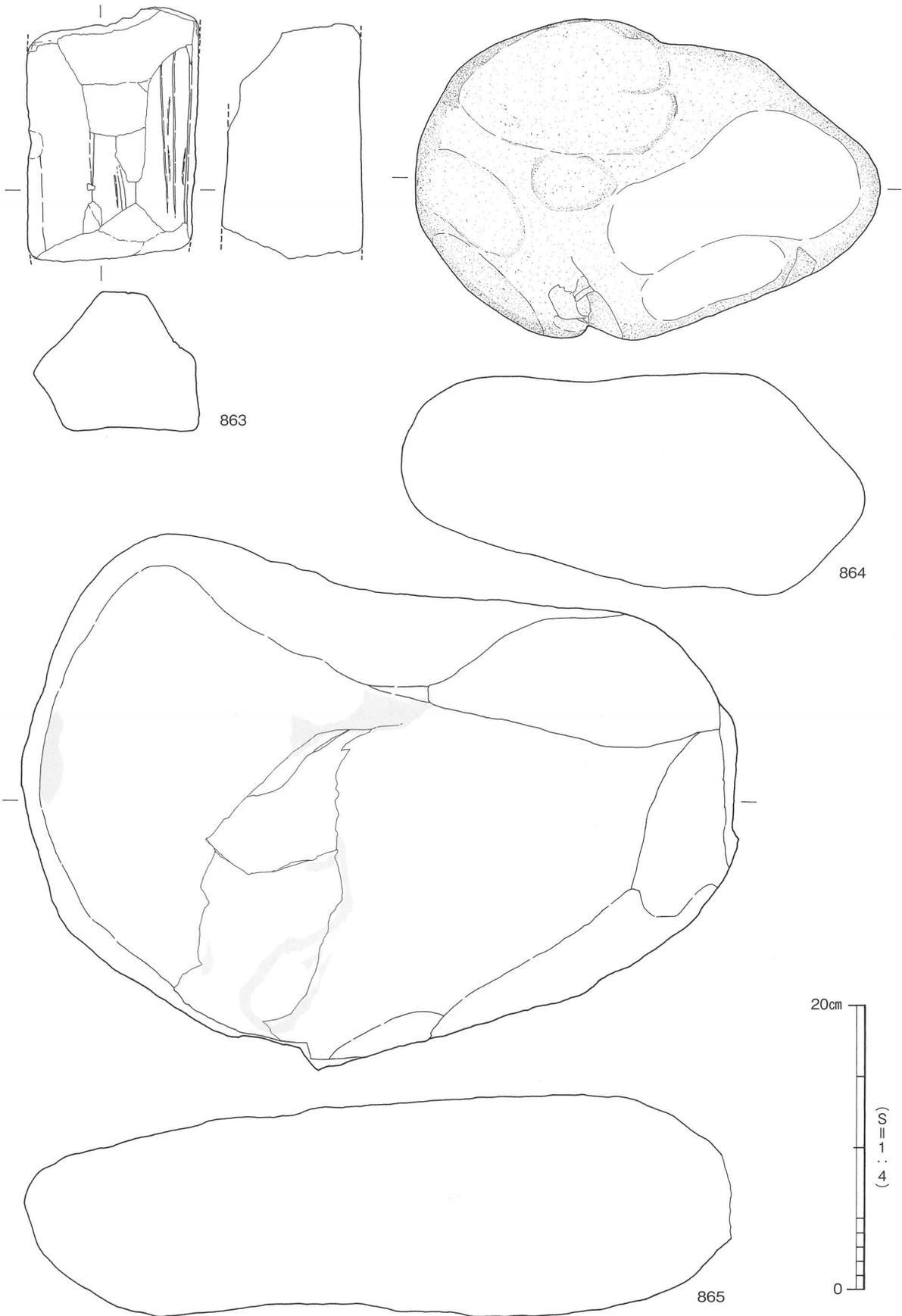
時期：床面から出土した甕形土器、鉢形土器、壺形土器の形態から弥生時代後期後半に時期比定する。



第160図 SB203測量図・出土遺物実測図



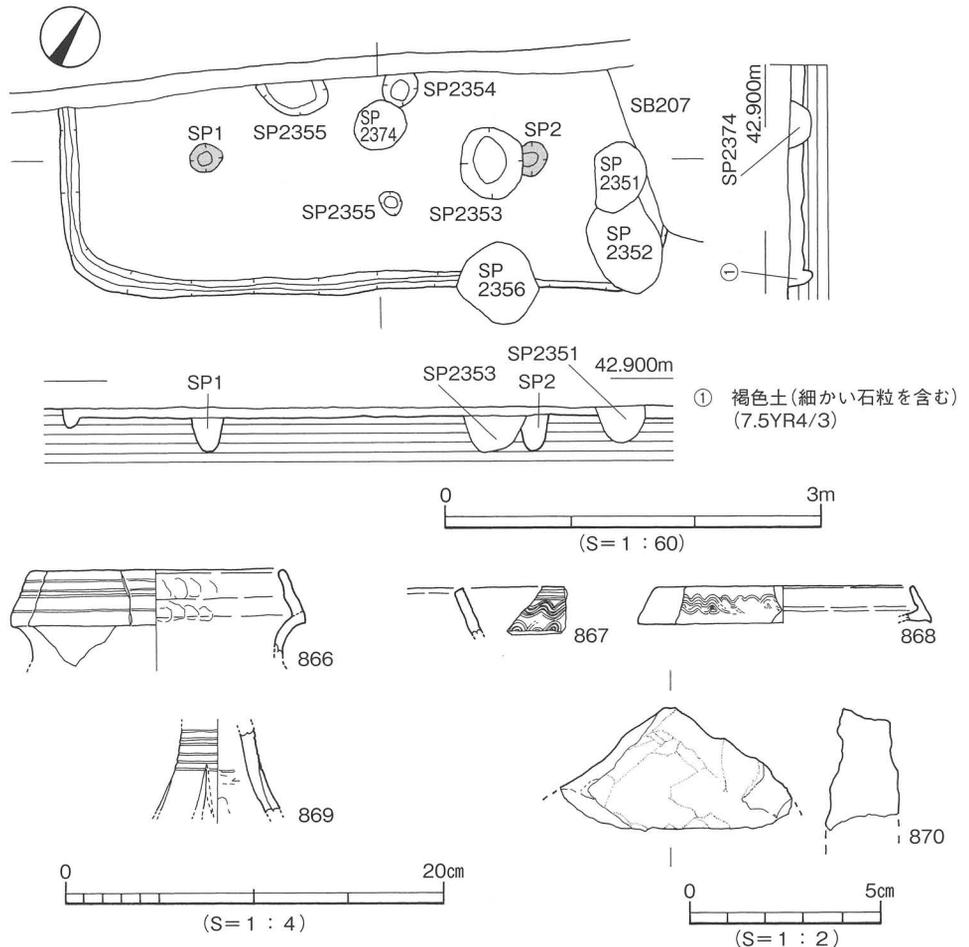
第161図 S B207測量図・出土遺物実測図(1)



第162図 S B 207出土遺物実測図(2)

S B 208〔第163
図、図版61〕

S B 208はⅡ区
のF 9区に位置
し、S B 207、S P
2351・2352・2356・
2374に切れられ、北
側は調査区外に続
く。平面形態は2
ヶ所のコーナー部
を検出したことよ
り方形か長方形と
考えられる。規模
は(4.64)×(1.70)
m、深さ15cmを測
る。内部施設は主
柱穴、周壁溝、柱
穴を検出した。主
柱穴は2基を検出
した。平面形態は
円形で、規模は径



第163図 S B 208測量図・出土遺物実測図

26cm、深さ29cmを測る。周壁溝は西側から南側の壁下から検出した。規模は幅20cm、深さ14cmを測る。埋土は褐色土(7.5Y R 4/3)(細かい石粒を含む)。出土遺物は弥生土器の碎片と石製品がある。

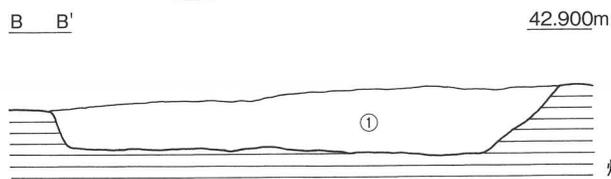
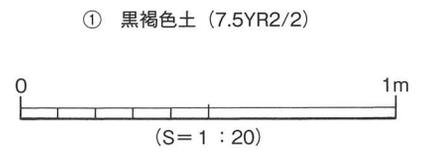
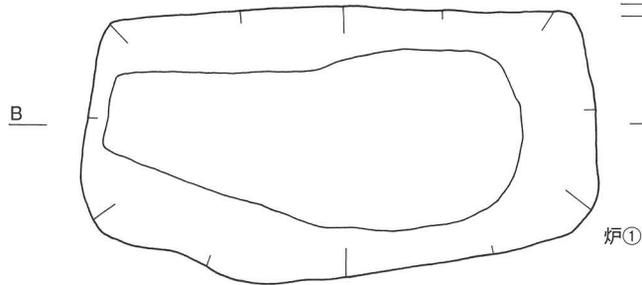
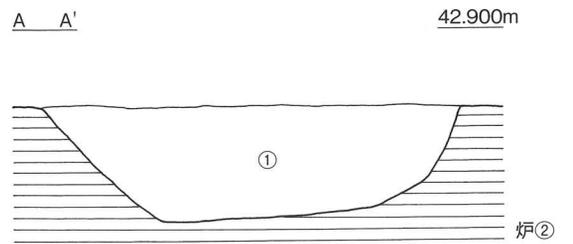
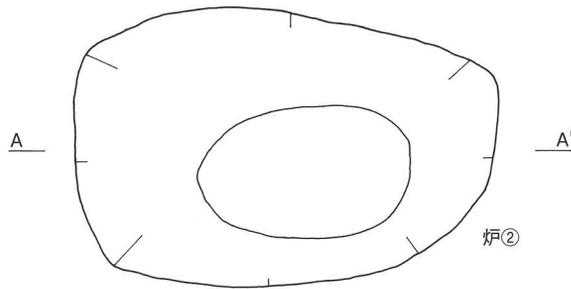
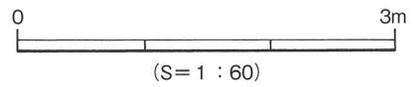
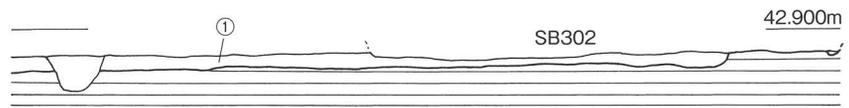
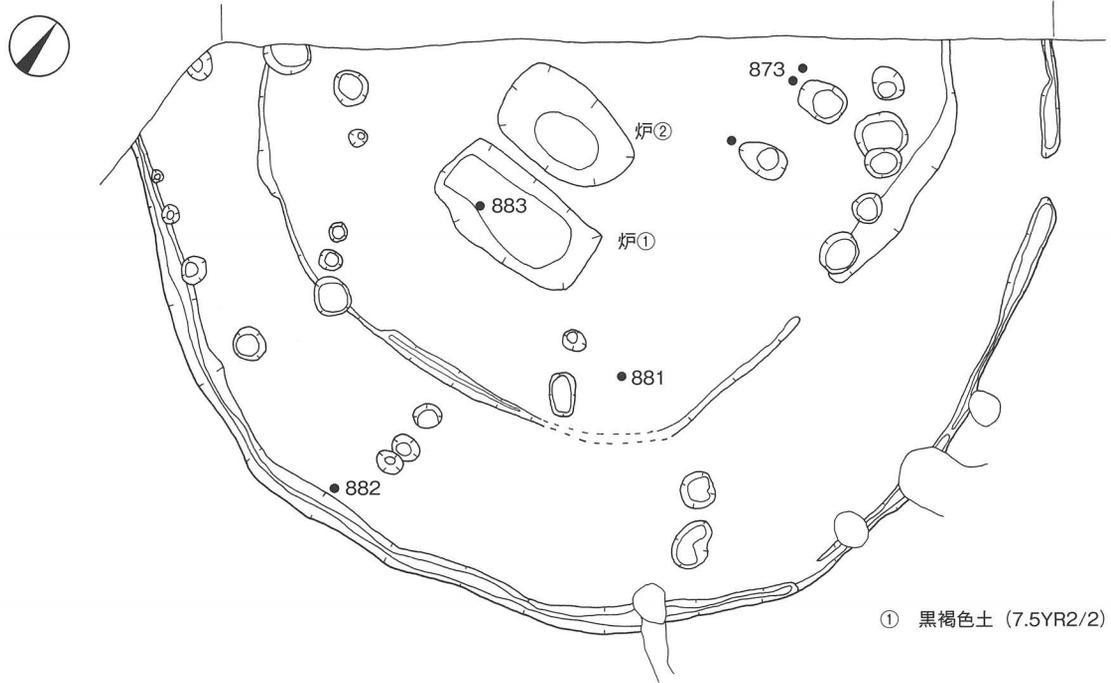
出土遺物(866~870) 弥生土器 866~868は壺形土器の口縁部。866は4条の沈線文。867は2条の沈線文と5条の波状文、868は6条以上の波状文を施す。869は高坏形土器の柱部。石製品(870)石英。

時期：出土した弥生土器の壺形土器から弥生時代後期後半に時期比定する。

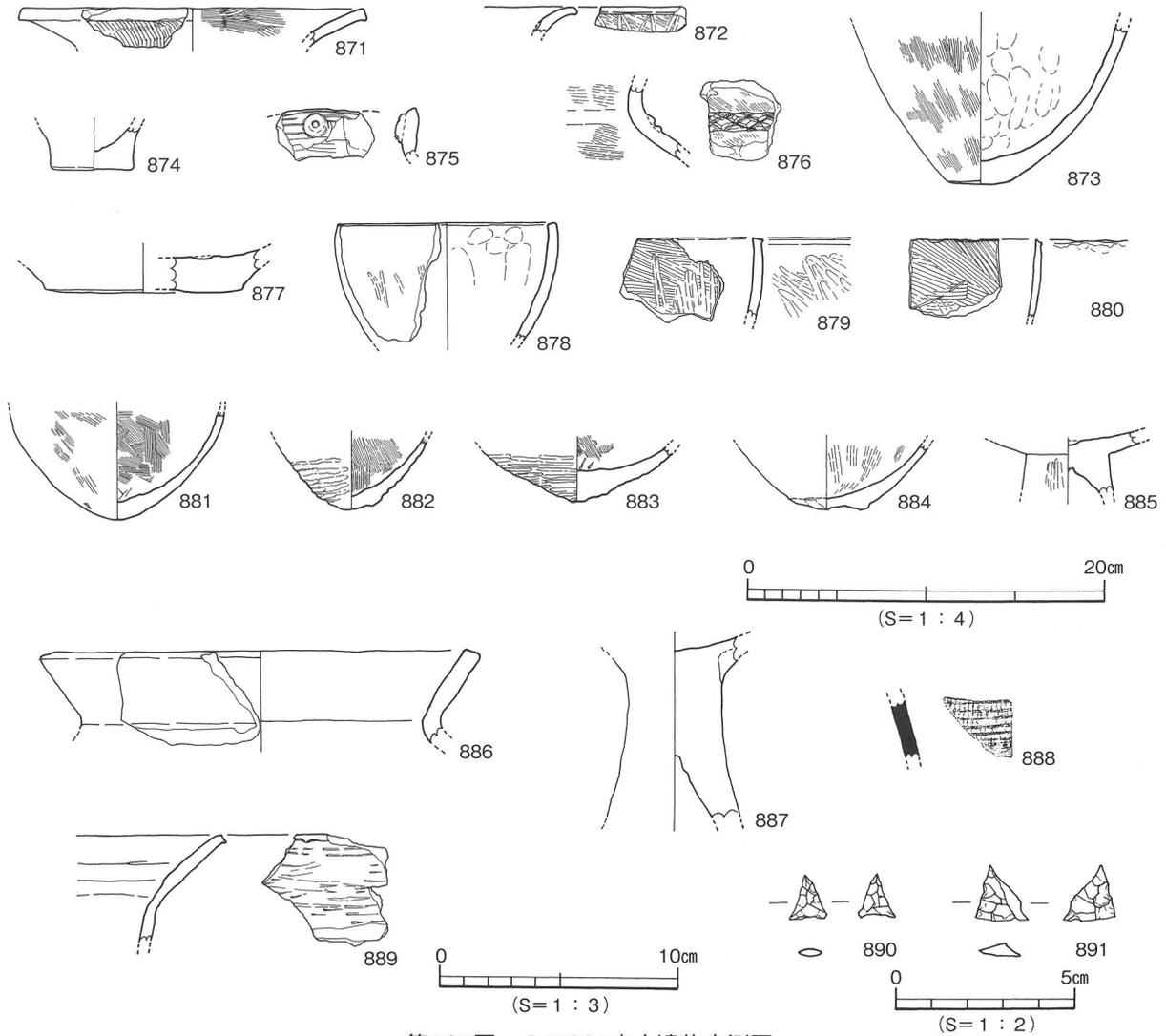
S B 301〔第164・165図、図版61・68〕

S B 301はⅢ区のC 5区~D 6区に位置し、S B 303を切り、S B 302に切れられ北側は調査区外に続く。平面形態は円形である。規模は径7.2m、深さ18cmを測る。埋土は暗褐色土である。内部施設は炉、周壁溝、高床部がある。炉は中央南に2基(南側炉①、北側炉②)を検出した。平面形態は炉①が長方形、炉②が楕円形である。規模は、炉①が長さ1.36m、幅0.73m、深さ18cm、炉②が長さ1.1m、幅0.73m、深さ30cmを測る。周壁溝は、壁下に沿って検出した。規模は幅18cm、深さ6cmを測る。高床部は周壁から1.0~1.5m幅で巡る。埋土は黒褐色土(7.5Y R 2/2)である。出土遺物は弥生土器の甕形土器、壺形土器が出土した。

出土遺物(871~891) 弥生土器(871~885) 甕形土器(871~874) 871・872は甕形土器の口縁部片。873は底部に黒斑あり。874は平底の底部。



第164図 SB301・炉①・②測量図



第165図 S B 301出土遺物実測図

壺形土器（875～877） 875は口縁端面に円形浮文を貼り付ける。876は頸部に凸帯を貼り付ける。877は底部片。

鉢形土器（878～884） 878～880は直口口縁の口縁部片。881～884は底部片。882・883はタタキ痕が顕著に残る。884は強いナデによる凹凸と黒斑が見られる。

高坏形土器（885） 基部。

土師器（886・887） 886は甕形土器の口縁部。887は高坏形土器の脚部である。

須恵器（888） 胴部片、外面に格子タタキ。

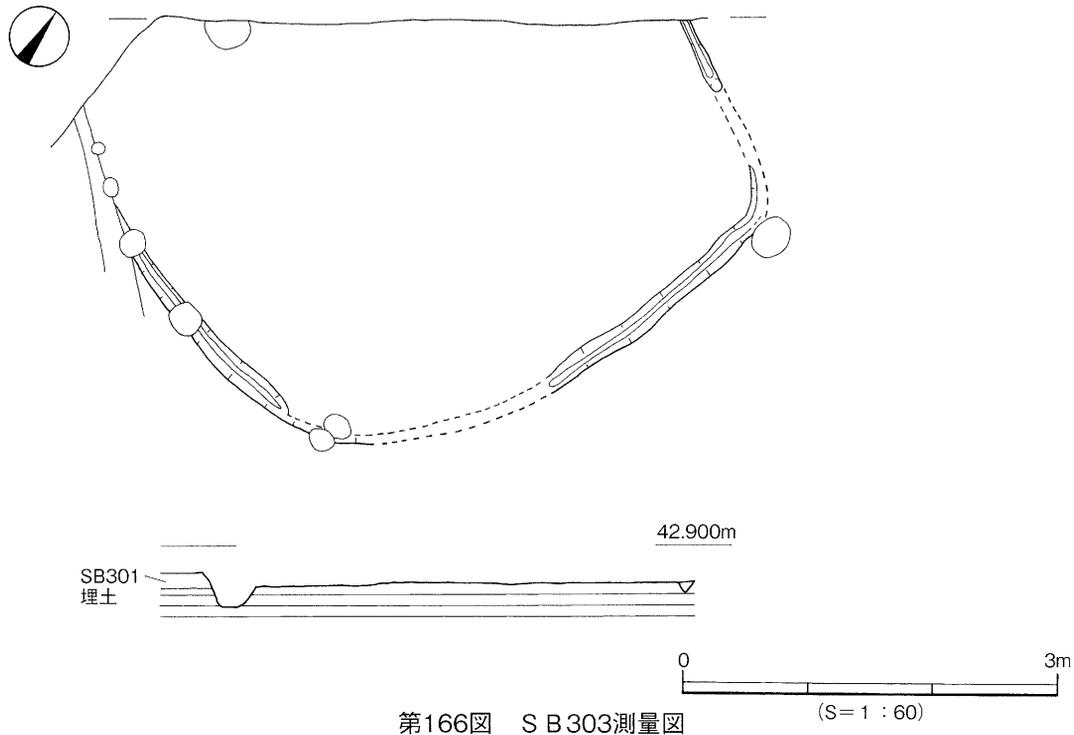
縄文土器（889） 深鉢の口縁部。

石製品（890・891） 石鏃。890はサヌカイト、891は黒曜石である。

時期：出土した弥生土器の鉢形土器の形態から弥生時代後期末に時期比定する。

S B 303〔第166図、図版61〕

S B 303はⅢ区のD 5区に位置し、S B 301にはほぼ住居全体を切られ周壁溝のみ検出した。平面形態は方形である。規模は長軸4.75m、短軸（3.42m）、深さ5cmを測る。内部主体は周壁溝を検出した。



第166図 SB303測量図

規模は幅20cm、深さ5cmを測る。出土遺物は住居全体を切られているため出土していない。

時期：弥生後期末のSB301に切られているため弥生時代後期末以前とする。

(2) 溝 (SD)

SD301 [第167図、図版64・66・67]

SD301はⅢ区のB4区からF5区に位置し、SB302、SK301・302、SD304、SX305、掘立301に切られる。規模は検出長20.8m、幅1.7m、深さ55cmを測る。断面形態は「U」字状である。埋土は3層に分層でき、北側と南側では埋土に違いが見られる。

北側では、①層褐灰色砂質土 (10Y R5/1) 1.0~10cmの礫・細かい砂・3~5mmの砂を含む3層と暗灰黄色土 (2.5Y 5/2) 3~5cmの礫を含む層に分かれる。②層は黒褐色土 (10Y R5/1) 粘質土と黒褐色土 (7.5Y R3/2) 粘質土2~10cm礫混じりである。③層は黒褐色土 (10Y R3/1) 砂含む、褐灰色砂 (7.5Y R4/1) 1~5cm礫多く含む。

南側では①層灰褐色土礫混じり、②層黒色土、③層暗褐色土礫混じり。北側の2層が粘質土で違いがあるが、全体的に礫砂混じりの埋土である。

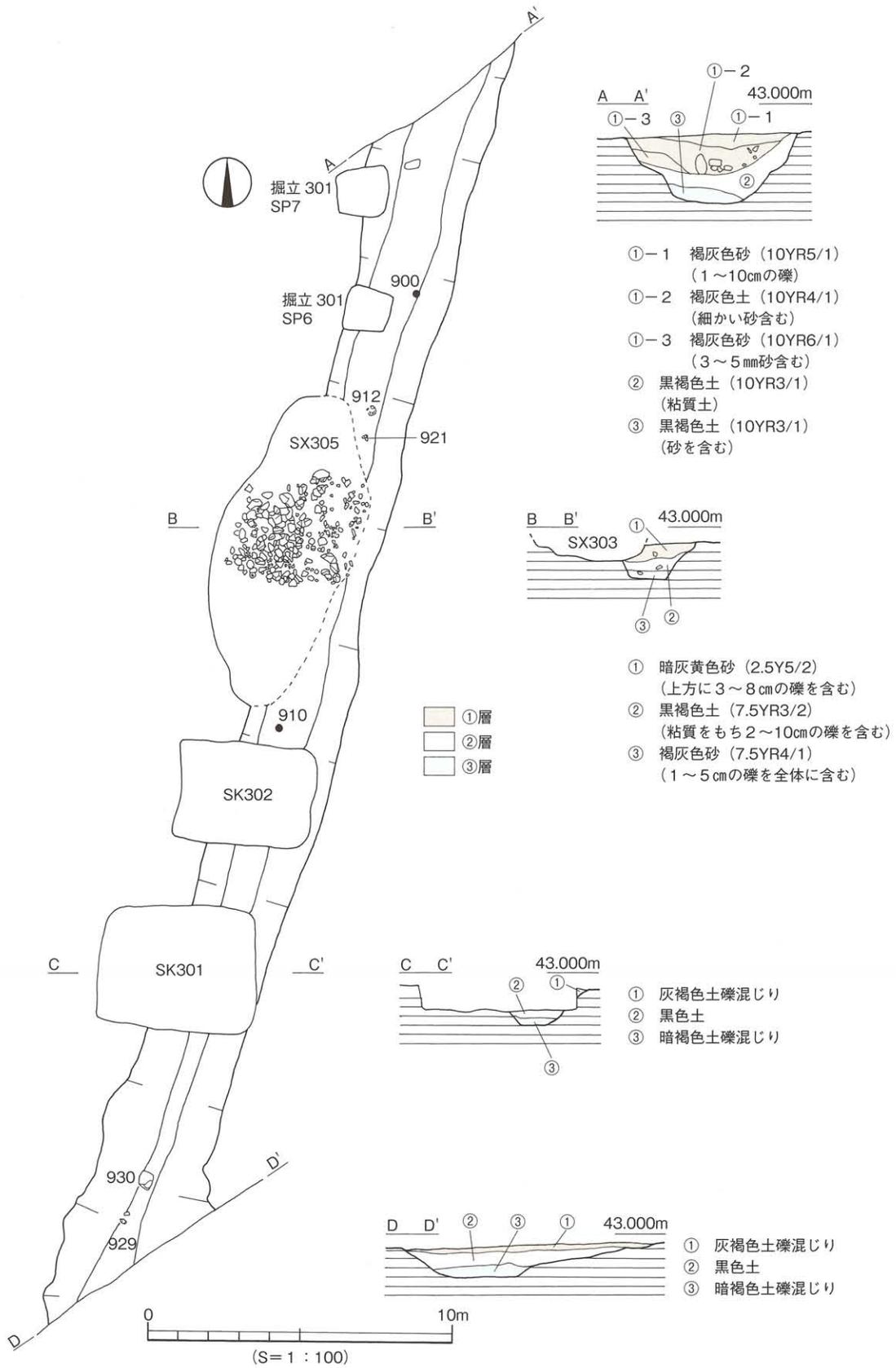
出土遺物は①層に土師器、須恵器、弥生土器、②層に土師器、弥生土器、③層に弥生土器と台石がある。とくに、③層下面から支脚形土器の完形品が出土した。

出土遺物 (892~1013) [第168~176図・図版66]

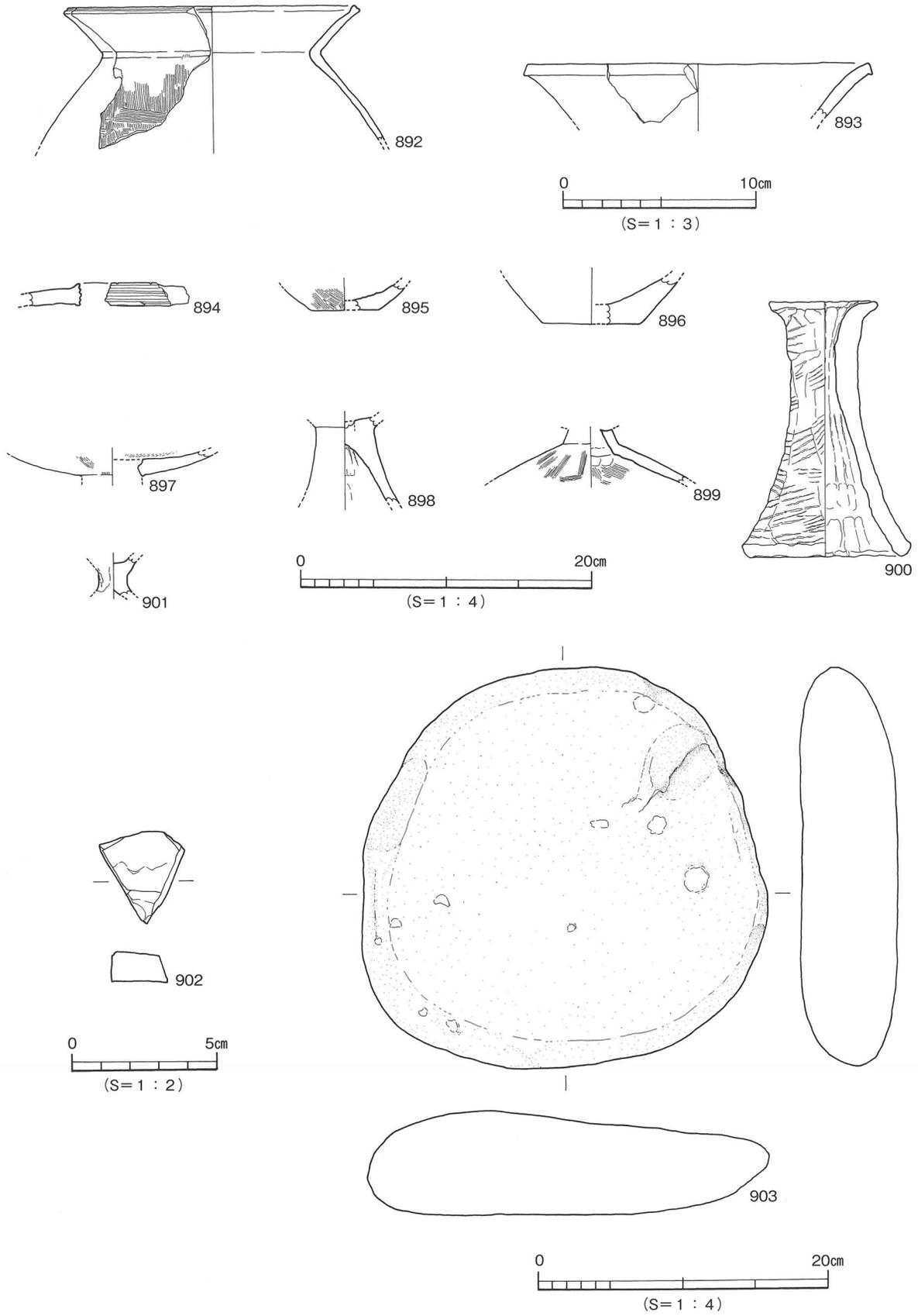
③層出土遺物 (892~903)

892・893は甕形土器の口縁部。894~896は壺形土器。894は口縁端面に4条の凹線文。895・896は底部片。897~899は高坏形土器。900は支脚形土器の完形品。901は高坏形土器のミニチュア品。

石製品 (902・903) 902はサヌカイト製の残核。903は台石の完形品、安山岩。



第167図 SD301測量図



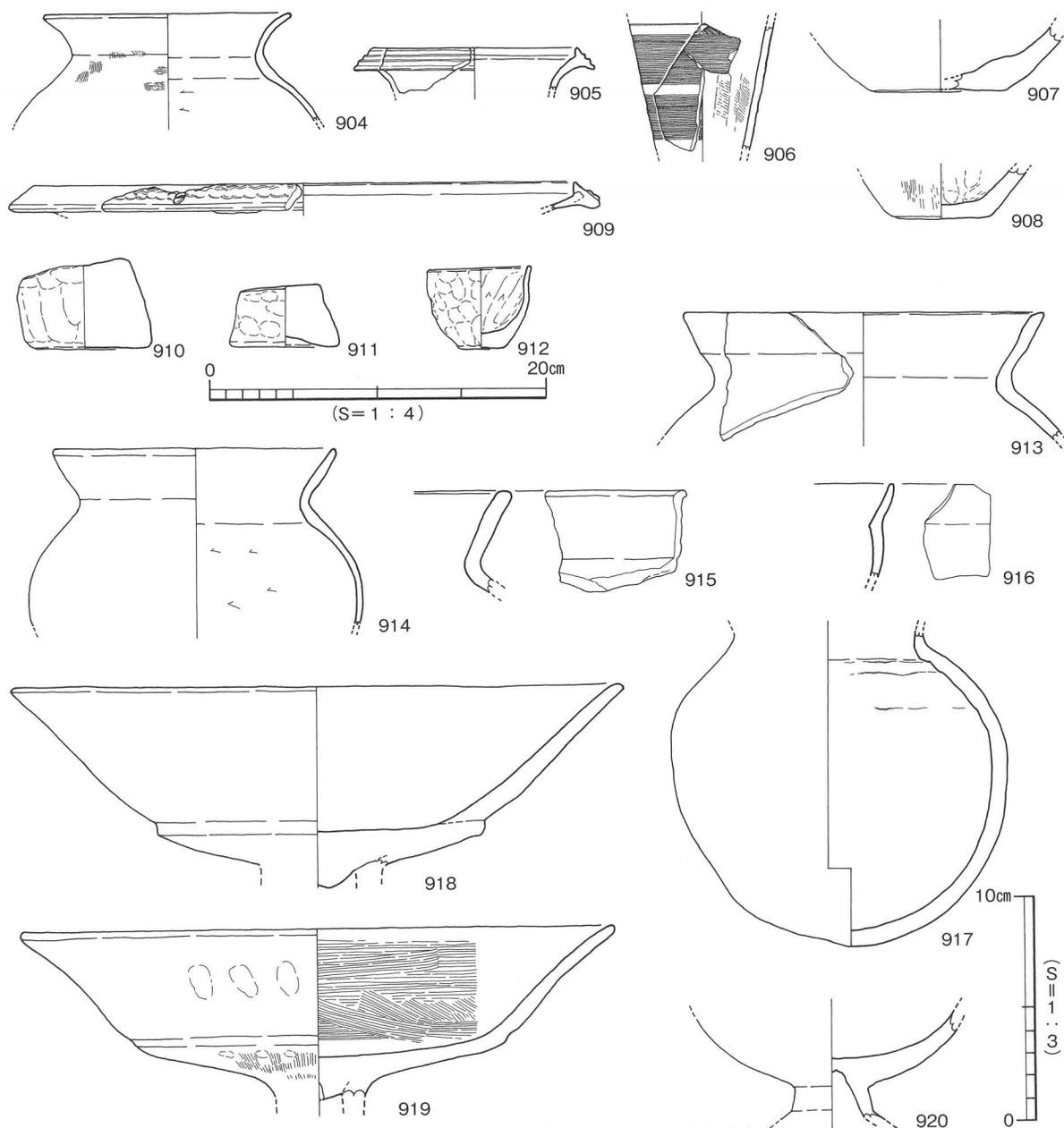
第168図 S D 301③層出土遺物実測図

②層出土遺物 (904~930)

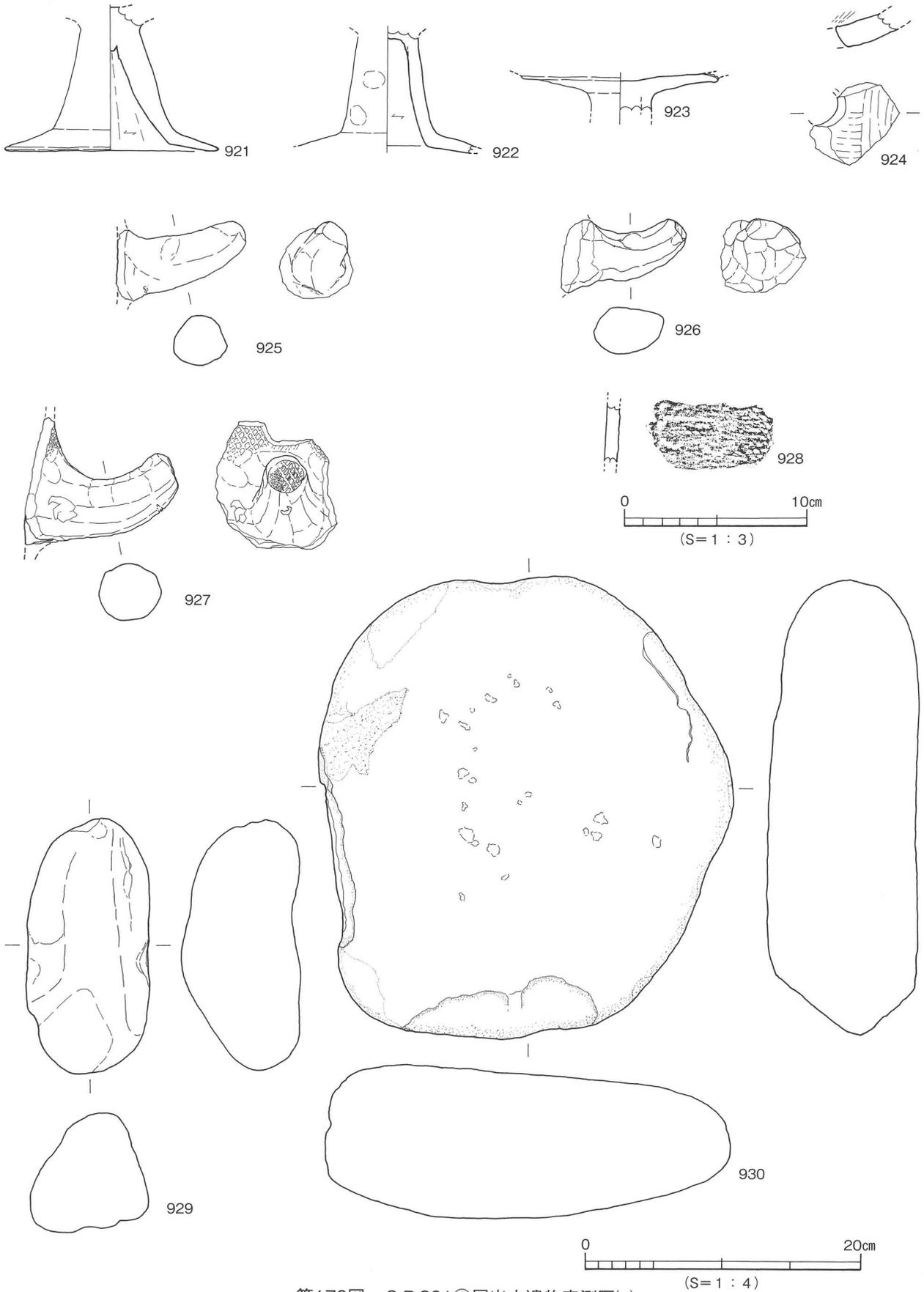
弥生土器 (904~912) 904は甕形土器。外反する口縁部。905~908は壺形土器。905は口縁端面に3条の凹線文。906は外面に32条・30条の細い沈線文と山形文を施す。907・908は底部。909は高坏形土器。口縁端面に波状文と刻み目を持つ円形浮文を施す。910・911は支脚形土器。中実で円柱状。912は鉢形のミニチュア土器。

土師器 (913~927) 913~915は甕形土器。913は口縁部中位にわずかに段を持つ。916・917は壺形土器。916は小型丸底壺か。917は球形の胴部。918~923は高坏形土器。918・919は段を持ち大きく開く坏口縁。920は短い柱部を持つ。921・922は柱部から脚部。脚裾部が屈曲する。923は基部。924~927は甑形土器。924は蒸気孔のある底部片。925・926・927は把手部。

軟質土器 (927・928) 927は把手端部を切り落とし下面に刺突状の凹みを持つ。外面と把手端面に格



第169図 S D 301②層出土遺物実測図(1)



第170図 SD301②層出土遺物実測図(2)

子タタキが残る。928は胴部、外面に格子タタキ。

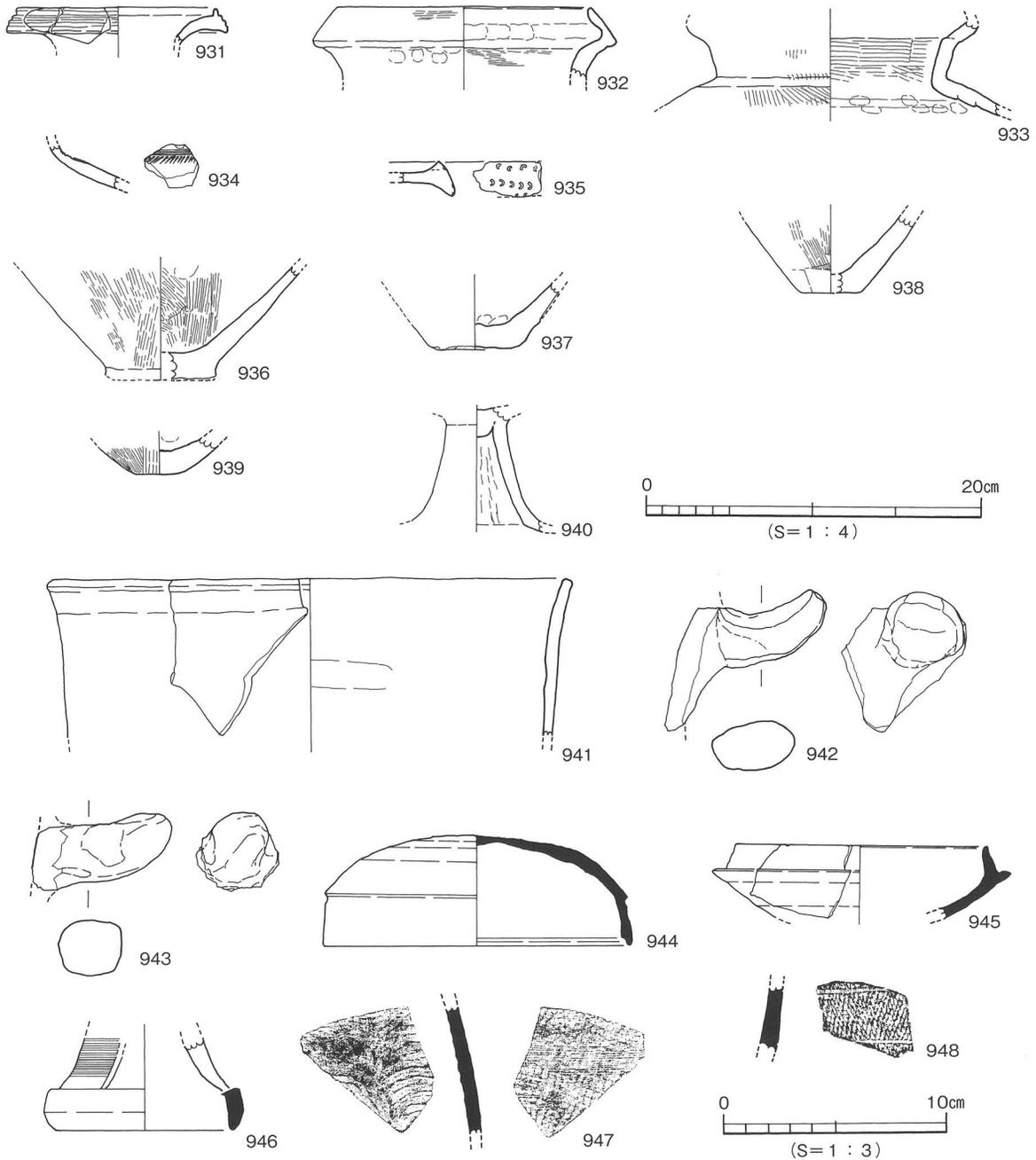
石製品 (929・930) 929は敲石か。930は台石。

②層 (黒色土) 出土遺物 (931~948)

弥生土器 (931~940) 931~939は壺形土器。931は口縁部端面に3条の凹線文。932は複合口縁壺。935は口縁部端面に半裁竹管文。936~939は底部片。940は高坏形土器の柱部。

土師器 (941~943) 941~943は甑形土器。941は直立気味の口縁部。942・943は把手部。

須恵器 (944~948) 944は坏蓋。丸味をもつ天井部。945は坏身。短く水平気味に伸びる受け部。



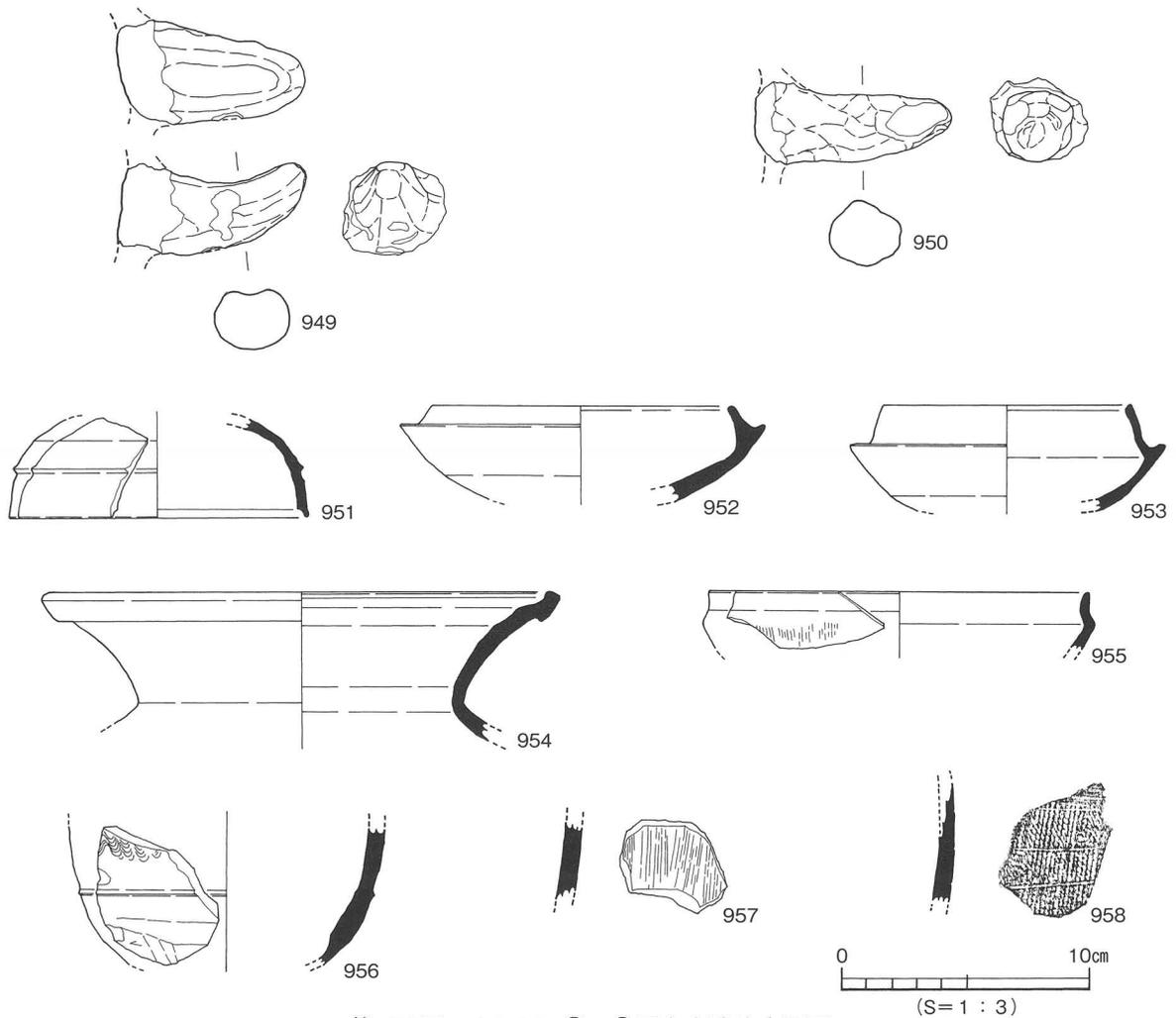
第171図 S D301②層 (黒色土) 出土遺物実測図

946は高坏の脚部片。947・948は胴部の小片。947の外面に格子タタキ後カキ目。948は外面に沈線と縄
 蓆文タタキが残る。

①・②層出土遺物 (949～958)

土師器 (949・950) 949・950は甑形土器の把手部。949の上面に浅い凹みがある。

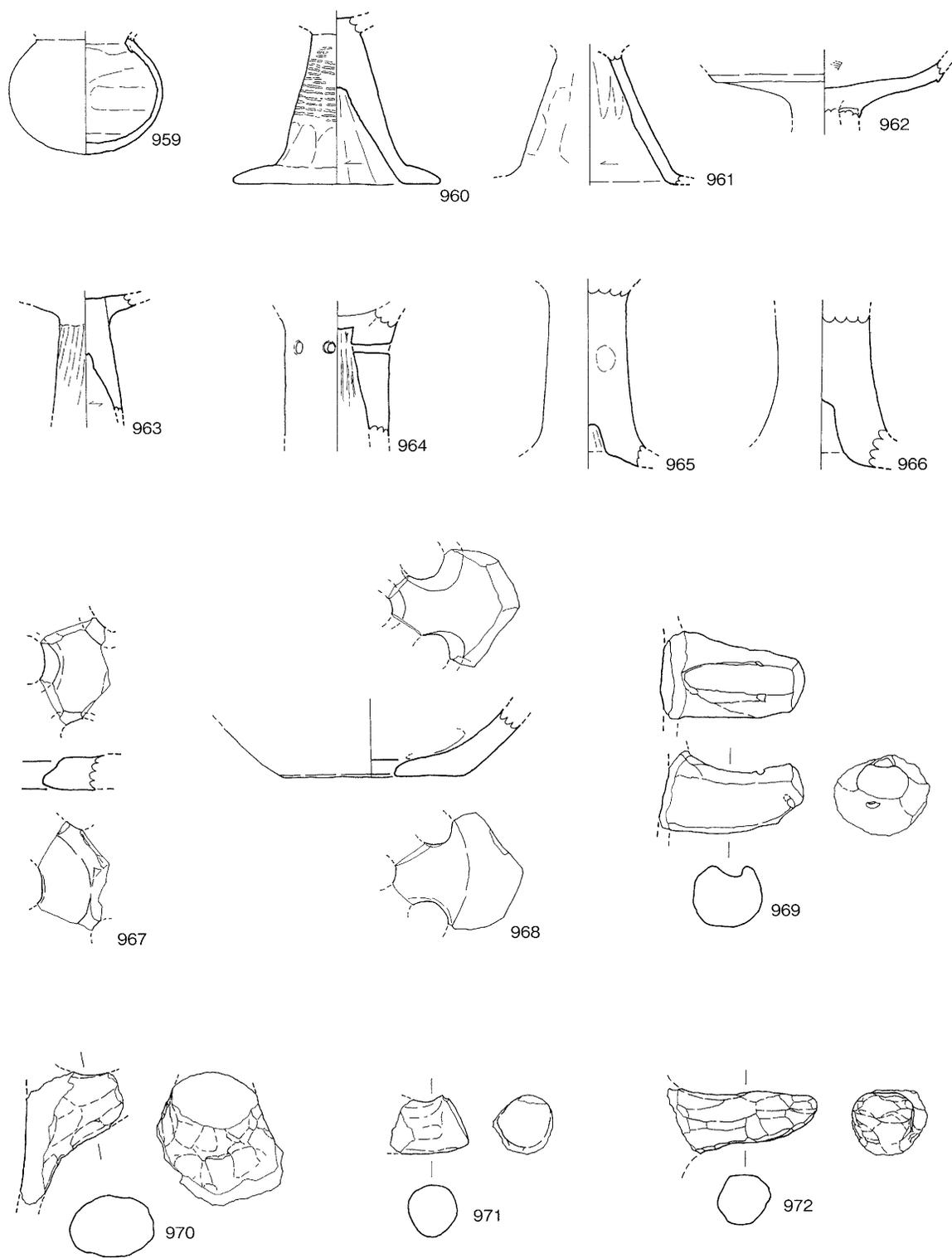
須恵器 (951～958) 951は坏蓋。口縁部の端部は内傾する面を持ち凹む。952・953は坏身。短く伸び
 る受け部をもつ。954は壺形土器。外反する口縁部。955は鉢形土器。口縁端部は尖り気味。956は埴
 形土器。胴部外面に凸帯と6条の波状文が残る。957・958は胴部片。957は板状工具によるナデが見ら
 れる。958は外面に縄蓆文タタキと沈線が残る。



第172図 S D301①・②層出土遺物実測図

①層出土遺物 (959～1013)

土師器 (959～972) 959は壺形土器。球形の胴部。960～966は高坏形土器。960は「ハ」の字状に開
 く柱部、裾部は折れ曲がり水平に接地する。961は「ハ」の字状の柱部。964は円柱状の柱部上部に円
 孔(5mm) 2個1組を2方向(対称な位置)に施す。965・966は中実の柱部。967～972は甑形土器。
 967・968は底部。蒸気孔を持つ。969～972は把手部。969は端部を切り落とし上部に凹む溝、下部に



0 10cm
(S = 1 : 3)

第173図 S D301①層出土遺物実測図(1)

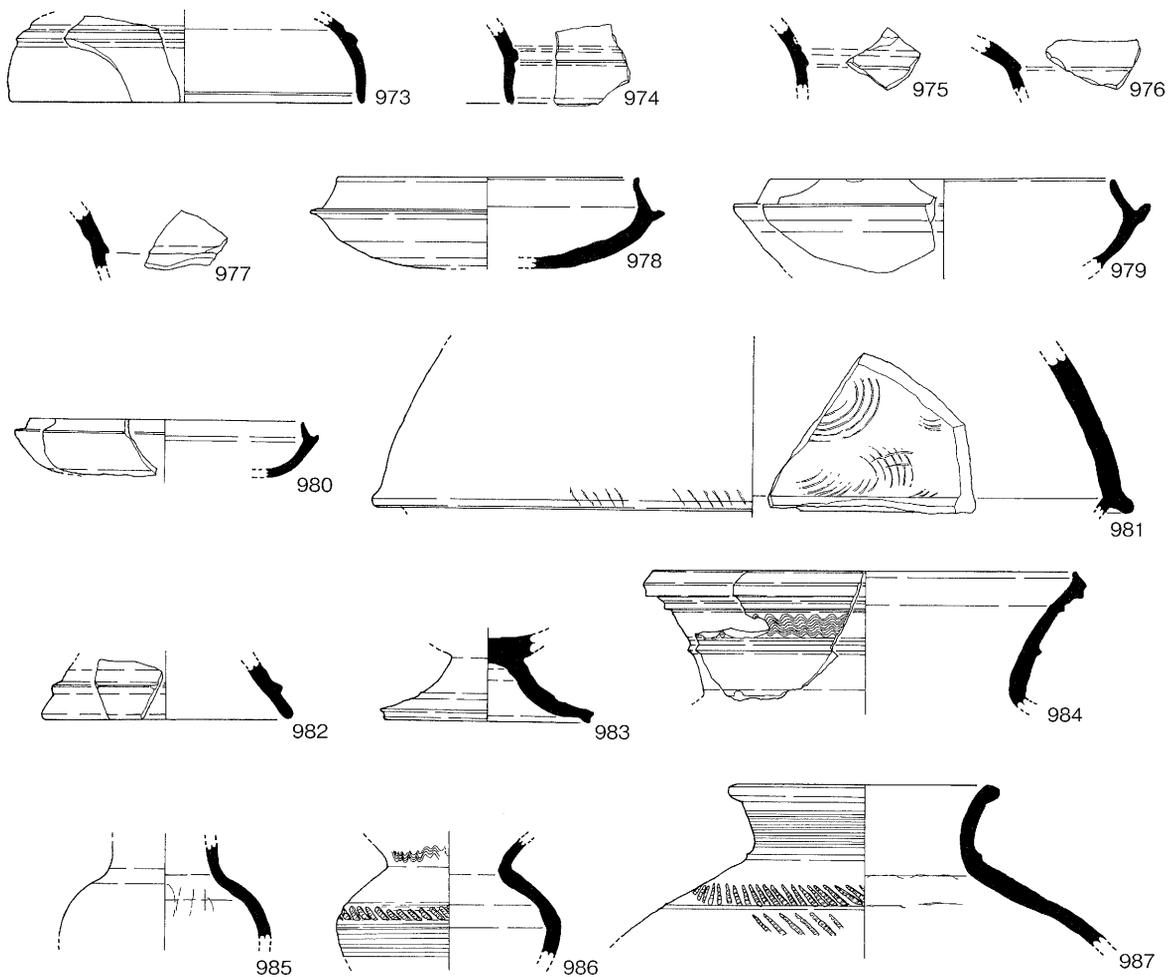
貫通しない穿孔がある。970は断面楕円形。971は断面円形で端部を切り落とす。972は断面円形。

須恵器 (973~1007) 973~977は坏蓋。973・974の口縁部は直立気味に接地する。975~977は天井部の小片。978~980は坏身。短く水平に伸びる受け部に内傾する立ち上がりを持つ。981は蓋か。口縁部端部にかえりを持つ大型品。982・983は高坏形土器の脚部片。982は脚端部手前に凸帯が巡る。983は「ハ」の字状に開く短い脚部。984は甕形土器。外傾する口縁部の外面に1条の凸帯、9条の波状文を施す。985~994は壺形土器。985は頸部から胴部の残存。986は頸部に波状文、胴部に刺突文を施す。987は短く外反する口縁部、肩部に刺突文を2段に施す。988は直立気味に僅かに外傾する長い口縁部。989は頸部に竹管文。993は16条と10条の波状文、1条の刺突文、3条の凹線を施す。994は外面に凹線と波状文。995・996は甕形土器。995は17条以上の波状文を施す。996は口縁部片。997~1007は胴部片。1006・1007は縄蓆文タタキ。1007の外面にヘラ記号。

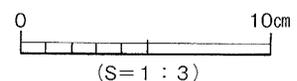
石製品 (1008・1009) 1008はスクレイパー。姫島産の黒曜石。1009は砥石の完形品。

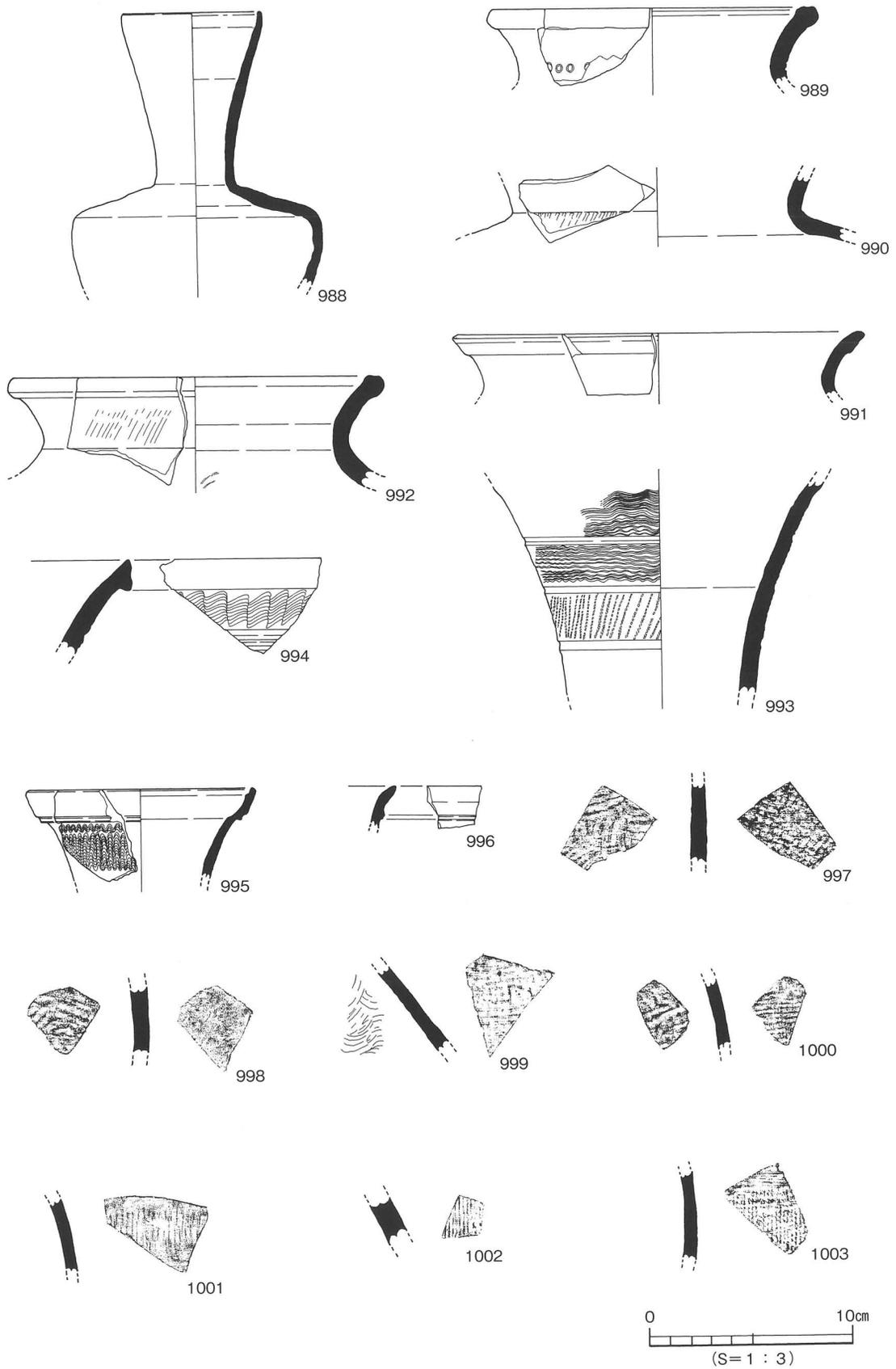
鉄製品 (1010~1013) 1010は有形柳葉式鉄鏃。切先を欠く。1011は鉄鏃の基部。1012・1013は鉄滓。

時期：最下層の③層から出土した弥生土器の甕形土器、支脚形土器の形態より弥生時代後期末に時期比定する。

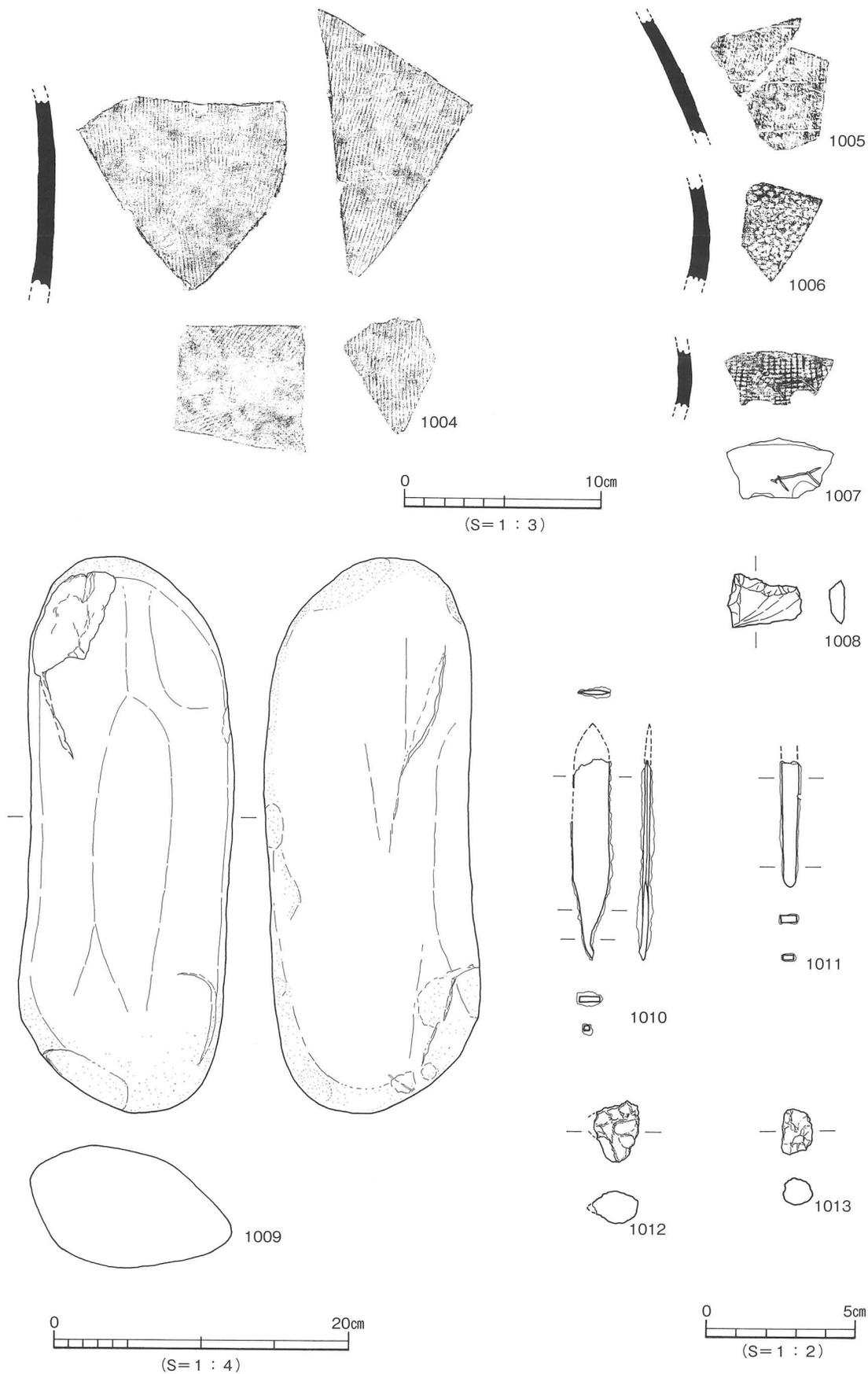


第174図 S D301①層出土遺物実測図(2)





第175図 S D301①層出土遺物実測図(3)



第176図 SD301①層出土遺物実測図(4)

5. 古墳時代の遺構と遺物

竪穴式住居址11棟、土坑3基がある。

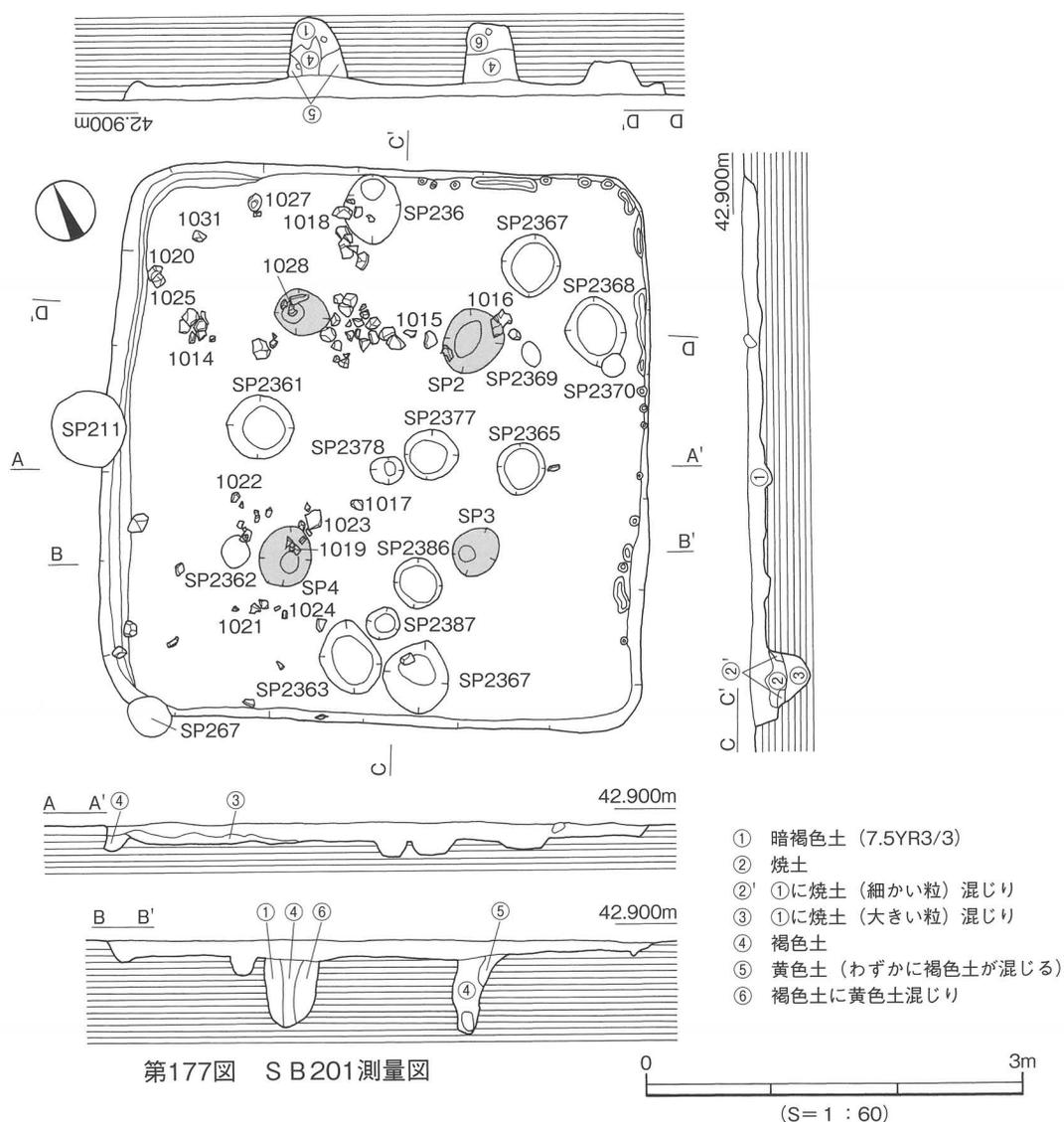
(1) 竪穴式住居址 (S B)

S B 201 [第177～179図、図版62・66]

S B 201はⅡ区のG 8～H 9区に位置しS B 202を切る。平面形態は方形である。規模は4.41×4.30m、深さ12cmを測る。内部施設は主柱穴と周壁溝がある。主柱穴は4基検出した。規模は径36～51cm、深さ54～57cmを測る。周壁溝は壁下であり、東側は小ピット列になる。南部は途切れる。埋土は暗褐色土(7.5Y R3/3)で焼土が混じり、床面の南部から西部にかけて多く混じり、特にS P 2367に集中している。出土遺物は土師器の甕形土器、高环形土器、甑形土器、須恵器の甕形土器、石製品がある。出土状況は土師器の高环形土器の坏部が上方を向けた状態で出土した。出土した高环形土器は坏部が8点出土したのに対して脚部は1点の出土である。

出土遺物 (1014～1031)

高环形土器 (1014～1022) 1014・1015は水平な底部から段をもち外傾する坏部。1016は口縁部が内

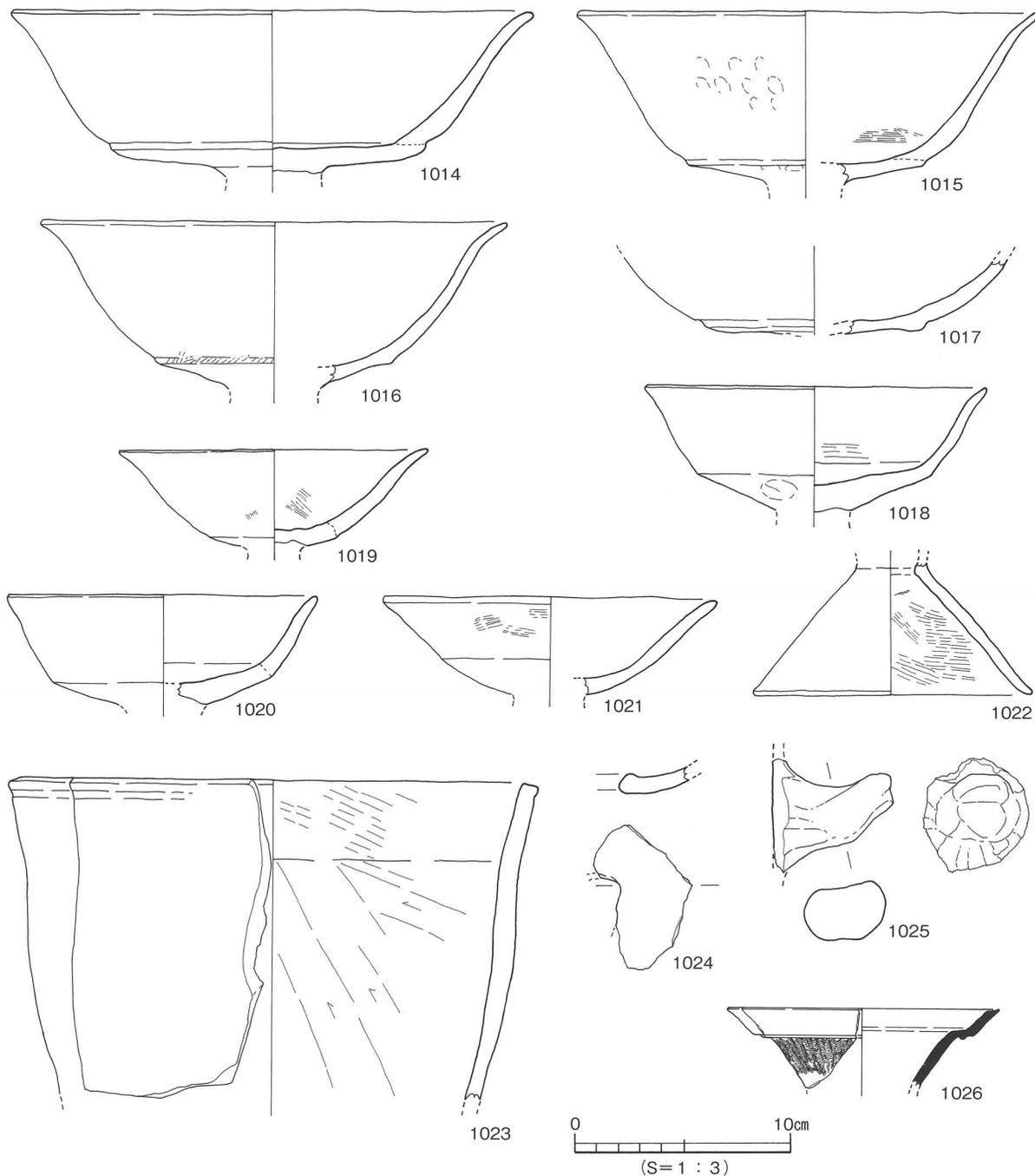


湾して外反する。1017は内湾する坏部。1018～1021は坏部、口縁端部は尖り気味である。1022は「ハ」の字状に開く脚部。

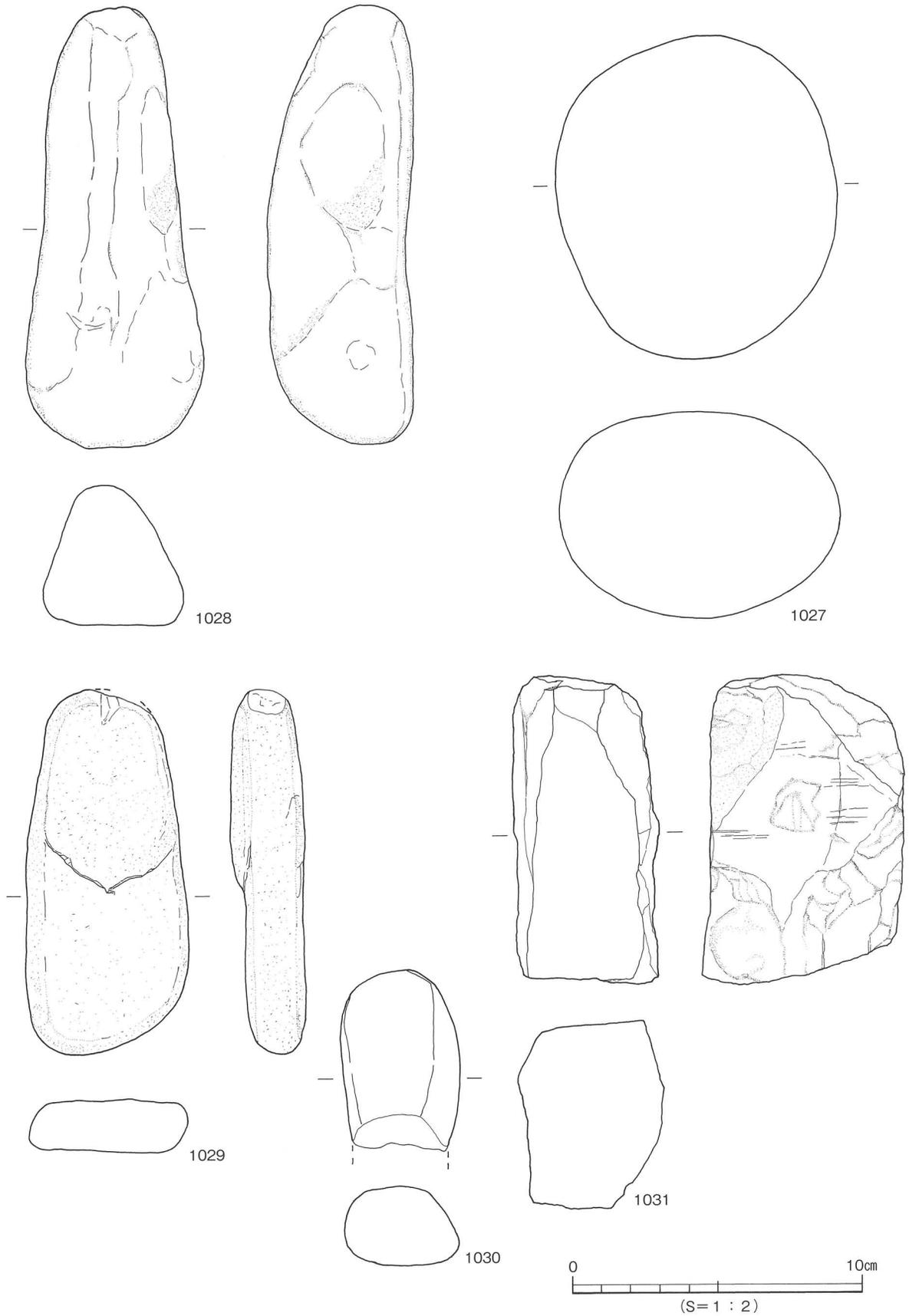
甑形土器（1023～1025）1023は直立する口縁部。1024は底部に蒸気孔あり。1025は把手部、断面楕円形である。

須恵器（1026）甗形土器の口縁部。外面に28～30本の波状文。

石製品（1027～1031）1027は磨石。1028・1029は棒状の形状から土器を固定する支え用の石か。1030・1031は砥石。



第178図 SB201出土遺物実測図(1)



第179図 S B201出土遺物実測図(2)

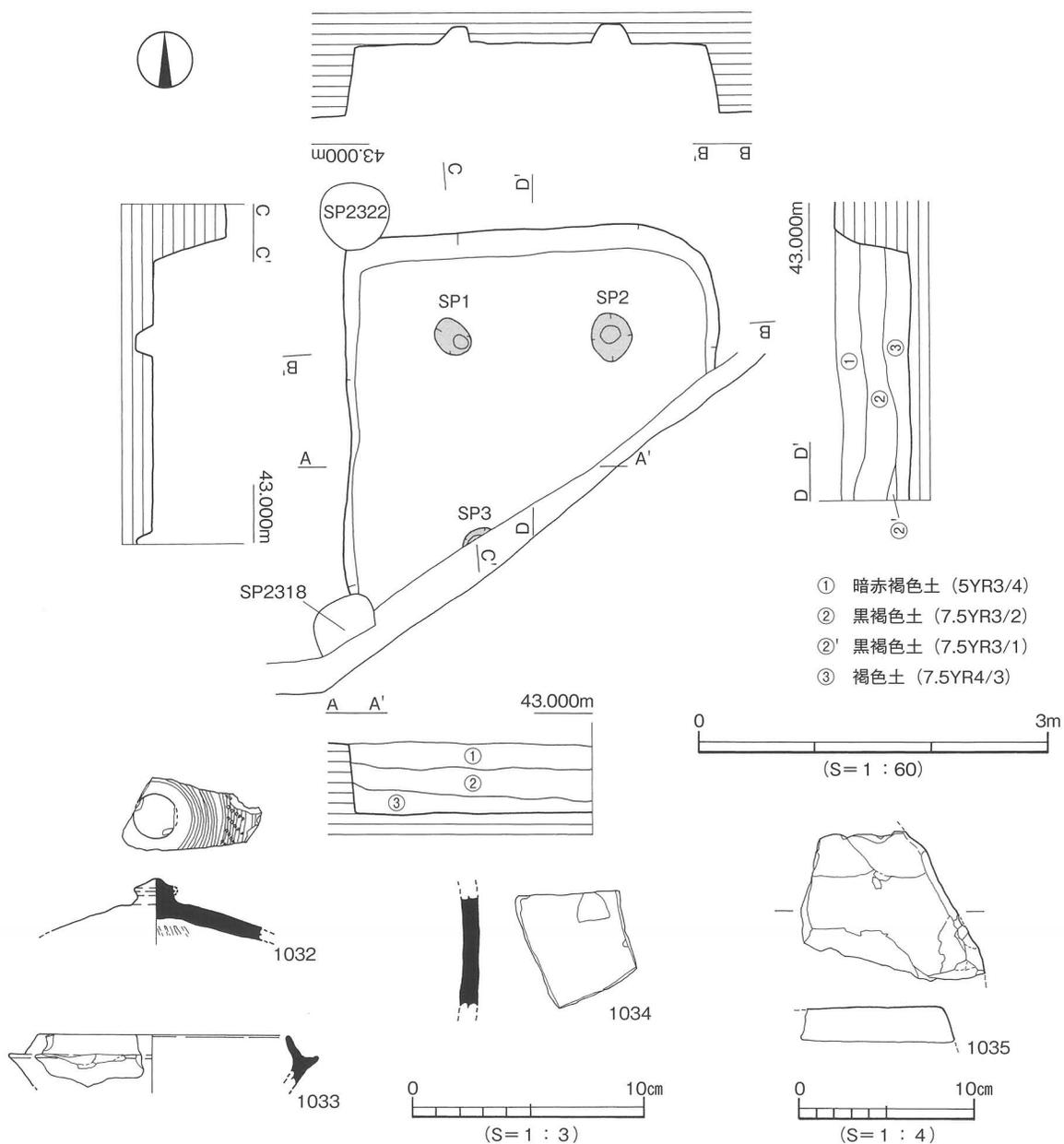
時期：出土した土師器の形態より 5 世紀中葉に時期比定する。

S B 202 [第180図、図版63・67]

S B 202はⅡ区のG 7～H 8 区に位置し、南側は調査区外に続く。平面形態は2ヶ所のコーナー部を検出したことより方形と考えられる。規模は3.15×(3.15)m、深さ63cmを測る。内部施設は支柱穴を(3)基検出した。調査区外に1基あると思われ、4本の支柱を持つと考えられる。平面形態は円形で規模は径28～40cm、深さ18.2cmを測る。埋土は暗赤褐色土(5 Y R 3/4)、黒褐色土(7.5 Y R 3/2)、褐色土(7.5 Y R 4/3)に分かれる。出土遺物は少なく土師器、須恵器の小片と砥石が床面から1点出土した。

出土遺物 (1032～1035)

1032は坏蓋。天井部に宝珠摘みが付き、刺突文が巡る。伽耶系土器に似る。1033は坏身。水平に短



第180図 S B 202測量図・出土遺物実測図

く伸びる受け部を持つ。1034は胴部片。

石製品（1035）砥石。

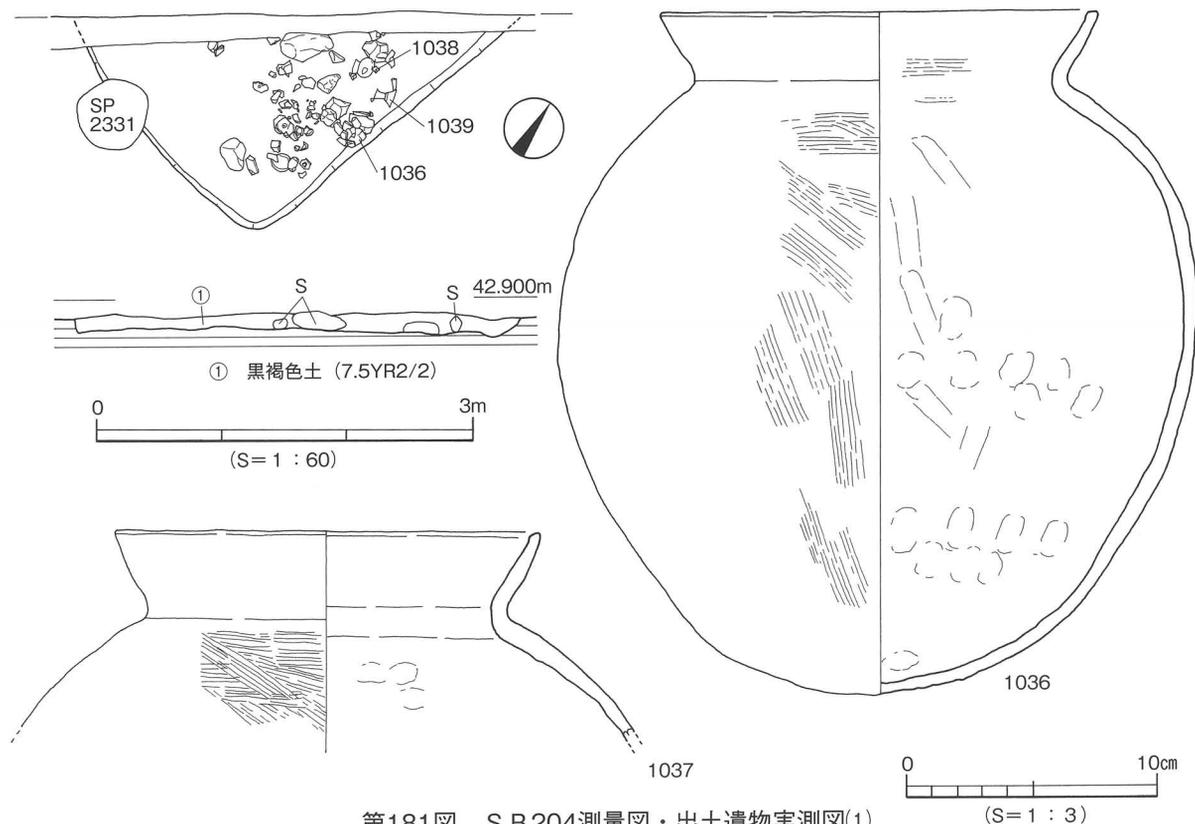
時期：出土した須恵器の形態より古墳時代後期に時期比定する。

S B 204〔第181・182図、図版63・65〕

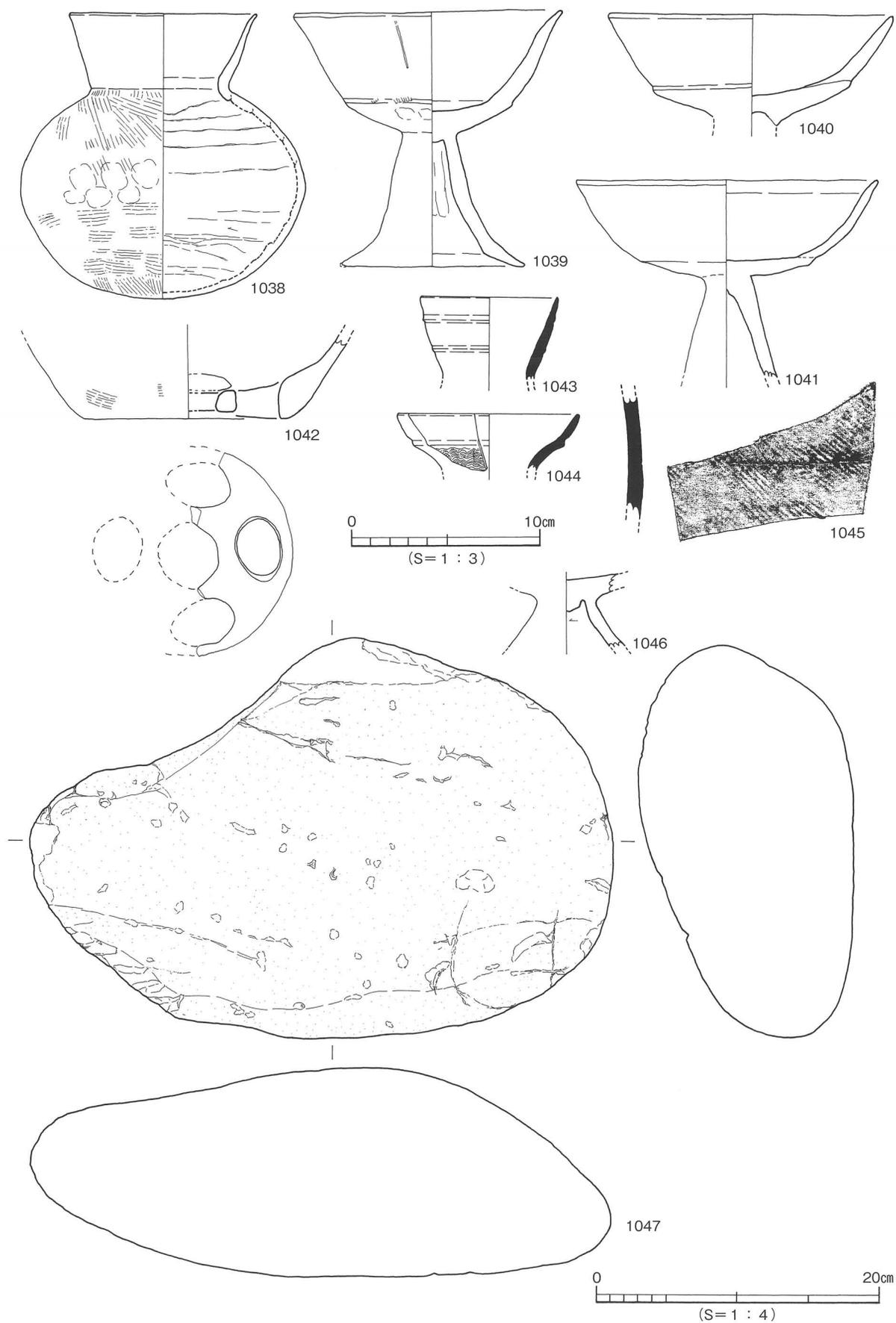
S B 204はⅡ区のE 7区に位置し、S B 205・206を切り、S P 2331に切られ北側は調査区外に続く。平面形態は1つのコーナー部を検出したことにより方形か長方形と考えられる。規模は(2.71)×(2.20)m、深さ12cmを測る。埋土は黒褐色土(7.5Y R2/2)の単一層である。出土遺物は須恵器の壺形土器、甕形土器、土師器の壺形土器、甕形土器、高坏形土器、甑形土器があり、石製品では台石がある。出土状況は大きな台石の周辺に完形品の甕形土器、壺形土器、高坏形土器が横倒しの状態で出土した。出土した完形の土器は住居廃絶時に据え置いた状態での出土である。台石は床面に接し、出土遺物に完形品があることから、台石も土器と同じく現位置をとどめていると思われる。そのほかに、製塩土器の小片が20点出土しているが図化できていない。

出土遺物（1036～1047）

1036・1037は甕形土器。1036は完形品。丸い底部に丸い胴部、口縁部は短く外傾し口端部は面を持つ。1037は口縁部から胴部。外傾する口縁端部は内傾する面を持つ。1038は壺形土器。胴中央部が張る丸い胴部に外傾する口縁部、口端部は先細りで丸い。二次的な焼成を受けたのか内外面に剝離が見られる。1039～1041は高坏形土器。1039は完形品。碗形の坏部口端部は尖り気味に丸い。坏外面に縦方向に長さ2.5cmの沈線（ヘラ記号か）。1040は外傾する坏口縁部の端部は先細りで尖り気味である。1041



第181図 S B 204測量図・出土遺物実測図(1)



第182図 S B 204出土遺物実測図(2)

は坏部から柱部。口縁部内面の端部から1.0cmの幅で黒斑が巡る。1042は甗形土器。底部に楕円形の蒸気孔が3個残る。須恵器（1043～1045）1043は壺形土器の口縁部。外面に2条の凸帯を巡らす。1044は甗形土器の口縁部。外面に13条の波状文。1045は胴部片、外面に沈線が巡る。1046は弥生土器。高坏形土器の基部。石製品（1047）台石。

時期：出土した土師器の甗形土器の形態より5世紀後半～6世紀初頭に時期比定する。

S B 205〔第183・184図、図版61・67〕

S B 205はⅡ区のD7区からⅢ区のD6区に位置し、東側はS B 204に切られ、北側は調査区外に続き中央部は水路がある。平面形態は2ヶ所のコーナー部を検出したことより方形か長方形と考えられる。規模は(5.40)×(2.76)m、深さ18cmを測る。内部施設は、周壁溝、炉、柱穴を検出した。周壁溝は壁下に検出した。規模は幅10cmを測る。炉は東西の中央部に位置し、平面形態は東西に長い長方形形状である。規模は1.18×0.62m、深さ11.4cmを測る。断面形態はレンズ状である。埋土は2層に分かれ①層が暗褐色土、②層は黒色土で炭化層である。住居の埋土は黒褐色土である。出土遺物は土師器、須恵器、石製品、鉄製品がある。出土状況は住居址の南部上面から鉄製の「U」字状鋏・鋤先が出土し、炉内から土師器が出土した。柱穴内からは、よく使い込まれた四角柱状の砥石が欠損部を下にして直立状態で出土した。上部に敲打による痕跡あり。

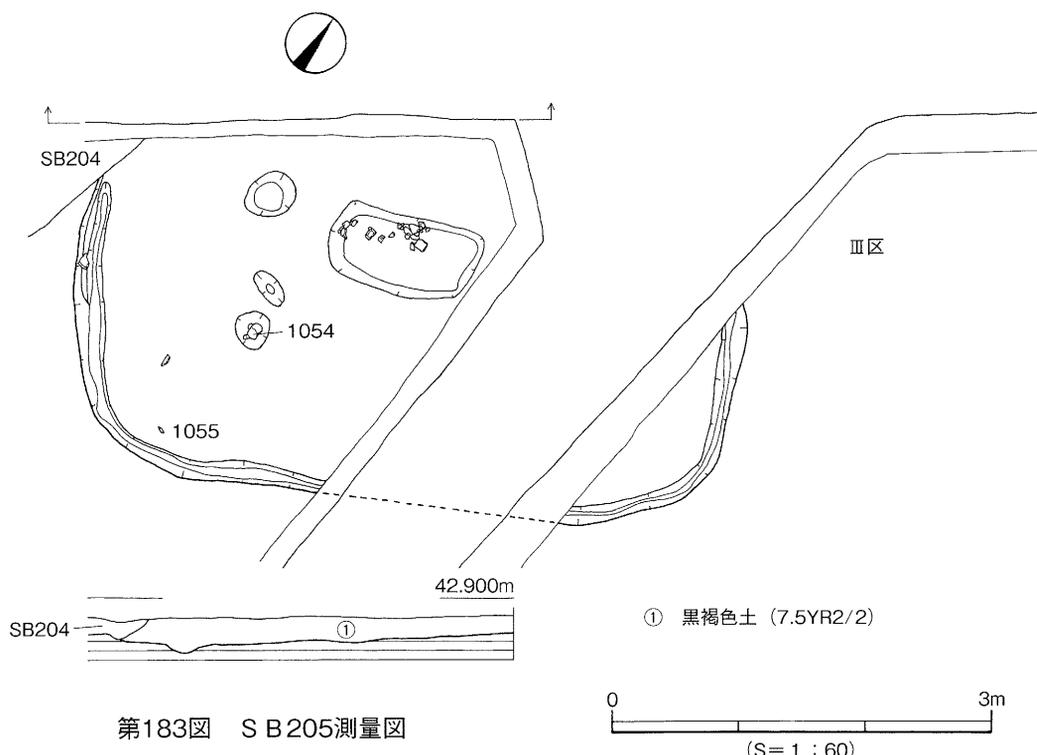
出土遺物（1048～1055）須恵器（1048～1050）1048は坏蓋。扁平な天井部。1049は蓋。天井部に中央部が凹む摘みが付く。1050は坏身。外面に付着物あり。土師器（1051）甗形土器の底部に蒸気孔。

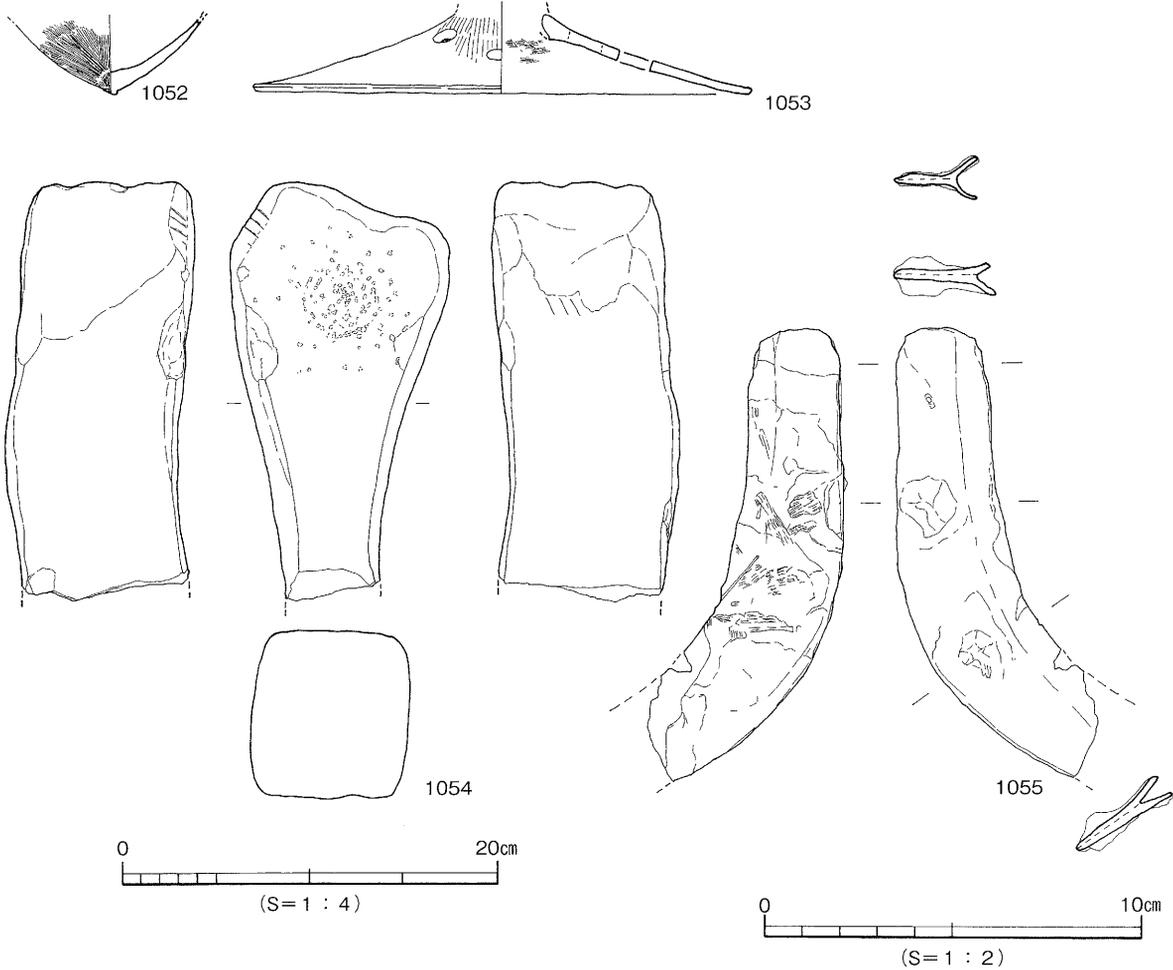
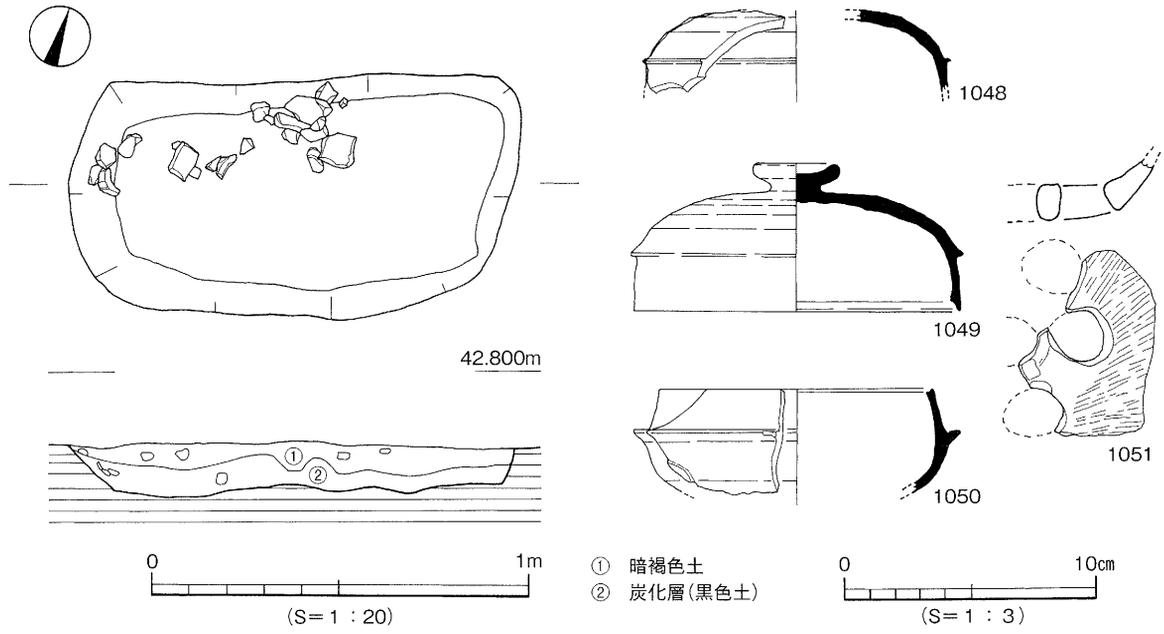
弥生土器（1052・1053）1052は鉢形土器の底部。1053は「ハ」の字状に開く鉢形土器の脚部。

石製品（1054）よく使い込まれた砥石。

鉄製品（1055）「U」字状鋏・鋤先。繊維の付着が見られる。

時期：出土した土師器と須恵器の形態から5世紀後半に時期比定する。



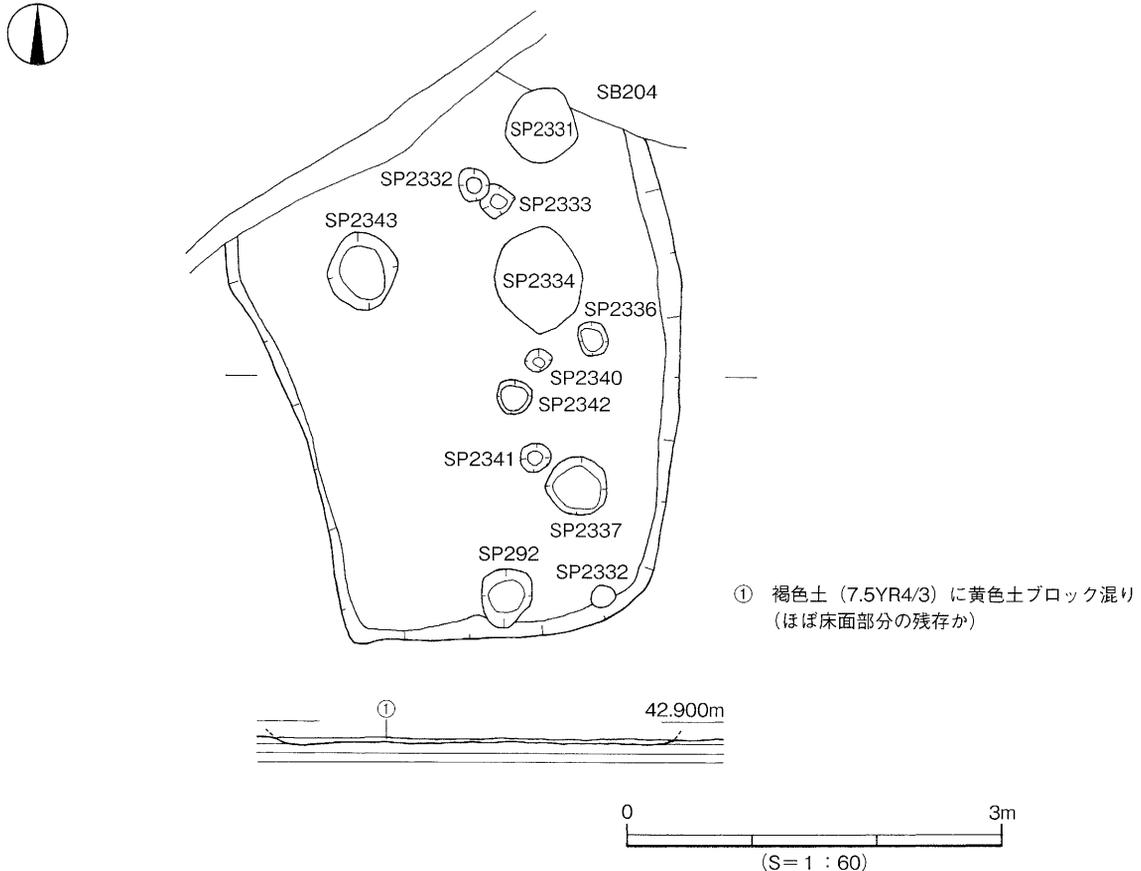


第184図 S B 205 炉測量図・出土遺物実測図

S B 206〔第185図、図版61〕

S B 206はⅡ区のE 7・8区に位置しS B 207を切り、S B 204に切られ北部は調査区外に続く。平面形態は2ヶ所のコーナー部を検出したことより方形か長方形と考えられる。規模は(4.46)×(3.35)m、深さ12cm(調査区北壁)を測る。住居上部は遺構検出時に削平を受けており、貼り床部がわずかに残存しているだけである。埋土は黒褐色土(7.5Y R 4/3)に黄色土ブロック混じりである。出土遺物は土師器の小片があるが図化できていない。

時期：S B 204に切られることより古墳時代5世紀後半以前と考えられる。



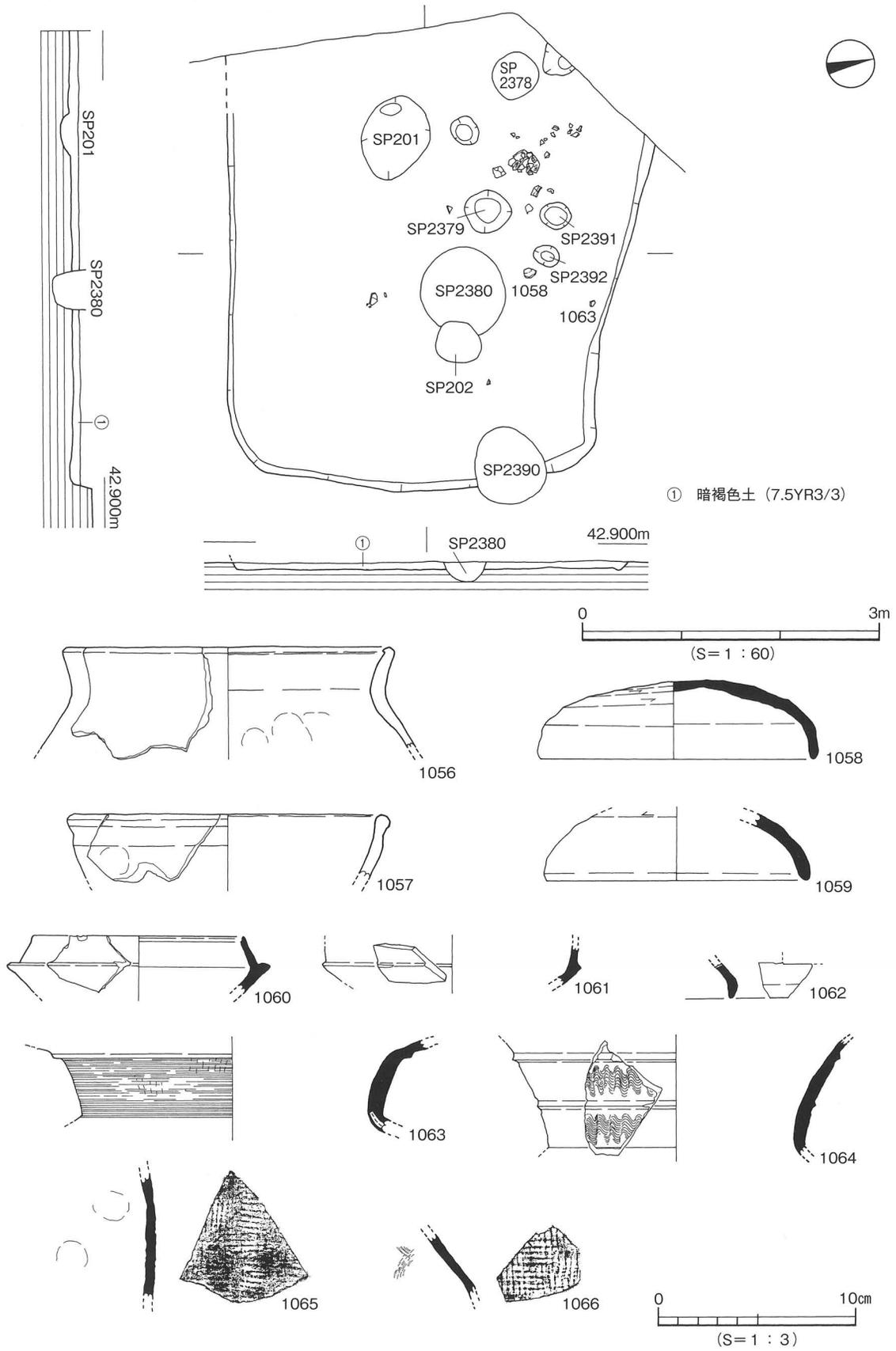
第185図 S B 206測量図

S B 209〔第186図、図版61・67〕

S B 209はⅡ区のG 10区に位置し、S B 210・212を切り、S P 202・2378・2380・2390に切られ、北西部は調査区外に続く。平面形態は2ヶ所のコーナー部を検出したことより長方形と考えられる。規模は(4.65)×4.28m、深さ8cmを測る。内部施設は柱穴を検出した。住居北西部の床面より焼土の塊を検出した。埋土は暗褐色土(7.5Y R 3/3)である。出土遺物は土師器、須恵器がある。

出土遺物(1056~1066)1056・1057は土師器。甕形土器の口縁部。1058~1066は須恵器。1058は坏蓋。1059は蓋。1060は坏身。1061・1062は高坏。1061は坏口縁下部に断面三角形の段を持つ、出作・市場形の須恵器と考えられる。1062は脚部。1063・1064は壺形土器、外反する口縁部。1064は頸部外面に2条の凸帯と一組11条の波状文を2条巡らす。1065・1066は胴部片。

時期：出土した須恵器の形態から6世紀後半に時期比定する。



第186図 S B 209測量図・出土遺物実測図